User's Manual

32

R32C/120グループ

ユーザーズマニュアル　ハードウェア編

ルネサスマイクロコンピュータ
M16Cファミリ／R32C/100シリーズ

本資料に記載の全ての情報は本資料発行時点のものであり、ルネサス エレクトロニクスは、
予告なしに、本資料に記載した製品または仕様を変更することがあります。
ルネサス エレクトロニクスのホームページなどにより公開される最新情報をご確認ください。

ルネサス エレクトロニクス
www.renesas.com

Rev.1.20　2011.09

ご注意書き

1. 本資料に記載されている内容は本資料発行時点のものであり、予告なく変更することがあります。当社製品のご購入およびご使用にあたりましては、事前に当社営業窓口で最新の情報をご確認いただきますとともに、当社ホームページなどを通じて公開される情報に常にご注意ください。
2. 本資料に記載された当社製品および技術情報の使用に関連し発生した第三者の特許権、著作権その他の知的財産権の侵害等に関し、当社は、一切その責任を負いません。当社は、本資料に基づき当社または第三者の特許権、著作権その他の知的財産権を何ら許諾するものではありません。
3. 当社製品を改造、改変、複製等しないでください。
4. 本資料に記載された回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報は、半導体製品の動作例、応用例を説明するものです。お客様の機器の設計において、回路、ソフトウェアおよびこれらに関連する情報を使用する場合には、お客様の責任において行ってください。これらの使用に起因しお客様または第三者に生じた損害に関し、当社は、一切その責任を負いません。
5. 輸出に際しては、「外国為替及び外国貿易法」その他輸出関連法令を遵守し、かかる法令の定めるところにより必要な手続を行ってください。本資料に記載されている当社製品および技術を大量破壊兵器の開発等の目的、軍事利用の目的その他軍事用途の目的で使用しないでください。また、当社製品および技術を国内外の法令および規則により製造・使用・販売を禁止されている機器に使用することができません。
6. 本資料に記載されている情報は、正確を期すため慎重に作成したものですが、誤りがないことを保証するものではありません。万一、本資料に記載されている情報の誤りに起因する損害がお客様に生じた場合においても、当社は、一切その責任を負いません。
7. 当社は、当社製品の品質水準を「標準水準」、「高品質水準」および「特定水準」に分類しております。また、各品質水準は、以下に示す用途に製品が使われることを意図しておりますので、当社製品の品質水準をご確認ください。お客様は、当社の文書による事前の承諾を得ることなく、「特定水準」に分類された用途に当社製品を使用することができません。また、お客様は、当社の文書による事前の承諾を得ることなく、意図されていない用途に当社製品を使用することができません。当社の文書による事前の承諾を得ることなく、「特定水準」に分類された用途または意図されていない用途に当社製品を使用したことによりお客様または第三者に生じた損害等に関し、当社は、一切その責任を負いません。なお、当社製品のデータ・シート、データ・ブック等の資料で特に品質水準の表示がない場合は、標準水準製品であることを表します。

   標準水準：　コンピュータ、OA 機器、通信機器、計測機器、AV 機器、家電、工作機械、パーソナル機器、産業用ロボット

   高品質水準：輸送機器（自動車、電車、船舶等）、交通用信号機器、防災・防犯装置、各種安全装置、生命維持を目的として設計されていない医療機器（厚生労働省定義の管理医療機器に相当）

   特定水準：　航空機器、航空宇宙機器、海底中継機器、原子力制御システム、生命維持のための医療機器（生命維持装置、人体に埋め込み使用するもの、治療行為（患部切り出し等）を行うもの、その他直接人命に影響を与えるもの）（厚生労働省定義の高度管理医療機器に相当）またはシステム等
8. 本資料に記載された当社製品のご使用につき、特に、最大定格、動作電源電圧範囲、放熱特性、実装条件その他諸条件につきましては、当社保証範囲内でご使用ください。当社保証範囲を超えて当社製品をご使用された場合の故障および事故につきましては、当社は、一切その責任を負いません。
9. 当社は、当社製品の品質および信頼性の向上に努めておりますが、半導体製品はある確率で故障が発生したり、使用条件によっては誤動作したりする場合があります。また、当社製品は耐放射線設計については行っておりません。当社製品の故障または誤動作が生じた場合も、人身事故、火災事故、社会的損害などを生じさせないようお客様の責任において冗長設計、延焼対策設計、誤動作防止設計等の安全設計およびエージング処理等、機器またはシステムとしての出荷保証をお願いいたします。特に、マイコンソフトウェアは、単独での検証は困難なため、お客様が製造された最終の機器・システムとしての安全検証をお願いいたします。
10. 当社製品の環境適合性等、詳細につきましては製品個別に必ず当社営業窓口までお問合せください。ご使用に際しては、特定の物質の含有・使用を規制する RoHS 指令等、適用される環境関連法令を十分調査のうえ、かかる法令に適合するようご使用ください。お客様がかかる法令を遵守しないことにより生じた損害に関して、当社は、一切その責任を負いません。
11. 本資料の全部または一部を当社の文書による事前の承諾を得ることなく転載または複製することを固くお断りいたします。
12. 本資料に関する詳細についてのお問い合わせその他お気付きの点等がございましたら当社営業窓口までご照会ください。

注 1. 本資料において使用されている「当社」とは、ルネサス エレクトロニクス株式会社およびルネサス エレクトロニクス株式会社がその総株主の議決権の過半数を直接または間接に保有する会社をいいます。

注 2. 本資料において使用されている「当社製品」とは、注 1 において定義された当社の開発、製造製品をいいます。

製品ご使用上の注意事項

ここでは、マイコン製品全体に適用する「使用上の注意事項」について説明します。個別の使用上の注意事項については、本文を参照してください。なお、本マニュアルの本文と異なる記載がある場合は、本文の記載が優先するものとします。

1. 未使用端子の処理
   【注意】未使用端子は、本文の「未使用端子の処理」に従って処理してください。
   CMOS 製品の入力端子のインピーダンスは、一般に、ハイインピーダンスとなっています。未使用端子を開放状態で動作させると、誘導現象により、LSI 周辺のノイズが印加され、LSI 内部で貫通電流が流れたり、入力信号と認識されて誤動作を起こす恐れがあります。未使用端子は、本文「未使用端子の処理」で説明する指示に従い処理してください。
2. 電源投入時の処置
   【注意】電源投入時は，製品の状態は不定です。
   電源投入時には、LSI の内部回路の状態は不確定であり、レジスタの設定や各端子の状態は不定です。
   外部リセット端子でリセットする製品の場合、電源投入からリセットが有効になるまでの期間、端子の状態は保証できません。
   同様に、内蔵パワーオンリセット機能を使用してリセットする製品の場合、電源投入からリセットのかかる一定電圧に達するまでの期間、端子の状態は保証できません。
3. リザーブアドレス（予約領域）のアクセス禁止
   【注意】リザーブアドレス（予約領域）のアクセスを禁止します。
   アドレス領域には、将来の機能拡張用に割り付けられているリザーブアドレス（予約領域）があります。これらのアドレスをアクセスしたときの動作については、保証できませんので、アクセスしないようにしてください。
4. クロックについて
   【注意】リセット時は、クロックが安定した後、リセットを解除してください。
   プログラム実行中のクロック切り替え時は、切り替え先クロックが安定した後に切り替えてください。
   リセット時、外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックで動作を開始するシステムでは、クロックが十分安定した後、リセットを解除してください。また、プログラムの途中で外部発振子（または外部発振回路）を用いたクロックに切り替える場合は、切り替え先のクロックが十分安定してから切り替えてください。
5. 製品間の相違について
   【注意】型名の異なる製品に変更する場合は、製品型名ごとにシステム評価試験を実施してください。
   同じグループのマイコンでも型名が違うと、内部 ROM、レイアウトパターンの相違などにより、電気的特性の範囲で、特性値、動作マージン、ノイズ耐量、ノイズ輻射量などが異なる場合があります。型名が違う製品に変更する場合は、個々の製品ごとにシステム評価試験を実施してください。

このマニュアルの使い方

1.　目的と対象者

このマニュアルは、本マイコンのハードウェア機能と電気的特性をユーザに理解していただくためのマニュアルです。本マイコンを用いた応用システムを設計するユーザを対象にしています。このマニュアルを使用するには、電気回路、論理回路、マイクロコンピュータに関する基本的な知識が必要です。

このマニュアルは、大きく分類すると、製品の概要、CPU、システム制御機能、周辺機能、電気的特性、使用上の注意で構成されています。

本マイコンは、注意事項を十分確認の上、使用してください。注意事項は、各章の本文中、各章の最後、注意事項の章に記載しています。

改訂記録は旧版の記載内容に対して訂正または追加した主な箇所をまとめたものです。改訂内容すべてを記載したものではありません。詳細は、このマニュアルの本文でご確認ください。

R32C/120 グループでは以下のドキュメントを用意しています。ドキュメントは最新版を使用してください。最新版はルネサス エレクトロニクス ホームページに掲載されています。

ドキュメントの種類	記載内容	資料名	資料番号
データシート	ハードウェアの概要と電気的特性	R32C/120グループ データシート	R01DS0069JJ0120
ユーザーズマニュアル ハードウェア編	ハードウェアの仕様(ピン配置、メモリマップ、周辺機能の仕様、電気的特性、タイミング)と動作説明 周辺機能の使用方法はアプリケーションノートを参照してください	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編	本ユーザーズマニュアル
ユーザーズマニュアル ソフトウェア編/ ソフトウェアマニュアル	CPU命令セットの説明	R32C/100シリーズ ソフトウェアマニュアル	RJJ09B0272-0100
アプリケーションノート	周辺機能の使用方法、応用例 参考プログラム アセンブリ言語、C言語によるプログラムの作成方法	ルネサス エレクトロニクス ホームページに掲載されています	
RENESAS TECHNICAL UPDATE	製品の仕様、ドキュメント等に関する速報		

2.　数や記号の表記

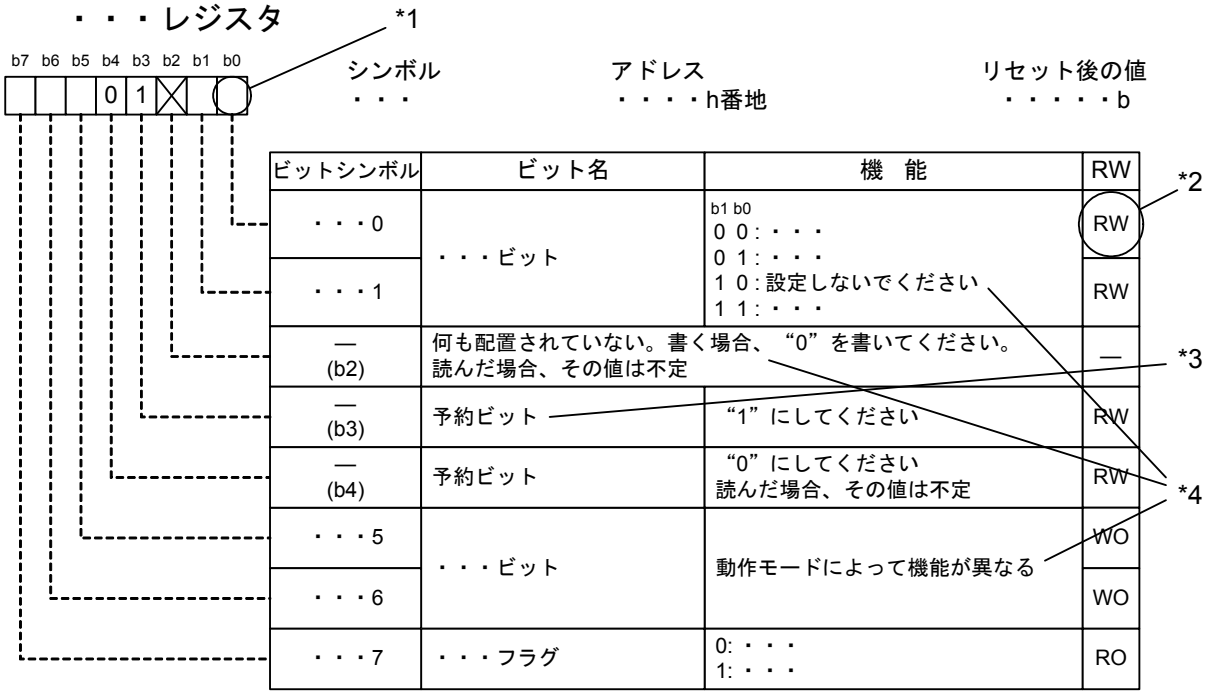
このマニュアルで使用するレジスタ名やビット名、数字や記号の表記の凡例を以下に説明します。

(1) レジスタ名、ビット名、端子名
本文中では、シンボルで表記します。シンボルの後にレジスタ、ビット、端子を付けて区別します。
(例)　PM0レジスタのPM03ビット
P3_5端子、VCC端子

(2) 数の表記
2進数は数字の後に「b」を付けます。ただし、1ビットの値の場合は何も付けません。16進数は数字の後に「h」を付けます。10進数には数字の後に何も付けません。
(例)　2進数:　11b
16進数:　EFA0h
10進数:　1234

3.　レジスタの表記

レジスタ図で使用する記号、用語を以下に説明します。



*1
空白：用途に応じて“0”または“1”にしてください
0　：“0”にしてください
1　：“1”にしてください
×　：何も配置されていないビットです

*2
RW：読むとビットの値が読めます。書くと有効データになります
RO：読むとビットの値が読めます。書いた値は無効になります
WO：書くと有効データになります。ビットの値は読めません (読んだ場合は不定値が読めます)
—　：何も配置されていないビットです

*3
・予約ビット
　予約ビットです。指定された値にしてください。RWのビットについては、特に記載のない限り書いた値が読めます

*4
・何も配置されていない
　該当ビットには何も配置されていません。将来、周辺展開により新しい機能を持つ可能性がありますので、書く場合は“0”を書いてください
・設定しないでください
　設定した場合の動作は保証されません
・動作モードによって機能が異なる
　周辺機能のモードによってビットの機能が変わります。各モードのレジスタ図を参照してください

4.　略語および略称の説明

略語/略称	フルスペル	説明
ACIA	Asynchronous Communication Interface Adapter	調歩同期式通信アダプタ
bps	bits per second	転送速度を表す単位、ビット/秒
CRC	Cyclic Redundancy Check	巡回冗長検査
DMA	Direct Memory Access	CPUの命令を介さずに直接データ転送を行う方式
DMAC	Direct Memory Access Controller	DMAを行うコントローラ
GSM	Global System for Mobile Communications	FDD-TDMAの第二世代携帯電話の方式
Hi-Z	High Impedance	回路が電気的に接続されていない状態
IEBus	Inter Equipment Bus	—
I/O	Input/Output	入出力
IrDA	Infrared Data Association	赤外線通信の業界団体または規格
LSB	Least Significant Bit	最下位ビット
MSB	Most Significant Bit	最上位ビット
NC	Non-Connect	非接続
PLL	Phase Locked Loop	位相同期回路
PWM	Pulse Width Modulation	パルス幅変調
SIM	Subscriber Identity Module	ISO/IEC 7816規格の接触型ICカード
UART	Universal Asynchronous Receiver/Transmitter	調歩同期式シリアルインタフェース
VCO	Voltage Controlled Oscillator	電圧制御発振器

すべての商標および登録商標は、それぞれの所有者に帰属します。

目次

1. 概要 1

1.1 特長 1

1.1.1 用途 1

1.1.2 仕様概要 2

1.2 製品一覧 4

1.3 ブロック図 6

1.4 ピン接続図 7

1.5 端子機能の説明 11

2. 中央演算処理装置(CPU) 14

2.1 基本レジスタ 15

2.1.1 データレジスタ(R2R0, R3R1, R6R4, R7R5) 15

2.1.2 アドレスレジスタ(A0, A1, A2, A3) 15

2.1.3 スタティックベースレジスタ(SB) 15

2.1.4 フレームベースレジスタ(FB) 15

2.1.5 プログラムカウンタ(PC) 15

2.1.6 割り込みベクタテーブルベースレジスタ(INTB) 15

2.1.7 ユーザスタックポインタ(USP)、割り込みスタックポインタ(ISP) 15

2.1.8 フラグレジスタ(FLG) 15

2.2 高速割り込みレジスタ 17

2.2.1 フラグ退避レジスタ(SVF) 17

2.2.2 PC退避レジスタ(SVP) 17

2.2.3 ベクタレジスタ(VCT) 17

2.3 DMAC関連レジスタ 18

2.3.1 DMAモードレジスタ(DMD0, DMD1, DMD2, DMD3) 18

2.3.2 DMAターミナルカウントレジスタ(DCT0, DCT1, DCT2, DCT3) 18

2.3.3 DMAターミナルカウントリロードレジスタ(DCR0, DCR1, DCR2, DCR3) 18

2.3.4 DMAソースアドレスレジスタ(DSA0, DSA1, DSA2, DSA3) 18

2.3.5 DMAソースアドレスリロードレジスタ(DSR0, DSR1, DSR2, DSR3) 18

2.3.6 DMAデスティネーションアドレスレジスタ(DDA0, DDA1, DDA2, DDA3) 18

2.3.7 DMAデスティネーションアドレスリロードレジスタ(DDR0, DDR1, DDR2, DDR3) 18

3. メモリ 19

4. SFR 20

5. リセット 61

5.1 ハードウェアリセット 61

5.2 ソフトウェアリセット 63

5.3 ウォッチドッグタイマリセット 63

5.4 リセットベクタ 64

6. パワーマネージメント 65
6.1 電圧レギュレータ 65
6.1.1 平滑コンデンサ 66
6.2 電圧低下検出回路 67
6.2.1 電圧低下検出回路の動作 69
6.2.2 電圧低下検出割り込み 69
6.2.3 電圧低下検出回路の応用例 70
7. クロック発生回路 71
7.1 クロック発生回路の種類 71
7.1.1 メインクロック 80
7.1.2 サブクロック(fC) 81
7.1.3 PLLクロック 82
7.1.4 オンチップオシレータクロック 85
7.2 発振停止検出機能 86
7.2.1 発振停止検出機能使用方法 86
7.3 ベースクロック 86
7.4 CPUクロックと周辺バスクロック 87
7.5 周辺機能クロック 87
7.6 クロック出力機能 88
7.7 パワーコントロール 89
7.7.1 通常動作モード 90
7.7.2 ウェイトモード 95
7.7.3 ストップモード 98
7.8 システムクロック保護機能 100
7.9 クロック発生回路使用上の注意 101
7.9.1 サブクロック 101
7.9.2 パワーコントロール 101
8. バス 102
8.1 バス設定 102
8.2 周辺バスタイミングの設定 103
9. プロテクト 104
9.1 プロテクトレジスタ(PRCRレジスタ) 104
9.2 プロテクトレジスタ2(PRCR2レジスタ) 105
9.3 プロテクトレジスタ3(PRCR3レジスタ) 105
9.4 プロテクトレジスタ4(PRCR4レジスタ) 106
9.5 プロテクト解除レジスタ(PRRレジスタ) 107
10. 割り込み 108
10.1 割り込みの分類 108
10.2 ソフトウェア割り込み 109

10.3 ハードウェア割り込み 110
10.3.1 特殊割り込み 110
10.3.2 周辺機能割り込み 110
10.4 高速割り込み 110
10.5 割り込みベクタ 111
10.5.1 固定ベクタテーブル 111
10.5.2 可変ベクタテーブル 112
10.6 割り込み要求の受け付け 116
10.6.1 Iフラグと IPL 116
10.6.2 割り込み制御レジスタ 117
10.6.3 復帰用割り込み優先レベル設定レジスタ 120
10.6.4 割り込みシーケンス 121
10.6.5 割り込み応答時間 122
10.6.6 割り込み要求受け付け時のIPLの変化 123
10.6.7 レジスタ退避 123
10.7 割り込み処理ルーチンからの復帰 124
10.8 割り込み優先順位 124
10.9 割り込み優先順位判定回路 124
10.10 外部割り込み 126
10.11 NMI 128
10.12 キー入力割り込み 128
10.13 インテリジェントI/O割り込み 129
10.14 割り込み使用上の注意 132
10.14.1 ISPの設定 132
10.14.2 NMI 132
10.14.3 外部割り込み 132

11. ウォッチドッグタイマ 133

12. DMAC 137

12.1 転送サイクル 146
12.1.1 転送番地とデータバス幅の影響 146
12.1.2 バスタイミングの影響 147
12.2 DMA転送サイクル数 149
12.3 チャネル優先順位とDMA転送タイミング 150
12.4 DMAコントローラ使用上の注意 151
12.4.1 DMAC関連レジスタの設定 151
12.4.2 DMAC関連レジスタの読み出し 151

13. DMAC II 152

13.1 DMAC IIの設定 153
13.1.1 RIPL1、RIPL2レジスタ 153

13.1.2 DMAC IIインデックス 154
13.1.3 周辺機能の割り込み制御レジスタ 157
13.1.4 周辺機能の可変ベクタテーブル 157
13.1.5 IIOiIE レジスタ (i=0~11) の IRLT ビット 157
13.2 DMAC IIの動作 157
13.3 転送対象 158
13.3.1 メモリ間転送 158
13.3.2 即値転送 158
13.3.3 演算転送 158
13.4 転送方式 159
13.4.1 単転送 159
13.4.2 バースト転送 159
13.4.3 複数転送 159
13.5 チェーン転送 160
13.6 転送完了割り込み 160
13.7 実行時間 161

14. プログラマブル入出力ポート 162
14.1 ポートPi レジスタ (Pi レジスタ、i=0~10) 164

15. タイマ 165
15.1 タイマA 167
15.1.1 タイマモード 173
15.1.2 イベントカウンタモード 175
15.1.3 ワンショットタイマモード 179
15.1.4 パルス幅変調モード 181
15.2 タイマB 184
15.2.1 タイマモード 187
15.2.2 イベントカウンタモード 188
15.2.3 パルス周期測定モード、パルス幅測定モード 191
15.3 タイマ使用上の注意 194
15.3.1 タイマA、タイマB共通 194
15.3.2 タイマA 194
15.3.3 タイマB 196

16. 三相モータ制御用タイマ機能 197
16.1 三相モータ制御用タイマのモード 203
16.2 タイマB2 203
16.3 タイマA4、A1、A2 205
16.4 上下同時通電出力禁止機能と短絡防止タイマ 208
16.5 三相モータ制御用タイマの動作例 209
16.6 三相モータ制御用タイマ機能使用上の注意 212

16.6.1 シャットダウン機能 212
16.6.2 レジスタ設定 212

17. シリアルインタフェース 213
17.1 クロック同期型シリアルインタフェースモード 227
17.1.1 通信エラー発生時の対処方法 232
17.1.2 CLK極性選択 232
17.1.3 LSBファースト、MSBファースト選択 233
17.1.4 連続受信モード 233
17.1.5 シリアルデータ論理切り替え 234
17.1.6 CTS/RTS機能 234
17.2 クロック非同期型シリアルインタフェースモード(UARTモード) 235
17.2.1 ビットレート 240
17.2.2 通信エラー発生時の対処方法 241
17.2.3 LSBファースト、MSBファースト選択 241
17.2.4 シリアルデータ論理切り替え 242
17.2.5 TXD、RXD入出力極性切り替え 243
17.2.6 CTS/RTS機能 243
17.3 特殊モード1 (I^2Cモード) 244
17.3.1 スタートコンディション、ストップコンディションの検出 249
17.3.2 スタートコンディション、ストップコンディションの生成 249
17.3.3 アービトレーション 250
17.3.4 SCL制御とクロック同期化 250
17.3.5 SDA出力 252
17.3.6 SDA入力 253
17.3.7 アクノリッジ 253
17.3.8 送受信初期化 253
17.4 特殊モード2 254
17.4.1 $\overline{SSi}$ 入力端子機能(i=0~2) 256
17.4.2 クロック位相設定機能 257
17.5 シリアルインタフェース使用上の注意 259
17.5.1 UiBRGレジスタ(i=0~4)の変更 259
17.5.2 端子の出力について 259
17.5.3 クロック同期モード 259
17.5.4 特殊モード1 (I^2Cモード) 260
17.5.5 通信異常時の対処方法 260

18. A/Dコンバータ 261
18.1 モードの説明 269
18.1.1 単発モード 269
18.1.2 繰り返しモード 270
18.1.3 単掃引モード 271

18.1.4 繰り返し掃引モード0 272
18.1.5 繰り返し掃引モード1 273
18.1.6 マルチポート単掃引モード 274
18.1.7 マルチポート繰り返し掃引モード0 275
18.2 機能 276
18.2.1 分解能選択機能 276
18.2.2 サンプル＆ホールド 276
18.2.3 トリガ選択機能 276
18.2.4 DMAC利用モード 276
18.2.5 拡張アナログ入力端子 277
18.2.6 外部オペアンプ接続モード 277
18.2.7 自己診断/断線検出アシスト機能 278
18.2.8 消費電流低減機能 279
18.2.9 センサの出力インピーダンス 279
18.3 A/Dコンバータ使用上の注意 281
18.3.1 基板設計上の注意点 281
18.3.2 プログラム作成上の注意点 281

19. D/Aコンバータ 283

20. CRC演算回路 285

21. X-Y変換回路 288
21.1 読み出し時のデータ変換 289
21.2 書き込み時のデータ変換 291

22. インテリジェントI/O 292
22.1 ベースタイマ 303
22.2 時間計測機能 308
22.3 波形生成機能 312
22.3.1 単相波形出力モード 313
22.3.2 反転波形出力モード 315
22.3.3 セット-リセット波形出力(SR波形出力)モード 317
22.3.4 位相シフト波形出力モード 320
22.3.5 デジタルデバウンス回路 323

23. シリアルバスインタフェース 325
23.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード 326
23.1.1 送受信クロック 338
23.1.2 送受信シフトレジスタ 340
23.1.3 データ入出力端子とSS0シフトレジスタの関係 342
23.1.4 割り込み要求 343
23.1.5 各通信モードと端子機能 344

23.1.6 クロック同期式シリアル通信モード 345
23.1.7 4線式シリアルバスモード 351
23.2 シリアルバスインタフェース使用上の注意 358
23.2.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード使用上の注意 358

24. LINモジュール 359
24.1 LINモジュール関連レジスタ 361
24.1.1 共通レジスタ 361
24.1.2 チャネル専用レジスタ 361
24.1.3 レジスタウィンドウとチャネル切り替え 362
24.2 動作モード 374
24.2.1 LINリセットモード 375
24.2.2 LIN動作モード 375
24.2.3 LINウェイクアップモード 375
24.3 動作概要 376
24.3.1 ヘッダ送信 376
24.3.2 レスポンス送信 377
24.3.3 レスポンス受信 378
24.4 ボーレートジェネレータ 379
24.5 データ送信/受信 381
24.5.1 データ送信 381
24.5.2 データ受信 382
24.6 送信/受信データのバッファ処理 383
24.6.1 LINフレームの送信 383
24.6.2 LINフレームの受信 384
24.7 ウェイクアップ送信/受信 385
24.7.1 ウェイクアップ送信 385
24.7.2 ウェイクアップ受信 386
24.8 入力信号“L”検出機能を用いた低消費電力モード制御 387
24.9 ステータス 388
24.10 エラーステータス 389
24.10.1 エラーステータスの種類 389
24.10.2 LINエラー検出の対象時間領域 390
24.11 割り込み 391

25. CANモジュール 392
25.1 CAN SFR 395
25.1.1 CAN0制御レジスタ(C0CTLRレジスタ) 396
25.1.2 CAN0クロック選択レジスタ(C0CLKRレジスタ) 400
25.1.3 CAN0ビットコンフィグレーションレジスタ(C0BCRレジスタ) 401
25.1.4 CAN0マスクレジスタk (C0MKRkレジスタ) (k=0~7) 403
25.1.5 CAN0 FIFO受信ID比較レジスタn (C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタ) (n=0, 1) 404

25.1.6 CAN0マスク無効レジスタ(C0MKIVLRレジスタ) 406
25.1.7 CAN0メールボックス(C0MBjレジスタ) (j=0~31) 407
25.1.8 CAN0メールボックス割り込み許可レジスタ(C0MIERレジスタ) 411
25.1.9 CAN0メッセージ制御レジスタj (C0MCTLjレジスタ) (j=0~31) 412
25.1.10 CAN0受信FIFO制御レジスタ(C0RFCRレジスタ) 416
25.1.11 CAN0受信FIFOポインタ制御レジスタ(C0RFPCRレジスタ) 419
25.1.12 CAN0送信FIFO制御レジスタ(C0TFCRレジスタ) 420
25.1.13 CAN0送信FIFOポインタ制御レジスタ(C0TFPCRレジスタ) 422
25.1.14 CAN0ステータスレジスタ(C0STRレジスタ) 423
25.1.15 CAN0メールボックスサーチモードレジスタ(C0MSMRレジスタ) 426
25.1.16 CAN0メールボックスサーチステータスレジスタ(C0MSSRレジスタ) 427
25.1.17 CAN0チャネルサーチサポートレジスタ(C0CSSRレジスタ) 429
25.1.18 CAN0アクセプタンスフィルタサポートレジスタ(C0AFSRレジスタ) 430
25.1.19 CAN0エラー割り込み許可レジスタ(C0EIERレジスタ) 431
25.1.20 CAN0エラー割り込み要因判定レジスタ(C0EIFRレジスタ) 433
25.1.21 CAN0受信エラーカウントレジスタ(C0RECRレジスタ) 436
25.1.22 CAN0送信エラーカウントレジスタ(C0TECRレジスタ) 437
25.1.23 CAN0エラーコード格納レジスタ(C0ECSRレジスタ) 438
25.1.24 CAN0タイムスタンプレジスタ(C0TSRレジスタ) 440
25.1.25 CAN0テスト制御レジスタ(C0TCRレジスタ) 441
25.2 動作モード 444
25.2.1 CANリセットモード 445
25.2.2 CAN Haltモード 446
25.2.3 CANスリープモード 447
25.2.4 CANオペレーション モード(バスオフ状態以外) 448
25.2.5 CANオペレーションモード(バスオフ状態) 449
25.3 CAN通信速度の設定 450
25.3.1 CANクロックの設定 450
25.3.2 ビットタイミングの設定 450
25.3.3 ビットレート 451
25.4 メールボックスとマスクレジスタの構成 452
25.5 アクセプタンスフィルタ処理とマスク機能 454
25.6 受信、送信 457
25.6.1 受信 458
25.6.2 送信 460
25.7 CAN割り込み 461

26. 入出力端子 462
26.1 ポートPi方向レジスタ(PDiレジスタ、i=0~10) 463
26.2 出力機能選択レジスタ 464
26.3 入力機能選択レジスタ 476

26.4 プルアップ制御レジスタ 0~3 (PUR0~PUR3 レジスタ) 480
26.5 ポート制御レジスタ (PCR レジスタ) 482
26.6 未使用端子の処理 483

27. フラッシュメモリ 485
27.1 概要 485
27.2 フラッシュメモリプロテクト 487
27.2.1 ロックビットプロテクト 487
27.2.2 ROM コードプロテクト 487
27.2.3 ID コードプロテクト 488
27.3 CPU 書き換えモード 489
27.3.1 フラッシュメモリ書き換えバスタイミング設定 496
27.3.2 ソフトウェアコマンド 500
27.3.3 モード遷移 501
27.3.4 コマンド発行手順 502
27.3.5 ステータスチェック 508
27.4 標準シリアル入出力モード 509
27.5 パラレル入出力モード 512
27.6 フラッシュメモリ書き換えに関する注意 513
27.6.1 電源電圧に関する注意事項 513
27.6.2 ハードウェアリセットに関する注意事項 513
27.6.3 フラッシュメモリプロテクトに関する注意点 513
27.6.4 プログラム作成上の注意点 513
27.6.5 割り込み使用上の注意点 513
27.6.6 書き換え制御プログラムの書き換えに関する注意点 514
27.6.7 プログラム、イレーズ回数とソフトウェアコマンド実行時間 514
27.6.8 その他の注意事項 514

28. E^2PROM エミュレーションデータフラッシュ 515
28.1 概要 515
28.2 ブロック構成 519
28.3 オペレーション 520
28.4 E^2 データフラッシュ書き換えに関する注意 523

29. 電気的特性 524

30. 使用上の注意事項 560
30.1 基板設計に関する注意 560
30.1.1 電源端子 560
30.1.2 電源電圧 560
30.2 レジスタ設定時の注意 561
30.2.1 ライトオンリのビットを含むレジスタ 561
30.3 クロック発生回路使用上の注意 563

30.3.1 サブクロック 563
30.3.2 パワーコントロール 563
30.4 割り込み使用上の注意 564
30.4.1 ISPの設定 564
30.4.2 NMI 564
30.4.3 外部割り込み 564
30.5 DMAコントローラ使用上の注意 565
30.5.1 DMAC関連レジスタの設定 565
30.5.2 DMAC関連レジスタの読み出し 565
30.6 タイマ使用上の注意 566
30.6.1 タイマA、タイマB共通 566
30.6.2 タイマA 566
30.6.3 タイマB 568
30.7 三相モータ制御用タイマ機能使用上の注意 569
30.7.1 シャットダウン機能 569
30.7.2 レジスタ設定 569
30.8 シリアルインタフェース使用上の注意 570
30.8.1 UiBRGレジスタ(i=0~4)の変更 570
30.8.2 端子の出力について 570
30.8.3 クロック同期モード 570
30.8.4 特殊モード1 (I^2Cモード) 571
30.8.5 通信異常時の対処方法 571
30.9 A/Dコンバータ使用上の注意 572
30.9.1 基板設計上の注意点 572
30.9.2 プログラム作成上の注意点 572
30.10 シリアルバスインタフェース使用上の注意 574
30.10.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード使用上の注意 574
30.11 フラッシュメモリ書き換えに関する注意 575
30.11.1 電源電圧に関する注意事項 575
30.11.2 ハードウェアリセットに関する注意事項 575
30.11.3 フラッシュメモリプロテクトに関する注意点 575
30.11.4 プログラム作成上の注意点 575
30.11.5 割り込み使用上の注意点 575
30.11.6 書き換え制御プログラムの書き換えに関する注意点 576
30.11.7 プログラム、イレーズ回数とソフトウェアコマンド実行時間 576
30.11.8 その他の注意事項 576
30.12 E^2データフラッシュ書き換えに関する注意 577

付録1.外形寸法図 578

索引 579

1. 概要

1.1 特長

M16Cファミリは、高いROM効率、優れたノイズ特性、超低消費電力、実応用での高い処理能力、豊富な内蔵周辺機能などを特長とする32/16ビットCISCマイコンです。同一アーキテクチャで、ピン配置互換、周辺機能上位互換を保持した上位から下位機種までのシリーズ展開により、幅広い応用分野に対応しています。

R32C/100シリーズは、M16Cファミリの最上位の製品です。32ビットCISCアーキテクチャを採用し、4Gバイトのアドレス空間を備えています。また、乗算器や積和演算器、単精度浮動小数点演算器を搭載することで、高い命令効率と処理能力を達成しました。シリアルインタフェース、CRC演算回路、DMAC、A/Dコンバータ、D/Aコンバータ、タイマ、I^2C、ウォッチドッグタイマなど豊富な周辺機能を搭載しています。

R32C/120グループはR32C/100シリーズのなかで、車載LAN向けに特化した製品です。パッケージは100ピンLQFPを採用し、CANモジュールを1チャネル、LINモジュールを2チャネル内蔵しています。

1.1.1 用途

自動車、オーディオ、通信機器、産業機器、他

1.1.2 仕様概要

表 1.1~表 1.2にR32C/120グループの仕様概要を示します。

表 1.1 仕様概要(1/2)

分類	機能	説明
CPU	中央演算処理装置	R32C/100シリーズCPUコア • 基本命令数: 108 • 最小命令実行時間: 15.625 ns (f(CPU) = 64 MHz) • 乗算器: 32ビット× 32ビット→ 64ビット • 積和演算命令: 32ビット× 32ビット+ 64ビット→ 64ビット • FPU: 単精度 (IEEE-754準拠) • バレルシフタ: 32ビット • 動作モード: シングルチップモード
メモリ		フラッシュメモリ: 128K / 256K バイト RAM: 12K / 20Kバイト データフラッシュ: 4Kバイト× 2ブロック E2データフラッシュ: なし(注1) / 4Kバイト 品種ごとのメモリサイズについては表 1.3をご参照ください
電圧検出	電圧低下検出回路	オプション(注2) 電圧低下検出割り込み
クロック	クロック発生回路	• 4回路 (メインクロック、サブクロック、PLL、オンチップオシレータ) • 発振停止検出: メインクロック発振停止、再発振検出機能 • 周波数分周回路: 2~24分周選択 • 低消費電力機構: ウェイトモード、ストップモード
割り込み		割り込みベクタ数: 261 外部割り込み入力: $\overline{\text{NMI}}$、$\overline{\text{INT}}$ × 6、キー入力× 4 割り込み優先レベル: 7レベル
ウォッチドッグタイマ		15ビット× 1 (プリスケーラ付) リセットスタート機能選択可能
DMA	DMAC	4チャネル • サイクルスチール方式 • 起動要因数: 44 • 転送モード: 2 (単転送、リピート転送)
	DMAC II	• すべての周辺機能割り込み要因で起動可能 • 即値転送機能、演算転送機能、チェーン転送機能
I/Oポート	プログラマブル入出力ポート	• 入力専用: 2 • CMOS入出力: 84 • 4端子ごとにプルアップ抵抗設定可能
タイマ	タイマA	16ビットタイマ× 5 タイマモード、イベントカウンタモード、ワンショットタイマモード、パルス幅変調(PWM)モード イベントカウンタ二相パルス信号処理(二相エンコーダ入力) × 3
	タイマB	16ビットタイマ× 6 タイマモード、イベントカウンタモード、パルス周期測定モード、パルス幅測定モード

注1. E2データフラッシュなし製品をご使用になる場合は、弊社営業窓口までお問い合わせください。
注2. オプション機能をご使用になる場合は、弊社営業窓口までお問い合わせください。

表 1.2　仕様概要(2/2)

分類	機能	説明
タイマ	三相モータ制御用タイマ機能	三相モータ制御用タイマ×1(タイマA1、A2、A4、B2使用) 短絡防止タイマ内蔵
シリアルインタフェース	UART0~UART4	クロック同期/非同期兼用×5チャネル • I^2C-bus (UART0~UART2) • 特殊モード2 (UART0~UART2)
A/Dコンバータ		分解能10ビット×26チャネル サンプル&ホールドあり 断線検出、自己診断モード
D/Aコンバータ		分解能8ビット×2回路
CRC演算回路		CRC-CCITT ($X^{16}+X^{12}+X^5+1$)
X-Y変換回路		16ビット×16ビット
インテリジェントI/O		時間計測機能(インプットキャプチャ): 16ビット×16 デジタルデバウンス回路付き 波形生成機能(アウトプットコンペア): 16ビット×16 位相シフト波形出力モード付き
シリアルバスインタフェース		1チャネル • クロック同期式シリアル通信モード • 4線式シリアルバスモード キャラクタ長: 8~16ビット可変
LINモジュール		2チャネル
CANモジュール		1チャネル ISO11898-1仕様準拠 32メールボックス
フラッシュメモリ		プログラム、イレーズ電圧: VCC = 3.0 ~ 5.5 V プログラム、イレーズ回数: 1000回 プログラムセキュリティ: ROMコードプロテクト、IDコードプロテクト デバッグ機能: オンチップデバッグ、オンボードフラッシュ書き換え機能
E^2データフラッシュ		プログラム、イレーズ回数: 100000回
動作周波数/電源電圧		64 MHz / VCC = 3.0 ~ 5.5 V
動作周囲温度		-40°C~85°C (Jバージョン) -40°C~105°C (Lバージョン)(注1) -40°C~125°C (Kバージョン)
消費電流		36 mA (VCC = 5.0 V、f(CPU) = 64 MHz) 8 μA (VCC = 3.3 V、f(XCIN) = 32.768 kHz、ウェイトモード)
パッケージ		100ピンプラスチックモールドLQFP (PLQP0100KB-A)

注1.　Lバージョン製品をご使用になる場合は、弊社営業窓口までお問い合わせください。

1.2 製品一覧

表 1.3に製品一覧表、図 1.1に型名とメモリサイズ・パッケージを示します。

表 1.3　製品一覧表　　2011年9月現在

型名	パッケージ(注1)	ROM容量(注2)	RAM容量	E2データフラッシュ	備考
R5F64206JFB	PLQP0100KB-A	128Kバイト+8Kバイト	12Kバイト	4Kバイト	Jバージョン
R5F64206LFB					Lバージョン(注3)
R5F64206KFB					Kバージョン
R5F6420AJFB				なし(注3)	Jバージョン
R5F6420ALFB					Lバージョン(注3)
R5F6420AKFB					Kバージョン
R5F64207JFB		256Kバイト+8Kバイト	20Kバイト	4Kバイト	Jバージョン
R5F64207LFB					Lバージョン(注3)
R5F64207KFB					Kバージョン
R5F6420BJFB				なし(注3)	Jバージョン
R5F6420BLFB					Lバージョン(注3)
R5F6420BKFB					Kバージョン

注1.　旧パッケージコードは以下のとおりです。
　　PLQP0100KB-A : 100P6Q-A

注2.　ROM容量の「+8Kバイト」はデータフラッシュの容量です。

注3.　L バージョン、E2 データフラッシュなし製品をご使用になる場合は、弊社営業窓口までお問い合わせください。

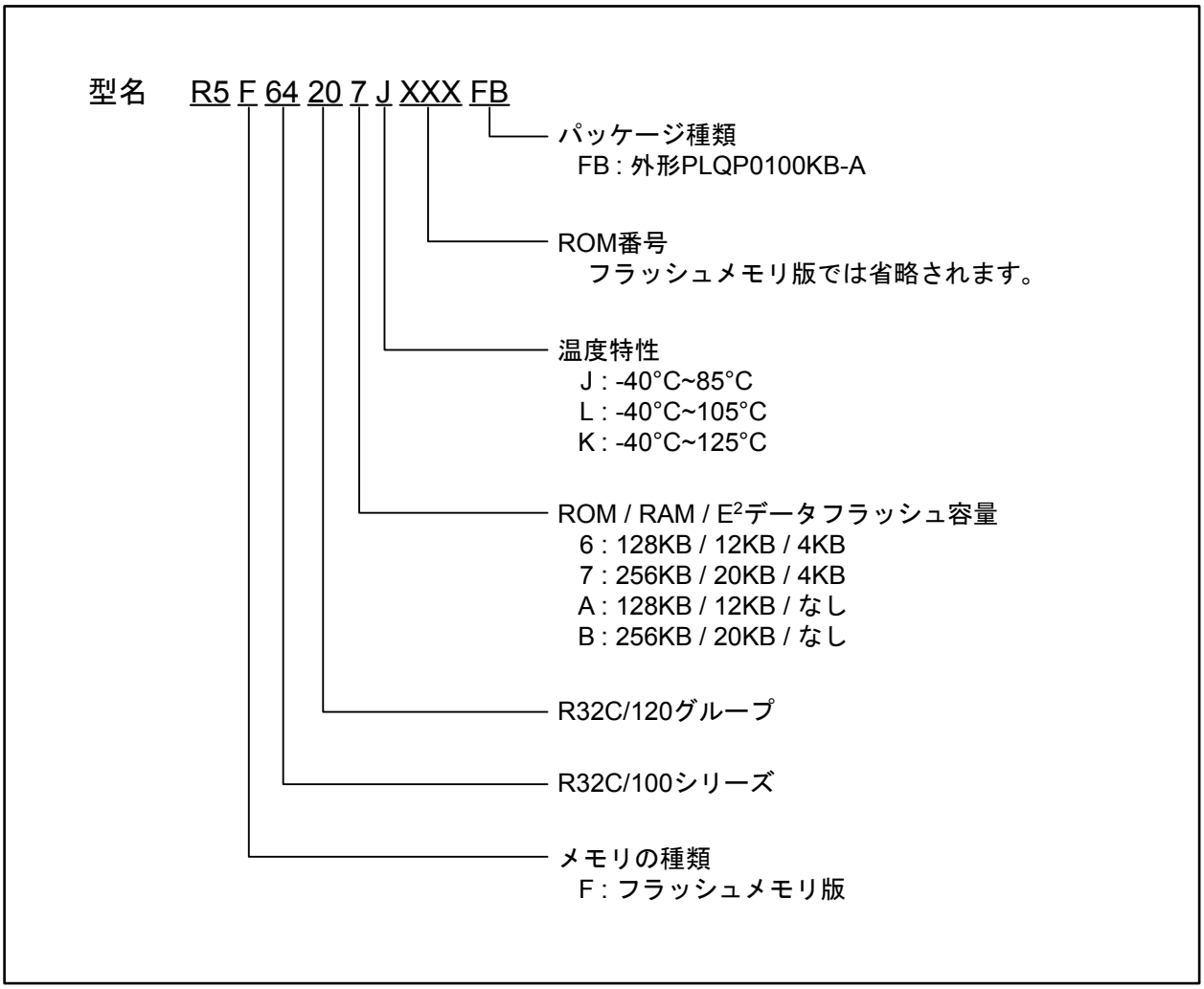


図 1.1　型名とメモリサイズ・パッケージ

1.3 ブロック図

図 1.2にR32C/120グループのブロック図を示します。

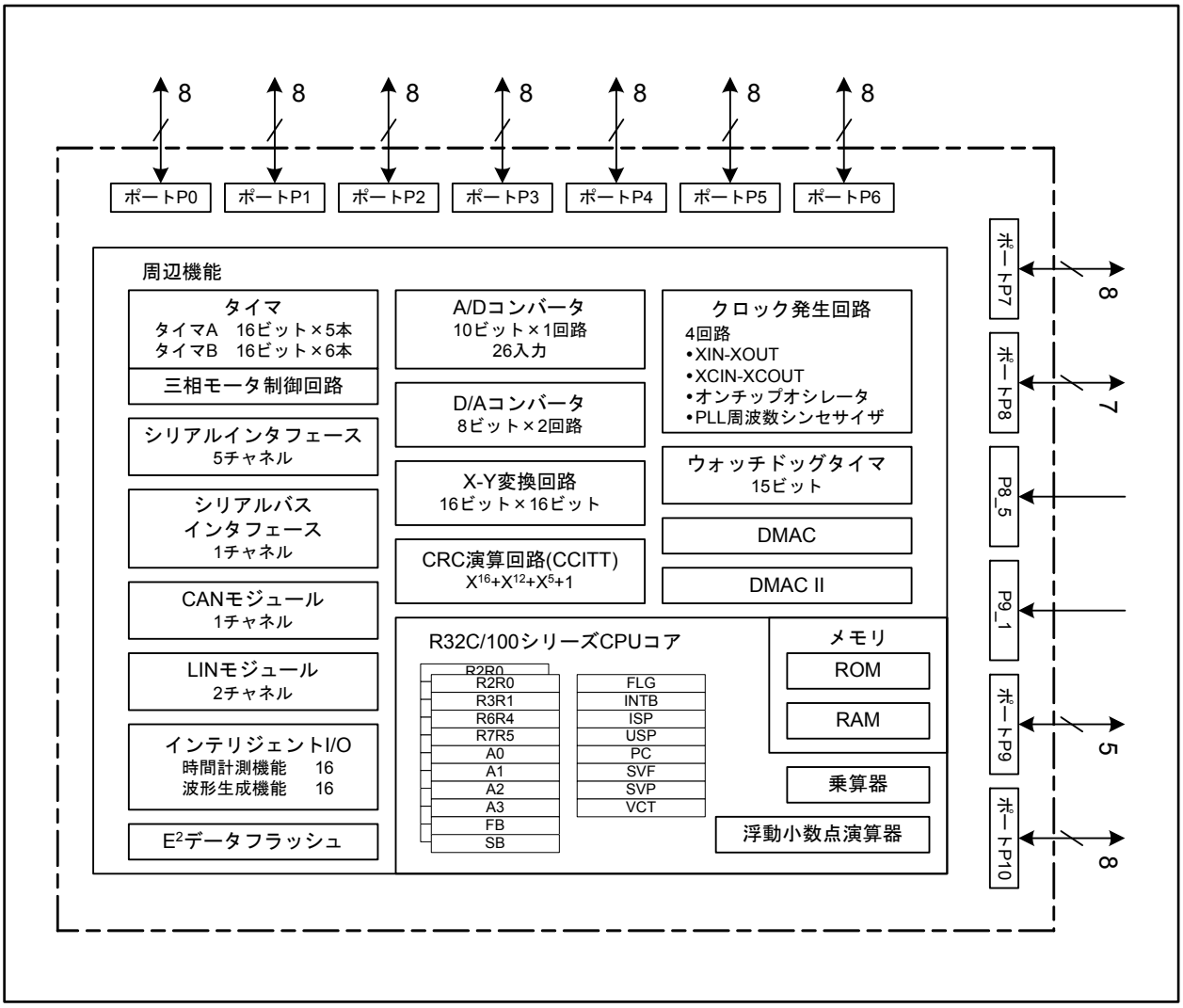


図 1.2 R32C/120グループのブロック図

1.4 ピン接続図

図 1.3にピン接続図(上面図)を示します。

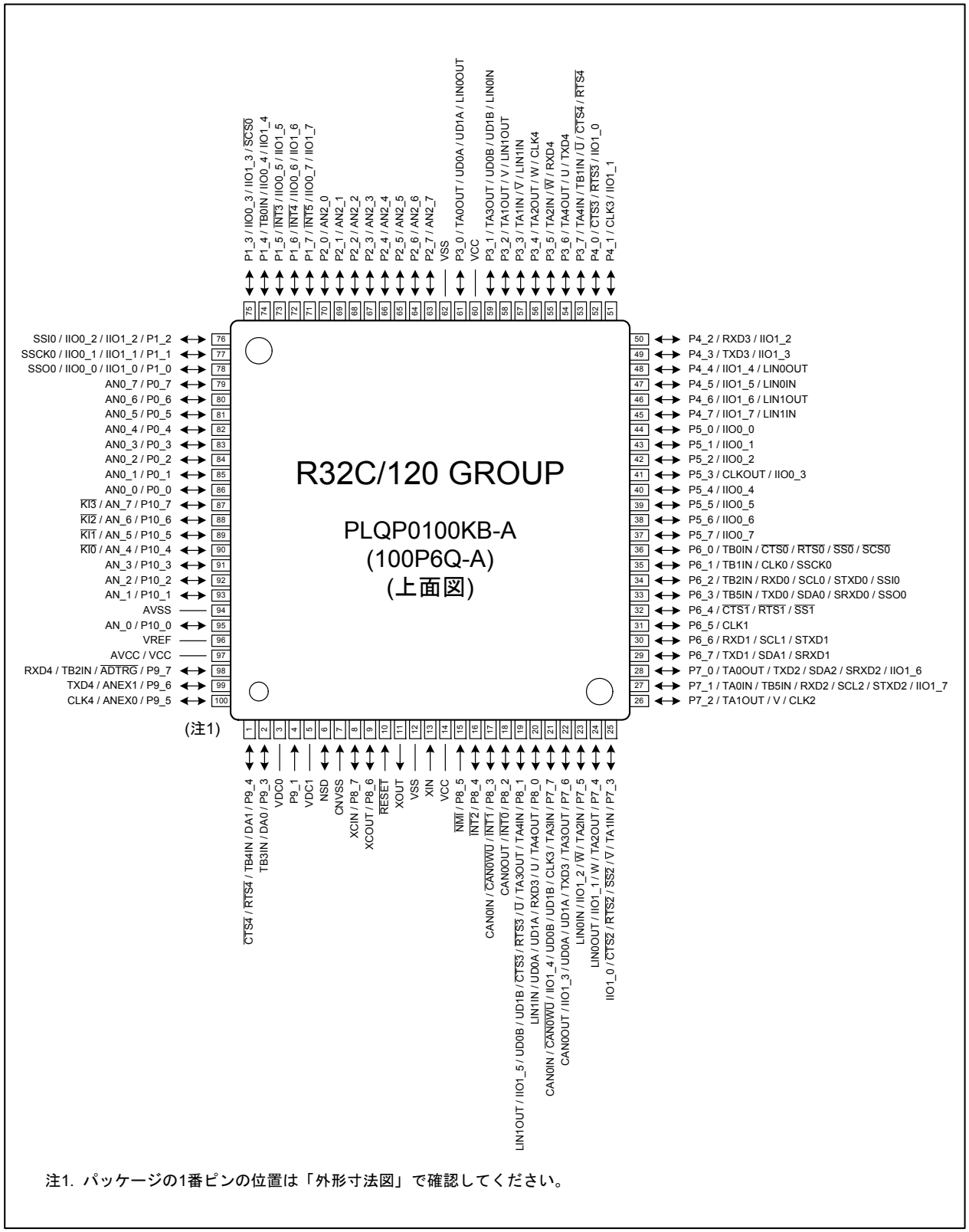


図 1.3 ピン接続図(上面図)

表 1.4 端子名一覧表 (1/3)

Pin No.	制御端子	ポート	割り込み端子	タイマ端子	UART端子	インテリジェントI/O端子	LIN / CAN端子	アナログ端子
1		P9_4		TB4IN	$\overline{\text{CTS4}}$/$\overline{\text{RTS4}}$			DA1
2		P9_3		TB3IN				DA0
3	VDC0							
4		P9_1						
5	VDC1							
6	NSD							
7	CNVSS							
8	XCIN	P8_7						
9	XCOUT	P8_6						
10	$\overline{\text{RESET}}$							
11	XOUT							
12	VSS							
13	XIN							
14	VCC							
15		P8_5	$\overline{\text{NMI}}$					
16		P8_4	$\overline{\text{INT2}}$					
17		P8_3	$\overline{\text{INT1}}$				CAN0IN/$\overline{\text{CAN0WU}}$	
18		P8_2	$\overline{\text{INT0}}$				CAN0OUT	
19		P8_1		TA3OUT/ TA4IN/$\overline{\text{U}}$	$\overline{\text{CTS3}}$/$\overline{\text{RTS3}}$	IIO1_5/UD0B/UD1B	LIN1OUT	
20		P8_0		TA4OUT/U	RXD3	UD0A/UD1A	LIN1IN	
21		P7_7		TA3IN	CLK3	IIO1_4/UD0B/UD1B	CAN0IN/$\overline{\text{CAN0WU}}$	
22		P7_6		TA3OUT	TXD3	IIO1_3/UD0A/UD1A	CAN0OUT	
23		P7_5		TA2IN/$\overline{\text{W}}$		IIO1_2	LIN0IN	
24		P7_4		TA2OUT/W		IIO1_1	LIN0OUT	
25		P7_3		TA1IN/$\overline{\text{V}}$	$\overline{\text{CTS2}}$/$\overline{\text{RTS2}}$/$\overline{\text{SS2}}$	IIO1_0		
26		P7_2		TA1OUT/V	CLK2			
27		P7_1		TA0IN/ TB5IN	RXD2/SCL2/STXD2	IIO1_7		
28		P7_0		TA0OUT	TXD2/SDA2/SRXD2	IIO1_6		
29		P6_7			TXD1/SDA1/SRXD1			
30		P6_6			RXD1/SCL1/STXD1			
31		P6_5			CLK1			
32		P6_4			$\overline{\text{CTS1}}$/$\overline{\text{RTS1}}$/$\overline{\text{SS1}}$			
33		P6_3		TB5IN	TXD0/SDA0/SRXD0/ SSO0			
34		P6_2		TB2IN	RXD0/SCL0/STXD0/ SSI0			

表 1.5 端子名一覧表 (2/3)

Pin No.	制御端子	ポート	割り込み端子	タイマ端子	UART端子	インテリジェントI/O端子	LIN / CAN端子	アナログ端子
35		P6_1		TB1IN	CLK0/SSCK0			
36		P6_0		TB0IN	$\overline{CTS0}$/$\overline{RTS0}$/$\overline{SS0}$/$\overline{SCS0}$			
37		P5_7				IIO0_7		
38		P5_6				IIO0_6		
39		P5_5				IIO0_5		
40		P5_4				IIO0_4		
41	CLKOUT	P5_3				IIO0_3		
42		P5_2				IIO0_2		
43		P5_1				IIO0_1		
44		P5_0				IIO0_0		
45		P4_7				IIO1_7	LIN1IN	
46		P4_6				IIO1_6	LIN1OUT	
47		P4_5				IIO1_5	LIN0IN	
48		P4_4				IIO1_4	LIN0OUT	
49		P4_3			TXD3	IIO1_3		
50		P4_2			RXD3	IIO1_2		
51		P4_1			CLK3	IIO1_1		
52		P4_0			$\overline{CTS3}$/$\overline{RTS3}$	IIO1_0		
53		P3_7		TA4IN/TB1IN/$\overline{U}$	$\overline{CTS4}$/$\overline{RTS4}$			
54		P3_6		TA4OUT/U	TXD4			
55		P3_5		TA2IN/$\overline{W}$	RXD4			
56		P3_4		TA2OUT/W	CLK4			
57		P3_3		TA1IN/$\overline{V}$			LIN1IN	
58		P3_2		TA1OUT/V			LIN1OUT	
59		P3_1		TA3OUT		UD0B/UD1B	LIN0IN	
60	VCC							
61		P3_0		TA0OUT		UD0A/UD1A	LIN0OUT	
62	VSS							
63		P2_7						AN2_7
64		P2_6						AN2_6
65		P2_5						AN2_5
66		P2_4						AN2_4
67		P2_3						AN2_3
68		P2_2						AN2_2
69		P2_1						AN2_1
70		P2_0						AN2_0
71		P1_7	$\overline{INT5}$			IIO0_7/IIO1_7		
72		P1_6	$\overline{INT4}$			IIO0_6/IIO1_6		
73		P1_5	$\overline{INT3}$			IIO0_5/IIO1_5		
74		P1_4		TB0IN		IIO0_4/IIO1_4		

表 1.6 端子名一覧表 (3/3)

Pin No.	制御端子	ポート	割り込み端子	タイマ端子	UART端子	インテリジェントI/O端子	LIN / CAN端子	アナログ端子
75		P1_3			$\overline{\text{SCS0}}$	IIO0_3/IIO1_3		
76		P1_2			SSI0	IIO0_2/IIO1_2		
77		P1_1			SSCK0	IIO0_1/IIO1_1		
78		P1_0			SSO0	IIO0_0/IIO1_0		
79		P0_7						AN0_7
80		P0_6						AN0_6
81		P0_5						AN0_5
82		P0_4						AN0_4
83		P0_3						AN0_3
84		P0_2						AN0_2
85		P0_1						AN0_1
86		P0_0						AN0_0
87		P10_7	$\overline{\text{KI3}}$					AN_7
88		P10_6	$\overline{\text{KI2}}$					AN_6
89		P10_5	$\overline{\text{KI1}}$					AN_5
90		P10_4	$\overline{\text{KI0}}$					AN_4
91		P10_3						AN_3
92		P10_2						AN_2
93		P10_1						AN_1
94	AVSS							
95		P10_0						AN_0
96	VREF							
97	AVCC/VCC							
98		P9_7		TB2IN	RXD4			$\overline{\text{ADTRG}}$
99		P9_6			TXD4			ANEX1
100		P9_5			CLK4			ANEX0

1.5 端子機能の説明

表 1.7 端子機能の説明 (1/3)

分類	端子名	入出力	機能
電源入力	VCC, VSS	入力	VCC端子には、3.0~5.5Vを入力してください。VSS端子は、グラウンドに接続してください
平滑コンデンサ接続端子	VDC0, VDC1	—	両端子間に内部ロジック電圧安定用の平滑コンデンサを接続してください
アナログ電源入力	AVCC, AVSS	入力	A/Dコンバータの電源入力です。AVSSはVSSに接続してください
リセット入力	$\overline{\text{RESET}}$	入力	この端子に“L”を入力すると、マイクロコンピュータはリセット状態になります
CNVSS	CNVSS	入力	抵抗を介してVSSにプルダウンしてください
デバッグポート	NSD	入出力	デバッガとの通信に使用します。1k~4.7kΩの抵抗で、VCCにプルアップしてください
メインクロック入力	XIN	入力	メインクロック発振回路の入出力です。XINとXOUTの間にはセラミック共振子または水晶振動子を接続してください。外部で生成したクロックを入力する場合は、XINから入力しXOUTは開放にしてください
メインクロック出力	XOUT	出力	
サブクロック入力	XCIN	入力	サブクロック発振回路の入出力です。XCINとXCOUTの間には水晶振動子を接続してください。外部で生成したクロックを入力する場合は、XCINから入力しXCOUTは開放にしてください
サブクロック出力	XCOUT	出力	
クロック出力	CLKOUT	出力	低速クロック、f8または、f32と同じ周期のクロックを出力します
外部割り込み入力	$\overline{\text{INT0}}$~$\overline{\text{INT5}}$	入力	外部割り込みの入力です
NMI入力	P8_5/$\overline{\text{NMI}}$	入力	NMIの入力です
キー入力割り込み	$\overline{\text{KI0}}$~$\overline{\text{KI3}}$	入力	キー入力割り込みの入力です
入出力ポート	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	入出力	CMOSの入出力ポートです 1端子ごとに入力ポートまたは出力ポートに設定できます また、Pi_0~Pi_3 (i=0~10)の4端子とPi_4~Pi_7の4端子ごとに一括でプルアップ抵抗の有無を選択できます。プルアップ抵抗は、入力ポートに設定した端子で有効になります
入力ポート	P9_1	入力	CMOSの入力ポートです。P9_3と一括でプルアップ抵抗の有無を選択できます

表 1.8 端子機能の説明 (2/3)

分類	端子名	入出力	機能
タイマA	TA0OUT~TA4OUT	入出力	タイマA0~A4の入出力です
	TA0IN~TA4IN	入力	タイマA0~A4の入力です
タイマB	TB0IN~TB5IN	入力	タイマB0~B5の入力です
三相モータ制御用タイマ出力	U, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$	出力	三相モータ制御用タイマの出力です
シリアルインタフェース	$\overline{CTS0}$~$\overline{CTS4}$	入力	ハンドシェイク入力です
	$\overline{RTS0}$~$\overline{RTS4}$	出力	ハンドシェイク出力です
	CLK0~CLK4	入出力	送受信クロック入出力です
	RXD0~RXD4	入力	シリアルデータ入力です
	TXD0~TXD4	出力	シリアルデータ出力です
簡易型I²Cバス	SDA0~SDA2	入出力	シリアルデータ入出力です
	SCL0~SCL2	入出力	送受信クロック入出力です
シリアルインタフェース特殊機能	STXD0~STXD2	出力	スレーブモードを選択したときのシリアルデータ出力です
	SRXD0~SRXD2	入力	スレーブモードを選択したときのシリアルデータ入力です
	$\overline{SS0}$~$\overline{SS2}$	入力	シリアルインタフェース特殊機能の制御用入力です
A/Dコンバータ	AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7	入力	A/Dコンバータのアナログ入力です
	$\overline{ADTRG}$	入力	A/Dコンバータの外部トリガ入力です
	ANEX0	入出力	A/Dコンバータの拡張アナログ入力兼、外部オペアンプ接続モードでの出力です
	ANEX1	入力	A/Dコンバータの拡張アナログ入力です
D/Aコンバータ	DA0, DA1	出力	D/Aコンバータの出力です
基準電圧入力	VREF	入力	A/DコンバータとD/Aコンバータの基準電圧入力です

表 1.9 端子機能の説明 (3/3)

分類	端子名	入出力	機能
インテリジェントI/O	IIO0_0~IIO0_7	入出力	インテリジェントI/Oグループ0の入出力です。インプットキャプチャ入力とアウトプットコンペア出力を切り替えられます
	IIO1_0~IIO1_7	入出力	インテリジェントI/Oグループ1の入出力です。インプットキャプチャ入力とアウトプットコンペア出力を切り替えられます
	UD0A, UD0B, UD1A, UD1B	入力	2相エンコーダ用の入力です
シリアルバスインタフェース	SSO0	入出力	シリアルデータ出力です。4線式シリアルバスモードではシリアルデータ入出力になります
	SSI0	入出力	シリアルデータ入力です。4線式シリアルバスモードではシリアルデータ入出力になります
	SSCK0	入出力	送受信クロック入出力です
	$\overline{\text{SCS0}}$	入出力	制御用入出力です
LINモジュール	LIN0OUT, LIN1OUT	出力	LIN通信機能の送信データ出力です
	LIN0IN, LIN1IN	入力	LIN通信機能の受信データ入力です
CANモジュール	CAN0IN	入力	CAN通信機能の受信データ入力です
	CAN0OUT	出力	CAN通信機能の送信データ出力です
	$\overline{\text{CAN0WU}}$	入力	CANウェイクアップ用割り込み入力です

2. 中央演算処理装置(CPU)

図 2.1 に CPU のレジスタを示します。これらのうち、R2R0、R3R1、R6R4、R7R5、A0、A1、A2、A3、SB、FB の 10 個のレジスタは2バンクあります。

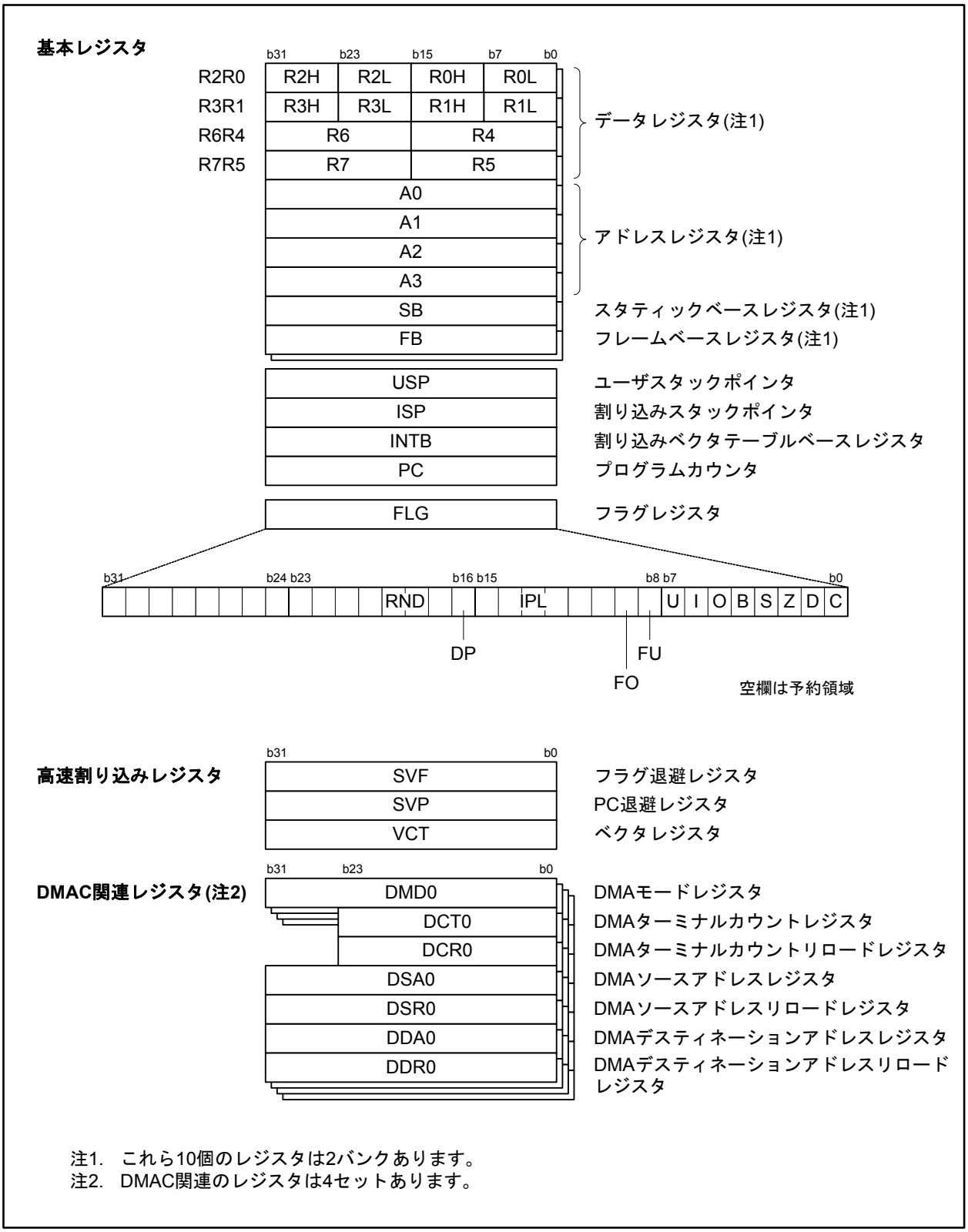


図 2.1　中央演算処理装置のレジスタ構成

2.1 基本レジスタ

2.1.1 データレジスタ(R2R0, R3R1, R6R4, R7R5)

R2R0、R3R1、R6R4、R7R5は32ビットで構成されており、主に転送や算術、論理演算に使用します。

R2R0は、上位(R2)と下位(R0)を別々に16ビットのデータレジスタとして使用できます。R3R1、R6R4、R7R5も同様に2つの16ビットレジスタに分割できます。

また、R2R0は、上位(R2H)、中上位(R2L)、中下位(R0H)、下位(R0L)を別々に8ビットのデータレジスタとしても使用できます。R3R1も同様に4つの8ビットレジスタに分割できます。

2.1.2 アドレスレジスタ(A0, A1, A2, A3)

A0、A1、A2、A3は32ビットで構成されており、アドレスレジスタ間接アドレッシングやアドレスレジスタ相対アドレッシングに使用します。また、データレジスタ同様転送や算術、論理演算にも使用できます。

2.1.3 スタティックベースレジスタ(SB)

SBは32ビットで構成されており、SB相対アドレッシングに使用します。

2.1.4 フレームベースレジスタ(FB)

FBは32ビットで構成されており、FB相対アドレッシングに使用します。

2.1.5 プログラムカウンタ(PC)

PCは32ビットで構成されており、次に実行する命令の番地を示します。

2.1.6 割り込みベクタテーブルベースレジスタ(INTB)

INTBは32ビットで構成されており、可変ベクタテーブルの先頭番地を示します。

2.1.7 ユーザスタックポインタ(USP)、割り込みスタックポインタ(ISP)

スタックポインタ(SP)は、USPとISPの2種類があり、ともに32ビットで構成されています。

USPとISPはUフラグで切り替えられます。Uフラグについては「2.1.8 フラグレジスタ(FLG)」を参照してください。

使用するスタックポインタ(USP/ISP)は、スタックポインタ指定フラグ(Uフラグ)によって切り替えられます。スタックポインタ指定フラグ(Uフラグ)は、フラグレジスタ(FLG)のビット7です。

USP、ISPには4の倍数を設定してください。4の倍数を設定したほうがメモリアクセス回数が少なくなり、割り込みシーケンスの実行速度が速くなります。

2.1.8 フラグレジスタ(FLG)

FLGは32ビットで構成されており、CPUの状態を示します。

2.1.8.1 キャリーフラグ (Cフラグ)

算術論理ユニットで発生したキャリー、ボロー、シフトアウトしたビット等を保持します。

2.1.8.2 デバッグフラグ (Dフラグ)

デバッグ専用です。書くときは“0”を書いてください。

2.1.8.3 ゼロフラグ (Zフラグ)

演算の結果が0のとき“1”になり、それ以外のとき“0”になります。

2.1.8.4 サインフラグ (Sフラグ)

演算の結果が負のとき“1”になり、それ以外のとき“0”になります。

2.1.8.5 レジスタバンク指定フラグ (Bフラグ)

レジスタバンクの選択を行います。Bフラグが“0”のときレジスタバンク0が指定され、“1”のときレジスタバンク1が指定されます。

2.1.8.6 オーバフローフラグ (Oフラグ)

演算の結果がオーバフローしたとき“1”になり、それ以外のとき“0”になります。

2.1.8.7 割り込み許可フラグ (Iフラグ)

マスカブル割り込みを許可するフラグです。Iフラグが“0”のとき割り込みは禁止され、“1”のとき許可されます。割り込みを受け付けると、Iフラグは“0”になります。

2.1.8.8 スタックポインタ指定フラグ (Uフラグ)

Uフラグが“0”のとき割り込みスタックポインタ(ISP)が指定され、“1”のときユーザスタックポインタ(USP)が指定されます。

ハードウェア割り込みを受け付けたとき、またはソフトウェア割り込み番号0~127のINT命令を実行したとき、Uフラグは“0”になります。

2.1.8.9 浮動小数点アンダフローフラグ(FUフラグ)

浮動小数点演算の結果が、最小の正規化数を下回った場合(アンダフロー)、“1”になり、それ以外のとき“0”になります。

また、オペランドのデータが正規化数でも0でもない(不正入力値)場合にも、“1”になります。

2.1.8.10 浮動小数点オーバフローフラグ(FOフラグ)

浮動小数点演算の結果が、最大の正規化数を上回った場合(オーバフロー)、“1”になり、それ以外のとき“0”になります。

また、オペランドのデータが正規化数でも0でもない(不正入力値)場合にも、“1”になります。

2.1.8.11　プロセッサ割り込み優先レベル (IPL)

IPLは3ビットで構成されており、レベル0からレベル7までの8段階のプロセッサ割り込み優先レベルを指定します。要求があった割り込みの要求レベルが、プロセッサ割り込み優先レベル(IPL)より大きい場合、その割り込みが許可されます。

プロセッサ割り込み優先レベル (IPL) をレベル 7 (111b) に設定した場合、すべての割り込みが禁止されます。

2.1.8.12　固定小数点位置指定ビット(DPビット)

固定小数点の小数点位置を指定するビットです。また、固定小数点乗算の結果から、どの部分を最終演算結果として抜き出すかを指定するビットでもあります。

MULX命令で使用します。

2.1.8.13　浮動小数点丸め演算モード(RND)

浮動小数点丸め演算モード(RND)は2ビットで構成されており、浮動小数点演算の結果を丸める方式を指定します。

2.1.8.14　予約領域

書くときは“0”を書いてください。読んだときその値は不定です。

2.2　高速割り込みレジスタ

高速割り込みレジスタは、割り込みシーケンスを高速に行うための専用レジスタです。

高速割り込みレジスタには以下の3つのレジスタがあります。詳細は、「10.4 高速割り込み」を参照してください。

2.2.1　フラグ退避レジスタ (SVF)

フラグ退避レジスタ (SVF) は 32 ビットで構成されており、高速割り込み発生時にフラグレジスタを退避させるために使用します。

2.2.2　PC退避レジスタ (SVP)

PC退避レジスタ (SVP) は32ビットで構成されており、高速割り込み発生時プログラムカウンタを退避させるために使用します。

2.2.3　ベクタレジスタ (VCT)

ベクタレジスタ (VCT) は32ビットで構成されており、高速割り込み発生時の分岐先番地を示します。

2.3 DMAC関連レジスタ

DMAC関連レジスタには以下の7種類のレジスタがあります。詳細は、「12. DMAC」を参照してください。

2.3.1 DMAモードレジスタ(DMD0, DMD1, DMD2, DMD3)

DMAモードレジスタ(DMD0, DMD1, DMD2, DMD3)は32ビットで構成されており、DMAの転送モードなどを設定するレジスタです。

2.3.2 DMAターミナルカウントレジスタ(DCT0, DCT1, DCT2, DCT3)

DMAターミナルカウントレジスタ(DCT0, DCT1, DCT2, DCT3)は24ビットで構成されており、DMAの転送回数を設定するレジスタです。

2.3.3 DMAターミナルカウントリロードレジスタ(DCR0, DCR1, DCR2, DCR3)

DMAターミナルカウントリロードレジスタ(DCR0, DCR1, DCR2, DCR3)は24ビットで構成されており、DMAターミナルカウントレジスタのリロード値を設定するレジスタです。

2.3.4 DMAソースアドレスレジスタ(DSA0, DSA1, DSA2, DSA3)

DMAソースアドレスレジスタ(DSA0, DSA1, DSA2, DSA3)は32ビットで構成されており、DMAの転送元のアドレスを設定するレジスタです。

2.3.5 DMAソースアドレスリロードレジスタ(DSR0, DSR1, DSR2, DSR3)

DMAソースアドレスリロードレジスタ(DSR0, DSR1, DSR2, DSR3)は32ビットで構成されており、DMAソースアドレスレジスタへのリロード値を設定するレジスタです。

2.3.6 DMAデスティネーションアドレスレジスタ(DDA0, DDA1, DDA2, DDA3)

DMAデスティネーションアドレスレジスタ(DDA0, DDA1, DDA2, DDA3)は32ビットで構成されており、DMAの転送先のアドレスを設定するレジスタです。

2.3.7 DMAデスティネーションアドレスリロードレジスタ(DDR0, DDR1, DDR2, DDR3)

DMAデスティネーションアドレスリロードレジスタ(DDR0, DDR1, DDR2, DDR3)は32ビットで構成されており、DMAデスティネーションアドレスレジスタへのリロード値を設定するレジスタです。

3. メモリ

R32C/120グループのメモリ配置図を図3.1に示します。

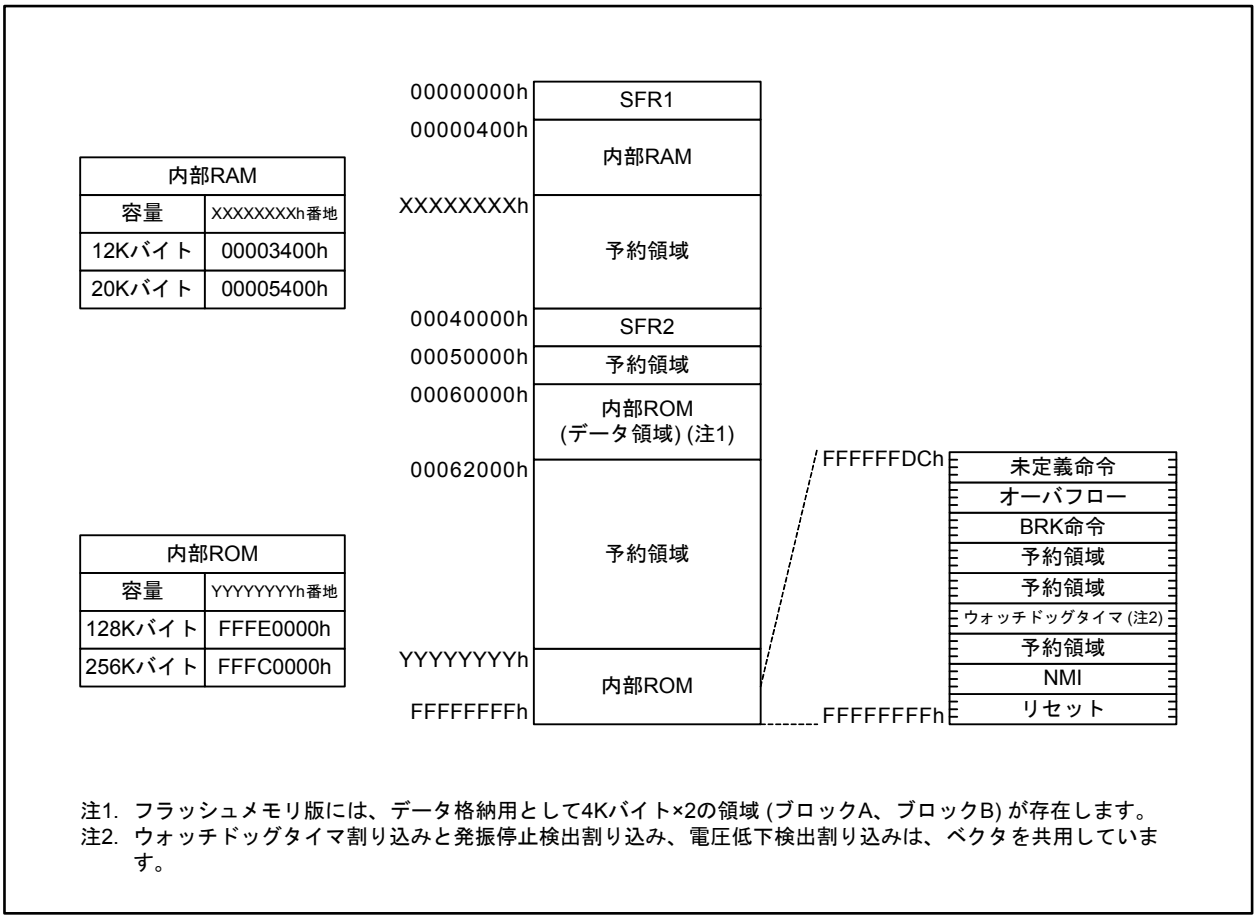
アドレス空間は00000000h番地からFFFFFFFFh番地までの4Gバイトあります。

内部ROMはFFFFFFFFh番地から下位方向に配置されています。たとえば256Kバイトの内部ROMは、FFFC0000h番地からFFFFFFFFh番地までに配置されています。

固定割り込みベクタはFFFFFFDCh番地からFFFFFFFFh番地までに配置されています。ここに割り込み処理ルーチンの先頭アドレスを格納します。

内部RAMは00000400h番地から上位方向に配置されています。たとえば20Kバイトの内部RAMは、00000400h番地から000053FFh番地までに配置されています。内部RAMはデータ格納以外に、サブルーチン呼び出しや割り込み時のスタックとしても使用します。

SFR (Special Function Register)は、00000000h番地から000003FFh番地までと、00040000h番地から0004FFFFh番地までに配置されています。ここには、周辺装置の制御レジスタが配置されています。SFR領域のうち何も配置されていない番地は、すべて予約領域のため、アクセスしないでください。



注1. フラッシュメモリ版には、データ格納用として4Kバイト×2の領域 (ブロックA、ブロックB) が存在します。
注2. ウォッチドッグタイマ割り込みと発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みは、ベクタを共用しています。

図3.1 メモリ配置図

4. SFR

SFR (Special Function Register)は、周辺機能の制御をしたり、状態を取得するためのレジスタです。
表 4.1 SFR一覧(1)~表 4.41 SFR一覧(41)にSFRの一覧を示します。

表 4.1 SFR一覧(1)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000000h			
000001h			
000002h			
000003h			
000004h	クロック制御レジスタ	CCR	0001 1000b
000005h			
000006h	フラッシュメモリ制御レジスタ	FMCR	0000 0001b
000007h	プロテクト解除レジスタ	PRR	00h
000008h			
000009h			
00000Ah			
00000Bh			
00000Ch			
00000Dh			
00000Eh			
00000Fh			
000010h			
000011h			
000012h			
000013h			
000014h			
000015h			
000016h			
000017h			
000018h			
000019h			
00001Ah			
00001Bh			
00001Ch	フラッシュメモリ書き換えバス制御レジスタ	FEBC	0000h
00001Dh			
00001Eh	周辺バス制御レジスタ	PBC	0504h
00001Fh			
000020h~ 00005Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.2 SFR一覧(2)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000060h			
000061h	タイマB5割り込み制御レジスタ	TB5IC	XXXX X000b
000062h			
000063h	UART2受信/ACK割り込み制御レジスタ	S2RIC	XXXX X000b
000064h			
000065h			
000066h			
000067h			
000068h	DMA0転送完了割り込み制御レジスタ	DM0IC	XXXX X000b
000069h	UART0スタートコンディション/ストップコンディション検出割り込み制御レジスタ	BCN0IC	XXXX X000b
00006Ah	DMA2転送完了割り込み制御レジスタ	DM2IC	XXXX X000b
00006Bh	A/Dコンバータ0変換完了割り込み制御レジスタ	AD0IC	XXXX X000b
00006Ch	タイマA0割り込み制御レジスタ	TA0IC	XXXX X000b
00006Dh	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ0	IIO0IC	XXXX X000b
00006Eh	タイマA2割り込み制御レジスタ	TA2IC	XXXX X000b
00006Fh	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ2	IIO2IC	XXXX X000b
000070h	タイマA4割り込み制御レジスタ	TA4IC	XXXX X000b
000071h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ4	IIO4IC	XXXX X000b
000072h	UART0受信/ACK割り込み制御レジスタ	S0RIC	XXXX X000b
000073h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ6	IIO6IC	XXXX X000b
000074h	UART1受信/ACK割り込み制御レジスタ	S1RIC	XXXX X000b
000075h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ8	IIO8IC	XXXX X000b
000076h	タイマB1割り込み制御レジスタ	TB1IC	XXXX X000b
000077h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ10	IIO10IC	XXXX X000b
000078h	タイマB3割り込み制御レジスタ	TB3IC	XXXX X000b
000079h			
00007Ah	INT5割り込み制御レジスタ	INT5IC	XX00 X000b
00007Bh	CAN0ウェイクアップ割り込み制御レジスタ	C0WIC	XXXX X000b
00007Ch	INT3割り込み制御レジスタ	INT3IC	XX00 X000b
00007Dh			
00007Eh	INT1割り込み制御レジスタ	INT1IC	XX00 X000b
00007Fh	LIN“L”検出割り込み制御レジスタ	LLDIC	XXXX X000b
000080h			
000081h	UART2送信/NACK割り込み制御レジスタ	S2TIC	XXXX X000b
000082h			
000083h			
000084h			
000085h			
000086h			
000087h	UART2スタートコンディション/ストップコンディション検出割り込み制御レジスタ	BCN2IC	XXXX X000b

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.3 SFR一覧(3)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000088h	DMA1転送完了割り込み制御レジスタ	DM1IC	XXXX X000b
000089h	UART1スタートコンディション/ストップコンディション検出割り込み制御レジスタ	BCN1IC	XXXX X000b
00008Ah	DMA3転送完了割り込み制御レジスタ	DM3IC	XXXX X000b
00008Bh	キー入力割り込み制御レジスタ	KUPIC	XXXX X000b
00008Ch	タイマA1割り込み制御レジスタ	TA1IC	XXXX X000b
00008Dh	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ1	IIO1IC	XXXX X000b
00008Eh	タイマA3割り込み制御レジスタ	TA3IC	XXXX X000b
00008Fh	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ3	IIO3IC	XXXX X000b
000090h	UART0送信/NACK割り込み制御レジスタ	S0TIC	XXXX X000b
000091h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ5	IIO5IC	XXXX X000b
000092h	UART1送信/NACK割り込み制御レジスタ	S1TIC	XXXX X000b
000093h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ7	IIO7IC	XXXX X000b
000094h	タイマB0割り込み制御レジスタ	TB0IC	XXXX X000b
000095h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ9	IIO9IC	XXXX X000b
000096h	タイマB2割り込み制御レジスタ	TB2IC	XXXX X000b
000097h	インテリジェントI/O割り込み制御レジスタ11	IIO11IC	XXXX X000b
000098h	タイマB4割り込み制御レジスタ	TB4IC	XXXX X000b
000099h			
00009Ah	INT4割り込み制御レジスタ	INT4IC	XX00 X000b
00009Bh			
00009Ch	INT2割り込み制御レジスタ	INT2IC	XX00 X000b
00009Dh			
00009Eh	INT0割り込み制御レジスタ	INT0IC	XX00 X000b
00009Fh			
0000A0h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ0	IIO0IR	0000 0XX1b
0000A1h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ1	IIO1IR	0000 0XX1b
0000A2h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ2	IIO2IR	0000 0X01b
0000A3h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ3	IIO3IR	0000 0XX1b
0000A4h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ4	IIO4IR	000X 0XX1b
0000A5h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ5	IIO5IR	0000 00X1b
0000A6h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ6	IIO6IR	0000 00X1b
0000A7h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ7	IIO7IR	000X 00X1b
0000A8h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ8	IIO8IR	0000 00X1b
0000A9h	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ9	IIO9IR	0000 00X1b
0000AAh	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ10	IIO10IR	0000 00X1b
0000ABh	インテリジェントI/O割り込み要求レジスタ11	IIO11IR	0000 00X1b
0000ACh			
0000ADh			
0000AEh			
0000AFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.4 SFR一覧(4)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0000B0h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ0	IIO0IE	00h
0000B1h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ1	IIO1IE	00h
0000B2h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ2	IIO2IE	00h
0000B3h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ3	IIO3IE	00h
0000B4h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ4	IIO4IE	00h
0000B5h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ5	IIO5IE	00h
0000B6h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ6	IIO6IE	00h
0000B7h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ7	IIO7IE	00h
0000B8h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ8	IIO8IE	00h
0000B9h	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ9	IIO9IE	00h
0000BAh	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ10	IIO10IE	00h
0000BBh	インテリジェントI/O割り込み許可レジスタ11	IIO11IE	00h
0000BCh			
0000BDh			
0000BEh			
0000BFh			
0000C0h	シリアルバスインタフェース0割り込み制御レジスタ	SS0IC	XXXX X000b
0000C1h	CAN0送信割り込み制御レジスタ	C0TIC	XXXX X000b
0000C2h			
0000C3h	CAN0エラー割り込み制御レジスタ	C0EIC	XXXX X000b
0000C4h			
0000C5h			
0000C6h			
0000C7h			
0000C8h			
0000C9h			
0000CAh			
0000CBh			
0000CCh			
0000CDh			
0000CEh			
0000CFh			
0000D0h	CAN0送信FIFO割り込み制御レジスタ	C0FTIC	XXXX X000b
0000D1h			
0000D2h			
0000D3h			
0000D4h			
0000D5h	LIN0割り込み制御レジスタ	L0IC	XXXX X000b
0000D6h			
0000D7h			
0000D8h	E^2データフラッシュ割り込み制御レジスタ	E2FIC	XXXX X000b
0000D9h			
0000DAh			
0000DBh			
0000DCh			
0000DDh	UART3送信割り込み制御レジスタ	S3TIC	XXXX X000b
0000DEh			
0000DFh	UART4送信割り込み制御レジスタ	S4TIC	XXXX X000b

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.5 SFR一覧(5)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0000E0h			
0000E1h	CAN0受信割り込み制御レジスタ	C0RIC	XXXX X000b
0000E2h			
0000E3h			
0000E4h			
0000E5h			
0000E6h			
0000E7h			
0000E8h			
0000E9h			
0000EAh			
0000EBh			
0000ECh			
0000EDh			
0000EEh			
0000EFh			
0000F0h	CAN0受信FIFO割り込み制御レジスタ	C0FRIC	XXXX X000b
0000F1h			
0000F2h			
0000F3h			
0000F4h			
0000F5h	LIN1割り込み制御レジスタ	L1IC	XXXX X000b
0000F6h			
0000F7h			
0000F8h			
0000F9h			
0000FAh			
0000FBh			
0000FCh			
0000FDh	UART3受信割り込み制御レジスタ	S3RIC	XXXX X000b
0000FEh			
0000FFh	UART4受信割り込み制御レジスタ	S4RIC	XXXX X000b
000100h	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ0	G1TM0/G1PO0	XXXXh
000101h			
000102h	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ1	G1TM1/G1PO1	XXXXh
000103h			
000104h	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ2	G1TM2/G1PO2	XXXXh
000105h			
000106h	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ3	G1TM3/G1PO3	XXXXh
000107h			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.6 SFR一覧(6)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000108h 000109h	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ4	G1TM4/G1PO4	XXXXh
00010Ah 00010Bh	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ5	G1TM5/G1PO5	XXXXh
00010Ch 00010Dh	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ6	G1TM6/G1PO6	XXXXh
00010Eh 00010Fh	グループ1 時間計測/波形生成レジスタ7	G1TM7/G1PO7	XXXXh
000110h	グループ1 波形生成制御レジスタ0	G1POCR0	0000 X000b
000111h	グループ1 波形生成制御レジスタ1	G1POCR1	0X00 X000b
000112h	グループ1 波形生成制御レジスタ2	G1POCR2	0X00 X000b
000113h	グループ1 波形生成制御レジスタ3	G1POCR3	0X00 X000b
000114h	グループ1 波形生成制御レジスタ4	G1POCR4	0X00 X000b
000115h	グループ1 波形生成制御レジスタ5	G1POCR5	0X00 X000b
000116h	グループ1 波形生成制御レジスタ6	G1POCR6	0X00 X000b
000117h	グループ1 波形生成制御レジスタ7	G1POCR7	0X00 X000b
000118h	グループ1 時間計測制御レジスタ0	G1TMCR0	00h
000119h	グループ1 時間計測制御レジスタ1	G1TMCR1	00h
00011Ah	グループ1 時間計測制御レジスタ2	G1TMCR2	00h
00011Bh	グループ1 時間計測制御レジスタ3	G1TMCR3	00h
00011Ch	グループ1 時間計測制御レジスタ4	G1TMCR4	00h
00011Dh	グループ1 時間計測制御レジスタ5	G1TMCR5	00h
00011Eh	グループ1 時間計測制御レジスタ6	G1TMCR6	00h
00011Fh	グループ1 時間計測制御レジスタ7	G1TMCR7	00h
000120h 000121h	グループ1 ベースタイマレジスタ	G1BT	XXXXh
000122h	グループ1 ベースタイマ制御レジスタ0	G1BCR0	0000 0000b
000123h	グループ1 ベースタイマ制御レジスタ1	G1BCR1	0000 0000b
000124h	グループ1 時間計測プリスケーラレジスタ6	G1TPR6	00h
000125h	グループ1 時間計測プリスケーラレジスタ7	G1TPR7	00h
000126h	グループ1 機能許可レジスタ	G1FE	00h
000127h	グループ1 機能選択レジスタ	G1FS	00h
000128h 000129h			
00012Ah			
00012Bh			
00012Ch			
00012Dh			
00012Eh			
00012Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.7 SFR一覧(7)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000130h~ 00016Fh			
000170h			
000171h			
000172h			
000173h			
000174h			
000175h			
000176h			
000177h			
000178h			
000179h			
00017Ah			
00017Bh			
00017Ch			
00017Dh			
00017Eh			
00017Fh			
000180h	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ0	G0TM0/G0PO0	XXXXh
000181h			
000182h	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ1	G0TM1/G0PO1	XXXXh
000183h			
000184h	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ2	G0TM2/G0PO2	XXXXh
000185h			
000186h	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ3	G0TM3/G0PO3	XXXXh
000187h			
000188h	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ4	G0TM4/G0PO4	XXXXh
000189h			
00018Ah	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ5	G0TM5/G0PO5	XXXXh
00018Bh			
00018Ch	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ6	G0TM6/G0PO6	XXXXh
00018Dh			
00018Eh	グループ0 時間計測/波形生成レジスタ7	G0TM7/G0PO7	XXXXh
00018Fh			
000190h	グループ0 波形生成制御レジスタ0	G0POCR0	0000 X000b
000191h	グループ0 波形生成制御レジスタ1	G0POCR1	0X00 X000b
000192h	グループ0 波形生成制御レジスタ2	G0POCR2	0X00 X000b
000193h	グループ0 波形生成制御レジスタ3	G0POCR3	0X00 X000b
000194h	グループ0 波形生成制御レジスタ4	G0POCR4	0X00 X000b
000195h	グループ0 波形生成制御レジスタ5	G0POCR5	0X00 X000b
000196h	グループ0 波形生成制御レジスタ6	G0POCR6	0X00 X000b
000197h	グループ0 波形生成制御レジスタ7	G0POCR7	0X00 X000b
000198h	グループ0 時間計測制御レジスタ0	G0TMCR0	00h
000199h	グループ0 時間計測制御レジスタ1	G0TMCR1	00h
00019Ah	グループ0 時間計測制御レジスタ2	G0TMCR2	00h
00019Bh	グループ0 時間計測制御レジスタ3	G0TMCR3	00h
00019Ch	グループ0 時間計測制御レジスタ4	G0TMCR4	00h
00019Dh	グループ0 時間計測制御レジスタ5	G0TMCR5	00h
00019Eh	グループ0 時間計測制御レジスタ6	G0TMCR6	00h
00019Fh	グループ0 時間計測制御レジスタ7	G0TMCR7	00h

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.8 SFR一覧(8)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0001A0h	グループ0 ベースタイマレジスタ	G0BT	XXXXh
0001A1h			
0001A2h	グループ0 ベースタイマ制御レジスタ0	G0BCR0	0000 0000b
0001A3h	グループ0 ベースタイマ制御レジスタ1	G0BCR1	0000 0000b
0001A4h	グループ0 時間計測プリスケーラレジスタ6	G0TPR6	00h
0001A5h	グループ0 時間計測プリスケーラレジスタ7	G0TPR7	00h
0001A6h	グループ0 機能許可レジスタ	G0FE	00h
0001A7h	グループ0 機能選択レジスタ	G0FS	00h
0001A8h			
0001A9h			
0001AAh			
0001ABh			
0001ACh			
0001ADh			
0001AEh			
0001AFh			
0001B0h			
0001B1h			
0001B2h			
0001B3h			
0001B4h			
0001B5h			
0001B6h			
0001B7h			
0001B8h			
0001B9h			
0001BAh			
0001BBh			
0001BCh			
0001BDh			
0001BEh			
0001BFh			
0001C0h			
0001C1h			
0001C2h			
0001C3h			
0001C4h			
0001C5h			
0001C6h			
0001C7h			
0001C8h			
0001C9h			
0001CAh			
0001CBh			
0001CCh			
0001CDh			
0001CEh			
0001CFh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.9 SFR一覧(9)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0001D0h			
0001D1h			
0001D2h			
0001D3h			
0001D4h			
0001D5h			
0001D6h			
0001D7h			
0001D8h			
0001D9h			
0001DAh			
0001DBh			
0001DCh			
0001DDh			
0001DEh			
0001DFh			
0001E0h	UART3送受信モードレジスタ	U3MR	00h
0001E1h	UART3転送速度レジスタ	U3BRG	XXh
0001E2h	UART3送信バッファレジスタ	U3TB	XXXXh
0001E3h			
0001E4h	UART3送受信制御レジスタ0	U3C0	00X0 1000b
0001E5h	UART3送受信制御レジスタ1	U3C1	XXXX 0010b
0001E6h	UART3受信バッファレジスタ	U3RB	XXXXh
0001E7h			
0001E8h	UART4送受信モードレジスタ	U4MR	00h
0001E9h	UART4転送速度レジスタ	U4BRG	XXh
0001EAh	UART4送信バッファレジスタ	U4TB	XXXXh
0001EBh			
0001ECh	UART4送受信制御レジスタ0	U4C0	00X0 1000b
0001EDh	UART4送受信制御レジスタ1	U4C1	XXXX 0010b
0001EEh	UART4受信バッファレジスタ	U4RB	XXXXh
0001EFh			
0001F0h	UART3,4送受信制御レジスタ2	U34CON	X000 0000b
0001F1h			
0001F2h			
0001F3h			
0001F4h			
0001F5h			
0001F6h			
0001F7h			
0001F8h			
0001F9h			
0001FAh			
0001FBh			
0001FCh			
0001FDh			
0001FEh			
0001FFh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.10 SFR一覧(10)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000200h	グループ0位相シフト波形出力モードクロック分周比設定レジスタ	G0SDR	00h
000201h	グループ0位相シフト波形出力モード制御レジスタ	G0PSCR	00h
000202h	グループ1位相シフト波形出力モードクロック分周比設定レジスタ	G1SDR	00h
000203h	グループ1位相シフト波形出力モード制御レジスタ	G1PSCR	00h
000204h			
000205h			
000206h			
000207h			
000208h	タイマBイベントクロック選択レジスタ	TBECKS	0000 0000b
000209h			
00020Ah			
00020Bh			
00020Ch			
00020Dh			
00020Eh			
00020Fh			
000210h	IIO0_7デジタルデバウンスレジスタ	IC07DDR	FFh
000211h	IIO1_7デジタルデバウンスレジスタ	IC17DDR	FFh
000212h			
000213h			
000214h			
000215h			
000216h			
000217h			
000218h			
000219h			
00021Ah			
00021Bh			
00021Ch			
00021Dh			
00021Eh			
00021Fh			
000220h	タイマA1ミラーレジスタ	TA1M	XXXXh
000221h			
000222h	タイマA1-1ミラーレジスタ	TA11M	XXXXh
000223h			
000224h	タイマA2ミラーレジスタ	TA2M	XXXXh
000225h			
000226h	タイマA2-1ミラーレジスタ	TA21M	XXXXh
000227h			
000228h	タイマA4ミラーレジスタ	TA4M	XXXXh
000229h			
00022Ah	タイマA4-1ミラーレジスタ	TA41M	XXXXh
00022Bh			
00022Ch			
00022Dh			
00022Eh			
00022Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.11 SFR一覧(11)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000230h~ 0002BFh			
0002C0h 0002C1h	X0レジスタ/Y0レジスタ	X0R/Y0R	XXXXh
0002C2h 0002C3h	X1レジスタ/Y1レジスタ	X1R/Y1R	XXXXh
0002C4h 0002C5h	X2レジスタ/Y2レジスタ	X2R/Y2R	XXXXh
0002C6h 0002C7h	X3レジスタ/Y3レジスタ	X3R/Y3R	XXXXh
0002C8h 0002C9h	X4レジスタ/Y4レジスタ	X4R/Y4R	XXXXh
0002CAh 0002CBh	X5レジスタ/Y5レジスタ	X5R/Y5R	XXXXh
0002CCh 0002CDh	X6レジスタ/Y6レジスタ	X6R/Y6R	XXXXh
0002CEh 0002CFh	X7レジスタ/Y7レジスタ	X7R/Y7R	XXXXh
0002D0h 0002D1h	X8レジスタ/Y8レジスタ	X8R/Y8R	XXXXh
0002D2h 0002D3h	X9レジスタ/Y9レジスタ	X9R/Y9R	XXXXh
0002D4h 0002D5h	X10レジスタ/Y10レジスタ	X10R/Y10R	XXXXh
0002D6h 0002D7h	X11レジスタ/Y11レジスタ	X11R/Y11R	XXXXh
0002D8h 0002D9h	X12レジスタ/Y12レジスタ	X12R/Y12R	XXXXh
0002DAh 0002DBh	X13レジスタ/Y13レジスタ	X13R/Y13R	XXXXh
0002DCh 0002DDh	X14レジスタ/Y14レジスタ	X14R/Y14R	XXXXh
0002DEh 0002DFh	X15レジスタ/Y15レジスタ	X15R/Y15R	XXXXh
0002E0h	X-Y制御レジスタ	XYC	XXXX XX00b
0002E1h			
0002E2h			
0002E3h			
0002E4h	UART1特殊モードレジスタ4	U1SMR4	00h
0002E5h	UART1特殊モードレジスタ3	U1SMR3	00h
0002E6h	UART1特殊モードレジスタ2	U1SMR2	00h
0002E7h	UART1特殊モードレジスタ	U1SMR	00h
0002E8h	UART1送受信モードレジスタ	U1MR	00h
0002E9h	UART1転送速度レジスタ	U1BRG	XXh
0002EAh 0002EBh	UART1送信バッファレジスタ	U1TB	XXXXh
0002ECh	UART1送受信制御レジスタ0	U1C0	0000 1000b
0002EDh	UART1送受信制御レジスタ1	U1C1	0000 0010b
0002EEh 0002EFh	UART1受信バッファレジスタ	U1RB	XXXXh

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.12 SFR一覧(12)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0002F0h			
0002F1h			
0002F2h			
0002F3h			
0002F4h			
0002F5h			
0002F6h			
0002F7h			
0002F8h			
0002F9h			
0002FAh			
0002FBh			
0002FCh			
0002FDh			
0002FEh			
0002FFh			
000300h	タイマB3、B4、B5カウント開始フラグ	TBSR	000X XXXXb
000301h			
000302h	タイマA1-1レジスタ	TA11	XXXXh
000303h			
000304h	タイマA2-1レジスタ	TA21	XXXXh
000305h			
000306h	タイマA4-1レジスタ	TA41	XXXXh
000307h			
000308h	三相PWM制御レジスタ0	INVC0	00h
000309h	三相PWM制御レジスタ1	INVC1	00h
00030Ah	三相出力バッファレジスタ0	IDB0	XX11 1111b
00030Bh	三相出力バッファレジスタ1	IDB1	XX11 1111b
00030Ch	短絡防止タイマ	DTT	XXh
00030Dh	タイマB2割り込み発生頻度設定カウンタ	ICTB2	XXh
00030Eh			
00030Fh			
000310h	タイマB3レジスタ	TB3	XXXXh
000311h			
000312h	タイマB4レジスタ	TB4	XXXXh
000313h			
000314h	タイマB5レジスタ	TB5	XXXXh
000315h			
000316h			
000317h			
000318h			
000319h			
00031Ah			
00031Bh	タイマB3モードレジスタ	TB3MR	00XX 0000b
00031Ch	タイマB4モードレジスタ	TB4MR	00XX 0000b
00031Dh	タイマB5モードレジスタ	TB5MR	00XX 0000b
00031Eh			
00031Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.13 SFR一覧(13)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000320h			
000321h			
000322h			
000323h			
000324h			
000325h			
000326h			
000327h			
000328h			
000329h			
00032Ah			
00032Bh			
00032Ch			
00032Dh			
00032Eh			
00032Fh			
000330h			
000331h			
000332h			
000333h			
000334h	UART2特殊モードレジスタ4	U2SMR4	00h
000335h	UART2特殊モードレジスタ3	U2SMR3	00h
000336h	UART2特殊モードレジスタ2	U2SMR2	00h
000337h	UART2特殊モードレジスタ	U2SMR	00h
000338h	UART2送受信モードレジスタ	U2MR	00h
000339h	UART2転送速度レジスタ	U2BRG	XXh
00033Ah	UART2送信バッファレジスタ	U2TB	XXXXh
00033Bh			
00033Ch	UART2送受信制御レジスタ0	U2C0	0000 1000b
00033Dh	UART2送受信制御レジスタ1	U2C1	0000 0010b
00033Eh	UART2受信バッファレジスタ	U2RB	XXXXh
00033Fh			
000340h	カウント開始レジスタ	TABSR	0000 0000b
000341h	時計用プリスケーラリセットレジスタ	CPSRF	0XXX XXXXb
000342h	ワンショット開始レジスタ	ONSF	0000 0000b
000343h	トリガ選択レジスタ	TRGSR	0000 0000b
000344h	アップダウン選択レジスタ	UDF	0000 0000b
000345h			
000346h	タイマA0レジスタ	TA0	XXXXh
000347h			
000348h	タイマA1レジスタ	TA1	XXXXh
000349h			
00034Ah	タイマA2レジスタ	TA2	XXXXh
00034Bh			
00034Ch	タイマA3レジスタ	TA3	XXXXh
00034Dh			
00034Eh	タイマA4レジスタ	TA4	XXXXh
00034Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.14 SFR一覧(14)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000350h	タイマB0レジスタ	TB0	XXXXh
000351h			
000352h	タイマB1レジスタ	TB1	XXXXh
000353h			
000354h	タイマB2レジスタ	TB2	XXXXh
000355h			
000356h	タイマA0モードレジスタ	TA0MR	0000 0000b
000357h	タイマA1モードレジスタ	TA1MR	0000 0000b
000358h	タイマA2モードレジスタ	TA2MR	0000 0000b
000359h	タイマA3モードレジスタ	TA3MR	0000 0000b
00035Ah	タイマA4モードレジスタ	TA4MR	0000 0000b
00035Bh	タイマB0モードレジスタ	TB0MR	00XX 0000b
00035Ch	タイマB1モードレジスタ	TB1MR	00XX 0000b
00035Dh	タイマB2モードレジスタ	TB2MR	00XX 0000b
00035Eh	タイマB2特殊モードレジスタ	TB2SC	XXXX XXX0b
00035Fh	カウントソースプリスケーラレジスタ	TCSPR	0000 0000b
000360h			
000361h			
000362h			
000363h			
000364h	UART0特殊モードレジスタ4	U0SMR4	00h
000365h	UART0特殊モードレジスタ3	U0SMR3	00h
000366h	UART0特殊モードレジスタ2	U0SMR2	00h
000367h	UART0特殊モードレジスタ	U0SMR	00h
000368h	UART0送受信モードレジスタ	U0MR	00h
000369h	UART0転送速度レジスタ	U0BRG	XXh
00036Ah	UART0送信バッファレジスタ	U0TB	XXXXh
00036Bh			
00036Ch	UART0送受信制御レジスタ0	U0C0	0000 1000b
00036Dh	UART0送受信制御レジスタ1	U0C1	0000 0010b
00036Eh	UART0受信バッファレジスタ	U0RB	XXXXh
00036Fh			
000370h			
000371h			
000372h			
000373h			
000374h			
000375h			
000376h			
000377h			
000378h			
000379h			
00037Ah			
00037Bh			
00037Ch	CRCデータレジスタ	CRCD	XXXXh
00037Dh			
00037Eh	CRCインプットレジスタ	CRCIN	XXh
00037Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.15 SFR一覧(15)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
000380h	A/D0レジスタ0	AD00	00XXh
000381h			
000382h	A/D0レジスタ1	AD01	00XXh
000383h			
000384h	A/D0レジスタ2	AD02	00XXh
000385h			
000386h	A/D0レジスタ3	AD03	00XXh
000387h			
000388h	A/D0レジスタ4	AD04	00XXh
000389h			
00038Ah	A/D0レジスタ5	AD05	00XXh
00038Bh			
00038Ch	A/D0レジスタ6	AD06	00XXh
00038Dh			
00038Eh	A/D0レジスタ7	AD07	00XXh
00038Fh			
000390h			
000391h			
000392h	A/D0制御レジスタ4	AD0CON4	XXXX 00XXb
000393h	A/D0制御レジスタ5	AD0CON5	00h
000394h	A/D0制御レジスタ2	AD0CON2	X00X X000b
000395h	A/D0制御レジスタ3	AD0CON3	XXXX X000b
000396h	A/D0制御レジスタ0	AD0CON0	00h
000397h	A/D0制御レジスタ1	AD0CON1	00h
000398h	D/Aレジスタ0	DA0	XXh
000399h			
00039Ah	D/Aレジスタ1	DA1	XXh
00039Bh			
00039Ch	D/A制御レジスタ	DACON	XXXX XX00b
00039Dh			
00039Eh			
00039Fh			
0003A0h			
0003A1h			
0003A2h			
0003A3h			
0003A4h			
0003A5h			
0003A6h			
0003A7h			
0003A8h			
0003A9h			
0003AAh			
0003ABh			
0003ACh			
0003ADh			
0003AEh			
0003AFh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.16 SFR一覧(16)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0003B0h			
0003B1h			
0003B2h			
0003B3h			
0003B4h			
0003B5h			
0003B6h			
0003B7h			
0003B8h			
0003B9h			
0003BAh			
0003BBh			
0003BCh			
0003BDh			
0003BEh			
0003BFh			
0003C0h	ポートP0レジスタ	P0	XXh
0003C1h	ポートP1レジスタ	P1	XXh
0003C2h	ポートP0方向レジスタ	PD0	0000 0000b
0003C3h	ポートP1方向レジスタ	PD1	0000 0000b
0003C4h	ポートP2レジスタ	P2	XXh
0003C5h	ポートP3レジスタ	P3	XXh
0003C6h	ポートP2方向レジスタ	PD2	0000 0000b
0003C7h	ポートP3方向レジスタ	PD3	0000 0000b
0003C8h	ポートP4レジスタ	P4	XXh
0003C9h	ポートP5レジスタ	P5	XXh
0003CAh	ポートP4方向レジスタ	PD4	0000 0000b
0003CBh	ポートP5方向レジスタ	PD5	0000 0000b
0003CCh	ポートP6レジスタ	P6	XXh
0003CDh	ポートP7レジスタ	P7	XXh
0003CEh	ポートP6方向レジスタ	PD6	0000 0000b
0003CFh	ポートP7方向レジスタ	PD7	0000 0000b
0003D0h	ポートP8レジスタ	P8	XXh
0003D1h	ポートP9レジスタ	P9	XXh
0003D2h	ポートP8方向レジスタ	PD8	00X0 0000b
0003D3h	ポートP9方向レジスタ	PD9	0000 0X0Xb
0003D4h	ポートP10レジスタ	P10	XXh
0003D5h			
0003D6h	ポートP10方向レジスタ	PD10	0000 0000b
0003D7h			
0003D8h			
0003D9h			
0003DAh			
0003DBh			
0003DCh			
0003DDh			
0003DEh			
0003DFh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.17 SFR一覧(17)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0003E0h			
0003E1h			
0003E2h			
0003E3h			
0003E4h			
0003E5h			
0003E6h			
0003E7h			
0003E8h			
0003E9h			
0003EAh			
0003EBh			
0003ECh			
0003EDh			
0003EEh			
0003EFh			
0003F0h	プルアップ制御レジスタ 0	PUR0	0000 0000b
0003F1h	プルアップ制御レジスタ 1	PUR1	XXXX 0000b
0003F2h	プルアップ制御レジスタ 2	PUR2	0000 0000b
0003F3h	プルアップ制御レジスタ 3	PUR3	XXXX XX00b
0003F4h			
0003F5h			
0003F6h			
0003F7h			
0003F8h			
0003F9h			
0003FAh			
0003FBh			
0003FCh			
0003FDh			
0003FEh			
0003FFh	ポート制御レジスタ	PCR	XXXX XXX0b

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.18 SFR一覧(18)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
040000h	フラッシュメモリ制御レジスタ0	FMR0	0X01 XX00b
040001h	フラッシュメモリステータスレジスタ0	FMSR0	1000 0000b
040002h			
040003h			
040004h			
040005h			
040006h			
040007h			
040008h	フラッシュレジスタプロテクト解除レジスタ0	FPR0	00h
040009h	フラッシュメモリ制御レジスタ1	FMR1	0000 0010b
04000Ah	ブロックプロテクトビットモニタレジスタ0	FBPM0	X?X? ????b (注1)
04000Bh	ブロックプロテクトビットモニタレジスタ1	FBPM1	XXX? ?XXXb (注1)
04000Ch			
04000Dh			
04000Eh			
04000Fh			
040010h			
040011h			
040012h			
040013h			
040014h			
040015h			
040016h			
040017h			
040018h			
040019h			
04001Ah			
04001Bh			
04001Ch			
04001Dh			
04001Eh			
04001Fh			
040020h	PLL制御レジスタ0	PLC0	0000 0001b
040021h	PLL制御レジスタ1	PLC1	0001 1111b
040022h			
040023h			
040024h	PLLステータスレジスタ	PLS	1XXX XX00b
040025h			
040026h			
040027h			
040028h			
040029h			
04002Ah			
04002Bh			
04002Ch			
04002Dh			
04002Eh			
04002Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

注1. フラッシュメモリの各ブロックのプロテクトビットの状態が反映されます。

表 4.19 SFR一覧(19)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
040030h~ 04003Fh			
040040h			
040041h			
040042h			
040043h			
040044h	プロセッサモードレジスタ0	PM0	1000 0000b
040045h			
040046h	システムクロック制御レジスタ0	CM0	0000 1000b
040047h	システムクロック制御レジスタ1	CM1	0010 0000b
040048h	プロセッサモードレジスタ3	PM3	00h
040049h			
04004Ah	プロテクトレジスタ	PRCR	XXXX X000b
04004Bh			
04004Ch	プロテクトレジスタ3	PRCR3	0000 0000b
04004Dh	発振停止検出レジスタ	CM2	00h
04004Eh			
04004Fh			
040050h			
040051h			
040052h			
040053h	プロセッサモードレジスタ2	PM2	00h
040054h			
040055h			
040056h			
040057h			
040058h			
040059h			
04005Ah	低速モードクロック制御レジスタ	CM3	XXXX XX00b
04005Bh			
04005Ch			
04005Dh			
04005Eh			
04005Fh			
040060h	電圧レギュレータ制御レジスタ	VRCR	0000 0000b
040061h			
040062h	電圧低下検出回路制御レジスタ	LVDC	0000 XX00b
040063h			
040064h	検出電圧設定レジスタ	DVCR	0000 XXXXb
040065h			
040066h			
040067h			
040068h~ 040093h			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.20 SFR一覧(20)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
040094h			
040095h			
040096h			
040097h	三相出力バッファ制御レジスタ	IOBC	0XXX XX0Xb
040098h	入力機能選択レジスタ0	IFS0	X0X0 X000b
040099h	入力機能選択レジスタ1	IFS1	XXXX X0X0b
04009Ah	入力機能選択レジスタ2	IFS2	0000 0000b
04009Bh			
04009Ch			
04009Dh	入力機能選択レジスタ5	IFS5	XXX0 X0X0b
04009Eh	入力機能選択レジスタ6	IFS6	XXXX 0000b
04009Fh			
0400A0h	ポートP0_0機能選択レジスタ	P0_0S	0XXX X000b
0400A1h	ポートP1_0機能選択レジスタ	P1_0S	XXXX X000b
0400A2h	ポートP0_1機能選択レジスタ	P0_1S	0XXX X000b
0400A3h	ポートP1_1機能選択レジスタ	P1_1S	XXXX X000b
0400A4h	ポートP0_2機能選択レジスタ	P0_2S	0XXX X000b
0400A5h	ポートP1_2機能選択レジスタ	P1_2S	XXXX X000b
0400A6h	ポートP0_3機能選択レジスタ	P0_3S	0XXX X000b
0400A7h	ポートP1_3機能選択レジスタ	P1_3S	XXXX X000b
0400A8h	ポートP0_4機能選択レジスタ	P0_4S	0XXX X000b
0400A9h	ポートP1_4機能選択レジスタ	P1_4S	XXXX X000b
0400AAh	ポートP0_5機能選択レジスタ	P0_5S	0XXX X000b
0400ABh	ポートP1_5機能選択レジスタ	P1_5S	XXXX X000b
0400ACh	ポートP0_6機能選択レジスタ	P0_6S	0XXX X000b
0400ADh	ポートP1_6機能選択レジスタ	P1_6S	XXXX X000b
0400AEh	ポートP0_7機能選択レジスタ	P0_7S	0XXX X000b
0400AFh	ポートP1_7機能選択レジスタ	P1_7S	XXXX X000b
0400B0h	ポートP2_0機能選択レジスタ	P2_0S	0XXX X000b
0400B1h	ポートP3_0機能選択レジスタ	P3_0S	XXXX X000b
0400B2h	ポートP2_1機能選択レジスタ	P2_1S	0XXX X000b
0400B3h	ポートP3_1機能選択レジスタ	P3_1S	XXXX X000b
0400B4h	ポートP2_2機能選択レジスタ	P2_2S	0XXX X000b
0400B5h	ポートP3_2機能選択レジスタ	P3_2S	XXXX X000b
0400B6h	ポートP2_3機能選択レジスタ	P2_3S	0XXX X000b
0400B7h	ポートP3_3機能選択レジスタ	P3_3S	XXXX X000b
0400B8h	ポートP2_4機能選択レジスタ	P2_4S	0XXX X000b
0400B9h	ポートP3_4機能選択レジスタ	P3_4S	XXXX X000b
0400BAh	ポートP2_5機能選択レジスタ	P2_5S	0XXX X000b
0400BBh	ポートP3_5機能選択レジスタ	P3_5S	XXXX X000b
0400BCh	ポートP2_6機能選択レジスタ	P2_6S	0XXX X000b
0400BDh	ポートP3_6機能選択レジスタ	P3_6S	XXXX X000b
0400BEh	ポートP2_7機能選択レジスタ	P2_7S	0XXX X000b
0400BFh	ポートP3_7機能選択レジスタ	P3_7S	XXXX X000b

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.21 SFR一覧(21)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0400C0h	ポートP4_0機能選択レジスタ	P4_0S	XXXX X000b
0400C1h	ポートP5_0機能選択レジスタ	P5_0S	XXXX X000b
0400C2h	ポートP4_1機能選択レジスタ	P4_1S	XXXX X000b
0400C3h	ポートP5_1機能選択レジスタ	P5_1S	XXXX X000b
0400C4h	ポートP4_2機能選択レジスタ	P4_2S	XXXX X000b
0400C5h	ポートP5_2機能選択レジスタ	P5_2S	XXXX X000b
0400C6h	ポートP4_3機能選択レジスタ	P4_3S	XXXX X000b
0400C7h	ポートP5_3機能選択レジスタ	P5_3S	XXXX X000b
0400C8h	ポートP4_4機能選択レジスタ	P4_4S	XXXX X000b
0400C9h	ポートP5_4機能選択レジスタ	P5_4S	XXXX X000b
0400CAh	ポートP4_5機能選択レジスタ	P4_5S	XXXX X000b
0400CBh	ポートP5_5機能選択レジスタ	P5_5S	XXXX X000b
0400CCh	ポートP4_6機能選択レジスタ	P4_6S	XXXX X000b
0400CDh	ポートP5_6機能選択レジスタ	P5_6S	XXXX X000b
0400CEh	ポートP4_7機能選択レジスタ	P4_7S	XXXX X000b
0400CFh	ポートP5_7機能選択レジスタ	P5_7S	XXXX X000b
0400D0h	ポートP6_0機能選択レジスタ	P6_0S	XXXX X000b
0400D1h	ポートP7_0機能選択レジスタ	P7_0S	XXXX X000b
0400D2h	ポートP6_1機能選択レジスタ	P6_1S	XXXX X000b
0400D3h	ポートP7_1機能選択レジスタ	P7_1S	XXXX X000b
0400D4h	ポートP6_2機能選択レジスタ	P6_2S	XXXX X000b
0400D5h	ポートP7_2機能選択レジスタ	P7_2S	XXXX X000b
0400D6h	ポートP6_3機能選択レジスタ	P6_3S	XXXX X000b
0400D7h	ポートP7_3機能選択レジスタ	P7_3S	XXXX X000b
0400D8h	ポートP6_4機能選択レジスタ	P6_4S	XXXX X000b
0400D9h	ポートP7_4機能選択レジスタ	P7_4S	XXXX X000b
0400DAh	ポートP6_5機能選択レジスタ	P6_5S	XXXX X000b
0400DBh	ポートP7_5機能選択レジスタ	P7_5S	XXXX X000b
0400DCh	ポートP6_6機能選択レジスタ	P6_6S	XXXX X000b
0400DDh	ポートP7_6機能選択レジスタ	P7_6S	XXXX X000b
0400DEh	ポートP6_7機能選択レジスタ	P6_7S	XXXX X000b
0400DFh	ポートP7_7機能選択レジスタ	P7_7S	XXXX X000b
0400E0h	ポートP8_0機能選択レジスタ	P8_0S	XXXX X000b
0400E1h			
0400E2h	ポートP8_1機能選択レジスタ	P8_1S	XXXX X000b
0400E3h			
0400E4h	ポートP8_2機能選択レジスタ	P8_2S	XXXX X000b
0400E5h			
0400E6h	ポートP8_3機能選択レジスタ	P8_3S	XXXX X000b
0400E7h	ポートP9_3機能選択レジスタ	P9_3S	0XXX X000b
0400E8h	ポートP8_4機能選択レジスタ	P8_4S	XXXX X000b
0400E9h	ポートP9_4機能選択レジスタ	P9_4S	0XXX X000b
0400EAh			
0400EBh	ポートP9_5機能選択レジスタ	P9_5S	0XXX X000b
0400ECh	ポートP8_6機能選択レジスタ	P8_6S	XXXX X000b
0400EDh	ポートP9_6機能選択レジスタ	P9_6S	0XXX X000b
0400EEh	ポートP8_7機能選択レジスタ	P8_7S	XXXX X000b
0400EFh	ポートP9_7機能選択レジスタ	P9_7S	XXXX X000b

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.22 SFR一覧(22)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
0400F0h	ポートP10_0機能選択レジスタ	P10_0S	0XXX X000b
0400F1h			
0400F2h	ポートP10_1機能選択レジスタ	P10_1S	0XXX X000b
0400F3h			
0400F4h	ポートP10_2機能選択レジスタ	P10_2S	0XXX X000b
0400F5h			
0400F6h	ポートP10_3機能選択レジスタ	P10_3S	0XXX X000b
0400F7h			
0400F8h	ポートP10_4機能選択レジスタ	P10_4S	0XXX X000b
0400F9h			
0400FAh	ポートP10_5機能選択レジスタ	P10_5S	0XXX X000b
0400FBh			
0400FCh	ポートP10_6機能選択レジスタ	P10_6S	0XXX X000b
0400FDh			
0400FEh	ポートP10_7機能選択レジスタ	P10_7S	0XXX X000b
0400FFh			
040100h			
040101h			
040102h			
040103h			
040104h			
040105h			
040106h			
040107h			
040108h			
040109h			
04010Ah			
04010Bh			
04010Ch			
04010Dh			
04010Eh			
04010Fh			
040110h			
040111h			
040112h			
040113h			
040114h			
040115h			
040116h			
040117h			
040118h			
040119h			
04011Ah			
04011Bh			
04011Ch			
04011Dh			
04011Eh			
04011Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.23 SFR一覧(23)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
040120h~ 04403Fh			
044040h			
044041h			
044042h			
044043h			
044044h			
044045h			
044046h			
044047h			
044048h			
044049h			
04404Ah			
04404Bh			
04404Ch	プロテクトレジスタ4	PRCR4	0000 0000b
04404Dh	ウォッチドッグタイマクロック制御レジスタ	WDK	0000 0000b
04404Eh	ウォッチドッグタイマスタートレジスタ	WDTS	XXXX XXXXb
04404Fh	ウォッチドッグタイマ制御レジスタ	WDC	000X XXXXb
044050h			
044051h			
044052h			
044053h			
044054h			
044055h			
044056h			
044057h			
044058h			
044059h			
04405Ah			
04405Bh			
04405Ch			
04405Dh			
04405Eh			
04405Fh	プロテクトレジスタ2	PRCR2	0XXX XXXXb

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.24 SFR一覧(24)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
044060h			
044061h			
044062h			
044063h			
044064h			
044065h			
044066h			
044067h			
044068h			
044069h			
04406Ah			
04406Bh			
04406Ch			
04406Dh			
04406Eh			
04406Fh	外部割り込み要因選択レジスタ0	IFSR0	0000 0000b
044070h	DMA0起動要因選択レジスタ2	DM0SL2	XX00 0000b
044071h	DMA1起動要因選択レジスタ2	DM1SL2	XX00 0000b
044072h	DMA2起動要因選択レジスタ2	DM2SL2	XX00 0000b
044073h	DMA3起動要因選択レジスタ2	DM3SL2	XX00 0000b
044074h			
044075h			
044076h			
044077h			
044078h	DMA0起動要因選択レジスタ	DM0SL	XXX0 0000b
044079h	DMA1起動要因選択レジスタ	DM1SL	XXX0 0000b
04407Ah	DMA2起動要因選択レジスタ	DM2SL	XXX0 0000b
04407Bh	DMA3起動要因選択レジスタ	DM3SL	XXX0 0000b
04407Ch			
04407Dh	復帰用割り込み優先レベル設定レジスタ2	RIPL2	XX0X 0000b
04407Eh			
04407Fh	復帰用割り込み優先レベル設定レジスタ1	RIPL1	XX0X 0000b
044080h	外部割り込み入力フィルタ選択レジスタ0	INTF0	0000 0000b
044081h			
044082h	外部割り込み入力フィルタ選択レジスタ1	INTF1	0000 0000b
044083h			
044084h			
044085h			
044086h			
044087h			
044088h			
044089h			
04408Ah			
04408Bh			
04408Ch			
04408Dh			
04408Eh			
04408Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.25 SFR一覧(25)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
044090h~ 044DFFh			
044E00h	LINチャネルウィンドウ選択/入力信号“L”検出ステータスレジスタ	LCW	0000 0000b
044E01h	LIN ボーレートジェネレータ制御レジスタ	LBRG	0000 0000b
044E02h	LINボーレートプリスケーラ0	LBRP0	00h
044E03h	LINボーレートプリスケーラ1	LBRP1	00h
044E04h	LINモードレジスタ0	LMD0	0000 0000b
044E05h	LINモードレジスタ1	LMD1	00h
044E06h	LINウェイクアップ設定レジスタ	LWUP	00h
044E07h			
044E08h	LINブレークフィールド設定レジスタ	LBRK	0000 0000b
044E09h	LINスペース設定レジスタ	LSPC	0000 0000b
044E0Ah	LIN レスポンスフィールド設定レジスタ	LRFC	0000 0000b
044E0Bh	LIN IDバッファレジスタ	LIDB	00h
044E0Ch	LIN状態制御レジスタ	LSC	0000 0000b
044E0Dh	LIN送信制御レジスタ	LTC	0000 0000b
044E0Eh	LINステータスレジスタ	LST	0000 0000b
044E0Fh	LINエラーステータスレジスタ	LEST	0000 0000b
044E10h	LINデータ1バッファレジスタ	LDB1	00h
044E11h	LINデータ2バッファレジスタ	LDB2	00h
044E12h	LINデータ3バッファレジスタ	LDB3	00h
044E13h	LINデータ4バッファレジスタ	LDB4	00h
044E14h	LINデータ5バッファレジスタ	LDB5	00h
044E15h	LINデータ6バッファレジスタ	LDB6	00h
044E16h	LINデータ7バッファレジスタ	LDB7	00h
044E17h	LINデータ8バッファレジスタ	LDB8	00h
044E18h			
044E19h			
044E1Ah			
044E1Bh			
044E1Ch			
044E1Dh			
044E1Eh			
044E1Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.26 SFR一覧(26)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
044E20h~ 044EFFh			
044F00h			
044F01h			
044F02h			
044F03h			
044F04h			
044F05h			
044F06h	SS0受信データレジスタ	SS0RDR	FFh
044F07h	SS0受信データレジスタ(上位8ビット)	SS0RDR(H)	FFh
044F08h	SS0制御レジスタH	SS0CRH	00h
044F09h	SS0制御レジスタL	SS0CRL	0111 1101b
044F0Ah	SS0モードレジスタ	SS0MR	0001 0000b
044F0Bh	SS0許可レジスタ	SS0ER	00h
044F0Ch	SS0ステータスレジスタ	SS0SR	00h
044F0Dh	SS0モードレジスタ2	SS0MR2	00h
044F0Eh	SS0送信データレジスタ	SS0TDR	FFh
044F0Fh	SS0送信データレジスタ(上位8ビット)	SS0TDR(H)	FFh
044F10h			
044F11h			
044F12h			
044F13h			
044F14h			
044F15h			
044F16h			
044F17h			
044F18h			
044F19h			
044F1Ah			
044F1Bh			
044F1Ch			
044F1Dh			
044F1Eh			
044F1Fh			
044F20h			
044F21h			
044F22h			
044F23h			
044F24h			
044F25h			
044F26h			
044F27h			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.27 SFR一覧(27)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
044F28h~ 044FDFh			
044FE0h	E2データフラッシュアドレスレジスタ	E2FA	XXXX 0000h
044FE1h			
044FE2h			
044FE3h			
044FE4h			
044FE5h			
044FE6h			
044FE7h			
044FE8h	E2データフラッシュ命令レジスタ	E2FI	XX00h
044FE9h			
044FEAh			
044FEBh			
044FECh	E2データフラッシュデータレジスタ	E2FD	XXXXh
044FEDh			
044FEEh			
044FEFh			
044FF0h	E2データフラッシュモードレジスタ	E2FM	0000 0000b
044FF1h			
044FF2h	E2データフラッシュ制御レジスタ	E2FC	XXXX XXX0b
044FF3h			
044FF4h	E2データフラッシュステータスレジスタ1	E2FS1	XXXX XXX0b
044FF5h			
044FF6h			
044FF7h			
044FF8h			
044FF9h			
044FFAh			
044FFBh			
044FFCh			
044FFDh			
044FFEh			
044FFFh			
045000h			
045001h	E2データフラッシュステータスレジスタ0	E2FS0	XXXX XXXXb
045002h			
045003h			
045004h			
045005h			
045006h			
045007h			
045008h~ 045FFFh			
046000h~ 0467FFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.28 SFR一覧(28)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
046800h~ 047BFFh			
047C00h	CAN0メールボックス0: メッセージ識別子	C0MB0	XXXX XXXXh
047C01h			
047C02h			
047C03h			
047C04h			
047C05h	CAN0メールボックス0: データ長		XXh
047C06h	CAN0メールボックス0: データフィールド		XXXX XXXX XXXX XXXXh
047C07h			
047C08h			
047C09h			
047C0Ah			
047C0Bh			
047C0Ch			
047C0Dh			
047C0Eh	CAN0メールボックス0: タイムスタンプ		XXXXh
047C0Fh			
047C10h	CAN0メールボックス1: メッセージ識別子	C0MB1	XXXX XXXXh
047C11h			
047C12h			
047C13h			
047C14h			
047C15h	CAN0メールボックス1: データ長		XXh
047C16h	CAN0メールボックス1: データフィールド		XXXX XXXX XXXX XXXXh
047C17h			
047C18h			
047C19h			
047C1Ah			
047C1Bh			
047C1Ch			
047C1Dh			
047C1Eh	CAN0メールボックス1: タイムスタンプ		XXXXh
047C1Fh			
047C20h	CAN0メールボックス2: メッセージ識別子	C0MB2	XXXX XXXXh
047C21h			
047C22h			
047C23h			
047C24h			
047C25h	CAN0メールボックス2: データ長		XXh
047C26h	CAN0メールボックス2: データフィールド		XXXX XXXX XXXX XXXXh
047C27h			
047C28h			
047C29h			
047C2Ah			
047C2Bh			
047C2Ch			
047C2Dh			
047C2Eh	CAN0メールボックス2: タイムスタンプ		XXXXh
047C2Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.29 SFR一覧(29)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047C30h	CAN0メールボックス3: メッセージ識別子	C0MB3	XXXX XXXXh
047C31h			
047C32h			
047C33h			
047C34h			
047C35h	CAN0メールボックス3: データ長		XXh
047C36h	CAN0メールボックス3: データフィールド		XXXX XXXX
047C37h			XXXX XXXXh
047C38h			
047C39h			
047C3Ah			
047C3Bh			
047C3Ch			
047C3Dh			
047C3Eh	CAN0メールボックス3: タイムスタンプ		XXXXh
047C3Fh			
047C40h	CAN0メールボックス4: メッセージ識別子	C0MB4	XXXX XXXXh
047C41h			
047C42h			
047C43h			
047C44h			
047C45h	CAN0メールボックス4: データ長		XXh
047C46h	CAN0メールボックス4: データフィールド		XXXX XXXX
047C47h			XXXX XXXXh
047C48h			
047C49h			
047C4Ah			
047C4Bh			
047C4Ch			
047C4Dh			
047C4Eh	CAN0メールボックス4: タイムスタンプ		XXXXh
047C4Fh			
047C50h	CAN0メールボックス5: メッセージ識別子	C0MB5	XXXX XXXXh
047C51h			
047C52h			
047C53h			
047C54h			
047C55h	CAN0メールボックス5: データ長		XXh
047C56h	CAN0メールボックス5: データフィールド		XXXX XXXX
047C57h			XXXX XXXXh
047C58h			
047C59h			
047C5Ah			
047C5Bh			
047C5Ch			
047C5Dh			
047C5Eh	CAN0メールボックス5: タイムスタンプ		XXXXh
047C5Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.30 SFR一覧(30)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047C60h	CAN0メールボックス6: メッセージ識別子	C0MB6	XXXX XXXXh
047C61h			
047C62h			
047C63h			
047C64h			
047C65h	CAN0メールボックス6: データ長		XXh
047C66h	CAN0メールボックス6: データフィールド		XXXX XXXX
047C67h			XXXX XXXXh
047C68h			
047C69h			
047C6Ah			
047C6Bh			
047C6Ch			
047C6Dh			
047C6Eh	CAN0メールボックス6: タイムスタンプ		XXXXh
047C6Fh			
047C70h	CAN0メールボックス7: メッセージ識別子	C0MB7	XXXX XXXXh
047C71h			
047C72h			
047C73h			
047C74h			
047C75h	CAN0メールボックス7: データ長		XXh
047C76h	CAN0メールボックス7: データフィールド		XXXX XXXX
047C77h			XXXX XXXXh
047C78h			
047C79h			
047C7Ah			
047C7Bh			
047C7Ch			
047C7Dh			
047C7Eh	CAN0メールボックス7: タイムスタンプ		XXXXh
047C7Fh			
047C80h	CAN0メールボックス8: メッセージ識別子	C0MB8	XXXX XXXXh
047C81h			
047C82h			
047C83h			
047C84h			
047C85h	CAN0メールボックス8: データ長		XXh
047C86h	CAN0メールボックス8: データフィールド		XXXX XXXX
047C87h			XXXX XXXXh
047C88h			
047C89h			
047C8Ah			
047C8Bh			
047C8Ch			
047C8Dh			
047C8Eh	CAN0メールボックス8: タイムスタンプ		XXXXh
047C8Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.31 SFR一覧(31)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047C90h	CAN0メールボックス9: メッセージ識別子	C0MB9	XXXX XXXXh
047C91h			
047C92h			
047C93h			
047C94h			
047C95h	CAN0メールボックス9: データ長		XXh
047C96h	CAN0メールボックス9: データフィールド		XXXX XXXX
047C97h			XXXX XXXXh
047C98h			
047C99h			
047C9Ah			
047C9Bh			
047C9Ch			
047C9Dh			
047C9Eh	CAN0メールボックス9: タイムスタンプ		XXXXh
047C9Fh			
047CA0h	CAN0メールボックス10: メッセージ識別子	C0MB10	XXXX XXXXh
047CA1h			
047CA2h			
047CA3h			
047CA4h			
047CA5h	CAN0メールボックス10: データ長		XXh
047CA6h	CAN0メールボックス10: データフィールド		XXXX XXXX
047CA7h			XXXX XXXXh
047CA8h			
047CA9h			
047CAAh			
047CABh			
047CACh			
047CADh			
047CAEh	CAN0メールボックス10: タイムスタンプ		XXXXh
047CAFh			
047CB0h	CAN0メールボックス11: メッセージ識別子	C0MB11	XXXX XXXXh
047CB1h			
047CB2h			
047CB3h			
047CB4h			
047CB5h	CAN0メールボックス11: データ長		XXh
047CB6h	CAN0メールボックス11: データフィールド		XXXX XXXX
047CB7h			XXXX XXXXh
047CB8h			
047CB9h			
047CBAh			
047CBBh			
047CBCh			
047CBDh			
047CBEh	CAN0メールボックス11: タイムスタンプ		XXXXh
047CBFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.32 SFR一覧(32)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047CC0h	CAN0メールボックス12: メッセージ識別子	C0MB12	XXXX XXXXh
047CC1h			
047CC2h			
047CC3h			
047CC4h			
047CC5h	CAN0メールボックス12: データ長		XXh
047CC6h	CAN0メールボックス12: データフィールド		XXXX XXXX
047CC7h			XXXX XXXXh
047CC8h			
047CC9h			
047CCAh			
047CCBh			
047CCCh			
047CCDh			
047CCEh	CAN0メールボックス12: タイムスタンプ		XXXXh
047CCFh			
047CD0h	CAN0メールボックス13: メッセージ識別子	C0MB13	XXXX XXXXh
047CD1h			
047CD2h			
047CD3h			
047CD4h			
047CD5h	CAN0メールボックス13: データ長		XXh
047CD6h	CAN0メールボックス13: データフィールド		XXXX XXXX
047CD7h			XXXX XXXXh
047CD8h			
047CD9h			
047CDAh			
047CDBh			
047CDCh			
047CDDh			
047CDEh	CAN0メールボックス13: タイムスタンプ		XXXXh
047CDFh			
047CE0h	CAN0メールボックス14: メッセージ識別子	C0MB14	XXXX XXXXh
047CE1h			
047CE2h			
047CE3h			
047CE4h			
047CE5h	CAN0メールボックス14: データ長		XXh
047CE6h	CAN0メールボックス14: データフィールド		XXXX XXXX
047CE7h			XXXX XXXXh
047CE8h			
047CE9h			
047CEAh			
047CEBh			
047CECh			
047CEDh			
047CEEh	CAN0メールボックス14: タイムスタンプ		XXXXh
047CEFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.33 SFR一覧(33)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047CF0h	CAN0メールボックス15: メッセージ識別子	C0MB15	XXXX XXXXh
047CF1h			
047CF2h			
047CF3h			
047CF4h			
047CF5h	CAN0メールボックス15: データ長		XXh
047CF6h	CAN0メールボックス15: データフィールド		XXXX XXXX
047CF7h			XXXX XXXXh
047CF8h			
047CF9h			
047CFAh			
047CFBh			
047CFCh			
047CFDh			
047CFEh	CAN0メールボックス15: タイムスタンプ		XXXXh
047CFFh			
047D00h	CAN0メールボックス16: メッセージ識別子	C0MB16	XXXX XXXXh
047D01h			
047D02h			
047D03h			
047D04h			
047D05h	CAN0メールボックス16: データ長		XXh
047D06h	CAN0メールボックス16: データフィールド		XXXX XXXX
047D07h			XXXX XXXXh
047D08h			
047D09h			
047D0Ah			
047D0Bh			
047D0Ch			
047D0Dh			
047D0Eh	CAN0メールボックス16: タイムスタンプ		XXXXh
047D0Fh			
047D10h	CAN0メールボックス17: メッセージ識別子	C0MB17	XXXX XXXXh
047D11h			
047D12h			
047D13h			
047D14h			
047D15h	CAN0メールボックス17: データ長		XXh
047D16h	CAN0メールボックス17: データフィールド		XXXX XXXX
047D17h			XXXX XXXXh
047D18h			
047D19h			
047D1Ah			
047D1Bh			
047D1Ch			
047D1Dh			
047D1Eh	CAN0メールボックス17: タイムスタンプ		XXXXh
047D1Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.34 SFR一覧(34)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047D20h	CAN0メールボックス18: メッセージ識別子	C0MB18	XXXX XXXXh
047D21h			
047D22h			
047D23h			
047D24h			
047D25h	CAN0メールボックス18: データ長		XXh
047D26h	CAN0メールボックス18: データフィールド		XXXX XXXX
047D27h			XXXX XXXXh
047D28h			
047D29h			
047D2Ah			
047D2Bh			
047D2Ch			
047D2Dh			
047D2Eh	CAN0メールボックス18: タイムスタンプ		XXXXh
047D2Fh			
047D30h	CAN0メールボックス19: メッセージ識別子	C0MB19	XXXX XXXXh
047D31h			
047D32h			
047D33h			
047D34h			
047D35h	CAN0メールボックス19: データ長		XXh
047D36h	CAN0メールボックス19: データフィールド		XXXX XXXX
047D37h			XXXX XXXXh
047D38h			
047D39h			
047D3Ah			
047D3Bh			
047D3Ch			
047D3Dh			
047D3Eh	CAN0メールボックス19: タイムスタンプ		XXXXh
047D3Fh			
047D40h	CAN0メールボックス20: メッセージ識別子	C0MB20	XXXX XXXXh
047D41h			
047D42h			
047D43h			
047D44h			
047D45h	CAN0メールボックス20: データ長		XXh
047D46h	CAN0メールボックス20: データフィールド		XXXX XXXX
047D47h			XXXX XXXXh
047D48h			
047D49h			
047D4Ah			
047D4Bh			
047D4Ch			
047D4Dh			
047D4Eh	CAN0メールボックス20: タイムスタンプ		XXXXh
047D4Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.35 SFR一覧(35)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047D50h	CAN0メールボックス21: メッセージ識別子	C0MB21	XXXX XXXXh
047D51h			
047D52h			
047D53h			
047D54h			
047D55h	CAN0メールボックス21: データ長		XXh
047D56h	CAN0メールボックス21: データフィールド		XXXX XXXX
047D57h			XXXX XXXXh
047D58h			
047D59h			
047D5Ah			
047D5Bh			
047D5Ch			
047D5Dh			
047D5Eh	CAN0メールボックス21: タイムスタンプ		XXXXh
047D5Fh			
047D60h	CAN0メールボックス22: メッセージ識別子	C0MB22	XXXX XXXXh
047D61h			
047D62h			
047D63h			
047D64h			
047D65h	CAN0メールボックス22: データ長		XXh
047D66h	CAN0メールボックス22: データフィールド		XXXX XXXX
047D67h			XXXX XXXXh
047D68h			
047D69h			
047D6Ah			
047D6Bh			
047D6Ch			
047D6Dh			
047D6Eh	CAN0メールボックス22: タイムスタンプ		XXXXh
047D6Fh			
047D70h	CAN0メールボックス23: メッセージ識別子	C0MB23	XXXX XXXXh
047D71h			
047D72h			
047D73h			
047D74h			
047D75h	CAN0メールボックス23: データ長		XXh
047D76h	CAN0メールボックス23: データフィールド		XXXX XXXX
047D77h			XXXX XXXXh
047D78h			
047D79h			
047D7Ah			
047D7Bh			
047D7Ch			
047D7Dh			
047D7Eh	CAN0メールボックス23: タイムスタンプ		XXXXh
047D7Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.36 SFR一覧(36)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047D80h	CAN0メールボックス24: メッセージ識別子	C0MB24	XXXX XXXXh
047D81h			
047D82h			
047D83h			
047D84h			
047D85h	CAN0メールボックス24: データ長		XXh
047D86h	CAN0メールボックス24: データフィールド		XXXX XXXX
047D87h			XXXX XXXXh
047D88h			
047D89h			
047D8Ah			
047D8Bh			
047D8Ch			
047D8Dh			
047D8Eh	CAN0メールボックス24: タイムスタンプ		XXXXh
047D8Fh			
047D90h	CAN0メールボックス25: メッセージ識別子	C0MB25	XXXX XXXXh
047D91h			
047D92h			
047D93h			
047D94h			
047D95h	CAN0メールボックス25: データ長		XXh
047D96h	CAN0メールボックス25: データフィールド		XXXX XXXX
047D97h			XXXX XXXXh
047D98h			
047D99h			
047D9Ah			
047D9Bh			
047D9Ch			
047D9Dh			
047D9Eh	CAN0メールボックス25: タイムスタンプ		XXXXh
047D9Fh			
047DA0h	CAN0メールボックス26: メッセージ識別子	C0MB26	XXXX XXXXh
047DA1h			
047DA2h			
047DA3h			
047DA4h			
047DA5h	CAN0メールボックス26: データ長		XXh
047DA6h	CAN0メールボックス26: データフィールド		XXXX XXXX
047DA7h			XXXX XXXXh
047DA8h			
047DA9h			
047DAAh			
047DABh			
047DACh			
047DADh			
047DAEh	CAN0メールボックス26: タイムスタンプ		XXXXh
047DAFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.37 SFR一覧(37)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047DB0h	CAN0メールボックス27: メッセージ識別子	C0MB27	XXXX XXXXh
047DB1h			
047DB2h			
047DB3h			
047DB4h			
047DB5h	CAN0メールボックス27: データ長		XXh
047DB6h	CAN0メールボックス27: データフィールド		XXXX XXXX
047DB7h			XXXX XXXXh
047DB8h			
047DB9h			
047DBAh			
047DBBh			
047DBCh			
047DBDh			
047DBEh	CAN0メールボックス27: タイムスタンプ		XXXXh
047DBFh			
047DC0h	CAN0メールボックス28: メッセージ識別子	C0MB28	XXXX XXXXh
047DC1h			
047DC2h			
047DC3h			
047DC4h			
047DC5h	CAN0メールボックス28: データ長		XXh
047DC6h	CAN0メールボックス28: データフィールド		XXXX XXXX
047DC7h			XXXX XXXXh
047DC8h			
047DC9h			
047DCAh			
047DCBh			
047DCCh			
047DCDh			
047DCEh	CAN0メールボックス28: タイムスタンプ		XXXXh
047DCFh			
047DD0h	CAN0メールボックス29: メッセージ識別子	C0MB29	XXXX XXXXh
047DD1h			
047DD2h			
047DD3h			
047DD4h			
047DD5h	CAN0メールボックス29: データ長		XXh
047DD6h	CAN0メールボックス29: データフィールド		XXXX XXXX
047DD7h			XXXX XXXXh
047DD8h			
047DD9h			
047DDAh			
047DDBh			
047DDCh			
047DDDh			
047DDEh	CAN0メールボックス29: タイムスタンプ		XXXXh
047DDFh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.38 SFR一覧(38)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047DE0h	CAN0メールボックス30: メッセージ識別子	C0MB30	XXXX XXXXh
047DE1h			
047DE2h			
047DE3h			
047DE4h			
047DE5h	CAN0メールボックス30: データ長		XXh
047DE6h	CAN0メールボックス30: データフィールド		XXXX XXXX
047DE7h			XXXX XXXXh
047DE8h			
047DE9h			
047DEAh			
047DEBh			
047DECh			
047DEDh			
047DEEh	CAN0メールボックス30: タイムスタンプ		XXXXh
047DEFh			
047DF0h	CAN0メールボックス31: メッセージ識別子	C0MB31	XXXX XXXXh
047DF1h			
047DF2h			
047DF3h			
047DF4h			
047DF5h	CAN0メールボックス31: データ長		XXh
047DF6h	CAN0メールボックス31: データフィールド		XXXX XXXX
047DF7h			XXXX XXXXh
047DF8h			
047DF9h			
047DFAh			
047DFBh			
047DFCh			
047DFDh			
047DFEh	CAN0メールボックス31: タイムスタンプ		XXXXh
047DFFh			
047E00h	CAN0マスクレジスタ0	C0MKR0	XXXX XXXXh
047E01h			
047E02h			
047E03h			
047E04h	CAN0マスクレジスタ1	C0MKR1	XXXX XXXXh
047E05h			
047E06h			
047E07h			
047E08h	CAN0マスクレジスタ2	C0MKR2	XXXX XXXXh
047E09h			
047E0Ah			
047E0Bh			
047E0Ch	CAN0マスクレジスタ3	C0MKR3	XXXX XXXXh
047E0Dh			
047E0Eh			
047E0Fh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.39 SFR一覧(39)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047E10h	CAN0マスクレジスタ4	C0MKR4	XXXX XXXXh
047E11h			
047E12h			
047E13h			
047E14h	CAN0マスクレジスタ5	C0MKR5	XXXX XXXXh
047E15h			
047E16h			
047E17h			
047E18h	CAN0マスクレジスタ6	C0MKR6	XXXX XXXXh
047E19h			
047E1Ah			
047E1Bh			
047E1Ch	CAN0マスクレジスタ7	C0MKR7	XXXX XXXXh
047E1Dh			
047E1Eh			
047E1Fh			
047E20h	CAN0FIFO受信ID比較レジスタ0	C0FIDCR0	XXXX XXXXh
047E21h			
047E22h			
047E23h			
047E24h	CAN0FIFO受信ID比較レジスタ1	C0FIDCR1	XXXX XXXXh
047E25h			
047E26h			
047E27h			
047E28h	CAN0マスク無効レジスタ	C0MKIVLR	XXXX XXXXh
047E29h			
047E2Ah			
047E2Bh			
047E2Ch	CAN0メールボックス割り込み許可レジスタ	C0MIER	XXXX XXXXh
047E2Dh			
047E2Eh			
047E2Fh			
047E30h			
047E31h			
047E32h			
047E33h			
047E34h			
047E35h			
047E36h			
047E37h			
047E38h			
047E39h			
047E3Ah			
047E3Bh			
047E3Ch			
047E3Dh			
047E3Eh			
047E3Fh			
047E40h~ 047F1Fh			

X: 不定

空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.40 SFR一覧(40)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047F20h	CAN0メッセージ制御レジスタ0	C0MCTL0	00h
047F21h	CAN0メッセージ制御レジスタ1	C0MCTL1	00h
047F22h	CAN0メッセージ制御レジスタ2	C0MCTL2	00h
047F23h	CAN0メッセージ制御レジスタ3	C0MCTL3	00h
047F24h	CAN0メッセージ制御レジスタ4	C0MCTL4	00h
047F25h	CAN0メッセージ制御レジスタ5	C0MCTL5	00h
047F26h	CAN0メッセージ制御レジスタ6	C0MCTL6	00h
047F27h	CAN0メッセージ制御レジスタ7	C0MCTL7	00h
047F28h	CAN0メッセージ制御レジスタ8	C0MCTL8	00h
047F29h	CAN0メッセージ制御レジスタ9	C0MCTL9	00h
047F2Ah	CAN0メッセージ制御レジスタ10	C0MCTL10	00h
047F2Bh	CAN0メッセージ制御レジスタ11	C0MCTL11	00h
047F2Ch	CAN0メッセージ制御レジスタ12	C0MCTL12	00h
047F2Dh	CAN0メッセージ制御レジスタ13	C0MCTL13	00h
047F2Eh	CAN0メッセージ制御レジスタ14	C0MCTL14	00h
047F2Fh	CAN0メッセージ制御レジスタ15	C0MCTL15	00h
047F30h	CAN0メッセージ制御レジスタ16	C0MCTL16	00h
047F31h	CAN0メッセージ制御レジスタ17	C0MCTL17	00h
047F32h	CAN0メッセージ制御レジスタ18	C0MCTL18	00h
047F33h	CAN0メッセージ制御レジスタ19	C0MCTL19	00h
047F34h	CAN0メッセージ制御レジスタ20	C0MCTL20	00h
047F35h	CAN0メッセージ制御レジスタ21	C0MCTL21	00h
047F36h	CAN0メッセージ制御レジスタ22	C0MCTL22	00h
047F37h	CAN0メッセージ制御レジスタ23	C0MCTL23	00h
047F38h	CAN0メッセージ制御レジスタ24	C0MCTL24	00h
047F39h	CAN0メッセージ制御レジスタ25	C0MCTL25	00h
047F3Ah	CAN0メッセージ制御レジスタ26	C0MCTL26	00h
047F3Bh	CAN0メッセージ制御レジスタ27	C0MCTL27	00h
047F3Ch	CAN0メッセージ制御レジスタ28	C0MCTL28	00h
047F3Dh	CAN0メッセージ制御レジスタ29	C0MCTL29	00h
047F3Eh	CAN0メッセージ制御レジスタ30	C0MCTL30	00h
047F3Fh	CAN0メッセージ制御レジスタ31	C0MCTL31	00h

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

表 4.41 SFR一覧(41)

番地	レジスタ	シンボル	リセット後の値
047F40h	CAN0制御レジスタ	C0CTLR	0000 0101b
047F41h			0000 0000b
047F42h	CAN0ステータスレジスタ	C0STR	0000 0101b
047F43h			0000 0000b
047F44h	CAN0ビットコンフィグレーションレジスタ	C0BCR	00 0000h
047F45h			
047F46h			
047F47h	CAN0クロック選択レジスタ	C0CLKR	000X 0000b
047F48h	CAN0受信FIFO制御レジスタ	C0RFCR	1000 0000b
047F49h	CAN0受信FIFOポインタ制御レジスタ	C0RFPCR	XXh
047F4Ah	CAN0送信FIFO制御レジスタ	C0TFCR	1000 0000b
047F4Bh	CAN0送信FIFOポインタ制御レジスタ	C0TFPCR	XXh
047F4Ch	CAN0エラー割り込み許可レジスタ	C0EIER	00h
047F4Dh	CAN0エラー割り込み要因判定レジスタ	C0EIFR	00h
047F4Eh	CAN0受信エラーカウントレジスタ	C0RECR	00h
047F4Fh	CAN0送信エラーカウントレジスタ	C0TECR	00h
047F50h	CAN0エラーコード格納レジスタ	C0ECSR	00h
047F51h	CAN0チャネルサーチサポートレジスタ	C0CSSR	XXh
047F52h	CAN0メールボックスサーチステータスレジスタ	C0MSSR	1000 0000b
047F53h	CAN0メールボックスサーチモードレジスタ	C0MSMR	0000 0000b
047F54h	CAN0タイムスタンプレジスタ	C0TSR	0000h
047F55h			
047F56h	CAN0アクセプタンスフィルタサポートレジスタ	C0AFSR	XXXXh
047F57h			
047F58h	CAN0テスト制御レジスタ	C0TCR	00h
047F59h			
047F5Ah			
047F5Bh			
047F5Ch			
047F5Dh			
047F5Eh			
047F5Fh			
047F60h~ 047FFFh			
048000h~ 04FFFFh			

X: 不定
空欄はすべて予約領域です。アクセスしないでください。

5. リセット

リセットには、ハードウェアリセット、ソフトウェアリセット、ウォッチドッグタイマリセットがあります。

5.1 ハードウェアリセット

RESET端子によるリセットです。電源電圧が推奨動作条件を満たすとき、RESET端子に“L”を入力すると端子は初期化されます(表 5.1参照)。また、発振回路が初期化され、メインクロックの発振が始まります。RESET端子の入力レベルを“L”から“H”にするとCPUとSFRが初期化され、リセットベクタで示される番地からプログラムを実行します。内部RAMは初期化されません。また、内部RAMに書き込み中にRESET端子が“L”になると、内部RAMは不定となります。

図 5.1にリセット回路の一例を、図 5.2にリセットシーケンスを、表 5.1にRESET端子のレベルが“L”の期間の端子の状態を、図 5.3にリセット後のCPUレジスタの状態を示します。リセット後のSFRの状態は「4. SFR」を参照してください。

A. 電源が安定している場合

(1) RESET端子に“L”を入力する
(2) XIN端子に20サイクル以上のクロックを入力する
(3) RESET端子に“H”を入力する

B. 電源投入時

(1) RESET端子に“L”を入力する
(2) 電源電圧を推奨動作条件を満たす電圧まで上昇させる
(3) 内部電源が安定するまでtd(P-R)待つ
(4) XIN端子に20サイクル以上のクロックを入力する
(5) RESET端子に“H”を入力する

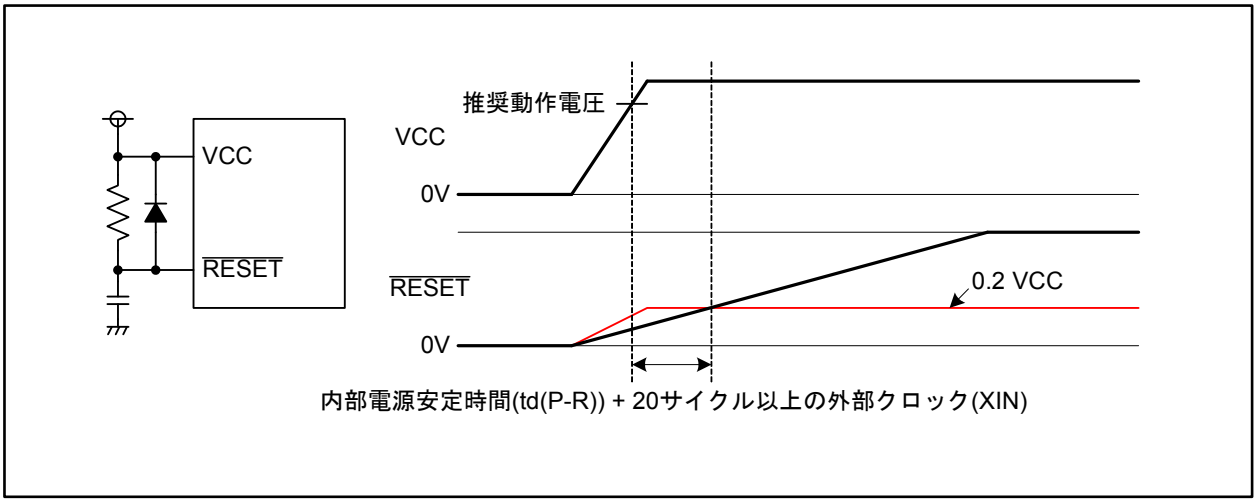


図 5.1　リセット回路の一例

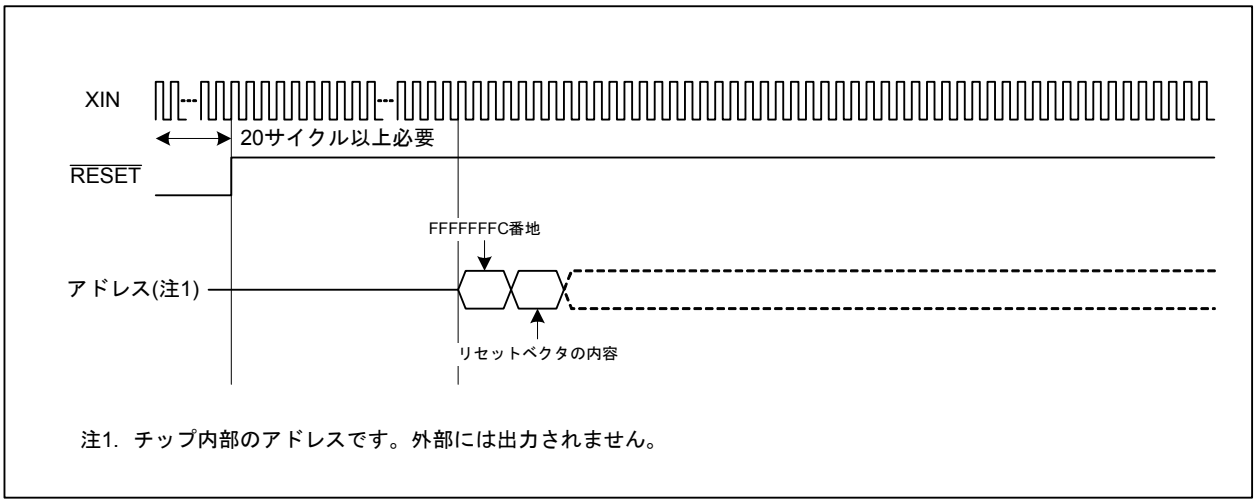


図 5.2　リセットシーケンス

表 5.1　RESET端子のレベルが“L”の期間の端子の状態(注1)

端子名	端子の状態
P0~P10	入力ポート(ハイインピーダンス)

注1.　内部電源電圧が安定するまでは、プルアップ抵抗の有無は不定となります。

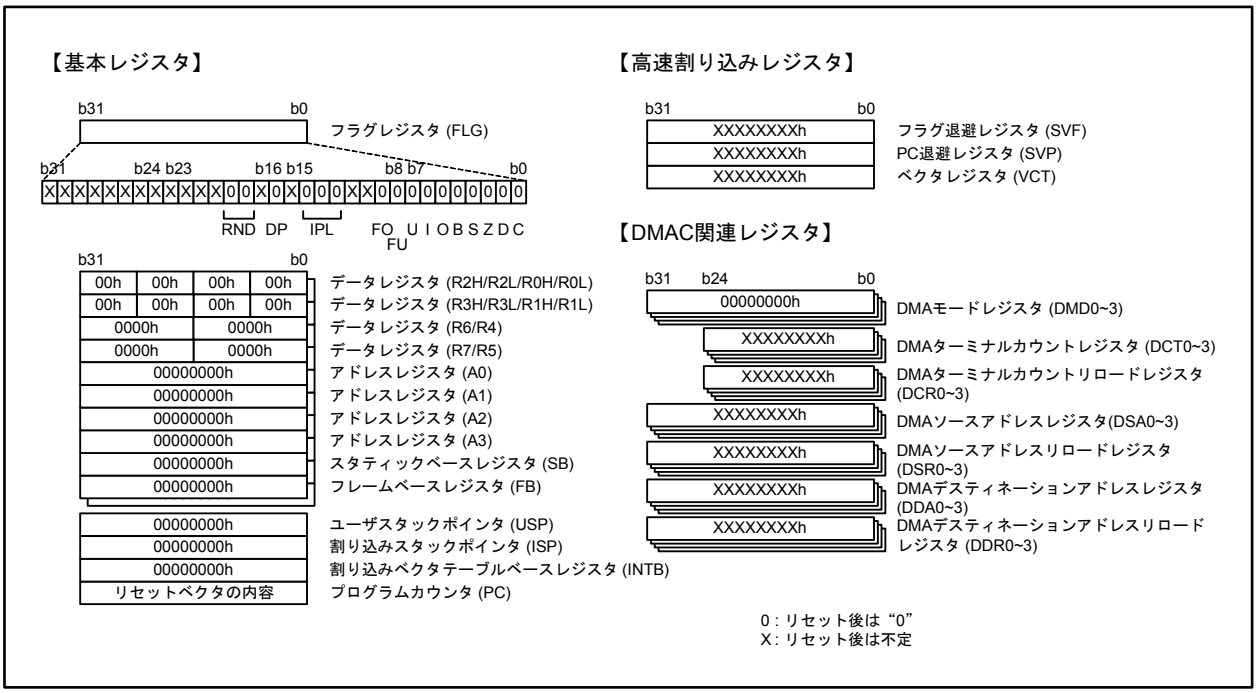


図 5.3　リセット後のCPUレジスタの状態

5.2 ソフトウェアリセット

PM0レジスタのPM03ビットを“1”(マイクロコンピュータをリセット)にするとマイクロコンピュータがリセットされ、CPU、SFR、端子が初期化されます。その後、CPUはリセットベクタで示される番地からプログラムを実行します。図5.4にPM0レジスタを示します。

CPUクロック源にPLLクロックを選択し、メインクロックの発振が十分安定している状態で、PM03ビットを“1”にしてください。

プロセッサモードレジスタ0 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
1	0	0	0		0	0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PM0	40044h番地	1000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b2-b0)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PM03	ソフトウェアリセットビット	このビットを“1”にすると、マイクロコンピュータがリセットされます。読んだ場合、その値は“0”	RW
— (b6-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7)	予約ビット	“1”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。

図5.4　PM0レジスタ

5.3 ウォッチドッグタイマリセット

CM0レジスタのCM06ビットが“1”(ウォッチドッグタイマアンダフロー時リセット)の場合、ウォッチドッグタイマがアンダフローするとマイクロコンピュータがリセットされ、CPU、SFR、端子が初期化されます。その後、CPUはリセットベクタで示される番地からプログラムを実行します。

5.4 リセットベクタ

R32C/100シリーズのリセットベクタは、図5.5のとおり構成されています。

リセットベクタの内容の下位2ビットを“00b”にしたものがプログラムの開始番地になり、下位2ビットがマイクロプロセッサモード時の外部バス幅指定ビットになります。このため、プログラムの開始番地は下位2ビットが“00b”となるように4バイトアライメントに配置する必要があります。

シングルチップモード時は外部バス幅指定ビットを“00b”にしてください。

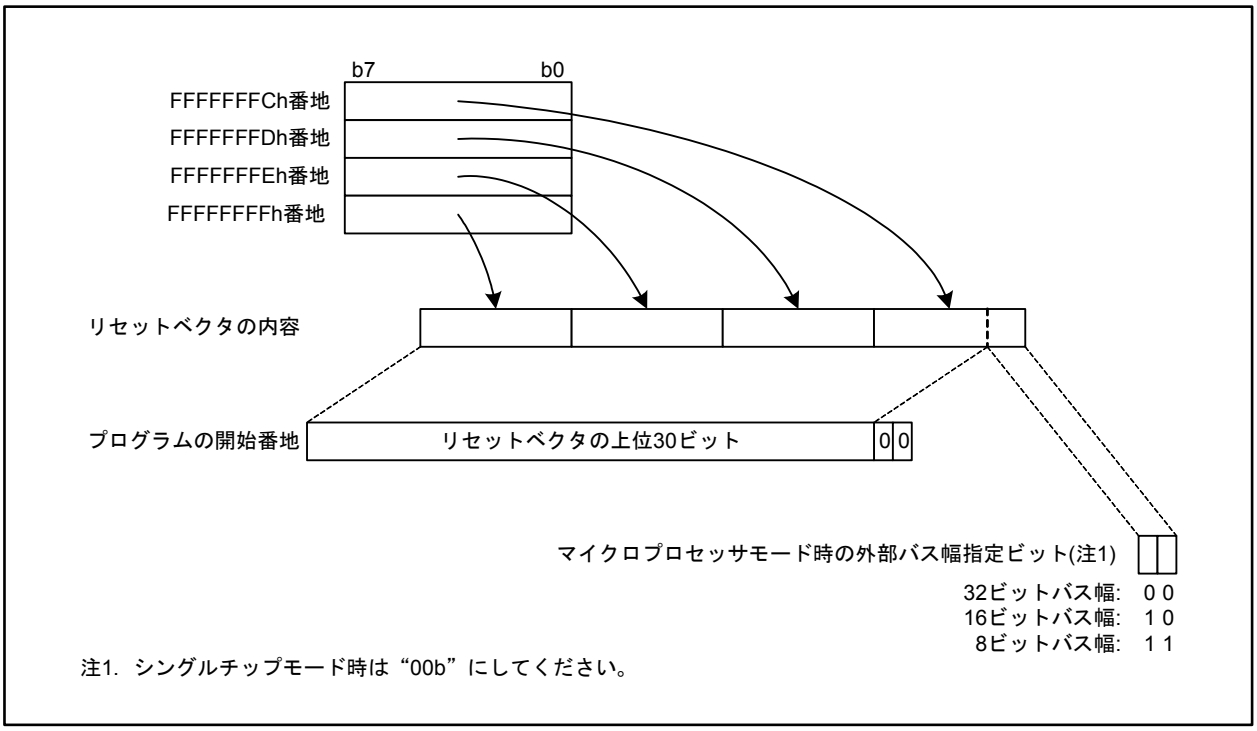


図5.5 リセットベクタの構成

6. パワーマネージメント

6.1 電圧レギュレータ

内部ロジック電圧は内部電圧レギュレータによって、VCC端子からの入力を降圧して生成されます。図 6.1に内部電圧レギュレータのブロック図を、図 6.2に電圧レギュレータ制御レジスタを示します。

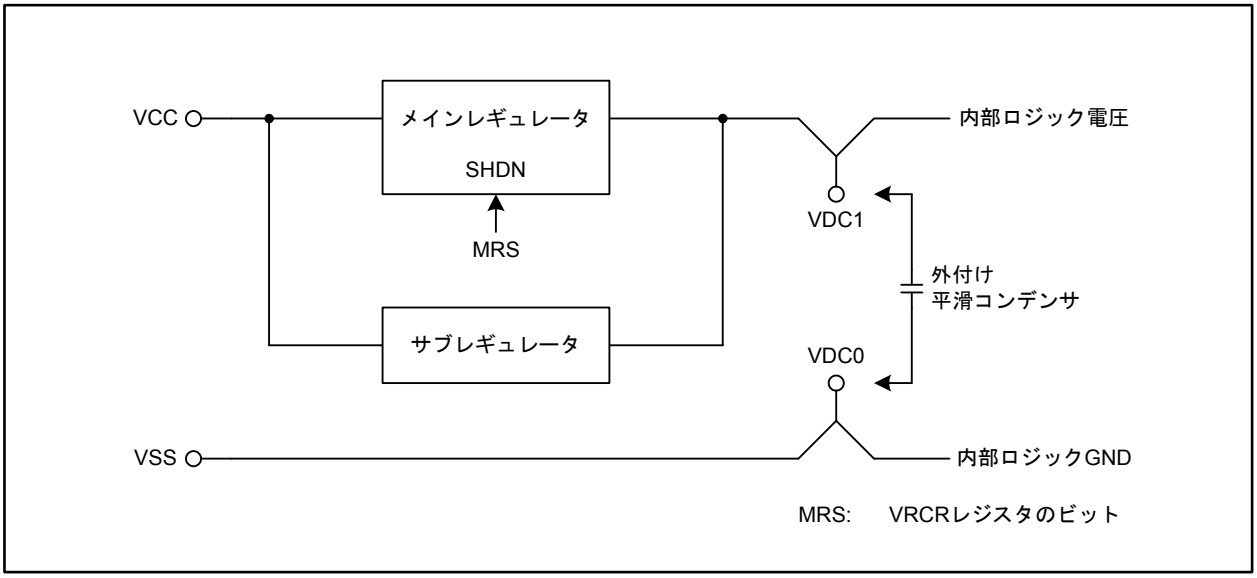
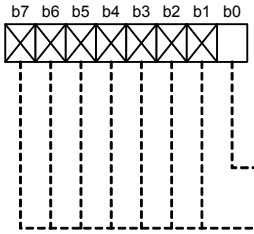


図 6.1 内部電圧レギュレータのブロック図

電圧レギュレータ制御レジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
VRCR	040060h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MRS	メインレギュレータ停止ビット (注2)	0: メインレギュレータ動作 1: メインレギュレータ停止 (注3)	RW
— (b7-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタはPRCR3レジスタのPRC31ビットを“1”(書き換え許可) にした後で書き換えてください。
注2. このビットは、CM0レジスタのCM05ビットが“0”(メインクロック発振)、またはCM1レジスタのCM10ビットが“0”(PLL発振) のときは、“0”になります。
注3. メインレギュレータ停止中は、フラッシュメモリ、E^2データフラッシュの書き換えを行わないでください。

図 6.2 VRCR レジスタ

6.1.1 平滑コンデンサ

内部電圧を安定させるためにチップ外部に平滑コンデンサが必要です。使用するコンデンサは、高周波特性が良く、静電容量温度特性の良いものを選択してください。一般的にはセラミックコンデンサを推奨します。コンデンサの容量は、使用温度、両端子間の直流電圧、経年変化等の条件によって変化します。これらの条件を考慮の上、電気的特性に記載する容量値を満たすようなコンデンサを選択ください。

表 6.1に推奨するコンデンサの一覧を示します。

また、VDC1/VDC0端子と平滑コンデンサの間の配線は、できるだけ太く、短くしてください。

表 6.1　推奨コンデンサ一覧

温度特性				定格電圧	静電容量	容量誤差
特性記号		温度範囲	静電容量変化率			
B	JIS	-25°C~85°C	±10%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
R	JIS	-55°C~125°C	±15%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
X5R	EIA	-55°C~85°C	±15%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
X7R	EIA	-55°C~125°C	±15%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
X8R	EIA	-55°C~150°C	±15%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
X6S	EIA	-55°C~105°C	±22%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下
X7S	EIA	-55°C~125°C	±22%	6.3V以上	4.7μF	±20%以下

6.2 電圧低下検出回路

電圧低下検出回路はVCC端子に入力する電源電圧を監視する回路です。

内部電圧レギュレータの入力となるVCC電源電圧を監視し、内部ロジック電圧が低下する前に警告を出すことができます。CPUはこの警告を受けてから、実際に内部ロジック電圧が下がるまでの間に、重要なデータをフラッシュメモリに退避し、安全にシャットダウンすることができます。

図6.3に電圧低下検出回路のブロック図を、図6.4~図6.5に関連レジスタを示します。

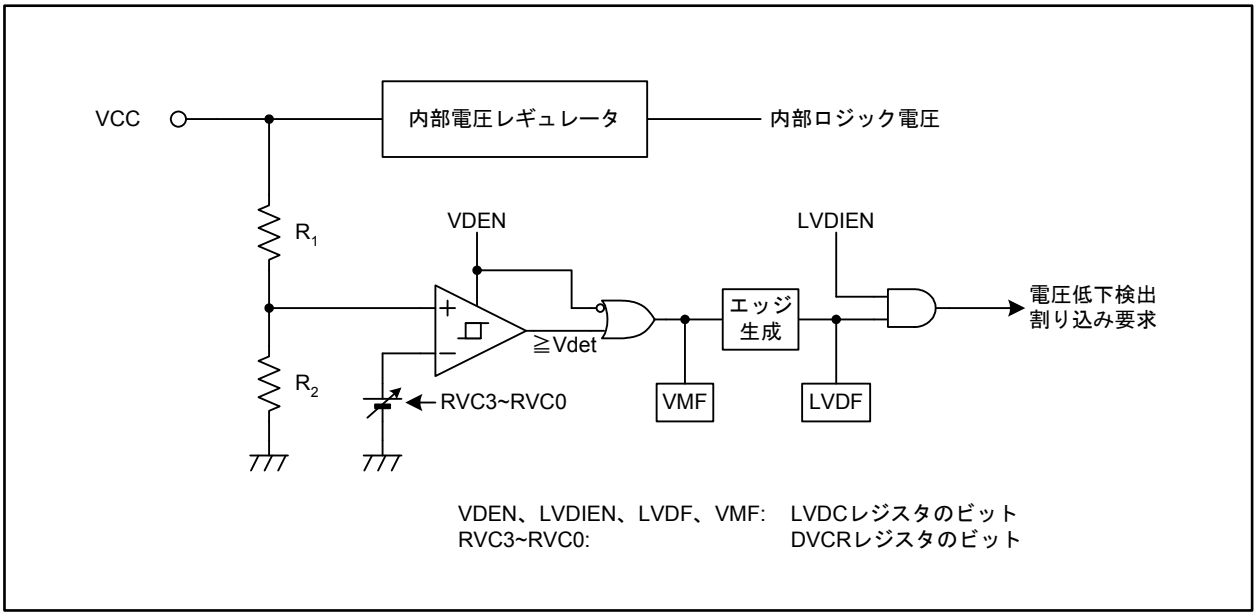
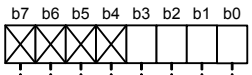


図6.3　電圧低下検出回路ブロック図

電圧低下検出回路制御レジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
LVDC	40062h番地	0000 XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
VDEN	電圧検出回路許可ビット	0: 電圧検出回路無効 1: 電圧検出回路有効	RW
LVDIEN	電圧低下検出割り込み許可ビット (注2)	0: 割り込み禁止 1: 電圧低下検出割り込み許可	RW
LVDF	電圧低下検出フラグ (注3、4)	0: 未検出 1: 検出電圧 (Vdet) 通過を検出	RW
VMF	電圧モニタフラグ (注3)	0: VCC＜Vdet 1: VCC≧Vdet または電圧検出回路無効	RO
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタはPRCR3レジスタのPRC31ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. このビットはVDENビットを“1”にし、電圧検出回路が安定した後“1”にしてください。
注3. このビットはVDENビットが“1”のとき有効です。
注4. プログラムで“0”を書くと、“0”になります (“1”を書いても変化しません)。

図6.4　LVDCレジスタ

検出電圧設定レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
1	X	X	X				

シンボル	アドレス	リセット後の値
DVCR	40064h番地	0000 XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RVC0	リファレンス電圧設定ビット (注2)	b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : 3.90V 0 0 0 1 : 3.75V 0 0 1 0 : 3.60V 0 0 1 1 : 3.45V 0 1 0 0 : 3.30V 1 0 1 1 : 4.65V 1 1 0 0 : 4.50V 1 1 0 1 : 4.35V 1 1 1 0 : 4.20V 1 1 1 1 : 4.05V 上記以外 : 設定しないでください	RW
RVC1			RW
RVC2			RW
RVC3			RW
— (b6-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b7)	予約ビット	“1”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCR3レジスタのPRC31ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。また、LVDCレジスタのVDENビットが“0”(電圧検出回路無効) の状態で書き換えてください。

注2. 検出電圧 Vdet(F)、Vdet(R) は以下のようになります。

リファレンス電圧	電圧低下検出電圧 Vdet(F)	電圧復帰検出電圧 Vdet(R)
4.65V	4.55V	4.77V
4.50V	4.40V	4.62V
4.35V	4.24V	4.46V
4.20V	4.09V	4.31V
4.05V	3.95V	4.17V
3.90V	3.80V	4.02V
3.75V	3.65V	3.87V
3.60V	3.50V	3.72V
3.45V	3.35V	3.57V
3.30V	3.20V	3.42V

図 6.5　DVCR レジスタ

6.2.1　電圧低下検出回路の動作

LVDCレジスタのVDENビットを“1”(電圧検出回路有効)にすると、td(E-A)後に電圧検出回路が安定動作を開始します。

VCC端子に入力する電圧が低下してVdet(F)未満になるとVMFビットが“0”(VCC < Vdet)になり、LVDFビットが“1”(検出電圧(Vdet)通過を検出)になります。このときLVDIENビットが“1”(電圧低下検出割り込み許可)であると、割り込み要求が発生します。LVDFビットはプログラムで“0”(未検出)にしてください。

また、電圧が再上昇してVdet(R)以上になるとVMFビットが“1”(VCC ≧ Vdet)になり、LVDFビットが“1”(検出電圧(Vdet)通過を検出)になります。このときLVDIENビットが“1”(電圧低下検出割り込み許可)であると、割り込み要求が発生します。

図6.6に電圧低下検出回路の動作を示します。

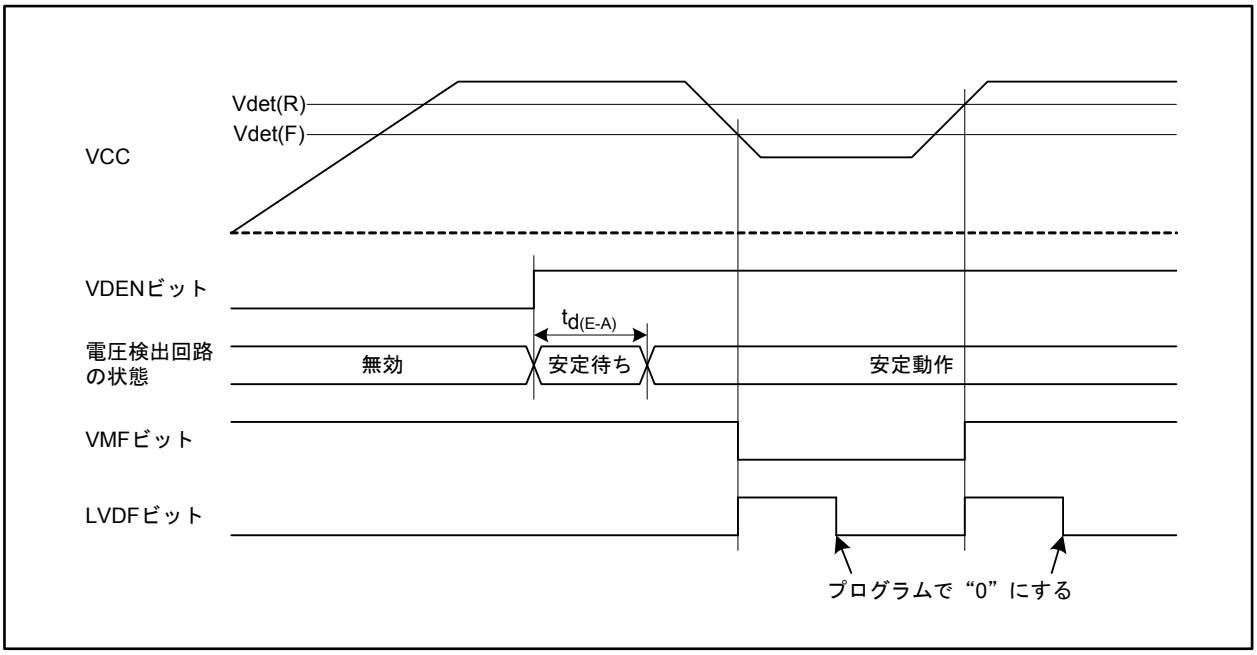


図6.6　電圧低下検出回路の動作

6.2.2　電圧低下検出割り込み

LVDCレジスタのLVDIENビットが“1”(電圧低下検出割り込み許可)の場合、VCC端子に入力する電圧が降下してVdet(F)未満になったとき、または上昇してVdet(R)以上になったとき、電圧低下検出割り込み要求が発生します。

電圧低下検出割り込みは、ウォッチドッグタイマ割り込み、発振停止検出割り込みと割り込みベクタを共用しています。電圧低下検出割り込みをこれらの割り込みと同時に使用する場合、割り込み処理ルーチンでLVDCレジスタのLVDFビットを読み出し、電圧低下検出割り込みが発生したことを確認してください。

LVDFビットはVCC端子に入力する電圧が上昇または下降してVdetを通過したことを検出したとき“1”になります。LVDFビットが“0”から“1”に変化すると電圧低下検出割り込み要求が発生します。LVDFビットはプログラムで“0”(未検出)にしてください。

6.2.3　電圧低下検出回路の応用例

電圧低下検出割り込みの応用例を図 6.7に示します。

内部ロジック電圧は内部電圧レギュレータによって、VCC端子からの入力を降圧して生成されます。このためVCC電圧が低下し始めたときには、内部ロジック電圧はまだ安定していますが、VCC電圧がさらに低下すると内部ロジック電圧が低下し始めるため、MCUの動作が保障できなくなります。従いまして、VCC 電圧が低下し始めてから内部ロジック電圧が低下し始めるまでの期間がシステムを安全にシャットダウンできる時間となります。このVCC電圧が低下し始めたことを検出する用途に電圧低下検出割り込みが使用できます。

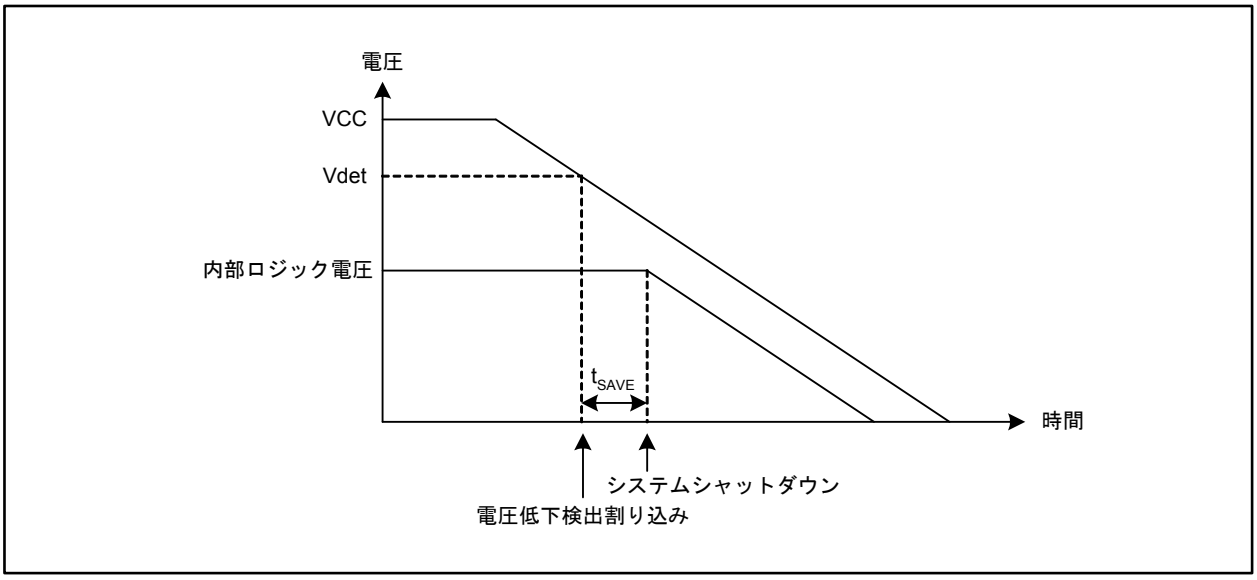


図 6.7　電圧低下検出割り込みの応用例

7. クロック発生回路

7.1 クロック発生回路の種類

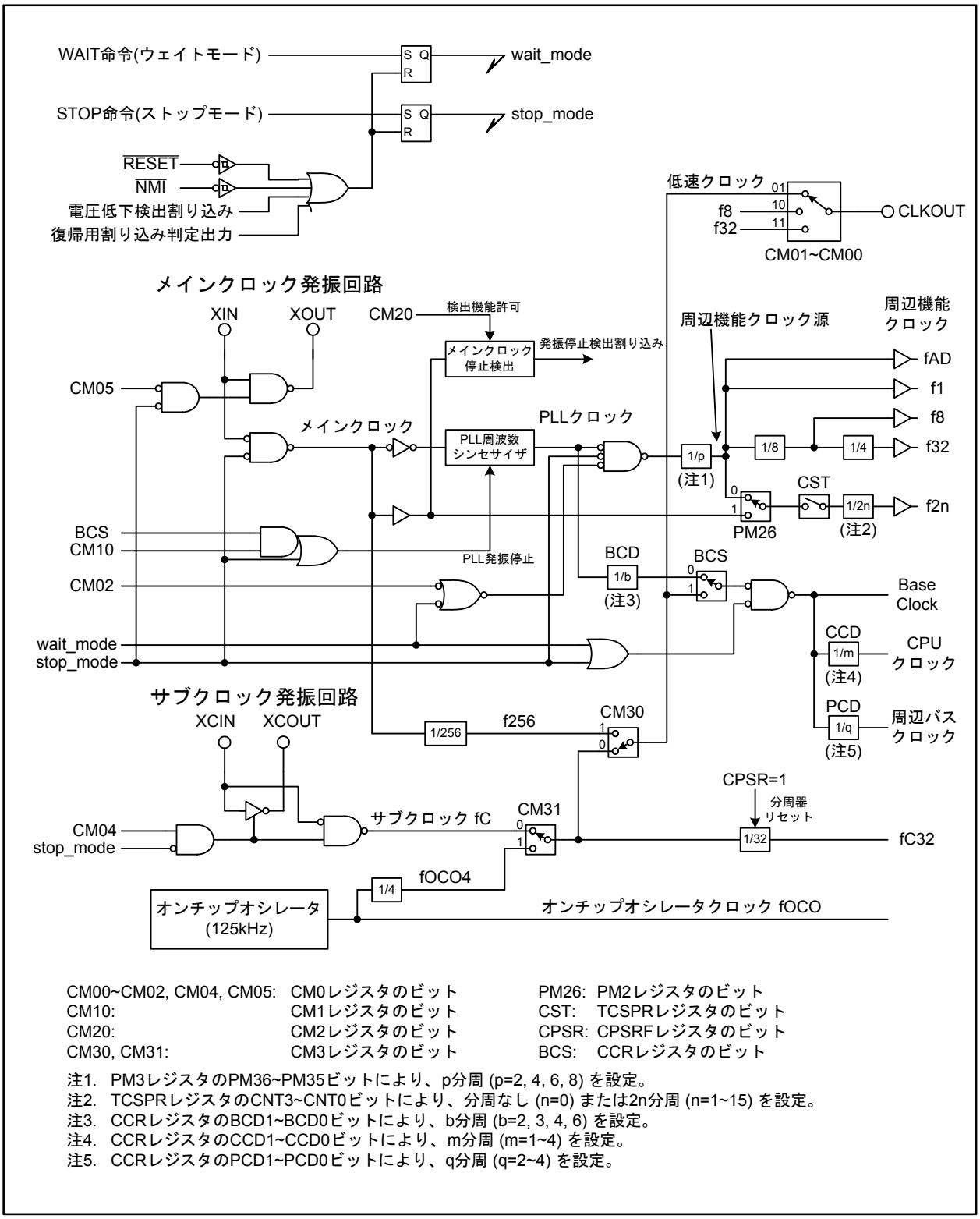
以下に示す4つのクロック発生回路を内蔵しています。

- メインクロック発振回路
- サブクロック発振回路
- PLL周波数シンセサイザ
- オンチップオシレータ

表 7.1 にクロック発生回路の概略仕様を示します。また、図 7.1 にクロック発生回路のブロック図を、図 7.2~図 7.10 にクロック制御関連レジスタを示します。

表 7.1　クロック発生回路の概略仕様

項目	メインクロック発振回路	サブクロック発振回路	PLL周波数シンセサイザ	オンチップオシレータ
用途	PLL基準クロック源 周辺機能クロック源	CPUクロック源 タイマAのカウントソース タイマBのカウントソース	CPUクロック源 周辺機能クロック源	CPUクロック源 タイマAのカウントソース タイマBのカウントソース
クロック周波数	4MHz~8MHz	32.768kHz	$f_{SO(PLL)}$ または $f_{(PLL)}$	約125kHz
接続できる発振子または付加回路	セラミック共振子 水晶発振子	水晶発振子	—	—
発振子または付加回路の接続端子	XIN, XOUT	XCIN, XCOUT	—	—
発振停止、発振再開機能	あり	あり	あり	あり
リセット後の状態	発振	停止	発振	停止
その他	外部で生成されたクロックも入力可能	外部で生成されたクロックも入力可能	メインクロック停止時はPLL周波数シンセサイザの自励発振周波数 $f_{SO(PLL)}$ で発振	OFS領域のCSPMビットを“0”にしておくと、リセット後から発振



CM00~CM02, CM04, CM05:	CM0レジスタのビット	PM26:	PM2レジスタのビット
CM10:	CM1レジスタのビット	CST:	TCSPRレジスタのビット
CM20:	CM2レジスタのビット	CPSR:	CPSRFレジスタのビット
CM30, CM31:	CM3レジスタのビット	BCS:	CCRレジスタのビット

注1. PM3レジスタのPM36~PM35ビットにより、p分周 (p=2, 4, 6, 8) を設定。
注2. TCSPRレジスタのCNT3~CNT0ビットにより、分周なし (n=0) または2n分周 (n=1~15) を設定。
注3. CCRレジスタのBCD1~BCD0ビットにより、b分周 (b=2, 3, 4, 6) を設定。
注4. CCRレジスタのCCD1~CCD0ビットにより、m分周 (m=1~4) を設定。
注5. CCRレジスタのPCD1~PCD0ビットにより、q分周 (q=2~4) を設定。

図 7.1　クロック発生回路のブロック図

クロック制御レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	0						

シンボル	アドレス	リセット後の値
CCR	0004h番地	0001 1000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BCD0	ベースクロック分周選択ビット (注2)	b1 b0 0 0 : 6分周 0 1 : 4分周 1 0 : 3分周 1 1 : 2分周	RW
BCD1			RW
CCD0	CPUクロック分周選択ビット (注3)	b3 b2 0 0 : 4分周 0 1 : 3分周 1 0 : 2分周 1 1 : 分周なし	RW
CCD1			RW
PCD0	周辺バスクロック分周選択ビット (注2、3、4)	b5 b4 0 0 : 設定しないでください 0 1 : 2分周 1 0 : 3分周 1 1 : 4分周	RW
PCD1			RW
— (b6)	予約ビット	“0”にしてください	RW
BCS	ベースクロック源選択ビット	0: PLLクロック 1: fC、fOCO4 または f256 (注5、6)	RW

注1. このレジスタはPRRレジスタの値を“AAh”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. ベースクロック分周値と周辺バスクロック分周値は、同時に値を変更しないでください。同時に変更した場合、周辺バスクロックが動作上限周波数を超える場合があります。
注3. CPUクロックの分周比を周辺バスクロックの分周比より大きくしないでください。
注4. このビットは、リセット後1回だけ設定し、設定後は値を書き換えないでください。また、このビットを書き換える前に、PBCレジスタを書き換えてください。
注5. このビットを“1”にする場合、0004h~0007h番地に対して32ビット単位で書き換えてください。
注6. これらの低速クロックの切り替えは、CM3レジスタのCM31~CM30ビットで行います。先にCM31~CM30ビットでいずれかのクロックを選択した後、このビットを“1”にしてください。

図 7.2　CCR レジスタ

システムクロック制御レジスタ0 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0							

シンボル	アドレス	リセット後の値
CM0	40046h番地	0000 1000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CM00	クロック出力機能選択ビット	b1 b0 0 0 : 入出力ポートP5_3 0 1 : 低速クロックを出力 1 0 : f8 を出力 1 1 : f32 を出力	RW
CM01			RW
CM02	ウェイトモード時周辺機能クロック源停止ビット(注2)	ウェイトモード時、 0: 周辺機能クロック源を停止しない 1: 周辺機能クロック源を停止する (注3)	RW
CM03	XCIN-XCOUT駆動能力選択ビット (注4)	0: Low 1: High	RW
CM04	ポートXC切り替えビット	0: 入出力ポート機能 1: XCIN-XCOUT発振機能 (注5)	RW
CM05	メインクロック(XIN-XOUT) 停止ビット(注2、6)	0: 発振 1: 停止	RW
CM06	ウォッチドッグタイマ機能選択ビット (注7)	0: ウォッチドッグタイマ割り込み 1: リセット (注8)	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC0ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. PM2レジスタのPM21ビットが“1”(クロック変更禁止) の場合、CM02、CM05ビットに書いても値は変化しません。
注3. fC32および、クロック源にメインクロックを選択したf2nは停止しません。
注4. ストップモードに移行したとき、CM03ビットは“1”になります。
注5. CM04ビットを“1”にする場合、PD8レジスタのPD8_7ビット、PD8_6ビットを“0”(入力) に、PUR2レジスタのPU25ビットを“0”(プルアップなし) にしてください。
注6. このビットは低消費電力モードにするときに、メインクロックを停止させるためのビットです。メインクロックが停止したかどうかの検出には使用できません。
このビットを“1”にすると、XOUT端子は“H”になります。また、内蔵している帰還抵抗は接続されたままですので、XIN端子は帰還抵抗を介してXOUT端子にプルアップされた状態となります。
注7. このビットはウォッチドックタイマを動作させる前に設定してください。動作中に書き換える場合は、WDTSレジスタに書いた直後に実施してください。
注8. 一度“1”にすると、プログラムでは“0”にできません。

図 7.3　CM0 レジスタ

システムクロック制御レジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0		0	0	0	0	

シンボル	アドレス	リセット後の値
CM1	40047h番地	0010 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CM10	PLL発振停止ビット (注2、3)	0: 発振 1: 停止	RW
— (b4-b1)	予約ビット	“0”にしてください	RW
CM15	XIN-XOUT駆動能力選択ビット (注4)	0: Low 1: High	RW
— (b7-b6)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC0ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。
注2. CCRレジスタのBCSビットが“0”(ベースクロック源はPLLクロック)の場合、CM10ビットを“1”にしてもPLL周波数シンセサイザの発振は停止しません。
注3. PM2レジスタのPM21ビットが“1”(クロック変更禁止)の場合、CM10ビットに書いても変化しません。
注4. メインクロックを停止させると“1”になります。“0”にするときは、メインクロックの発振が十分安定してから実施してください。

図 7.4　CM1 レジスタ

発振停止検出レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0			0	

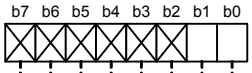
シンボル	アドレス	リセット後の値
CM2	4004Dh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CM20	発振停止検出許可ビット (注2、3)	0: 発振停止検出機能無効 1: 発振停止検出機能有効	RW
— (b1)	予約ビット	“0”にしてください	RW
CM22	発振停止検出フラグ (注4)	0: メインクロック未停止 1: メインクロック停止を検出	RW
CM23	メインクロックモニタフラグ (注5)	0: メインクロック発振 1: メインクロック停止	RO
— (b7-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC0ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。
注2. 低速モードでのベースクロックにf256を選択した場合、このビットは“0”にしてください。
注3. PM2レジスタのPM21ビットが“1”(クロック変更禁止)の場合、CM20ビットに書いても変化しません。
注4. メインクロック停止検出時、“1”になります。プログラムで“0”にできますが、“1”にできません。メインクロック停止中に“0”を書くと、次にメインクロックが供給された後のメインクロック停止検出まで“1”になりません。
注5. 発振停止検出割り込み発生後、CM23ビットを数回読むことによりメインクロックの状態を判定してください。

図 7.5　CM2 レジスタ

低速モードクロック制御レジスタ (注1)



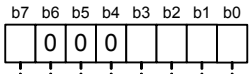
シンボル	アドレス	リセット後の値
CM3	4005Ah番地	XXXX XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CM30	低速モードベースクロック選択ビット	b1 b0 0 0 : fC 0 1 : f256 (メインクロックの1/256) 1 0 : fOCO4 (オンチップオシレータクロックの1/4) (注2) 1 1 : 設定しないでください	RW
CM31			RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. このレジスタはPRCR2レジスタのPRC27ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。また、CCRレジスタのBCSビットが“0”(PLLクロック) のときに書き換えてください。
注2. CM31ビットを“1”にするとオンチップオシレータが発振を開始します。

図 7.6　CM3 レジスタ

カウントソースプリスケーラレジスタ



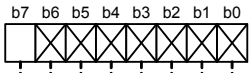
シンボル	アドレス	リセット後の値
TCSPR	035Fh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CNT0	分周比選択ビット (注1)	設定値をnとすると、メインクロックまたは周辺機能クロック源を2n分周したものが、f2nになる。 ただし、n=0の場合は分周なし	RW
CNT1			RW
CNT2			RW
CNT3			RW
— (b6-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
CST	分周器動作許可ビット	0: 分周器停止 1: 分周器動作	RW

注1. CNT3~CNT0ビットを書き換える場合は、CSTビットを“0”にして書き換えてください。

図 7.7　TCSPR レジスタ

時計用プリスケーラリセットレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
CPSRF	0341h番地	0XXX XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b6-b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
CPSR	時計用プリスケーラ リセットビット	このビットに“1”を書くと、fCの32分周器を初期化する。 読んだ場合、その値は“0”	RW

図 7.8　CPSRF レジスタ

プロセッサモードレジスタ2 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0		0		0			0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PM2	40053h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PM21	システムクロック 保護ビット　(注2、3)	0: PRCRレジスタでクロックを保護 1: クロックの変更禁止	RW
PM22	ウォッチドッグタイマ カウントソース保護ビット (注2、4)	ウォッチドッグタイマのカウント ソースは 0: 周辺バスクロック 1: オンチップオシレータクロック	RW
— (b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PM24	NMI許可ビット　(注2)	0: NMI禁止　(注5) 1: NMI有効	RW
— (b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PM26	f2nクロック源選択ビット (注6)	0: 周辺機能クロック源 1: メインクロック	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。
注2. 一度“1”にすると、プログラムでは“0”にできません。
注3. PM21ビットを“1”にすると、以下のビットに値を書いても変化しません。
　CM0レジスタのCM02ビット(ウェイトモード時の周辺機能クロック源)
　CM0レジスタのCM05ビット(メインクロックの発振/停止)
　CM1レジスタのCM10ビット(PLLの発振/停止)
　CM2レジスタのCM20ビット(発振停止検出機能の有効/無効)
注4. このビットは、ウォッチドッグタイマ起動前に設定してください。
　PM22ビットを“1”にすると、以下の状態になります。
　・オンチップオシレータが発振を開始します
　・オンチップオシレータクロックがウォッチドッグタイマのカウントソースになります
　・ウォッチドッグタイマは停止しません
注5. PM24ビットが“0”の場合、三相モータ制御用タイマ機能の強制遮断も無効です。
注6. このビットを変更するときは、f2nを使用するすべての周辺機能を停止してから書き換えてください。

図 7.9　PM2 レジスタ

プロセッサモードレジスタ3 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0			0	0	0	0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PM3	40048h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b4-b0)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PM35	周辺機能クロック源分周比選択ビット (注2)	b6 b5 0 0 : 8分周 0 1 : 6分周 1 0 : 4分周 1 1 : 2分周	RW
PM36			RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC0ビットを“1” (書き込み許可) にした後で書き換えてください。また、fAD、f1、f8、f32、クロック源に周辺機能クロック源を選択したf2nを使用するすべての周辺機能を停止してから書き換えてください。

注2. 周辺機能クロック源の周波数が電気的特性に規定する周波数以下になるように、分周比を設定してください。

図 7.10　PM3 レジスタ

クロック発生回路で生成するクロックを説明します。

7.1.1 メインクロック

メインクロック発振回路が供給するクロックです。PLL基準クロックや、周辺機能クロックのクロック源になります。また、CANモジュールの動作クロックとしても使用できます。

メインクロック発振回路はXIN-XOUT端子間に発振子を接続することで発振回路が構成されます。メインクロック発振回路には帰還抵抗が内蔵されており、ストップモード時には消費電力を低減するため、発振回路から切り離されます。メインクロック発振回路には、外部で生成されたクロックをXIN端子へ入力することもできます。図7.11にメインクロックの接続回路例を示します。回路定数は発振子によって異なりますので、発振子メーカの推奨する値に設定してください。

リセット後、メインクロック発振回路は動作していますが、PLL周波数シンセサイザの入力で切断された状態になっており、CPUにはPLL周波数シンセサイザの自励発振周波数の12分周が供給されています。

CM0レジスタのCM05ビットを“1”(メインクロック発振回路の発振停止)にすると、消費電力を低減できます。この場合、XOUTは“H”になります。また、XINとXOUTはチップ内部の帰還抵抗で接続されていますので、XINは帰還抵抗を介してXOUTにプルアップされた状態となります。なお、外部で生成したクロックをXIN端子に入力している場合、CM05を“1”にしないでください。

ストップモード時は、メインクロックを含めたすべてのクロックが停止します。詳細は「7.7 パワーコントロール」を参照してください。

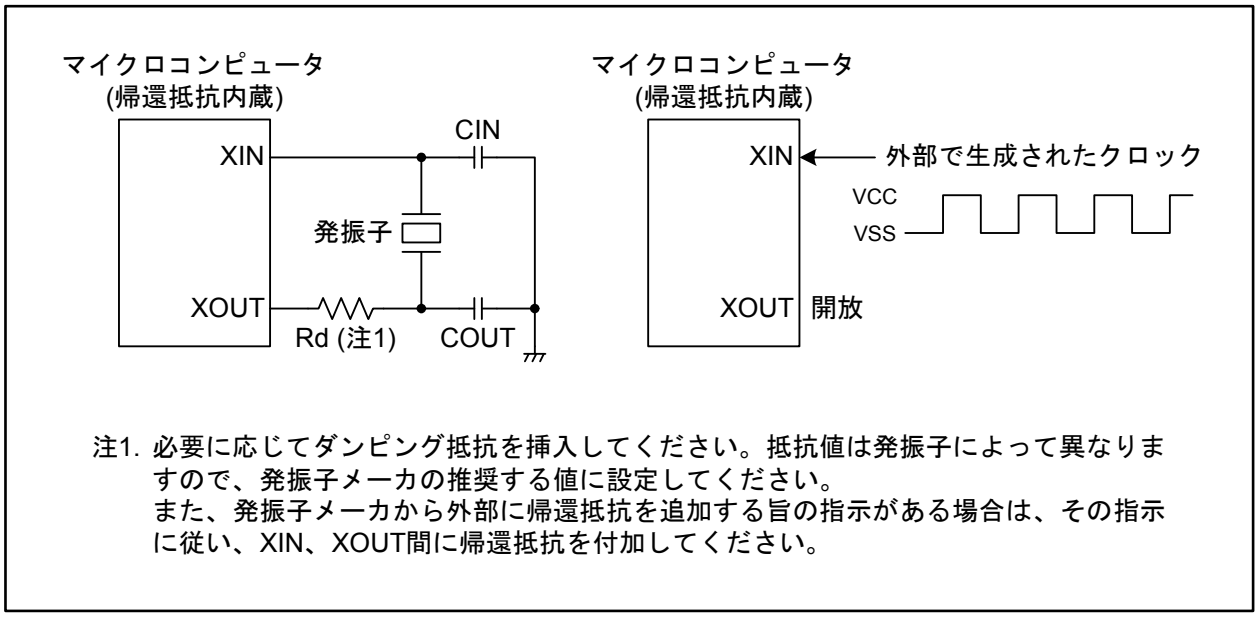


図7.11　メインクロックの接続回路例

7.1.2　サブクロック(fC)

サブクロック発振回路が供給するクロックです。CPUクロックと、タイマA、タイマBのカウントソースのクロック源になります。また、CLKOUT端子から外部に出力できます。

サブクロック発振回路は、XCIN-XCOUT端子間に水晶発振子を接続することで発振回路が構成されます。サブクロック発振回路には帰還抵抗が内蔵されており、ストップモード時には消費電力を低減するため、発振回路から切り離されます。サブクロック発振回路には、外部で生成されたクロックをXCIN端子へ入力することもできます。図7.12にサブクロックの回路接続例を示します。回路定数は発振子によって異なりますので、発振子メーカの推奨する値に設定してください。

リセット後、サブクロックは停止しています。このとき、帰還抵抗は発振回路から切り離されています。PD8レジスタのPD8_6、PD8_7ビットの両方を“0”(入力モード)にし、PUR2レジスタのPU25ビットを“0”(プルアップしない)にした後、CM0レジスタのCM04ビットを“1”(XCIN-XCOUT発振機能)にすると、サブクロック発振回路が発振を始めます。外部で生成したクロックをXCIN端子へ入力する場合は、PD8_7ビットを“0”にし、PU25ビットを“0”にした後、CM04ビットを“1”にすると、XCIN端子へ入力されたクロックがサブクロック源になります。

サブクロックの発振が安定した後、CM3レジスタに“00h”(fC)を書き、CCRレジスタのBCSビットを“1”(fC、fOCO4またはf256)にすると、サブクロックがCPUと周辺バスのベースクロックになります。

ストップモード時、サブクロックを含めたすべてのクロックが停止します。詳細は「7.7 パワーコントロール」を参照してください。

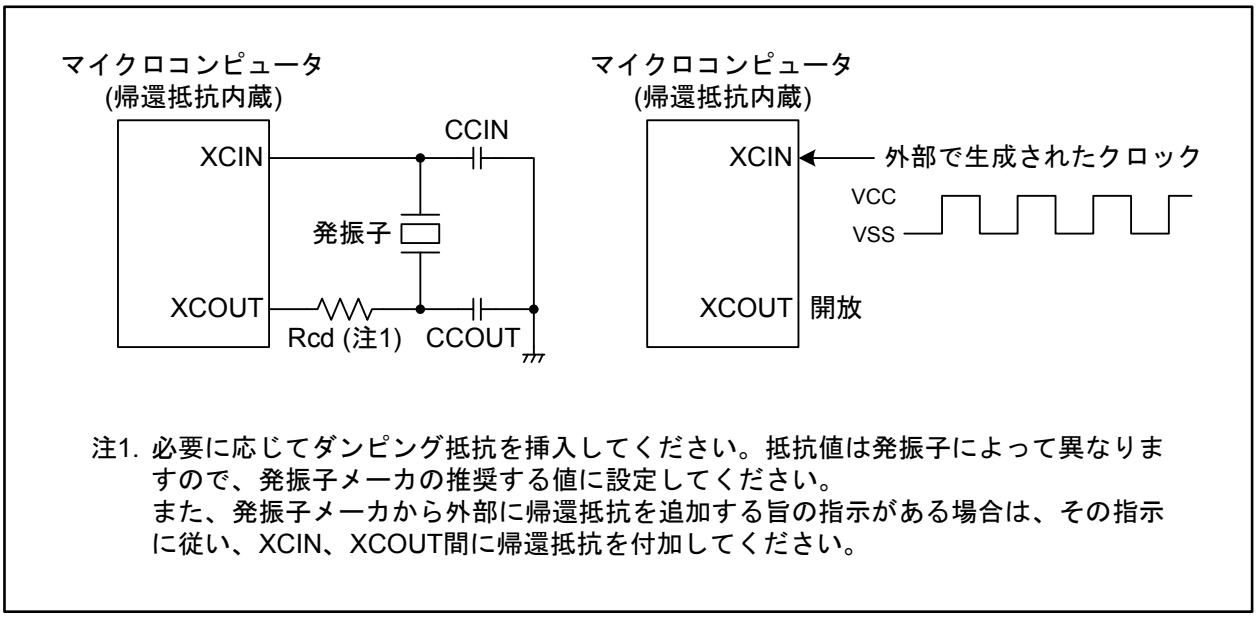


図7.12　サブクロックの接続例

7.1.3　PLLクロック

PLLクロックは、PLL周波数シンセサイザがメインクロックを元に生成するクロックで、CPUクロックや、周辺機能クロックなど、すべてのクロック源に使用します。

図 7.13にPLL周波数シンセサイザのブロック図を、図 7.14にPLC0レジスタ、図 7.15にPLC1レジスタ、図 7.16にPLSレジスタを示します。

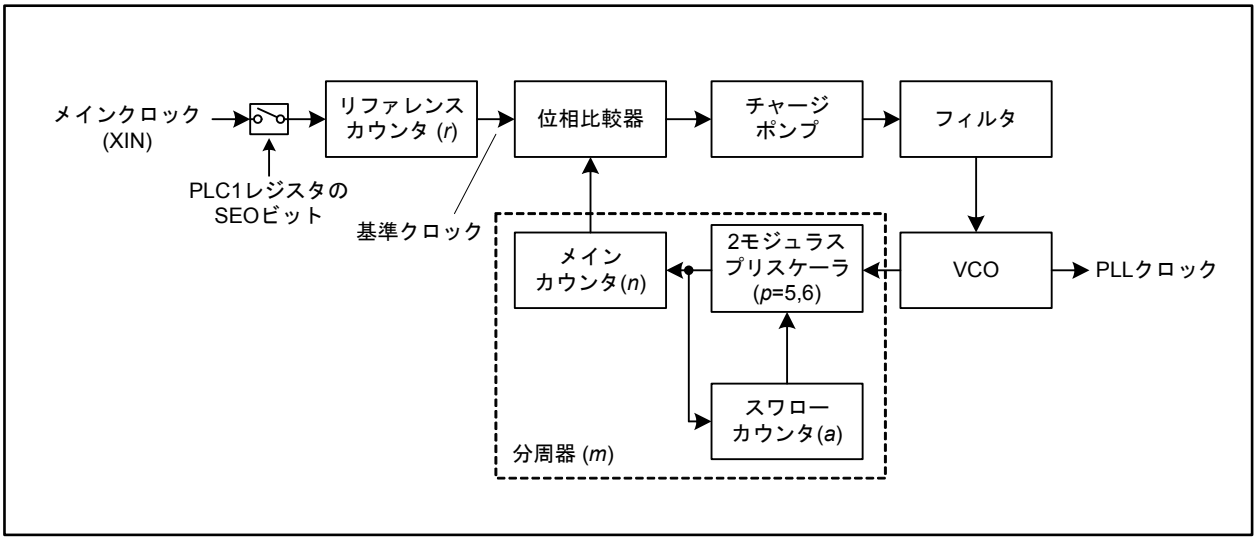


図 7.13　PLL周波数シンセサイザブロック図

PLL制御レジスタ0 (注1、2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PLC0	40020h番地	0000 0001b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MCV0	メインカウンタ分周比設定ビット	メインカウンタの分周比をnとする場合、n-1を設定する	RW
MCV1			RW
MCV2			RW
MCV3			RW
MCV4			RW
SCV0	スワローカウンタ分周比設定ビット	設定値をaとすると、2モジュラスプリスケーラの分周比が、n回中a回が6分周、それ以外は5分周となる	RW
SCV1			RW
SCV2			RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットを“1”(書き込み許可)にした次の命令で書き換えてください。また、PRC2ビットを“1”にする命令とPLC0レジスタを書き換える命令の間に割り込みやDMA転送が入らないようにしてください。

注2. このレジスタはリセット後1回だけ書き換えられます。

図 7.14　PLC0レジスタ

PLL制御レジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0					

シンボル	アドレス	リセット後の値
PLC1	40021h番地	0001 1111b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RCV0	リファレンスカウンタ分周比設定ビット	メインクロックをr分周する場合、r-1を設定する	RW
RCV1			RW
RCV2			RW
RCV3			RW
SEO	自励発振動作設定ビット	0: メインクロック逓倍動作 1: 自励発振動作	RW
— (b7-b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットを“1”(書き込み許可)にした次の命令で書き換えてください。また、PRC2ビットを“1”にする命令とPLC1レジスタを書き換える命令の間に割り込みやDMA転送が入らないようにしてください。

図 7.15　PLC1 レジスタ

PLLステータスレジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	X	X	X	X	X	X	

シンボル	アドレス	リセット後の値
PLS	40024h番地	1XXX XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PLF1	PLLロックフラグ1	0: PLLの出力が規定範囲外 1: PLLの出力が規定範囲内	RO
PLF2	PLLロックフラグ2　(注2)	0: PLLの出力が規定範囲外 1: PLLの出力が規定範囲内	RO
— (b6-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
PULD	PLLアンロック検出フラグ (注3)	0: アンロック未検出 1: アンロック検出	RW

注1. このレジスタはPLC1レジスタのSEOビットを“1”(自励発振動作)にするとリセットされます。なお、メインクロックを停止させたり、PLLを停止させたりした場合、レジスタの更新も停止します。
注2. このビットはPLF1ビットが2回連続“1”のとき“1”、2回連続“0”のとき“0”になります。それ以外の場合は以前の状態を保持します。
注3. このビットはPLF2ビットが“0”になると“1”になります。また、このビットに値を書くと、書いた値にかかわらず“0”になります。

図 7.16　PLS レジスタ

PLL周波数シンセサイザはパルススワロー方式で、分周比mは$n \times p$で表せますが、pの分周比は、スワローカウンタの機能により、n回中a回が6分周、それ以外は5分周となります。従いまして、実際の分周比mは、

$$m = n \times p$$
$$= n \times \left(\frac{a}{n} \cdot 6 + \frac{n-a}{n} \cdot 5\right)$$
$$= 5n + a$$

と表せます。ただし、設定できるaの範囲は、$0 \le a < 5$、$0 \le a \le n$です。

また、リファレンスカウンタのr分周と併せて、PLLクロックはメインクロック(XIN)周波数のm/r倍の周波数となります。

$$\text{PLLクロック周波数}\ f(PLL) = \frac{m}{r} \cdot \text{メインクロック周波数}$$
$$= \frac{5n+a}{r} \cdot \text{メインクロック周波数}$$

リセット後、リファレンスカウンタは16分周、PLL周波数シンセサイザは10逓倍になりますが、リファレンスとなるメインクロックが接続されてないため、固有の周波数 $f_{SO(PLL)}$ で自励発振を行います。

なお、メインクロックをr分周した基準クロックは2MHz以上、4MHz以下になるように、また分周比mが25~100になるように各レジスタの値を設定する必要があります。

表7.2にPLC1~PLC0レジスタの設定値を示します。この表に記載している設定値をご使用ください。メインクロックの発振が安定している状態で、PLC1~PLC0レジスタの設定を変更してからPLLクロックが安定するまで、$t_{LOCK(PLL)}$の待ち時間が必要です。

表7.2　PLC1~PLC0レジスタの設定値(注1)

メインクロック	*r*	基準クロック	*n*	*a*	*m*	PLC1設定値	PLC0設定値	*m/r*	PLLクロック
4MHz	2	2MHz	9	3	48	01h	68h	24	96MHz
6MHz	2	3MHz	6	2	32	01h	45h	16	96MHz
8MHz	3	2.6667MHz	7	1	36	02h	26h	12	96MHz
4MHz	1	4MHz	6	0	30	00h	05h	30	120MHz
5MHz	2	2.5MHz	9	3	48	01h	68h	24	120MHz
6MHz	2	3MHz	8	0	40	01h	07h	20	120MHz
8MHz	2	4MHz	6	0	30	01h	05h	15	120MHz
4MHz	1	4MHz	6	2	32	00h	45h	32	128MHz
6MHz	3	2MHz	12	4	64	02h	8Bh	21.3333	128MHz
8MHz	2	4MHz	6	2	32	01h	45h	16	128MHz
4MHz	1	4MHz	7	1	36	00h	26h	36	144MHz
6MHz	2	3MHz	9	3	48	01h	68h	24	144MHz
8MHz	2	4MHz	7	1	36	01h	26h	18	144MHz

注1.　この表に記載している設定値をご使用ください。

7.1.4 オンチップオシレータクロック

オンチップオシレータ(OCO)が供給するクロックです。CPUクロックと、タイマA、タイマBのカウントソースのクロック源になります。発振周波数はおおよそ125kHzで、この1/4の周波数のクロックがCPUや周辺バスのベースクロックとして使用できます。

OFS領域のCSPMビットが“1”の場合、リセット後オンチップオシレータは停止しています。CM3レジスタのCM31ビットまたは、PM2レジスタのPM22ビットを“1”にすると、オンチップオシレータが発振を開始します。オンチップオシレータはほぼ瞬時に発振を開始しますので、安定待ちは必要ありません。

7.2 発振停止検出機能

外部の要因でメインクロックが停止した場合に、クロックの停止を検出する機能です。

CM2レジスタのCM20ビットが“1”(発振停止検出機能有効)の場合、メインクロックが停止すると、発振停止検出割り込み要求が発生します。このときPLL周波数シンセサイザは固有の発振周波数で自励発振を行いますので、PLLクロックをCPUクロックや周辺機能クロックのクロック源にしている場合、これらの動作は停止しません。

発振停止が検出されたとき、CM2レジスタの以下のビットが変化します。

- CM22ビット=1(メインクロック停止を検出)
- CM23ビット=1(メインクロック停止)

7.2.1 発振停止検出機能使用方法

発振停止検出割り込みは、ウォッチドッグタイマ割り込み、電圧低下検出割り込みとベクタを共用しています。発振停止検出割り込みとこれらの割り込みを同時に使用する場合、割り込み処理ルーチン内でCM22ビットを読み出し、発振停止検出割り込み要求が発生したことを確認してください。

発振停止検出後、メインクロックの発振が再開した場合、PLL周波数シンセサイザの発振が安定するまでに一時的にPLLクロック周波数が設定周波数を超える場合があります。発振停止を検出した後は、速やかにプログラムでメインクロックの再発振を抑止する(CM0レジスタのCM05ビットを“1”にする)か、ベースクロックの分周比(CCRレジスタのBCD1~BCD0ビットで設定)と周辺機能クロック源の分周比(PM3レジスタのPM36~PM35ビットで設定)を上げてください。

低速モード時、CM20ビットが“1”(発振停止検出機能有効)の場合、メインクロックが停止すると、発振停止検出割り込み要求が発生します。このとき、CPUクロックは低速クロックのまま変化しません。なお、低速モードでベースクロックにf256(メインクロックの256分周)を使用する場合、発振停止検出機能は使えません。

この機能は外部要因によるメインクロック停止に備えた機能ですので、プログラムでメインクロックを停止させる場合、すなわち、ストップモードにする、またはCM05を“1”(メインクロック発振停止)にする場合は、CM20ビットを“0”(発振停止検出機能無効)にしてください。また、ウェイトモードにする場合も、CM20ビットを“0”にしてください。

発振停止検出機能は、コンデンサへの充電電圧がある値以下かどうかで判断しています。したがって、実際にはメインクロックが約500kHzを下回ると発振停止と認識します。このため、割り込み処理ルーチン内でCM22ビットを“0”にするようなプログラムを記述した場合、メインクロックの発振周波数が500kHz前後で上昇下降を繰り返した場合に多重割り込みが発生し、スタックがオーバフローすることがあります。

7.3 ベースクロック

ベースクロックはCPUクロックや周辺バスクロックの元となる基準クロックです。リセット後、ベースクロックはPLLクロックの6分周になっています。

ベースクロック源には、PLLクロックまたは低速クロックが選択できます。低速クロックとしては、サブクロック(fC)、オンチップオシレータクロックの4分周(fOCO4)、メインクロックの256分周(f256)が選択できます。

ベースクロックのクロック源としてPLLクロックを選択した場合、選択したクロックを2、3、4、6分周したものがベースクロックとなり、低速クロックを選択した場合は低速クロックそのものがベースクロックとなります。

ベースクロック源の選択はCCRレジスタのBCSビットで、PLLクロックからの分周比はCCRレジスタのBCD1~BCD0ビットで、低速クロックの選択はCM3レジスタのCM31~CM30ビットで設定できます。

7.4 CPUクロックと周辺バスクロック

CPUクロックはCPUの動作クロックです。リセット後、CPUクロックはベースクロックの2分周になっています。

CPUクロック源はベースクロックであり、分周比はCCRレジスタのCCD1~CCD0ビットで選択できます。また、ベースクロックを2~4分周したものが周辺バスクロックになり、分周比はCCRレジスタのPCD1~PCD0ビットで選択できます。

周辺バスクロックはウォッチドッグタイマのカウントソース、シリアルバスインタフェース、CANモジュールの動作クロックにも使用します。

暴走時、PLLクロックをクロック源とするCPUクロックが停止しないようにしたい場合、CM0レジスタのCM05ビットが“0”(メインクロック発振)、CCRレジスタのBCSビットが“0”(ベースクロック源はPLLクロック)の状態で以下の処理をしてください。

(1) PRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(PM2レジスタ書き込み許可)にする
(2) PM2レジスタのPM21ビットを“1”(クロック変更禁止)にする

7.5 周辺機能クロック

ウォッチドッグタイマ、シリアルバスインタフェース、CANモジュールを除く周辺機能の動作クロックまたはカウントソースです。周辺機能クロックの基準となる周辺機能クロック源はPLLクロックと同一周波数のクロックをPM3レジスタのPM36~PM35ビットの設定によって2、4、6、8分周したクロックです。

周辺機能クロックは大きく以下の3種類に分類できます。

(1) f1、f8、f32、f2n

f1、f8、f32は周辺機能クロック源をそれぞれ1、8、32分周したクロックです。f2nのクロック源は、PM2レジスタのPM26ビットにより、周辺機能クロック源またはメインクロックのどちらかを選択できます。また、f2nはTCSPRレジスタのCNT3~CNT0ビットにより、分周比を設定できます(n=1~15、n=0のときは分周なし)。

CM02ビットを“1”(ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止する)にしてウェイトモードに移行した場合、および低消費電力モード時、f1、f8、f32、クロック源に周辺機能クロック源を選択したf2nは停止します。

f1、f8、f2nは、タイマA、タイマBのカウントソース、シリアルインタフェース、LINモジュールの動作クロックに使用します。また、f1はインテリジェントI/Oの動作クロックにも使用します。

f32はLINモジュールの動作クロックに使用します。

f8とf32はCLKOUT端子から出力できます。詳細は「7.6 クロック出力機能」を参照してください。

(2) fAD

周辺機能クロック源と同一周波数です。A/Dコンバータの動作クロックです。

CM02ビットを“1”(ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止する)にしてウェイトモードに移行した場合、および低消費電力モード時、このクロックは停止します。

(3) fC32

サブクロックの32分周、またはオンチップオシレータクロックの128分周で、タイマA、タイマBのカウントソースに使用します。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックが供給されているときに使用できます。

7.6 クロック出力機能

低速クロック、f8、またはf32をCLKOUT端子から出力できます。

表 7.3にCLKOUT端子の機能を示します。

表 7.3　CLKOUT端子の機能

CM0レジスタ(注1)		CLKOUT端子の機能
CM01	CM00	
0	0	入出力ポートP5_3
0	1	低速クロックを出力
1	0	f8を出力
1	1	f32を出力

注1.　このレジスタはPRCRレジスタのPRC0ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。

7.7 パワーコントロール

パワーコントロールには、通常動作モード、ウェイトモード、ストップモードの3つのモードがあります。なお、「通常動作モード」は本節にて限定的に使用する便宜上の名称であり、ウェイトモード、ストップモード以外の状態を指します。

図 7.17に通常動作モード、ウェイトモード、ストップモードの状態遷移図を示します。

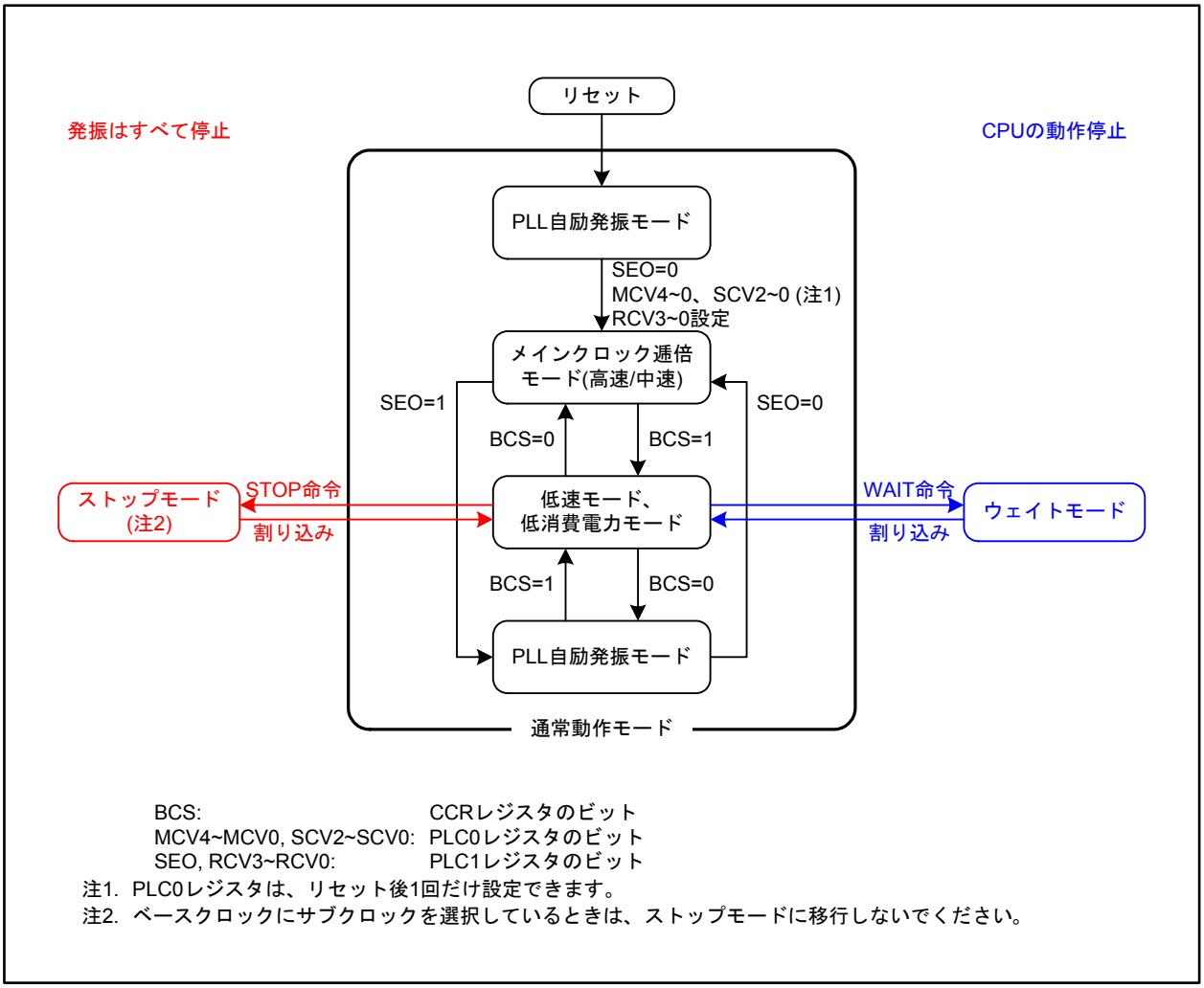


図 7.17　ウェイトモード、ストップモードの状態遷移図

7.7.1 通常動作モード

通常動作モードには、さらに以下の5つのモードに分けられます。

通常動作モードでは、CPU クロック、周辺機能クロックがともに供給されていますので、CPU も周辺機能も動作します。CPUクロックの周波数を制御することで、パワーコントロールを行います。CPU クロックの周波数が高いほど処理能力は上がり、低いほど消費電力は下がります。また、不要な発振回路を停止させるとさらに消費電力を低減できます。

(1) メインクロック逓倍モード(高速モード)

ベースクロック源にPLLクロックを選択し､PLL周波数シンセサイザのリファレンス入力となるメインクロックを供給している状態をメインクロック逓倍モードと言います。このうち、CPU を最高動作周波数で動作させるモードを高速モードと言います。PLLクロックの2分周をベースクロックに、ベースクロックとCPUクロックを同一周波数にします。周辺機能クロックとしてはfAD、f1、f8、f32、f2nが使用できます。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックが供給されている場合はfC32がタイマA、タイマBのカウントソースに使用できます。

(2) メインクロック逓倍モード(中速モード)

メインクロック逓倍モードのうち高速モード以外の状態を指します。PLL クロックの2、3、4、6分周がベースクロックに、ベースクロックの1~4分周がCPU クロックになります。周辺機能クロックとしてはfAD、f1、f8、f32、f2nが使用できます。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックが供給されている場合はfC32がタイマA、タイマBのカウントソースに使用できます。

(3) 低速モード

ベースクロック源に低速クロックを使用するモードです。低速クロックがベースクロックに、ベースクロックの1~4分周がCPUクロックになります。周辺機能クロックとしてはfAD、f1、f8、f32、f2nが使用できます。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックが供給されている場合はfC32がタイマA、タイマBのカウントソースに使用できます。

(4) 低消費電力モード

低速モードにした後、メインクロックおよび、PLL 周波数シンセサイザを停止させた状態です。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックの4分周がベースクロックに、ベースクロックの1~4分周がCPUクロックになります。fC32がタイマA、タイマBのカウントソースに使用できます。周辺機能クロックはfC32のみです。このモードのときVRCRレジスタのMRSビットを“1”(メインレギュレータ停止)にすると、さらに消費電流を減らすことができます。

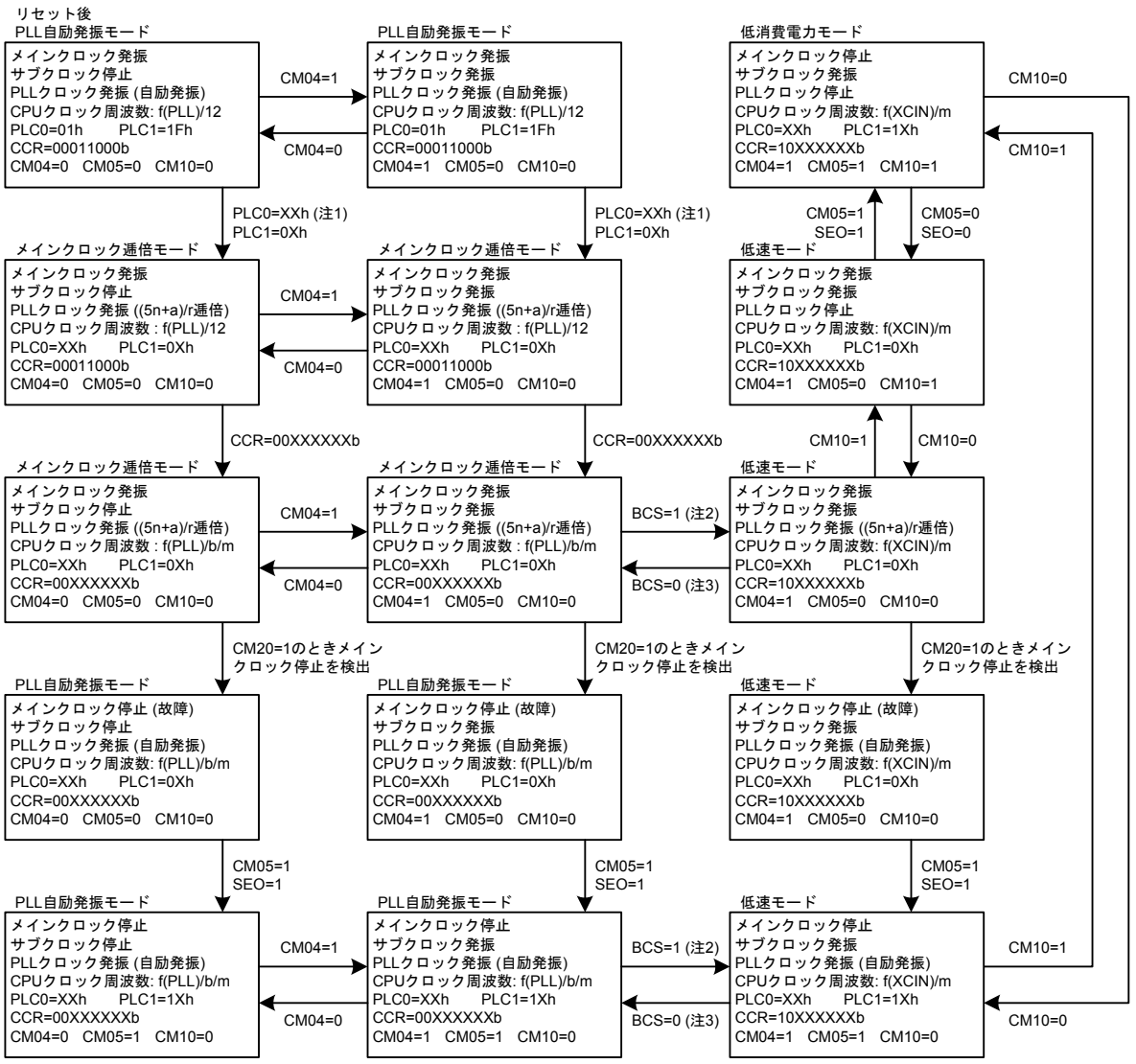
(5) PLL自励発振モード

ベースクロック源にPLLクロックを選択し､PLL周波数シンセサイザのリファレンス入力となるメインクロックの供給を停止させた状態です。PLL 周波数シンセサイザは固有の発振周波数で自励発振を行います。PLLクロックの2、3、4、6分周がベースクロックに、ベースクロックの1~4分周がCPUクロックになります。また、周辺機能クロックとしてはfAD、f1、f8、f32、f2nが使用できます。サブクロックまたはオンチップオシレータクロックが供給されている場合はfC32がタイマA、タイマBのカウントソースに使用できます。

通常動作モード内の状態遷移は非常に複雑なため、代表的な状態についてのみ遷移図を示します。図7.18にサブクロック使用時の状態遷移図、図7.19にメインクロックの256分周使用時の状態遷移図、図7.20にオンチップオシレータ使用時の状態遷移図を示します。これ以外の状態への遷移につきましては、各レジスタの設定内容、および以下の注意事項を参考に判断してください。

- PLLをメインクロック逓倍動作から自励発振動作に切り替えるときは、PLC1レジスタのSEOビットを“1”(自励発振動作)にすることで実施してください。メインクロックを停止させる場合は、SEOビットを“1”にした後、CM0レジスタのCM05ビットを“1”(停止)にしてください。
- PLL自励発振モードからメインクロック逓倍モードに戻る場合、SEOビットを“0”(メインクロック逓倍動作)にする前に、CCRレジスタのBCD1~BCD0ビット、およびPM3レジスタのPM36~PM35ビットによりクロックの分周比を上げて、周波数を下げてください。SEOビットを“0”にした後、PLLの発振が安定してから、BCD1~BCD0ビット、PM36~PM35ビットの設定を元に戻してください。
- CPUクロックを切り替える場合は、切り替え先のクロックが安定してから切り替えてください。特にサブクロックは発振が安定するまで時間(注1)を要しますので、電源投入直後や、ストップモードからの復帰後は、プログラムで待ち時間をとってから移行してください。

注1. 発振安定時間は各発振子メーカへお問い合わせください。

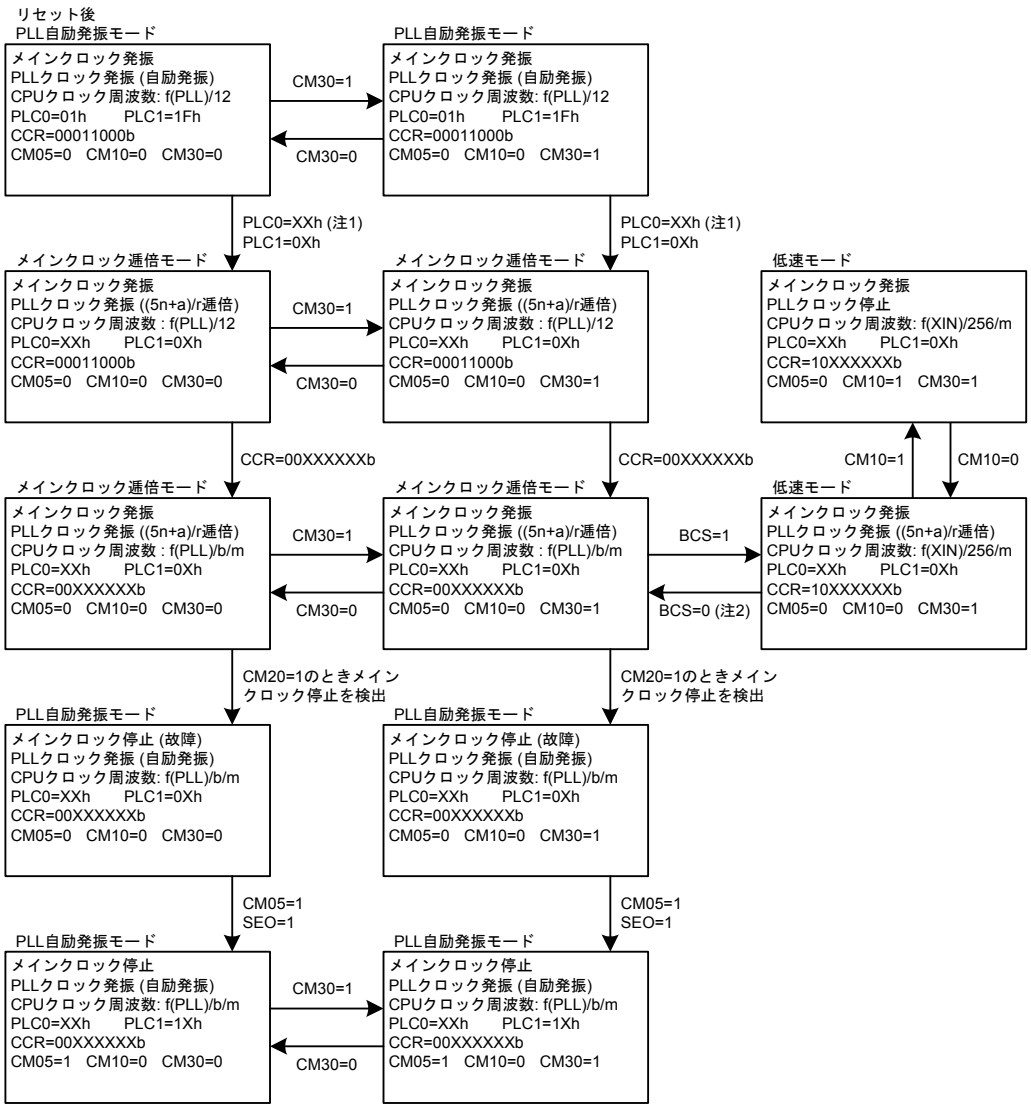


→　: 矢印の向きに遷移できます。矢印のない方向へは遷移しないでください。

BCS:　CCRレジスタのビット　CM10: CM1レジスタのビット　SEO: PLC1レジスタのビット
CM04, CM05: CM0レジスタのビット　CM20: CM2レジスタのビット
PLC0=XXh: PLC0レジスタのMCV4~MCV0ビット、SCV2~SCV0ビットでPLLの逓倍率を設定してください。
PLC1=0Xh: PLC1レジスタのRCV3~RCV0ビットでリファレンスクロックの分周値を設定してください。
ただし、PLLの発振周波数が電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。
CCR=00XXXXXXb: CCRレジスタで各クロックの分周値を設定してください。
ただし、CPUクロック周波数、周辺バスクロック周波数が、それぞれ電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。

注1. PLC0レジスタはリセット解除後に1度だけ設定できます。
注2. サブクロックの発振が十分に安定してから切り替えてください。
注3. PLLクロックの発振が十分に安定してから切り替えてください。

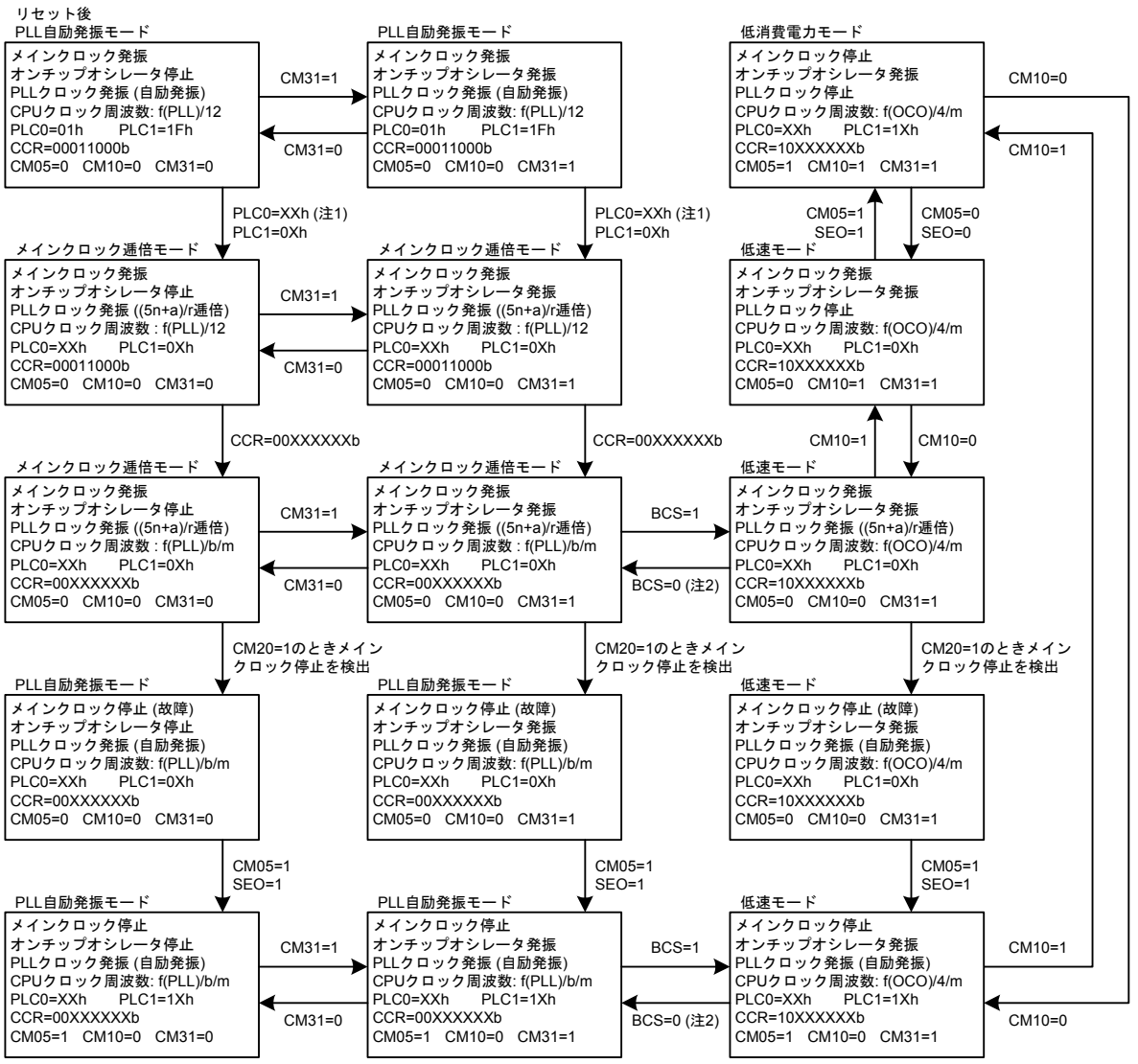
図 7.18　状態遷移図(サブクロック使用時)



→　: 矢印の向きに遷移できます。矢印のない方向へは遷移しないでください。

BCS:　CCRレジスタのビット　　CM10:　CM1レジスタのビット　　CM30:　CM3レジスタのビット
CM05:　CM0レジスタのビット　　CM20:　CM2レジスタのビット　　SEO:　PLC1レジスタのビット
PLC0=XXh: PLC0レジスタのMCV4~MCV0ビット、SCV2~SCV0ビットでPLLの逓倍率を設定してください。
PLC1=0Xh: PLC1レジスタのRCV3~RCV0ビットでリファレンスクロックの分周値を設定してください。
ただし、PLLの発振周波数が電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。
CCR=00XXXXXXb: CCRレジスタで各クロックの分周値を設定してください。
ただし、CPUクロック周波数、周辺バスクロック周波数が、それぞれ電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。
注1. PLC0レジスタはリセット解除後に1度だけ設定できます。
注2. PLLクロックの発振が十分に安定してから切り替えてください。

図 7.19　状態遷移図(メインクロックの256分周使用時)



→　: 矢印の向きに遷移できます。矢印のない方向へは遷移しないでください。

BCS:　CCRレジスタのビット　　CM10:　CM1レジスタのビット　　CM31:　CM3レジスタのビット
CM05:　CM0レジスタのビット　　CM20:　CM2レジスタのビット　　SEO:　PLC1レジスタのビット
PLC0=XXh: PLC0レジスタのMCV4~MCV0ビット、SCV2~SCV0ビットでPLLの逓倍率を設定してください。
PLC1=0Xh: PLC1レジスタのRCV3~RCV0ビットでリファレンスクロックの分周値を設定してください。
ただし、PLLの発振周波数が電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。
CCR=00XXXXXXb: CCRレジスタで各クロックの分周値を設定してください。
ただし、CPUクロック周波数、周辺バスクロック周波数が、それぞれ電気的特性に規定する最大値を超えないようにしてください。
注1. PLC0レジスタはリセット解除後に1度だけ設定できます。
注2. PLLクロックの発振が十分に安定してから切り替えてください。

図 7.20　状態遷移図(オンチップオシレータ使用時)

7.7.2 ウェイトモード

ウェイトモードではベースクロックが停止しますので、ベースクロックから作られるCPUクロックと周辺バスクロックも停止します。そのためこれらのクロックで動作するCPUとウォッチドッグタイマも停止します。ただし、PM2レジスタのPM22ビットが“1”(ウォッチドッグタイマのカウントソースはオンチップオシレータクロック)の場合、ウォッチドッグタイマは停止しません。メインクロック、サブクロック、PLLクロック、オンチップオシレータクロックは停止しませんので、これらのクロックを使用する周辺機能は動作します。

7.7.2.1 周辺機能クロック源停止機能

CM0レジスタのCM02ビットが“1”(ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止する)の場合、ウェイトモード時にf1、f8、f32、クロック源に周辺機能クロックを選択したときのf2n、fADが停止しますので、消費電力が低減できます。fC32と、クロック源にメインクロックを選択したときのf2nは停止しません。

7.7.2.2 ウェイトモードへの移行

WAIT命令を実行するとウェイトモードになります。
ウェイトモードを使用する場合、以下の設定を行った後、WAIT命令を実行してください。

- **初期設定での処理**
  復帰用割り込み優先レベル(RIPL1レジスタ、RIPL2レジスタのRLVL2~RLVL0ビット)を“7”にした後、各割り込み要求レベルを設定する
- **ウェイトモード移行前の処理**
  (1) Iフラグを“0”にする
  (2) 割り込み番号1~127の割り込みのうち割り込み要求レベルが“0”でないものを“0”にする
  (3) いずれかの割り込み制御レジスタをダミーリードする
  (4) フラグレジスタのIPLを“0”にする
  (5) 一時的に割り込みを許可する(以下の命令を実行)

```
FSET I
NOP
NOP
FCLR I
```

  (6) ウェイトモードからの復帰に使用する割り込みの割り込み要求レベルを設定する
  これ以降割り込み制御レジスタを書き換えないでください
  (7) フラグレジスタのIPLを設定する
  (8) 復帰用割り込み優先レベルをIPLと同じ値に設定する
  復帰に使用する割り込みの割り込み要求レベル > IPL = 復帰用割り込み優先レベル
  (9) 発振停止検出機能を使用している場合、CM2レジスタのCM20ビットを“0”(発振停止検出機能無効)にする
  (10)動作モードを低速モードまたは低消費電力モードに変更する
  (11)Iフラグを“1”にする
  (12)WAIT命令を実行する
- **ウェイトモード復帰後の処理**
  ウェイトモード復帰後、すぐに復帰用割り込み優先レベルを“7”にする

7.7.2.3 ウェイトモード時の端子の状態

表 7.4にウェイトモード時の端子の状態を示します。

表 7.4 ウェイトモード時の端子の状態

端子		ウェイトモード時の状態
ポート		ウェイトモードに入る直前の状態を保持
DA0, DA1		ウェイトモードに入る直前の状態を保持
CLKOUT	低速クロック選択時	クロック出力
	f8、f32選択時	CM0レジスタのCM02ビットが“0” (ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止しない)のときは、クロック出力。 CM02ビットが“1” (ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止する)のときは、ウェイトモードに入る直前の状態を保持

7.7.2.4 ウェイトモードからの復帰

ハードウェアリセット、NMI、または割り込み番号0~63に割り当てられている周辺機能割り込みにより、ウェイトモードから復帰します。

周辺機能割り込みを使用せず、ハードウェアリセットまたはNMIで復帰する場合、周辺機能割り込みのILVL2~ILVL0ビットを“000b” (割り込み禁止)にした後、WAIT命令を実行してください。

周辺機能割り込みはCM0レジスタのCM02ビットの影響を受けます。CM02ビットが“0” (ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止しない)の場合、割り込み番号0~63の周辺機能割り込みがウェイトモードからの復帰に使用できます。CM02ビットが“1” (ウェイトモード時、周辺機能クロック源を停止する)の場合、周辺機能クロック源から生成されるクロック(f1、f8、f32、クロック源に周辺機能クロック源を選択したf2n、fAD)で動作する周辺機能は停止しますので、ウェイトモードからの復帰に使用できません。ただし、周辺機能クロック源に依存しないクロック(fC32、外部クロック、クロック源にメインクロックを選択したf2n)で動作する周辺機能は停止しませんので、これらが生成する割り込みのうち、割り込み番号0~63に割り当てられた割り込みはウェイトモードからの復帰に使用できます。

周辺機能割り込みまたはNMIでウェイトモードから復帰したときのCPUクロックは、WAIT命令実行時のCPUクロックと同じクロックです。

表 7.5にウェイトモードからの復帰に使用できる割り込みと使用条件を示します。

表 7.5　ウェイトモードからの復帰に使用できる割り込みと使用条件

割り込み	CM02=0の場合	CM02=1の場合
NMI	使用可能	使用可能
外部割り込み	使用可能	使用可能
キー入力割り込み	使用可能	使用可能
電圧低下検出割り込み	使用可能	使用可能
ウォッチドッグタイマ割り込み	使用しないでください	使用しないでください
タイマA割り込み タイマB割り込み	すべてのモードで使用可能	イベントカウンタモード、またはカウントソースがfC32、f2n (クロック源にメインクロックを選択)のとき使用可能
シリアルインタフェース割り込み(注1)	内部クロックでも外部クロックでも使用可能	外部クロックまたはf2n (クロック源にメインクロックを選択)使用時は使用可能
A/D変換割り込み	単発モード、または単掃引モードで使用可能	使用しないでください
インテリジェントI/O割り込み	使用可能	使用しないでください
LIN“L” 検出割り込み	使用可能	使用可能
CANウェイクアップ割り込み	使用可能	使用可能

注1.　UART3、UART4を除く

7.7.3 ストップモード

ストップモードでは、停止しないように保護されたクロックを除くすべてのクロックの発振が停止します。したがって、CPUクロックと周辺機能クロックも停止し、これらのクロックで動作するCPU、周辺機能は停止します。消費電力がもっとも少ないモードです。

7.7.3.1 ストップモードへの移行

STOP命令を実行すると、ストップモードになります。
ストップモードを使用する場合、以下の設定を行った後、STOP命令を実行してください。

- **初期設定での処理**

  復帰用割り込み優先レベル(RIPL1レジスタ、RIPL2レジスタのRLVL2~RLVL0ビット)を“7”にした後、各割り込み要求レベルを設定する

- **ストップモード移行前の処理**

(1) Iフラグを“0”にする
(2) 割り込み番号1~127の割り込みのうち割り込み要求レベルが“0”でないものを“0”にする
(3) いずれかの割り込み制御レジスタをダミーリードする
(4) フラグレジスタのIPLを“0”にする
(5) 一時的に割り込みを許可する(以下の命令を実行)

```
FSET I
NOP
NOP
FCLR I
```

(6) ストップモードからの復帰に使用する割り込みの割り込み要求レベルを設定する
これ以降割り込み制御レジスタを書き換えないでください
(7) フラグレジスタのIPLを設定する
(8) 復帰用割り込み優先レベルをIPLと同じ値に設定する
復帰に使用する割り込みの割り込み要求レベル > IPL = 復帰用割り込み優先レベル
(9) 発振停止検出機能を使用している場合、CM2レジスタのCM20ビットを“0”(発振停止検出機能無効)にする
(10)ベースクロックをメインクロックの256分周(f256)またはオンチップオシレータの4分周(fOCO4)に変更する
(11)Iフラグを“1”にする
(12)STOP命令を実行する

- **ストップモード復帰後の処理**

  ストップモード復帰後、すぐに復帰用割り込み優先レベルを“7”にする

7.7.3.2　ストップモード時の端子の状態

表 7.6にストップモード時の端子の状態を示します。

表 7.6　ストップモード時の端子の状態

端子		ストップモード時の状態
ポート		ストップモードに入る直前の状態を保持
DA0, DA1		ストップモードに入る直前の状態を保持
CLKOUT	低速クロック選択時	“H”
	f8、f32選択時	ストップモードに入る直前の状態を保持
XIN		ハイインピーダンス
XOUT		“H”
XCIN, XCOUT		ハイインピーダンス

7.7.3.3　ストップモードからの復帰

ハードウェアリセット、NMI、電圧低下検出割り込み、または割り込み番号 0~63 に割り当てられている周辺機能割り込みにより、ストップモードから復帰します。

周辺機能割り込みを使用せず、ハードウェアリセットまたはNMI で復帰する場合、周辺機能割り込みのILVL2~ILVL0ビットをすべて“000b” (割り込み禁止)にした後、STOP命令を実行してください。

周辺機能割り込みまたはNMIでストップモードから復帰したときのCPUクロックは、STOP命令実行時のCPUクロックと同じクロックです。

表 7.7にストップモードからの復帰に使用できる割り込みと使用条件を示します。

表 7.7　ストップモードからの復帰に使用できる割り込みと使用条件

割り込み	条件
NMI	
電圧低下検出割り込み	
外部割り込み	
キー入力割り込み	
タイマA割り込み タイマB割り込み	イベントカウンタモードで周波数100Hz以下の外部パルスのカウント時
シリアルインタフェース割り込み(注1)	外部クロック使用時
LIN“L” 検出割り込み	
CANウェイクアップ割り込み	

注1.　UART3、UART4を除く

7.8 システムクロック保護機能

ベースクロックのクロック源にPLLクロックを選択しているとき、プログラムの暴走でCPUクロックが停止しないようにクロックの変更を禁止する機能です。

PM2レジスタのPM21ビットを“1”(クロックの変更禁止)にすると、以下のビットに書き込めなくなります。

- CM0レジスタのCM02ビット、CM05ビット
- CM1レジスタのCM10ビット
- CM2レジスタのCM20ビット
- PM2レジスタのPM27ビット

システムクロック保護機能を使用する場合、CM0レジスタのCM05ビットが“0”(メインクロック発振)、CCRレジスタのBCSビットが“0”(ベースクロックのクロック源はPLLクロック)の状態で以下の処理をしてください。

(1) PRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(PM2レジスタ書き込み許可)にする
(2) PM2レジスタのPM21ビットを“1”(クロック変更禁止)にする
(3) PRCRレジスタのPRC1ビットを“0”(PM2レジスタ書き込み禁止)にする

7.9 クロック発生回路使用上の注意

7.9.1 サブクロック

7.9.1.1 発振回路定数のマッチングの確認

サブクロック発振回路の発振回路定数のマッチングは、駆動能力Highと駆動能力Lowの両方とも確認してください。

発振回路定数のマッチングに関しては発振子メーカにお問い合わせください。

7.9.2 パワーコントロール

ベースクロック源を切り替えるとき、クロック分周比を切り替えるときは、使用するクロックの発振が安定してから切り替えてください。オンチップオシレータはCM3レジスタのCM31ビットを“1”にすると瞬時に発振を開始しますので、発振安定を待つ必要はありません。

ベースクロック源をPLLクロックから低速クロックに切り替える(CCRレジスタのBCSビットを“1”にする)場合は、MOV.L命令またはOR.L命令を使用してください。

- アセンブリ言語の場合の例

```
OR.L    #80h, 0004h
```

- C言語の場合の例

```
asm("OR.L  #80h, 0004h");
```

7.9.2.1 ストップモード

- ストップモードからリセットによって復帰する場合、メインクロックの発振が充分に安定するまで$\overline{\text{RESET}}$端子に“L”を入力してください。

7.9.2.2 消費電力を低減するためのポイント

システム設計やプログラムを作成するときに参考にしてください。

- 端子処理

入力端子を開放のままにすると、貫通電流が流れることがあります。未使用端子は入力に設定し、端子ごとに抵抗を介してVSSに接続(プルダウン)するか、または出力に設定し、端子を開放してください。

- A/Dコンバータ

A/D変換を行わないときはAD0CON1レジスタのVCUTビットを“0”(VREF未接続)にしてください。なお、A/D変換を行うときは、VCUTビットを“1”(VREF接続)にしてから1μs以上経過した後、A/D変換を開始させてください。

- D/Aコンバータ

D/A変換を行わないときは、DACONレジスタのDAiEビット(i=0, 1)を“0”(出力禁止)にし、DAiレジスタを“00h”にしてください。

- 周辺機能の停止

ウェイトモードへ移行するとき、CM0レジスタのCM02ビットで周辺機能クロック源を停止することにより、消費電力を低減させることができます。ただし、fC32は停止しません。

8. バス

バスには、高速に動作するCPUバスと、低速な周辺バスがあります。バスブロック図を図8.1に示します。

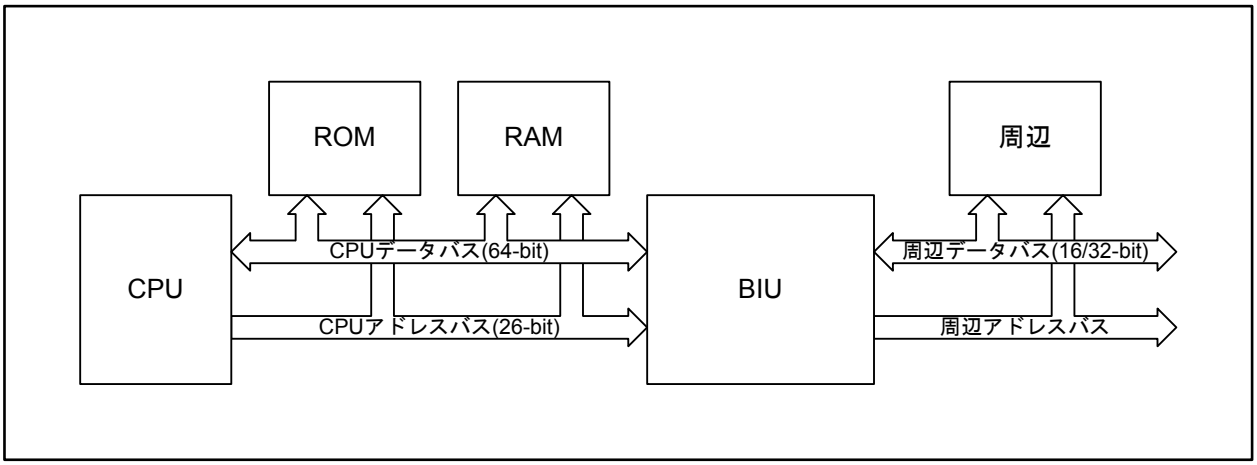


図 8.1 バスブロック図

8.1 バス設定

バスの設定は、PBCレジスタで切り替えられます。

表8.1にバスの設定と切り替え要因を示します。

表 8.1 バスの設定と切り替え要因

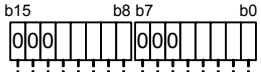
バスの設定	切り替え要因
内部SFRバスタイミング	PBCレジスタ

8.2 周辺バスタイミングの設定

周辺バスは最大32MHz (理論値。品種ごとの最大値は「29. 電気的特性」に定めるf(BCLK)の値になります)で動作する16/32ビット幅のバスです。高速に動作する64ビット幅のCPUバスとのタイミング調整、バス幅変換は、バスインタフェースユニット(BIU)で行います。

周辺バスのタイミングを設定するPBCレジスタを図8.2に示します。

周辺バス制御レジスタ (注1、2)



シンボル	アドレス	リセット後の値
PBC	001Fh-001Eh番地	0504h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PRD0	リードタイミング設定ビット	周辺バスクロックの設定 (CCRレジスタのPCD1~PCD0ビット) により以下のいずれかを設定してください。 (1) PCD1~PCD0ビットが“01b”　“00100b”を設定してください (2) PCD1~PCD0ビットが“10b”　“01101b”を設定してください (3) PCD1~PCD0ビットが“11b”　“01111b”を設定してください	RW
PRD1			RW
PRD2			RW
PRD3			RW
PRD4			RW
— (b7-b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW
PWR0	ライトタイミング設定ビット	周辺バスクロックの設定 (CCRレジスタのPCD1~PCD0ビット) により以下のいずれかを設定してください。 (1) PCD1~PCD0ビットが“01b”　“00101b”を設定してください (2) PCD1~PCD0ビットが“10b”　“01010b”を設定してください (3) PCD1~PCD0ビットが“11b”　“01111b”を設定してください	RW
PWR1			RW
PWR2			RW
PWR3			RW
PWR4			RW
— (b15-b13)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRRレジスタの値を“AAh”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。
注2. このレジスタは、リセット後1回だけ設定してください。また、CCRレジスタ設定後、このレジスタを書き換えないでください。

図8.2 PBCレジスタ

9. プロテクト

プロテクトはプログラムが暴走したときに備え、重要なレジスタが容易に書き換えられないように保護する機能です。PRCR レジスタと、PRCR2~PRCR4 レジスタ、PRR レジスタがあります。

9.1 プロテクトレジスタ (PRCR レジスタ)

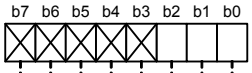
図 9.1 にPRCR レジスタを示します。PRCR レジスタが保護するレジスタは表 9.1 のとおりです。

表 9.1　PRCR レジスタが保護するレジスタ

ビット	保護されるレジスタ
PRC0 ビット	CM0 レジスタ、CM1 レジスタ、CM2 レジスタ、PM3 レジスタ
PRC1 ビット	PM0 レジスタ、PM2 レジスタ、INVC0 レジスタ、INVC1 レジスタ、IOBC レジスタ
PRC2 ビット	PLC0 レジスタ、PLC1 レジスタ、PD9 レジスタ、P9_iS レジスタ (i=3~7)

PRC2 ビットを“1” (書き込み許可)にした後､任意の番地に書き込みを実行すると“0” (書き込み禁止)になります。PD9 レジスタ、P9_iS レジスタ (i=3~7)、PLC0 レジスタ、PLC1 レジスタは、PRC2 ビットを“1”にした次の命令で変更してください。また、PRC2 ビットを“1”にする命令と次の命令の間に割り込みやDMA 転送が入らないようにしてください。PRC0、PRC1 ビットは任意の番地に書き込みを実行しても“0”になりませんのでプログラムで“0”にしてください。

プロテクトレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
PRCR	4004Ah番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PRC0	プロテクトビット0	CM0、CM1、CM2、PM3レジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
PRC1	プロテクトビット1	PM0、PM2、INVC0、INVC1、IOBCレジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
PRC2	プロテクトビット2　(注1)	PLC0、PLC1、PD9、P9_iS (i=3~7) レジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

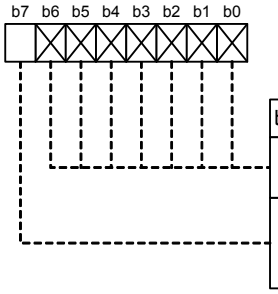
注1. PRC2ビットは“1”を書いた後、任意の番地に書き込みを実行すると“0”になります。
他のビットは“0”になりませんので、プログラムで“0”にしてください。

図 9.1　PRCR レジスタ

9.2 プロテクトレジスタ2 (PRCR2レジスタ)

図 9.2にPRCR2レジスタを示します。PRCR2レジスタが保護するレジスタはCM3レジスタのみです。

プロテクトレジスタ2



シンボル	アドレス	リセット後の値
PRCR2	4405Fh番地	0XXX XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b6-b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
PRC27	CM3プロテクトビット	CM3レジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW

図 9.2 PRCR2レジスタ

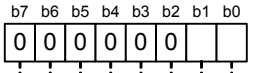
9.3 プロテクトレジスタ3 (PRCR3レジスタ)

図 9.3にPRCR3レジスタを示します。PRCR3レジスタが保護するレジスタは表 9.2のとおりです。

表 9.2 PRCR3レジスタが保護するレジスタ (i=0~7)

ビット	保護されるレジスタ
PRC30ビット	PD3レジスタ、P3_iSレジスタ、PD7レジスタ、P7_iSレジスタ、PD8レジスタ、P8_iSレジスタ
PRC31ビット	VRCRレジスタ、LVDCレジスタ、DVCRレジスタ

プロテクトレジスタ3



シンボル	アドレス	リセット後の値
PRCR3	4004Ch番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PRC30	プロテクトビット30	PD3、P3_iS、PD7、P7_iS、PD8、P8_iSレジスタに対する書き込み許可 (i=0~7) 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
PRC31	プロテクトビット31	VRCR、LVDC、DVCRレジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
— (b7-b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW

図 9.3 PRCR3レジスタ

9.4 プロテクトレジスタ4 (PRCR4レジスタ)

図9.4にPRCR4レジスタを示します。PRCR4レジスタが保護するレジスタは表9.3のとおりです。

表9.3 PRCR4レジスタが保護するレジスタ

ビット	保護されるレジスタ
PRC40ビット	WDTSレジスタ
PRC41ビット	E2FMレジスタ

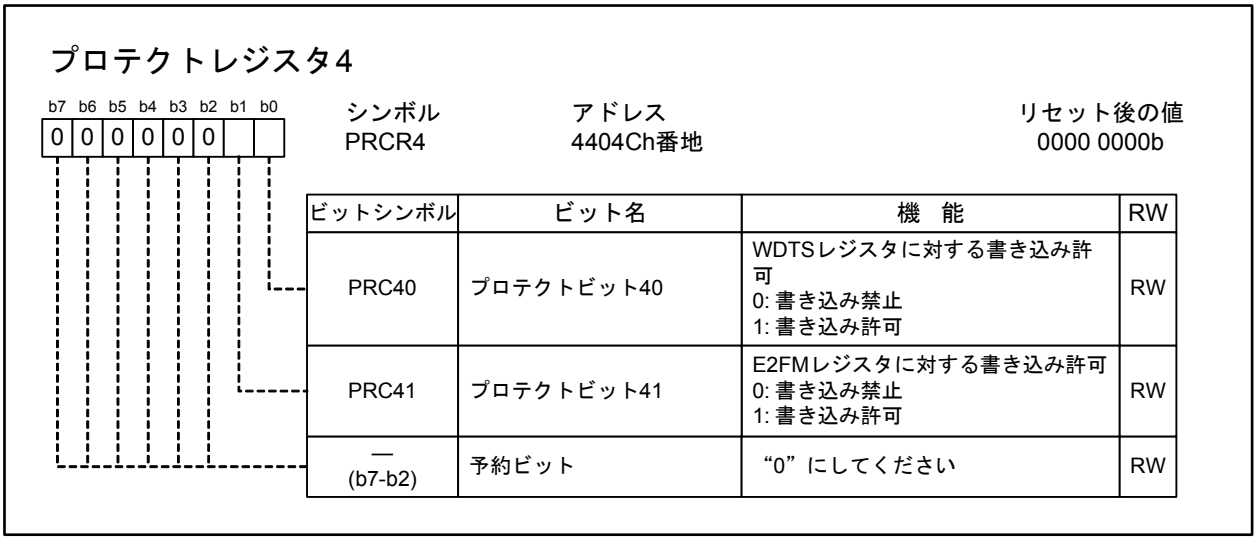


図9.4 PRCR4レジスタ

9.5 プロテクト解除レジスタ (PRR レジスタ)

図 9.5にPRR レジスタを示します。PRR レジスタが保護するレジスタは表 9.4のとおりです。

表 9.4 PRR レジスタが保護するレジスタ

CCR レジスタ、FMCR レジスタ、PBC レジスタ、FEBC レジスタ

PRR レジスタに“AAh” (書き込み許可) を書いた後、上記のレジスタに書き込みできます。上記のレジスタにデータを書く必要がないときは、意図しない書き込みから上記レジスタを保護するために、PRR レジスタには“AAh”以外の値を書いてください。

プロテクト解除レジスタ

b7 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PRR	0007h番地	00h

機 能	設定範囲	RW
CCR、FMCR、PBC、FEBCレジスタに対するプロテクトを制御します AAh: 書き込み許可 AAh以外: 書き込み禁止	00h~FFh	RW

図 9.5 PRR レジスタ

10. 割り込み

10.1 割り込みの分類

図 10.1に割り込みの分類を示します。

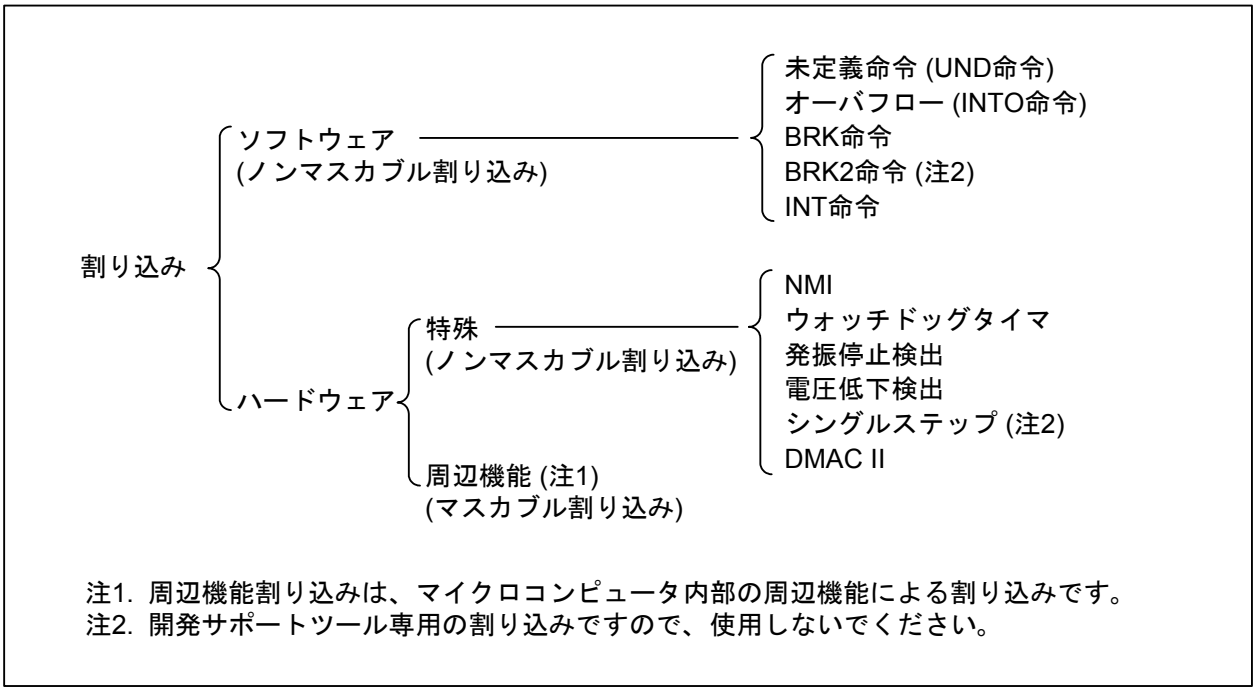


図 10.1　割り込みの分類

また、上記分類のほか、マスクの可、不可によりマスカブル割り込みとノンマスカブル割り込みに分類できます。

(1) マスカブル割り込み

割り込み許可フラグ (I フラグ) による割り込み許可 / 禁止や、割り込み要求レベルによる割り込み優先順位の変更が可能な割り込みです。

(2) ノンマスカブル割り込み

割り込み許可フラグ (I フラグ) による割り込み許可 / 禁止や、割り込み要求レベルによる割り込み優先順位の変更が不可能な割り込みです。

10.2 ソフトウェア割り込み

ソフトウェア割り込みは、命令の実行によって発生します。ソフトウェア割り込みはノンマスカブル割り込みです。

ソフトウェア割り込みには以下の5つがあります。

(1) 未定義命令割り込み

未定義命令割り込みは、UND命令を実行すると発生します。

(2) オーバフロー割り込み

オーバフロー割り込みは、オーバフローフラグ(Oフラグ)が“1”のときINTO命令を実行すると発生します。演算によってOフラグが変化する命令は以下の通りです。

ABS、ADC、ADCF、ADD、ADDF、ADSF、CMP、CMPF、CNVIF、DIV、DIVF、DIVU、DIVX、EDIV、EDIVU、EDIVX、MUL、MULF、MULU、MULX、NEG、RMPA、ROUND、SBB、SCMPU、SHA、SUB、SUBF、SUNTIL、SWHILE

(3) BRK命令割り込み

BRK命令割り込みはBRK命令を実行すると発生します。

(4) BRK2命令割り込み

BRK2命令割り込みはBRK2命令を実行すると発生します。

開発サポートツール専用の割り込みですので、使用しないでください。

(5) INT命令割り込み

INT命令割り込みは、ソフトウェア割り込み番号0~255を指定し、INT命令を実行すると発生します。なお、ソフトウェア割り込み番号0~127は周辺機能割り込みに割り当てられますので、INT命令を実行することで周辺機能割り込みと同じ割り込み処理ルーチンを実行できます。

INT命令割り込みに使用するスタックポインタ(SP)は、ソフトウェア割り込み番号によって異なります。ソフトウェア割り込み番号0~127では、割り込み要求受け付け時にスタックポインタ指定フラグ(Uフラグ)を退避し、Uフラグを“0”にして割り込みスタックポインタ(ISP)を選択した後、割り込みシーケンスを実行します。割り込み処理ルーチンから復帰するときに割り込み要求受け付け前のUフラグが復帰されます。ソフトウェア割り込み番号128~255では、スタックポインタは切り替わりません。

10.3 ハードウェア割り込み

ハードウェア割り込みには、特殊割り込みと周辺機能割り込みがあります。
周辺機能割り込みでは最優先の割り込み1つだけに高速割り込みを設定することができます。

10.3.1 特殊割り込み

特殊割り込みはノンマスカブル割り込みです。特殊割り込みには以下の5つがあります。

(1) NMI (Non Maskable Interrupt)

NMIは、$\overline{\text{NMI}}$端子からの入力信号が“H”から“L”に変化すると発生します。NMIの詳細は、「10.11 NMI」を参照してください。

(2) ウォッチドッグタイマ割り込み

ウォッチドッグタイマによる割り込みです。ウォッチドッグタイマ割り込みの詳細は、「11. ウォッチドッグタイマ」を参照してください。

(3) 発振停止検出割り込み

発振停止検出機能により、メインクロックの発振停止を検出すると発生する割り込みです。発振停止検出の詳細は、「7.2 発振停止検出機能」を参照してください。

(4) 電圧低下検出割り込み

電圧検出回路機能により、VCC端子の電圧低下を検出すると発生する割り込みです。電圧検出回路の詳細は、「6.2 電圧低下検出回路」を参照してください。

(5) シングルステップ割り込み

開発サポートツール専用の割り込みですので、使用しないでください。

10.3.2 周辺機能割り込み

周辺機能割り込みは、マイクロコンピュータ内部の周辺機能による割り込みです。割り込みベクタテーブルはINT命令で使用するソフトウェア割り込み番号0~127と同一です。周辺機能割り込みは、マスカブル割り込みです。

周辺機能割り込みの割り込み要因は、表10.2~表10.5を参照してください。また、周辺機能の詳細は、各機能の説明を参照してください。

10.4 高速割り込み

高速割り込みは、割り込みの応答を高速に実行できる割り込みで、周辺機能割り込みの中で最優先の割り込み1つだけに使用できます。

高速割り込みは以下の手順で利用できます。

(1) RIPL1レジスタとRIPL2レジスタの両方のFSITビットを“1”(割り込み要求レベル7は高速割り込みに使用)にする
(2) RIPL1レジスタとRIPL2レジスタの両方のDMAIIビットを“0”(割り込み要求レベル7は割り込みに使用)にする
(3) 高速割り込み処理ルーチンの先頭番地をVCTレジスタに設定する

この状態で割り込み制御レジスタのILVL2~ILVL0ビットを“111b”(レベル7)にした割り込みが高速割り込みとなります。このとき複数の割り込みをレベル7にしないでください。

高速割り込みでは割り込みを受け付けると、FLGレジスタをSVFレジスタ、PCをSVPレジスタに退避し、VCTレジスタで示される番地からプログラムを実行します。

高速割り込み処理ルーチンからの復帰にはFREIT命令を実行してください。FREIT命令を実行すると、SVFレジスタ、SVPレジスタに退避していた値が、それぞれFLGレジスタ、PCに復帰します。

10.5　割り込みベクタ

割り込みベクタはそれぞれ4バイトから構成されています。割り込みベクタには割り込み処理ルーチンの先頭番地を設定してください。割り込み要求が受け付けられると、割り込みベクタに設定した番地へ分岐します。図10.2に割り込みベクタの内容を示します。

図 10.2　割り込みベクタ

10.5.1　固定ベクタテーブル

固定ベクタテーブルはFFFFFFDCh番地からFFFFFFFFh番地に配置されています。表10.1に固定ベクタテーブルを示します。

表 10.1　固定ベクタテーブル

割り込み要因	ベクタテーブル番地 (番地(L)~番地(H))	備　考	参照先
未定義命令	FFFFFFDCh~FFFFFFDFh	UND命令で割り込み	R32C/100シリーズ ソフトウェアマニュアル
オーバフロー	FFFFFFE0h~FFFFFFE3h	INTO命令で割り込み	
BRK命令	FFFFFFE4h~FFFFFFE7h	FFFFFFE7h番地が“FFh”の場合は可変ベクタテーブル内のソフトウェア割り込み番号0のベクタが示す番地へ分岐	
—	FFFFFFE8h~FFFFFFEBh	予約領域	
—	FFFFFFECh~FFFFFFEFh	予約領域	
ウォッチドッグタイマ 発振停止検出 電圧低下検出	FFFFFFF0h~FFFFFFF3h	ウォッチドッグタイマ割り込みと発振停止検出割り込みと電圧低下検出割り込みで共用	11. ウォッチドッグタイマ 7. クロック発生回路 6.2 電圧低下検出回路
—	FFFFFFF4h~FFFFFFF7h	予約領域	
NMI	FFFFFFF8h~FFFFFFFBh	$\overline{\text{NMI}}$端子による外部割り込み	
リセット	FFFFFFFCh~FFFFFFFFh		5. リセット

10.5.2 可変ベクタテーブル

INTB レジスタに設定された先頭番地から 1024 バイトが可変ベクタテーブルの領域となります。表 10.2~表 10.5に可変ベクタテーブルを示します。

INTB レジスタに設定する値は4の倍数にしてください。4の倍数を設定したほうが割り込みシーケンスの実行速度が速くなります。

表 10.2　可変ベクタテーブル(1)

割り込み要因	ベクタテーブル相対番地 (番地(L)~番地(H))(注1)	ソフトウェア 割り込み番号	参照先
BRK命令(注2)	+0~+3 (0000h~0003h)	0	R32C/100シリーズ ソフトウェア マニュアル
予約領域	+4~+7 (0004h~0007h)	1	
予約領域	+8~+11 (0008h~000Bh)	2	17. シリアルインタフェース (予約)
予約領域	+12~+15 (000Ch~000Fh)	3	
予約領域	+16~+19 (0010h~0013h)	4	
予約領域	+20~+23 (0014h~0017h)	5	
予約領域	+24~+27 (0018h~001Bh)	6	
予約領域	+28~+31 (001Ch~001Fh)	7	
DMA0転送完了	+32~+35 (0020h~0023h)	8	12. DMAC
DMA1転送完了	+36~+39 (0024h~0027h)	9	
DMA2転送完了	+40~+43 (0028h~002Bh)	10	
DMA3転送完了	+44~+47 (002Ch~002Fh)	11	
タイマA0	+48~+51 (0030h~0033h)	12	15.1 タイマA
タイマA1	+52~+55 (0034h~0037h)	13	
タイマA2	+56~+59 (0038h~003Bh)	14	
タイマA3	+60~+63 (003Ch~003Fh)	15	
タイマA4	+64~+67 (0040h~0043h)	16	
UART0送信、NACK (注3)	+68~+71 (0044h~0047h)	17	17. シリアルインタフェース
UART0受信、ACK (注3)	+72~+75 (0048h~004Bh)	18	
UART1送信、NACK (注3)	+76~+79 (004Ch~004Fh)	19	
UART1受信、ACK (注3)	+80~+83 (0050h~0053h)	20	
タイマB0	+84~+87 (0054h~0057h)	21	15.2 タイマB
タイマB1	+88~+91 (0058h~005Bh)	22	
タイマB2	+92~+95 (005Ch~005Fh)	23	
タイマB3	+96~+99 (0060h~0063h)	24	
タイマB4	+100~+103 (0064h~0067h)	25	
INT5	+104~+107 (0068h~006Bh)	26	10.10 外部割り込み
INT4	+108~+111 (006Ch~006Fh)	27	
INT3	+112~+115 (0070h~0073h)	28	
INT2	+116~+119 (0074h~0077h)	29	
INT1	+120~+123 (0078h~007Bh)	30	
INT0	+124~+127 (007Ch~007Fh)	31	
タイマB5	+128~+131 (0080h~0083h)	32	15.2 タイマB

注1.　INTB レジスタが示す番地からの相対番地です。

注2.　I フラグで割り込み禁止にはできません。

注3.　I^2C モード時、NACK、ACK、スタートコンディション/ストップコンディション検出が割り込み要因になります。

表 10.3　可変ベクタテーブル(2)

割り込み要因	ベクタテーブル相対番地 (番地(L)~番地(H))(注1)	ソフトウェア 割り込み番号	参照先
UART2送信、NACK (注2)	+132~+135 (0084h~0087h)	33	17. シリアルインタフェース
UART2受信、ACK (注2)	+136~+139 (0088h~008Bh)	34	
予約領域	+140~+143 (008Ch~008Fh)	35	
予約領域	+144~+147 (0090h~0093h)	36	
予約領域	+148~+151 (0094h~0097h)	37	
予約領域	+152~+155 (0098h~009Bh)	38	
スタートコンディション検出またはストップコンディション検出(UART2) (注2)	+156~+159 (009Ch~009Fh)	39	
スタートコンディション検出またはストップコンディション検出(UART0) (注2)	+160~+163 (00A0h~00A3h)	40	
スタートコンディション検出またはストップコンディション検出(UART1) (注2)	+164~+167 (00A4h~00A7h)	41	
A/D0	+168~+171 (00A8h~00ABh)	42	18. A/Dコンバータ
キー入力	+172~+175 (00ACh~00AFh)	43	10.12 キー入力割り込み
インテリジェントI/O割り込み0	+176~+179 (00B0h~00B3h)	44	10.13 インテリジェントI/O割り込み、22. インテリジェントI/O
インテリジェントI/O割り込み1	+180~+183 (00B4h~00B7h)	45	
インテリジェントI/O割り込み2	+184~+187 (00B8h~00BBh)	46	
インテリジェントI/O割り込み3	+188~+191 (00BCh~00BFh)	47	
インテリジェントI/O割り込み4	+192~+195 (00C0h~00C3h)	48	
インテリジェントI/O割り込み5	+196~+199 (00C4h~00C7h)	49	
インテリジェントI/O割り込み6	+200~+203 (00C8h~00CBh)	50	
インテリジェントI/O割り込み7	+204~+207 (00CCh~00CFh)	51	
インテリジェントI/O割り込み8	+208~+211 (00D0h~00D3h)	52	
インテリジェントI/O割り込み9	+212~+215 (00D4h~00D7h)	53	
インテリジェントI/O割り込み10	+216~+219 (00D8h~00DBh)	54	
インテリジェントI/O割り込み11	+220~+223 (00DCh~00DFh)	55	
予約領域	+224~+227 (00E0h~00E3h)	56	
予約領域	+228~+231 (00E4h~00E7h)	57	
CAN0ウェイクアップ	+232~+235 (00E8h~00EBh)	58	25. CANモジュール
予約領域	+236~+239 (00ECh~00EFh)	59	
予約領域	+240~+243 (00F0h~00F3h)	60	
予約領域	+244~+247 (00F4h~00F7h)	61	
LIN “L”検出	+248~+251 (00F8h~00FBh)	62	24. LINモジュール
予約領域	+252~+255 (00FCh~00FFh)	63	

注1.　INTBレジスタが示す番地からの相対番地です。

注2.　I^2Cモード時、NACK、ACK、スタートコンディション/ストップコンディション検出が割り込み要因になります。

表 10.4　可変ベクタテーブル(3)(注1)

割り込み要因	ベクタテーブル相対番地 (番地(L)~番地(H))(注2)	ソフトウェア 割り込み番号	参照先
シリアルバスインタフェース0	+256~+259 (0100h~0103h)	64	23. シリアルバスインタフェース
予約領域	+260~+263 (0104h~0107h)	65	
予約領域	+264~+267 (0108h~010Bh)	66	
予約領域	+268~+271 (010Ch~010Fh)	67	
予約領域	+272~+275 (0110h~0113h)	68	
予約領域	+276~+279 (0114h~0117h)	69	
予約領域	+280~+283 (0118h~011Bh)	70	
予約領域	+284~+287 (011Ch~011Fh)	71	
予約領域	+288~+291 (0120h~0123h)	72	
予約領域	+292~+295 (0124h~0127h)	73	
予約領域	+296~+299 (0128h~012Bh)	74	
予約領域	+300~+303 (012Ch~012Fh)	75	
予約領域	+304~+307 (0130h~0133h)	76	
予約領域	+308~+311 (0134h~0137h)	77	
予約領域	+312~+315 (0138h~013Bh)	78	
予約領域	+316~+319 (013Ch~013Fh)	79	
CAN0送信FIFO	+320~+323 (0140h~0143h)	80	25. CANモジュール
CAN0受信FIFO	+324~+327 (0144h~0147h)	81	
予約領域	+328~+331 (0148h~014Bh)	82	
予約領域	+332~+335 (014Ch~014Fh)	83	
予約領域	+336~+339 (0150h~0153h)	84	
予約領域	+340~+343 (0154h~0157h)	85	
予約領域	+344~+347 (0158h~015Bh)	86	
予約領域	+348~+351 (015Ch~015Fh)	87	
E^2データフラッシュ	+352~+355 (0160h~0163h)	88	28. E^2PROMエミュレーションデータフラッシュ
予約領域	+356~+359 (0164h~0167h)	89	
予約領域	+360~+363 (0168h~016Bh)	90	
予約領域	+364~+367 (016Ch~016Fh)	91	
予約領域	+368~+371 (0170h~0173h)	92	
予約領域	+372~+375 (0174h~0177h)	93	
予約領域	+376~+379 (0178h~017Bh)	94	
予約領域	+380~+383 (017Ch~017Fh)	95	

注1.　ウェイトモード、ストップモードからの復帰には使用できません。
注2.　INTBレジスタが示す番地からの相対番地です。

表 10.5　可変ベクタテーブル(4)(注1)

割り込み要因	ベクタテーブル相対番地 (番地(L)~番地(H))(注2)	ソフトウェア 割り込み番号	参照先
CAN0送信	+384~+387 (0180h~0183h)	96	25. CANモジュール
CAN0受信	+388~+391 (0184h~0187h)	97	
CAN0エラー	+392~+395 (0188h~018Bh)	98	
予約領域	+396~+399 (018Ch~018Fh)	99	
予約領域	+400~+403 (0190h~0193h)	100	
予約領域	+404~+407 (0194h~0197h)	101	
予約領域	+408~+411 (0198h~019Bh)	102	
予約領域	+412~+415 (019Ch~019Fh)	103	
予約領域	+416~+419 (01A0h~01A3h)	104	
予約領域	+420~+423 (01A4h~01A7h)	105	
予約領域	+424~+427 (01A8h~01ABh)	106	
予約領域	+428~+431 (01ACh~01AFh)	107	
予約領域	+432~+435 (01B0h~01B3h)	108	
予約領域	+436~+439 (01B4h~01B7h)	109	
予約領域	+440~+443 (01B8h~01BBh)	110	
予約領域	+444~+447 (01BCh~01BFh)	111	
予約領域	+448~+451 (01C0h~01C3h)	112	
予約領域	+452~+455 (01C4h~01C7h)	113	
予約領域	+456~+459 (01C8h~01CBh)	114	
予約領域	+460~+463 (01CCh~01CFh)	115	
LIN0	+464~+467 (01D0h~01D3h)	116	24. LINモジュール
LIN1	+468~+471 (01D4h~01D7h)	117	
予約領域	+472~+475 (01D8h~01DBh)	118	
予約領域	+476~+479 (01DCh~01DFh)	119	
予約領域	+480~+483 (01E0h~01E3h)	120	
予約領域	+484~+487 (01E4h~01E7h)	121	
予約領域	+488~+491 (01E8h~01EBh)	122	
予約領域	+492~+495 (01ECh~01EFh)	123	
UART3送信	+496~+499 (01F0h~01F3h)	124	17. シリアルインタフェース
UART3受信	+500~+503 (01F4h~01F7h)	125	
UART4送信	+504~+507 (01F8h~01FBh)	126	
UART4受信	+508~+511 (01FCh~01FFh)	127	
INT命令(注3)	+0~+3 (0000h~0003h) ~ +1020~+1023 (03FCh~03FFh)	0 ~ 255	10.2 ソフトウェア割り込み

注1.　ウェイトモード、ストップモードからの復帰には使用できません。
注2.　INTBレジスタが示す番地からの相対番地です。
注3.　Iフラグで割り込み禁止にはできません。

10.6 割り込み要求の受け付け

ソフトウェア割り込みと特殊割り込みは、割り込み要求が発生すると無条件に受け付けられます。
周辺機能割り込みは以下の3つの条件がすべて成立したとき受け付けられます。

- Iフラグ =1
- IR ビット =1
- ILVL2~ILVL0 ビット > IPL

I フラグ、IPL、IR ビット、ILVL2~ILVL0 ビットはそれぞれ独立しており、互いに影響を与えることはありません。IフラグとIPLはFLGレジスタにあります。IRビットとILVL2~ILVL0ビットは割り込み制御レジスタにあります。

これらのフラグ、ビットについて以下で説明します。

10.6.1 Iフラグと IPL

Iフラグ(割り込み許可フラグ)は、マスカブル割り込みを禁止または許可します。Iフラグを“1”(許可)にすると、すべてのマスカブル割り込みは許可され、“0”(禁止)にすると禁止されます。Iフラグはリセット後“0”(禁止)になります。

IPL(プロセッサ割り込み優先レベル)は3ビットで構成されており、レベル0~7の8段階のプロセッサ割り込み優先レベルを示します。要求があった割り込みの割り込み要求レベル(ILVL2~ILVL0)がIPLより大きい場合、その割り込みは許可されます。

表 10.6にIPLの内容による割り込み許可レベルを示します。

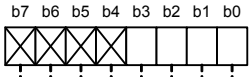
表 10.6 プロセッサ割り込み優先レベル(IPL)の内容と受け付けられる割り込み要求レベル

プロセッサ割り込み優先レベル(IPL)			受け付けられる割り込み要求レベル
IPL2	IPL1	IPL0	
1	1	1	すべてのマスカブル割り込みを禁止
1	1	0	レベル7のみを許可
1	0	1	レベル6以上を許可
1	0	0	レベル5以上を許可
0	1	1	レベル4以上を許可
0	1	0	レベル3以上を許可
0	0	1	レベル2以上を許可
0	0	0	レベル1以上を許可

10.6.2　割り込み制御レジスタ

周辺機能割り込みは、各割り込みを制御する割り込み制御レジスタを持ちます。
図 10.3、図 10.4に割り込み制御レジスタを示します。

割り込み制御レジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0IC~TA4IC	006Ch、008Ch、006Eh、008Eh、0070h番地	XXXX X000b
TB0IC~TB5IC	0094h、0076h、0096h、0078h、0098h、0061h番地	XXXX X000b
S0TIC~S4TIC	0090h、0092h、0081h、00DDh、00DFh番地	XXXX X000b
S0RIC~S4RIC	0072h、0074h、0063h、00FDh、00FFh番地	XXXX X000b
BCN0IC~BCN2IC	0069h、0089h、0087h番地	XXXX X000b
DM0IC~DM3IC	0068h、0088h、006Ah、008Ah番地	XXXX X000b
AD0IC	006Bh番地	XXXX X000b
KUPIC	008Bh番地	XXXX X000b
IIO0IC~IIO5IC	006Dh、008Dh、006Fh、008Fh、0071h、0091h番地	XXXX X000b
IIO6IC~IIO11IC	0073h、0093h、0075h、0095h、0077h、0097h番地	XXXX X000b
SS0IC	00C0h番地	XXXX X000b
C0FTIC	00D0h番地	XXXX X000b
C0FRIC	00F0h番地	XXXX X000b
C0TIC	00C1h番地	XXXX X000b
C0RIC	00E1h番地	XXXX X000b
C0EIC	00C3h番地	XXXX X000b
C0WIC	007Bh番地	XXXX X000b
L0IC, L1IC	00D5h、00F5h番地	XXXX X000b
LLDIC	007Fh番地	XXXX X000b
E2FIC	00D8h番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
ILVL0	割り込み要求レベル選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0: レベル0 (割り込み禁止) 0 0 1: レベル1 0 1 0: レベル2 0 1 1: レベル3 1 0 0: レベル4 1 0 1: レベル5 1 1 0: レベル6 1 1 1: レベル7	RW
ILVL1			RW
ILVL2			RW
IR	割り込み要求フラグ	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり　(注1)	RW
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1.　“0”のみ書き込み可能 (“1”は書かないでください)。

図 10.3　割り込み制御レジスタ (1)

割り込み制御レジスタ

シンボル	アドレス	リセット後の値
INT0IC~INT2IC	009Eh、007Eh、009Ch番地	XX00 X000b
INT3IC~INT5IC	007Ch、009Ah、007Ah番地	XX00 X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
ILVL0	割り込み要求レベル選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0: レベル0 (割り込み禁止) 0 0 1: レベル1 0 1 0: レベル2 0 1 1: レベル3 1 0 0: レベル4 1 0 1: レベル5 1 1 0: レベル6 1 1 1: レベル7	RW
ILVL1			RW
ILVL2			RW
IR	割り込み要求フラグ	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり (注1)	RW
POL	極性切り替えビット	0: 立ち下がりエッジ/ “L”レベルを選択 1: 立ち上がりエッジ/ “H”レベルを選択 (注2)	RW
LVS	レベルセンス/エッジセンス切り替えビット	0: エッジセンス 1: レベルセンス (注3)	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. “0”のみ書き込み可能 (“1”は書かないでください)。
注2. IFSR0レジスタの対応するビットを“1”(両エッジ) で使用する場合、“0”(立ち下がりエッジ) にしてください。
注3. レベルセンスを選択する場合、IFSR0レジスタの対応するビットを“0”(片エッジ) にしてください。

図 10.4　割り込み制御レジスタ (2)

ILVL2~ILVL0ビット

ILVL2~ILVL0ビットで割り込み要求レベルを選択します。割り込み要求レベルの値が大きいほど割り込みの優先順位が高くなります。

割り込み要求発生時、割り込み要求レベルはIPLと比較され、割り込みの要求レベルがIPLより大きい場合だけ、その割り込みが許可されます。したがって、ILVL2~ILVL0ビットに“000b”を設定すれば、その割り込みは禁止されます。

IRビット

IRビットは割り込み要求が発生すると“1” (割り込み要求あり)になり、割り込み要求が受け付けられるまで保持されます。割り込み要求が受け付けられ対応する割り込みベクタに分岐した後、“0” (割り込み要求なし)になります。

IRビットはプログラムによって“0”にできます(“1”を書かないでください)。

割り込み制御レジスタの変更は、そのレジスタに対応する割り込み要求が発生しない箇所で行ってください。割り込み要求が発生する可能性がある場合は、割り込みを禁止してから変更してください。

また、割り込み制御レジスタを変更した直後に割り込みを許可するときは、割り込み制御レジスタの書き込みが終了する前に割り込み許可フラグ(Iフラグ)が“1”(割り込み許可)にならないように、2つの命令の間にNOPを挿入する、割り込み制御レジスタをダミーリードするなどの対策を行ってください。

割り込み制御レジスタを書き換える命令を実行しているときに、そのレジスタに対応する割り込み要求が発生した場合、命令によってはIRビットが“1”(割り込み要求あり)にならないことがあります。このことが問題になる場合は、以下の命令を使用してレジスタを書き換えるようにしてください。

- AND
- OR
- BCLR
- BSET

IRビットを“0”(割り込み要求なし)にするとき、AND命令やBCLR命令では書き換え中の割り込み要求を保持するために、IRビットが“0”にならないことがあります。このことが問題になる場合は、MOV命令を使用してレジスタを書き換えてください。IRビットのみを“0”にしたい場合は、一旦メモリなどに値を読んだ後、メモリ上でANDやBCLRを実行し、メモリの値をMOV命令で書き戻してください。

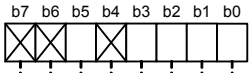
10.6.3 復帰用割り込み優先レベル設定レジスタ

復帰用割り込み優先レベル設定レジスタ(RIPL1、RIPL2レジスタ)はウェイトモードやストップモードからの復帰に割り込みを使用するとき、高速割り込みを使用するときに使用します。

ウェイトモードやストップモードからの復帰については「7.7.2 ウェイトモード」、「7.7.3 ストップモード」を参照してください。高速割り込みについては「10.4 高速割り込み」を参照してください。

図 10.5にRIPL1、RIPL2レジスタを示します。

復帰用割り込み優先レベル設定レジスタi (i=1, 2)(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
RIPL1, RIPL2	4407Fh、4407Dh番地	XX0X 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RLVL0	ウェイトモード/ストップモード復帰用割り込み優先レベル選択ビット　(注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : レベル0 0 0 1 : レベル1 0 1 0 : レベル2 0 1 1 : レベル3 1 0 0 : レベル4 1 0 1 : レベル5 1 1 0 : レベル6 1 1 1 : レベル7	RW
RLVL1			RW
RLVL2			RW
FSIT	高速割り込み選択ビット　(注3)	0: 割り込み要求レベル7は通常割り込みに使用 1: 割り込み要求レベル7は高速割り込みに使用　(注4)	RW
— (b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
DMAII	DMA II選択ビット　(注5)	0: 割り込み要求レベル7は割り込みに使用 1: 割り込み要求レベル7はDMA II転送に使用　(注4)	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. RIPL1レジスタと、RIPL2レジスタには同じ値を書いてください。
注2. 要求のあった割り込みの要求レベルが、RLVL2 ~ RLVL0ビットで選択したレベルより大きい場合、ウェイトモード、ストップモードから復帰します。FLGレジスタのIPLと同じ値を設定してください。
注3. FSITビットが“1”の場合、割り込み要求レベルがレベル7の割り込みが高速割り込みになります。このとき、1つの割り込みのみ割り込み要求レベルをレベル7にしてください。
注4. FSITビットとDMAIIビットはどちらか一方のみ“1”にしてください。高速割り込みとDMAC IIは同時に使用できません。
注5. DMAIIビットを設定した後で割り込み制御レジスタのILVL2 ~ ILVL0ビットを設定してください。なお、DMAC IIの転送はIフラグとIPLの影響を受けません。

図 10.5　RIPL1、RIPL2レジスタ

10.6.4 割り込みシーケンス

割り込み要求が受け付けられてから割り込み処理ルーチンが実行されるまでの割り込みシーケンスについて説明します。

命令実行中に割り込み要求が発生すると、その命令の実行後に優先順位が判定され、次のサイクルから割り込みシーケンスに移ります。ただし、RMPA、SCMPU、SIN、SMOVB、SMOVF、SMOVU、SOUT、SSTR、SUNTIL、SWHILEの各命令については、命令実行中に割り込み要求が発生すると、命令の動作を一時中断し割り込みシーケンスに移ります。

割り込みシーケンスでは、以下の動作を順次行います。

(1) CPUは割り込みアクノリッジを返すことで、割り込みコントローラから割り込み情報(割り込み番号、割り込み要求レベル)を取得します。その後、該当する割り込みのIRビットが“0”(割り込み要求なし)になります。
(2) 割り込みシーケンス直前のFLGレジスタの内容をCPU内部の一時レジスタ(ユーザは使用できません)に退避します。
(3) FLGレジスタの各ビットは以下のようになります。
- Iフラグ(割り込み許可フラグ)=0(割り込み禁止)
- Dフラグ(デバッグフラグ)=0(シングルステップ割り込み禁止)
- Uフラグ(スタックポインタ指定フラグ)=0(ISPを指定)

(4) CPU内部の一時レジスタ(ユーザは使用できません)の内容をスタックに退避します。高速割り込みの場合は、SVF(フラグ退避レジスタ)に退避します。
(5) PC(プログラムカウンタ)の内容をスタック領域に退避します。高速割り込みの場合は、SVP(PC退避レジスタ)に退避します。
(6) IPL(プロセッサ割り込み優先レベル)に、受け付けた割り込みの割り込み要求レベルを設定します。
(7) 割り込みベクタテーブルから受け付けた割り込み要因のベクタを取得します。
(8) 取得した割り込みベクタをPCに設定します。

割り込みシーケンス終了後は、割り込み処理ルーチンの先頭番地から命令を実行します。

10.6.5　割り込み応答時間

割り込み応答時間とは、割り込み要求が発生してから割り込み処理ルーチン内の最初の命令を実行するまでの時間を示します。図 10.6 に割り込み応答時間を示します。この時間は、割り込み要求発生時点から、そのとき実行している命令が終了するまでの時間(a)と割り込みシーケンスを実行する時間(b)で構成されます。

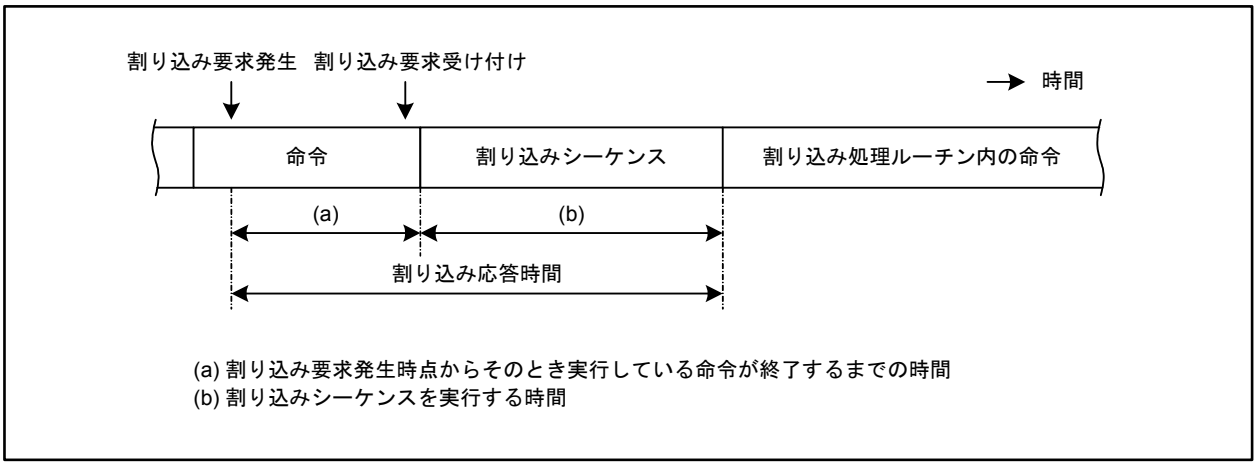


図 10.6　割り込み応答時間

(a)の時間は、実行している命令によって異なります。この時間が最も長くなる命令は、LDCTX、STCTXなど、レジスタをスタックに一括退避/復帰する命令です。STCTX命令の場合、退避するレジスタが10個のときで最短30サイクルで、スタック領域にウェイトがある場合さらに増加します。

(b)の時間は表 10.7のとおりです。

表 10.7　割り込みシーケンス実行時間(注1)

割り込み	実行時間(CPUクロック換算)
周辺機能	13 + αサイクル(注2)
INT命令	11サイクル
NMI	10サイクル
ウォッチドッグタイマ 発振停止検出 電圧低下検出	11サイクル
未定義命令	12サイクル
オーバフロー	12サイクル
BRK命令(可変ベクタテーブル)	16サイクル
BRK命令(固定ベクタテーブル)	19サイクル
BRK2命令	19サイクル
高速割り込み	11サイクル

注1.　割り込みベクタを、内部ROMの4の倍数となる番地に配置したときの値です。ただし高速割り込みは除きます。

注2.　αは「SFRのウェイト数-2」です。

10.6.6　割り込み要求受け付け時のIPLの変化

周辺機能割り込み要求が受け付けられると、IPL (プロセッサ割り込み優先レベル)には受け付けた割り込みの割り込み要求レベルが設定されます。

ソフトウェア割り込みと特殊割り込みは、割り込み要求レベルを持ちません。これらの割り込み要求が受け付けられたときは、表 10.8に示す値がIPLに設定されます。

表 10.8　割り込み要求レベルを持たない割り込みとIPLの関係

割り込み要求レベルを持たない割り込み要因	設定されるIPLの値
NMI、ウォッチドッグタイマ、発振停止検出、電圧低下検出	7
リセット	0
ソフトウェア	変化しない

10.6.7　レジスタ退避

割り込みシーケンスでは、フラグレジスタ(FLG)とプログラムカウンタ(PC)の内容だけがスタック領域に退避されます。スタック領域へ退避する順番は、フラグレジスタ—プログラムカウンタの順です。図 10.7に割り込み要求受け付け前後のスタックの状態を示します。

高速割り込みの割り込みシーケンスでは、フラグレジスタ(FLG)はフラグ退避レジスタ(SVF)に、プログラムカウンタ(PC)はPC退避レジスタ(SVP)に退避されます。

その他の必要なレジスタは、割り込み処理ルーチンの最初でソフトウェアによって退避してください。PUSHM命令を用いると、1命令でフレームベースレジスタ(FB)とスタックポインタ(SP)を除くすべてのレジスタを退避することができます。

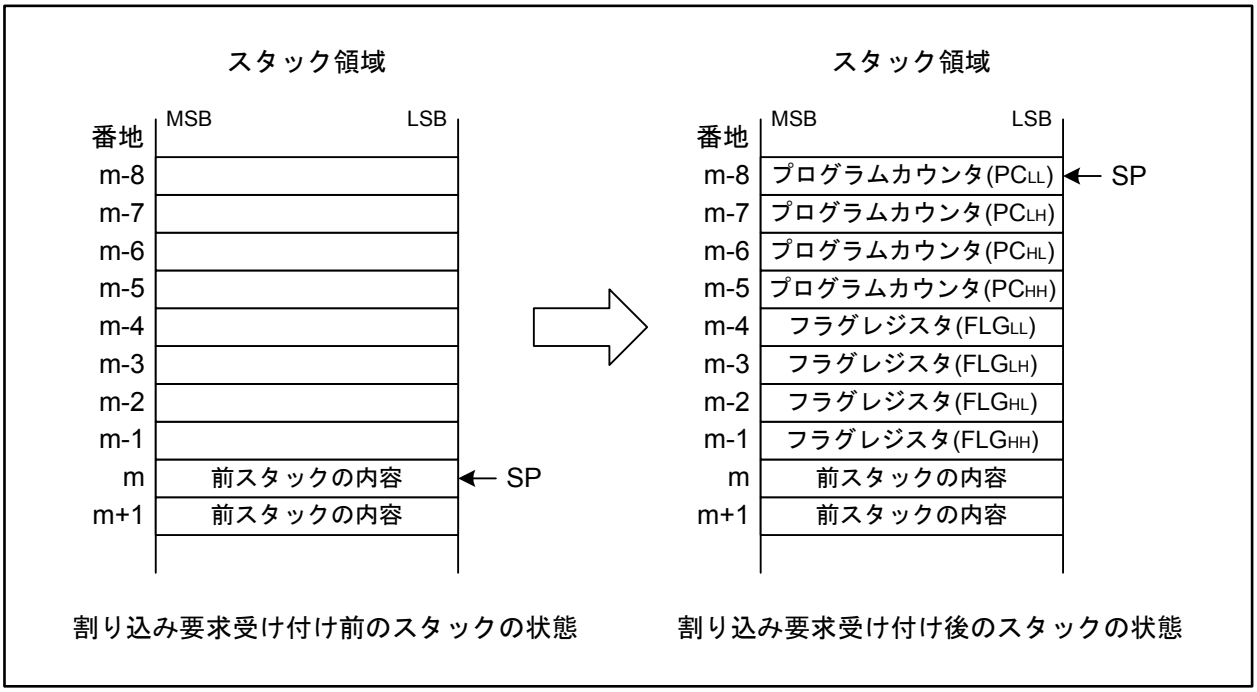


図 10.7　割り込み要求受け付け前後のスタックの状態

10.7 割り込み処理ルーチンからの復帰

割り込み処理ルーチンの最後でREIT命令を実行すると、スタック領域に退避されていた割り込みシーケンス直前のフラグレジスタ(FLG)、およびプログラムカウンタ(PC)の内容が復帰されます。高速割り込みの場合は、割り込み処理ルーチンの最後でFREIT命令を実行すると、退避レジスタに退避されていた割り込みシーケンス直前のフラグレジスタ(FLG)、およびプログラムカウンタ(PC)の内容が復帰されます。その後、割り込み要求受け付け前に実行していたプログラムに戻り、中断されていた処理が継続して実行されます。

割り込み処理ルーチン内でソフトウェアによって退避したレジスタは、REIT、FREIT命令実行前にPOPM命令などを使用して復帰してください。

割り込み処理ルーチン内でレジスタバンクを切り替えた場合、REITまたはFREIT命令を実行すると、自動的に割り込みシーケンス直前のレジスタバンクに戻ります。

10.8 割り込み優先順位

同一サンプリング時点(割り込みの要求があるかどうかを調べるタイミング)で2つ以上の割り込み要求が存在した場合は、優先順位の高い割り込みが受け付けられます。

マスカブル割り込み(周辺機能割り込み)の優先順位は、割り込み要求レベル選択ビット(ILVL2~ILVL0ビット)によって任意の優先順位を設定することができます。ただし、割り込み要求レベルが同じ設定の場合は、ハードウェアで設定されている優先度の高い割り込みが受け付けられます。

リセット(リセットは優先順位が一番高い割り込みとして扱われます)、ウォッチドッグタイマ割り込みなど、特殊割り込みの優先順位はハードウェアで設定されています。以下にハードウェアで設定されている割り込み優先順位を示します。

ウォッチドッグタイマ
リセット > 発振停止検出 > NMI > 周辺機能
電圧低下検出

ソフトウェア割り込みは割り込み優先順位の影響を受けません。命令を実行すると必ず割り込み処理ルーチンへ分岐します。

10.9 割り込み優先順位判定回路

割り込み優先順位判定回路は、同一サンプリング時点で要求のある割り込みから、最も優先順位の高い割り込みを選択するための回路です。

図10.8に割り込み優先順位判定回路を示します。

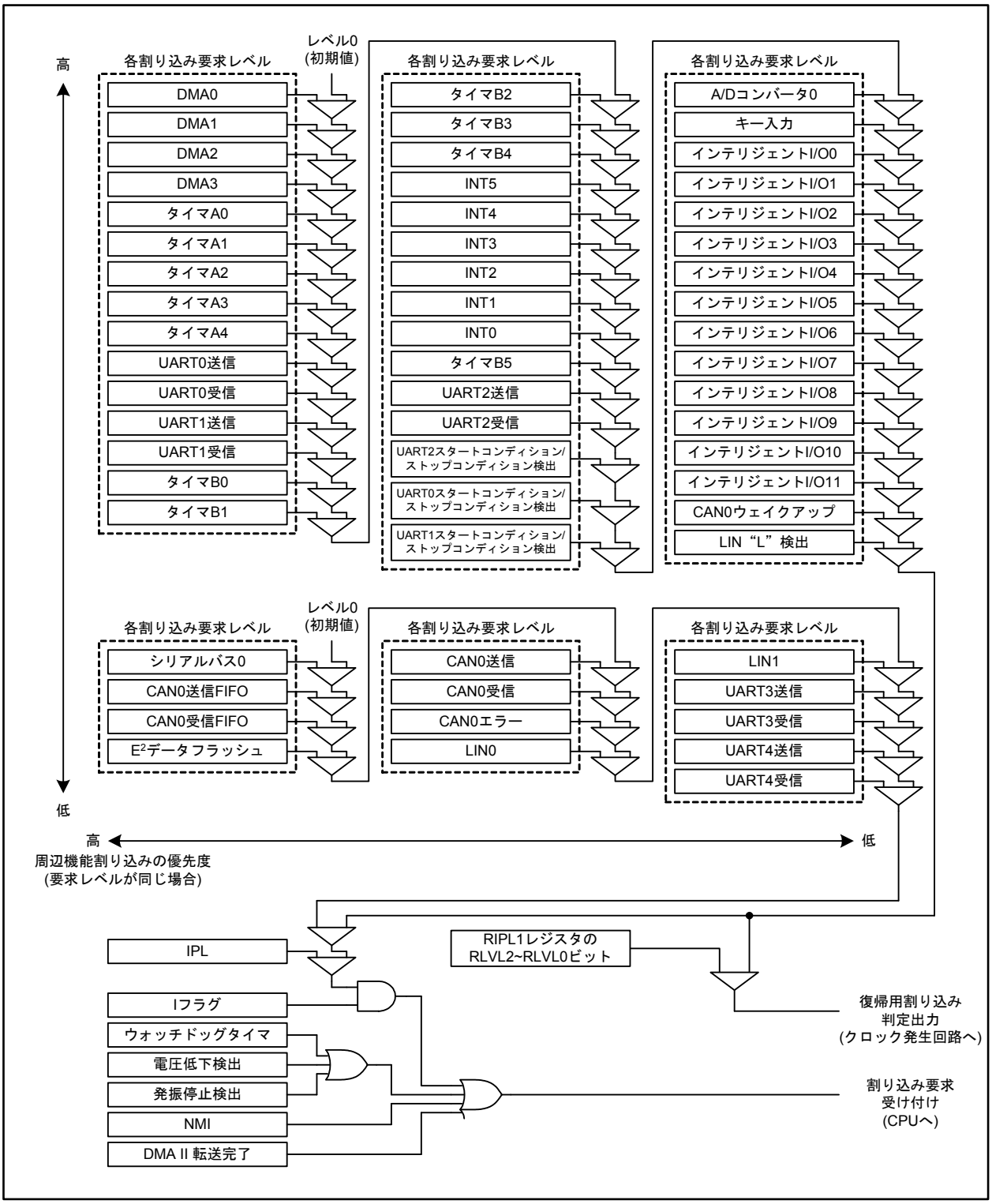


図 10.8　割り込み優先順位判定回路

10.10 外部割り込み

外部割り込みは$\overline{\text{INTi}}$端子 (i=0~5)からの外部入力による割り込みです。入力信号のレベルで割り込みをかけるレベルセンスと、エッジで割り込みをかけるエッジセンスをINTiICレジスタのLVSビットで選択できます。また、入力信号の極性をINTiICレジスタのPOLビットで選択できます。

エッジセンスを使用する場合は、IFSR0レジスタのIFSR0iビットを“1” (両エッジ)にすると、外部割り込み入力の立ち上がり、立ち下がりの両方のエッジで割り込み要求が発生します。IFSR0iビットを“1”にする場合は、対応するPOLビットを“0” (立ち下がりエッジ)にしてください。

レベルセンスを使用する場合は、IFSR0iビットを“0” (片エッジ)にしてください。$\overline{\text{INTi}}$端子の入力レベルがPOLビットで選択したレベルのときに、INTiICレジスタのIRビットが“1”になります。その後、$\overline{\text{INTi}}$端子が変化してもIRビットは“1”を保持し、INTi割り込みを受け付けるか、“0”を書くと“0”になります。

図 10.9にIFSR0レジスタを示します。

外部割り込み要因選択レジスタ0

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0						

シンボル	アドレス	リセット後の値
IFSR0	4406Fh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFSR00	$\overline{\text{INT0}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
IFSR01	$\overline{\text{INT1}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
IFSR02	$\overline{\text{INT2}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
IFSR03	$\overline{\text{INT3}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
IFSR04	$\overline{\text{INT4}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
IFSR05	$\overline{\text{INT5}}$端子極性選択ビット (注1)	0: 片エッジ 1: 両エッジ	RW
— (b7-b6)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. レベルセンスを選択する場合、このビットは“0”にしてください。
両エッジを選択する場合、対応するINTiICレジスタ (i=0~5) のPOLビットを“0”(立ち下がりエッジ) にしてください。

図 10.9　IFSR0レジスタ

また、外部割り込み信号はノイズ除去のためのデジタルフィルタ機能を選択することができます。デジタルフィルタは、設定されたクロックで入力信号をサンプリングし、3回レベルが一致したパルスのみを通過させます。

図 10.10~図 10.11に外部割り込み入力フィルタ選択レジスタを示します。

外部割り込み入力フィルタ選択レジスタ0

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
INTF0	44080h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
INT0F0	INT0入力フィルタ選択ビット	外部割り込み入力フィルタの有無、サンプリングクロックを選択します b1 b0 b3 b2 b5 b4 b7 b6 0 0 : フィルタなし 0 1 : フィルタあり、f1でサンプル 1 0 : フィルタあり、f8でサンプル 1 1 : フィルタあり、f32でサンプル	RW
INT0F1			RW
INT1F0	INT1入力フィルタ選択ビット		RW
INT1F1			RW
INT2F0	INT2入力フィルタ選択ビット		RW
INT2F1			RW
INT3F0	INT3入力フィルタ選択ビット		RW
INT3F1			RW

図 10.10　INTF0 レジスタ

外部割り込み入力フィルタ選択レジスタ1

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0				

シンボル	アドレス	リセット後の値
INTF1	44082h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
INT4F0	INT4入力フィルタ選択ビット	外部割り込み入力フィルタの有無、サンプリングクロックを選択します b1 b0 b3 b2 0 0 : フィルタなし 0 1 : フィルタあり、f1でサンプル 1 0 : フィルタあり、f8でサンプル 1 1 : フィルタあり、f32でサンプル	RW
INT4F1			RW
INT5F0	INT5入力フィルタ選択ビット		RW
INT5F1			RW
— (b7-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW

図 10.11　INTF1 レジスタ

10.11 NMI

NMI (Non Maskable Interrupt)は、$\overline{\text{NMI}}$端子の入力が“H”から“L”に変化したときに発生します。NMIはノンマスカブル割り込みです。リセット後、NMIは禁止の状態になっています。プログラムの先頭で割り込みスタックポインタ(ISP)を設定した後、PM2レジスタのPM24ビットを“1”にしてNMIを許可にしてください。なお、$\overline{\text{NMI}}$端子はポートP8_5と端子を共用していますので、端子の入力レベルをP8レジスタのP8_5ビットで読むことができます。

注1. NMIの機能を使用しない場合は、PM2レジスタのPM24ビットを“0”から変更しないでください。

10.12 キー入力割り込み

P10_4~P10_7をすべて入力ポートとして設定すると、キー入力割り込み機能が使用できます。

P10_4~P10_7のいずれかの端子が“H”から“L”に変化すると、キー入力割り込み要求が発生します。キー入力割り込みは、ウェイトモードやストップモードを解除するキーオンウェイクアップの機能としても使用できます。図10.12にキー入力割り込みのブロック図を示します。なお、いずれかの端子に“L”が入力されていると、他の端子の入力は割り込みとして検知されません。

キー入力割り込み機能を使用する場合、P10_4S~P10_7Sレジスタはすべて“00h”(ポート)に設定してください。また、PD10_4~PD10_7ビットもすべて“0”(入力)にしてください。これ以外の設定では、キー入力割り込み機能は使用できません。

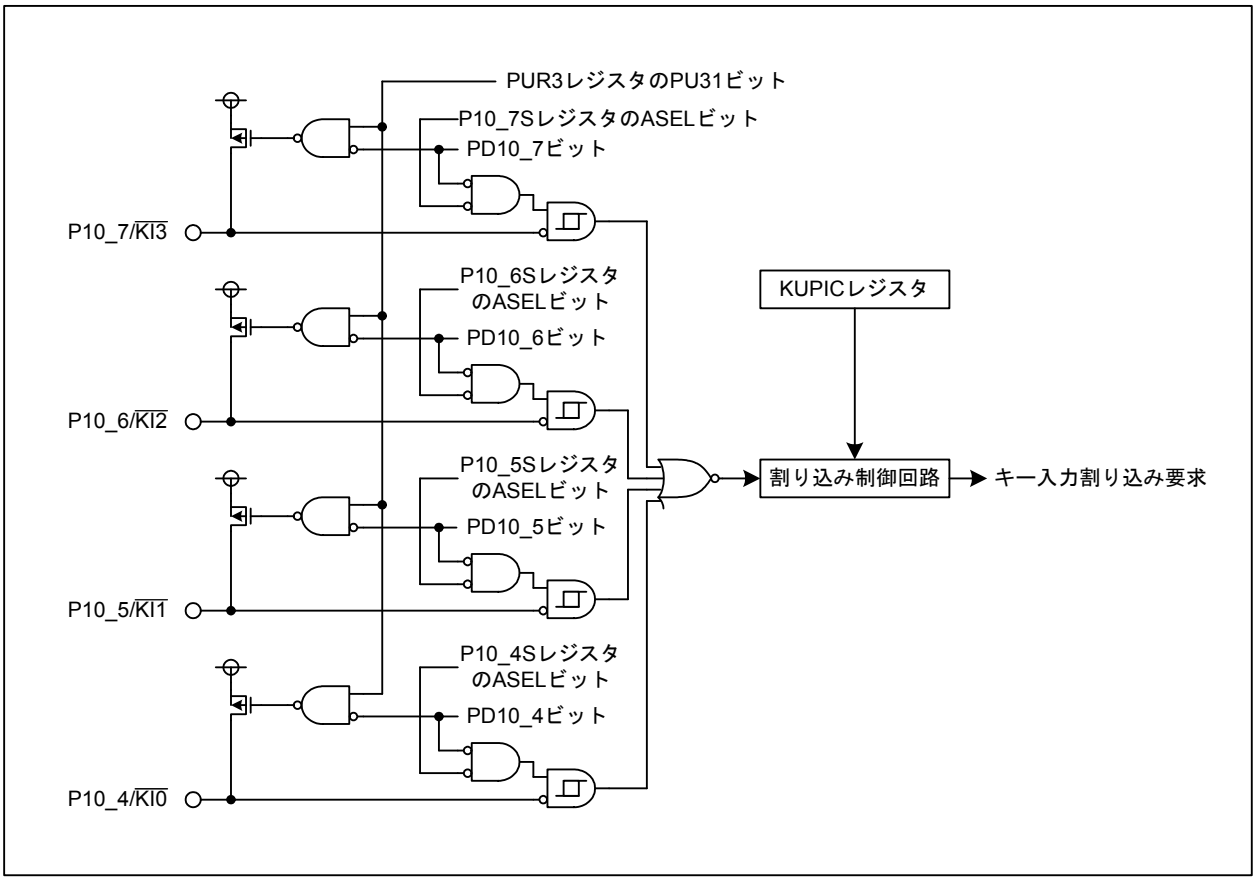


図 10.12 キー入力割り込みのブロック図

10.13 インテリジェントI/O割り込み

インテリジェントI/O割り込みは、ソフトウェア割り込み番号44~55に割り当てられています。

図 10.13 にインテリジェント I/O 割り込みのブロック図を、図 10.14 に IIOiIR レジスタ (i=0~11) を、図 10.15 に IIOiIE レジスタを示します。

インテリジェントI/O割り込みを使用する場合は、IIOiIE レジスタの IRLT ビットを“1” (割り込み要求を割り込みで使用する) にしてください。

インテリジェント I/O 割り込みには、多数の割り込み要因があります。インテリジェント I/O の各機能で割り込み要求が発生すると、IIOiIR レジスタの該当するビットが “1” (割り込み要求あり) になります。このとき、IIOiIE レジスタの対応するビットが“1” (割り込み許可) であれば、該当する IIOiIC レジスタの IR ビットが“1” (割り込み要求あり)になります。

なお、IR ビットが“0”から“1”になった後、別の割り込み要因によって、IIOiIR レジスタのビットが“1”になり、かつ、IIOiIE レジスタの該当するビットが“1”だった場合は、IR ビットは“1”のまま変化しません。

また、IIOiIR レジスタの各ビットは、割り込みが受け付けられても自動的に“0”になりませんので、プログラムで AND 命令または BCLR 命令を使用して“0”にしてください。これらのビットを“1”のままにしておくと、それ以降に成立した割り込み要求がすべて無効になります。

インテリジェント I/O 割り込みを DMA II の起動要因として使用する場合、IIOiIE レジスタの IRLT ビットを“0” (割り込み要求を DMA、DMA II で使用) にし、IIOiIE レジスタで使用する割り込み要求を許可にしてください。

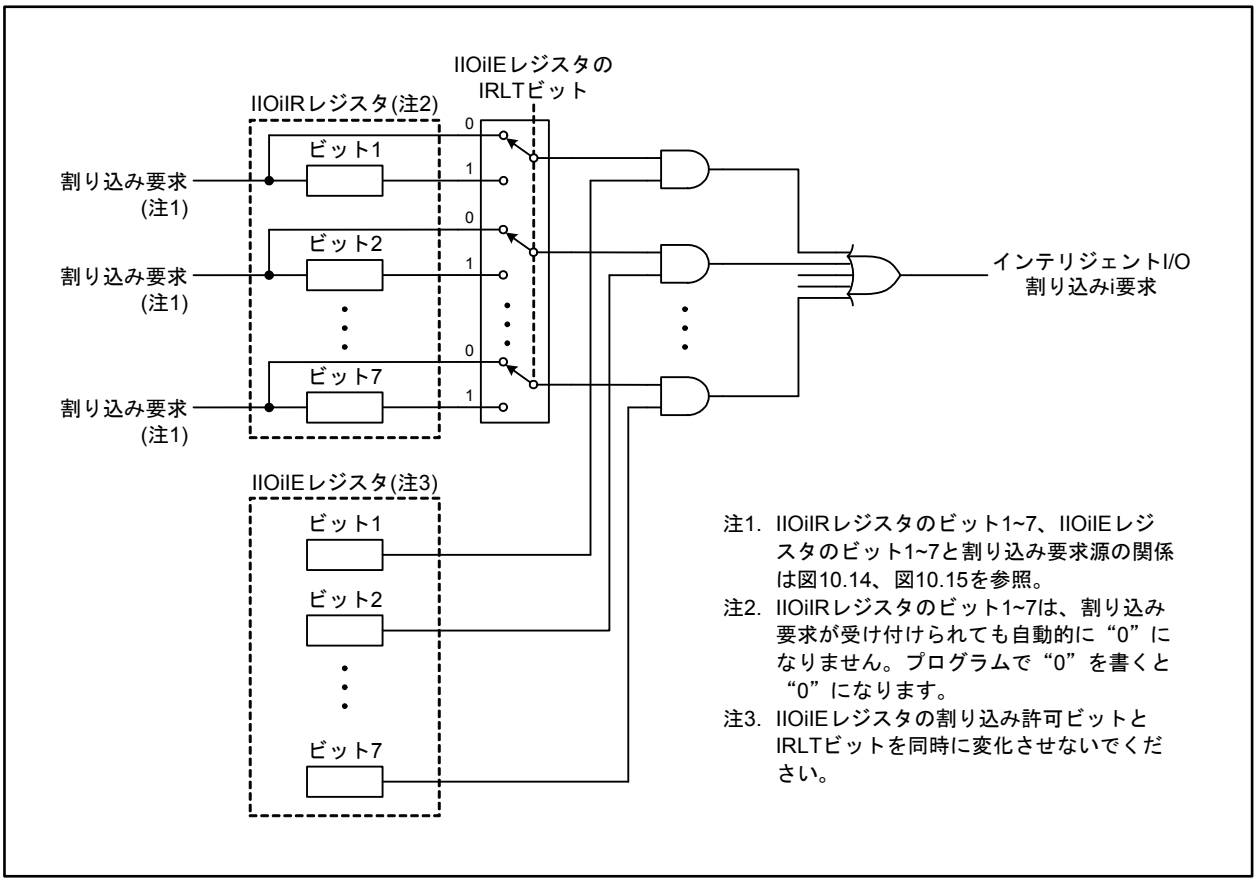


図 10.13 インテリジェントI/O割り込みのブロック図(i=0~11)

インテリジェントI/O割り込み要求レジスタi (i=0~11)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0		0			X

シンボル	アドレス	リセット後の値
IIO0IR~IIO11IR	下表参照	000? 0??1b (注1)

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	何も配置されていない。読んだ場合、その値は“1”		—
(注2)	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり (注3)		RW
(注2)	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり (注3)		RW
— (b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
(注2)	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり (注3)		RW
— (b7-b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. 当該ビットに機能が割り当てられている場合、リセット後の値は“X”(不定)です。機能が割り当てられていない場合、リセット後の値は“0”です。
注2. ビットシンボルは下表を参照してください。
注3. 当該ビットに機能が割り当てられている場合、“0”のみ書けます。“1”は書かないでください。“0”を書く場合、AND命令またはBCLR命令を使用してください。
機能が割り当てられていない場合 (予約ビットの場合)、“0”にしてください。

インテリジェントI/O割り込み要求レジスタのビットシンボル一覧

シンボル	アドレス	ビット7	ビット6	ビット5	ビット4	ビット3	ビット2	ビット1	ビット0
IIO0IR	00A0h	—	—	—	—	—	TM13R/PO13R	TM02R/PO02R	—
IIO1IR	00A1h	—	—	—	—	—	TM14R/PO14R	TM00R/PO00R	—
IIO2IR	00A2h	—	—	—	—	—	TM12R/PO12R	—	—
IIO3IR	00A3h	—	—	—	—	—	TM10R/PO10R	TM03R/PO03R	—
IIO4IR	00A4h	—	—	—	BT1R	—	TM17R/PO17R	TM04R/PO04R	—
IIO5IR	00A5h	—	—	—	—	—	—	TM05R/PO05R	—
IIO6IR	00A6h	—	—	—	—	—	—	TM06R/PO06R	—
IIO7IR	00A7h	—	—	—	BT0R	—	—	TM07R/PO07R	—
IIO8IR	00A8h	—	—	—	—	—	—	TM11R/PO11R	—
IIO9IR	00A9h	—	—	—	—	—	—	TM15R/PO15R	—
IIO10IR	00AAh	—	—	—	—	—	—	TM16R/PO16R	—
IIO11IR	00ABh	—	—	—	—	—	—	TM01R/PO01R	—

BTxR:　インテリジェントI/Oグループx ベースタイマ割り込み要求 (x=0, 1)
TMxyR:　インテリジェントI/Oグループx 時間計測機能 チャネルy 割り込み要求 (x=0, 1、y=0~7)
POxyR:　インテリジェントI/Oグループx 波形生成機能 チャネルy 割り込み要求 (x=0, 1、y=0~7)

図 10.14　IIO0IR~IIO11IR レジスタ

インテリジェントI/O割り込み許可レジスタi (i=0~11)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0		0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
IIO0IE~IIO11IE	下表参照	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IRLT	割り込み要求選択ビット (注2)	0: 割り込み要求をDMA、DMA IIで使用 1: 割り込み要求を割り込みで使用	RW
(注1)	0: IIOiIRレジスタのビット1の割り込みを禁止 1: IIOiIRレジスタのビット1の割り込みを許可		RW
(注1)	0: IIOiIRレジスタのビット2の割り込みを禁止 1: IIOiIRレジスタのビット2の割り込みを許可		RW
— (b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
(注1)	0: IIOiIRレジスタのビット4の割り込みを禁止 1: IIOiIRレジスタのビット4の割り込みを許可		RW
— (b7-b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. ビットシンボルは下表を参照してください。
注2. 割り込み要求を割り込みで使用する場合、IRLTビットを“1”にした後、ビット1、2、4を“1”にしてください。

インテリジェントI/O割り込み許可レジスタのビットシンボル一覧

シンボル	アドレス	ビット7	ビット6	ビット5	ビット4	ビット3	ビット2	ビット1	ビット0
IIO0IE	00B0h	—	—	—	—	—	TM13E/PO13E	TM02E/PO02E	IRLT
IIO1IE	00B1h	—	—	—	—	—	TM14E/PO14E	TM00E/PO00E	IRLT
IIO2IE	00B2h	—	—	—	—	—	TM12E/PO12E	—	IRLT
IIO3IE	00B3h	—	—	—	—	—	TM10E/PO10E	TM03E/PO03E	IRLT
IIO4IE	00B4h	—	—	—	BT1E	—	TM17E/PO17E	TM04E/PO04E	IRLT
IIO5IE	00B5h	—	—	—	—	—	—	TM05E/PO05E	IRLT
IIO6IE	00B6h	—	—	—	—	—	—	TM06E/PO06E	IRLT
IIO7IE	00B7h	—	—	—	BT0E	—	—	TM07E/PO07E	IRLT
IIO8IE	00B8h	—	—	—	—	—	—	TM11E/PO11E	IRLT
IIO9IE	00B9h	—	—	—	—	—	—	TM15E/PO15E	IRLT
IIO10IE	00BAh	—	—	—	—	—	—	TM16E/PO16E	IRLT
IIO11IE	00BBh	—	—	—	—	—	—	TM01E/PO01E	IRLT

BTxE:　インテリジェントI/Oグループx ベースタイマ割り込み許可 (x=0, 1)
TMxyE:　インテリジェントI/Oグループx 時間計測機能 チャネルy 割り込み許可 (x=0, 1、y=0~7)
POxyE:　インテリジェントI/Oグループx 波形生成機能 チャネルy 割り込み許可 (x=0, 1、y=0~7)

図 10.15 IIO0IE~IIO11IE レジスタ

10.14 割り込み使用上の注意

10.14.1 ISPの設定

リセット後、ISP (割り込みスタックポインタ)は“00000000h”に初期化されています。そのため、ISPに値を設定する前に割り込みを受け付けると、暴走の要因となります。割り込みを受け付ける前に、ISPに値を設定してください。ISPには4の倍数を設定してください。4の倍数を設定したほうがメモリアクセス回数が少なくなり、割り込みシーケンスの実行速度が速くなります。

特にNMIを使用する場合は割り込みを禁止できませんので、プログラムの先頭でISPを設定した後、PM2レジスタのPM24ビットを“1” (NMI有効)にしてください。

10.14.2 NMI

- NMIは、PM2レジスタのPM24ビットを“1” (NMI有効)にした後は禁止できません。NMIを使用しない場合はPM24ビットを“0”から変更しないでください。

- PM2レジスタのPM24ビットが“1” (NMI有効)の場合、P8レジスタのP8_5ビットは、$\overline{\text{NMI}}$端子の状態を確認する用途にのみ使用できます。汎用ポートとしては使用できません。

10.14.3 外部割り込み

- $\overline{\text{INTi}}$端子(i=0~5)に入力する信号には、電気的特性で規定する信号幅が必要です。規定の最小幅を下回った場合、割り込みが受け付けられない場合があります。

- INTiICレジスタ(i=0~5)のPOLビット、LVSビット、IFSR0レジスタのIFSR0iビット(i=0~5)で$\overline{\text{INTi}}$端子の有効エッジや有効レベルを切り替えたとき、対応するIRビットが“1” (割り込み要求あり)になる場合があります。これらのビットは、INTiICレジスタのILVL2 ~ ILVL0ビットを“000b” (割り込み禁止)にしてから書き換えてください。また、書き換えた後は、対応するIRビットを“0” (割り込み要求なし)にしてからILVL2 ~ ILVL0ビットを設定してください。

11. ウォッチドッグタイマ

ウォッチドッグタイマは、プログラムの暴走を検知するために使用します。ウォッチドッグタイマは15ビットのカウンタを持ち、周辺バスクロックまたはオンチップオシレータクロックをプリスケーラで分周したクロックによりダウンカウントします。

ウォッチドッグタイマがアンダフローしたときに、割り込み要求を発生させるか、リセットをかけるかをCM0レジスタのCM06ビットで選択できます。一度CM06ビットを“1”(リセット)にすると、プログラムでは“0”(ウォッチドッグタイマ割り込み)にできません。CM06ビットはリセットによってのみ“0”にできます。

ウォッチドッグタイマにはプリスケーラが2つあります。1つはオンチップオシレータクロックを1、2、4、8分周するもの、もう1つは周辺バスクロックを16、128分周するものです。1つ目のプリスケーラの分周比はWDKレジスタのWDK3~WDK2ビット、2つ目のプリスケーラの分周比はWDCレジスタのWDC7ビットで選択できます。

ウォッチドッグタイマのカウントソースはPM2レジスタのPM22ビットで選択できます。カウントソースに周辺バスクロックを選択した場合、MCUがウェイトモードまたはストップモードのとき、$\overline{\text{HOLD}}$信号が“L”のときは、カウントを停止し、これらの状態が解除されると保持していた値からカウントを再開します。カウントソースにオンチップオシレータを選択した場合、ウォッチドッグタイマは停止しません。

ウォッチドッグタイマの周期は以下のように計算できます。ただし、WDTSレジスタに書き込むタイミングによっては、最大でプリスケーラ出力1周期分の誤差が生じます。

$$\text{ウォッチドッグタイマの周期} = \frac{\text{プリスケーラの分周値(16または128)} \times 32768}{\text{周辺バスクロック周波数}}$$

または

$$\text{ウォッチドッグタイマの周期} = \frac{\text{プリスケーラの分周値(1, 2, 4, または8)} \times 2048}{\text{オンチップオシレータクロック周波数}}$$

たとえば、カウントソースに周辺バスクロックを選択し、CPUクロック周波数が64MHzで周辺バスクロック周波数がその1/2、プリスケーラの分周値が16の場合、ウォッチドッグタイマの周期は約16.4msとなります。

ウォッチドッグタイマは、WDTSレジスタへ書き込みを行ったとき、またはウォッチドッグタイマ割り込みの割り込み要求が発生したときに初期化されます。プリスケーラのカウント値はリセット後にのみ初期化されます。

あらかじめフラッシュメモリのOFS領域に値を設定しておくことで、リセット後自動的にウォッチドッグタイマを起動させることができます。OFS領域のWDTONビットが“1”の場合、リセット後はウォッチドッグタイマとプリスケーラのカウントは停止しており、WDTSレジスタに値を書くことによりカウントを開始します。WDTONビットが“0”の場合、リセット後からウォッチドッグタイマはカウントを開始します。

図11.1にウォッチドッグタイマのブロック図、図11.2~図11.5にウォッチドッグタイマ関連のレジスタを示します。

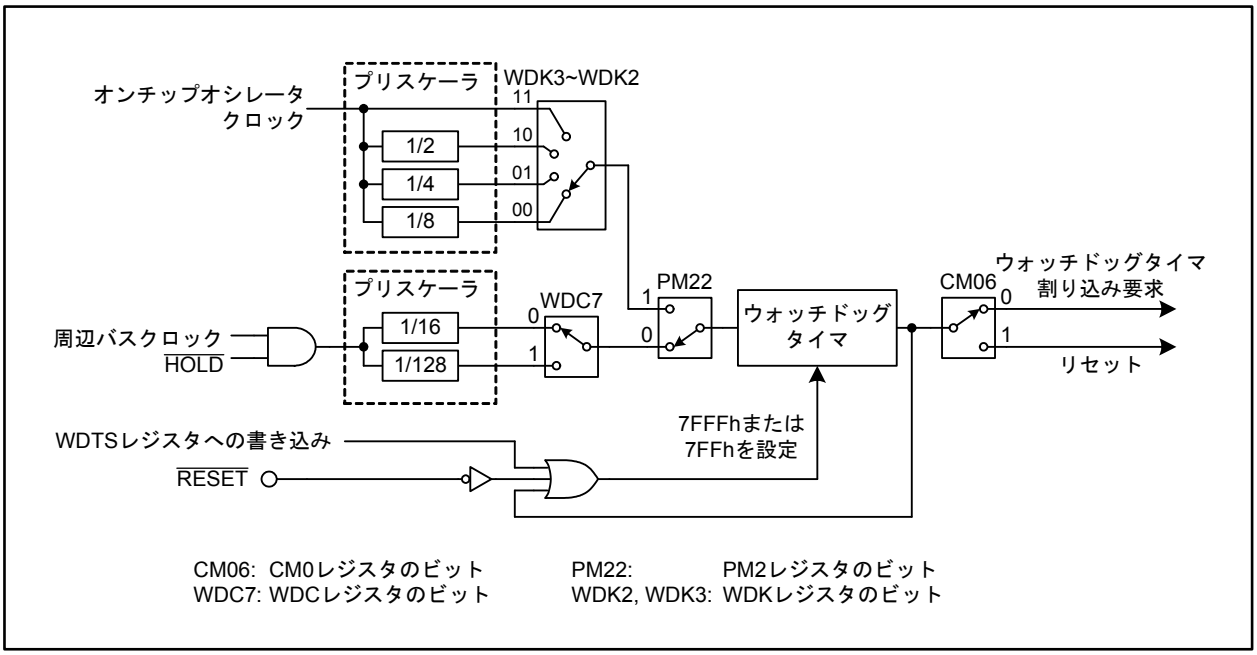


図 11.1　ウォッチドッグタイマのブロック図

ウォッチドッグタイマ制御レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	0	0					

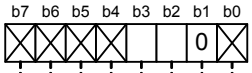
シンボル	アドレス	リセット後の値
WDC	4404Fh番地	000X XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b4-b0)	ウォッチドッグタイマの上位5ビット 周辺バスクロック使用時:　b14-b10 オンチップオシレータ使用時:　b10-b6　(注1)		RO
— (b6-b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW
WDC7	プリスケーラ選択ビット (注2)	0: 16分周 1: 128分周	RW

注1. カウントソースにオンチップオシレータを使用している場合、読み出し中にカウント値が変わり不定値が読める場合があります。
注2. このビットは、ウォッチドッグタイマ起動前に設定してください。

図 11.2　WDC レジスタ

ウォッチドッグタイマクロック制御レジスタ (注1)



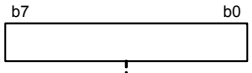
シンボル	アドレス	リセット後の値
WDK	4404Dh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b1)	予約ビット	“0”にしてください	RW
WDK2	オンチップオシレータ プリスケーラ選択ビット (注2)	b3 b2 0 0 : 8分周 (約15.6kHz) 0 1 : 4分周 (約31.3kHz) 1 0 : 2分周 (約62.5kHz) 1 1 : 分周なし (約125kHz)	RW
WDK3			RW
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. ウォッチドッグタイマ自動起動を使用した場合、このレジスタは書き換えられません。自動起動を使用しなかった場合、このレジスタはリセット後1回だけ書き換えられます。なお、カウントソース保護モードを使用する場合、このレジスタはできるだけプログラムの先頭に近い部分で値を設定してください。
注2. これらのビットは、ウォッチドッグタイマ起動前に設定してください。

図 11.3　WDK レジスタ

ウォッチドッグタイマスタートレジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
WDTS	4404Eh番地	不定

機　能	RW
このレジスタに値を書くと、ウォッチドッグタイマは初期化され、カウントを開始します。 ウォッチドッグタイマの初期値は、書き込む値にかかわらず“7FFFh”(周辺バスクロック使用時) または“7FFh”(オンチップオシレータ使用時) が設定されます	WO

注1. このレジスタはPRCR4レジスタのPRC40ビットを“1” (書き込み許可) にした後で書き換えてください。

図 11.4　WDTS レジスタ

オプション機能選択領域 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	1	1	1			1	

シンボル	アドレス	出荷時の値
OFS	FFFFFFEFh番地	FFh

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
WDTON	ウォッチドッグタイマ起動選択ビット (注2)	リセット後、ウォッチドッグタイマは 0: 自動起動 1: 停止	(注1)
— (b1)	予約ビット	“1”にしてください	(注1)
WPSC0	ウォッチドッグタイマオンチップオシレータプリスケーラ選択ビット (注3)	b3 b2 0 0 : 8分周 (WDK3~WDK2=00b) 0 1 : 4分周 (WDK3~WDK2=01b) 1 0 : 2分周 (WDK3~WDK2=10b) 1 1 : 分周なし (WDK3~WDK2=11b)	(注1)
WPSC1			(注1)
— (b6-b4)	予約ビット	“1”にしてください	(注1)
CSPM	リセット後カウントソース保護モード選択ビット (注2、3)	リセット後、カウントソース保護モードは 0: 有効 (PM22=1) 1: 無効 (PM22=0)	(注1)

注1. この領域はプログラムでは変更できません。書き換えるにはフラッシュライタをご使用ください。
注2. カウントソース保護モードを有効にする場合、WDTONビットとCSPMビットは両方“0”にしてください。
ウォッチドッグタイマ起動後にPM2レジスタのPM22ビットを書き換えることはできません。
注3. WDTONビットが“1”の場合、これらの設定は無効です。WDTONビットが“0”の場合、これらのビットに設定した値がWDKレジスタ、PM2レジスタに反映されます。

図 11.5　OFS領域

12. DMAC

DMA (ダイレクト・メモリ・アクセス) とはCPUの命令を使用せずにデータを転送する機能で、DMAを行うコントローラをDMAC (DMAコントローラ) といいます。

R32C/100シリーズではサイクルスチール方式のDMACを4チャネル搭載しています。

DMACは、転送要求が1回発生するごとに、転送元番地から転送先番地へ8、16、または32ビットのデータを1回だけ転送します。CPUとDMACは同じバスを使用しますが、バスアクセスの優先順位はDMACのほうがCPUよりも高いため、転送要求が発生してから1回のデータ転送を完了するまでの動作を高速に行えます。

図12.1にCPU内蔵DMAC関連レジスタ一覧、表12.1にDMACの仕様、図12.2~図12.10にDMAC関連レジスタを示します。図12.1に示すレジスタはCPU内部に配置されているため、アクセスする場合はLDC、STC命令を使用してください。

DMAC関連レジスタ

DMD0	DMA0モードレジスタ
DMD1	DMA1モードレジスタ
DMD2	DMA2モードレジスタ
DMD3	DMA3モードレジスタ
DCT0	DMA0ターミナルカウントレジスタ
DCT1	DMA1ターミナルカウントレジスタ
DCT2	DMA2ターミナルカウントレジスタ
DCT3	DMA3ターミナルカウントレジスタ
DCR0	DMA0ターミナルカウントリロードレジスタ(注1)
DCR1	DMA1ターミナルカウントリロードレジスタ(注1)
DCR2	DMA2ターミナルカウントリロードレジスタ(注1)
DCR3	DMA3ターミナルカウントリロードレジスタ(注1)
DSA0	DMA0ソースアドレスレジスタ
DSA1	DMA1ソースアドレスレジスタ
DSA2	DMA2ソースアドレスレジスタ
DSA3	DMA3ソースアドレスレジスタ
DSR0	DMA0ソースアドレスリロードレジスタ(注1)
DSR1	DMA1ソースアドレスリロードレジスタ(注1)
DSR2	DMA2ソースアドレスリロードレジスタ(注1)
DSR3	DMA3ソースアドレスリロードレジスタ(注1)
DDA0	DMA0デスティネーションアドレスレジスタ
DDA1	DMA1デスティネーションアドレスレジスタ
DDA2	DMA2デスティネーションアドレスレジスタ
DDA3	DMA3デスティネーションアドレスレジスタ
DDR0	DMA0デスティネーションアドレスリロードレジスタ(注1)
DDR1	DMA1デスティネーションアドレスリロードレジスタ(注1)
DDR2	DMA2デスティネーションアドレスリロードレジスタ(注1)
DDR3	DMA3デスティネーションアドレスリロードレジスタ(注1)

注1. リピート転送で使用するレジスタです。単転送では使用しません。

図12.1 CPU内蔵DMAC関連レジスタ一覧

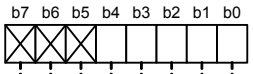
表 12.1 DMAC仕様

項目		仕様
チャネル数		4チャネル
方式		サイクルスチール方式
転送空間		64Mバイト(00000000h~01FFFFFFhおよびFE000000h~FFFFFFFFh)の任意の空間から64Mバイトの任意の空間へデータ転送
最大転送バイト数		64Mバイト(32ビット転送時)、32Mバイト(16ビット転送時)、16Mバイト(8ビット転送時)
DMA起動要因(注1)		$\overline{\text{INT0}}$~$\overline{\text{INT3}}$端子への入力の立ち下がりエッジまたは両エッジ タイマA0~タイマA4割り込み要求 タイマB0~タイマB5割り込み要求 UART0~UART4送信と受信割り込み要求 A/D変換割り込み要求 インテリジェントI/O割り込み要求 シリアルバスインタフェース割り込み要求ソフトウェアトリガ
チャネル優先順位		DMA0>DMA1>DMA2>DMA3 (DMA0が最優先)
転送サイズ		8ビット、16ビット、32ビット
アドレッシング		インクリメント、または固定
転送モード	単転送	DCTiレジスタ(i=0~3)が“00000000h”になると転送が終了する
	リピート転送	DCTiレジスタが“00000000h”になるとDCRiレジスタの値がDCTiレジスタにリロードされ、DMA転送を継続する
DMA転送完了割り込み要求発生タイミング		DCTiレジスタが“00000001h”から“00000000h”になるとき
DMA転送開始	単転送	DCTiレジスタに“00000001h”以上の値を設定し、DMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットを“01b”(単転送)にした後、DMA転送要求が発生すると開始
	リピート転送	DCTiレジスタに“00000001h”以上の値を設定し、MDi1~MDi0ビットを“11b”(リピート転送)にした後、DMA転送要求が発生すると開始
DMA転送停止	単転送	MDi1~MDi0ビットを“00b”(DMA転送禁止)にする
	リピート転送	MDi1~MDi0ビットを“00b”(DMA転送禁止)にする
DCTiレジスタ、DSAiレジスタ、DDAiレジスタへのリロードのタイミング		リピート転送モードでDCTiレジスタが“00000001h”から“00000000h”になるとき
DMA転送サイクル数		最小3サイクル

注1. DMA転送は、各割り込みに影響を与えません。

DMA転送要求には、DMiSL2レジスタ(i=0~3)のDSRビットへの書き込みによるソフトウェアトリガのほか、DMiSLレジスタのDSEL4~DSEL0ビット、DMiSL2レジスタのDSEL24~DSEL20ビットで指定した各機能から出力される割り込み要求を使用しています。ただし、DMA転送要求は割り込み要求とは異なり、Iフラグや割り込み制御レジスタの影響を受けませんので、割り込みが禁止されているときなど、割り込み要求が受け付けられない場合でも受け付けられます。また、DMA転送は割り込みに影響を与えませんので、DMA転送によって割り込み制御レジスタのIRビットが変化することはありません。

DMAi 起動要因選択レジスタ(i=0~3)



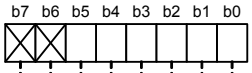
シンボル	アドレス	リセット後の値
DM0SL~DM3SL	44078h、44079h、4407Ah、4407Bh番地	XXX0 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
DSEL0	DMA起動要因選択ビット (注1)	表12.2 DMiSLレジスタ (i=0~3) 機能一覧表を参照	RW
DSEL1			RW
DSEL2			RW
DSEL3			RW
DSEL4			RW
— (b7-b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		—

注1. 対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止)の状態でDSEL4~DSEL0ビットを変更してください。

図 12.2　DM0SL~DM3SL レジスタ

DMAi 起動要因選択レジスタ2 (i=0~3)



シンボル	アドレス	リセット後の値
DM0SL2~DM3SL2	44070h、44071h、44072h、44073h番地	XX00 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
DSEL20	DMA起動要因選択ビット (注1)	表12.3 DMiSL2レジスタ (i=0~3) 機能一覧表を参照	RW
DSEL21			RW
DSEL22			RW
DSEL23			RW
DSEL24			RW
DSR	ソフトウェアDMA転送要求ビット	ソフトウェアトリガ選択時は、このビットを“1”にするとDMA転送要求が発生する (読んだ場合は“0”)	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止) の状態で DSEL24~DSEL20 ビットを変更してください。

図 12.3　DM0SL2~DM3SL2 レジスタ

表 12.2 DMiSL レジスタ(i=0~3)機能一覧表

設定値	DMA起動要因				
b4 b3 b2 b1 b0	DMA0	DMA1	DMA2	DMA3	
0 0 0 0 0	起動要因選択レジスタ2から選択				
0 0 0 0 1	$\overline{\text{INT0}}$立ち下がりエッジ	$\overline{\text{INT1}}$立ち下がりエッジ	$\overline{\text{INT2}}$立ち下がりエッジ	$\overline{\text{INT3}}$立ち下がりエッジ	(注1)
0 0 0 1 0	$\overline{\text{INT0}}$両エッジ	$\overline{\text{INT1}}$両エッジ	$\overline{\text{INT2}}$両エッジ	$\overline{\text{INT3}}$両エッジ	(注1)
0 0 0 1 1	タイマA0割り込み要求				
0 0 1 0 0	タイマA1割り込み要求				
0 0 1 0 1	タイマA2割り込み要求				
0 0 1 1 0	タイマA3割り込み要求				
0 0 1 1 1	タイマA4割り込み要求				
0 1 0 0 0	タイマB0割り込み要求				
0 1 0 0 1	タイマB1割り込み要求				
0 1 0 1 0	タイマB2割り込み要求				
0 1 0 1 1	タイマB3割り込み要求				
0 1 1 0 0	タイマB4割り込み要求				
0 1 1 0 1	タイマB5割り込み要求				
0 1 1 1 0	UART0送信割り込み要求				
0 1 1 1 1	UART0受信またはACK割り込み要求(注2)				
1 0 0 0 0	UART1送信割り込み要求				
1 0 0 0 1	UART1受信またはACK割り込み要求(注2)				
1 0 0 1 0	UART2送信割り込み要求				
1 0 0 1 1	UART2受信またはACK割り込み要求(注2)				
1 0 1 0 0	予約				
1 0 1 0 1	予約				
1 0 1 1 0	予約				
1 0 1 1 1	予約				
1 1 0 0 0	A/D0割り込み要求				
1 1 0 0 1	インテリジェントI/O割り込み0要求	インテリジェントI/O割り込み7要求	インテリジェントI/O割り込み2要求	インテリジェントI/O割り込み9要求	
1 1 0 1 0	インテリジェントI/O割り込み1要求	インテリジェントI/O割り込み8要求	インテリジェントI/O割り込み3要求	インテリジェントI/O割り込み10要求	
1 1 0 1 1	インテリジェントI/O割り込み2要求	インテリジェントI/O割り込み9要求	インテリジェントI/O割り込み4要求	インテリジェントI/O割り込み11要求	
1 1 1 0 0	インテリジェントI/O割り込み3要求	インテリジェントI/O割り込み10要求	インテリジェントI/O割り込み5要求	インテリジェントI/O割り込み0要求	
1 1 1 0 1	インテリジェントI/O割り込み4要求	インテリジェントI/O割り込み11要求	インテリジェントI/O割り込み6要求	インテリジェントI/O割り込み1要求	
1 1 1 1 0	インテリジェントI/O割り込み5要求	インテリジェントI/O割り込み0要求	インテリジェントI/O割り込み7要求	インテリジェントI/O割り込み2要求	
1 1 1 1 1	インテリジェントI/O割り込み6要求	インテリジェントI/O割り込み1要求	インテリジェントI/O割り込み8要求	インテリジェントI/O割り込み3要求	

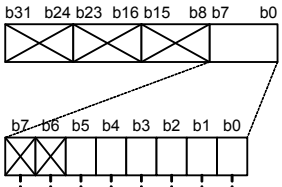
注1. $\overline{\text{INT}}$i端子(i=0~3)への入力の立ち下がりエッジと両エッジがDMA起動要因になります。外部割り込み(INTiIC レジスタのPOL ビット、LVS ビット、IFSR0 レジスタ)の影響を受けません。また、外部割り込みへ影響を与えません。

注2. UARTi受信(i=0~2)とACKの切り替えは、UiSMR レジスタとUiSMR2 レジスタによって行います。

表 12.3 DMiSL2レジスタ(i=0~3)機能一覧表

設定値	DMA起動要因			
b4 b3 b2 b1 b0	DMA0	DMA1	DMA2	DMA3
0 0 0 0 0	ソフトウェアトリガ			
0 0 0 0 1	予約			
0 0 0 1 0	予約			
0 0 0 1 1	予約			
0 0 1 0 0	シリアルバスインタフェース0割り込み要求			
0 0 1 0 1	予約			
0 0 1 1 0	予約			
0 0 1 1 1	予約			
0 1 0 0 0	予約			
0 1 0 0 1	予約			
0 1 0 1 0	予約			
0 1 0 1 1	予約			
0 1 1 0 0	予約			
0 1 1 0 1	予約			
0 1 1 1 0	予約			
0 1 1 1 1	予約			
1 0 0 0 0	予約			
1 0 0 0 1	予約			
1 0 0 1 0	予約			
1 0 0 1 1	予約			
1 0 1 0 0	予約			
1 0 1 0 1	予約			
1 0 1 1 0	予約			
1 0 1 1 1	予約			
1 1 0 0 0	UART3送信割り込み要求			
1 1 0 0 1	UART3受信割り込み要求			
1 1 0 1 0	UART4送信割り込み要求			
1 1 0 1 1	UART4受信割り込み要求			
1 1 1 0 0	予約			
1 1 1 0 1	予約			
1 1 1 1 0	予約			
1 1 1 1 1	予約			

DMAiモードレジスタ (i=0~3)(注1)



シンボル DMD0~DMD3

アドレス (CPU内部レジスタ)

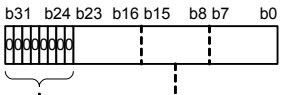
リセット後の値 XXXX XXXX XXXX XXXX XXXX XXXX XX00 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MDi0	転送モード選択ビット (注2)	b1 b0 0 0 : DMA転送禁止 0 1 : 単転送 1 0 : 設定しないでください 1 1 : リピート転送	RW
MDi1			RW
BWi0	転送サイズ選択ビット(注3)	b3 b2 0 0 : 8ビット 0 1 : 16ビット 1 0 : 32ビット 1 1 : 設定しないでください	RW
BWi1			RW
USAi	ソースアドレス更新選択ビット (注3)	0: 更新しない (固定) 1: 更新する (インクリメント)	RW
UDAi	デスティネーションアドレス更新選択ビット (注3)	0: 更新しない (固定) 1: 更新する (インクリメント)	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
— (b31-b8)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。
注2. 他のすべてのDMAC関連レジスタを設定した後、このビットを設定してください。
注3. これらのビットを書き換えるときは、MDi1~MDi0ビットを“00b”にしてから実施してください。

図 12.4 DMD0~DMD3 レジスタ

DMAiターミナルカウントレジスタ (i=0~3)(注1)



シンボル DCT0~DCT3

アドレス (CPU内部レジスタ)

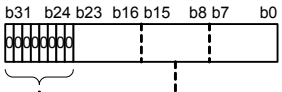
リセット後の値 XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送回数を設定	000000h ~ FFFFFFh (注2)	RW
予約ビット	“00h”にしてください	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止) の状態で値を設定してください。
注2. “000000h”を設定した場合、その後のDMA転送要求は受け付けません。

図 12.5 DCT0~DCT3 レジスタ

DMAiターミナルカウントリロードレジスタ (i=0~3)(注1)



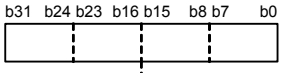
シンボル	アドレス	リセット後の値
DCR0~DCR3	(CPU内部レジスタ)	XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送回数を設定	000000h ~ FFFFFFh	RW
予約ビット	“00h” にしてください	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止) の状態で値を設定してください。

図 12.6　DCR0~DCR3 レジスタ

DMAiソースアドレスレジスタ (i=0~3)(注1)



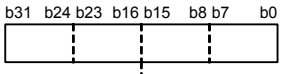
シンボル	アドレス	リセット後の値
DSA0~DSA3	(CPU内部レジスタ)	XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送元のアドレスを設定	00000000h ~ 01FFFFFFh および FE000000h ~ FFFFFFFFh (64Mバイト)	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止) の状態で値を設定してください。

図 12.7　DSA0~DSA3 レジスタ

DMAiソースアドレスリロードレジスタ (i=0~3)(注1)



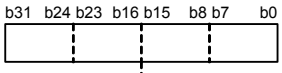
シンボル	アドレス	リセット後の値
DSR0~DSR3	(CPU内部レジスタ)	XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送元のアドレスを設定	00000000h ~ 01FFFFFFh および FE000000h ~ FFFFFFFFh (64Mバイト)	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止) の状態で値を設定してください。

図 12.8　DSR0~DSR3 レジスタ

DMAiデスティネーションアドレスレジスタ(i=0~3)(注1)



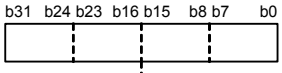
シンボル	アドレス	リセット後の値
DDA0~DDA3	(CPU内部レジスタ)	XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送先のアドレスを設定	00000000h ~ 01FFFFFFh および FE000000h ~ FFFFFFFFh (64Mバイト)	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止)の状態で値を設定してください。

図 12.9　DDA0~DDA3 レジスタ

DMAiデスティネーションアドレスリロードレジスタ(i=0~3)(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
DDR0~DDR3	(CPU内部レジスタ)	XXXX XXXXh

機　能	設定範囲	RW
転送先のアドレスを設定	00000000h ~ 01FFFFFFh および FE000000h ~ FFFFFFFFh (64Mバイト)	RW

注1. このレジスタへの書き込みは、LDC命令を使用してください。また、対応するチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットが“00b”(DMA転送禁止)の状態で値を設定してください。

図 12.10　DDR0~DDR3 レジスタ

12.1 転送サイクル

転送サイクルは、メモリまたはSFRの読み出し(ソースリード)のバスサイクルと、書き込み(デスティネーションライト)のバスサイクルで構成されています。

読み出しと書き込みのバスサイクル数は、DSAi レジスタ (i=0~3) と DDAi レジスタに設定する値や、対象とするデバイスが接続されているバスのデータバス幅、バスタイミングの影響を受けます。

12.1.1 転送番地とデータバス幅の影響

表 12.4 に転送番地のアライメントやデータバス幅によるバスサイクル数の増加を、転送単位別に示します。

表 12.4 転送番地とデータバス幅によるバスサイクル数の増加

転送単位	データバス幅	転送番地	増加するバスサイクル数	発生するバスサイクル
8ビット	8~64ビット	n番地	0	[n]
16ビット	8ビット	n番地	+1	[n]-[n+1]
	16ビット	2n番地	0	[2n]
		2n+1番地	+1	[2n+1]-[2n+2]
	32ビット	4n番地	0	[4n]
		4n+1番地	0	[4n+1]
		4n+2番地	0	[4n+2]
		4n+3番地	+1	[4n+3]-[4n+4]
	64ビット	8n番地	0	[8n]
		8n+1番地	0	[8n+1]
		8n+2番地	0	[8n+2]
		8n+3番地	0	[8n+3]
		8n+4番地	0	[8n+4]
		8n+5番地	0	[8n+5]
		8n+6番地	0	[8n+6]
		8n+7番地	+1	[8n+7]-[8n+8]
32ビット	8ビット	n番地	+3	[n]-[n+1]-[n+2]-[n+3]
	16ビット	4n番地	+1	[4n]-[4n+2]
		4n+1番地	+2	[4n+1]-[4n+2]-[4n+4]
		4n+2番地	+1	[4n+2]-[4n+4]
		4n+3番地	+2	[4n+3]-[4n+4]-[4n+6]
	32ビット	4n番地	0	[4n]
		4n+1番地	+1	[4n+1]-[4n+4]
		4n+2番地	+1	[4n+2]-[4n+4]
		4n+3番地	+1	[4n+3]-[4n+4]
	64ビット	8n番地	0	[8n]
		8n+1番地	0	[8n+1]
		8n+2番地	0	[8n+2]
		8n+3番地	0	[8n+3]
		8n+4番地	0	[8n+4]
		8n+5番地	+1	[8n+5]-[8n+8]
		8n+6番地	+1	[8n+6]-[8n+8]
		8n+7番地	+1	[8n+7]-[8n+8]

12.1.2 バスタイミングの影響

R32C/100シリーズでは、デバイスごとに接続されるバスを分割し、それぞれバス幅、バスタイミングが異なります。デバイスごとのバス幅、アクセスサイクル数を表12.5に示します。

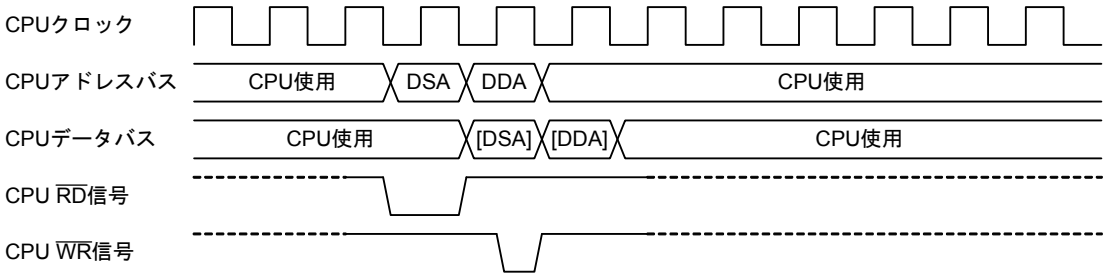
表12.5 デバイスごとのバス幅およびバスサイクル数

デバイス名称	アドレス(注1)	バス幅	アクセスサイクル数(注2)	基準クロック
フラッシュメモリ	FFE00000h~FFFFFFFFh	64ビット	2または3(注3)	CPUクロック
データフラッシュ	00060000h~00061FFFh	64ビット	5	CPUクロック
RAM	00000400h~0003FFFFh	64ビット	1または2(注4)	CPUクロック
SFR領域	00000000h~0000001Fh	16ビット	3(注5)	周辺バスクロック
	00000020h~000003FFh	16ビット	2(注5)	周辺バスクロック
SFR2領域	00040000h~00041FFFh	16ビット	2(注5)	周辺バスクロック
	00042000h~00043FFFh	32ビット	2(注5)	周辺バスクロック
	00044000h~000440DFh	16ビット	2(注5、6)	周辺バスクロック
	000440E0h~000443FFh	16ビット	3(注5、6)	周辺バスクロック
	00044400h~00045FFFh	16ビット	2(注5、6)	周辺バスクロック
	00046000h~000467FFh	32ビット	3(注5、6)	周辺バスクロック
	00046800h~00047FFFh	32ビット	2(注5、6)	周辺バスクロック
	00048000h~0004FFFFh	64ビット	2	CPUクロック

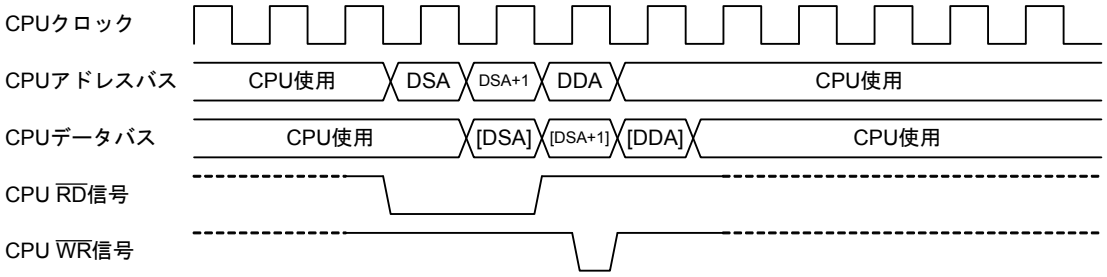
注1. 予約領域を含みます。
注2. アクセスサイクル数は、それぞれのバスのクロックを基準にしています。
注3. 同一ページ内は2サイクル、ページを外れると3サイクルになります。
注4. ライトサイクルが連続する場合、2回目のライトサイクルは2サイクルになります。また、ライトサイクル直後のリードサイクルも2サイクルになります。
注5. SFRアクセスが連続した場合、2回目以降のアクセスはベースクロック1サイクル分増えます。
注6. 周辺バスクロックの位相によっては、最大1サイクル増える場合があります。

図12.11にソースリードについての転送サイクル例を示します。この図では、デスティネーションを内部RAMとし、デスティネーションライトサイクルを1サイクルとして、ソースリードについての条件別サイクル数を示しています。実際は、ソースリードサイクルと同様にデスティネーションライトサイクルも各条件の影響を受け、転送サイクルが変化します。転送サイクルを計算する場合、デスティネーションライトサイクルとソースリードサイクルに各条件を適用してください。たとえば図12.11 (2)のようにバスサイクルが2回発生する場合では、ソースリードサイクルとデスティネーションライトサイクルは、それぞれにバスサイクルが2回必要となります。

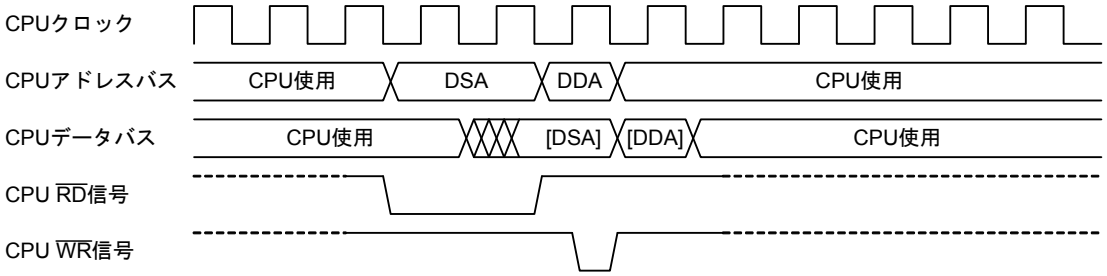
(1) ソースリードが1サイクルで完了する場合
例: RAM上の8n番地から16ビットデータを転送する場合



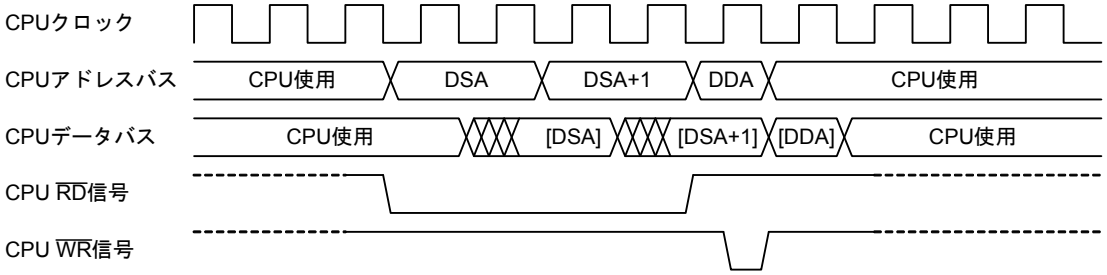
(2) ソースリードのバスサイクルが2回発生する場合
例: RAM上の8n+7番地から16ビットデータを転送する場合



(3) (1) の条件でソースリードに1ウェイトが入ったとき
例: ROM上の16n番地から16ビットデータを転送する場合



(4) (2) の条件でソースリードに1ウェイトが入ったとき
例: ROM上の16n+7番地から16ビットデータを転送する場合



注1. デスティネーションライトサイクルが1サイクルの例です。
デスティネーションについても各条件で、ソースと同じタイミングの変化があります。

図 12.11 ソースリードについての転送サイクル例

12.2 DMA転送サイクル数

DMA転送のサイクル数は以下のとおり計算できます。

1転送単位の転送サイクル数 ＝ 読み出しサイクル数 × j + 書き込みサイクル数 × k + 1

読み出しサイクル数はソースリードに必要なバスサイクル数、書き込みサイクル数はデスティネーションライトに必要なバスサイクル数で、それぞれ最低1サイクル必要です。アドレスによってサイクル数が増加しますので表 12.4からバスサイクル数を求めてください。

j は読み出しに必要なアクセスサイクル数、k は書き込みに必要なアクセスサイクル数で、表 12.5 を参照ください。

最後の+1はDCTiレジスタ(i=0~3)の減算サイクルです。

たとえば400h番地(RAM)から800h番地(RAM)に32ビットデータのDMA転送を行う場合、転送サイクル数は、

転送サイクル数 ＝ 1 × 1 + 1 × 1 + 1
＝ 3

と計算できます。

また、周辺バスクロックがCPUクロックの1/2の周波数のときに、AD00レジスタ(380h番地)からP1レジスタ(3C1h番地)、P0レジスタ(3C0h番地)に16ビットデータのDMA転送を行う場合、転送サイクル数は、

転送サイクル数 ＝ 1 × 2 × 2 + 1 × 2 × 2 + 1
＝ 9

と計算できます。

12.3 チャネル優先順位とDMA転送タイミング

複数のDMA転送要求が同一サンプリング期間(CPUクロックの立ち下がりエッジから次の立ち下がりエッジの一周期)で入った場合、これらの要求は同時にDMACに入力されます。この場合のチャネル優先順位は、DMA0>DMA1>DMA2>DMA3です。

以下、DMA0とDMA1への転送要求が同一サンプリング期間に入った場合の動作を、図12.12に示す外部要因によるDMA転送例を例に説明します。

図12.12ではDMA0への転送要求とDMA1への転送要求が同時に発生したので、まずチャネル優先順位が高いDMA0が転送を開始し、1転送単位終了後CPUにバスを明け渡します。CPUが1回のバスアクセスを終了すると、次にDMA1が転送を開始し、1転送単位終了後CPUにバスを明け渡します。

なお、DMA転送要求の回数はカウントできませんので、図12.12のDMA1のようにバスの使用が許可されるまでに複数回$\overline{\text{INT1}}$割り込みが発生した場合も、転送回数は1回です。

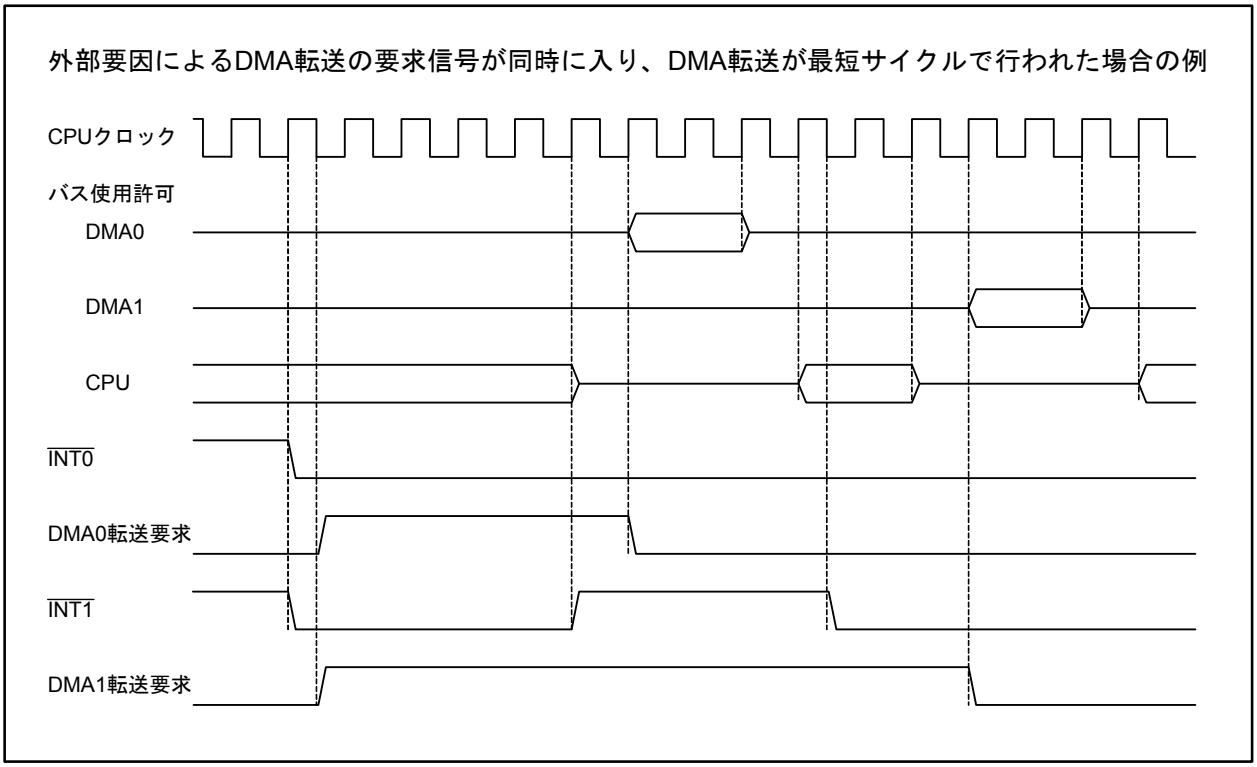


図12.12 外部要因によるDMA転送例

12.4 DMAコントローラ使用上の注意

12.4.1 DMAC関連レジスタの設定

- DMAC関連レジスタを設定する場合、設定するチャネルのDMDiレジスタ(i=0~3)のMDi1~MDi0ビットが“00b” (DMA転送禁止)の状態で設定し、最後にMDi1~MDi0ビットを“01b” (単転送)または“11b” (リピート転送)に設定してください。DMDiレジスタのUDAi、USAi、BWi1~BWi0ビットを書き換える場合も、MDi1~MDi0ビットが“00b” (DMA転送禁止)のときに実施してください。

- DMA転送を許可した後でDMAC関連レジスタを書き換える必要が生じた場合、まずDMA転送要求が発生しないようにDMA起動要因となる周辺機能を停止し、次に書き換えたいチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットを“00b” (DMA転送禁止)にしてから実施してください。

- 一旦DMA転送要求が受け付けられた後は、DMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットを“00b” (DMA転送禁止)にしてもDMA転送を禁止することはできません。この場合、DMA転送が完了するまでMDi1~MDi0ビット以外のDMAC関連レジスタの設定を変更しないでください。

- DMiSL、DMiSL2レジスタを設定した後、周辺バスクロックで6クロック以上待ってから、DMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットに“01b” (単転送)または“11b” (リピート転送)を書いてください。

12.4.2 DMAC関連レジスタの読み出し

- DMiSL、DMiSL2レジスタをそれぞれ連続して読み出す場合、以下の順で読み出してください。
  DM0SL→DM1SL→DM2SL→DM3SL
  DM0SL2→DM1SL2→DM2SL2→DM3SL2

13. DMAC II

周辺機能からの割り込み要求により起動し、CPUの命令を介さずにデータ転送を行います。転送対象にはメモリ、即値、メモリ+メモリ、即値+メモリが選択できます。

表13.1にDMAC IIの仕様を示します。

表 13.1 DMAC IIの仕様

項目	仕様
DMAC II起動要因	割り込み制御レジスタのILVL2~ILVL0ビットを“111b”(レベル7)にしたすべての周辺機能からの割り込み要求
転送対象	•メモリ→メモリ(メモリ間転送) •即値→メモリ(即値転送) •メモリ+メモリ→メモリ(演算転送) •即値+メモリ→メモリ(演算転送)
転送サイズ	8ビット、16ビット
転送空間	64Mバイト(00000000h~01FFFFFFhおよびFE000000h~FFFFFFFFh)の任意の空間から64Mバイトの任意の空間へデータ転送(注1)
アドレッシング	転送元と転送先で個別に以下の2つから選択可能 •固定: 毎回同じアドレス •インクリメント: データ転送1回ごとにアドレスを1(転送サイズ=8ビット)または2(転送サイズ=16ビット)加算
転送方式	•単転送: 一度の転送要求でデータ転送を1回だけ実行 •バースト転送: 一度の転送要求で転送カウンタに設定された回数のデータ転送を連続して実行 •複数転送: 一度の転送要求でそれぞれ異なる転送元/転送先に対する複数回のメモリ間転送を実行
チェーン転送機能	複数のDMAC IIインデックス(転送情報)を順次切り替えてデータ転送を実行
転送完了割り込み要求	転送カウンタが“0000h”になったとき発生

注1. ただし、転送サイズが 16 ビットで転送先アドレスが “FFFFFFFFh” のとき、FFFFFFFFh 番地と00000000h番地に転送します。転送元アドレスが“FFFFFFFFh”のときも同様です。

13.1 DMAC IIの設定

DMAC IIを使用する場合、以下の設定を行ってください。

- RIPL1レジスタ、RIPL2レジスタ
- DMAC IIインデックス
- DMAC IIの起動要因となる周辺機能の割り込み制御レジスタ
- DMAC IIの起動要因となる周辺機能の可変ベクタ
- インテリジェントI/O割り込みを使用する場合、IIOiIEレジスタ(i=0~11)のIRLTビット。IIOiIEレジスタについては「10. 割り込み」を参照してください。

13.1.1 RIPL1、RIPL2レジスタ

RIPL1、RIPL2レジスタ両方のDMAIIビットを“1”(DMA II転送)に、FSITビットを“0”(通常割り込み)にすると、割り込み制御レジスタのILVL2~ILVL0ビットを“111b”(レベル7)にしたすべての周辺機能からの割り込み要求で、DMAC IIが起動します。

図13.1にRIPL1、RIPL2レジスタを示します。

復帰用割り込み優先レベル設定レジスタi (i=1, 2)(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X		X				

シンボル	アドレス	リセット後の値
RIPL1, RIPL2	4407Fh、4407Dh番地	XX0X 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RLVL0	ウェイトモード/ストップモード復帰用割り込み優先レベル選択ビット (注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : レベル0 0 0 1 : レベル1 0 1 0 : レベル2 0 1 1 : レベル3 1 0 0 : レベル4 1 0 1 : レベル5 1 1 0 : レベル6 1 1 1 : レベル7	RW
RLVL1			RW
RLVL2			RW
FSIT	高速割り込み選択ビット (注3)	0: 割り込み要求レベル7は通常割り込みに使用 1: 割り込み要求レベル7は高速割り込みに使用 (注4)	RW
— (b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
DMAII	DMA II選択ビット (注5)	0: 割り込み要求レベル7は割り込みに使用 1: 割り込み要求レベル7はDMA II転送に使用 (注4)	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. RIPL1レジスタと、RIPL2レジスタには同じ値を書いてください。
注2. 要求のあった割り込みの要求レベルが、RLVL2 ~ RLVL0ビットで選択したレベルより大きい場合、ウェイトモード、ストップモードから復帰します。FLGレジスタのIPLと同じ値を設定してください。
注3. FSITビットが“1”の場合、割り込み要求レベルがレベル7の割り込みが高速割り込みになります。このとき、1つの割り込みのみ割り込み要求レベルをレベル7にしてください。
注4. FSITビットとDMAIIビットはどちらか一方のみ“1”にしてください。高速割り込みとDMAC IIは同時に使用できません。
注5. DMAIIビットを設定した後で割り込み制御レジスタのILVL2 ~ ILVL0ビットを設定してください。なお、DMAC IIの転送はIフラグとIPLの影響を受けません。

図 13.1 RIPL1、RIPL2レジスタ

13.1.2 DMAC IIインデックス

DMAC IIインデックスは12~60バイトで構成されるデータテーブルで、転送モード、転送カウンタ、転送元アドレス(または即値データ)、演算対象のアドレス、転送先アドレス、チェーン転送ベースアドレス、転送完了割り込みベクタアドレスのパラメータを格納します。

DMAC IIインデックスはRAMに配置してください。

図13.2にDMAC IIインデックスを、表13.2にDMAC IIインデックスの記述例を示します。

メモリ間転送、即値転送、演算転送

DMAC IIインデックス先頭番地 (BASE)

16ビット

BASE	転送モード	(MOD)
BASE+2	転送カウンタ	(COUNT)
BASE+4	転送元アドレス (または即値)	(SADR)
BASE+8	演算対象アドレス (注1)	(OADR)
BASE+12	転送先アドレス	(DADR)
BASE+16	チェーン転送ベースアドレス (注2)	(CADR)
BASE+20	転送完了割り込みベクタアドレス (注3)	(IADR)

複数転送

16ビット

BASE	転送モード	(MOD)
BASE+2	転送カウンタ	(COUNT)
BASE+4	転送元アドレス	(SADR1)
BASE+8	転送先アドレス	(DADR1)
BASE+12	転送元アドレス	(SADR2)
BASE+16	転送先アドレス	(DADR2)
	⋮	
BASE+52	転送元アドレス	(SADR7)
BASE+56	転送先アドレス	(DADR7)

注1. 演算転送機能を使用しない場合、このデータは不要です。
注2. チェーン転送機能を使用しない場合、このデータは不要です。
注3. 転送完了割り込みを使用しない場合、このデータは不要です。

DMAC IIインデックスはRAMに配置してください。また、必要なデータを前詰めで配置してください。
たとえば、演算転送機能を使用しない場合、転送先アドレスをBASE+8番地に配置してください(DMAC IIインデックス記述例の表参照)。
DMAC IIの起動要因となる周辺機能割り込みの割り込みベクタに、DMAC IIインデックスの先頭番地を設定してください。

図13.2 DMAC IIインデックス

次に、DMAC IIインデックスの内容を説明します。これらのデータは使用するDMAC IIの転送モードに応じて表13.2に示す順序で配置してください。

- **転送モード(MOD)**
  2バイトデータで、転送モードを設定してください。図13.3に転送モードの設定内容を示します。
- **転送カウンタ(COUNT)**
  2バイトデータで、転送回数を設定してください。
- **転送元アドレス(SADR)**
  4バイトデータで、転送元メモリのアドレスまたは即値を設定してください。即値の場合、上位2バイトは無視されます。
- **演算対象アドレス(OADR)**
  4バイトデータで、演算対象となるメモリのアドレスを設定してください。演算転送機能を使用する場合のみ、このデータを設定してください。

- **転送先アドレス(DADR)**
  4バイトデータで、転送先メモリのアドレスを設定してください。
- **チェーン転送ベースアドレス(CADR)**
  4バイトデータで、次回に行う転送のDMAC IIインデックス先頭番地(BASE)を設定してください。チェーン転送機能を使用する場合のみ、このデータを設定してください。
- **転送完了割り込みベクタアドレス(IADR)**
  4バイトデータで、転送完了割り込み処理の飛び先アドレスを設定してください。転送完了割り込みを使用する場合のみ、このデータを設定してください。

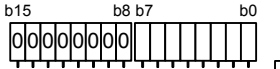
なお、これ以降の説明では各パラメータ名は上記( )内の記号を使用します。

表 13.2　DMAC IIインデックス記述例

転送データ	メモリ間転送/即値転送				演算転送				複数転送
チェーン転送	不使用	使用	不使用	使用	不使用	使用	不使用	使用	使用できません
転送完了割り込み	不使用	不使用	使用	使用	不使用	不使用	使用	使用	使用できません
DMAC II インデックス	MOD COUNT SADR DADR 12バイト	MOD COUNT SADR DADR CADR 16バイト	MOD COUNT SADR DADR IADR 16バイト	MOD COUNT SADR DADR CADR IADR 20バイト	MOD COUNT SADR OADR DADR 16バイト	MOD COUNT SADR OADR DADR CADR 20バイト	MOD COUNT SADR OADR DADR IADR 20バイト	MOD COUNT SADR OADR DADR CADR IADR 24バイト	MOD COUNT SADR1 DADR1 SADRi DADRi i=1~7 最大60バイト (i=7のとき)

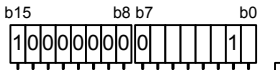
転送モード (MOD) (注1)

複数転送非選択時 (MULT=0)



ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SIZE	転送サイズ選択ビット	0: 8ビット 1: 16ビット	RW
IMM	転送対象選択ビット	0: 即値 1: メモリ	RW
UPDS	転送元アドレッシング選択ビット	0: 固定 1: インクリメント	RW
UPDD	転送先アドレッシング選択ビット	0: 固定 1: インクリメント	RW
OPER	演算転送機能選択ビット	0: 演算機能なし 1: 演算機能あり	RW
BRST	バースト転送機能選択ビット	0: 単転送 1: バースト転送	RW
INTE	転送完了割り込み選択ビット	0: 割り込みを使用しない 1: 割り込みを使用する	RW
CHAIN	チェーン転送選択ビット	0: チェーン転送を行わない 1: チェーン転送を行う	RW
— (b14-b8)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MULT	複数転送選択ビット	0: 複数転送を行わない	RW

複数転送選択時 (MULT=1)



ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SIZE	転送サイズ選択ビット	0: 8ビット 1: 16ビット	RW
IMM	予約ビット	“1”にしてください	RW
UPDS	転送元アドレッシング選択ビット	0: 固定 1: インクリメント	RW
UPDD	転送先アドレッシング選択ビット	0: 固定 1: インクリメント	RW
CNT0	転送数設定ビット	b6 b5 b4 0 0 0 : 設定しないでください 0 0 1 : 1回 0 1 0 : 2回 : : 1 1 1 : 7回	RW
CNT1			RW
CNT2			RW
CHAIN	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b14-b8)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MULT	複数転送選択ビット	1: 複数転送を行う	RW

注1. RAMに配置してください。

図 13.3　MOD

13.1.3 周辺機能の割り込み制御レジスタ

DMAC IIの起動要因に使用する周辺機能割り込みの割り込み制御レジスタは、ILVL2~ILVL0ビットを“111b”(レベル7)にしてください。

13.1.4 周辺機能の可変ベクタテーブル

DMAC IIの起動要因となる周辺機能割り込みの割り込みベクタに、DMAC IIインデックスの先頭番地を設定してください。

チェーン転送を使用するときは、可変ベクタテーブルをRAMに配置してください。

13.1.5 IIOiIEレジスタ(i=0~11)のIRLTビット

インテリジェントI/O割り込みによりDMAC IIを起動する場合、起動要因となる割り込みのIIOiIEレジスタのIRLTビットを“0”(割り込み要求をDMA、DMA IIで使用)にしてください。

13.2 DMAC IIの動作

RIPL1、RIPL2レジスタのDMAIIビットを“1”(割り込み要求レベル7はDMA II転送に使用)にすると、DMA II転送機能が選択されます。割り込み制御レジスタのILVL2~ILVL0ビットを“111b”(レベル7)にしたすべての周辺機能割り込み要求が、DMAC IIの起動要因になります。これらの周辺機能の割り込み要求は、DMA II転送要求となりますので、CPUへの割り込み要求としては使用できません。

ILVL2~ILVL0ビットが“111b”の割り込み要求が発生すると、IフラグとIPLに関係なくDMAC IIが起動します。

なお、DMAC IIの起動要因となる周辺機能割り込み要求と、より優先順位の高い割り込み要求(ウォッチドッグタイマ割り込み、電圧低下検出割り込み、発振停止検出割り込み、NMI)が同時に発生した場合、優先順位の高い割り込みがDMA II転送よりも優先して受け付けられ、その割り込みシーケンス終了後にDMA II転送が開始されます。

13.3 転送対象

DMAC IIでは、以下の3種類の転送対象に対し8ビットまたは16ビット単位でデータ転送を行います。

- メモリ間転送: 64Mバイト空間(00000000h~01FFFFFFhおよびFE000000h~FFFFFFFFh)の任意のメモリから同空間の任意のメモリに転送します。
- 即値転送: 即値データを64Mバイト空間の任意のメモリに転送します。
- 演算転送: 2つのデータを加算し、加算結果を64Mバイト空間の任意のメモリに転送します。

ただし、転送サイズが16ビットでDADRが“FFFFFFFFh”のとき、FFFFFFFFh番地と00000000h番地に転送します。SADRが“FFFFFFFFh”のときも同様です。

13.3.1 メモリ間転送

任意のメモリから任意のメモリへ転送します。転送の種類は、以下のとおりです。

- アドレス固定のメモリからアドレス固定のメモリへの転送
- アドレス固定のメモリから連続するメモリ領域への転送
- 連続するメモリ領域からアドレス固定のメモリへの転送
- 連続するメモリ領域から連続するメモリ領域への転送

アドレッシングに「インクリメント」を選択した場合、転送後、次回の転送のためにSADR、DADRがインクリメントされます。アドレスは、転送サイズが8ビットの場合は1、16ビットの場合は2加算されます。アドレスを加算することでSADRまたはDADRが“FFFFFFFFh”を超える場合、アドレスは“00000000h”に戻ります。同様にSADRまたはDADRが“01FFFFFFh”を超える場合、アドレスは“02000000h”となりますが、実際の転送はFE000000h番地に対して実行されます。

13.3.2 即値転送

即値を任意のメモリへ転送します。転送先のアドレッシングには「固定」または「インクリメント」を選択できます。SADRに即値を格納してください。8ビットの即値を転送する場合、SADRの下位1バイトに、16ビットの即値を転送する場合、SADRの下位2バイトにデータを設定してください(それぞれ上位3バイト、上位2バイトは無視されます)。

13.3.3 演算転送

任意のメモリの内容と任意のメモリの内容、または即値と任意のメモリの内容を加算した結果を任意のメモリに転送します。SADRに演算対象データのアドレスまたは即値を設定し、OADRにもう一方の演算対象データのアドレスを設定してください。メモリ+メモリ演算転送の場合、転送元と転送先のアドレッシングに「固定」または「インクリメント」が選択できます。転送元アドレッシングが「インクリメント」の場合には、演算対象のアドレッシングも「インクリメント」となります。即値+メモリ演算転送の場合、転送先のアドレッシングのみ「固定」または「インクリメント」から選択できます。

13.4 転送方式

DMAC IIでは単転送、バースト転送、複数転送が行えます。転送回数はCOUNTで設定します。COUNTが“0000h”の場合、転送は行いません。

13.4.1 単転送

MODのBRSTビットを“0”にすると単転送が選択されます。

一度の転送要求で、データ転送を1回だけ実行します。

転送元または転送先のアドレッシングに「インクリメント」を選択した場合、転送後、次回の転送のためにアドレスをインクリメントします。COUNTは、データ転送が1回実行されるごとにデクリメントされます。MODのINTEビットが“1”(転送完了割り込みを使用する)の場合、COUNTが“0000h”になった時点で、転送完了割り込み要求が発生します。

13.4.2 バースト転送

MODのBRSTビットを“1”にするとバースト転送が選択されます。

一度の転送要求で、COUNTで設定された回数分、連続してデータ転送を実行します。

COUNTはデータ転送が1回実行されるごとにデクリメントされ、“0000h”になったときバースト転送が終了します。INTEビットが“1”(転送完了割り込みを使用する)の場合、バースト転送終了時、転送完了割り込み要求が発生します。

なお、バースト転送中は、すべての割り込みを受け付けません。

13.4.3 複数転送

MODのMULTビットを“1”にすると複数転送が選択されます。

一度の転送要求でそれぞれ異なる転送元/転送先に対する複数回のメモリ間転送を行います。転送数はMODのCNT2~CNT0ビットで“001b”(1回)~“111b”(7回)が選択できます。なお、CNT2~CNT0ビットは“000b”にしないでください。

転送数分のSDAR、DADRをMOD、COUNTに続く番地にそれぞれ交互に配置してください。

複数転送選択時、演算転送、バースト転送、チェーン転送、および転送完了割り込みの各機能は使用できません。

13.5 チェーン転送

MODのCHAINビットを“1”にするとチェーン転送機能が有効になります。
チェーン転送時は以下のように動作します。

(1) 転送要求が発生すると、その要因の割り込みベクタで示されるDMAC II インデックスの内容に従ってデータ転送を実行します。BRSTビットが“0”のときは単転送、“1”のときはバースト転送が実行されます。
(2) COUNTが“0000h”になったとき、(1)の割り込みベクタがCADRの値に書き換わります。INTEビットが“1”の場合は、同時に転送完了割り込み要求が発生します。
(3) 次にDMA II転送要求が発生すると、(2)で書き換えた割り込みベクタが示すDMAC IIインデックスの内容に従ってデータ転送を実行します。

図 13.4にチェーン転送時の可変ベクタとDMAC IIインデックスを示します。
チェーン転送を使用する場合、可変ベクタテーブルはRAMに配置してください。

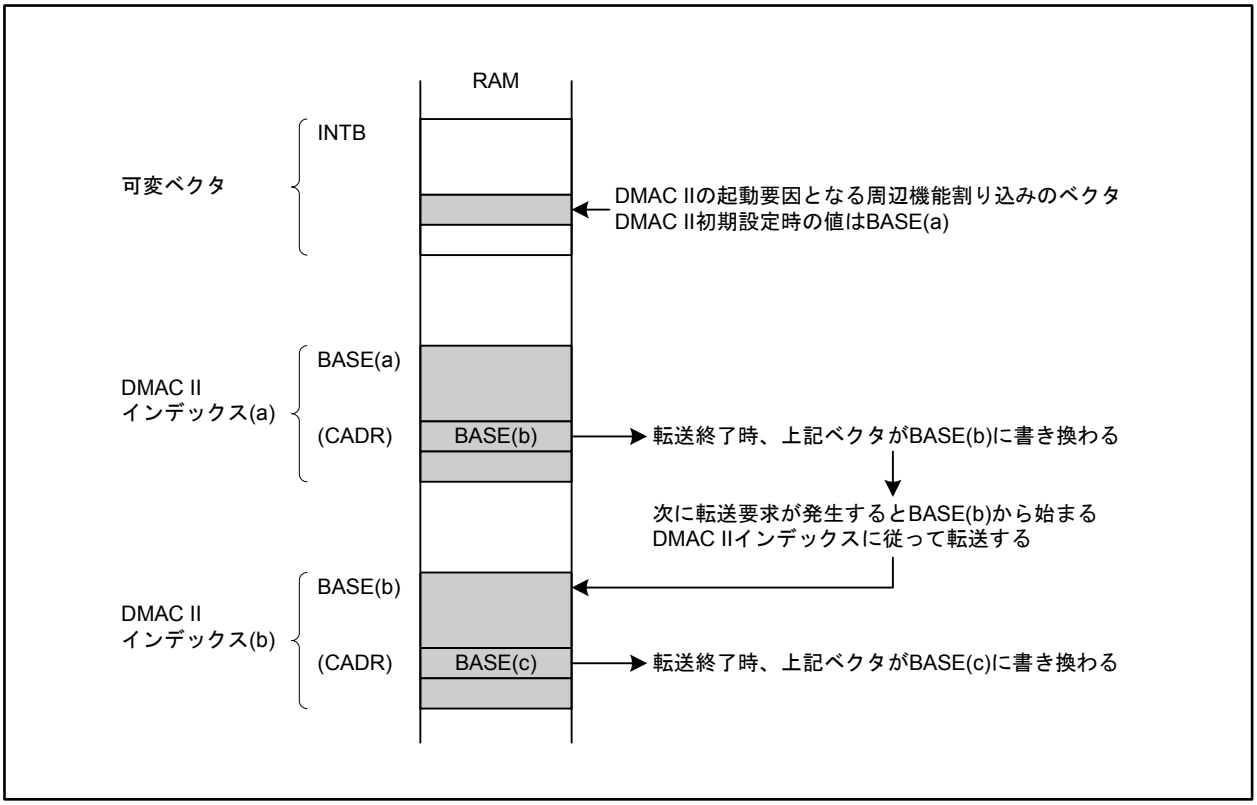


図 13.4 チェーン転送時の可変ベクタとDMAC IIインデックス

13.6 転送完了割り込み

MODのINTEビットを“1”にすると、転送完了割り込み要求を発生させることができます。転送完了割り込み処理ルーチンの先頭番地をIADRに設定してください。転送完了割り込み要求は、COUNTが“0000h”になったとき発生します。

転送完了割り込み処理ルーチンの最初の命令は、DMA II転送が完了した7サイクル後に実行されます。

13.7 実行時間

DMAC IIの実行サイクル数は以下のとおり計算できます。

複数転送以外: $t = 6 + (26 + a + b + c + d) \times m + (4 + e) \times n$ [サイクル]
複数転送: $t = 21 + (11 + b + c) \times k$ [サイクル]

a: IMM=0 (転送元が即値)の場合a=0、
IMM=1 (転送元がメモリ)の場合a=–1
b: UPDS=1 (転送元アドレッシングがインクリメント)の場合b=0、
UPDS=0 (転送元アドレッシングが固定)の場合b=1
c: UPDD=1 (転送先アドレッシングがインクリメント)の場合c=0、
UPDD=0 (転送先アドレッシングが固定)の場合c=1
d: OPER=0 (演算機能なし)の場合d=0
OPER=1 (演算機能あり)でUPDS=0 (転送元が即値かアドレス固定)の場合d=7、
OPER=1 (演算機能あり)でUPDS=1 (転送元アドレッシングがインクリメント)の場合d=8
e: CHAIN=0 (チェーン転送機能なし)の場合e=0、
CHAIN=1 (チェーン転送機能あり)の場合e=4
m: BRST=0 (単転送)の場合m=1、
BRST=1 (バースト転送)の場合m=COUNT
n: COUNTが“0001h”の場合n=0、
COUNTが“0002h”以上の場合n=1
k: CNT2~CNT0ビットで設定した転送数

上式は概算値であり、CPUの状態、バスウェイトやDMAC IIインデックスの配置によりサイクル数は変化します。

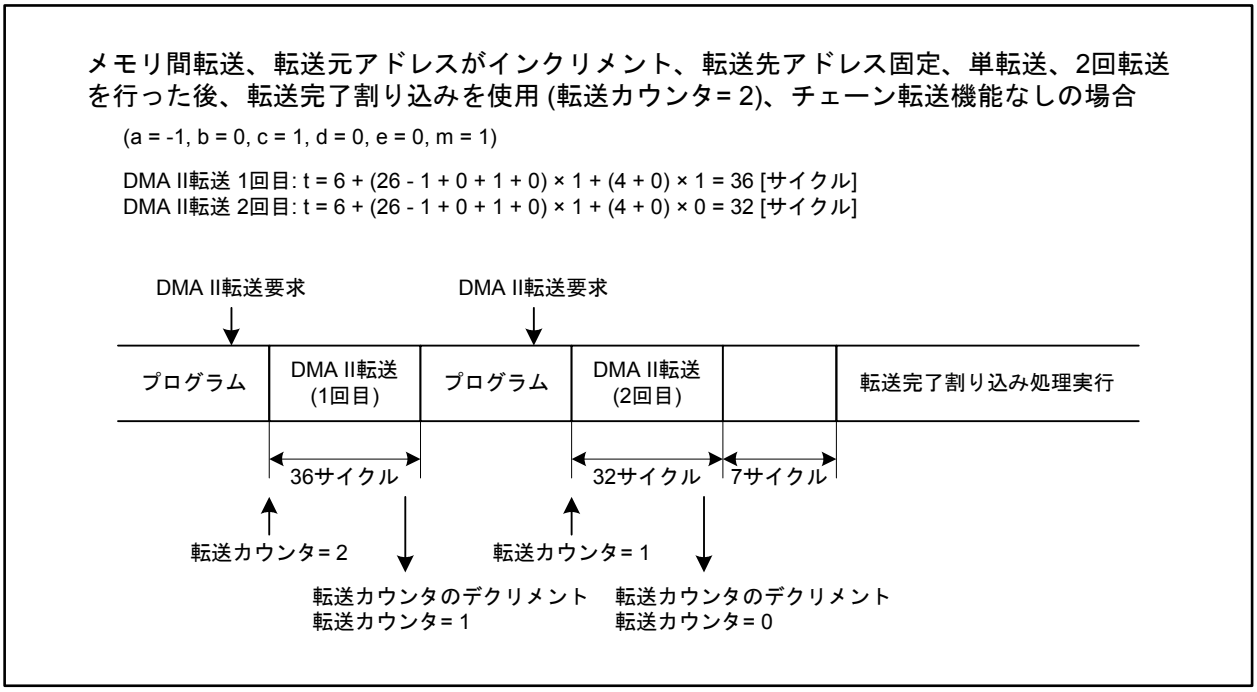


図 13.5 転送時間

14. プログラマブル入出力ポート

プログラマブル入出力ポートは、P0~P10 (P8_5、P9_0~P9_2は除く)の84本あります。

ポートの入出力方向は、方向レジスタによって1本ごとに設定できます。ただし、P8_5とP9_1は入力専用です。P8_5は$\overline{\text{NMI}}$と端子を共用していますので、$\overline{\text{NMI}}$入力レベルをP8レジスタのP8_5ビットから読めます。

図14.1にプログラマブル入出力ポートの構成を、図14.2、図14.3に入力専用ポートの構成を示します。

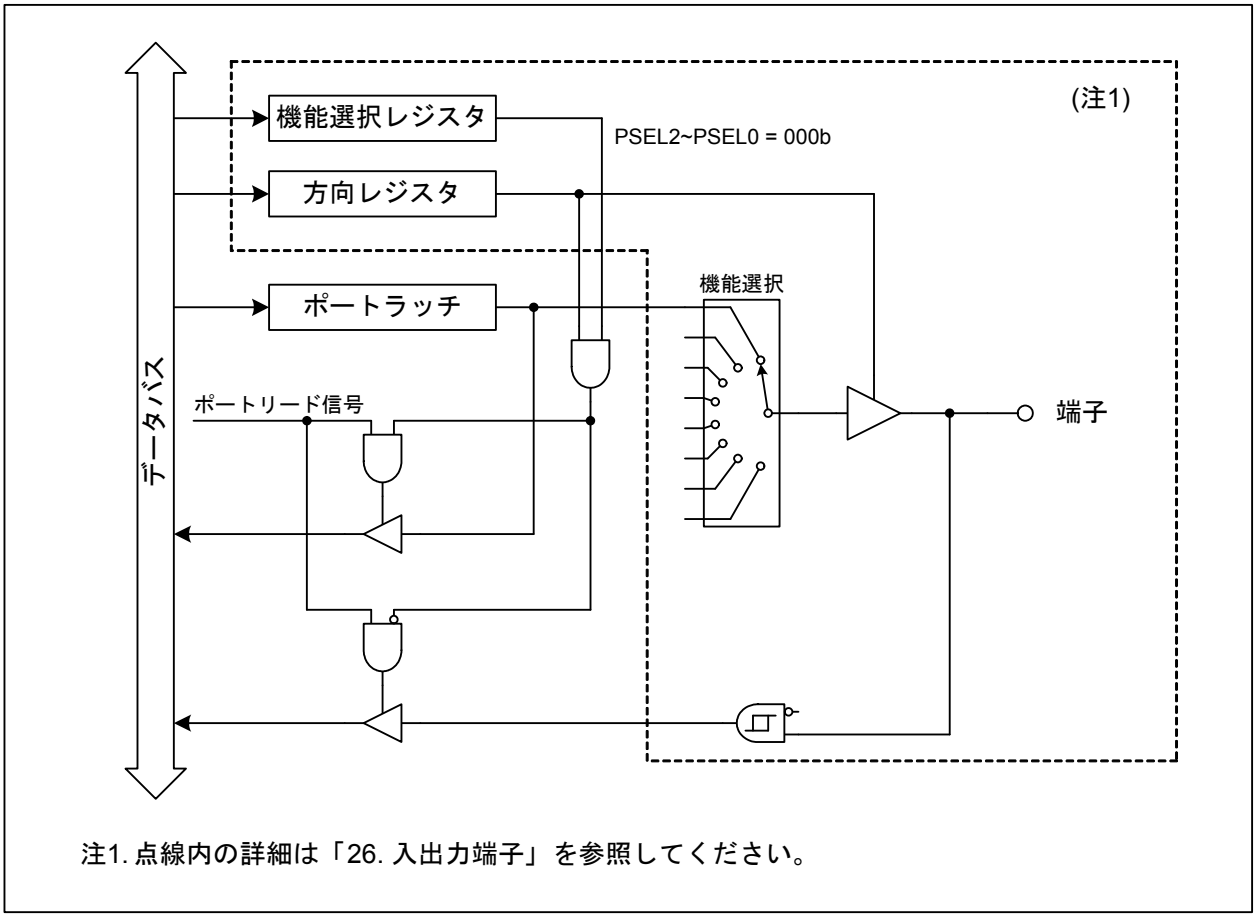


図 14.1　プログラマブル入出力ポートの構成

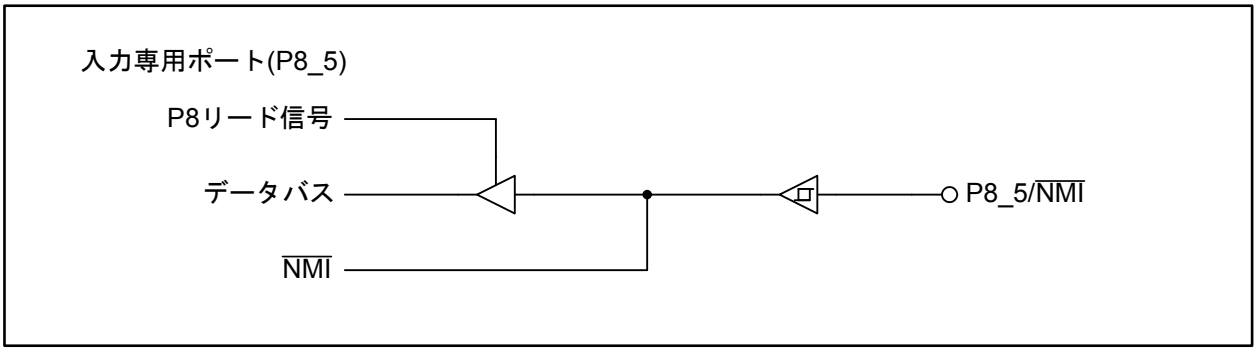


図 14.2　入力専用ポートの構成(1)

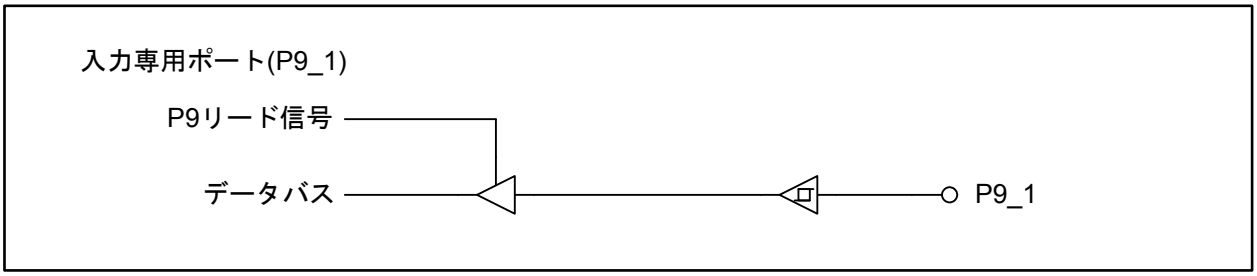


図 14.3　入力専用ポートの構成(2)

14.1 ポートPiレジスタ (Piレジスタ、i=0~10)

外部とのデータ入出力は、Piレジスタへの書き込みと読み出しによって行います。Piレジスタは出力データを保持するポートラッチと端子の状態を読む回路で構成されています。Piレジスタの各ビットは各ポートと一対一に対応しています。

出力機能選択レジスタでプログラマブル入出力ポートを選択した場合、出力のときはポートラッチの値が、入力のときは端子の状態が読めます。

図14.4にPiレジスタを示します。

ポートPiレジスタ (i=0~10)

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
P0, P1, P2, P3	03C0h、03C1h、03C4h、03C5h番地	不定
P4, P5, P6, P7	03C8h、03C9h、03CCh、03CDh番地	不定
P8 (注1), P9 (注1、2)	03D0h、03D1h番地	不定
P10	03D4h番地	不定

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
Pi_0	ポートPi_0ビット　(注2)	方向ビットが“0”(入力)の場合 書いた場合、対応するビットに値が書かれるが、入力に設定されているため端子には出力されない。 読んだ場合、対応する端子の状態が読める 0: 端子の状態は“L” 1: 端子の状態は“H” 方向ビットが“1”(出力)の場合 書いた場合、対応する端子のレベルに値が反映される 0: “L”が出力される 1: “H”が出力される 読んだ場合、対応するビットに設定した値が読める	RW
Pi_1	ポートPi_1ビット　(注1)		RW
Pi_2	ポートPi_2ビット　(注2)		RW
Pi_3	ポートPi_3ビット		RW
Pi_4	ポートPi_4ビット		RW
Pi_5	ポートPi_5ビット　(注1)		RW
Pi_6	ポートPi_6ビット		RW
Pi_7	ポートPi_7ビット		RW

注1. P8レジスタのP8_5ビット、P9レジスタのP9_1ビットは読み出しのみできます。
注2. P9レジスタのP9_0、P9_2ビットは予約ビットです。書く場合“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定です。

図 14.4　P0~P10 レジスタ

15. タイマ

16ビットタイマが11本あります。11本のタイマは、持っている機能によってタイマA (5本) とタイマB (6本) の2種類に分類できます。すべてのタイマはそれぞれ独立して動作します。各タイマのカウントソースは、カウント、リロードなどのタイマ動作の動作クロックになります。

図 15.1にタイマAの構成、図 15.2にタイマBの構成を示します。

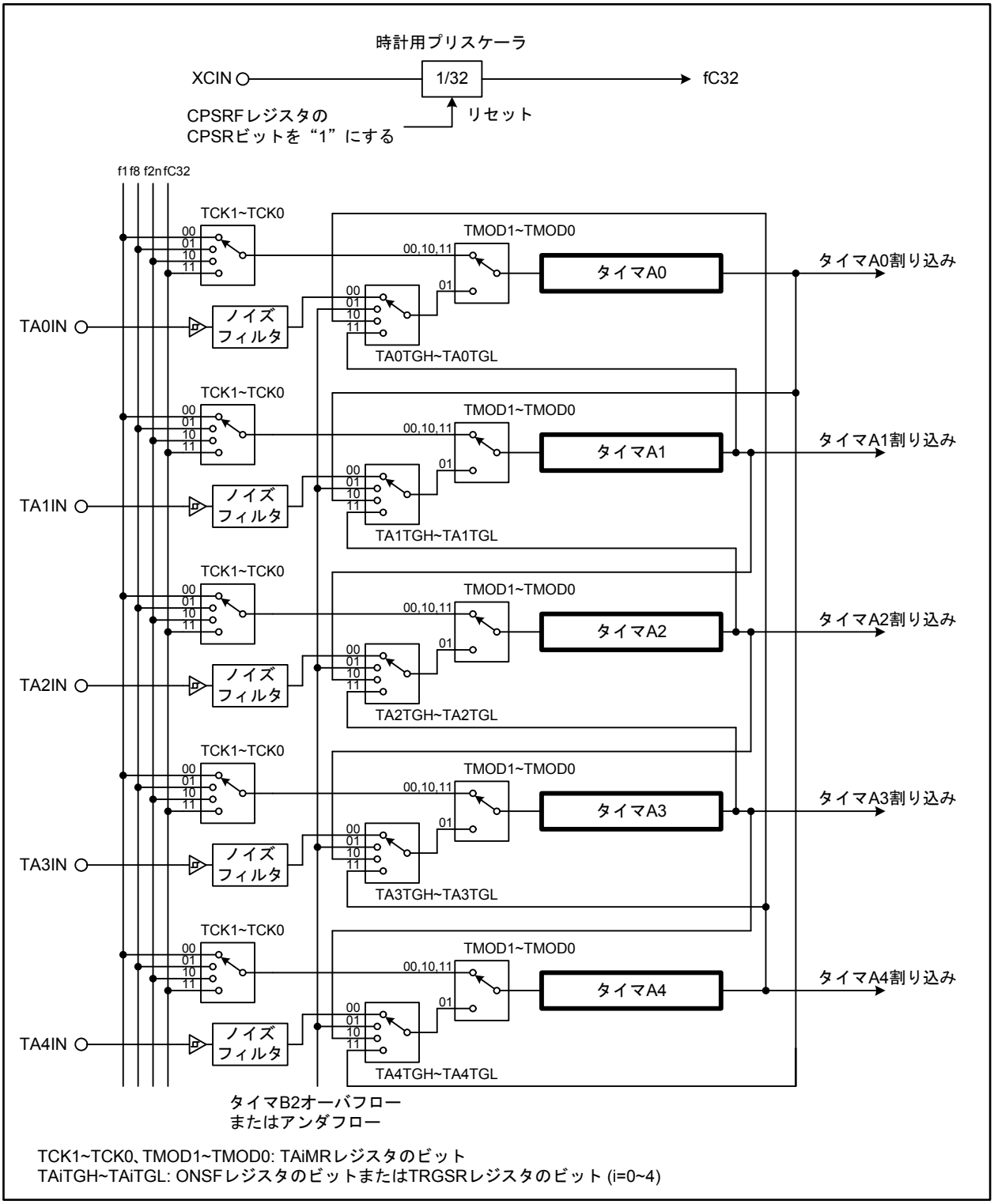


図 15.1 タイマAの構成

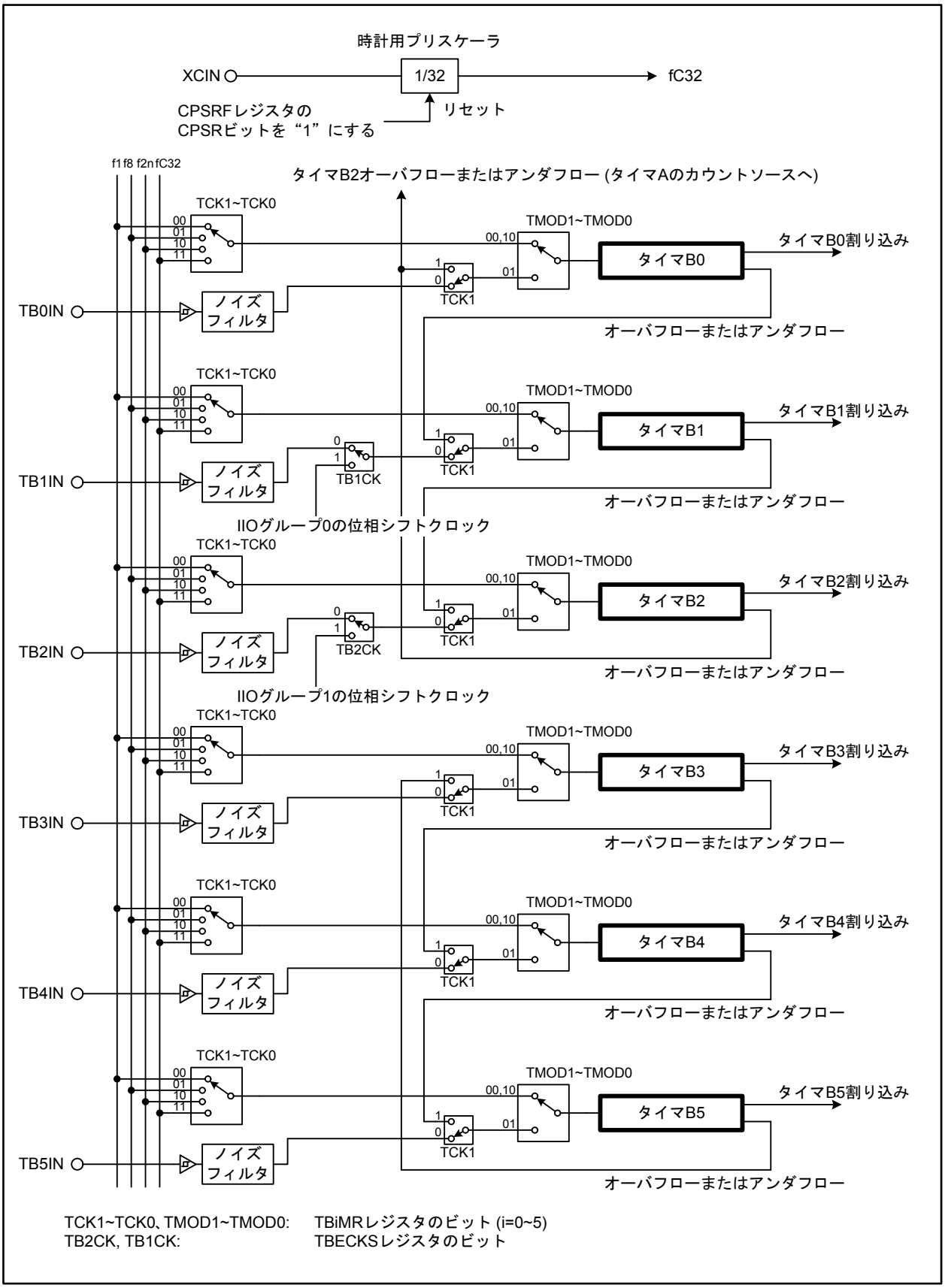


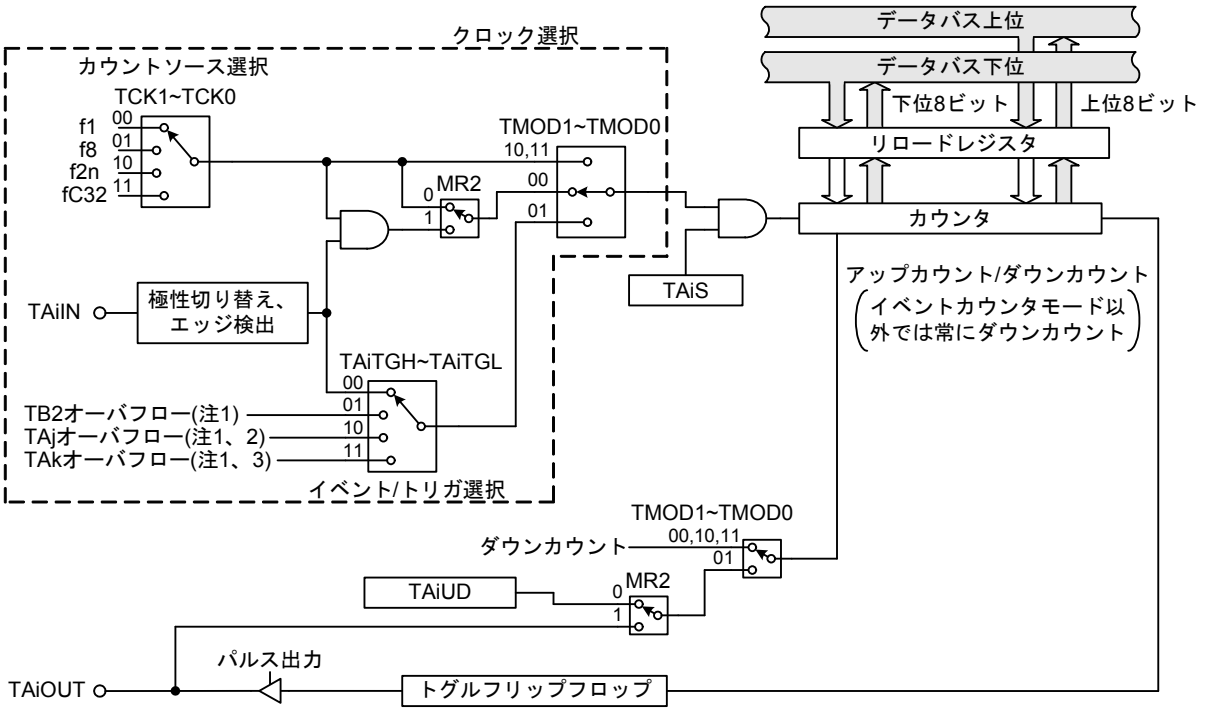
図 15.2 タイマBの構成

15.1 タイマA

図 15.3にタイマAのブロック図を、図 15.4~図 15.10にタイマA関連のレジスタを示します。

タイマAには以下の4種類のモードがあり、イベントカウンタモードを除いてタイマA0~A4は同一の機能を持ちます。各モードはTA0MR~TA4MR レジスタのTMOD1~TMOD0ビットで選択できます。

- タイマモード　内部カウントソースをカウントするモード
- イベントカウンタモード　外部からのパルスまたは他のタイマのオーバフローとアンダフローをカウントするモード
- ワンショットタイマモード　カウント値が“0000h”になるまでの間1度だけパルスを出力するモード
- パルス幅変調モード　任意のパルス幅を連続して出力するモード



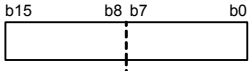
i = 0~4
注1. オーバフロー、またはアンダフロー
注2. j = i-1、ただし i=0 のとき j=4 (右記参照)
注3. k = i+1、ただし i=4 のとき k=0 (右記参照)

TAi	TAj	TAk
タイマA0	タイマA4	タイマA1
タイマA1	タイマA0	タイマA2
タイマA2	タイマA1	タイマA3
タイマA3	タイマA2	タイマA4
タイマA4	タイマA3	タイマA0

TCK1~TCK0, TMOD1~TMOD0, MR2: TAiMRレジスタのビット
TAiTGH~TAiTGL: i=0のときONSFレジスタのビット、i=1~4のときTRGSRレジスタのビット
TAiS: TABSRレジスタのビット
TAiUD: UDFレジスタのビット

図 15.3 タイマAブロック図

タイマAiレジスタ(i=0~4)(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0~TA2	0347h-0346h、0349h-0348h、034Bh-034Ah番地	不定
TA3, TA4	034Dh-034Ch、034Fh-034Eh番地	不定

モード	機　能	設定範囲	RW
タイマモード	設定値をnとすると、カウントソースをn+1分周する	0000h~FFFFh	RW
イベントカウンタモード	設定値をnとすると、カウントソースをアップカウント時、FFFFh -n+1分周し、ダウンカウント時、n+1分周する　(注2)	0000h~FFFFh	RW
ワンショットタイマモード	設定値をnとすると、カウントソースをn分周し、停止する　(注3)	0000h~FFFFh (注4)	WO
パルス幅変調モード(16ビットPWM)	カウントソースの周波数fj、TAiレジスタの設定値をnとすると、 PWMの周期: $(2^{16}-1)$ / fj PWMパルスの“H”幅: n / fj　(注5)	0000h~FFFEh (注4)	WO
パルス幅変調モード(8ビットPWM)	カウントソースの周波数fj、TAiレジスタの上位アドレスの設定値をn、下位アドレスの設定値をmとすると、 PWMの周期: $(2^{8}-1) \times (m+1)$ / fj PWMパルスの“H”幅: (m+1)n / fj　(注5)	00h~FEh (上位アドレス) 00h~FFh (下位アドレス) (注4)	WO

fj: f1, f8, f2n, fC32
注1. 読み出しと書き込みは16ビット単位で実行してください。
注2. 外部入力パルスまたは他のタイマのオーバフローとアンダフローをカウント。
注3. TAiレジスタを“0000h”にした場合、カウンタは動作せず、タイマAi割り込み要求は発生しません。
注4. TAiレジスタへはMOV命令を使用して書いてください。
注5. TAiレジスタを“0000h”にした場合、パルス幅変調器は動作せず、TAiOUT端子の出力レベルは“L”のままで、タイマAi割り込み要求も発生しません。また、8ビットパルス幅変調器として動作しているとき、TAiレジスタの上位8ビットを“00h”にした場合も同様です。

図 15.4　TA0~TA4 レジスタ

タイマAiモードレジスタ(i=0~4)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
					0		

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0MR~TA4MR	0356h、0357h、0358h、0359h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 0 : タイマモード 0 1 : イベントカウンタモード 1 0 : ワンショットタイマモード 1 1 : パルス幅変調モード	RW
TMOD1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MR1	—	動作モードによって機能が異なる	RW
MR2			RW
MR3			RW
TCK0	カウントソース選択ビット	動作モードによって機能が異なる	RW
TCK1			RW

図 15.5　TA0MR~TA4MR レジスタ

カウント開始レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TABSR	0340h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA0S	タイマA0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA1S	タイマA1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA2S	タイマA2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA3S	タイマA3カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA4S	タイマA4カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB0S	タイマB0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB1S	タイマB1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB2S	タイマB2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW

図 15.6　TABSR レジスタ

アップダウン選択レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
UDF	0344h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA0UD	タイマA0 アップダウン選択ビット	0: ダウンカウント 1: アップカウント (注2)	RW
TA1UD	タイマA1 アップダウン選択ビット	0: ダウンカウント 1: アップカウント (注2)	RW
TA2UD	タイマA2 アップダウン選択ビット	0: ダウンカウント 1: アップカウント (注2)	RW
TA3UD	タイマA3 アップダウン選択ビット	0: ダウンカウント 1: アップカウント (注2)	RW
TA4UD	タイマA4 アップダウン選択ビット	0: ダウンカウント 1: アップカウント (注2)	RW
TA2P	タイマA2 二相パルス信号処理 機能選択ビット	0: 二相パルス信号処理機能禁止 1: 二相パルス信号処理機能許可 (注3)	WO
TA3P	タイマA3 二相パルス信号処理 機能選択ビット	0: 二相パルス信号処理機能禁止 1: 二相パルス信号処理機能許可 (注3)	WO
TA4P	タイマA4 二相パルス信号処理 機能選択ビット	0: 二相パルス信号処理機能禁止 1: 二相パルス信号処理機能許可 (注3)	WO

注1. このレジスタへの書き込みはMOV命令を使用してください。
注2. イベントカウンタモード時、TAiMRレジスタ (i=0~4) のMR2ビットを“0”(アップ/ダウン切り替え要因はUDFレジスタの内容) にすると有効になります。
注3. 二相パルス信号処理機能を使用しない場合は“0”にしてください。

図 15.7　UDF レジスタ

ワンショット開始レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
ONSF	0342h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA0OS	タイマA0 ワンショット開始ビット	0: 何もしない 1: タイマスタート　(注1)	RW
TA1OS	タイマA1 ワンショット開始ビット	0: 何もしない 1: タイマスタート　(注1)	RW
TA2OS	タイマA2 ワンショット開始ビット	0: 何もしない 1: タイマスタート　(注1)	RW
TA3OS	タイマA3 ワンショット開始ビット	0: 何もしない 1: タイマスタート　(注1)	RW
TA4OS	タイマA4 ワンショット開始ビット	0: 何もしない 1: タイマスタート　(注1)	RW
TAZIE	Z相入力信号有効ビット	0: Z相入力信号無効 1: Z相入力信号有効	RW
TA0TGL	タイマA0イベント/ トリガ選択ビット	b7 b6 0 0 : TA0IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注2) 1 0 : TA4のオーバフローを選択 (注2) 1 1 : TA1のオーバフローを選択 (注2)	RW
TA0TGH			RW

注1. 読み出し時の値は“0”。
注2. オーバフロー、またはアンダフロー。

図 15.8　ONSF レジスタ

トリガ選択レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TRGSR	0343h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA1TGL	タイマA1イベント/トリガ選択ビット	b1 b0 0 0 : TA1IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注1) 1 0 : TA0のオーバフローを選択 (注1) 1 1 : TA2のオーバフローを選択 (注1)	RW
TA1TGH			RW
TA2TGL	タイマA2イベント/トリガ選択ビット	b3 b2 0 0 : TA2IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注1) 1 0 : TA1のオーバフローを選択 (注1) 1 1 : TA3のオーバフローを選択 (注1)	RW
TA2TGH			RW
TA3TGL	タイマA3イベント/トリガ選択ビット	b5 b4 0 0 : TA3IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注1) 1 0 : TA2のオーバフローを選択 (注1) 1 1 : TA4のオーバフローを選択 (注1)	RW
TA3TGH			RW
TA4TGL	タイマA4イベント/トリガ選択ビット	b7 b6 0 0 : TA4IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注1) 1 0 : TA3のオーバフローを選択 (注1) 1 1 : TA0のオーバフローを選択 (注1)	RW
TA4TGH			RW

注1. オーバフロー、またはアンダフロー。

図 15.9　TRGSR レジスタ

カウントソースプリスケーラレジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	0	0	0				

シンボル	アドレス	リセット後の値
TCSPR	035Fh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CNT0	分周比選択ビット　(注1)	設定値をnとすると、メインクロックまたは周辺機能クロック源を2n分周したものが、f2nになる。 ただし、n=0の場合は分周なし	RW
CNT1			RW
CNT2			RW
CNT3			RW
— (b6-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
CST	分周器動作許可ビット	0: 分周器停止 1: 分周器動作	RW

注1. CNT3~CNT0ビットを書き換える場合は、CSTビットを“0”にして書き換えてください。

図 15.10　TCSPR レジスタ

15.1.1 タイマモード

内部で生成されたカウントソースをカウントするモードです。表 15.1 にタイマモードの仕様を、図 15.11 にタイマモード時の TA0MR~TA4MR レジスタを示します。

表 15.1 タイマモードの仕様(i=0~4)

項目	仕様
カウントソース	f1, f8, f2n, fC32
カウント動作	• ダウンカウント • アンダフロー時、リロードレジスタの内容をリロードしてカウントを継続
分周比	$\frac{1}{n+1}$ n : TAi レジスタ設定値 0000h~FFFFh
カウント開始条件	TABSR レジスタの TAiS ビットを“1”(カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSR レジスタの TAiS ビットを“0”(カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	アンダフロー時
TAiIN 端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはゲート入力
TAiOUT 端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはパルス出力
タイマの読み出し	TAi レジスタを読むと、カウント値が読める
タイマの書き込み	• カウント停止中、カウント開始後 1 回目のカウントソースが入力されるまで TAi レジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TAi レジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)
選択機能	• ゲート機能 TAiIN 端子の入力信号によってカウント開始、停止が可能 • パルス出力機能 アンダフローするごとに TAiOUT 端子の極性が反転 TAiS ビットが“0”(カウント停止)の期間は“L”出力

タイマAiモードレジスタ(i=0~4)(タイマモード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0			0	0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0MR~TA4MR	0356h、0357h、0358h、0359h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 0 : タイマモード	RW
TMOD1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MR1	ゲート機能選択ビット	b4 b3 0 X : ゲート機能なし　(注1) (TAiIN端子はプログラマブル入出力端子) 1 0 : TAiIN端子が“L”の期間だけカウント 1 1 : TAiIN端子が“H”の期間だけカウント	RW
MR2			RW
MR3	タイマモードでは“0”にしてください		RW
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

注1. Xの値は“0”または“1”のいずれでも可。

図 15.11　タイマモード時のTA0MR~TA4MRレジスタ

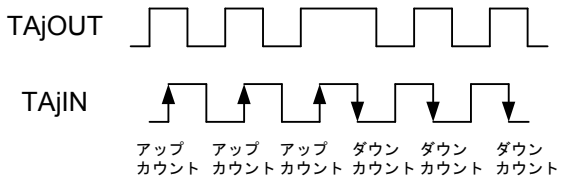
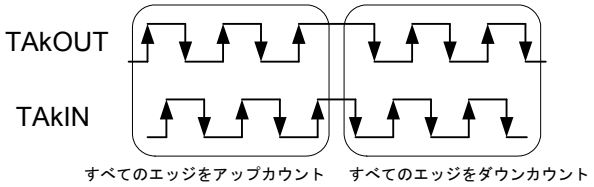
15.1.2 イベントカウンタモード

外部信号または他のタイマのオーバフローとアンダフローをカウントするモードです。タイマA2、A3、A4は、二相の外部信号をカウントできます。表15.2にイベントカウンタモードの仕様(二相パルス信号処理を使用しない場合)、表15.3にイベントカウンタモードの仕様(タイマA2、A3、A4で二相パルス信号処理を使用する場合)を示します。図15.12にイベントカウンタモード時のTA0MR~TA4MRレジスタを示します。

表15.2 イベントカウンタモードの仕様(二相パルス信号処理を使用しない場合)(i=0~4)

項目	仕様
カウントソース	• TAiIN端子に入力された外部信号(プログラムにて有効エッジを選択可能) • タイマB2のオーバフローとアンダフロー、タイマAj (j=i-1、ただしi=0のときj=4)のオーバフローとアンダフロー、タイマAk (k=i+1、ただしi=4のときk=0)のオーバフローとアンダフロー
カウント動作	• アップカウントまたはダウンカウントを、外部信号またはプログラムで選択可能 • オーバフローまたはアンダフロー時は、リロードレジスタの内容をリロードしてカウントを継続します。フリーラン機能選択時はリロードせずカウントを継続します
分周比	• アップカウント時: $\frac{1}{FFFFh - n + 1}$ • ダウンカウント時: $\frac{1}{n + 1}$ n : TAiレジスタ設定値 0000h~FFFFh
カウント開始条件	TABSRレジスタのTAiSビットを“1”(カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSRレジスタのTAiSビットを“0”(カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	オーバフロー時とアンダフロー時
TAiIN端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはカウントソース入力
TAiOUT端子機能	プログラマブル入出力ポート、パルス出力、またはアップカウント/ダウンカウント切り替え入力
タイマの読み出し	TAiレジスタを読むと、カウント値が読める
タイマの書き込み	• カウント停止中、カウント開始後1回目のカウントソースが入力されるまで TAiレジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TAiレジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)
その他の機能	• フリーランカウント機能 オーバフローまたはアンダフローが発生してもリロードレジスタからリロードしない • パルス出力機能 オーバフローまたはアンダフローするごとにTAiOUT端子の極性が反転 TAiSビットが“0”(カウント停止)の期間は“L”出力

表 15.3　イベントカウンタモードの仕様(タイマA2~A4で二相パルス信号処理を使用する場合)(i=2~4)

項目	仕様
カウントソース	TAiIN、TAiOUT端子に入力された二相パルス信号
カウント動作	•アップカウントまたはダウンカウントを二相パルス信号によって切り替え可 •オーバフローまたはアンダフロー時は、リロードレジスタの内容をリロードしてカウントを継続します。フリーラン機能選択時はリロードせずカウントを継続します
分周比	•アップカウント時: $\frac{1}{FFFFh - n + 1}$ •ダウンカウント時: $\frac{1}{n + 1}$　　n : TAi設定値 0000h~FFFFh
カウント開始条件	TABSRレジスタのTAiSビットを“1”(カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSRレジスタのTAiSビットを“0”(カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	オーバフロー時とアンダフロー時
TAiIN端子機能	二相パルス入力
TAiOUT端子機能	二相パルス入力
タイマの読み出し	TAiレジスタを読むと、カウント値が読める
タイマの書き込み	•カウント停止中、カウント開始後1回目のカウントソースが入力されるまで TAiレジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる •カウント中 TAiレジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)
その他の機能(注1)	•通常処理動作(タイマA2、タイマA3) TAjOUT端子(j=2, 3)の入力信号が“H”レベルの期間TAjIN端子の立ち上がりをアップカウントし、立ち下りをダウンカウントします  •4逓倍処理動作(タイマA3、タイマA4) TAkOUT端子(k=3, 4)の入力信号が“H”の期間にTAkIN端子が立ち上がる位相関係の場合、TAkOUT、TAkIN端子の立ち上がり、立ち下がりをアップカウントします。TAkOUT端子の入力信号が“H”の期間にTAkIN端子が立ち下がる位相関係の場合、TAkOUT、TAkIN端子の立ち上がり、立ち下がりをダウンカウントします  •Z相入力によるカウンタ初期化(タイマA3) Z相入力により、タイマのカウント値を“0”にします

注1.　タイマA3だけいずれかを選択できます。タイマA2は通常処理動作に、タイマA4は4逓倍処理動作に固定です。

タイマAiモードレジスタ(i=0~4)(イベントカウンタモード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0			0	0	1

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0MR~TA4MR	0356h、0357h、0358h、0359h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能 (二相パルス信号処理を使用しない)	機　能 (二相パルス信号処理を使用する)	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 1 : イベントカウンタモード (注1)		RW
TMOD1				RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください		RW
MR1	カウント極性選択ビット (注2)	0: 立ち下がりエッジをカウント 1: 立ち上がりエッジをカウント	“0”にしてください	RW
MR2	アップ/ダウン切り替え要因選択ビット	0: UDFレジスタの内容 1: TAiOUT端子の入力内容 (注3)	“1”にしてください	RW
MR3	イベントカウンタモードでは、“0”にしてください			RW
TCK0	カウント動作タイプ選択ビット	0: リロードタイプ 1: フリーランタイプ		RW
TCK1	二相パルス処理動作選択ビット (注4、5)	“0”にしてください	0: 通常処理動作 1: 4逓倍処理動作	RW

注1. イベントカウンタモードではカウントソースをONSFレジスタ、またはTRGSRレジスタのTAiTGH~TAiTGLビットで選択できます。
注2. 外部信号カウント時のみ有効。
注3. TAiOUT端子の入力信号が“L”のときはダウンカウント、“H”のときはアップカウントを行います。
注4. TCK1ビットはTA3MRレジスタにおいて有効です。
注5. 二相パルス信号処理を行う場合、UDFレジスタのTAjPビット(j=2~4) は“1”(二相パルス信号処理機能許可)に、TRGSRレジスタのTAjTGH~TAjTGLビットを“00b”(TAjIN端子の入力) にしてください。

図 15.12 イベントカウンタモード時のTA0MR~TA4MRレジスタ

15.1.2.1 二相パルス信号処理でのカウンタ初期化

二相パルス信号処理時にZ相(カウンタ初期化)入力信号により、タイマのカウント値を“0”にする機能です。

この機能は、タイマA3のイベントカウンタモード、二相パルス信号処理、フリーランタイプ、4逓倍処理でのみ使用でき、Z相は$\overline{\text{INT2}}$端子から入力します。

ONSFレジスタのTAZIEビットを“1”(Z相入力有効)にすると、Z相入力によるカウンタの初期化が有効になります。また、Z相入力でカウンタを“0”にするためには、TA3レジスタにあらかじめ“0000h”を書いてください。

Z相入力は、$\overline{\text{INT2}}$入力のエッジを検出して行います。エッジの極性はINT2ICレジスタのPOLビットで選択できます。Z相のパルス幅は、タイマA3のカウントソースの1周期分以上になるように入力してください。図15.13に二相パルス(A相、B相)とZ相の関係を示します。

Z相入力でのカウンタが初期化されるタイミングは、Z相入力を受けた次のカウントソースタイミングになります。図15.14にカウンタ初期化タイミングを示します。

タイマA3のオーバフローとアンダフロータイミングと$\overline{\text{INT2}}$入力によるカウンタの初期化のタイミングが重なると、タイマA3の割り込み要求が2回連続して発生しますので、本機能使用時はタイマA3の割り込み要求は使用しないでください。

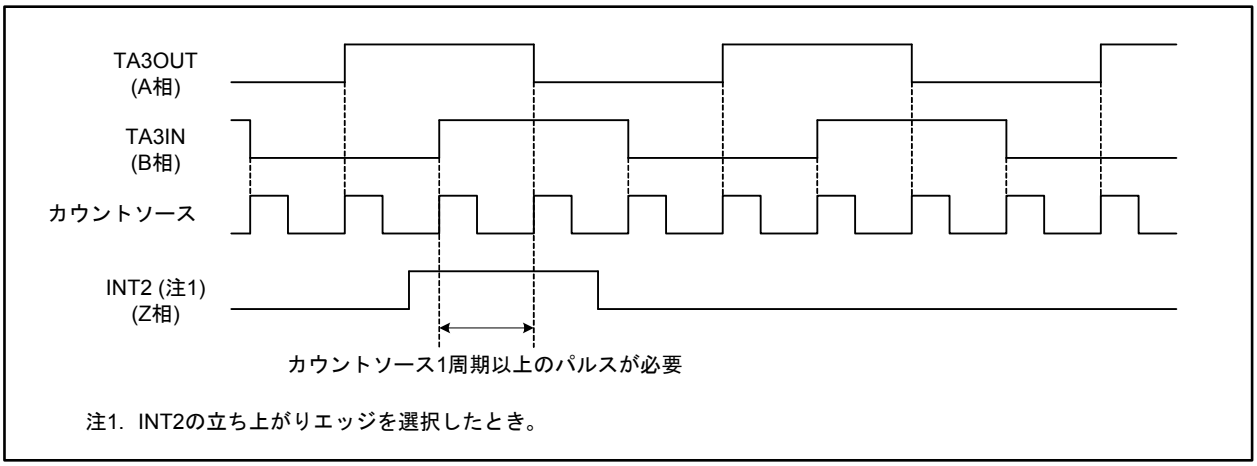


図 15.13 二相パルス(A相、B相)とZ相の関係

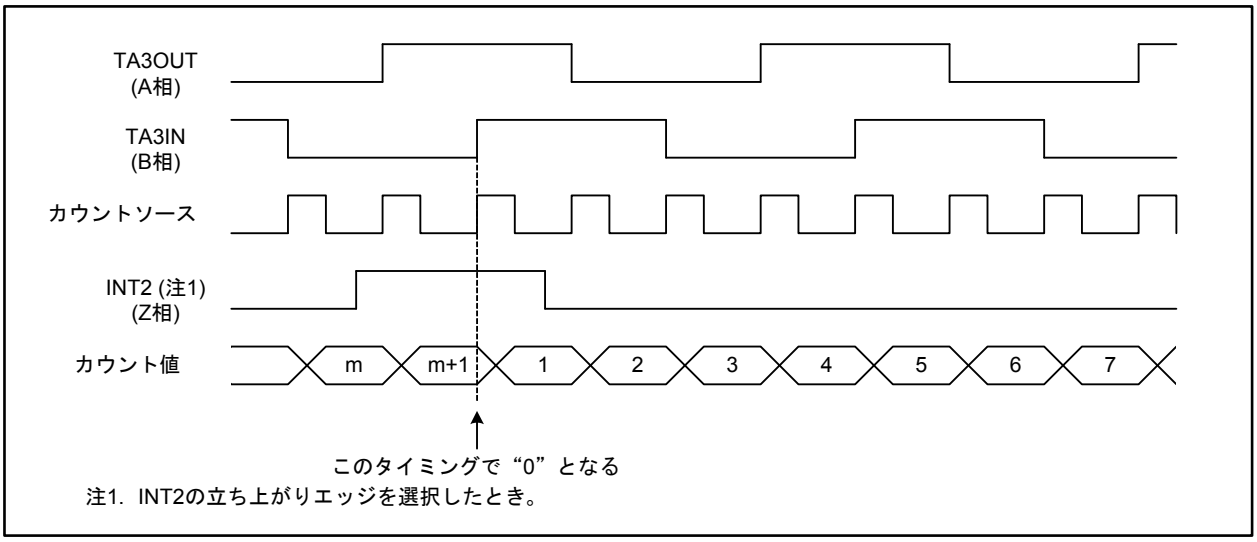


図 15.14 カウンタ初期化タイミング

15.1.3 ワンショットタイマモード

1度のトリガに対して1度だけタイマが動作するモードです。表 15.4にワンショットタイマモードの仕様を示します。トリガが発生するとその時点から任意の期間、タイマが動作します。図 15.15にワンショットタイマモード時のTA0MR~TA4MRレジスタを示します。

表 15.4 ワンショットタイマモードの仕様(i=0~4)

項目	仕様
カウントソース	f1, f8, f2n, fC32
カウント動作	• ダウンカウント • カウントの値が0000hになるタイミングでリロードしてカウントを停止 • カウント中にトリガが発生した場合、リロードしてカウントを継続
分周比	$\frac{1}{n}$ n : TAiレジスタ設定値 0000h~FFFFh (ただし、“0000h”の場合、カウンタは動作しない)
カウント開始条件	TABSRレジスタのTAiSビットが“1” (カウント開始)で、かつ以下のトリガが発生 • TAiIN端子からの外部トリガ入力 • タイマB2のオーバフローまたはアンダフロー、タイマAj (j=i-1、ただしi=0のときj=4)のオーバフローまたはアンダフロー、タイマAk (k=i+1、ただしi=4のときk=0)のオーバフローまたはアンダフロー • ONSFレジスタのTAiOSビットを“1” (タイマスタート)にする
カウント停止条件	• カウントの値が“0000h”になり、リロードした後 • TABSRレジスタのTAiSビットを“0” (カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	カウントの値が“0000h”になるタイミング
TAiIN端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはトリガ入力
TAiOUT端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはパルス出力
タイマの読み出し	TAiレジスタを読んだ場合、その値は不定
タイマの書き込み	• カウント停止中、カウント開始後1回目のカウントソースが入力されるまで TAiレジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TAiレジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)
その他の機能	• パルス出力機能 カウント停止中は“L”、カウント中は“H”を出力

タイマAiモードレジスタ(i=0~4)(ワンショットタイマモード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0			0	1	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0MR~TA4MR	0356h、0357h、0358h、0359h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 1 0 : ワンショットタイマモード	RW
TMOD1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MR1	外部トリガ選択ビット(注1)	0: TAiIN端子の入力信号の立ち下がり 1: TAiIN端子の入力信号の立ち上がり	RW
MR2	トリガ選択ビット	0: ONSFレジスタのTAiOSビット 1: ONSF、TRGSRレジスタの TAiTGH、TAiTGLビットで選択	RW
MR3	ワンショットタイマモードでは“0”にしてください		RW
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

注1. TRGSRレジスタのTAiTGH~TAiTGLビットを“00b”(TAiIN端子の入力) にする場合のみ有効。
“01b”(TB2のオーバフローまたはアンダフロー)、“10b”(TAiのオーバフローまたはアンダフロー)、
“11b”(TAiのオーバフローまたはアンダフロー) にする場合、“0”または“1”いずれでも可。

図 15.15 ワンショットタイマモード時のTA0MR~TA4MR レジスタ

15.1.4 パルス幅変調モード

任意の幅のパルスを連続して出力するモードです。表 15.5にパルス幅変調モードの仕様を示します。このモードでは、カウンタは、16ビットパルス幅変調器、8ビットパルス幅変調器のいずれかのパルス幅変調器として動作します。図 15.16にパルス幅変調モード時のTA0MR~TA4MR レジスタ、図 15.17に16ビットパルス幅変調器の動作例、図 15.18に8ビットパルス幅変調器の動作例を示します。

表 15.5 パルス幅変調モードの仕様(i=0~4)

項目	仕様
カウントソース	f1, f8, f2n, fC32
カウント動作	• ダウンカウント(8ビット、または16ビットパルス幅変調器として動作) • PWMパルスの立ち上がりでリロードしてカウントを継続 • カウント中にトリガが発生した場合、カウントに影響しない
16ビットPWM	• "H"幅: $\frac{n}{fj}$ n : TAi レジスタ設定値 0000h~FFFEh fj : カウントソース周波数 • 周期: $\frac{2^{16}-1}{fj}$ 固定
8ビットPWM	• "H"幅: $\frac{n \times (m+1)}{fj}$ n : TAi レジスタの上位番地の設定値 00h~FEh • 周期: $\frac{(2^8-1) \times (m+1)}{fj}$ m : TAi レジスタの下位番地の設定値 00h~FFh
カウント開始条件	以下のいずれかを選択可能 • TABSR レジスタのTAiS ビットを"1" (カウント開始)にする • TAiS ビットが"1"で、かつTAiIN 端子からの外部トリガ入力 • TAiS ビットが"1"で、かつ以下のトリガが発生 タイマB2のオーバフローまたはアンダフロー、タイマAj (j=i-1、ただしi=0のときj=4)のオーバフローまたはアンダフロー、タイマAk (k=i+1、ただしi=4のときk=0)のオーバフローまたはアンダフロー
カウント停止条件	TABSR レジスタのTAiS ビットを"0" (カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	PWMパルスの立ち下がり時
TAiIN 端子機能	プログラマブル入出力ポート、またはトリガ入力
TAiOUT 端子機能	パルス出力
タイマの読み出し	TAi レジスタを読んだ場合、その値は不定
タイマの書き込み	• カウント停止中、カウント開始後1回目のカウントソースが入力されるまで TAi レジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TAi レジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)

タイマAiモードレジスタ(i=0~4)(パルス幅変調モード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
					0	1	1

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA0MR~TA4MR	0356h、0357h、0358h、0359h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 1 1 : パルス幅変調(PWM)モード	RW
TMOD1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MR1	外部トリガ選択ビット(注1)	0: TAiIN端子の入力信号の立ち下がり 1: TAiIN端子の入力信号の立ち上がり	RW
MR2	トリガ選択ビット	0: ONSFレジスタのTAiSビット 1: ONSF、TRGSRレジスタの TAiTGH、TAiTGLビットで選択	RW
MR3	16/8ビットPWMモード 選択ビット	0: 16ビットパルス幅変調器として動作 1: 8ビットパルス幅変調器として動作	RW
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

注1. TRGSRレジスタのTAiTGH~TAiTGLビットを“00b”(TAiIN端子の入力) にする場合のみ有効。
“01b”(TB2のオーバフローまたはアンダフロー)、“10b”(TAiのオーバフローまたはアンダフロー)、
“11b”(TAiのオーバフローまたはアンダフロー) にする場合、“0”または“1”いずれでも可。

図 15.16 パルス幅変調モード時のTA0MR~TA4MRレジスタ

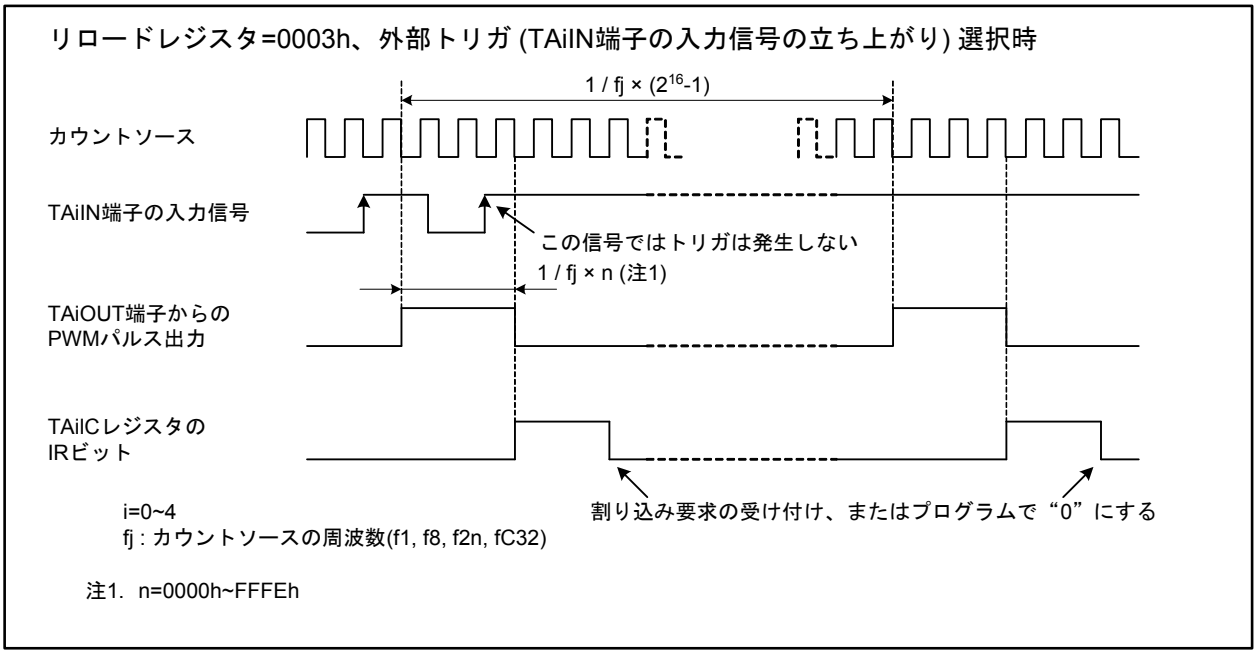


図 15.17 16ビットパルス幅変調器の動作例

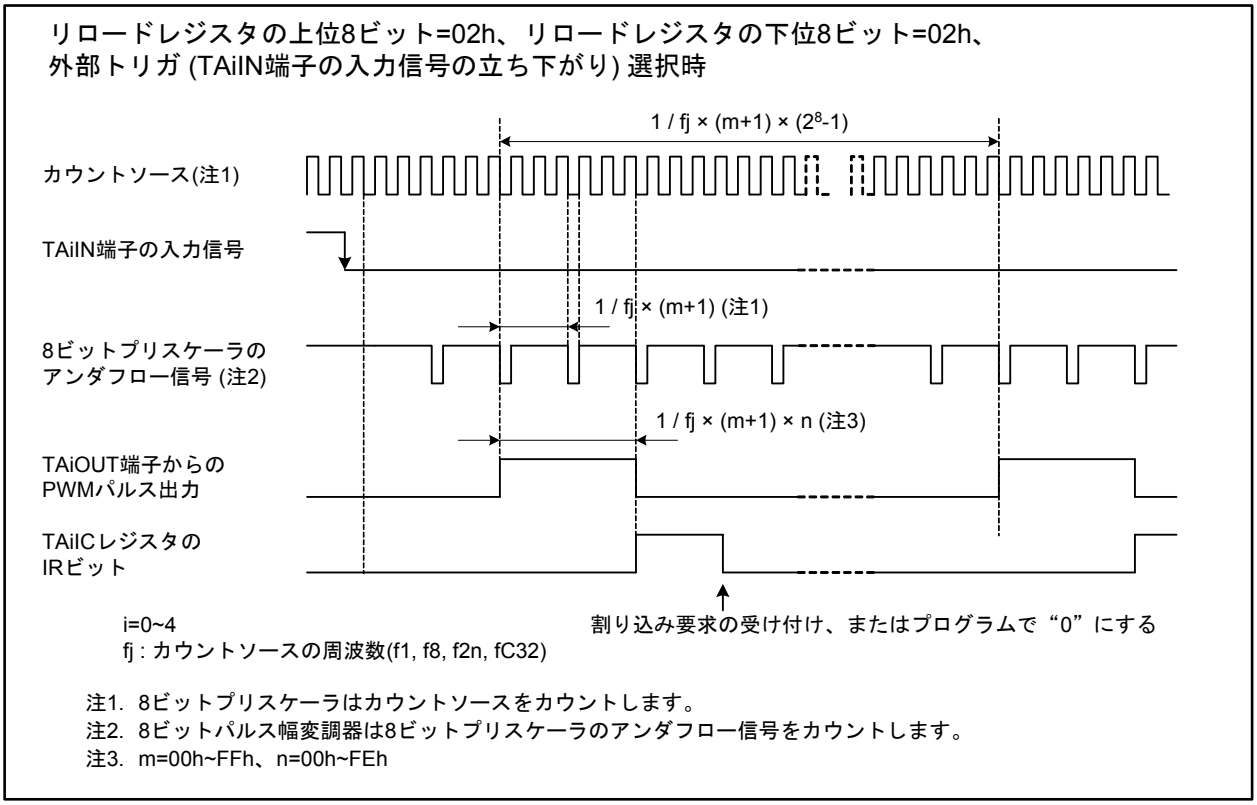


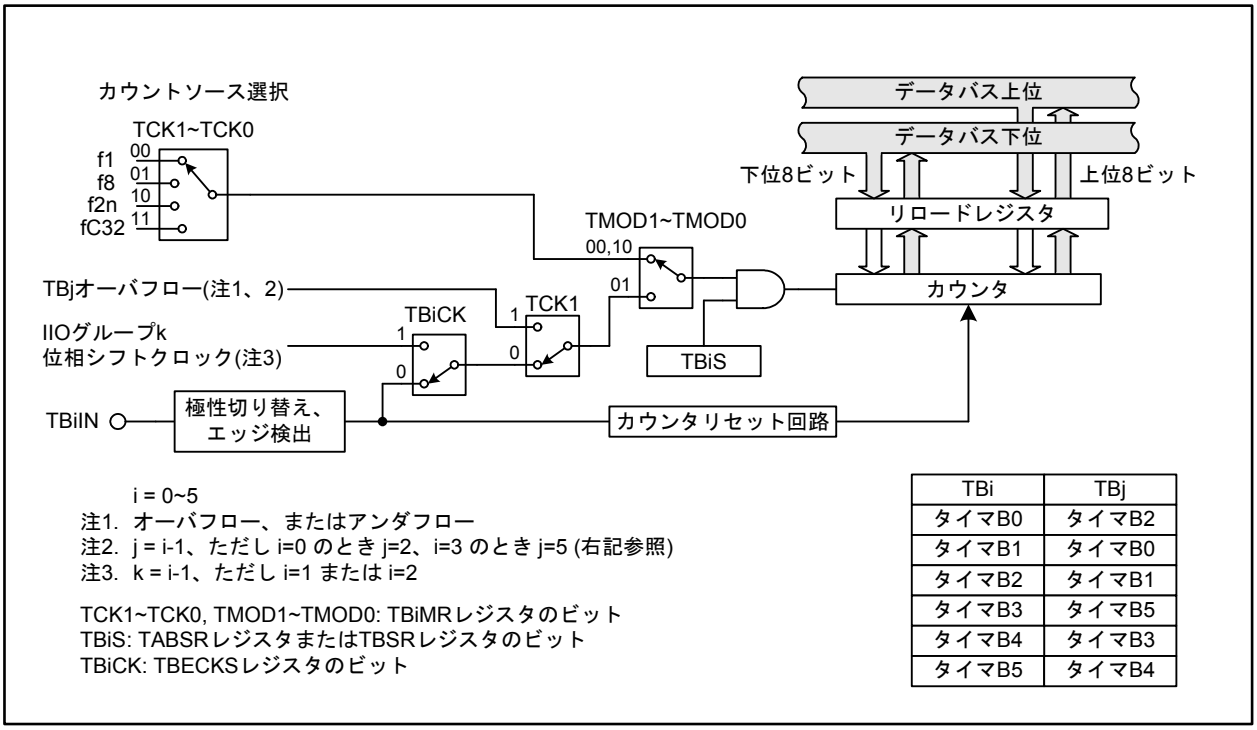
図 15.18 8ビットパルス幅変調器の動作例

15.2 タイマB

図 15.19にタイマBのブロック図を、図 15.20~図 15.23にタイマB関連レジスタを示します。

タイマBは、以下の3種類のモードがあります。各モードは、TB0MR~TB5MRレジスタのTMOD1~TMOD0ビットで選択できます。

- タイマモード　　内部カウントソースをカウントするモード
- イベントカウンタモード　　外部からのパルスまたは他のタイマのオーバフローとアンダフローをカウントするモード
- パルス周期測定モード、パルス幅測定モード
  外部パルスの周期またはパルス幅を測定するモード



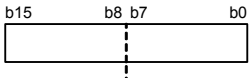
i = 0~5
注1. オーバフロー、またはアンダフロー
注2. j = i-1、ただし i=0 のとき j=2、i=3 のとき j=5 (右記参照)
注3. k = i-1、ただし i=1 または i=2

TCK1~TCK0, TMOD1~TMOD0: TBiMRレジスタのビット
TBiS: TABSRレジスタまたはTBSRレジスタのビット
TBiCK: TBECKSレジスタのビット

TBi	TBj
タイマB0	タイマB2
タイマB1	タイマB0
タイマB2	タイマB1
タイマB3	タイマB5
タイマB4	タイマB3
タイマB5	タイマB4

図 15.19 タイマBブロック図

タイマBiレジスタ(i=0~5)(注1)



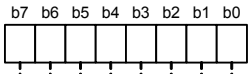
シンボル	アドレス	リセット後の値
TB0~TB2	0351h-0350h、0353h-0352h、0355h-0354h番地	不定
TB3~TB5	0311h-0310h、0313h-0312h、0315h-0314h番地	不定

モード	機　能	設定範囲	RW
タイマモード	設定値をnとすると、カウントソースをn+1分周する	0000h~FFFFh	RW
イベントカウンタモード	設定値をnとすると、カウントソースをn+1分周する (注2)	0000h~FFFFh	RW
パルス周期測定モード パルス幅測定モード	TBiIN入力パルスの有効エッジから有効エッジまでの期間、カウントソースをアップカウントする	—	RO

注1. 読み出し、または書き込みは16ビット単位で実行してください。
注2. 外部入力パルスまたは他のタイマのオーバフローとアンダフローをカウント。

図 15.20 TB0~TB5 レジスタ

タイマBiモードレジスタ (i=0~5)



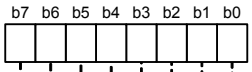
シンボル	アドレス	リセット後の値
TB0MR~TB2MR	035Bh、035Ch、035Dh番地	00XX 0000b
TB3MR~TB5MR	031Bh、031Ch、031Dh番地	00XX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 0 : タイマモード 0 1 : イベントカウンタモード 1 0 : パルス周期測定モード、パルス幅測定モード 1 1 : 設定しないでください	RW
TMOD1			RW
MR0	—	動作モードによって機能が異なる (注1、2)	RW
MR1			RW
MR2			RW
MR3			RW
TCK0	カウントソース選択ビット	動作モードによって機能が異なる	RW
TCK1			RW

注1. MR2ビットは、TB0MR、TB3MRレジスタにのみ存在します。
注2. TB1MR、TB2MR、TB4MR、TB5MRレジスタでは、MR2ビットには何も配置されていません。
書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定です。

図 15.21 TB0MR~TB5MR レジスタ

カウント開始レジスタ

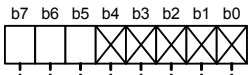


シンボル	アドレス	リセット後の値
TABSR	0340h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA0S	タイマA0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA1S	タイマA1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA2S	タイマA2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA3S	タイマA3カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA4S	タイマA4カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB0S	タイマB0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB1S	タイマB1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB2S	タイマB2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW

図 15.22 TABSR レジスタ

タイマB3、B4、B5カウント開始レジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
TBSR	0300h番地	000X XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b4-b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
TB3S	タイマB3カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB4S	タイマB4カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB5S	タイマB5カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW

図 15.23 TBSR レジスタ

15.2.1　タイマモード

内部で生成されたカウントソースをカウントするモードです。表 15.6 にタイマモードの仕様を、図 15.24 にタイマモード時の TB0MR~TB5MR レジスタを示します。

表 15.6　タイマモードの仕様(i=0~5)

項目	仕様
カウントソース	f1, f8, f2n, fC32
カウント動作	ダウンカウント アンダフロー時は、リロードレジスタの内容をリロードしてカウントを継続
分周比	$\frac{1}{n+1}$　　n : TBi レジスタ設定値　0000h~FFFFh
カウント開始条件	TABSR、TBSR レジスタの TBiS ビットを“1”(カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSR、TBSR レジスタの TBiS ビットを“0”(カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	アンダフロー時
TBiIN 端子機能	プログラマブル入出力ポート
タイマの読み出し	TBi レジスタを読むと、カウント値が読める
タイマの書き込み	• カウント停止中、カウント開始後 1 回目のカウントソースが入力されるまで TBi レジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TBi レジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)

タイマBiモードレジスタ (i=0~5)(タイマモード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0				0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TB0MR~TB2MR	035Bh、035Ch、035Dh番地	00XX 0000b
TB3MR~TB5MR	031Bh、031Ch、031Dh番地	00XX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 0 : タイマモード	RW
TMOD1			RW
MR0	タイマモードでは無効。 “0”または“1”のいずれでも可		RW
MR1			RW
MR2	TB0MR、TB3MRレジスタ 予約ビット。“0”にしてください		RW
	TB1MR、TB2MR、TB4MR、TB5MRレジスタ 何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
MR3	タイマモードでは無効。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

図 15.24　タイマモード時の TB0MR~TB5MR レジスタ

15.2.2 イベントカウンタモード

外部信号、他のタイマのオーバフローまたはアンダフローをカウントするモードです。表 15.7 にイベントカウンタモードの仕様を、図 15.25 にイベントカウンタモード時の TB0MR~TB5MR レジスタを示します。

表 15.7 イベントカウンタモードの仕様(i=0~5)

項目	仕様
カウントソース	• TBiIN 端子に入力された外部信号 カウントソースの有効エッジには立ち上がり、立ち下がり、または立ち下がりと立ち上がりをプログラムによって選択可 • TBj のオーバフローとアンダフロー (j=i-1、ただし i=0 のとき j=2、i=3 のとき j=5) • インテリジェント I/O グループ k の位相シフトクロック (k = i - 1、ただし i = 1 または i = 2)
カウント動作	ダウンカウント アンダフロー時は、リロードレジスタの内容をリロードしてカウントを継続
分周比	$\frac{1}{n+1}$ n : TBi レジスタ設定値 0000h~FFFFh
カウント開始条件	TABSR レジスタ、TBSR レジスタの TBiS ビットを“1” (カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSR レジスタ、TBSR レジスタの TBiS ビットを“0” (カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	アンダフロー時
TBiIN 端子機能	プログラマブル入出力ポート、カウントソース入力
タイマの読み出し	TBi レジスタを読むと、カウント値が読める
タイマの書き出し	• カウント停止中、カウント開始後 1 回目のカウントソースが入力されるまで TBi レジスタに書くと、リロードレジスタとカウンタの両方に書かれる • カウント中 TBi レジスタに書くと、リロードレジスタに書かれる(次のリロード時に転送)

タイマBiモードレジスタ (i=0~5)(イベントカウンタモード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0				0	1

シンボル	アドレス	リセット後の値
TB0MR~TB2MR	035Bh、035Ch、035Dh番地	00XX 0000b
TB3MR~TB5MR	031Bh、031Ch、031Dh番地	00XX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 0 1 : イベントカウンタモード	RW
TMOD1			RW
MR0	カウント極性選択ビット (注1)	b3 b2 0 0 : 立ち下がりエッジをカウント 0 1 : 立ち上がりエッジをカウント 1 0 : 両エッジをカウント (注2) 1 1 : 設定しないでください	RW
MR1			RW
MR2	TB0MR、TB3MRレジスタ 予約ビット。“0”にしてください		RW
	TB1MR、TB2MR、TB4MR、TB5MRレジスタ 何も配置されていない。書く場合“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
MR3	イベントカウンタモードでは無効。 書く場合“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		—
TCK0	イベントカウンタモードでは無効。 “0”または“1”いずれでも可		RW
TCK1	イベントクロック選択ビット	TB0MR、TB3MR、TB4MR、TB5MRレジスタ 0: TBiIN端子からの入力 1: TBjのオーバフローまたは、アンダフロー (注3)	RW
		TB1MR、TB2MRレジスタ 0: TBECKSレジスタで選択 1: TBjのオーバフローまたは、アンダフロー (注3)	

注1. TCK1ビットが“0”の場合有効。
　　TCK1ビットが“1”の場合は、“0”または“1”のいずれでも可。
注2. イベントクロックにIIOの位相シフトクロックを選択する場合、“10b”(両エッジ) を設定しないでください。
注3. j = i - 1。ただし、i = 0 のとき j = 2、i = 3 のとき j = 5。

図 15.25 イベントカウンタモード時のTB0MR~TB5MR レジスタ

タイマBイベントクロック選択レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0	0	0		

シンボル	アドレス	リセット後の値
TBECKS	0208h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TB1CK	タイマB1イベントクロック選択ビット	0: TB1INを選択 1: インテリジェントI/Oグループ0の位相シフトクロックを選択	RW
TB2CK	タイマB2イベントクロック選択ビット	0: TB2INを選択 1: インテリジェントI/Oグループ1の位相シフトクロックを選択	RW
— (b7-b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタによって選択されたクロックが、さらにTBiMRレジスタ (i=1,2) のTCK1ビットで選択されて、タイマBiのイベントクロックになります。

図 15.26 TBECKS レジスタ

15.2.3 パルス周期測定モード、パルス幅測定モード

外部信号のパルス周期、またはパルス幅を測定するモードです。表 15.8にパルス周期測定モード、パルス幅測定モードの仕様を、図 15.27 にパルス周期測定モード、パルス幅測定モード時の TB0MR ~ TB5MR レジスタ、図 15.28にパルス周期測定時の動作例、図 15.29にパルス幅測定時の動作例を示します。

表 15.8 パルス周期測定モード、パルス幅測定モードの仕様(i=0~5)

項目	仕様
カウントソース	f1, f8, f2n, fC32
カウント動作	アップカウント 被測定パルスの有効エッジで、リロードレジスタにカウンタの値を転送し、カウンタの値を“0000h”にしてカウントを継続
カウント開始条件	TABSR レジスタ、TBSR レジスタのTBiS ビットを“1” (カウント開始)にする
カウント停止条件	TABSR レジスタ、TBSR レジスタのTBiS ビットを“0” (カウント停止)にする
割り込み要求発生タイミング	• 被測定パルスの有効エッジ入力時(注1) • オーバフロー時(同時にTBiMR レジスタのMR3ビットが“1” (オーバフローあり)になります(注2))
TBiIN端子機能	被測定パルス入力
タイマの読み出し	TBi レジスタを読むと、リロードレジスタの内容(測定結果)が読める(注3)
タイマの書き込み	TBi レジスタに書いた値は、リロードレジスタにもカウンタにも書かれない

注1. カウント開始後1回目の有効エッジ入力時は、割り込み要求は発生しません。
注2. TBiS ビットが“1” (カウント開始)のとき、MR3ビットが“1” (オーバフローあり)になってからカウントソース1クロック以上経過した後、TBiMR レジスタに書くと“0” (オーバフローなし)になります。
注3. カウント開始後2回目の有効エッジ入力までは、TBi レジスタからの読み出し値は不定です。

タイマBiモードレジスタ (i=0~5)(パルス周期測定モード、パルス幅測定モード)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
						1	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TB0MR~TB2MR	035Bh、035Ch、035Dh番地	00XX 0000b
TB3MR~TB5MR	031Bh、031Ch、031Dh番地	00XX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	b1 b0 1 0 : パルス周期測定モード、パルス幅測定モード	RW
TMOD1			RW
MR0	測定モード選択ビット (注1)	b3 b2 0 0 : パルス周期測定1 0 1 : パルス周期測定2 1 0 : パルス幅測定 1 1 : 設定しないでください	RW
MR1			RW
MR2	TB0MR、TB3MRレジスタ 予約ビット。“0”にしてください		RW
	TB1MR、TB2MR、TB4MR、TB5MRレジスタ 何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
MR3	タイマBiオーバフローフラグ (注2)	0: オーバフローなし 1: オーバフローあり	RO
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

注1. MR1~MR0ビットで選択できる測定内容は以下のとおりです。
パルス周期測定1 (MR1~MR0ビット=00b): 被測定パルスの立ち下がりから次の立ち下がり間の測定
パルス周期測定2 (MR1~MR0ビット=01b): 被測定パルスの立ち上がりから次の立ち上がり間の測定
パルス幅測定 (MR1~MR0ビット=10b): 被測定パルスの立ち下がりから次の立ち上がり間の測定と立ち上がりから次の立ち下がり間の測定

注2. リセット時は不定です。
MR3ビットはTABSRレジスタ、TBSRレジスタのTBiSビットが“1”(カウント開始) のとき、MR3ビットが“1”になってからカウントソース1クロック以上経過した後、TBiMRレジスタに書くと“0”(オーバフローなし) になります。MR3ビットをプログラムで“1”にできません。

図 15.27 パルス周期測定モード、パルス幅測定モード時のTB0MR~TB5MRレジスタ

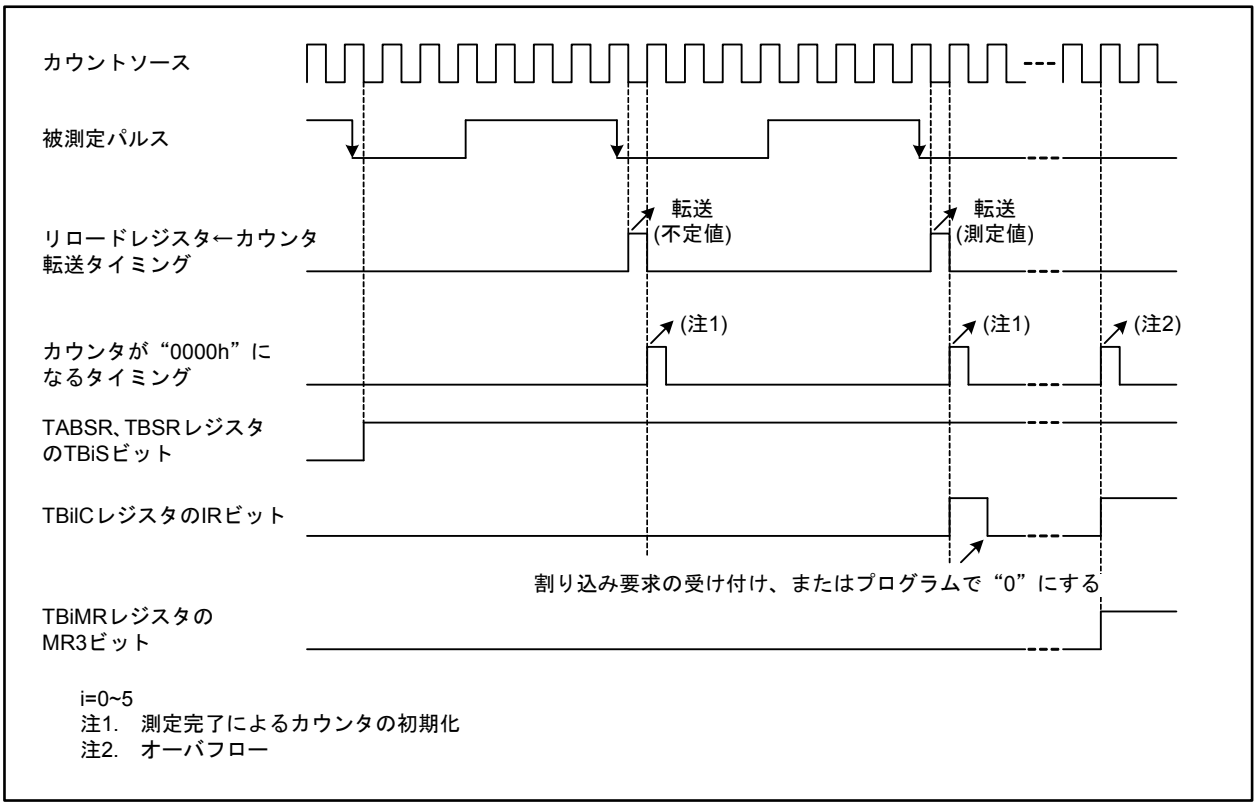


図 15.28 パルス周期測定時の動作図

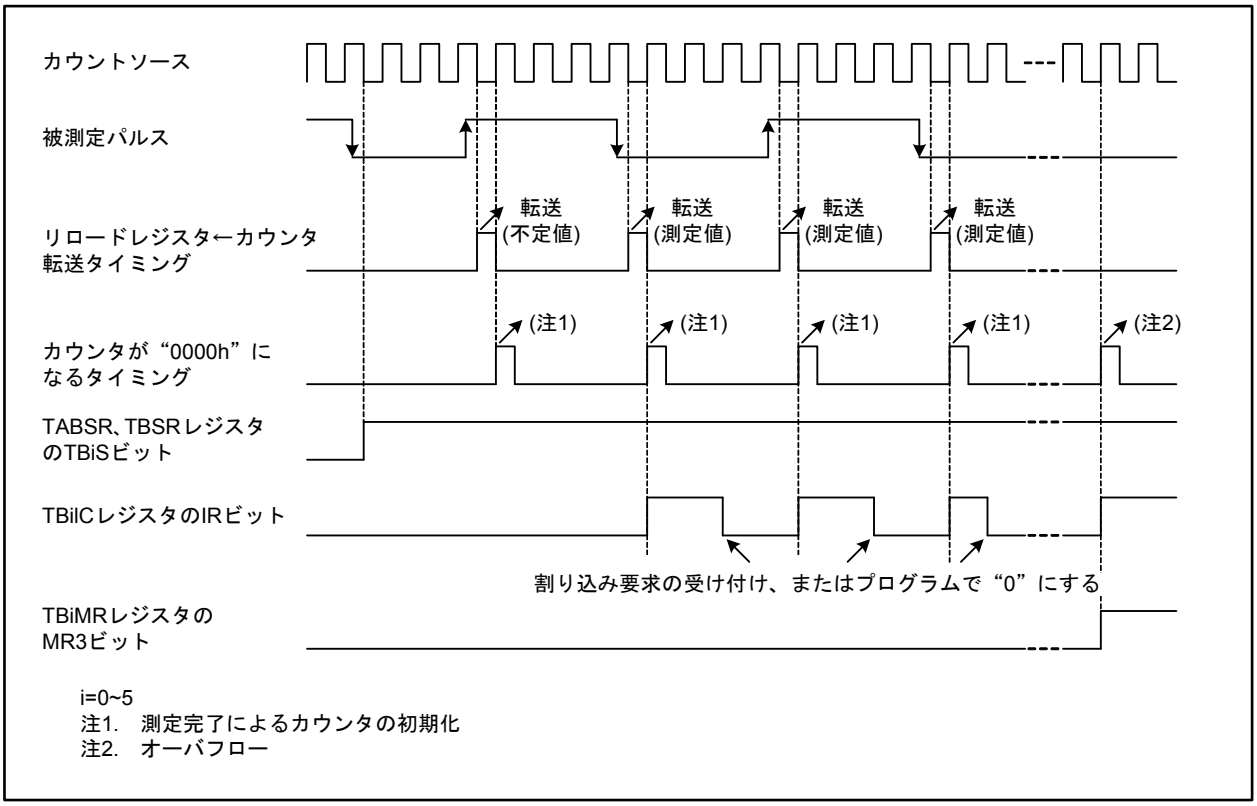


図 15.29 パルス幅測定時の動作図

15.3 タイマ使用上の注意

15.3.1 タイマA、タイマB共通

リセット後、タイマは停止しています。モードやカウントソース、カウンタの値を設定した後、TABSRレジスタまたはTBSRレジスタの、TAiSビット(i=0~4)またはTBjSビット(j=0~5)を“1”(カウント開始)にしてください。

以下のレジスタ、ビットは、対応するTAiSビットまたはTBjSビットが“0”(カウント停止)の状態で変更してください。

- TAiMRレジスタ、TBjMRレジスタ
- UDFレジスタ
- ONSFレジスタのTAZIEビット、TA0TGLビット、TA0TGHビット
- TRGSRレジスタ

15.3.2 タイマA

15.3.2.1 タイマモード時

- カウント中のカウンタの値は、TAiレジスタを読むことでいつでも知ることができます。ただし、TAiレジスタのリードがリロードタイミングと重なったときは“FFFFh”が読めます。また、カウント停止中にTAiレジスタに値を設定して、カウント開始前にTAiレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

15.3.2.2 イベントカウンタモード時

- カウント中のカウンタの値は、TAiレジスタを読むことでいつでも知ることができます。ただし、TAiレジスタのリードがリロードタイミングと重なった場合、アンダフロー時は“FFFFh”が、オーバフロー時は“0000h”が読めます。また、カウント停止中にTAiレジスタに値を設定して、カウント開始前にTAiレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

15.3.2.3 ワンショットタイマモード時

- カウント中にTABSRレジスタのTAiSビットを“0”(カウント停止)にすると、以下のようになります。
  - カウンタはカウントを停止し、TAiレジスタの設定値をリロードします。
  - TAiOUT端子は“L”を出力します。
  - CPUクロックの1サイクル後、TAiICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になります。

- ワンショットタイマの出力は内部で生成されたカウントソースに同期しているため、トリガにTAiIN端子への入力を選択している場合、トリガ入力からワンショットタイマの出力までに、最大でカウントソース1クロック分の遅延が生じます。

- 下記のいずれかでタイマの動作モードを設定した場合、IRビットが“1”になります。タイマAi割り込み(IRビット)を使用する場合は、下記の設定を行った後、IRビットを“0”にしてください。
  - リセット後、ワンショットタイマモードを選択したとき
  - 動作モードをタイマモードからワンショットタイマモードに変更したとき
  - 動作モードをイベントカウンタモードからワンショットタイマモードに変更したとき

- カウント中に再トリガが発生した場合は、カウンタは1回ダウンカウントした後、TAiレジスタ(i=0~4)の設定値をリロードしてカウントを続けます。カウント中に再トリガを発生させる場合は、前回のトリガの発生からタイマのカウントソース1クロック以上経過した後に発生させてください。

- カウント開始条件にTAiIN端子へのトリガ入力を選択している場合、タイマAのカウント値が“0000h”になる直前の300nsの間に再トリガを入力しないでください。ワンショットタイマがカウントを継続しないで停止する場合があります。

15.3.2.4 パルス幅変調モード時

- 下記のいずれかでタイマの動作モードを設定した場合、IRビットが“1”になります。タイマAi割り込み(IRビット)を使用する場合は、以下の設定を行った後、IRビットを“0”にしてください。
  - リセット後、PWMモードを選択したとき
  - 動作モードをタイマモードからPWMモードに変更したとき
  - 動作モードをイベントカウンタモードからPWMモードに変更したとき

- PWMパルスを出力中にTAiSビットを“0”(カウント停止)にすると以下のようになります。
  - カウンタはカウントを停止します。
  - TAiOUT端子から“H”を出力している場合は、出力レベルは“L”になり、IRビットが“1”になります。
  - TAiOUT端子から“L”を出力している場合は、出力レベルは変化せず、IRビットも変化しません。

15.3.3 タイマB

15.3.3.1 タイマモード、イベントカウンタモード時

- カウント中のカウンタの値は、TBjレジスタ(j=0~5)を読むことでいつでも知ることができます。ただし、TBjレジスタのリードがリロードタイミングと重なったときは“FFFFh”が読めます。また、カウント停止中にTBjレジスタに値を設定して、カウント開始前にTBjレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

15.3.3.2 パルス周期測定/パルス幅測定モード時

- TBjMRレジスタのMR3ビットを“0”(オーバフローなし)にするには、TBjSビットが“1”(カウント開始)のとき、MR3ビットが“1”(オーバフローあり)になってからカウントソース1クロック以上経過した後に、TBjMRレジスタに書いてください。

- オーバフローだけの検出にはTBjICレジスタのIRビットを使用してください。MR3ビットは、割り込み処理ルーチンで割り込み要因を判断するときにだけ使用してください。

- カウント開始時のカウンタの値は不定です。したがって、カウント開始後最初の有効エッジが入力されるまでにカウンタがオーバフローし、タイマBj割り込み要求が発生する可能性があります。

- カウント開始後、最初の有効エッジが入力された時は、カウンタの値が不定なので不定値がリロードレジスタに転送されます。なお、このときタイマBj割り込み要求は発生しません。

- カウント開始後にTBjMRレジスタのMR1~MR0ビットを変更すると、IRビットが“1”(割り込み要求あり)になることがあります。ただし、MR1~MR0ビットに同じ値を上書きした場合は、IRビットは変化しません。

- パルス幅測定モードでは、連続してパルス幅を測定します。測定結果が“H”幅の測定結果であるか“L”幅の測定結果であるかは、プログラムで判断してください。

- パルス周期測定モードでは、カウンタのオーバフローと同時に有効エッジが入力された場合、割り込み要求が1回しか発生しないため、有効エッジが入力されたことを確認できません。カウンタがオーバフローしない範囲で使用してください。

- パルス幅測定モードでは、タイマBj割り込みの処理ルーチンでポートのレベルを読んで、カウンタがオーバフローしたか、有効エッジが入力されたかを判断してください。

16. 三相モータ制御用タイマ機能

タイマA1、A2、A4、B2を使用して三相モータ駆動波形を出力できます。INVC0レジスタのINV02ビットを“1”にすると、三相モータ制御用タイマ機能になります。この機能では、タイマB2を搬送波制御に、タイマA4、A1、A2を三相PWM出力(U, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$)の制御に使用します。

表16.1に三相モータ制御用タイマ機能の仕様を、図16.1にブロック図を示します。また、図16.2~図16.6に関連レジスタを示します。

表16.1　三相モータ制御用タイマ機能の仕様

項目	仕様
三相PWM波形出力端子	6本(U, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$)
強制遮断入力(注1)	$\overline{NMI}$端子に“L”を入力
使用タイマ	タイマA4、A1、A2 (ワンショットタイマモードで使用) タイマA4: U、$\overline{U}$相波形制御 タイマA1: V、$\overline{V}$相波形制御 タイマA2: W、$\overline{W}$相波形制御 タイマB2 (タイマモードで使用) 搬送波周期制御 短絡防止タイマ (8ビットタイマ3本、リロードレジスタ共用) 短絡防止時間制御
出力波形	三角波変調、鋸波変調 • 1周期すべて“H”または“L”出力可能 • 上側通電信号と下側通電信号の出力論理を独立して設定可能
搬送波周期	三角波変調: カウントソース× (m + 1) × 2 鋸波変調 :　カウントソース× (m + 1) m: TB2レジスタ設定値　0000h~FFFFh カウントソース:　f1, f8, f2n, fC32
三相PWM出力幅	三角波変調: カウントソース× n × 2 鋸波変調:　カウントソース× n n:　TA4、TA1、TA2 (INVC1レジスタのINV11ビットが“1”のときはTA4、TA41、TA1、TA11、TA2、TA21) レジスタ設定値　0001h~FFFFh カウントソース:　f1, f8, f2n, fC32
短絡防止時間(幅)	カウントソース×p、または短絡防止時間なし p:　DTTレジスタ設定値　01h~FFh カウントソース:　f1、またはf1の2分周
通電出力論理	アクティブ“H”またはアクティブ“L”選択可能
上下同時通電出力禁止機能	上下同時通電出力禁止機能あり、上下同時通電出力検出機能あり
割り込み頻度	タイマB2割り込みは、搬送波周期ごと~搬送波周期15回ごと選択

注1.　$\overline{NMI}$入力による強制遮断は、PM2レジスタのPM24ビットが“1” (NMI有効)、かつIOBCレジスタのSDEビットが“1” (シャットダウン機能有効)で、INVC0レジスタのINV02ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ機能を使用)、かつINV03ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ出力許可)のとき有効です。

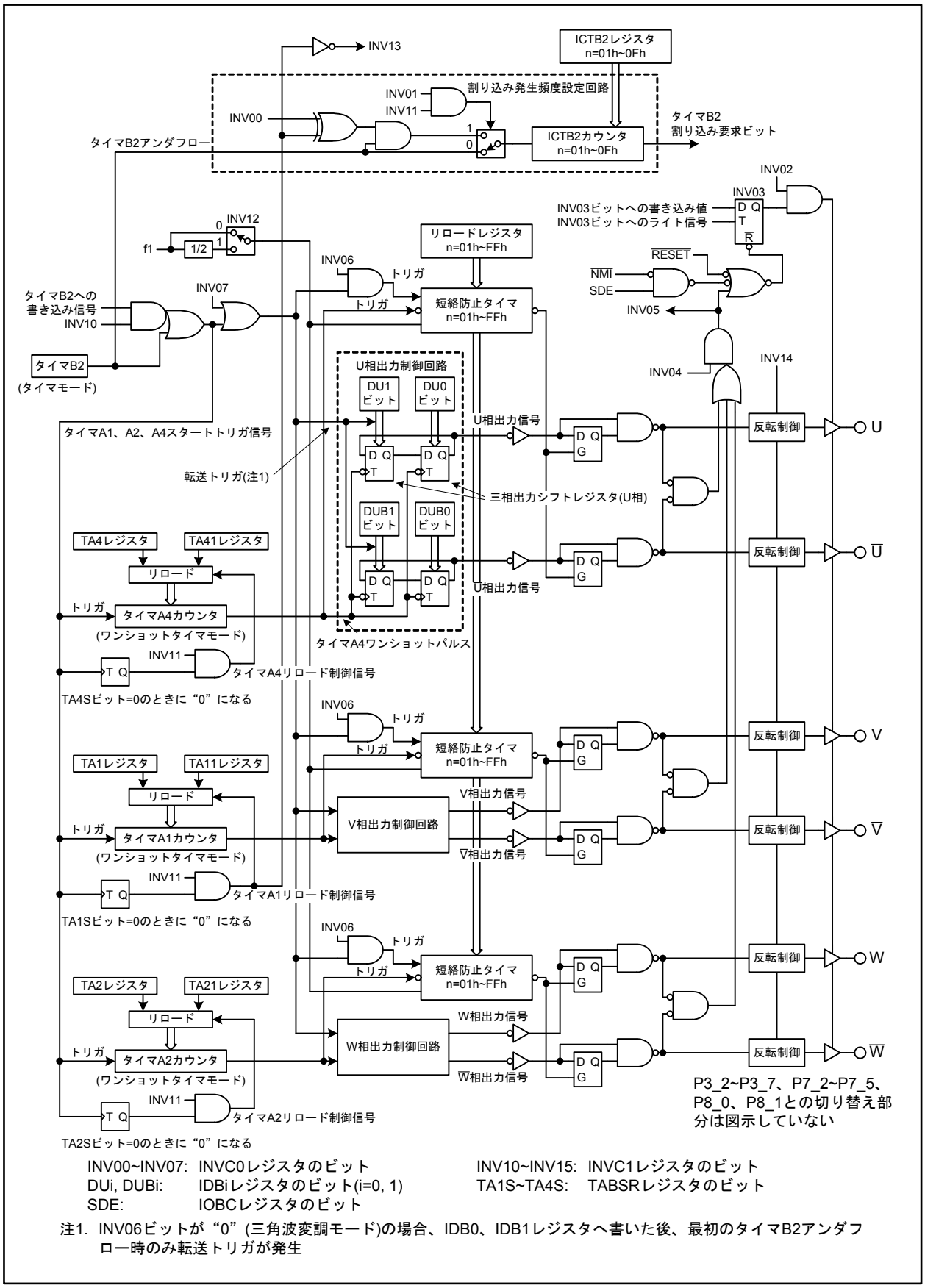


図 16.1　三相モータ制御用タイマ機能のブロック図

三相PWM制御レジスタ0 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
INVC0	0308h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
INV00	ICTB2カウント条件選択ビット (注2)	b1 b0 0 X : タイマB2アンダフロー 1 0 : タイマA1リロード制御信号が“0”のときのタイマB2アンダフロー (注3) 1 1 : タイマA1リロード制御信号が“1”のときのタイマB2アンダフロー (注3、4)	RW
INV01			RW
INV02	三相モータ機能選択ビット	0: 三相モータ制御用タイマ機能を使用しない 1: 三相モータ制御用タイマ機能を使用する (注5、6、7)	RW
INV03	三相モータ出力制御ビット	0: 三相モータ制御用タイマ出力禁止 (注7) 1: 三相モータ制御用タイマ出力許可 (注8)	RW
INV04	上下同時通電出力禁止ビット	0: 上下同時通電出力無視 1: 上下同時通電出力禁止	RW
INV05	上下同時通電出力検出フラグ	0: 未検出 1: 検出 (注9)	RO
INV06	変調モード選択ビット	0: 三角波変調モード 1: 鋸波変調モード (注10)	RW
INV07	ソフトウェアトリガ選択ビット	このビットに“1”を書くと転送トリガが発生する。INV06ビットが“1”の場合、短絡防止タイマへのトリガも発生する。 読んだ場合、その値は“0”	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
また、INV00~INV02、INV06ビットは、タイマA1、A2、A4、B2が停止中に書き換えてください。

注2. INVC1レジスタのINV11ビットが“1”(三相モード1) のとき有効です。“0”(三相モード0) のときは、INV00、INV01ビットに関係なく、タイマB2がアンダフローするごとにICTB2カウンタのカウントが進みます。

注3. INV01ビットに“1”を書く場合は、ICTB2レジスタに値を設定してから書いてください。
また、タイマA1カウント開始フラグを最初のタイマB2アンダフローまでに“1”にしてください。

注4. INV00ビットを“1”にした場合、ICTB2レジスタの設定値をnとすると、最初の割り込みはn-1回目のタイマB2アンダフローで発生し、2回目以降の割り込みはタイマB2がn回アンダフローするごとに発生します。

注5. INV02ビットを“1”にすると、短絡防止タイマやU、V、W相出力制御回路、ICTB2カウンタが動作します。

注6. INV02ビットを“1”にした後で、IOBCレジスタ、出力機能選択レジスタの順で端子を設定してください。

注7. U、$\overline{U}$、V、$\overline{V}$、W、$\overline{W}$端子 (端子を共用している他の出力機能に設定している場合も含む) は、INV02ビットを“1”にし、かつINV03ビットを“0”にすると、すべてハイインピーダンスになります。

注8. INV03ビットは以下の場合に“0”になります。
- リセット
- INV04ビットが“1”のとき、上側通電信号と下側通電信号が同時にアクティブになった場合
- プログラムで“0”にしたとき
- PM2レジスタのPM24ビットが“1”(NMI有効) で、IOBCレジスタのSDEビットが“1”(シャットダウン機能有効) のときに、$\overline{NMI}$端子が“H”から“L”に変化したとき

注9. プログラムで“1”は書けません。このビットを“0”にする場合は、INV04ビットに“0”を書いてください。

注10. INV06ビットが“1”の場合、INVC1レジスタのINV11ビットを“0”(三相モード0)、TB2SCレジスタのPWCONビットを“0”(タイマB2のアンダフローでタイマB2リロード) にしてください。

図 16.2　INVC0 レジスタ

三相PWM制御レジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0							

シンボル	アドレス	リセット後の値
INVC1	0309h番地	0000 0000b

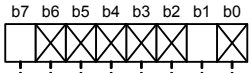
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
INV10	タイマA1、A2、A4 スタートトリガ選択ビット	0: タイマB2アンダフロー 1: タイマB2アンダフローと、TB2レジスタへの書き込み	RW
INV11	タイマA1-1、A2-1、A4-1 制御ビット	0: 三相モード0　(注2、3) 1: 三相モード1	RW
INV12	短絡防止タイマカウント ソース選択ビット	0: f1 1: f1の2分周	RW
INV13	搬送波状態検出フラグ (注4)	0: タイマA1リロード制御信号が“0” 1: タイマA1リロード制御信号が“1”	RO
INV14	通電出力論理制御ビット	0: アクティブ“L” 1: アクティブ“H”	RW
INV15	短絡防止時間無効ビット	0: 短絡防止時間有効 1: 短絡防止時間無効	RW
INV16	短絡防止時間タイマトリガ 選択ビット	0: タイマ (A4、A1、A2) のワンショットパルスの立ち下がり　(注5) 1: 三相出力シフトレジスタ (U、V、W相) 出力の立ち上がり	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
また、このレジスタはタイマA1、A2、A4、B2が停止中に書き換えてください。
注2. INVC0レジスタのINV06ビットが“1”(鋸波変調モード) の場合は、“0”(三相モード0) にしてください。
注3. INV11ビットを“0”にした場合、TB2SCレジスタのPWCONビットを“0”(タイマB2のアンダフローでタイマB2リロード) にしてください。
注4. INV13ビットは、INV06ビットが“0”(三角波変調モード) かつINV11ビットが“1”(三相モード1) のときのみ有効です。
注5. 以下の条件すべてに該当する場合は、INV16ビットを“1”にしてください。
- INV15ビットが“0”(短絡防止時間有効)
- INV03ビットが“1”(三相モータ制御用タイマ出力許可) のときは、常にDij (i=U、VまたはW、j=0~1) ビットとDiBjビットの値が異なる (短絡防止時間以外の期間、上側通電信号と下側通電信号は常に逆のレベルを出力する)。

また、上記の条件に該当しない場合は、INV16ビットを“0”にしてください。

図 16.3　INVC1 レジスタ

三相出力バッファ制御レジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
IOBC	40097h番地	0XXX XX0Xb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
SDE	三相出力端子シャットダウン機能許可ビット	0: シャットダウン機能無効 1: シャットダウン機能有効	RW
— (b6-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
TBSOUT	三相出力端子選択ビット (注2)	0: P7, P8のU, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$を使用する 1: P3のU, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$を使用する	RW

注1. このレジスタはPRCRレジスタのPRC1ビットを“1”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。

注2. INVC0レジスタのINV02ビットを“1”にした後で、このビットを設定してください。その後、対応するポートの出力機能選択レジスタを設定してください。
三相出力端子は、INVC0レジスタのINV03ビットが“0”のとき出力をハイインピーダンスにする機能があります。この機能は出力バッファのアウトプットイネーブルを制御することで実現していますが、複数のポートに出力を割り振れる場合、出力機能選択レジスタだけではアウトプットイネーブルが制御できません。そのためTBSOUTビットで3ステート制御を行う出力バッファを選択する必要があります。

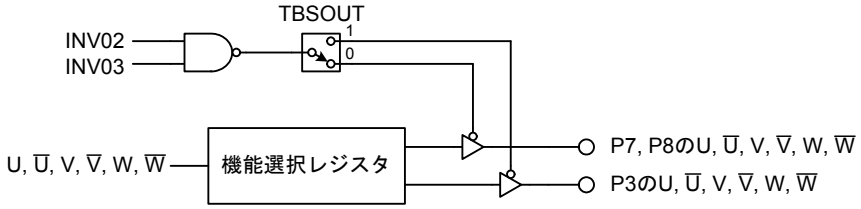
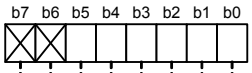


図 16.4　IOBC レジスタ

三相出力バッファレジスタi (i=0, 1) (注1)



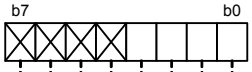
シンボル	アドレス	リセット後の値
IDB0, IDB1	030Ah、030Bh番地	XX11 1111b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
DUi	U相出力バッファi	三相出力シフトレジスタの出力論理を書いてください。ここで書いた値は、各通電信号に以下のとおり反映されます 0: アクティブ (ON) 1: 非アクティブ (OFF) 読んだ場合は三相出力シフトレジスタの値が読めます	RW
DUBi	$\overline{U}$相出力バッファi		RW
DVi	V相出力バッファi		RW
DVBi	$\overline{V}$相出力バッファi		RW
DWi	W相出力バッファi		RW
DWBi	$\overline{W}$相出力バッファi		RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. IDB0、IDB1レジスタの値は転送トリガで三相出力シフトレジスタに転送されます。転送トリガ後、IDB0レジスタに書いた値が初めに各相出力信号となり、次にタイマA1、A2、A4ワンショットパルスの立ち下がりでIDB1レジスタに書いた値が各相出力信号となります。

図 16.5　IDB0、IDB1 レジスタ

タイマB2割り込み発生頻度設定カウンタ (注1~3)



シンボル	アドレス	リセット後の値
ICTB2	030Dh番地	不定

機　能	設定範囲	RW
INV01ビットが“0”(タイマB2がアンダフローするとICTB2 カウンタのカウントを進める) の場合、設定値をnとすると、タイマB2 がn回アンダフローするごとにタイマB2割り込み要求が発生する。 INV01ビットが“1”(タイマA1リロード制御信号が条件に合うとき、タイマB2がアンダフローするとICTB2 カウンタのカウントを進める) の場合、設定値をnとすると、タイマA1リロード制御信号が条件に合うとき、タイマB2がn回アンダフローするごとにタイマB2割り込み要求が発生する	01h~0Fh	WO
何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください		—

注1. このレジスタへの書き込みは、MOV命令を使用してください。
注2. INVC0レジスタのINV01ビットが“1”の場合は、更にTABSRレジスタのTB2Sビットが“0”(タイマB2カウント停止) のときに書いてください。INV01ビットが“0”の場合は、TB2Sビットが“1”(タイマB2カウント開始) でも書けますが、タイマB2のアンダフローのタイミングで書かないでください。
注3. INVC0レジスタのINV00ビットを“1”にする場合、ICTB2カウンタの設定値をnとすると、最初の割り込みはn-1回目のタイマB2アンダフローで発生し、2回目以降の割り込みはタイマB2がn回アンダフローするごとに発生します。

図 16.6　ICTB2 レジスタ

16.1 三相モータ制御用タイマのモード

三相モータ制御用タイマには、三角波変調モードと鋸波変調モードがあり、さらに三角波変調モードには三相モード0と三相モード1があります。それぞれの特徴と設定を表16.2に示します。

表 16.2 モード一覧

項目	三角波変調モード		鋸波変調モード
	三相モード0	三相モード1	(三相モード0)
設定	INV06=0, INV11=0, PWCON=0	INV06=0, INV11=1	INV06=1, INV11=0, PWCON=0
搬送波波形	三角波		鋸波
TA11、TA21、TA41レジスタ	使用しない	使用する	使用しない
IDB0レジスタ、IDB1レジスタから三相出力シフトレジスタへの転送タイミング	IDB0レジスタ、IDB1レジスタに書いた後、転送トリガ(注1)に同期して1回のみ転送		転送トリガ(注1)ごとに転送
INV16=0の場合の短絡防止タイマトリガタイミング	タイマA1、A2、A4のワンショットパルスの立ち下がりに同期		タイマA1、A2、A4のワンショットパルスの立ち下がりと、転送トリガに同期
INVC0レジスタのINV00ビット、INV01ビット	無効 INV00、INV01ビットの値に関係なくタイマB2がアンダフローするごとにICTB2カウント	有効	無効 INV00、INV01ビットの値に関係なくタイマB2がアンダフローするごとにICTB2カウント
INV13ビット	無効	有効	無効

注1. 転送トリガ: タイマB2アンダフローとINV07ビットへの書き込み、またはINV10ビットが“1”のときのTB2レジスタへの書き込み

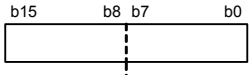
16.2 タイマB2

三相モータ制御用タイマ機能を使用する場合、タイマB2は搬送波制御に使用します。

タイマB2はタイマモードに設定します。

図16.7に三相モータ制御用タイマ機能時のTB2レジスタ、図16.8に三相モータ制御用タイマ機能時のTB2MRレジスタを示します。また、三相モード1のときに搬送波周期を変更するタイミングを切り替えるTB2SCレジスタを図16.9に示します。

タイマB2レジスタ(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
TB2	0355h-0354h番地	不定

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、カウントソースをn+1分周する。 アンダフローごとに、タイマA1、A2、A4をスタートさせる	0000h~FFFFh	RW

注1. 読み出し、書き込みは16ビット単位で実行してください。

図 16.7 三相モータ制御用タイマ機能時のTB2レジスタ

タイマB2モードレジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0	X	0	0	0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TB2MR	035Dh番地	00XX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	三相モータ制御用タイマ機能では“00b”(タイマモード) にしてください	RW
TMOD1			RW
MR0	三相モータ制御用タイマ機能では無効。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		RW
MR1			RW
MR2	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		—
MR3	三相モータ制御用タイマ機能では無効。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		—
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

図 16.8　三相モータ制御用タイマ機能時のTB2MRレジスタ

タイマB2特殊モードレジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X	X	X	X	X	X	

シンボル	アドレス	リセット後の値
TB2SC	035Eh番地	XXXX XXX0b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PWCON	タイマB2リロードタイミング切り替えビット (注1)	0: タイマB2 アンダフロー 1: タイマA1リロード制御信号が“0”のときのタイマB2アンダフロー	RW
— (b7-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定		—

注1. INV11ビットが“0”(三相モード0)、またはINV06ビットが“1”(鋸波変調モード) の場合は、“0”にしてください。

図 16.9　TB2SCレジスタ

16.3 タイマA4、A1、A2

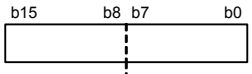
三相モータ制御用タイマ機能を使用する場合、タイマA4、A1、A2は三相PWM出力(U, $\overline{U}$, V, $\overline{V}$, W, $\overline{W}$)の制御に使用します。

タイマA4、A1、A2はワンショットタイマモードに設定します。タイマB2がアンダフローするごとにタイマA4、A1、A2にトリガが入力され、ワンショットパルスが生成されます。したがって、タイマB2割り込みが発生するごとにTA4、TA1、TA2レジスタの値を書き換えることでPWM波形のデューティ比を変えることができます。

また三相モード1では、タイマB2割り込みごとにカウンタへのリロード値がTAi、TAi-1 (i=4, 1, 2)と入れ替わるため、タイマB2割り込みの頻度を半分に減らすことができます。

図16.10に三相モータ制御用タイマ機能時のTA1、TA2、TA4、TA11、TA21、TA41レジスタ、図16.11にTA1M、TA2M、TA4M、TA11M、TA21M、TA41Mレジスタ、図16.12に三相モータ制御用タイマ機能時のTA1MR、TA2MR、TA4MRレジスタ、図16.13に三相モータ制御用タイマ機能時のTRGSRレジスタ、図16.14にTABSRレジスタを示します。

タイマAi、Ai-1レジスタ (i=1, 2, 4) (注1~6)



シンボル	アドレス	リセット後の値
TA1, TA2, TA4	0349h-0348h、034Bh-034Ah、034Fh-034Eh番地	不定
TA11, TA21, TA41	0303h-0302h、0305h-0304h、0307h-0306h番地	不定

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、スタートトリガ後、カウントソースをn回カウントして停止する。タイマA1、A2、A4が停止するタイミングで各相出力信号が変化する	0000h~FFFFh	WO

注1. 書き込みは16ビット単位で行ってください。
注2. これらのレジスタに“0000h”を書いた場合、カウンタは動作せず、タイマAi割り込みは発生しません。
注3. これらのレジスタへの書き込みにはMOV命令を使用してください。
注4. INVC1レジスタのINV15ビットが“0”(短絡防止時間有効) の場合、通電出力がアクティブになるタイミングが遅れ、短絡防止タイマが停止するタイミングで変化します。
注5. INVC1レジスタのINV11ビットが“0”(三相モード0) の場合、タイマAiスタートトリガによってTAiレジスタの値がリロードレジスタに転送されます。
INV11ビットが“1”(三相モード1) の場合、タイマAiスタートトリガによってまずTAi1レジスタの値が、次のタイマAiスタートトリガ時にTAiレジスタの値がリロードレジスタに転送されます。以降、TAi1レジスタの値とTAiレジスタの値が交互にリロードレジスタに転送されます。
注6. タイマB2アンダフローが発生するタイミングで、これらのレジスタへ書かないでください。

図16.10 TA1、TA2、TA4、TA11、TA21、TA41レジスタ

タイマAi、Ai-1ミラーレジスタ (i=1, 2, 4) (注1~7)

b15　b8 b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA1M, TA11M	0221h-0220h、0223h-0222h番地	不定
TA2M, TA21M	0225h-0224h、0227h-0226h番地	不定
TA4M, TA41M	0229h-0228h、022Bh-022Ah番地	不定

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、スタートトリガ後、カウントソースをn回カウントして停止する。タイマA1、A2、A4が停止するタイミングで各相出力信号が変化する	0000h~FFFFh	WO

注1. 書き込みは16ビット単位で行ってください。
注2. これらのレジスタに書いた値はTAi、TAi1レジスタにも反映されます。
注3. これらのレジスタに“0000h”を書いた場合、カウンタは動作せず、タイマAi割り込みは発生しません。
注4. これらのレジスタへの書き込みにはMOV命令を使用してください。
注5. INVC1レジスタのINV15ビットが“0”(短絡防止時間有効) の場合、通電出力がアクティブになるタイミングが遅れ、短絡防止タイマが停止するタイミングで変化します。
注6. INVC1レジスタのINV11ビットが“0”(三相モード0) の場合、タイマAiスタートトリガによってTAiレジスタの値がリロードレジスタに転送されます。
INV11ビットが“1”(三相モード1) の場合、タイマAiスタートトリガによってまずTAi1レジスタの値が、次のタイマAiスタートトリガ時にTAiレジスタの値がリロードレジスタに転送されます。以降、TAi1レジスタの値とTAiレジスタの値が交互にリロードレジスタに転送されます。
注7. タイマB2アンダフローが発生するタイミングで、これらのレジスタへ書かないでください。

図 16.11　TA1M、TA2M、TA4M、TA11M、TA21M、TA41M レジスタ

タイマAiモードレジスタ (i=1, 2, 4)

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0
[ ][ ][0][1][0][0][1][0]

シンボル	アドレス	リセット後の値
TA1MR, TA2MR, TA4MR	0357h、0358h、035Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TMOD0	動作モード選択ビット	三相モータ制御用タイマ機能では“10b”(ワンショットタイマモード) にしてください	RW
TMOD1			RW
MR0	予約ビット	“0”にしてください	RW
MR1	外部トリガ選択ビット	三相モータ制御用タイマ機能では“0”にしてください	RW
MR2	トリガ選択ビット	三相モータ制御用タイマ機能では“1”(TRGSRレジスタで選択) にしてください	RW
MR3	三相モータ制御用タイマ機能では“0”にしてください		RW
TCK0	カウントソース選択ビット	b7 b6 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f2n 1 1 : fC32	RW
TCK1			RW

図 16.12　三相モータ制御用タイマ機能時のTA1MR、TA2MR、TA4MR レジスタ

トリガ選択レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TRGSR	0343h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA1TGL	タイマA1イベント/トリガ選択ビット	V相出力制御回路を使用する場合は、“01b”(TB2のアンダフロー)にしてください	RW
TA1TGH			RW
TA2TGL	タイマA2イベント/トリガ選択ビット	W相出力制御回路を使用する場合は、“01b”(TB2のアンダフロー)にしてください	RW
TA2TGH			RW
TA3TGL	タイマA3イベント/トリガ選択ビット	b5 b4 0 0 : TA3IN端子の入力を選択 0 1 : TB2のオーバフローを選択 (注1) 1 0 : TA2のオーバフローを選択 (注1) 1 1 : TA4のオーバフローを選択 (注1)	RW
TA3TGH			RW
TA4TGL	タイマA4イベント/トリガ選択ビット	U相出力制御回路を使用する場合は、“01b”(TB2のアンダフロー)にしてください	RW
TA4TGH			RW

注1. オーバフロー、またはアンダフロー。

図 16.13 三相モータ制御用タイマ機能時のTRGSRレジスタ

カウント開始レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
TABSR	0340h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TA0S	タイマA0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA1S	タイマA1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA2S	タイマA2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA3S	タイマA3カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TA4S	タイマA4カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB0S	タイマB0カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB1S	タイマB1カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW
TB2S	タイマB2カウント開始ビット	0: カウント停止 1: カウント開始	RW

図 16.14 TABSRレジスタ

16.4 上下同時通電出力禁止機能と短絡防止タイマ

三相モータ制御用タイマには、上側トランジスタと下側トランジスタが同時に導通することで発生するアーム短絡を防止する機能があります。1つはプログラムの間違い等によって上下通電出力が同時にアクティブにならないようにする上下同時通電出力禁止機能、もう1つはトランジスタのターンオフ遅れによって上下トランジスタが同時にONにならないようにする短絡防止タイマです。

上下同時通電出力禁止機能はINVC0レジスタのINV04ビットを“1”にすることで設定できます。このとき、U相と$\overline{U}$相、V相と$\overline{V}$相、あるいはW相と$\overline{W}$相が同時にアクティブになると、三相モータ制御出力端子はすべてハイインピーダンスになります。図 16.15 に上下同時通電出力禁止時の出力波形例を示します。

短絡防止タイマはINVC1レジスタのINV15ビットを“0”にすることで有効になります。短絡防止時間はDTTレジスタで設定します。図 16.16にDTTレジスタを、図 16.17に短絡防止タイマ使用時の出力波形例を示します。

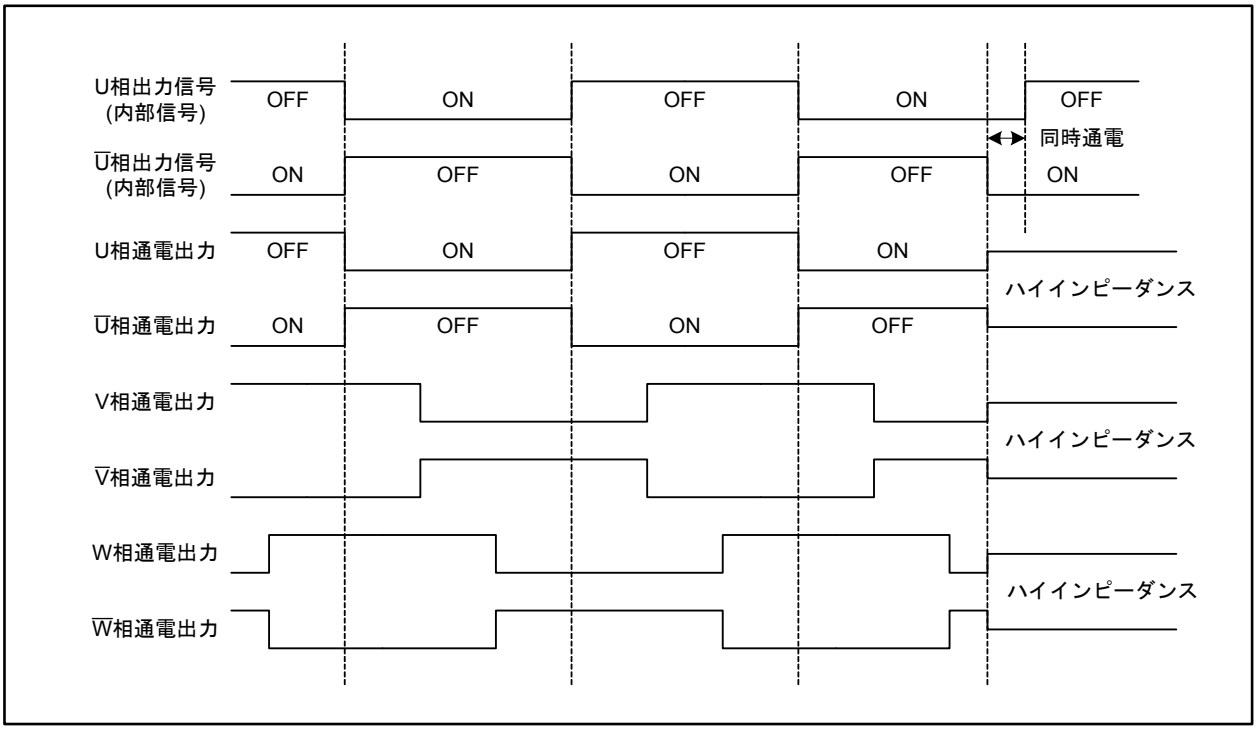


図 16.15 上下同時通電出力禁止時の出力波形例

短絡防止タイマ (注1、2)

b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
DTT	030Ch番地	不定

機　能	設定範囲	RW
上側トランジスタと下側トランジスタが同時に通電しないように、通電信号がアクティブになるタイミングを遅らせるためのワンショットタイマです。 設定値をnとすると、トリガが入った後カウントソースをn回カウントして停止します (注3)	01h~FFh	WO

注1. このレジスタへの書き込みはMOV命令を使用してください。
注2. INVC1レジスタのINV15ビットが“0”(短絡防止時間有効) のとき有効です。INV15ビットが“1”(短絡防止時間無効) のとき短絡防止時間はありません。
注3. トリガはINVC1レジスタのINV16ビットで、カウントソースはINVC1レジスタのINV12ビットで選択してください。

図 16.16 DTT レジスタ

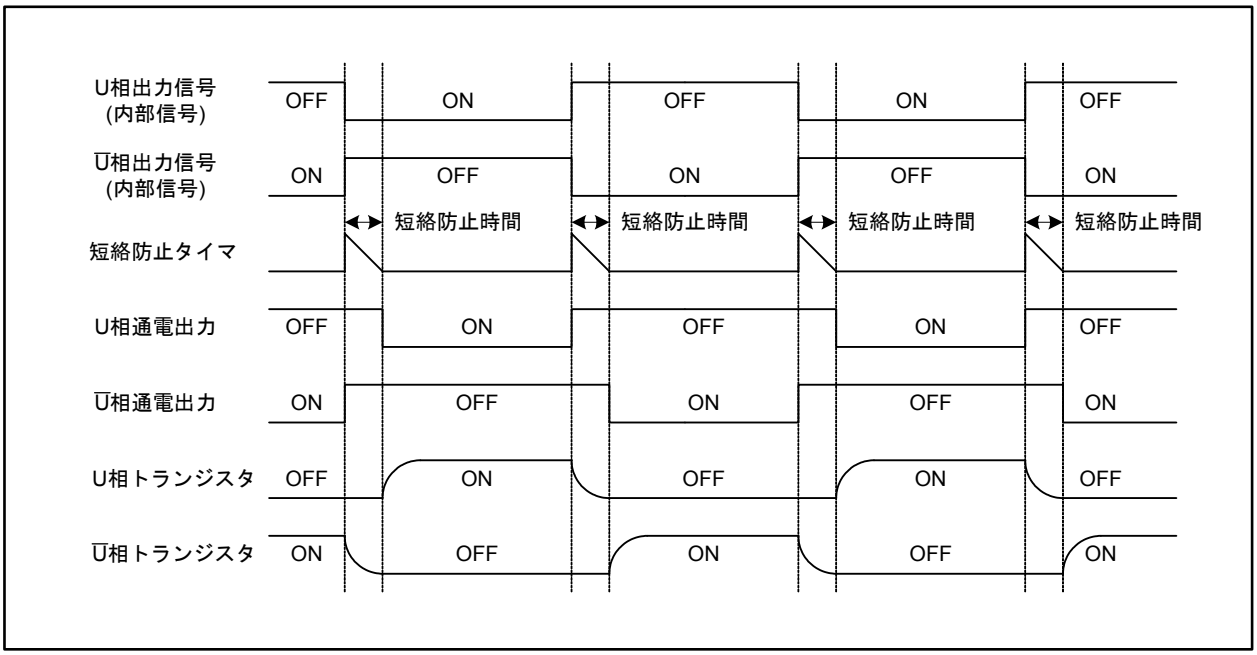
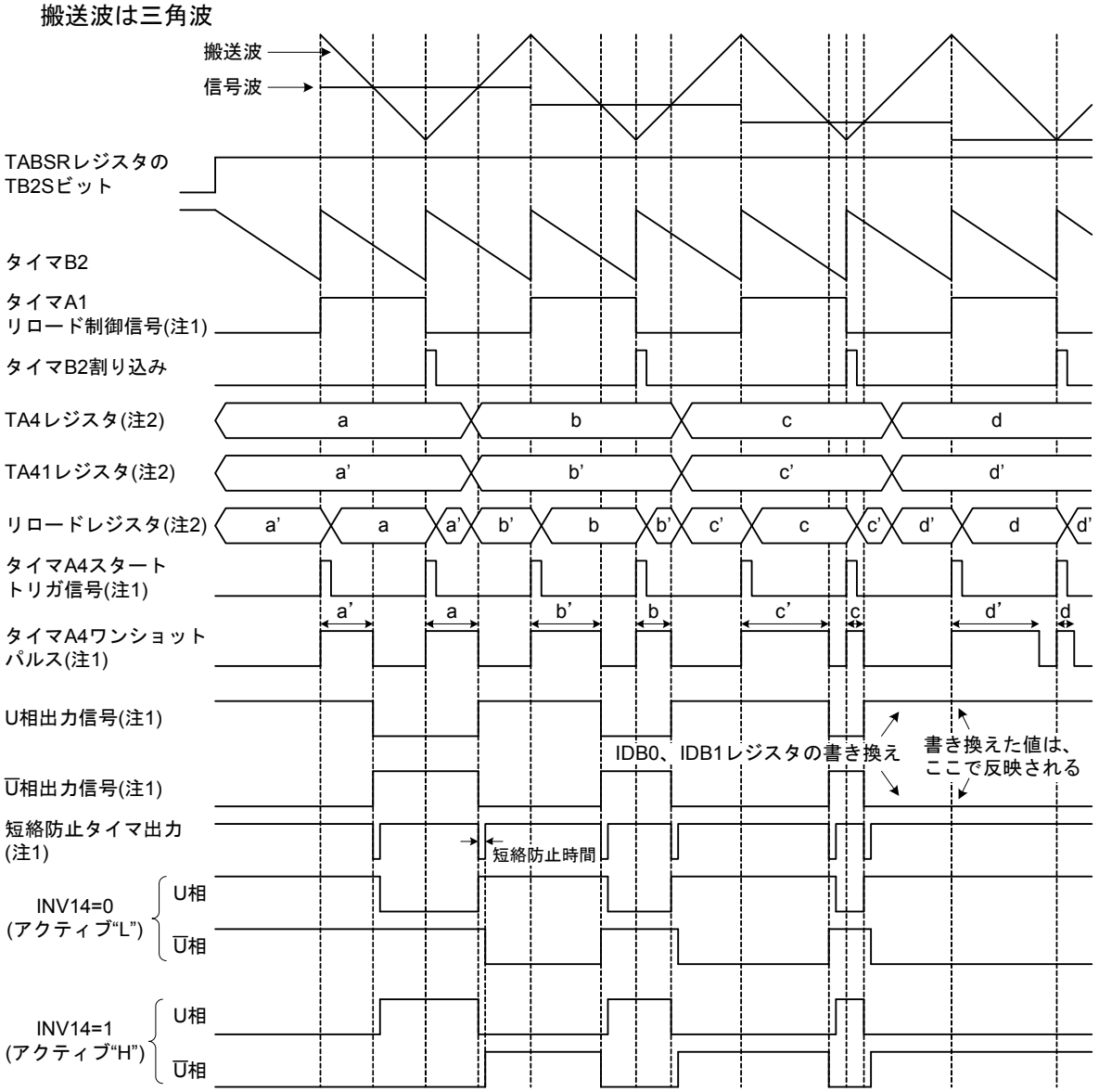


図 16.17 短絡防止タイマ使用時の出力波形例

16.5 三相モータ制御用タイマの動作例

図 16.18に三角波変調波形例を、図 16.19に鋸波変調波形例を示します。



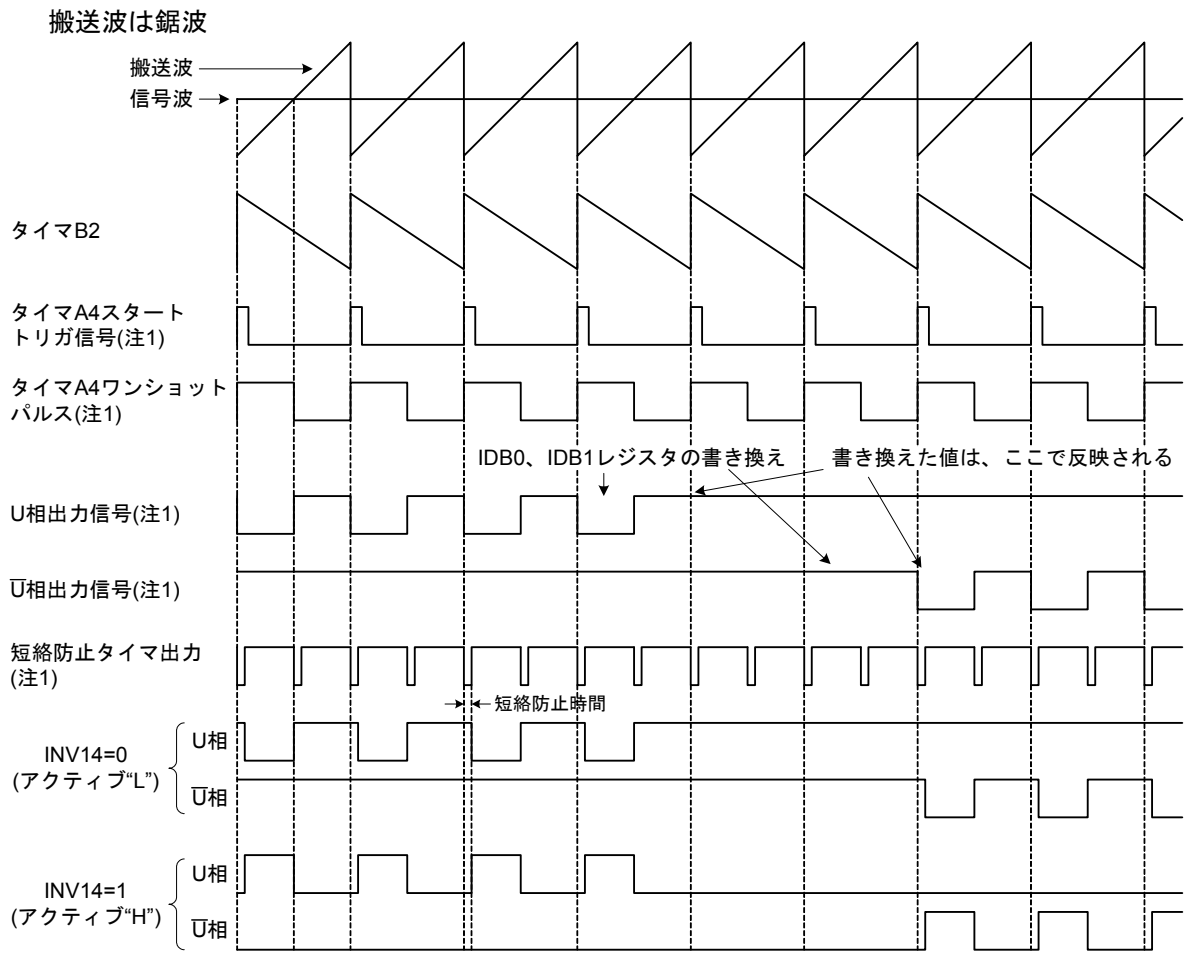
INVC0=00XX11XXb (X: システムに合わせて設定)、INVC1=010XXXX0bの場合の波形例です。
PWM出力変更例は以下のとおりです。

(1) INV11=1 (三相モード1) の場合
- INV01=0、ICTB2=2h (タイマB2アンダフロー2回目ごとにタイマB2割り込み)、またはINV01=1、INV00=1、ICTB2=1h (タイマA1リロード制御信号が"1"のときのタイマB2アンダフローごとにタイマB2割り込み)
- タイマの初期値: TA41=a'、TA4=a
  タイマB2割り込みごとに、TA4、TA41レジスタを変更
  1回目: TA41=b'、TA4=b。 2回目: TA41=c'、TA4=c。
- IDB0、IDB1レジスタの初期値
  DU0=1、DUB0=0、DU1=0、DUB1=1
  3回目のタイマB2割り込みで、DU0=1、DUB0=0、DU1=1、DUB1＝0に変更

(2) INV11=0 (三相モード0) の場合
- INV01=0、ICTB2=1h (タイマB2アンダフローごとにタイマB2割り込み)
- タイマの初期値: TA4=a'
  タイマB2割り込みごとに、TA4レジスタを変更
  1回目: TA4=a。2回目: TA4=b'。3回目: TA4=b。
  4回目: TA4=c'。5回目: TA4=c。
- IDB0、IDB1レジスタの初期値
  DU0=1、DUB0=0、DU1=0、DUB1=1
  6回目のタイマB2割り込みで、DU0=1、DUB0=0、DU1=1、DUB1＝0に変更

注1. 内部信号。ブロック図参照。
注2. INV1レジスタのINV11ビットが"1"(三相モード1) の場合

図 16.18 三角波変調動作例



INVC0=01XX110Xb (X: システムに合わせて設定)、INVC1=000XXX00bの場合の波形例です。
120°通電制御などに使用できます。

PWM出力変更例は以下のとおりです。

- IDB0、IDB1レジスタの初期値: DU0=0、DUB0=1、DU1=1、DUB1=1。
  3回目のタイマB2割り込みで、DU0=1、DUB0=1、DU1=1、DUB1＝1に変更。
  5回目のタイマB2割り込みで、DU0=1、DUB0=0、DU1=1、DUB1＝1に変更。

注1. 内部信号。ブロック図参照。

図 16.19 鋸波変調動作例

16.6 三相モータ制御用タイマ機能使用上の注意

16.6.1 シャットダウン機能

- PM2レジスタのPM24ビットが“1” (NMI有効)、かつIOBCレジスタのSDEビットが“1” (シャットダウン機能有効)で、INVC0レジスタのINV02ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ機能を使用する)、かつINV03ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ出力許可)のとき、$\overline{\text{NMI}}$端子に“L”を入力するとTA1OUT、TA2OUT、TA4OUT端子はハイインピーダンスになります。

16.6.2 レジスタ設定

- タイマB2がアンダフローする前後で、TAi1レジスタ(i=1, 2, 4)に値を設定しないでください。TAi1レジスタに値を設定する場合は、TB2レジスタの値を読んで、アンダフローまでに十分な時間があることを確認してから設定してください。TB2レジスタの読み出しと、TAi1レジスタへの書き込みの間隔があかないよう、この間に割り込み処理などが実行されないようにしてください。また、TB2レジスタを読み出した結果、アンダフローまでに十分な時間がない場合は、アンダフローするまで待った後TAi1レジスタを設定してください。

17. シリアルインタフェース

シリアルインタフェースは5チャネル(UART0~UART4)あります。
UARTi (i=0~4)は、それぞれ専用の送受信クロック発生用タイマを持ち、独立して動作します。
図 17.1にUART0~UART2のブロック図を、図 17.2にUART3、UART4のブロック図を示します。
UARTiには、以下のモードがあります。

- クロック同期型シリアルインタフェースモード　(UART0 ~ UART4)
- クロック非同期型シリアルインタフェースモード (UARTモード)　(UART0 ~ UART4)
- 特殊モード1 (I^2Cモード)　(UART0 ~ UART2)
- 特殊モード2　(UART0 ~ UART2)

図 17.3~図 17.17に、UARTi関連のレジスタを示します。
レジスタの設定、端子の設定はモードごとの表を参照してください。

表 17.1　UART0~UART4の機能比較

モード/機能	UART0~UART2	UART3, UART4
クロック同期型シリアルインタフェースモード	あり	あり
シリアルデータ論理切り替え選択	可能	選択できません
UARTモード	あり	あり
CTS/RTS機能選択	可能	可能
TXD、RXD入出力極性切り替え選択	可能	選択できません
特殊モード1 (I^2Cモード)	あり	なし
特殊モード2	あり	なし

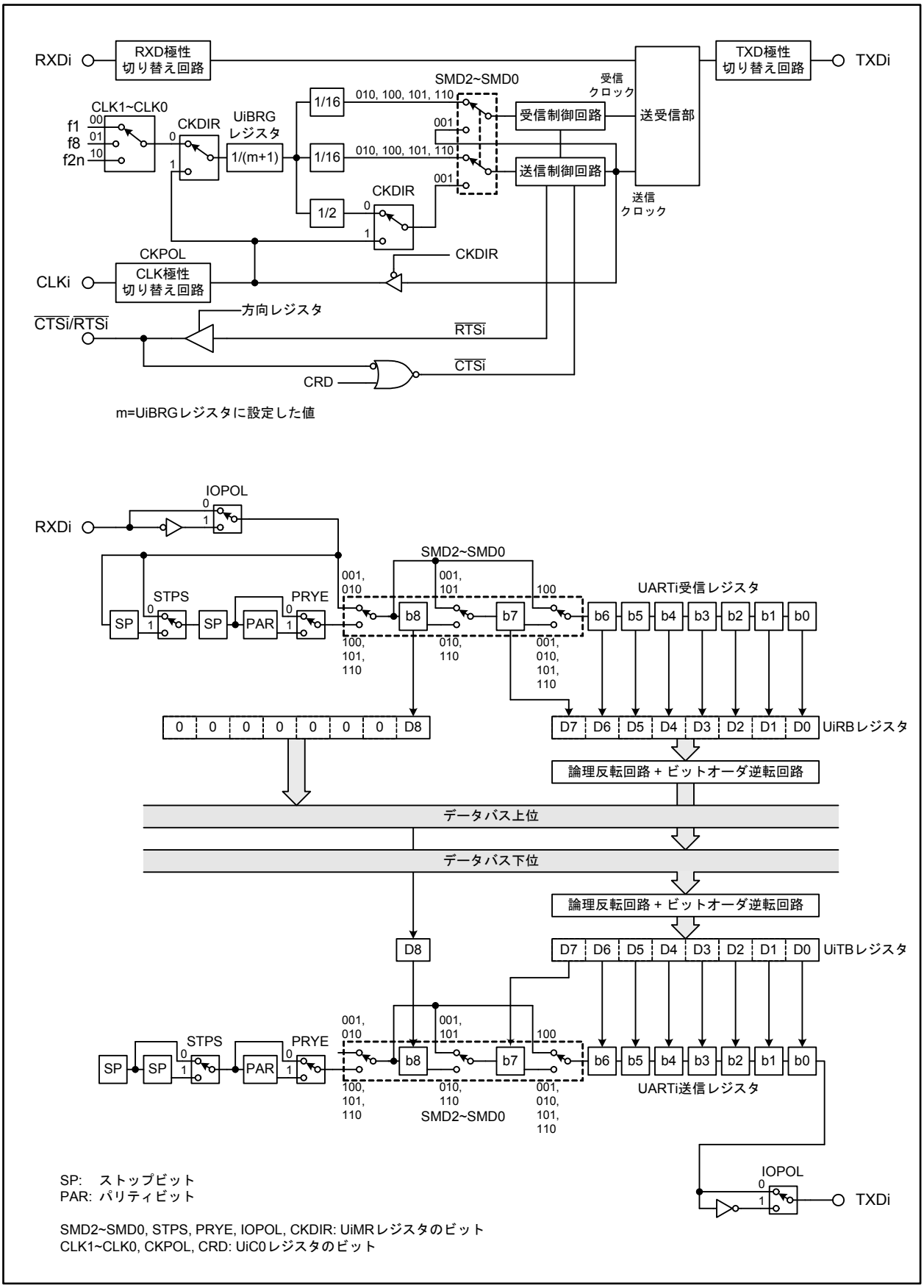


図 17.1 UARTi (i=0~2) ブロック図

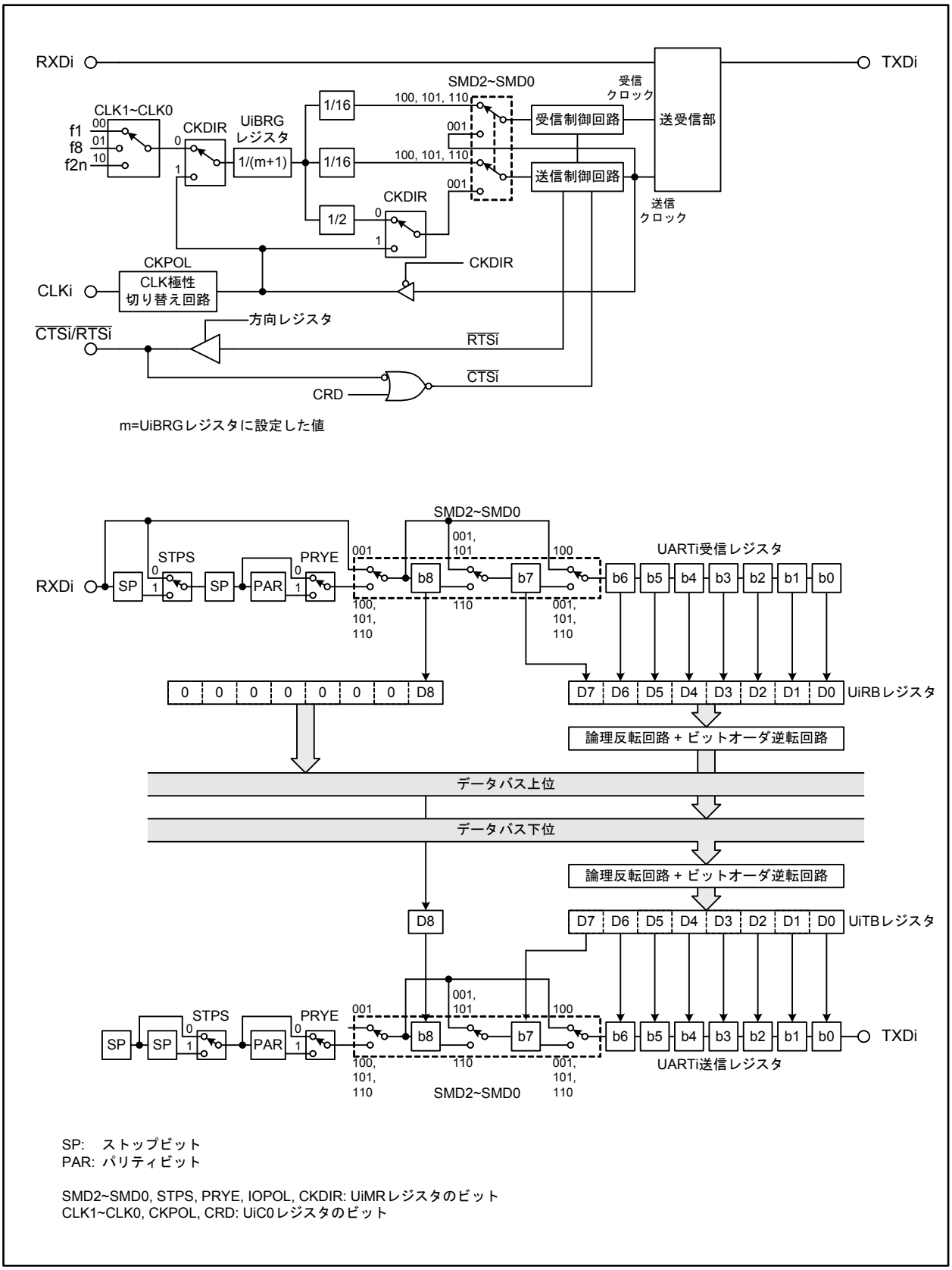


図 17.2 UARTi (i=3, 4) ブロック図

UARTi送受信モードレジスタ (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0MR~U2MR	0368h、02E8h、0338h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SMD0	シリアルインタフェースモード選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : シリアルインタフェース無効 0 0 1 : クロック同期型シリアルインタフェースモード 0 1 0 : I²Cモード 1 0 0 : UARTモード キャラクタ長 7ビット 1 0 1 : UARTモード キャラクタ長 8ビット 1 1 0 : UARTモード キャラクタ長 9ビット 上記以外 : 設定しないでください	RW
SMD1			RW
SMD2			RW
CKDIR	内/外部クロック選択ビット	0: 内部クロック 1: 外部クロック	RW
STPS	ストップビット長選択ビット	0: 1ストップビット 1: 2ストップビット	RW
PRY	パリティ奇/偶数選択ビット	PRYE=1のとき有効 0: 奇数パリティ 1: 偶数パリティ	RW
PRYE	パリティイネーブルビット	0: パリティなし 1: パリティあり	RW
IOPOL	TXD、RXD入出力極性切り替えビット	0: 反転なし 1: 反転あり	RW

図 17.3　U0MR~U2MR レジスタ

UARTi送受信モードレジスタ (i=3, 4)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0							

シンボル	アドレス	リセット後の値
U3MR, U4MR	01E0h、01E8h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SMD0	シリアルインタフェースモード選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : シリアルインタフェース無効 0 0 1 : クロック同期型シリアルインタフェースモード 1 0 0 : UARTモード キャラクタ長 7ビット 1 0 1 : UARTモード キャラクタ長 8ビット 1 1 0 : UARTモード キャラクタ長 9ビット 上記以外 : 設定しないでください	RW
SMD1			RW
SMD2			RW
CKDIR	内/外部クロック選択ビット	0: 内部クロック 1: 外部クロック	RW
STPS	ストップビット長選択ビット	0: 1ストップビット 1: 2ストップビット	RW
PRY	パリティ奇/偶数選択ビット	PRYE=1のとき有効 0: 奇数パリティ 1: 偶数パリティ	RW
PRYE	パリティイネーブルビット	0: パリティなし 1: パリティあり	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

図 17.4　U3MR、U4MR レジスタ

UARTi送受信制御レジスタ0 (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
					0		

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0C0~U2C0	036Ch、02ECh、033Ch番地	0000 1000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CLK0	UiBRGカウントソース選択ビット	b1 b0 0 0 : f1を選択 0 1 : f8を選択 1 0 : f2nを選択 1 1 : 設定しないでください	RW
CLK1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
TXEPT	送信シフトレジスタ空フラグ	0: 送信シフトレジスタにデータあり(送信中) 1: 送信シフトレジスタにデータなし(送信完了)	RO
CRD	CTS機能禁止ビット	0: CTS機能許可 1: CTS機能禁止	RW
NCH	データ出力選択ビット	0: TXDi/SDAi端子、SCLi端子はプッシュプル出力 1: TXDi/SDAi端子、SCLi端子はNチャネルオープンドレイン出力	RW
CKPOL	CLK極性選択ビット	0: 送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力 1: 送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力	RW
UFORM	ビットオーダ選択ビット (注1)	0: LSBファースト 1: MSBファースト	RW

注1. UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットが“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード)、または“101b”(UARTモード キャラクタ長8ビット)のとき選択できます。
SMD2~SMD0ビットが“010b”(I^2Cモード)のときは“1”に、“100b”(UARTモード キャラクタ長7ビット)または“110b”(UARTモード キャラクタ長9ビット)のときは“0”にしてください。

図 17.5　U0C0~U2C0 レジスタ

UARTi送受信制御レジスタ0 (i=3, 4)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		X			0		

シンボル	アドレス	リセット後の値
U3C0, U4C0	01E4h、01ECh番地	00X0 1000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CLK0	UiBRGカウント ソース選択ビット	b1 b0 0 0 : f1を選択 0 1 : f8を選択 1 0 : f2nを選択 1 1 : 設定しないでください	RW
CLK1			RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
TXEPT	送信シフトレジスタ空 フラグ	0: 送信シフトレジスタにデータあり (送信中) 1: 送信シフトレジスタにデータなし (送信完了)	RO
CRD	CTS機能禁止ビット	0: CTS機能許可 1: CTS機能禁止	RW
— (b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
CKPOL	CLK極性選択ビット	0: 送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力 1: 送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力	RW
UFORM	ビットオーダ選択ビット (注1)	0: LSBファースト 1: MSBファースト	RW

注1. UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットが“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード)、または“101b”(UARTモード キャラクタ長8ビット)のとき選択できます。
SMD2~SMD0ビットが“100b”(UARTモード キャラクタ長7ビット)または“110b”(UARTモード キャラクタ長9ビット)のときは“0”にしてください。

図 17.6　U3C0、U4C0 レジスタ

UARTi送受信制御レジスタ1 (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0							

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0C1~U2C1	036Dh、02EDh、033Dh番地	0000 0010b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TE	送信許可ビット	0: 送信禁止 1: 送信許可	RW
TI	送信バッファ空フラグ	0: UiTBレジスタにデータあり 1: UiTBレジスタにデータなし	RO
RE	受信許可ビット	0: 受信禁止 1: 受信許可	RW
RI	受信完了フラグ	0: UiRBレジスタにデータなし 1: UiRBレジスタにデータあり	RO
UiIRS	UARTi送信割り込み要因選択ビット	0: UiTBレジスタ空 (TI=1) 1: 送信完了 (TXEPT=1)	RW
UiRRM	UARTi連続受信モード許可ビット	0: 連続受信モード禁止 1: 連続受信モード許可	RW
UiLCH	データ論理選択ビット (注1)	0: 反転なし 1: 反転あり	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットが“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード)、“100b”(UARTモード キャラクタ長7ビット)、または“101b”(UARTモード キャラクタ長8ビット) のとき選択できます。
SMD2~SMD0ビットが“010b”(I^2Cモード) 、または“110b”(UARTモード キャラクタ長9ビット) のときは“0”にしてください。

図 17.7　U0C1~U2C1 レジスタ

UARTi送受信制御レジスタ1 (i=3, 4)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X	X	X				

シンボル	アドレス	リセット後の値
U3C1, U4C1	01E5h、01EDh番地	XXXX 0010b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TE	送信許可ビット	0: 送信禁止 1: 送信許可	RW
TI	送信バッファ空フラグ	0: UiTBレジスタにデータあり 1: UiTBレジスタにデータなし	RO
RE	受信許可ビット	0: 受信禁止 1: 受信許可	RW
RI	受信完了フラグ	0: UiRBレジスタにデータなし 1: UiRBレジスタにデータあり	RO
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 17.8　U3C1、U4C1 レジスタ

UART3、4送受信制御レジスタ2

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	0	0	0				

シンボル	アドレス	リセット後の値
U34CON	01F0h番地	X000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
U3IRS	UART3送信割り込み要因選択ビット	0: 送信バッファ空 (TI=1) 1: 送信完了 (TXEPT=1)	RW
U4IRS	UART4送信割り込み要因選択ビット	0: 送信バッファ空 (TI=1) 1: 送信完了 (TXEPT=1)	RW
U3RRM	UART3連続受信モード許可ビット	0: 連続受信モード禁止 1: 連続受信モード許可	RW
U4RRM	UART4連続受信モード許可ビット	0: 連続受信モード禁止 1: 連続受信モード許可	RW
— (b6-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 17.9　U34CON レジスタ

UARTi特殊モードレジスタ (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0	0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0SMR~U2SMR	0367h、02E7h、0337h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IICM	I^2Cモード選択ビット (注1)	0: I^2Cモード以外 1: I^2Cモード	RW
ABC	アービトレーションロスト検出フラグ制御 (注1)	0: 1ビットごとに更新 1: 1バイトごとに更新	RW
BBS	バスビジーフラグ (注1、2)	0: ストップコンディション検出 1: スタートコンディション検出 (バスビジー)	RW
— (b7-b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. I^2Cモードで使用します。
注2. “0”のみ書けます。“1”を書いても変化しません。

図 17.10　U0SMR~U2SMR レジスタ

UARTi特殊モードレジスタ2 (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0							

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0SMR2~U2SMR2	0366h、02E6h、0336h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IICM2	I²Cモード選択ビット2	0: ACK/NACK割り込みを使用 1: 送受信割り込みを使用	RW
CSC	クロック同期化ビット (注1)	0: クロック同期を実施しない 1: クロック同期を実施する	RW
SWC	SCLウェイト自動挿入ビット (注2)	0: ウェイトなし/ウェイト解除 1: 8ビット受信後、SCLi端子を“L”に固定	RW
ALS	SDA出力自動停止ビット (注1)	アービトレーションロスト検出時、 0: SDAi出力を停止しない 1: SDAi出力を停止する	RW
STC	UARTi自動初期化ビット (注2)	スタートコンディション検出時、 0: 回路を初期化しない 1: 回路を初期化する	RW
SWC2	SCLウェイト出力ビット2 (注1)	0: SCLi端子に送受信クロックを出力 1: SCLi端子を“L”に固定	RW
SDHI	SDA出力停止ビット (注2)	0: データ出力 1: 出力停止 (ハイインピーダンス)	RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. I²Cモードでマスタの場合に使用します。
注2. I²Cモードでスレーブの場合に使用します。

図 17.11　U0SMR2~U2SMR2 レジスタ

UARTi特殊モードレジスタ3 (i=0~2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0SMR3~U2SMR3	0365h、02E5h、0335h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SSE	$\overline{\text{SS}}$端子機能許可ビット (注1、2)	0: SS機能禁止 1: SS機能許可	RW
CKPH	クロック位相設定ビット	0: クロック遅れなし 1: クロック遅れあり	RW
DINC	シリアル入力端子設定ビット (注1)	0: TXDi、RXDiを選択 (マスタモード) 1: STXDi、SRXDiを選択 (スレーブモード)	RW
NODC	クロック出力選択ビット	0: CLKi 端子はプッシュプル出力 1: CLKi 端子はNチャネルオープンドレイン出力	RW
ERR	モードフォルトフラグ(注1)	0: モードフォルトエラーなし 1: モードフォルトエラーあり (注3)	RW
DL0	SDAiデジタル遅延値設定ビット (注4、5)	BRGカウントソースを基準にSDAi出力を以下のサイクル数遅延します b7 b6 b5 0 0 0 : 遅延なし 0 0 1 : 1~2サイクル 0 1 0 : 2~3サイクル 0 1 1 : 3~4サイクル 1 0 0 : 4~5サイクル 1 0 1 : 5~6サイクル 1 1 0 : 6~7サイクル 1 1 1 : 7~8サイクル	RW
DL1			RW
DL2			RW

注1. 特殊モード2で使用します。
注2. SS機能を使用する場合、UiC0レジスタのCRDビットを“1”(CTS機能を禁止) にしてください。
注3. “0”のみ書けます。“1”を書いても変化しません。
注4. DL2~DL0ビットはI^2Cモードで、SDAi出力にデジタル的に遅延を発生させるものです。I^2Cモード以外の場合、“000b”(遅延なし) にしてください。
注5. 外部クロックを選択した場合、100ns程度遅延が大きくなります。

図 17.12 U0SMR3~U2SMR3 レジスタ

UARTi特殊モードレジスタ4 (i=0~2)

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
U0SMR4~U2SMR4	0364h、02E4h、0334h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
STAREQ	スタートコンディション生成ビット (注1)	0: クリア 1: スタート (注2)	RW
RSTAREQ	リスタートコンディション生成ビット (注1)	0: クリア 1: スタート (注2)	RW
STPREQ	ストップコンディション生成ビット (注1)	0: クリア 1: スタート (注2)	RW
STSPSEL	SCL、SDA出力選択ビット (注1)	0: シリアル入出力回路選択 1: スタートコンディション/ストップコンディション生成回路選択 (注3)	RW
ACKD	ACKデータビット (注4)	0: ACK 1: NACK	RW
ACKC	ACKデータ出力許可ビット (注4)	0: シリアルデータ出力 1: ACKデータ出力	RW
SCLHI	SCL出力停止ビット (注1)	ストップコンディション検出時、 0: SCLi出力を停止しない 1: SCLi出力を停止する	RW
SWC9	SCLウェイト自動挿入ビット3 (注4)	0: ウェイトなし/ウェイト解除 1: 9ビット目を受信後、SCLi端子を“L”に固定	RW

注1. I²Cモードでマスタの場合に使用します。UiSMRレジスタのIICMビットが“1”(I²Cモード) のとき“1”にできます。
注2. 各コンディションが生成されたとき、“0”になります。生成失敗時は“1”のままとなります。
注3. 先にSTAREQ、RSTAREQ、STPREQビットのいずれかを“1”にした後、“1”にしてください。
注4. I²Cモードでスレーブの場合に使用します。UiSMRレジスタのIICMビットが“1”(I²Cモード) のとき“1”にできます。

図 17.13 U0SMR4~U2SMR4 レジスタ

UARTi転送速度レジスタ (i=0~4)(注1、2、3)

b7 b0

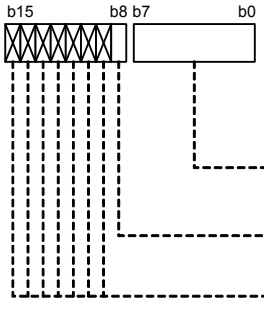
シンボル	アドレス	リセット後の値
U0BRG~U3BRG	0369h、02E9h、0339h、01E1h番地	不定
U4BRG	01E9h番地	不定

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、UiBRGはカウントソースをn+1分周する	00h~FFh	WO

注1. このレジスタは、UiC0レジスタのCLK1~CLK0ビットを設定した後で書き換えてください。
注2. このレジスタへは、MOV命令を使用して書いてください。
注3. 送受信停止中に値を書いてください。

図 17.14 U0BRG~U4BRG レジスタ

UARTi送信バッファレジスタ (i=0~4)(注1)



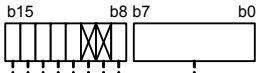
シンボル	アドレス	リセット後の値
U0TB~U2TB	036Bh-036Ah、02EBh-02EAh、033Bh-033Ah番地	不定
U3TB, U4TB	01E3h-01E2h、01EBh-01EAh番地	不定

ビットシンボル	機　能	RW
— (b7-b0)	送信データ (D7~D0)	WO
— (b8)	送信データ (D8)	WO
— (b15-b9)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください	—

注1. このレジスタはMOV命令を使用して書いてください。

図 17.15 U0TB~U4TB レジスタ

UARTi受信バッファレジスタ (i=0~2)



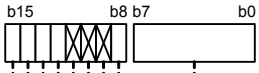
シンボル	アドレス	リセット後の値
U0RB~U2RB	036Fh-036Eh、02EFh-02EEh、033Fh-033Eh番地	不定

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b7-b0)	—	受信データ (D7~D0)	RO
— (b8)	—	受信データ (D8)	RO
— (b10-b9)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
ABT	アービトレーションロスト検出フラグ (注1)	0: 未検出 (勝) 1: 検出 (負)	RW
OER	オーバランエラーフラグ (注2)	0: オーバランエラーなし 1: オーバランエラー発生	RO
FER	フレーミングエラーフラグ (注2、3)	0: フレーミングエラーなし 1: フレーミングエラー発生	RO
PER	パリティエラーフラグ (注2、3)	0: パリティエラーなし 1: パリティエラー発生	RO
SUM	エラーサムフラグ (注2、3)	0: エラーなし 1: エラー発生	RO

注1. ABTビットは“0”のみ書けます。
注2. UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効) にしたとき、またはUiC1レジスタのREビットを“0”(受信禁止) にしたとき、OER、FER、PER、SUMビットは“0”になります。
OER、FER、PERビットがすべて“0”になると、SUMビットも“0”になります。
また、UiRBレジスタの下位バイトを読んだときも、FER、PERビットは“0”になります。
注3. SMD2~SMD0ビットが“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード) または“010b”(I^2Cモード) のとき、これらのエラーフラグは無効です。読んだ場合、その値は不定です。

図 17.16 U0RB~U2RB レジスタ

UARTi受信バッファレジスタ (i=3, 4)



シンボル	アドレス	リセット後の値
U3RB, U4RB	01E7h-01E6h、01EFh-01EEh番地	不定

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b7-b0)	—	受信データ (D7~D0)	RO
— (b8)	—	受信データ (D8)	RO
— (b11-b9)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
OER	オーバランエラーフラグ (注1)	0: オーバランエラーなし 1: オーバランエラー発生	RO
FER	フレーミングエラーフラグ (注1、2)	0: フレーミングエラーなし 1: フレーミングエラー発生	RO
PER	パリティエラーフラグ (注1、2)	0: パリティエラーなし 1: パリティエラー発生	RO
SUM	エラーサムフラグ (注1、2)	0: エラーなし 1: エラー発生	RO

注1. UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効) にしたとき、またはUiC1レジスタのREビットを“0”(受信禁止) にしたとき、OER、FER、PER、SUMビットは“0”になります。
OER、FER、PERビットがすべて“0”になると、SUMビットも“0”になります。
また、UiRBレジスタの下位バイトを読んだときも、FER、PERビットは“0”になります。

注2. SMD2~SMD0ビットが“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード) のとき、これらのエラーフラグは無効です。読んだ場合、その値は不定です。

図 17.17 U3RB、U4RB レジスタ

17.1 クロック同期型シリアルインタフェースモード

クロック同期型シリアルインタフェースモードは、送受信クロックに同期してデータの送受信を行うモードです。表 17.2にクロック同期型シリアルインタフェースモードの仕様を示します。

表 17.2 クロック同期型シリアルインタフェースモードの仕様

項目	仕様
データフォーマット	キャラクタ長　8ビット
送受信クロック	• UiMR レジスタ (i=0~4) の CKDIR ビットが“0” (内部クロック): $\frac{fx}{2(m+1)}$　fx = f1, f8, f2n　m : UiBRG レジスタ設定値 (00h~FFh) • CKDIR ビットが“1” (外部クロック): CLKi 端子からの入力
送信制御、受信制御	CTS 機能、RTS 機能、CTS/RTS 機能無効を選択
送信開始条件	送信開始には、以下の条件が必要です (注1) • UiC1 レジスタの TE ビットが“1” (送信許可) • UiC1 レジスタの TI ビットが“0” (UiTB レジスタにデータあり) • CTS 機能選択時、$\overline{\text{CTSi}}$ 端子への入力信号が“L”
受信開始条件	受信開始には、以下の条件が必要です (注1) • UiC1 レジスタの RE ビットが“1” (受信許可) • TE ビットが“1” (送信許可) • TI ビットが“0” (UiTB レジスタにデータあり) • CTS 機能選択時、$\overline{\text{CTSi}}$ 端子への入力信号が“L”
割り込み要求発生タイミング	送信割り込みは、U0C1~U2C1、U34CON レジスタの UiIRS ビットの設定により、以下の条件のいずれかを選択できます • UiIRS ビットが“0” (UiTB レジスタ空): UiTB レジスタから UARTi 送信レジスタへデータ転送時 (送信開始時) • UiIRS ビットが“1” (送信完了): UARTi 送信レジスタからデータ送信完了時 受信割り込み • UARTi 受信レジスタから UiRB レジスタへデータ転送時 (受信完了時)
エラー検出	オーバランエラー (注2) UiRB レジスタを読む前に次のデータ受信を開始し、7ビット目のデータを受信すると発生
その他選択項目	• CLK 極性選択 送受信データの出力と入力タイミングが、送受信クロックの立ち上がりに同期するか、立ち下がりに同期するかを選択できます • ビットオーダ選択 LSB ファーストまたは MSB ファーストを選択できます • 連続受信モード選択 UiRB レジスタを読むと同時に、受信許可にすることができます • シリアルデータ論理切り替え (UART0~UART2) 送受信データの論理を反転することができます

注1. 外部クロック選択時、UiC0 レジスタの CKPOL ビットが“0” (送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)の場合はCLKi端子が“H”の状態で、CKPOL ビットが“1” (送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力)の場合はCLKi端子が“L”の状態で、これらの条件を満たすようにしてください。

注2. オーバランエラーが発生した場合、UiRB レジスタは不定になります。SiRIC レジスタの IR ビットは“1” (割り込み要求あり)に変化しません。

表 17.3、表 17.4 に使用するレジスタと設定値を示します。なお、UARTi (i=0~4) の動作モード選択後、送信開始までは、TXDi端子は“H”を出力します(Nチャネルオープンドレイン出力選択時はハイインピーダンス)。

図 17.18 にクロック同期型シリアルインタフェースモード時の送信動作例を、図 17.19 にクロック同期型シリアルインタフェースモード時の受信動作例を示します。

表 17.3　クロック同期型シリアルインタフェースモードで使用するレジスタと設定値(UART0~UART2)

レジスタ	ビット	機能
UiMR	7~4	“0000b”にしてください
	CKDIR	内部クロック、外部クロックを選択してください
	SMD2~SMD0	“001b”にしてください
UiC0	UFORM	LSBファースト、またはMSBファーストを選択してください
	CKPOL	送受信クロックの極性を選択してください
	NCH	TXDi端子の出力形式を選択してください
	CRD	CTS機能の許可、または禁止を選択してください
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ
	2	“0”にしてください
	CLK1~CLK0	UiBRGレジスタのカウントソースを選択してください
UiC1	7	“0”にしてください
	UiLCH	データ論理反転を使用する場合、“1”にしてください
	UiRRM	連続受信モードを使用する場合、“1”にしてください
	UiIRS	UARTi送信割り込み要因を選択してください
	RI	受信完了フラグ
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください
	TI	送信バッファ空フラグ
	TE	送受信を許可する場合、“1”にしてください
UiSMR	7~0	“00h”にしてください
UiSMR2	7~0	“00h”にしてください
UiSMR3	7~4	“0000b”にしてください
	NODC	クロック出力形式を選択してください
	2~0	“000b”にしてください
UiSMR4	7~0	“00h”にしてください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください
UiTB	7~0	送信データを設定してください
UiRB	OER	オーバランエラーフラグ
	7~0	受信データが読めます

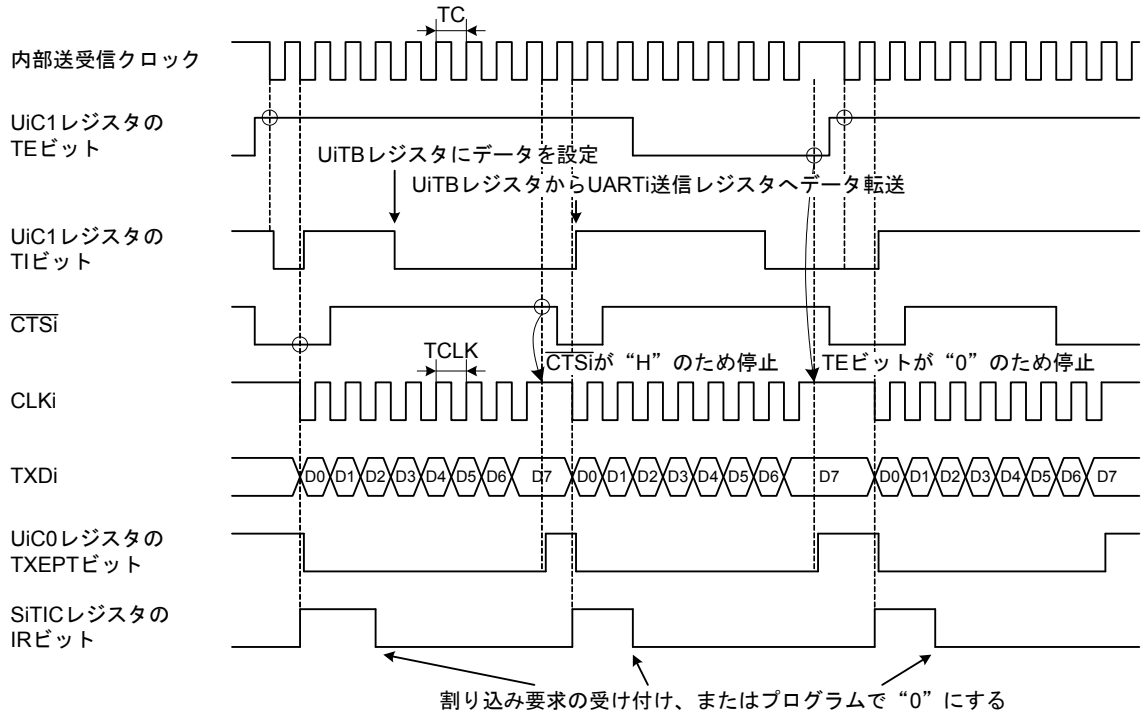
i=0~2

表 17.4　クロック同期型シリアルインタフェースモードで使用するレジスタと設定値(UART3、UART4)

レジスタ	ビット	機能
UiMR	7~4	“0000b”にしてください
	CKDIR	内部クロック、外部クロックを選択してください
	SMD2~SMD0	“001b”にしてください
UiC0	UFORM	LSBファースト、またはMSBファーストを選択してください
	CKPOL	送受信クロックの極性を選択してください
	5	“0”にしてください
	CRD	CTS機能の許可、または禁止を選択してください
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ
	2	“0”にしてください
	CLK1~CLK0	UiBRGレジスタのカウントソースを選択してください
UiC1	RI	受信完了フラグ
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください
	TI	送信バッファ空フラグ
	TE	送受信を許可する場合、“1”にしてください
U34CON	UiRRM	連続受信モードを使用する場合、“1”にしてください
	UiIRS	UARTi送信割り込み要因を選択してください
IFS0	IFS04	CLK4、RXD4、$\overline{\text{CTS4}}$の入力端子を選択してください
	IFS02	CLK3、RXD3、$\overline{\text{CTS3}}$の入力端子を選択してください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください
UiTB	7~0	送信データを設定してください
UiRB	OER	オーバランエラーフラグ
	7~0	受信データが読めます

i=3, 4

送信タイミング例 (内部クロック選択時)

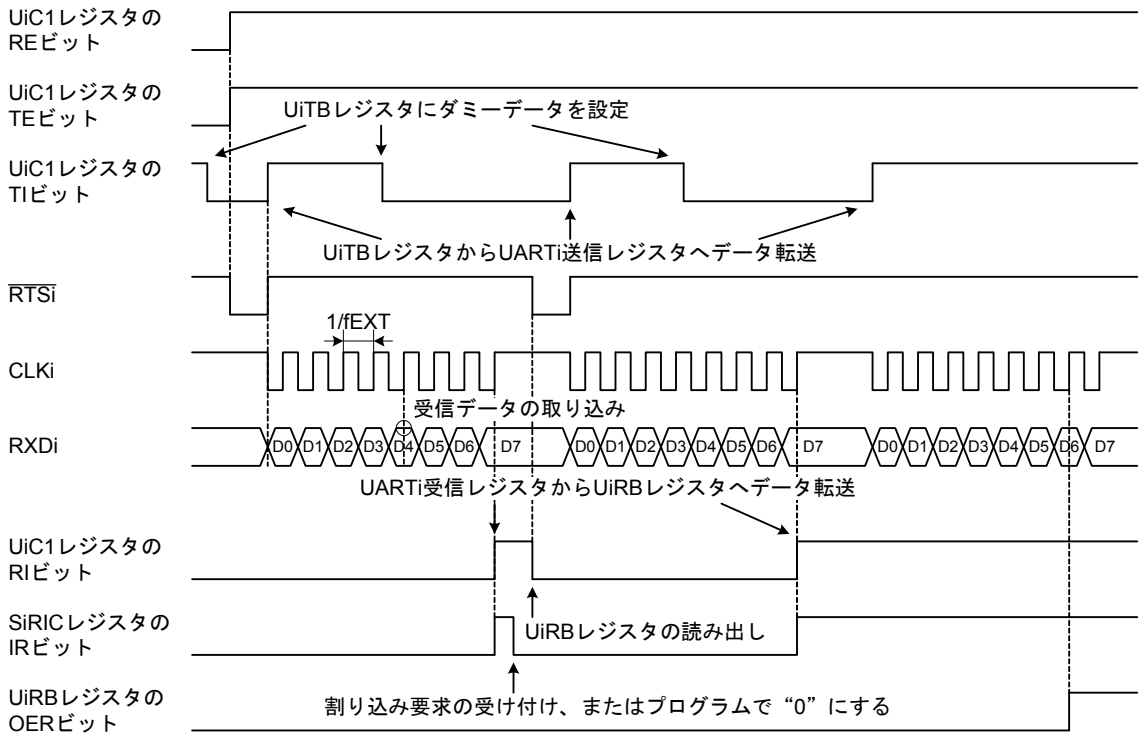


この図は以下の設定条件の場合です。
- ・UiMRレジスタのCKDIRビット=0 (内部クロック選択)
- ・UiC0レジスタのCRDビット=0 (CTS機能許可)
- ・UiC0レジスタのCKPOLビット=0 (送受信クロックの立ち下がりで送信データ出力)
- ・UiC1レジスタ、U34CONレジスタのUiIRSビット=0 (UiTBレジスタ空で割り込み要求発生)

TC = TCLK = 2(m+1)/fx
　fx: UiBRGカウントソースの周波数 (f1, f8, f2n)
　m: UiBRGレジスタに設定した値

図 17.18 クロック同期型シリアルインタフェースモード時の送信動作例

受信タイミング例 (外部クロック選択時)



この図は以下の設定条件の場合です。
・UiMRレジスタのCKDIRビット=1 (外部クロック選択)
・UiC0レジスタのCKPOLビット=0 (送受信クロックの立ち上がりで受信データ入力)

fEXT : 外部クロックの周波数

データ受信前のCLKi端子の入力が“H”のときに、以下の条件が揃うようにしてください。
・UiC1レジスタのTEビット=1 (送信許可)
・UiC1レジスタのREビット=1 (受信許可)
・UiTBレジスタへのダミーデータの書き込み

図 17.19 クロック同期型シリアルインタフェースモード時の受信動作例

17.1.1 通信エラー発生時の対処方法

クロック同期型シリアルインタフェースモードで受信または送信時に通信エラーが発生した場合、以下の手順で再設定を行ってください。

A. UiRB レジスタ (i=0~4) の初期化手順

(1) UiC1 レジスタの RE ビットを“0” (受信禁止) にする。
(2) UiMR レジスタの SMD2~SMD0 ビットを“000b” (シリアルインタフェース無効) にする。
(3) UiMR レジスタの SMD2~SMD0 ビットを“001b” (クロック同期型シリアルインタフェースモード) にする。
(4) UiC1 レジスタの RE ビットを“1” (受信許可) にする。

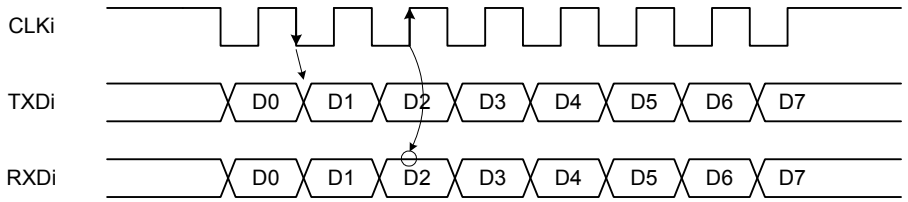
B. UiTB レジスタの初期化手順

(1) UiMR レジスタの SMD2~SMD0 ビットを“000b” (シリアルインタフェース無効) にする。
(2) UiMR レジスタの SMD2~SMD0 ビットを“001b” (クロック同期型シリアルインタフェースモード) にする。
(3) UiC1 レジスタの TE ビットに、その値にかかわらず“1” (送信許可) を書き込む。

17.1.2 CLK 極性選択

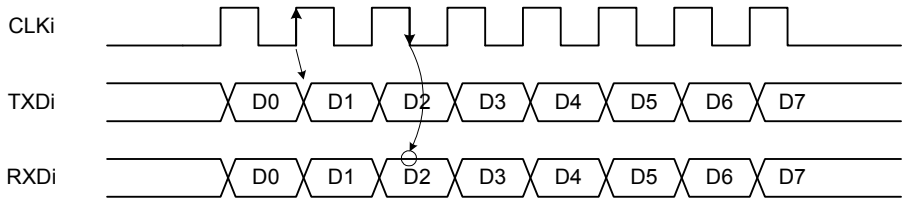
図 17.20 に示すように UiC0 レジスタ (i=0~4) の CKPOL ビットで送受信クロックの極性を選択できます。

(1) UiC0レジスタのCKPOLビット=0 (送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データの入力) のとき



注1. 送受信を行っていないときのCLKi端子のレベルは“H”です。
注2. UiC0レジスタのUFORMビット=0 (LSBファースト)、UiC1レジスタのUiLCHビット=0 (反転なし) の場合です。

(2) UiC0レジスタのCKPOLビット=1 (送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データの入力) のとき



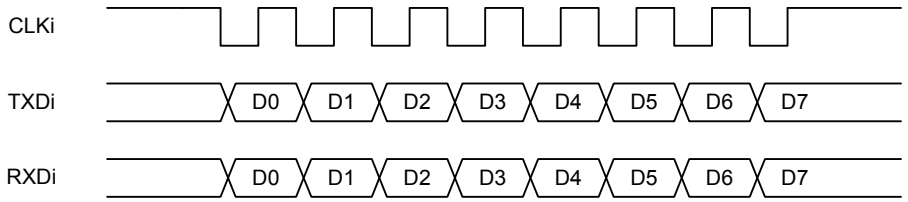
注3. 送受信を行っていないときのCLKi端子のレベルは“L”です。
注4. UiC0レジスタのUFORMビット=0 (LSBファースト)、UiC1レジスタのUiLCHビット=0 (反転なし) の場合です。

図 17.20 送受信クロックの極性(i=0~4)

17.1.3　LSBファースト、MSBファースト選択

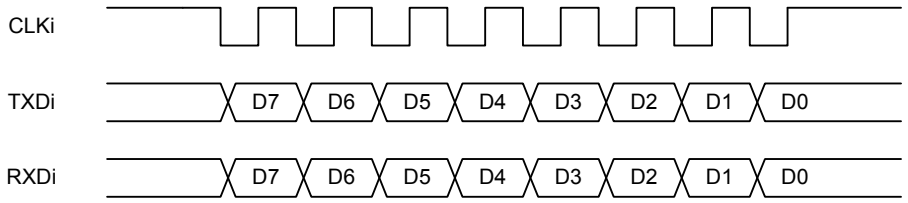
図 17.21に示すように、UiC0レジスタ(i=0~4)のUFORMビットでビットオーダを選択できます。

(1) UiC0レジスタのUFORMビット=0 (LSBファースト) のとき



注1. UiC0レジスタのCKPOLビット=0 (送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)、UiC1レジスタのUiLCHビット=0 (反転なし) の場合です。

(2) UiC0レジスタのUFORMビット=1 (MSBファースト) のとき



注2. UiC0レジスタのCKPOLビット=0 (送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)、UiC1レジスタのUiLCHビット=0 (反転なし) の場合です。

図 17.21　ビットオーダ(i=0~4)

17.1.4　連続受信モード

連続受信モードは、受信バッファレジスタを読み出すと自動的に受信許可になるモードです。このモードを選択すれば、受信を許可するために送信バッファレジスタにダミーのデータを書き込む必要はありません。ただし、受信開始時には、ダミーで受信バッファレジスタを読み出す必要があります。

U0C1~U2C1、U34CONレジスタのUiRRMビット(i=0~4)を“1”(連続受信モード)にすると、UiRBレジスタを読むことでUiC1レジスタのTIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり)になります。UiRRMビットが“1”の場合、UiTBレジスタにダミーデータを書かないでください。

17.1.5　シリアルデータ論理切り替え

UiC1 レジスタ (i=0~2) の UiLCH ビットが “1” (反転あり) の場合、送信時に UiTB レジスタに書いた値の論理を反転して送信します。また、UiRB レジスタを読むと、受信データの論理を反転した値が読めます。図 17.22 にシリアルデータ論理を示します。

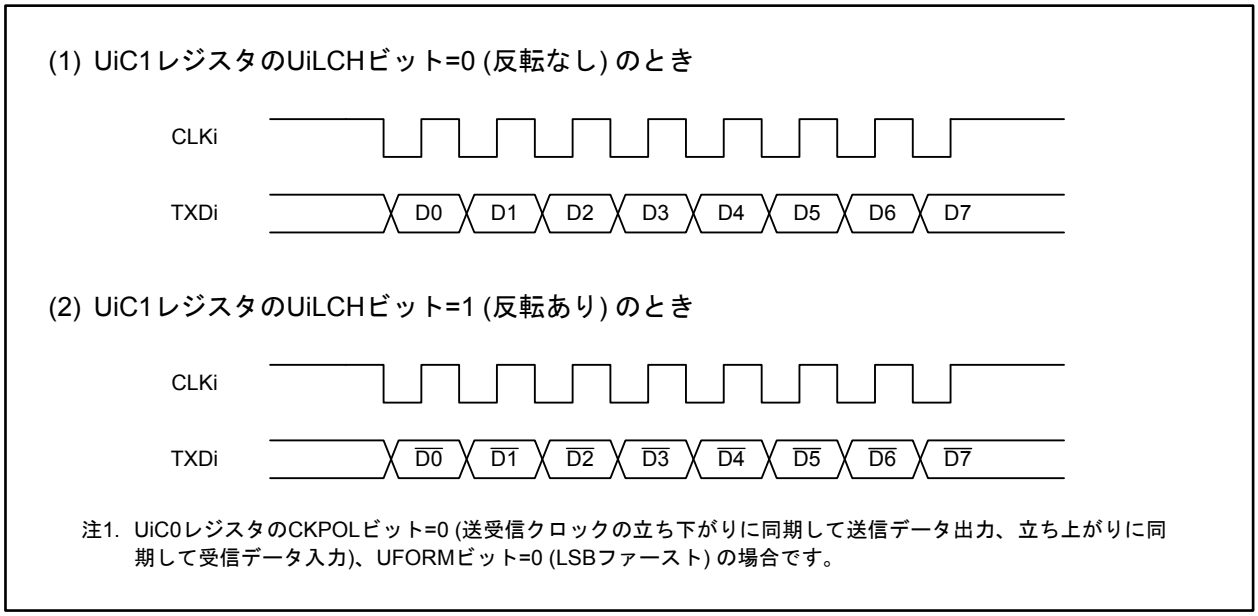


図 17.22　シリアルデータ論理(i=0~2)

17.1.6　CTS/RTS 機能

CTS 機能は、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$ 端子 (i=0~4) を使用して送信制御を行う機能です。$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$ 端子の入力レベルが “L” になると、送信を開始します。送信の最中に入力レベルを “H” にした場合、次のデータから送信を停止します。

クロック同期型シリアルインタフェースモードでは、受信時にも送信回路を動作させる必要がありますので、CTS 機能を有効にした場合、受信を開始する場合にも $\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$ 端子の入力レベルを “L” にする必要があります。

RTS 機能は、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$ 端子を使用して受信回路の状態を示す機能です。受信準備が整ったとき、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$ 端子の出力レベルが “L” になります。CLKi 端子の最初の立ち下がりで出力レベルが “H” になります。

17.2 クロック非同期型シリアルインタフェースモード(UARTモード)

UARTモードは、スタートビットの立ち下がりをトリガとして内部クロックをデータに同期させて送受信を行うモードです。表17.5にUARTモードの仕様を示します。

表17.5 UARTモードの仕様

項目	仕様
データフォーマット	• スタートビット　1ビット • データビット(データキャラクタ)　7ビット、8ビット、9ビット選択可 • パリティビット　奇数、偶数、なし選択可 • ストップビット　1ビット、2ビット選択可
送受信クロック	• UiMRレジスタ(i=0~4)のCKDIRビットが“0”(内部クロック)の場合 $\frac{fx}{16(m+1)}$　fx = f1, f8, f2n　m : UiBRGレジスタ設定値(00h~FFh) • CKDIRビットが“1”(外部クロック)の場合 $\frac{fEXT}{16(m+1)}$　$fEXT$: CLKi端子入力クロック
送信制御、受信制御	CTS機能、RTS機能、CTS/RTS機能無効を選択
送信開始条件	送信開始には以下の条件が必要です • UiC1レジスタのTEビットが“1”(送信許可) • UiC1レジスタのTIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり) • CTS機能選択時、$\overline{\text{CTSi}}$端子に“L”を入力
受信開始条件	受信開始には、以下の条件が必要です • UiC1レジスタのREビットが“1”(受信許可) • スタートビットの検出
割り込み要求発生タイミング	送信割り込みは、U0C1~U2C1、U34CONレジスタのUiIRSビットの設定により、以下の条件のいずれかを選択できます • UiIRSビットが“0”(UiTBレジスタ空): UiTBレジスタからUARTi送信レジスタへデータ転送時(送信開始時) • UiIRSビットが“1”(送信完了): UARTi送信レジスタからデータ送信完了時 受信割り込み • UARTi受信レジスタからUiRBレジスタへデータ転送時(受信完了時)
エラー検出	• オーバランエラー(注1) UiRBレジスタを読む前に次のデータの最終ストップビットの1つ前のビット(2ストップビット選択時は1ストップビット目)を受信すると発生 • フレーミングエラー 設定した個数のストップビットが検出されなかったときに発生 • パリティエラー パリティありの場合に、受信したデータキャラクタとパリティビットに含まれる“1”の個数(奇/偶)が設定した個数(奇/偶)でなかったときに発生 • エラーサムフラグ オーバランエラー、フレーミングエラー、パリティエラーのうちいずれかが発生した場合“1”になる
その他選択項目	• ビットオーダ選択 LSBファーストまたはMSBファーストを選択可能 • シリアルデータ論理切り替え 送受信データの論理を反転する機能。スタートビットとストップビットは反転しません • TXD、RXD入出力極性切り替え TXD端子からの出力レベルとRXD端子への入力レベルを反転する機能。入出力する信号のレベルがすべて反転します

注1. オーバランエラーが発生した場合、UiRBレジスタは不定になります。SiRICレジスタのIRビットは“1”(割り込み要求あり)に変化しません。

表 17.6、表 17.7 に使用するレジスタと設定値を示します。なお、UARTi (i=0~4) の動作モード選択後、送信開始まではTXDi端子は“H”を出力します(Nチャネルオープンドレイン出力選択時はハイインピーダンス)。

図 17.23、図 17.24にUARTモード時の送信動作例を、図 17.25にUARTモード時の受信動作例を示します。

表 17.6　UARTモードで使用するレジスタと設定値(UART0~UART2)

レジスタ	ビット	機能
UiMR	IOPOL	TXD端子、RXD端子の入出力極性を選択してください
	PRY, PRYE	パリティの有無、偶数奇数を選択してください
	STPS	ストップビット長を選択してください
	CKDIR	内部クロック、外部クロックを選択してください
	SMD2~SMD0	キャラクタ長が7ビットの場合、“100b”にしてください
		キャラクタ長が8ビットの場合、“101b”にしてください
		キャラクタ長が9ビットの場合、“110b”にしてください
UiC0	UFORM	キャラクタ長が8ビットの場合、LSBファースト、MSBファーストを選択できます。キャラクタ長が7ビットまたは9ビットの場合は“0”にしてください
	CKPOL	“0”にしてください
	NCH	TXDi端子の出力形式を選択してください
	CRD	CTS機能の許可、または禁止を選択してください
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ
	2	“0”にしてください
	CLK1~CLK0	UiBRGレジスタのカウントソースを選択してください
UiC1	7	“0”にしてください
	UiLCH	データ論理反転を使用する場合、“1”にしてください
	UiRRM	“0”にしてください
	UiIRS	UARTi送信割り込み要因を選択してください
	RI	受信完了フラグ
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください
	TI	送信バッファ空フラグ
	TE	送信を許可する場合、“1”にしてください
UiSMR	7~0	“00h”にしてください
UiSMR2	7~0	“00h”にしてください
UiSMR3	7~0	“00h”にしてください
UiSMR4	7~0	“00h”にしてください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください
UiTB	8~0	送信データを設定してください(注1)
UiRB	OER, FER, PER, SUM	エラーフラグ
	8~0	受信データが読めます(注1)

i=0~2

注1.　使用するビットは以下のとおりです。

キャラクタ長7ビット:　　ビット6~0
キャラクタ長8ビット:　　ビット7~0
キャラクタ長9ビット:　　ビット8~0

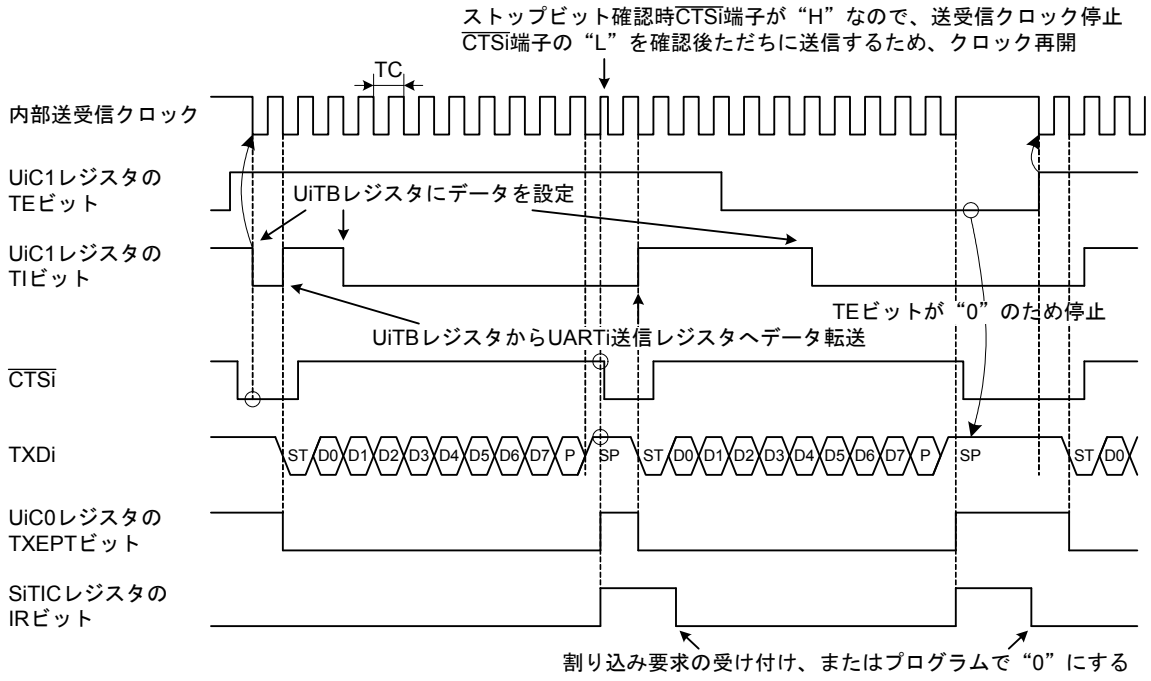
表 17.7　UARTモードで使用するレジスタと設定値(UART3、UART4)

レジスタ	ビット	機能
UiMR	PRY, PRYE	パリティの有無、偶数奇数を選択してください
	STPS	ストップビット長を選択してください
	CKDIR	内部クロック、外部クロックを選択してください
	SMD2~SMD0	キャラクタ長が7ビットの場合、“100b”にしてください
		キャラクタ長が8ビットの場合、“101b”にしてください
		キャラクタ長が9ビットの場合、“110b”にしてください
UiC0	UFORM	キャラクタ長が8ビットの場合、LSBファースト、MSBファーストを選択できます。キャラクタ長が7ビットまたは9ビットの場合は“0”にしてください
	CKPOL	“0”にしてください
	5	“0”にしてください
	CRD	CTS機能の許可、または禁止を選択してください
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ
	2	“0”にしてください
	CLK1~CLK0	UiBRGレジスタのカウントソースを選択してください
UiC1	RI	受信完了フラグ
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください
	TI	送信バッファ空フラグ
	TE	送信を許可する場合、“1”にしてください
U34CON	UiRRM	“0”にしてください
	UiIRS	UARTi送信割り込み要因を選択してください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください
IFS0	IFS04	CLK4、RXD4、$\overline{\text{CTS4}}$の入力端子を選択してください
	IFS02	CLK3、RXD3、$\overline{\text{CTS3}}$の入力端子を選択してください
UiTB	8~0	送信データを設定してください(注1)
UiRB	OER, FER, PER, SUM	エラーフラグ
	8~0	受信データが読めます(注1)

i=3, 4

注1.　使用するビットは以下のとおりです。
　　キャラクタ長7ビット:　　ビット6~0
　　キャラクタ長8ビット:　　ビット7~0
　　キャラクタ長9ビット:　　ビット8~0

キャラクタ長8ビット時の送信タイミング例 (パリティあり、1ストップビット)



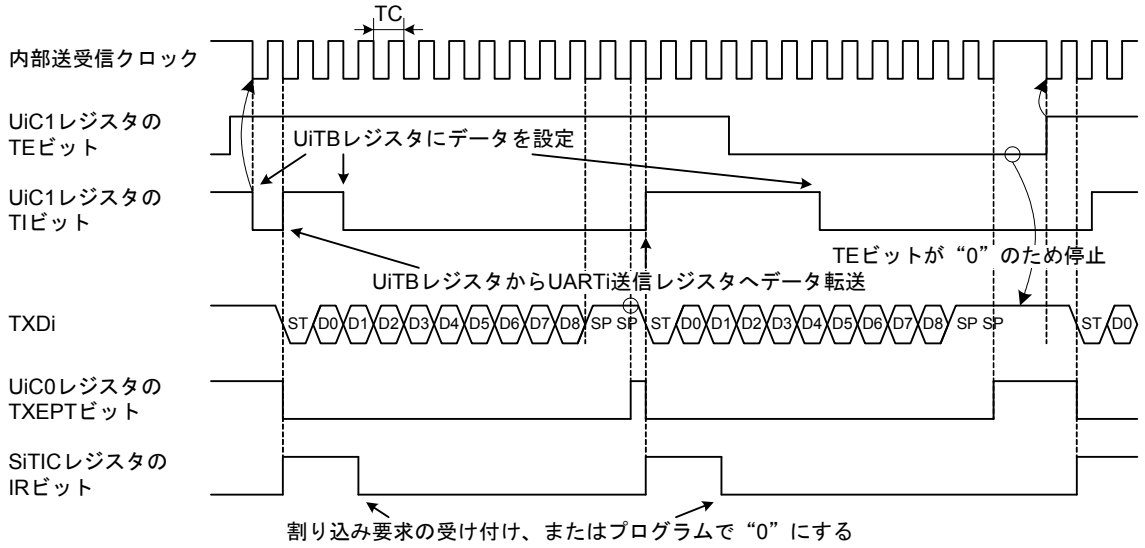
ST:　スタートビット
P:　パリティビット
SP:　ストップビット

上記タイミング図は以下の設定条件の場合です。
- ・UiMRレジスタのPRYEビット=1 (パリティあり)
- ・UiMRレジスタのSTPSビット=0 (1ストップビット)
- ・UiC0レジスタのCRDビット=0 (CTS機能選択)
- ・UiC1レジスタのUiIRSビット=1 (送信完了で割り込み要求発生)

TC = 16(m+1)/fx または 16(m+1)/fEXT
- fx:　UiBRGカウントソースの周波数 (f1, f8, f2n)
- fEXT:　UiBRGカウントソースの周波数 (外部クロック)
- m:　UiBRGレジスタに設定した値

図 17.23　UARTモード時の送信動作例(1) (i=0~4)

キャラクタ長9ビット時の送信タイミング例 (パリティなし、2ストップビット)



ST:　スタートビット
P:　パリティビット
SP:　ストップビット

上記タイミング図は以下の設定条件の場合です。
- ・UiMRレジスタのPRYEビット=0 (パリティなし)
- ・UiMRレジスタのSTPSビット=1 (2ストップビット)
- ・UiC0レジスタのCRDビット=1 (CTS機能禁止)
- ・UiC1レジスタのUiIRSビット=0 (送信バッファ空で割り込み要求発生)

TC = 16(m+1)/fx または 16(m+1)/fEXT
- fx:　UiBRGカウントソースの周波数 (f1, f8, f2n)
- fEXT:　UiBRGカウントソースの周波数 (外部クロック)
- m:　UiBRGレジスタに設定した値

図 17.24　UARTモード時の送信動作例(2) (i=0~4)

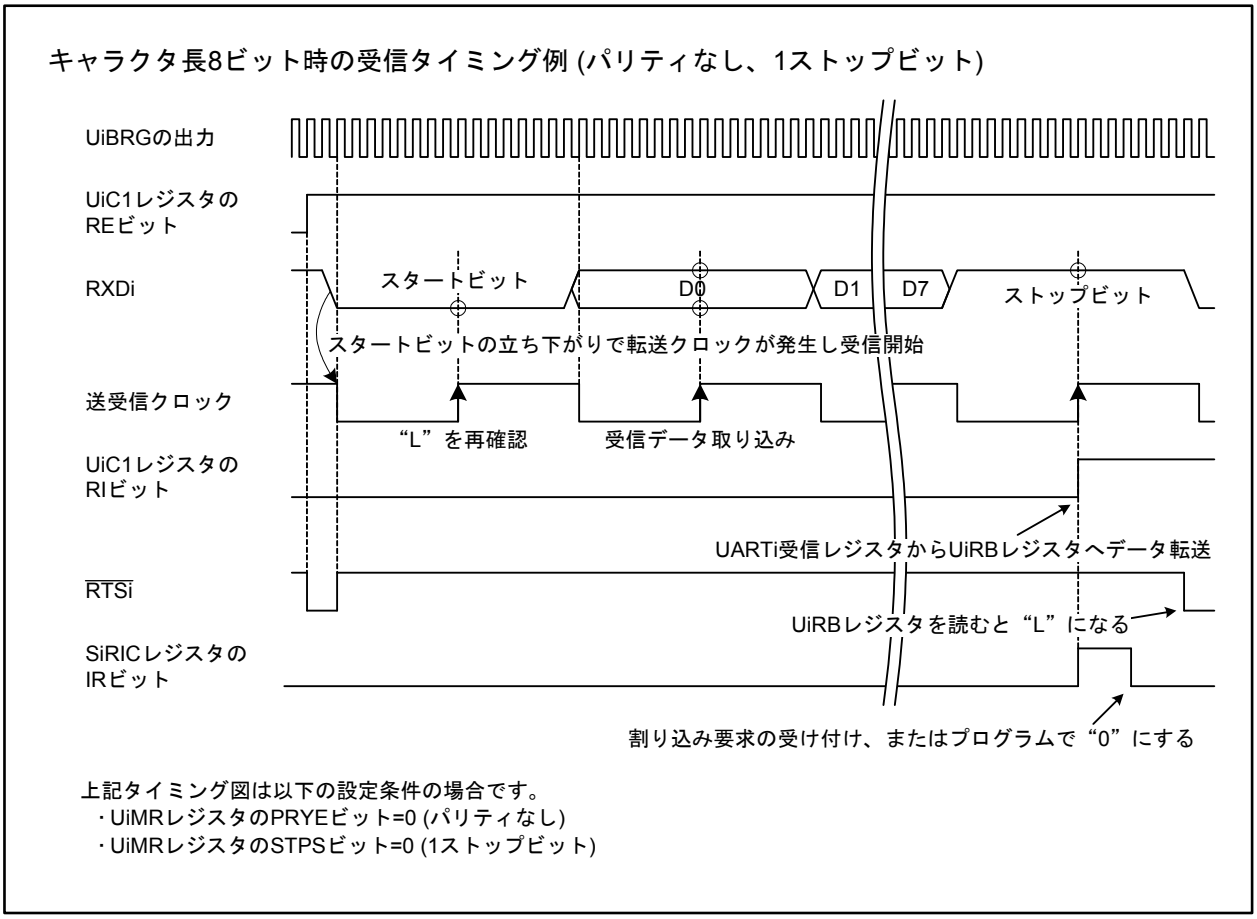


図 17.25 UARTモード時の受信動作例(i=0~4)

17.2.1 ビットレート

UARTモードでは、カウントソースをUiBRGレジスタ(i=0~4)で分周した周波数の16分周がビットレートになります。表17.8にビットレートの設定例を示します。

表 17.8 ビットレートの設定例

ビットレート (bps)	BRGのカウントソース	周辺機能クロック: 30MHz		周辺機能クロック: 32MHz	
		BRGの設定値: n	実時間 (bps)	BRGの設定値: n	実時間 (bps)
1200	f8	194 (C2h)	1202	207 (CFh)	1202
2400	f8	97 (61h)	2392	103 (67h)	2404
4800	f8	48 (30h)	4783	51 (33h)	4808
9600	f1	194 (C2h)	9615	207 (CFh)	9615
14400	f1	129 (81h)	14423	138 (8Ah)	14388
19200	f1	97 (61h)	19133	103 (67h)	19231
28800	f1	64 (40h)	28846	68 (44h)	28986
31250	f1	59 (3Bh)	31250	63 (3Fh)	31250
38400	f1	48 (30h)	38265	51 (33h)	38462
51200	f1	36 (24h)	50676	38 (26h)	51282

17.2.2　通信エラー発生時の対処方法

UARTモードで、受信または送信時に通信エラーが発生した場合、以下の手順で再設定を行ってください。

A. UiRBレジスタ(i=0~4)の初期化手順

(1) UiC1レジスタのREビットを“0”(受信禁止)にする。
(2) UiC1レジスタのREビットを“1”(受信許可)にする。

B. UiTBレジスタの初期化手順

(1) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効)にする。
(2) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを再設定(“001b”, “101b”, “110b”)する。
(3) UiC1レジスタのTEビットに、その値にかかわらず“1”(送信許可)を書き込む。

17.2.3　LSBファースト、MSBファースト選択

図17.26に示すように、UiC0レジスタ(i=0~4)のUFORMビットでビットオーダを選択できます。この機能はキャラクタ長8ビットのときに使用できます。

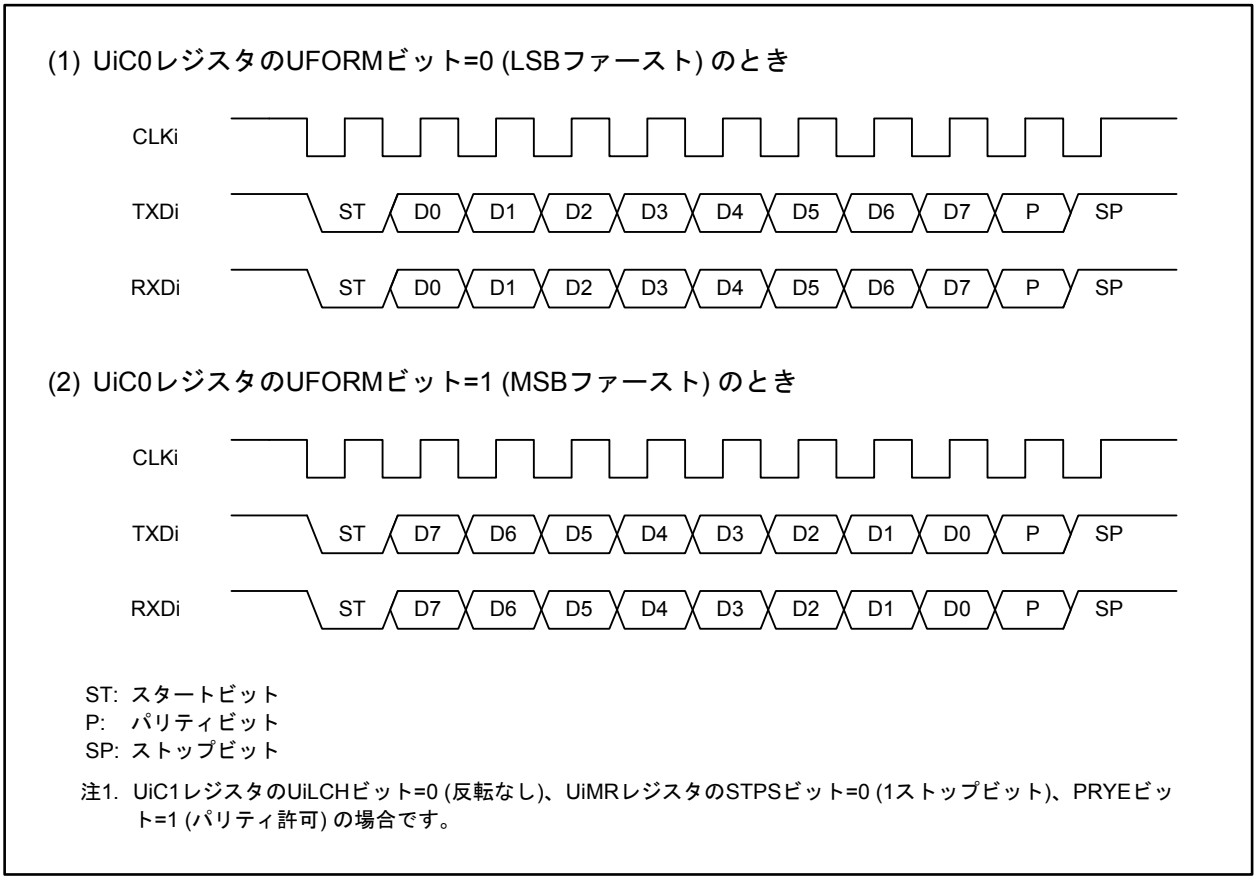


図17.26　ビットオーダ(i=0~4)

17.2.4 シリアルデータ論理切り替え

UiC1レジスタ(i=0~2)のUiLCHビットを“1”(反転あり)にすると、UiTBレジスタへ書くときと、UiRBレジスタから読むときにデータの論理を反転させます。パリティビットは反転しません。

図17.27にシリアルデータ論理を示します。

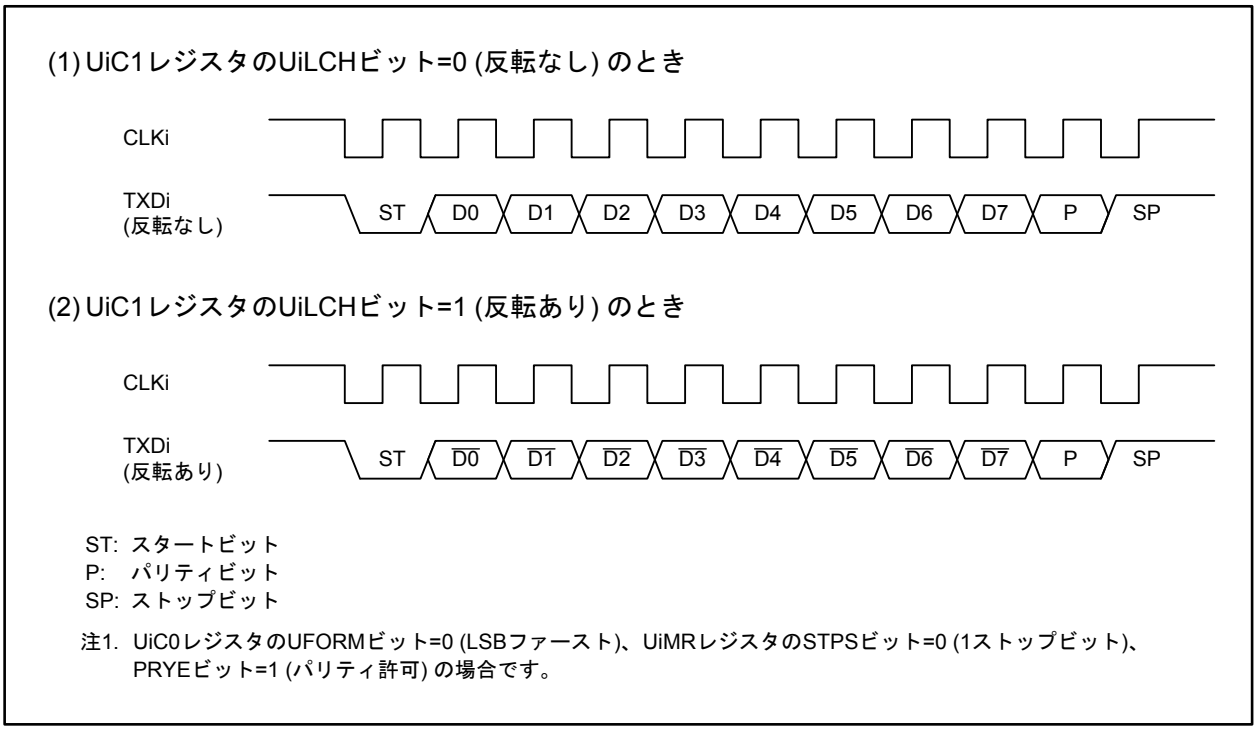


図17.27 シリアルデータ論理(i=0~2)

17.2.5　TXD、RXD入出力極性切り替え

TXD端子からの出力レベルとRXD端子への入力レベルを反転する機能です。UiMRレジスタ(i=0~2)のIOPOLビットを“1”(反転あり)にすると、入出力するデータのレベルがすべて(スタートビット、ストップビット、パリティビットを含む)反転します。図17.28にTXD、RXD入出力極性切り替えを示します。

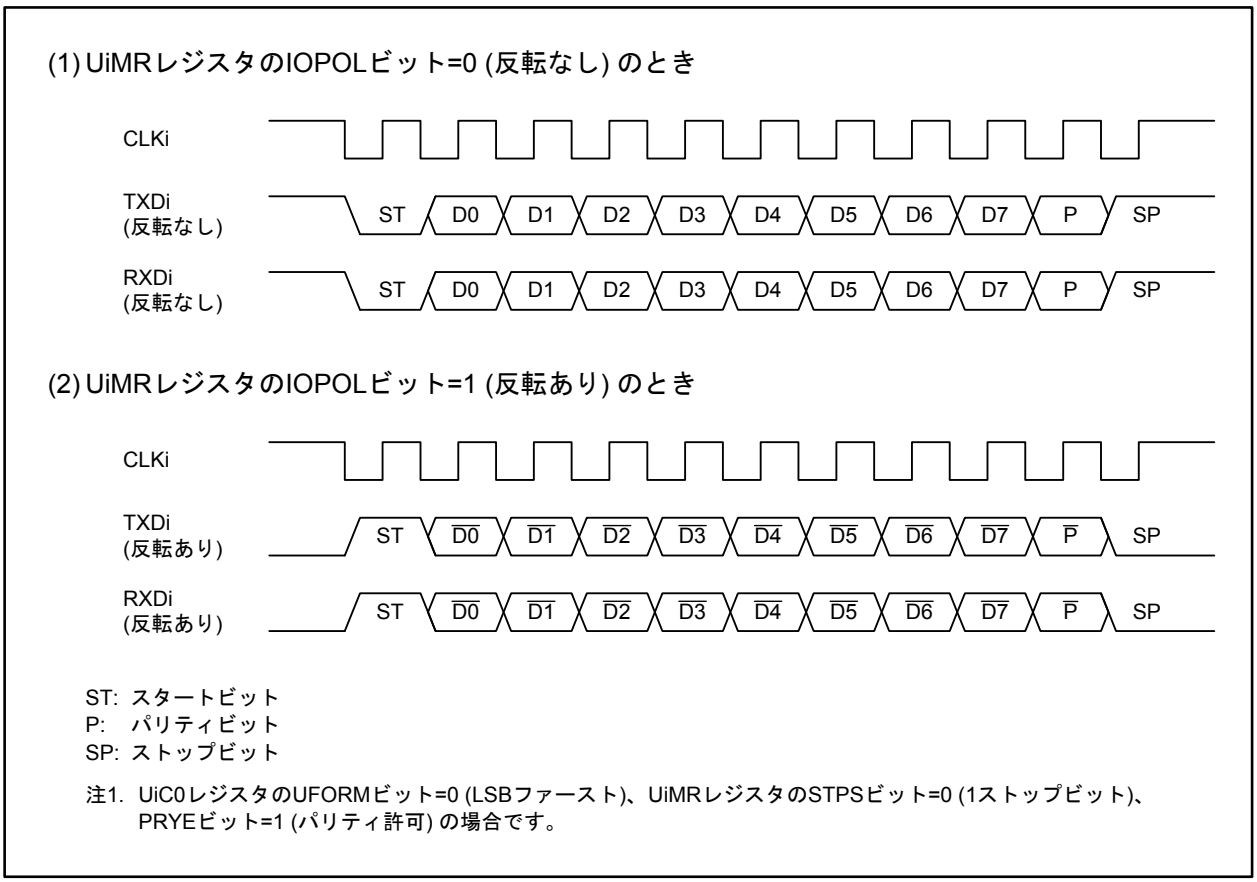


図17.28　TXD、RXD入出力極性切り替え(i=0~2)

17.2.6　CTS/RTS機能

CTS機能は、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$端子(i=0~4)を使用して送信制御を行う機能です。$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$端子の入力レベルが“L”になると、送信を開始します。送信の最中に入力レベルを“H”にした場合、次のデータから送信を停止します。

RTS機能は、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$端子を使用して受信回路の状態を示す機能です。受信準備が整ったとき、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$端子の出力レベルが“L”になります。CLKi端子の最初の立ち下がりで出力レベルが“H”になります。

17.3 特殊モード1 (I²Cモード)

I²Cモードは、簡易形I²Cインタフェースに対応したモードです。表 17.9にI²Cモードの仕様を示します。

表 17.9 I²Cモードの仕様

項目	仕様
データフォーマット	キャラクタ長　8ビット
送受信クロック	マスタ時 • UiMRレジスタ (i=0~2)のCKDIRビットが“0” (内部クロック): $\frac{fx}{2(m+1)}$　fx = f1, f8, f2n　m : UiBRGレジスタ設定値(00h~FFh) スレーブ時 • CKDIRビットが“1” (外部クロック): SCLi端子からの入力
送信開始条件	送信開始には、以下の条件が必要です(注1) • UiC1レジスタのTEビットが“1” (送信許可) • UiC1レジスタのTIビットが“0” (UiTBレジスタにデータあり)
受信開始条件	受信開始には、以下の条件が必要です(注1) • UiC1レジスタのREビットが“1” (受信許可) • TEビットが“1” (送信許可) • TIビットが“0” (UiTBレジスタにデータあり)
割り込み要求発生タイミング	スタートコンディション検出、ストップコンディション検出、 ACK (Acknowledge)検出、NACK (Not-Acknowledge)検出
エラー検出	オーバランエラー (注2) UiRBレジスタを読む前に次のデータ受信を開始し、次のデータの8ビット目を受信すると発生
その他選択項目	• アービトレーションロスト UiRBレジスタのABTビットの更新タイミングを選択可能 • SDAiデジタル遅延 デジタル遅延なし、またはUiBRGカウントソースの2~8サイクルの遅延を選択可能 • クロック位相設定 クロック遅れあり、なしを選択可能

注1. 外部クロックを選択している場合、外部クロックが“H”の状態で条件を満たしてください。
注2. オーバランエラーが発生した場合、UiRBレジスタは不定になります。またSiRICレジスタのIRビットは変化しません。

表 17.10にI²Cモードで使用するレジスタと設定値を、表 17.11にI²Cモード時の各機能を、図 17.29にI²Cモード時のブロック図を、図 17.30にUiRBレジスタ (i=0~2)への転送、割り込みのタイミングを示します。

表 17.11に示すように、UiMRレジスタ (i=0~2)のSMD2~SMD0ビットを“010b”に、UiSMRレジスタのIICMビットを“1”にするとI²Cモードになります。SDAi送信出力には遅延回路が付加されますので、SCLiが“L”になり安定した後、SDAi出力が変化します。

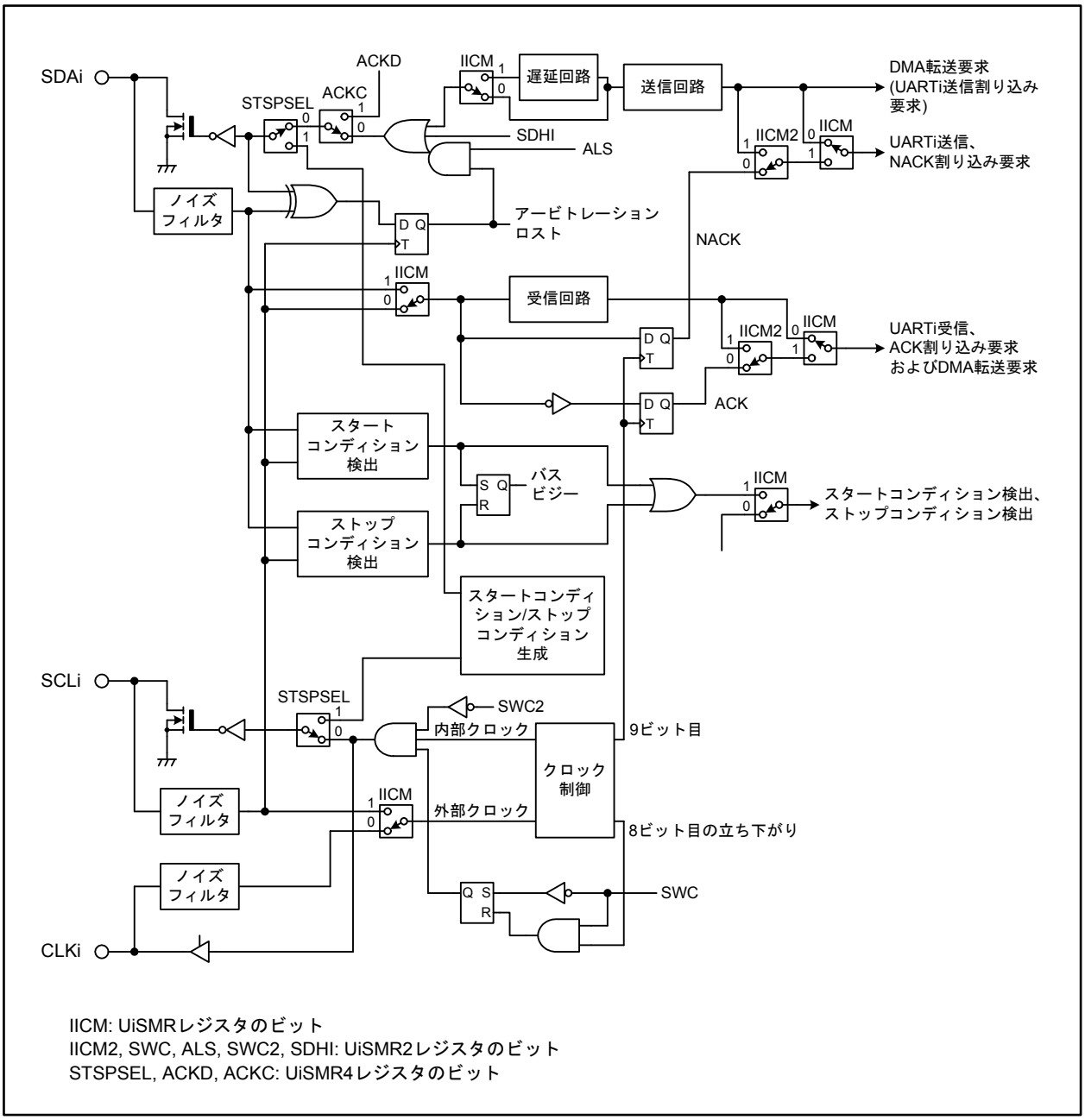


図 17.29 I²Cモードのブロック図(i=0~2)

表 17.10 I²Cモードで使用するレジスタと設定値(i=0~2)

レジスタ	ビット	機能	
		マスタ時	スレーブ時
UiMR	IOPOL	“0”にしてください	
	CKDIR	“0”にしてください	“1”にしてください
	SMD2~SMD0	“010b”にしてください	
UiC0	7~4	“1011b”にしてください	
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ	
	2	“0”にしてください	
	CLK1~CLK0	UiBRGのカウントソースを選択してください	無効
UiC1	7~5	“000b”にしてください	
	UiIRS	“1”にしてください	
	RI	受信完了フラグ	
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください	
	TI	送信バッファ空フラグ	
	TE	送受信を許可する場合、“1”にしてください	
UiSMR	7~3	“00000b”にしてください	
	BBS	バスビジーフラグ	
	ABC	アービトレーションロスト検出タイミングを選択してください	無効
	IICM	“1”にしてください	
UiSMR2	7	“0”にしてください	
	SDHI	SDA出力を禁止する場合、“1”にしてください	
	SWC2	SCLの出力を強制的に“L”にする場合、“1”にしてください	
	STC	“0”にしてください	スタートコンディション検出でUARTiを初期化する場合、“1”にしてください
	ALS	アービトレーションロスト検出時にSDAiの出力を停止する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
	SWC	8ビット受信後にSCLiを“L”出力固定にする場合、“1”にしてください	
	CSC	クロック同期を実施する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
	IICM2	表 17.11参照	
UiSMR3	DL2~DL0	SDAiのデジタル遅延値を設定してください	
	4~2	“000b”にしてください	
	CKPH	表 17.11参照	
	SSE	“0”にしてください	
UiSMR4	SWC9	“0”にしてください	9ビット受信後にSCLiを“L”出力固定にする場合、“1”にしてください
	SCLHI	ストップコンディション検出時にSCL出力停止を許可する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
	ACKC	ACKデータを出力する場合、“1”にしてください	
	ACKD	ACK、NACKを選択してください	
	STSPSEL	各コンディション出力時に“1”にしてください	“0”にしてください
	STPREQ	ストップコンディションを生成する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
	RSTAREQ	リスタートコンディションを生成する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
	STAREQ	スタートコンディションを生成する場合、“1”にしてください	“0”にしてください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください	無効
UiTB	8	送信時は“1”を、受信時はACKビットの値を設定してください	
	7~0	送信時は送信データを、受信時は“FFh”を設定してください	
UiRB	OER	オーバランエラーフラグ	
	ABT	アービトレーションロスト検出フラグ	無効
	8	受信割り込み発生直後はD0が、送信割り込み発生後はACK、NACKが入ります	
	7~0	受信割り込み発生直後はD7~D1が、送信割り込み発生後はD7~D0が読めます	

表 17.11 I²Cモード時の各機能(i=0~2)

機能	クロック同期型シリアルインタフェースモード (SMD2~SMD0=001b, IICM=0)	I²Cモード(SMD2~SMD0=010b, IICM=1)			
		IICM2=0 (ACK/NACK割り込み)		IICM2=1 (送受信割り込み)	
		CKPH=0 (クロック遅れなし)	CKPH=1 (クロック遅れあり)	CKPH=0 (クロック遅れなし)	CKPH=1 (クロック遅れあり)
割り込み番号39~41の要因(注1)(図 17.30参照)	—	スタートコンディション検出、ストップコンディション検出(表 17.12参照)			
割り込み番号17、19、33の要因 (注1) (図 17.30参照)	UARTi送信 送信開始、または送信完了(UiIRSで選択)	NACK検出 9ビット目のSCLiの立ち上がり		UARTi送信 9ビット目のSCLiの立ち上がり	UARTi送信 9ビット目のSCLiの立ち下がり
割り込み番号18、20、34の要因 (注1) (図 17.30参照)	UARTi受信 8ビット目の受信時 CKPOL=0: 立ち上がり CKPOL=1: 立ち下がり	ACK検出 9ビット目のSCLiの立ち上がり		UARTi受信 8ビット目のSCLiの立ち下がり	
UART受信レジスタからUiRBレジスタへのデータ転送タイミング	CKPOL=0: 立ち上がり CKPOL=1: 立ち下がり	9ビット目のSCLiの立ち上がり		8ビット目のSCLiの立ち下がり	8ビット目のSCLiの立ち下がりと、9ビット目の立ち上がり
UARTi送信出力遅延	遅延なし	遅延あり			
P6_3, P6_7, P7_0端子の機能	TXDi出力	SDAi入出力			
P6_2, P6_6, P7_1端子の機能	RXDi入力	SCLi入出力			
P6_1, P6_5, P7_2端子の機能	CLKi入力または出力	— (I²Cモードでは使用しない)			
RXDi、SCLi端子レベルの読み込み	対応するポート方向ビットの内容に関係なく可能				
SDAi出力端子の初期値	—	H (機能選択レジスタでポートを選択した場合はポートレジスタの値)			
SCLiの初期値、終了値	—	H	L	H	L
DMA要因(図 17.30参照)	UARTi受信	ACK検出		UARTi受信 8ビット目のSCLiの立ち下がり	
受信データ格納	1~8ビット目をUiRBレジスタのビット0~7に格納	1~8ビット目をUiRBレジスタのビット7~0に格納		1~7ビット目をUiRBレジスタのビット6~0に、8ビット目をUiRBレジスタのビット8に格納	1回目(注2)は左に同じ。 2回目(注3)は1~8ビット目 をUiRBレジスタのビット7~0に、9ビット目をUiRBレジスタのビット8に格納
受信データ読み出し	UiRBレジスタの状態をそのまま読み出す			UiRBレジスタのビット6~0はビット7~1として、ビット8はビット0として読み出す	1回目(注2)は左に同じ。 2回目(注3)はUiRBレジスタの状態をそのまま読み出す

注1.　要因を切り替える場合、以下の手順で行ってください。
(1) 対応する割り込み番号の割り込みを禁止する
(2) 要因を切り替える
(3) 対応する割り込み番号のIRビットを“0” (割り込みなし)にする
(4) 対応する割り込み番号のILVL2~ILVL0を設定する

注2.　8ビット目のSCLi立ち下がり時に1回目のUiRBレジスタへの転送が行われます。

注3.　9ビット目のSCLi立ち上がり時に2回目のUiRBレジスタへの転送が行われます。

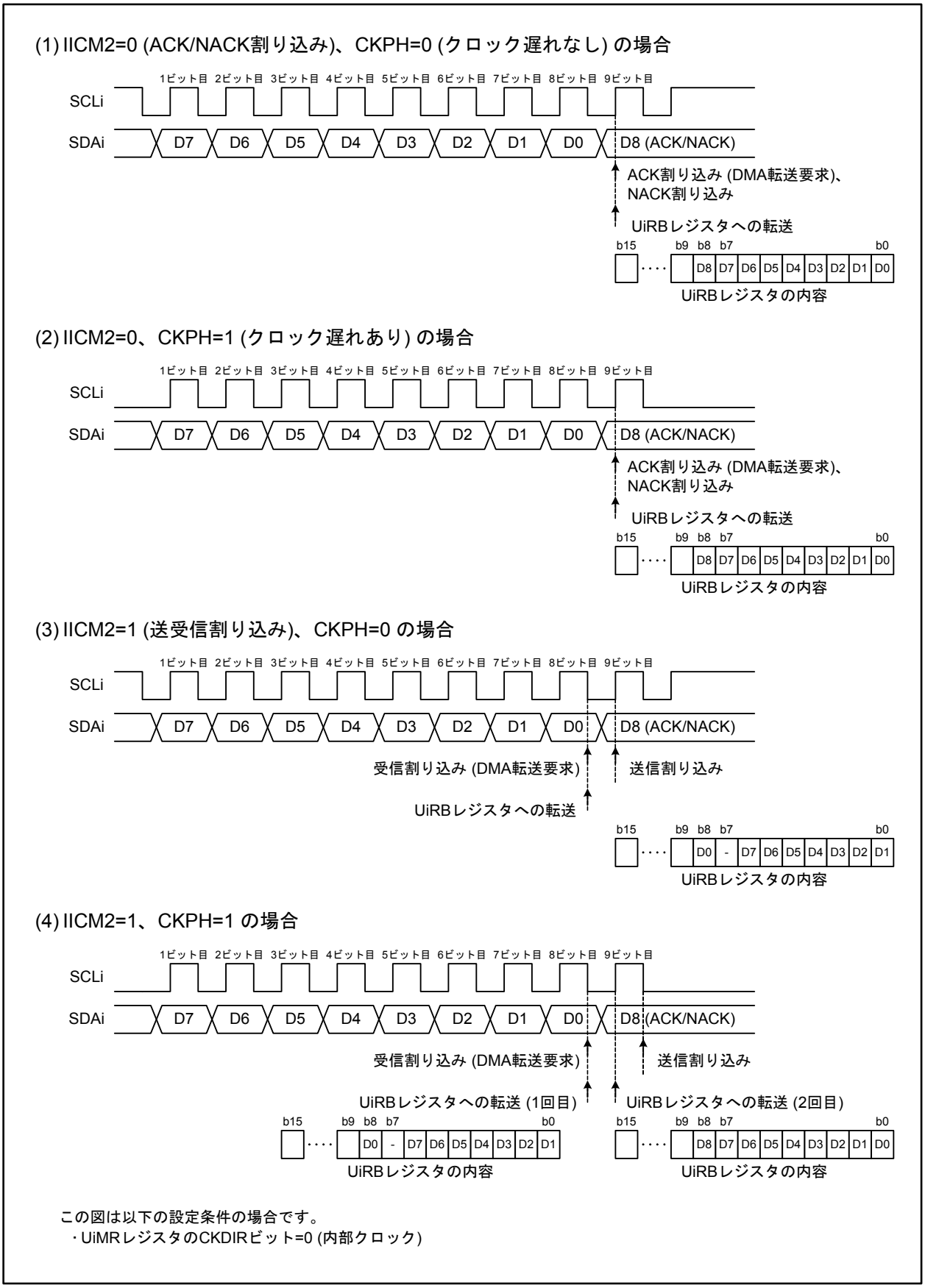


図 17.30 UiRBレジスタへの転送、割り込みのタイミング (i=0~2)

17.3.1　スタートコンディション、ストップコンディションの検出

スタートコンディション検出回路によりスタートコンディションを、ストップコンディション検出回路によりストップコンディションを検出します。

スタートコンディション検出割り込み要求は、SCLi端子(i=0~2)が“H”の状態でSDAi端子が“H”から“L”に変化すると発生します。ストップコンディション検出割り込み要求は、SCLi端子が“H”の状態でSDAi端子が“L”から“H”に変化すると発生します。

スタートコンディション検出割り込みとストップコンディション検出割り込みは、割り込み制御レジスタ、ベクタを共有していますので、どちらの要求による割り込みかはUiSMRレジスタのBBSビットで判定してください。

スタートコンディション、ストップコンディションを検出するには、図17.31に示すとおりセットアップ時間、ホールド時間ともに周辺機能クロック(f1)の6サイクル以上必要です。Fast-Modeの仕様を満たすためには、f1は10MHz以上である必要があります。

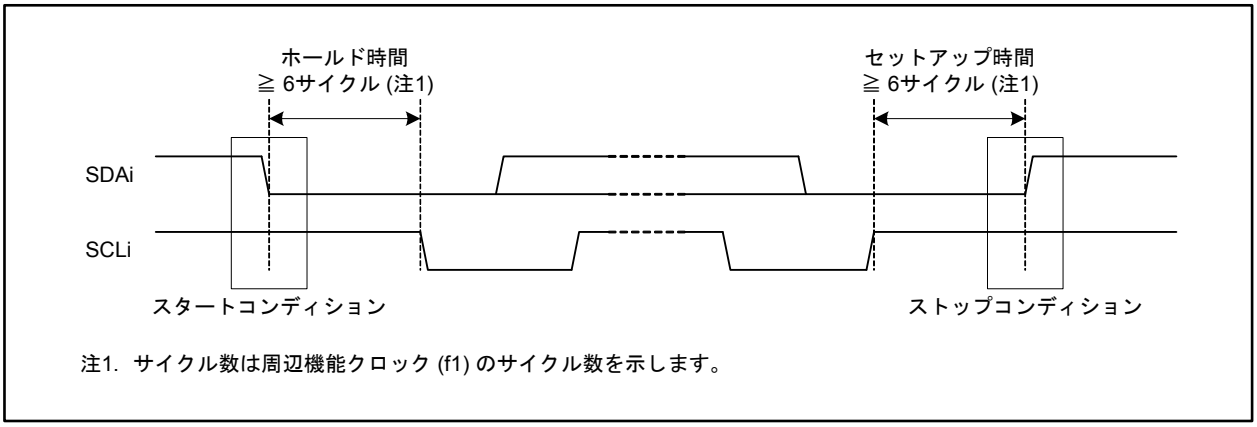


図 17.31　スタートコンディション、ストップコンディションの検出タイミング(i=0~2)

17.3.2　スタートコンディション、ストップコンディションの生成

UiSMR4レジスタ(i=0~2)のSTAREQビット、RSTAREQビット、STPREQビットを使用して、それぞれスタートコンディション、リスタートコンディション、ストップコンディションを生成できます。

STAREQビットを“1”(スタート)にした後、UiSMR4レジスタのSTSPSELビットを“1”(スタートコンディション/ストップコンディション生成回路選択)にするとスタートコンディションを出力します。同様に、RSTAREQビットを“1”(スタート)にした後、STSPSELビットを“1”にするとリスタートコンディション、STPREQビットを“1”(スタート)にした後、STSPSELビットを“1”にするとストップコンディションを出力します。

表17.12と図17.32にSTSPSELビットの機能を示します。

表 17.12　STSPSELビットの機能

項目	STSPSEL=0の場合	STSPSEL=1の場合
スタートコンディション、ストップコンディションの生成	ソフトウェアでポートを制御して実現(ハードウェアによる自動発生はしない)	STAREQビット、RSTAREQビット、STPREQビットに従って、スタートコンディション、ストップコンディションを出力
スタートコンディション、ストップコンディション割り込み要求発生タイミング	スタートコンディション、ストップコンディション検出時	スタートコンディション、ストップコンディション生成終了時

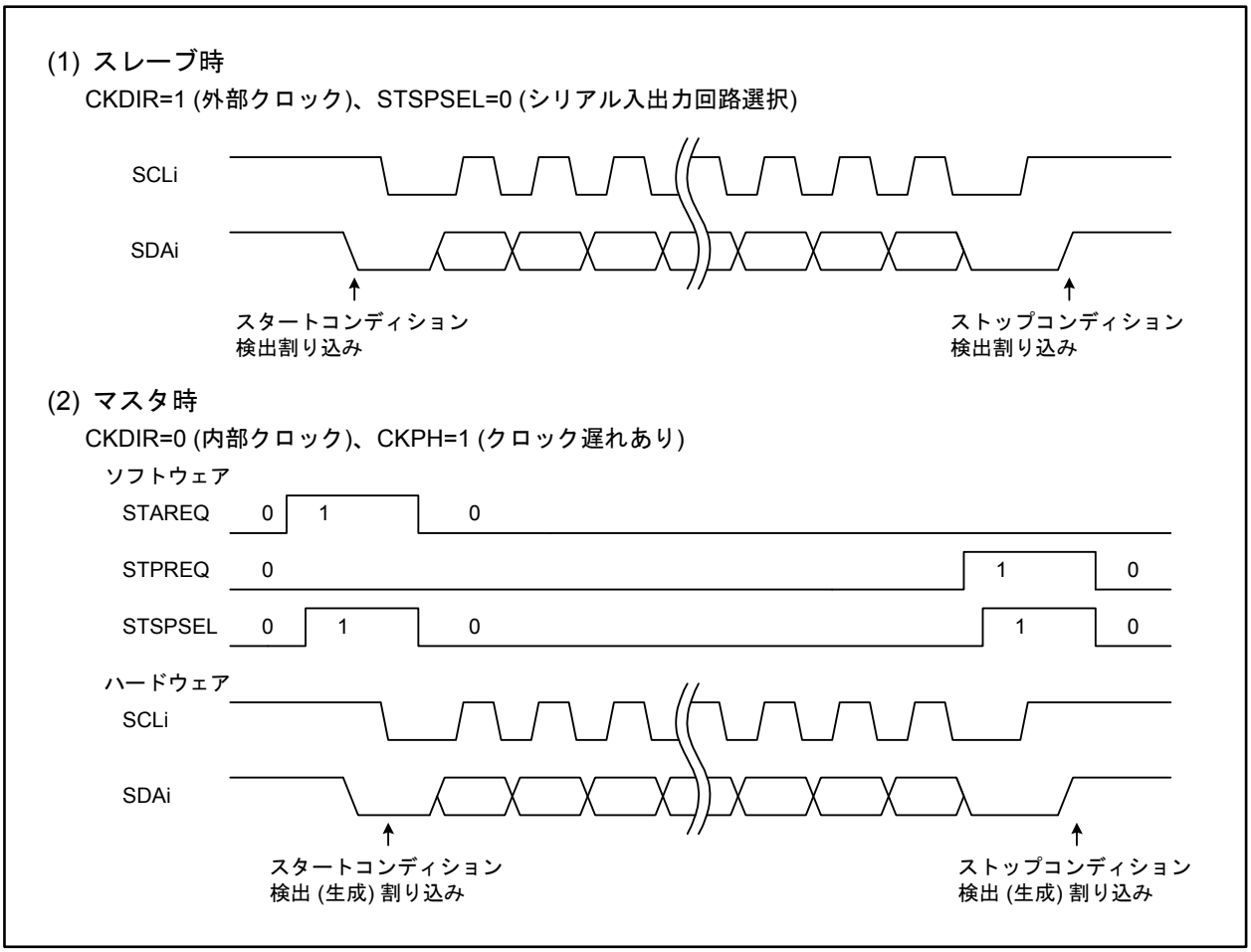


図 17.32 STSPSELビットの機能(i=0~2)

17.3.3 アービトレーション

SCLiの立ち上がり時に、自身の送信データとSDAi端子からの入力データが一致しているかを判定し、一致していなければ出力を停止することによりアービトレーションを行います。

UiSMRレジスタ(i=0~2)のABCビットでUiRBレジスタのABTビットの更新タイミングを選択します。ABCビットが“0”(ビットごとに更新)の場合、判定時に不一致を検出すると同時にABTビットが“1”に、検出しないと“0”になります。ABCビットが“1”(バイトごとに更新)の場合、判定時に一度でも不一致が検出された場合、8ビット目のSCLiの立ち下がりでABTビットが“1”(検出)になります。なお、バイトごとに更新する場合は、1バイト目のACK検出完了後、ABTビットを“0”(未検出)にしてから、次の1バイトの転送を開始してください。

UiSMR2レジスタのALSビットを“1”(SDA出力を停止する)にすると、アービトレーションロストが発生しABTビットが“1”になると同時にSDAi端子がハイインピーダンスになります。

17.3.4 SCL制御とクロック同期化

I²Cモードでの送受信は、図17.30に示すような送受信クロックで行います。しかし、送受信クロックが速くなってくると、ACKの生成や送信データの準備に必要な時間を確保することが難しくなってきます。I²Cモードではこの時間を確保するためのウェイト挿入の機能、および他デバイスが挿入したウェイトに対しクロックを同期させる機能をサポートしています。

UiSMR2レジスタ(i=0~2)のSWCビットは、アクノリッジ生成のためのウェイトを挿入するときに使用します。SWCビットが“1”(8ビット受信後、SCLi端子を“L”に固定)の場合、8ビット目のSCLiの立ち下がりでSCLi端子が“L”固定になります。SWCビットを“0”(ウェイトなし/ウェイト解除)にすると、“L”固定を解除できます。

UiSMR2レジスタのSWC2ビットを“1”(SCLi端子を“L”に固定)にすると、送受信中でもSCLi端子を“L”固定にできます。SWC2ビットを“0”(SCLi端子に送受信クロックを出力)にすると、SCLi端子からの“L”固定は解除され、送受信クロックが出力されます。

UiSMR4レジスタのSWC9ビットは、受信したアクノリッジビットを判定するためのウェイトを挿入するときに使用します。UiSMR3レジスタのCKPHビットが“1”(クロック遅れあり)のとき、SWC9ビットを“1”(9ビット受信後、SCLi端子を“L”に固定)にすると、9ビット目のSCLiの立ち下がりでSCLi端子が“L”固定になります。SWC9ビットを“0”(ウェイトなし/ウェイト解除)にすると“L”固定を解除できます。

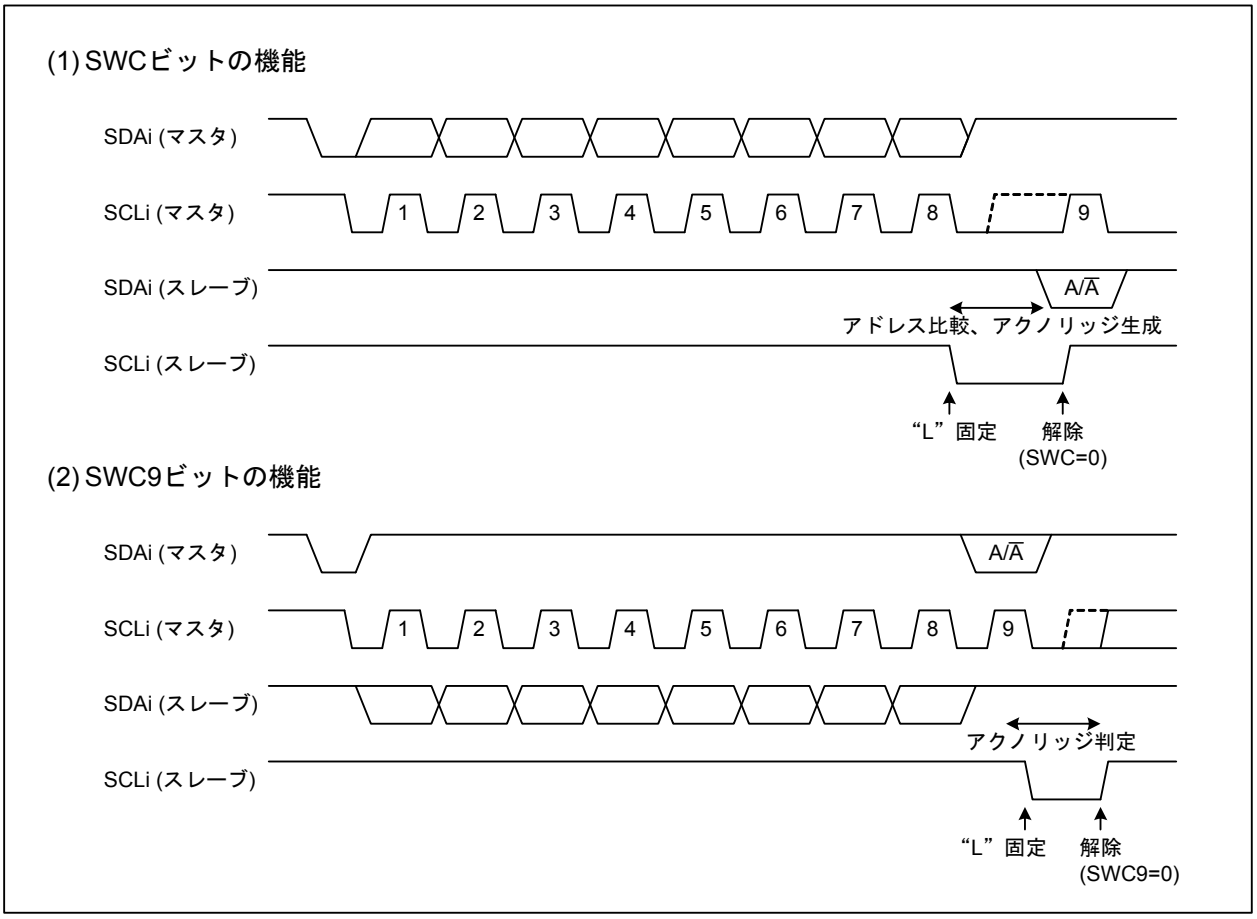


図 17.33 SWCビット、SWC9ビットによるウェイトの挿入(i=0~2)

UiSMR2レジスタのCSCビットは、他のデバイスがウェイトを挿入するなどしたために、自身が出力したクロックとSCLi端子に入力されたクロックが異なったとき、内部で生成するクロックをSCLi端子から入力されるクロックに同期させるためのビットです。CSCビットが“1”(クロック同期を実施する)の場合、内部生成クロックが“H”のときにSCLi端子が“H”から“L”に変化すると、内部生成クロックを“L”にし、UiBRGレジスタの値をリロードしてL区間のカウントを開始します。また、SCLi端子が“L”のとき、内部生成クロックが“L”から“H”に変化するとカウントを停止し、SCLi端子が“H”になるとカウントを再開します。したがってUARTiの送受信クロックは、内部生成クロックとSCLi端子の信号の論理積になります。送受信クロックは、内部生成クロックの1クロック前から9クロック目まで同期化されます。CSCビットはUiMRレジスタのCKDIRビットが“0”(内部クロック)のときのみ“1”にできます。

UiSMR4レジスタのSCLHIビットは、自身がマスタとして送受信を行っているときに他のマスタがストップコンディションを生成した場合に、SCLi端子を開放するために使用します。SCLHIビットを“1”(出力停止)にすると、ストップコンディション検出時にSCLi端子を開放し(ハイインピーダンス)、クロック出力を停止します。

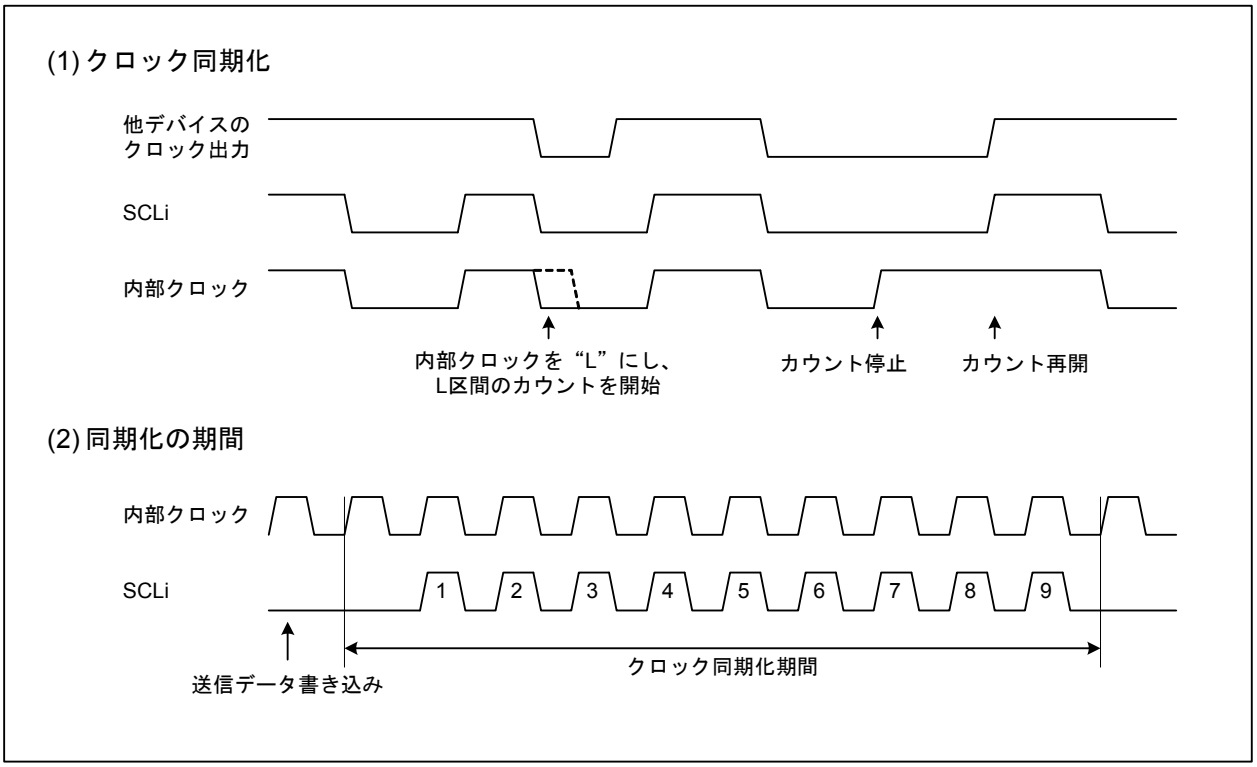


図 17.34 クロック同期化(i=0~2)

17.3.5 SDA出力

UiTBレジスタ(i=0~2)のビット8~0 (D8~D0)に書いた値を、D7から順にD0まで、最後にD8の順で出力します。D8はアクノリッジ信号のためのビットですから、送信時はD8には“1”を設定してバスを開放する必要があります。また、受信時はD8にACKもしくはNACKを設定します。

UiSMR3レジスタのDL2~DL0ビットにより、SCLiの立ち下りエッジに対するSDAiの遅延量を設定できます。遅延量はUiBRGカウントソースを基準に、0サイクル(なし)または2~8サイクルの範囲で設定できます。

UiSMR2レジスタのSDHIビットを“1”(出力停止)にすることで、いつでもSDAi端子をハイインピーダンスにできます。I²Cモード設定後に、ポートの機能をSDAiに割り当て、端子を出力に設定すると、SDAi端子からは“L”が出力されます。このときSDHIビットが“1”であれば、SDAi端子はハイインピーダンスになります。

なお、SCLi端子が“H”のときにSDHIビットを書き換えた場合、スタートコンディションやストップコンディションを生成することになります。また、SCLiの立ち上がり直前にSDHIビットを書き換えた場合、アービトレーションロストと誤検出されることがあります。SCLi端子が“L”の時にSDAi端子が変化するように、SDHIビットを書き換えてください。

17.3.6 SDA入力

UiSMR2レジスタ(i=0~2)のIICM2ビットが“0”(ACK/NACK割り込みを使用)の場合、受信したデータの1~8ビット目(D7~D0)をUiRBレジスタのビット7~0に、9ビット目(ACK/NACK)をUiRBレジスタのビット8に格納します。

IICM2ビットが“1”(送受信割り込みを使用)の場合、受信したデータの1~7ビット目(D7~D1)をUiRBレジスタのビット6~0に、8ビット目(D0)をUiRBレジスタのビット8に格納します。IICM2ビットが“1”の場合でも、UiSMR3レジスタのCKPHビットが“1”(クロック遅れあり)であれば、9ビット目のSCLiの立ち上がり後にUiRBレジスタを読み出すことにより、IICM2ビットが“0”の場合と同様のデータが読み出せます。

17.3.7 アクノリッジ

データを受信することが確定している場合、UiTBレジスタに00FFhをダミーデータとして設定することで、8ビット受信後にACKが出力されます。

また、UiSMR4レジスタ(i=0~2)のSTSPSELビットが“0”(シリアル入出力回路選択)で、UiSMR4レジスタのACKCビットが“1”(ACKデータ出力)の場合、UiSMR4レジスタのACKDビットの値がSDAi端子から出力されます。

IICM2ビットが“0”の場合、9ビット目のSCLiの立ち上がり時にSDAi端子が“H”であればNACK割り込み要求が、“L”であればACK割り込み要求が発生します。

DMA起動要因に「UARTi受信またはACK割り込み要求」を選択すると、ACK検出によってDMA転送を起動できます。

17.3.8 送受信初期化

UiMRレジスタ(i=0~2)のCKDIRビットが“1”(外部クロック)で、UiSMR2レジスタのSTCビットが“1”(回路を初期化する)の場合、スタートコンディションを検出すると以下のように動作します。

- 送信レジスタが初期化され、UiTBレジスタの内容が送信レジスタに転送されます。次のSCLiの立ち下がりエッジを1ビット目の送信クロックとして送信を開始します。ただし、SCLiの立ち下りからデータが出力されるまでの間、SDAi端子からは初期化前の送信レジスタの値が出力されます。
- 受信レジスタは初期化され、次のSCLiの立ち下がりエッジを1ビット目の受信クロックとして受信を開始します。
- UiSMR2レジスタのSWCビットが“1”(8ビット受信後、SCL端子を“L”に固定)になります。

なお、この機能を使用しUARTiの送受信を開始した場合、TIビットは変化しません。

17.4 特殊モード2

特殊モード2は、1つまたは複数のマスタから複数のスレーブへ、クロックに同期してシリアル通信を行うモードです。$\overline{SSi}$ 入力端子(i=0~2)を用いて、シリアルバスの通信を制御します。表 17.13に特殊モード2の仕様を示します。

表 17.13 特殊モード2の仕様

項目	仕様
データフォーマット	キャラクタ長　8ビット
送受信クロック	• UiMRレジスタ(i=0~2)のCKDIRビットが“0”(内部クロック): $\frac{fx}{2(m+1)}$　fx = f1, f8, f2n　m : UiBRGレジスタ設定値(00h~FFh) • CKDIRビットが“1”(外部クロック): CLKi端子からの入力
送信制御、受信制御	SS機能
送信開始条件	送信開始には以下の条件が必要です(注1) • UiC1レジスタのTEビットが“1”(送信許可) • UiC1レジスタのTIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり)
受信開始条件	受信開始には、以下の条件が必要です(注1) • UiC1レジスタのREビットが“1”(受信許可) • TEビットが“1”(送信許可) • TIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり)
割り込み要求発生タイミング	送信割り込みは、U0C1~U2C1レジスタのUiIRSビットの設定により、以下の条件のいずれかを選択できます • UiIRSビットが“0”(UiTBレジスタ空): UiTBレジスタからUARTi送信レジスタへデータ転送時(送信開始時) • UiIRSビットが“1”(送信完了): UARTi送信レジスタからデータ送信完了時 受信割り込み • UARTi受信レジスタからUiRBレジスタへデータ転送時(受信完了時)
エラー検出	オーバランエラー(注2) UiRBレジスタを読む前に次のデータ受信を開始し、7ビット目のデータを受信すると発生
その他選択項目	• CLK極性選択 送受信データの出力と入力タイミングが、送受信クロックの立ち上がりに同期するか、立ち下がりに同期するかを選択できます • ビットオーダ選択 LSBファーストまたはMSBファーストを選択できます • 連続受信モード選択 UiRBレジスタを読むと同時に、受信許可にすることができます • シリアルデータ論理切り替え 送受信データの論理を反転することができます • クロック位相選択 送受信クロックの極性と相の組み合わせで4種類のクロックを選択できます • $\overline{SSi}$入力端子機能 $\overline{SSi}$端子が“H”のとき、出力端子をハイインピーダンスにすることができます

注1. 外部クロック選択時、UiC0レジスタのCKPOLビットが“0”(送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)の場合はCLKi端子が“H”の状態で、CKPOLビットが“1”(送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力)の場合はCLKi端子が“L”の状態で、これらの条件を満たすようにしてください。

注2. オーバランエラーが発生した場合、UiRBレジスタは不定になります。SiRICレジスタのIRビットは“1”(割り込み要求あり)に変化しません。

表 17.14に特殊モード2で使用するレジスタと設定値を示します。

表 17.14 特殊モード2で使用するレジスタと設定値(i=0~2)

レジスタ	ビット	機能
UiMR	7~4	“0000b”にしてください
	CKDIR	マスタモードの場合“0”に、スレーブモードの場合“1”にしてください
	SMD2~SMD0	“001b”にしてください
UiC0	UFORM	LSBファースト、またはMSBファーストを選択してください
	CKPOL	UiSMR3レジスタのCKPHビットとの組み合わせでクロック位相を設定できます
	NCH	TXDi端子の出力形式を選択してください
	CRD	“1”にしてください
	TXEPT	送信レジスタ空フラグ
	2	“0”にしてください
	CLK1~CLK0	UiBRGレジスタのカウントソースを選択してください
UiC1	7~6	“00b”にしてください
	UiRRM	連続受信モードを使用する場合、“1”にしてください
	UiIRS	UARTi送信割り込み要因を選択してください
	RI	受信完了フラグ
	RE	受信を許可する場合、“1”にしてください
	TI	送信バッファ空フラグ
	TE	送受信を許可する場合、“1”にしてください
UiSMR	7~0	“00h”にしてください
UiSMR2	7~0	“00h”にしてください
UiSMR3	7~5	“000b”にしてください
	ERR	モードフォルトフラグ
	NODC	“0”にしてください
	DINC	マスタモードの場合“0”に、スレーブモードの場合“1”にしてください
	CKPH	UiC0レジスタのCKPOLビットとの組み合わせでクロック位相を設定できます
	SSE	“1”にしてください
UiSMR4	7~0	“00h”にしてください
UiBRG	7~0	転送速度を設定してください
UiTB	7~0	送信データを設定してください
UiRB	OER	オーバランエラーフラグ
	7~0	受信データが読めます

17.4.1 $\overline{\text{SSi}}$ 入力端子機能(i=0~2)

UiSMR3レジスタのSSEビットを“1”(SS機能許可)にするとこのモードが選択され、$\overline{\text{CTSi}}$/$\overline{\text{RTSi}}$/$\overline{\text{SSi}}$端子が$\overline{\text{SSi}}$入力端子になります。

UiSMR3レジスタのDINCビットでマスタとして使用するか、スレーブとして使用するかを選択できます。複数のデバイスをマスタにした場合(マルチマスタシステム)、$\overline{\text{SSi}}$端子の状態でその時々のマスタが決まります。

17.4.1.1 スレーブモードでのSS機能

DINCビットが“1”(スレーブモード)で$\overline{\text{SSi}}$端子に“H”が入力されている場合、STXDi端子はハイインピーダンスになり、CLKi端子からのクロック入力は無視されます。$\overline{\text{SSi}}$端子に“L”が入力されている場合、クロックの入力が有効となり、STXDi端子からシリアルデータが出力され、シリアル通信が可能になります。

17.4.1.2 マスタモードでのSS機能

DINCビットが“0”(マスタモード)で$\overline{\text{SSi}}$端子に“H”が入力されている場合、他にマスタが存在しないか、他のマスタが通信を行っていないこと示すため、マスタとなって通信を開始できます。マスタはCLKi端子から送受信クロックを出力します。$\overline{\text{SSi}}$端子に“L”が入力されている場合、他にマスタが存在していることを示し、TXDi、CLKiの各端子はハイインピーダンスになります。また、モードフォルトが発生し、UiSMR3レジスタのERRビットが“1”になります。なお、通信中にモードフォルトが発生しても、通信は停止しません。通信を停止したい場合、UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェースは無効)にしてください。

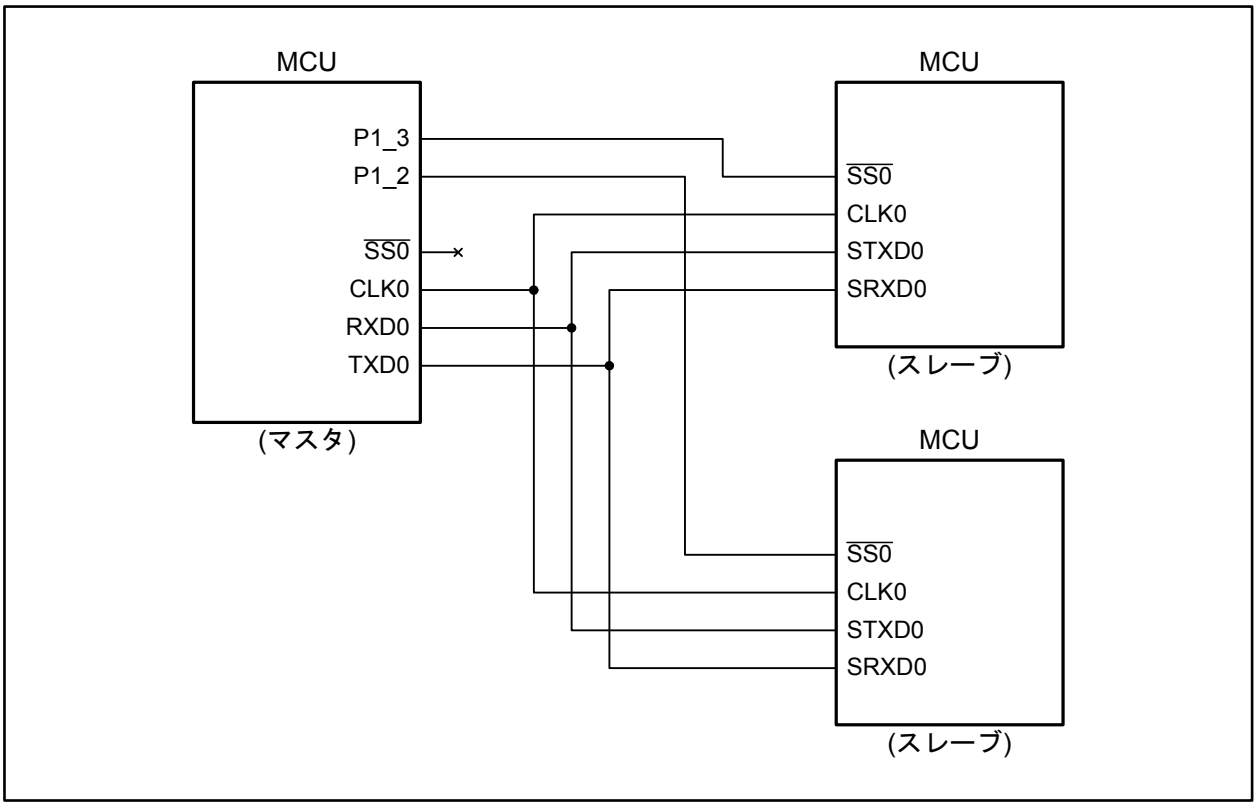


図 17.35 $\overline{\text{SSi}}$端子を用いたシリアルバスの通信制御例

17.4.2　クロック位相設定機能

UiC0レジスタのCKPOLビットと、UiSMR3レジスタ(i=0~2)のCKPHビットによって、送受信クロックの極性と位相を変化させることで、4種類のクロックを選択できます。

マスタは、送受信クロックの極性と位相をそのとき通信するスレーブと同じにしてください。

17.4.2.1　マスタモードでの送受信タイミング

DINCビットが“0”(マスタモード)の場合、UiMRレジスタのCKDIRビットを“0”(内部クロック)にして、クロックを生成する必要があります。図17.36に各クロックの位相ごとの送受信タイミングを示します。

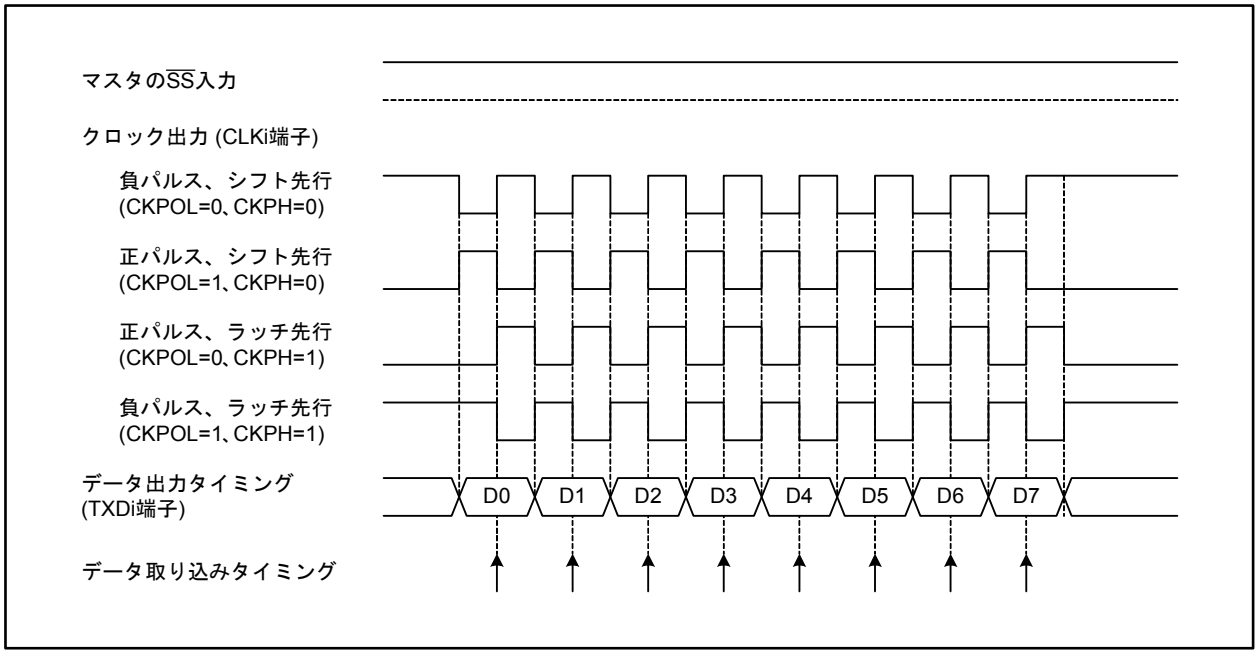


図 17.36　マスタモードでの送受信タイミング

17.4.2.2　スレーブモードでの送受信タイミング

DINC ビットが“1”(スレーブモード)の場合、UiMR レジスタの CKDIR ビットを“1”(外部クロック)にする必要があります。

CKPH ビットが“0”(クロック遅れなし)で $\overline{SSi}$ 端子に“H”が入力されている場合、STXDi はハイインピーダンスです。$\overline{SSi}$ 端子に“L”が入力されるとデータ送信を開始する条件が揃いますが、出力は不定です。その後、クロックに同期してデータ送信を行います。図 17.37 にタイミングを示します。

CKPH ビットが“1”(クロック遅れあり)で $\overline{SSi}$ 端子に“H”が入力されている場合、STXDi はハイインピーダンスです。$\overline{SSi}$ 端子に“L”が入力されると最初のデータが出力されます。その後、クロックに同期してデータ送信を行います。図 17.38 にタイミングを示します。

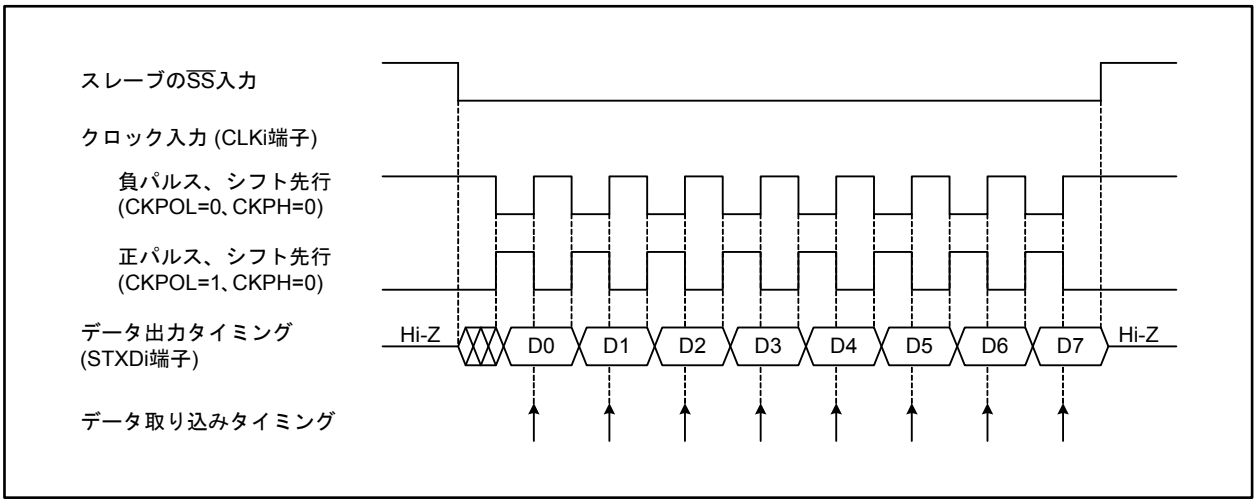


図 17.37　スレーブモードでの送受信タイミング(CKPH=0)

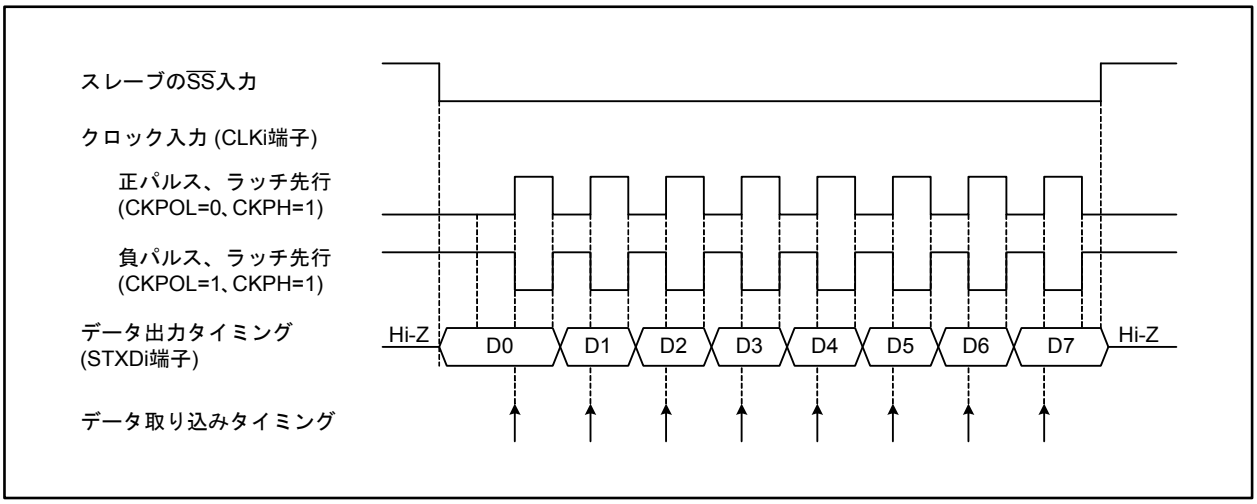


図 17.38　スレーブモードでの送受信タイミング(CKPH=1)

17.5 シリアルインタフェース使用上の注意

17.5.1 UiBRGレジスタ(i=0~4)の変更

- UiBRGレジスタはUiC0レジスタのCLK1~CLK0ビットを設定した後に書いてください。また、CLK1~CLK0ビットを変更した場合は、UiBRGレジスタも設定し直してください。

- UiBRGレジスタに“00h”を書いた場合、直後にカウンタが動作し“FFh”になる場合があります。この場合、設定した“00h”がリロードされるまで256クロック余分に時間がかかります。“00h”がリロードされた後は、設定どおり分周なしになります。

17.5.2 端子の出力について

UiC0レジスタ(i=0~2)のNCHビットを“1”にした場合、出力機能選択レジスタでUARTを選択する/しないに関わらず、該当するチャネルのTXDi/SDAi信号、SCLi信号が割り当てられている端子がNチャネルオープンドレイン出力になります。

UiSMR3レジスタのNODCビットを“1”にした場合、出力機能選択レジスタでUARTを選択する/しないに関わらず、該当するチャネルのCLKi信号が割り当てられている端子がNチャネルオープンドレイン出力になります。

17.5.3 クロック同期モード

17.5.3.1 外部クロック選択

- 外部クロックを選択している場合、UiC0レジスタ(i=0~4)のCKPOLビットが“0”(送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)のときは外部クロックが“H”の状態で、CKPOLビットが“1”(送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力)のときは外部クロックが“L”の状態で以下の条件を満たしてください。
  - UiC1レジスタのTEビットが“1”(送信許可)
  - UiC1レジスタのREビットが“1”(受信許可)
  - UiC1レジスタのTIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり)
    送信のみの場合はREビットの設定は不要

17.5.3.2 受信

- クロック同期モードでは送信制御回路で送受信クロックを制御します。したがって、受信だけで使用する場合も送信のための設定をしてください。受信時TXDi端子(i=0~4)からはダミーデータが外部に出力されます。

- 連続してデータを受信した場合、UiC1レジスタのRIビットが“1”(UiRBレジスタにデータあり)のときに次の受信データの7ビット目を受信するとオーバランエラーが発生し、UiRBレジスタのOERビットが“1”(オーバランエラー発生)になります。この場合、UiRBレジスタは不定になります。オーバランエラーが発生したときはSiRICレジスタのIRビットは“1”に変化しません。

17.5.4 特殊モード1 (I2Cモード)

- スタートコンディション、ストップコンディション、リスタートコンディションを生成する場合、UiSMR4レジスタ(i=0~2)のSTSPSELビットを“0”にした後、送受信クロックの半クロック以上待ってから、各コンディション生成ビット(STAREQビット、RSTAREQビット、STPREQビット)を“0”から“1”にしてください。

17.5.5 通信異常時の対処方法

送受信中に機能選択レジスタを書き換えるなど、通信異常が発生するような操作を行わないでください。万が一通信相手がそのような操作を行った場合、あるいはノイズの影響などによりビットずれが発生した場合など通信異常が発生した場合は、以下の手順で内部回路を初期化してください。

A. クロック同期モードの場合

(1) UiC1レジスタ(i=0~4)のTEビットを“0”(送信禁止)、REビットを“0”(受信禁止)にする。
(2) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効)にする。
(3) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード)にする。
(4) 必要に応じてUiC1レジスタのTEビットを“1”(送信許可)、REビットを“1”(受信許可)にする。

B. UARTモードの場合

(1) UiC1レジスタのTEビットを“0”(送信禁止)、REビットを“0”(受信禁止)にする。
(2) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効)にする。
(3) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“100b” (UARTモード キャラクタ長7ビット)または、“101b” (UARTモード キャラクタ長8ビット)、“110b” (UARTモード キャラクタ長9ビット)にする。
(4) 必要に応じてUiC1レジスタのTEビットを“1”(送信許可)、REビットを“1”(受信許可)にする。

18. A/Dコンバータ

容量結合増幅器で構成された10ビットの逐次比較変換方式のA/Dコンバータが1回路あります。

A/D変換の結果は、選択した端子に対応したA/Dレジスタに格納されます。ただし、DMAC利用モードが有効の場合はAD00レジスタのみに格納されます。

A/Dコンバータを使用しない場合、AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (VREF切断)にすると、VREF端子からラダー抵抗へ供給される電流が流れなくなり、消費電力を減らすことができます。

表18.1にA/Dコンバータの仕様を、図18.1にA/Dコンバータのブロック図を、図18.2~図18.8にA/Dコンバータ関連のレジスタを示します。

表18.1 A/Dコンバータの仕様

項目	性能
A/D変換方式	逐次比較変換方式(容量結合増幅器)
アナログ入力電圧(注1)	0V ~ AVCC (VCC)
動作クロックϕAD(注2)	fAD、fADの2分周、fADの3分周、fADの4分周、fADの6分周またはfADの8分周
分解能	8ビット、10ビット
動作モード	単発モード、繰り返しモード、単掃引モード、繰り返し掃引モード0、繰り返し掃引モード1、マルチポート単掃引モード、マルチポート繰り返し掃引モード0、自己診断モード
アナログ入力端子(注3)	26本 AN、AN0、AN2各8本。拡張入力2本(ANEX0, ANEX1)
A/D変換開始条件	ソフトウェアトリガ • AD0CON0レジスタのADSTビットを“1” (A/D変換開始)にする 外部トリガ(再トリガ可能) • ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき ハードウェアトリガ(再トリガ可能) • ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき • ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
1端子あたりの変換速度	• サンプル&ホールドなし 分解能8ビットの場合49ϕADサイクル、分解能10ビットの場合59ϕADサイクル うち2ϕADサイクルはサンプリング時間 • サンプル&ホールドあり 分解能8ビットの場合28ϕADサイクル、分解能10ビットの場合33ϕADサイクル うち3ϕADサイクルはサンプリング時間

注1. サンプル&ホールド機能の有無に依存しません。

注2. ϕADの周波数は、VCC=4.2~5.5Vのとき16MHz以下に、VCC=3.0~4.2Vのとき10MHz以下にしてください。また、サンプル&ホールド機能なしのときϕADの周波数は250kHz以上に、サンプル&ホールド機能ありのときϕADの周波数は1MHz以上にしてください。

注3. AVCC=VREF=VCCの場合、AN_0~AN_7、AN0_0~AN0_7、AN2_0~AN2_7、ANEX0、ANEX1のA/D入力電圧はVCC以下にしてください。

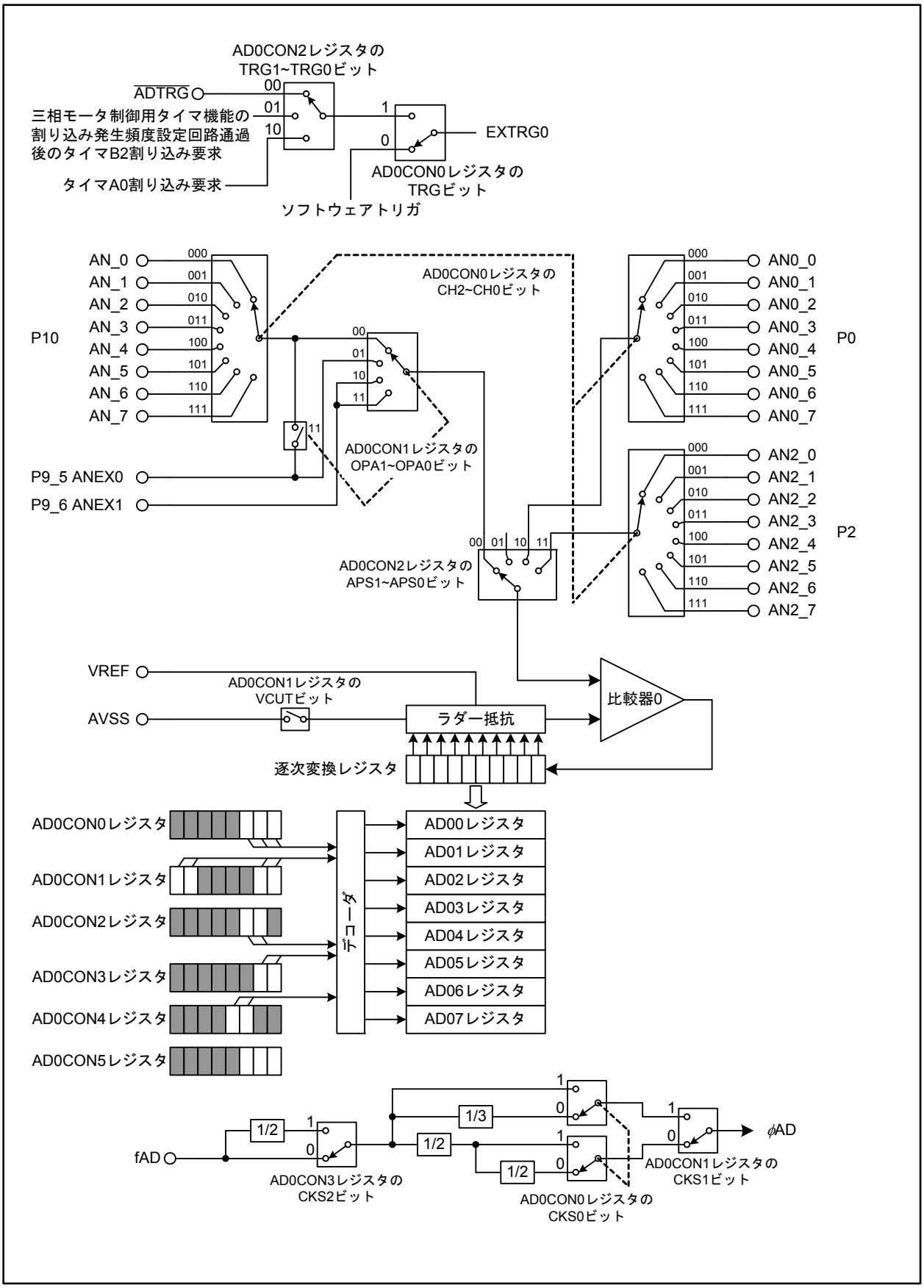


図 18.1 A/Dコンバータのブロック図

A/D0制御レジスタ0 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON0	0396h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CH0	アナログ入力端子選択ビット (注2、3、4)	b2 b1 b0 0 0 0 : ANi_0 0 0 1 : ANi_1 0 1 0 : ANi_2 0 1 1 : ANi_3 1 0 0 : ANi_4 1 0 1 : ANi_5 1 1 0 : ANi_6 1 1 1 : ANi_7 (i=なし、0、2)	RW
CH1			RW
CH2			RW
MD0	A/D動作モード選択ビット0 (注2、5、6)	b4 b3 0 0 : 単発モード 0 1 : 繰り返しモード 1 0 : 単掃引モード 1 1 : 繰り返し掃引モード0、繰り返し掃引モード1	RW
MD1			RW
TRG	トリガ選択ビット	0: ソフトウェアトリガ 1: 外部トリガ/ハードウェアトリガ (注7)	RW
ADST	A/D変換開始ビット	0: A/D変換停止 1: A/D変換開始 (注7)	RW
CKS0	周波数選択ビット	(注8)	RW

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. A/D動作モードを変更した場合には、あらためてアナログ入力端子の設定をしてください。
注3. このビットは、単発モード、繰り返しモードで有効です。
注4. AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットでAN、AN0、AN2のいずれかを選択してください。
注5. AD0CON3レジスタのMSSビットが“1”(マルチポート掃引モード有効) の場合、“10b”にするとマルチポート単掃引モード、“11b”にするとマルチポート繰り返し掃引モード0になります。
注6. AD0CON3レジスタのMSSビットが“1”の場合“10b”または“11b”にしてください。
注7. 外部トリガ/ハードウェアトリガを使用する場合は、AD0CON2レジスタのTRG1~TRG0ビットでトリガ要因を選択し、TRGビットを“1”にした後、ADSTビットを“1”にしてください。
注8. VCC=5Vのとき、ϕADの周波数は16MHz以下にしてください。また、VCC=3.3Vのとき、ϕADの周波数は10MHz以下にしてください。
ϕADはCKS0ビット、AD0CON1レジスタのCKS1ビット、AD0CON3レジスタのCKS2ビットの組み合わせで選択できます。

AD0CON3レジスタのCKS2ビット	AD0CON0レジスタのCKS0ビット	AD0CON1レジスタのCKS1ビット	ϕAD
0	0	0	fADの4分周
		1	fADの3分周
	1	0	fADの2分周
		1	fAD
1	0	0	fADの8分周
		1	fADの6分周

図 18.2　AD0CON0 レジスタ

A/D0制御レジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON1	0397h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SCAN0	A/D掃引端子選択ビット (注2、3)	単掃引モード、繰り返し掃引モード0選択時 b1 b0 0 0 : ANi_0、ANi_1 0 1 : ANi_0~ANi_3 1 0 : ANi_0~ANi_5 1 1 : ANi_0~ANi_7 繰り返し掃引モード1 選択時 (注4) b1 b0 0 0 : ANi_0 0 1 : ANi_0、ANi_1 1 0 : ANi_0~ANi_2 1 1 : ANi_0~ANi_3 マルチポート単掃引モード、マルチポート繰り返し掃引モード0 選択時 b1 b0 1 1 : ANi_0~ANi_7 (注5) (i=なし、0、2)	RW
SCAN1			RW
MD2	A/D動作モード選択ビット1	0: 繰り返し掃引モード1以外 1: 繰り返し掃引モード1 (注6)	RW
BITS	8/10ビットモード選択ビット	0: 8ビットモード 1: 10ビットモード	RW
CKS1	周波数選択ビット	(注7)	RW
VCUT	VREF接続ビット (注8)	0: VREF切断 (注9) 1: VREF接続 (注10)	RW
OPA0	外部オペアンプ接続モードビット (注11、12)	b7 b6 0 0 : ANEX0、ANEX1は使用しない (ANi_0~ANi_7入力をA/D変換) 0 1 : ANEX0入力をA/D変換 1 0 : ANEX1入力をA/D変換 1 1 : 外部オペアンプ接続	RW
OPA1			RW

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. このビットは単掃引モード、繰り返し掃引モード0、繰り返し掃引モード1、マルチポート単掃引モード、マルチポート繰り返し掃引モード0で有効です。
注3. AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットでAN、AN0、AN2のいずれかを選択してください。
注4. MD2ビットを“1”にした場合、A/D変換を行う頻度が高い端子です。
注5. マルチポート単掃引モードとマルチポート繰り返し掃引モード0では“11b”以外の値を設定しないでください。
注6. AD0CON3レジスタのMSSビットが“1”(マルチポート掃引モード有効) の場合、MD2ビットを“0”に設定してください。
注7. AD0CON0レジスタのCKS0ビットの注を参照してください。
注8. A/Dコンバータへの基準電圧を制御するビットです。D/Aコンバータには影響しません。
注9. A/D変換中に“0”を書かないでください。
注10. VCUTビットを“0”から“1”にしたときは、1μs以上経過した後にA/D変換を開始してください。
注11. 単発モード、繰り返しモードのみ“01b”、または“10b”を選択できます。その他のモードでは、これらのビットを“00b”または“11b”に設定してください。
注12. AD0CON3レジスタのMSSビットが“1”(マルチポート掃引モード有効) の場合、“00b”にしてください。

図 18.3　AD0CON1 レジスタ

A/D0制御レジスタ2 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0			X	X			

シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON2	0394h番地	X00X X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SMP	A/D変換方式選択ビット	0: サンプル&ホールドなし 1: サンプル&ホールドあり	RW
APS0	アナログ入力ポート選択ビット (注2)	b2 b1 0 0 : AN_0~AN_7, ANEX0, ANEX1 0 1 : マルチポート掃引モード 1 0 : AN0_0~AN0_7 1 1 : AN2_0~AN2_7	RW
APS1			RW
— (b4-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
TRG0	外部トリガ要因選択ビット	b6 b5 0 0 : $\overline{\text{ADTRG}}$を選択 0 1 : 三相モータ制御用タイマの(ICTB2レジスタカウント後の)タイマB2割り込み要求を選択 1 0 : タイマA0割り込み要求を選択 1 1 : 設定しないでください	RW
TRG1			RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください。 読んだ場合、その値は不定	RW

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. AD0CON3レジスタのMSSビットが“1”(マルチポート掃引モード有効) の場合、“01b”にしてください。

図 18.4　AD0CON2 レジスタ

A/D0制御レジスタ3 (注1、2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0					

シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON3	0395h番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
DUS	DMAC利用モード選択ビット (注3)	0: DMAC利用モード無効 1: DMAC利用モード有効 (注4、5)	RW
MSS	マルチポート掃引モード選択ビット	0: マルチポート掃引モード無効 1: マルチポート掃引モード有効 (注3、6)	RW
CKS2	周波数選択ビット	(注7)	RW
MSF0	マルチポート掃引ステータスフラグ (注8)	b4 b3 0 0 : AN_0~AN_7 0 1 : 予約 1 0 : AN0_0~AN0_7 1 1 : AN2_0~AN2_7	RO
MSF1			RO
— (b7-b5)	予約ビット	“0”にしてください。 読んだ場合、その値は不定	RW

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. A/D変換中は、正しい値が読み出せない場合があります。停止させてから読み出し、書き込みをしてください。
注3. MSSビットを“1”にする場合、DUSビットも“1”にしてください。
注4. DUSビットが“1”の場合、A/D変換結果はすべてAD00レジスタへ格納されます。
注5. 変換結果をDMACで転送する場合、DMACの設定も行ってください。
注6. MSSビットを“1”にする場合、AD0CON1レジスタのMD2ビットを“0”(繰り返し掃引モード1以外)、AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットを“01b”(マルチポート掃引モード)、AD0CON1レジスタのOPA1~OPA0 ビットを“00b”(ANEX0、ANEX1は使用しない) にしてください。
注7. AD0CON0レジスタのCKS0ビットの注を参照してください。
注8. MSSビットが“1”の場合、有効です。MSSビットが“0”の場合、読んだ値は不定です。

図 18.5　AD0CON3 レジスタ

A/D0制御レジスタ4 (注1、2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0			0	0

シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON4	0392h番地	XXXX 00XXb

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b1-b0)	予約ビット	“0”にしてください。 読んだ場合、その値は不定	RW
MPS10	マルチポート掃引ポート選択ビット	b3 b2 0 0 : (注3) 0 1 : 設定しないでください 1 0 : AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7 1 1 : AN_0~AN_7, AN2_0~AN2_7	RW
MPS11			RW
— (b7-b4)	予約ビット	“0”にしてください。 読んだ場合、その値は不定	RW

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. このレジスタの読み出しは8ビット単位で実行してください。
注3. AD0CON3レジスタのMSSビットが“0”(マルチポート掃引モード無効) の場合、“00b”にしてください。
MSSビットが“1”(マルチポート掃引モード有効) の場合、“00b”以外を設定してください。

図 18.6　AD0CON4 レジスタ

A/D0制御レジスタ5 (注1~3)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0	0				

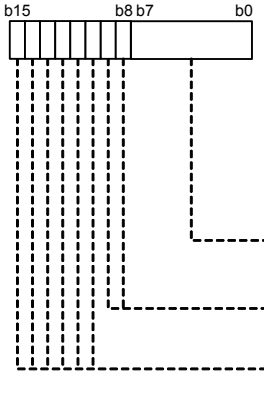
シンボル	アドレス	リセット後の値
AD0CON5	0393h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
ASTEN	自己診断、断線検出アシスト機能設定ビット	0: アシスト機能無効 1: アシスト機能有効　(注4)	RW
ASTSEL	自己診断、断線検出選択ビット	0: 断線検出アシスト 1: 自己診断アシスト	RW
ASTMTD	アシスト方式選択ビット	0: プルアップ方式 1: プルダウン方式	RW
— (b3)	予約ビット	書く場合、“0”を書いてください	RO
— (b5-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7-b6)	予約ビット	書く場合、“0”を書いてください	RO

注1. A/D変換中にこのレジスタに値を書くと、変換結果は不定になります。
注2. このレジスタの読み出しは8ビット単位で実行してください。
注3. 断線検出を実施する場合、A/D変換結果は外部回路により変化しますので、システムに合わせて十分な評価を行ってください。
注4. 自己診断、断線検出アシスト機能を使用する場合、AD0CON2レジスタのSMPビットを“1”(サンプル&ホールドあり) にしてください。

図 18.7　AD0CON5 レジスタ

A/D0レジスタi (i=0~7) (注1~4)



シンボル	アドレス	リセット後の値
AD00, AD01	0381h-0380h、0383h-0382h番地	0000 0000 XXXX XXXXb
AD02, AD03	0385h-0384h、0387h-0386h番地	0000 0000 XXXX XXXXb
AD04, AD05	0389h-0388h、038Bh-038Ah番地	0000 0000 XXXX XXXXb
AD06, AD07	038Dh-038Ch、038Fh-038Eh番地	0000 0000 XXXX XXXXb

ビットシンボル	機　能	RW
— (b7-b0)	A/D変換結果の下位8ビット	RO
— (b9-b8)	10ビットモード時:　A/D変換結果の上位2ビット 8ビットモード時:　読んだ場合、“0”が読めます	RO
— (b15-b10)	読んだ場合、“0”が読めます	RO

注1. 変換結果のDMA転送を行う場合、プログラムでこれらのレジスタを読み出すと不定値が読めます。
注2. A/D変換停止中に書いた場合、そのレジスタ値は不定です。
注3. AD0CON3レジスタのDUSビットが“1”(DMAC利用モード有効) の場合、AD00レジスタのみ有効です。その他のレジスタ値は不定です。
注4. 10ビットモード時に変換結果のDMA転送を行う場合は、DMACを16ビット転送にしてください。

図 18.8　AD00~AD07 レジスタ

18.1　モードの説明

18.1.1　単発モード

選択した1本の端子の入力電圧を1回だけ変換するモードです。表 18.2に単発モードの仕様を示します。

表 18.2　単発モードの仕様

項目	仕様
機能	AD0CON0レジスタのCH2~CH0ビット、AD0CON1レジスタのOPA1~OPA0ビット、AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットで選択した1本の端子の入力電圧を1回だけ変換する
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0”(ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1”(A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1”(外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 •TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき •TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき •TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	•A/D変換終了時(ソフトウェアトリガ選択時、ADSTビットは“0”になる) •ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	A/D変換終了時
入力端子	AN_0~AN_7、AN0_0~AN0_7、AN2_0~AN2_7、ANEX0、ANEX1から1端子を選択
A/D変換値の読み出し	AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合 選択した端子に対応したAD0jレジスタ(j=0~7)を読み出してください DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください

18.1.2　繰り返しモード

選択した1本の端子の入力電圧を繰り返し変換するモードです。表18.3に繰り返しモードの仕様を示します。

表18.3　繰り返しモードの仕様

項目	仕様
機能	AD0CON0レジスタのCH2~CH0ビット、AD0CON1レジスタのOPA1~OPA0ビット、AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットで選択した1本の端子の入力電圧を繰り返し変換する
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0”(ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1”(A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1”(外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 •TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき •TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき •TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	•ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	•AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合、発生しない •DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合、各A/D変換終了時に発生
入力端子	AN_0~AN_7、AN0_0~AN0_7、AN2_0~AN2_7、ANEX0、ANEX1から1端子を選択
A/D変換値の読み出し	AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合 選択した端子に対応したAD0jレジスタ(j=0~7)を読み出してください DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合 •変換結果をDMACで転送する場合 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください •変換結果をプログラムで転送する場合 AD0ICレジスタのIRビットが“1”になった後、AD00レジスタを読み出してください。IRビットは“0”にしてください

18.1.3 単掃引モード

選択した複数の端子の入力電圧を1回ずつ変換するモードです。表 18.4に単掃引モードの仕様を示します。

表 18.4 単掃引モードの仕様

項目	仕様
機能	AD0CON1レジスタのSCAN1~SCAN0ビットとAD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットで選択した複数の端子の入力電圧を1回ずつ変換する
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0”(ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1”(A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1”(外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 •TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき •TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき •TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	•A/D変換終了時(ソフトウェアトリガ選択時、ADSTビットは“0”になる) •ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	•AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合、掃引終了時に発生 •DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合、各A/D変換終了時に発生
入力端子	ANi_0 (i=なし、0、2)とANi_1 (2端子)、ANi_0~ANi_3 (4端子)、ANi_0~ANi_5 (6端子)、またはANi_0~ANi_7 (8端子)から選択
A/D変換値の読み出し	AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合 選択した端子に対応したAD0jレジスタ(j=0~7)を読み出してください DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください

18.1.4 繰り返し掃引モード0

選択した複数の端子の入力電圧を繰り返し変換するモードです。表18.5に繰り返し掃引モード0の仕様を示します。

表 18.5 繰り返し掃引モード0の仕様

項目	仕様
機能	AD0CON1レジスタのSCAN1~SCAN0ビットとAD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットで選択した複数の端子の入力電圧を繰り返し変換する
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0”(ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1”(A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1”(外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 • TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき • TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき • TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	• ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	• AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合、発生しない • DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合、各A/D変換終了時に発生
入力端子	ANi_0 (i=なし、0、2)とANi_1 (2端子)、ANi_0~ANi_3 (4端子)、ANi_0~ANi_5 (6端子)、またはANi_0~ANi_7 (8端子)から選択
A/D変換値の読み出し	AD0CON3レジスタのDUSビットが“0”(DMAC利用モード無効)の場合 選択した端子に対応したAD0jレジスタ(j=0~7)を読み出してください DUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合 • 変換結果をDMACで転送する場合 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください • 変換結果をプログラムで転送する場合 AD0ICレジスタのIRビットが“1”になった後、AD00レジスタを読み出してください。IRビットは“0”にしてください

18.1.5 繰り返し掃引モード1

選択した1~4本の端子に重点をおき、8本の端子の入力電圧を繰り返し変換するモードです。表 18.6 に繰り返し掃引モード1の仕様を示します。

表 18.6 繰り返し掃引モード1の仕様

項目	仕様
機能	AD0CON1レジスタのSCAN1~SCAN0ビットとAD0CON2レジスタのAPS1 ~ APS0ビットで選択した1~4本の端子に重点をおき、8本の端子の入力電圧を繰り返し変換する 例:AN_0を選択した場合AN_0→AN_1→AN_0→AN_2→AN_0→AN_3•••の順にA/D変換を行う
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0” (ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1” (A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1” (外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 • TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき(再トリガは無効です) • TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき • TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	• ADSTビットを“0” (A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	• AD0CON3レジスタのDUSビットが“0” (DMAC利用モード無効)の場合、発生しない • DUSビットが“1” (DMAC利用モード有効)の場合、各A/D変換終了時に発生
入力端子	ANi_0~ANi_7 (8端子) (i=なし、0、2)
重点的にA/D変換を行う端子	ANi_0 (1端子)、ANi_0とANi_1 (2端子)、ANi_0~ANi_2 (3端子)、ANi_0~ANi_3 (4端子) から選択
A/D変換値の読み出し	AD0CON3レジスタのDUSビットが“0” (DMAC利用モード無効)の場合 選択した端子に対応したAD0jレジスタ (j=0~7)を読み出してください DUSビットが“1” (DMAC利用モード有効)の場合 • 変換結果をDMACで転送する場合 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください • 変換結果をプログラムで転送する場合 AD0ICレジスタのIRビットが“1”になった後、AD00レジスタを読み出してください。IRビットは“0”にしてください

18.1.6 マルチポート単掃引モード

選択した16本の端子の入力電圧を1回ずつ変換するモードです。
AD0CON3レジスタのDUSビットを“1” (DMAC利用モード有効)にしてください。
表 18.7にマルチポート単掃引モードの仕様を示します。

表 18.7 マルチポート単掃引モードの仕様

項目	仕様
機能	AD0CON4レジスタのMPS11~MPS10ビットで選択した16本の端子の入力電圧を、AN_0~AN_7→ANi_0~ANi_7 (i=0, 2)の順に1回ずつ変換する 例:MPS11~MPS10ビットが“10b” (AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7)の場合 AN_0→AN_1→AN_2→AN_3→AN_4→AN_5→AN_6→AN_7→AN0_0→•••→AN0_6→AN0_7の順にA/D変換を行う
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0” (ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1” (A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1” (外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 • TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき • TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき • TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	• A/D変換終了時(ソフトウェアトリガ選択時、ADSTビットは“0”になる) • ADSTビットを“0” (A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	各A/D変換終了時に発生(DUSビットを“1”に設定してください)
入力端子	AN_0~AN_7→AN0_0~AN0_7、AN_0~AN_7→AN2_0~AN2_7から選択
A/D変換値の読み出し	DUSビットを“1”に設定してください 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください

18.1.7 マルチポート繰り返し掃引モード0

選択した16本の端子の入力電圧を繰り返し変換するモードです。
AD0CON3レジスタのDUSビットを“1” (DMAC利用モード有効)にしてください。
表 18.8にマルチポート繰り返し掃引モード0の仕様を示します。

表 18.8 マルチポート繰り返し掃引モード0の仕様

項目	仕様
機能	AD0CON4レジスタのMPS11~MPS10ビットで選択した16本の端子の入力電圧を、AN_0~AN_7→ANi_0~ANi_7 (i=0, 2)の順に繰り返し変換する 例:MPS11~MPS10ビットが“10b” (AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7)の場合 AN_0→AN_1→AN_2→AN_3→AN_4→AN_5→AN_6→AN_7→AN0_0→AN0_1→•••→AN0_6→AN0_7の順に、繰り返しA/D変換を行う
開始条件	AD0CON0レジスタのTRGビットが“0” (ソフトウェアトリガ)の場合 AD0CON0レジスタのADSTビットを“1” (A/D変換開始)にしたとき TRGビットが“1” (外部トリガ/ハードウェアトリガ)の場合 AD0CON2レジスタのTRG1、TRG0ビットで条件を選択 •TRG1、TRG0ビットが“00b” ADSTビットを“1”にした後、$\overline{\text{ADTRG}}$端子への入力信号が“H”から“L”に変化したとき •TRG1、TRG0ビットが“01b” ADSTビットを“1”にした後、三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求が発生したとき •TRG1、TRG0ビットが“10b” ADSTビットを“1”にした後、タイマA0割り込み要求が発生したとき
停止条件	•ADSTビットを“0” (A/D変換停止)にしたとき
割り込み要求発生タイミング	各A/D変換終了時に発生(DUSビットを“1”に設定してください)
入力端子	AN_0~AN_7→AN0_0~AN0_7、AN_0~AN_7→AN2_0~AN2_7から選択
A/D変換値の読み出し	DUSビットを“1”に設定してください 「12. DMAC」を参照し、DMACの設定も行ってください A/D変換完了後、A/D変換結果はAD00レジスタへ格納され、DMACによってAD00レジスタから任意のメモリ空間へ転送されます プログラムでAD00レジスタを読み出さないでください

18.2 機能

18.2.1 分解能選択機能

AD0CON1レジスタのBITSビットで分解能を選択できます。BITSビットを“1”(変換精度は10ビット)にすると、A/D変換結果がAD0iレジスタ(i=0~7)のビット0~9に格納されます。BITSビットを“0”(変換精度は8ビット)にすると、A/D変換結果がAD0iレジスタのビット0~7に格納されます。

18.2.2 サンプル&ホールド

AD0CON2レジスタのSMPビットを“1”(サンプル&ホールドあり)にすると、1端子あたりの変換速度が向上し、分解能8ビットの場合28ϕADサイクル、分解能10ビットの場合33ϕADサイクルになります。サンプル&ホールドは、すべての動作モードで有効です。サンプル&ホールドの有無を選択してからA/D変換を開始してください。

18.2.3 トリガ選択機能

AD0CON0レジスタのTRGビットとAD0CON2レジスタのTRG1~TRG0ビットの組み合わせにより、A/D変換の開始トリガを選択できます。表18.9にトリガ選択機能の設定を示します。

表18.9 トリガ選択機能設定

ビットと設定値		トリガ
AD0CON0レジスタ	AD0CON2レジスタ	
TRG=0	—	ソフトウェアトリガ AD0CON0レジスタのADSTビットを“1”にすると、A/D変換を開始する
TRG=1 (注1、2)	TRG1=0, TRG0=0	外部トリガ $\overline{\text{ADTRG}}$入力信号の立ち下がりでA/D変換を開始する
	TRG1=0, TRG0=1	ハードウェアトリガ 三相モータ制御用タイマ機能の(割り込み発生頻度設定回路通過後の)タイマB2割り込み要求でA/D変換を開始する
	TRG1=1, TRG0=0	ハードウェアトリガ タイマA0割り込み要求でA/D変換を開始する

注1. ADSTビットが“1”(A/D変換開始)の状態で、トリガが発生するとA/D変換を開始します。
注2. A/D変換中に外部トリガまたはハードウェアトリガが入力されると、それまでに行っていたA/D変換は中断され、再度A/D変換を開始します。

18.2.4 DMAC利用モード

すべてのモードでDMAC利用モードが使用できます。マルチポート単掃引モードとマルチポート繰り返し掃引モード0の場合は、DMAC利用モードを使用してください。AD0CON3レジスタのDUSビットを“1”(DMAC利用モード有効)にすると、A/D変換結果はすべてAD00レジスタへ格納されます。DMACを利用することで、1端子のA/D変換が終了するたびに、AD00レジスタから任意のメモリ空間へDMA転送が行われます。分解能が8ビットの場合は8ビット転送を、分解能が10ビットの場合は16ビット転送を設定してください。DMACの使用方法については、「12. DMAC」を参照してください。

18.2.5 拡張アナログ入力端子

単発モードと繰り返しモードでは、ANEX0、ANEX1端子をアナログ入力端子として使用できます。AD0CON1レジスタのOPA1~OPA0ビットで選択してください(表18.10参照)。ANEX0入力のA/D変換結果はAD00レジスタへ、ANEX1入力のA/D変換結果はAD01レジスタへ格納されます。ただし、AD0CON3レジスタのDUSビットが“1”(DMAC利用モード有効)の場合、AD00レジスタへ格納されます。

拡張アナログ入力端子を使用する場合は、AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットを“00b”(アナログ入力ポートはAN_0~AN_7、ANEX0、ANEX1)、AD0CON3レジスタのMSSビットを“0”(マルチポート掃引モード無効)にしてください。

表 18.10 拡張アナログ入力端子の設定

AD0CON1レジスタ		ANEX0の機能	ANEX1の機能
OPA1	OPA0		
0	0	使用しない	使用しない
0	1	アナログ入力	使用しない
1	0	使用しない	アナログ入力
1	1	外部オペアンプへの出力	外部オペアンプからの入力

18.2.6 外部オペアンプ接続モード

拡張アナログ入力端子ANEX0、ANEX1を用いて複数のアナログ入力を1個の外部オペアンプで増幅できます。

AD0CON1レジスタのOPA1~OPA0ビットが“11b”(外部オペアンプ接続)のとき、AN_0~AN_7の入力をANEX0端子から出力します。この出力を外部オペアンプで増幅し、ANEX1端子へ入力してください。

A/D変換は、ANEX1入力に対して行われ、A/D変換結果は対応するAD0iレジスタ(i=0~7)に格納されます。A/D変換速度は外部オペアンプの応答特性に依存します。なお、ANEX0端子とANEX1端子を直結しないでください。

外部オペアンプ接続モードを使用する場合は、AD0CON2レジスタのAPS1~APS0ビットは“00b”にしてください。

図18.9に外部オペアンプ接続モードの接続例を示します。

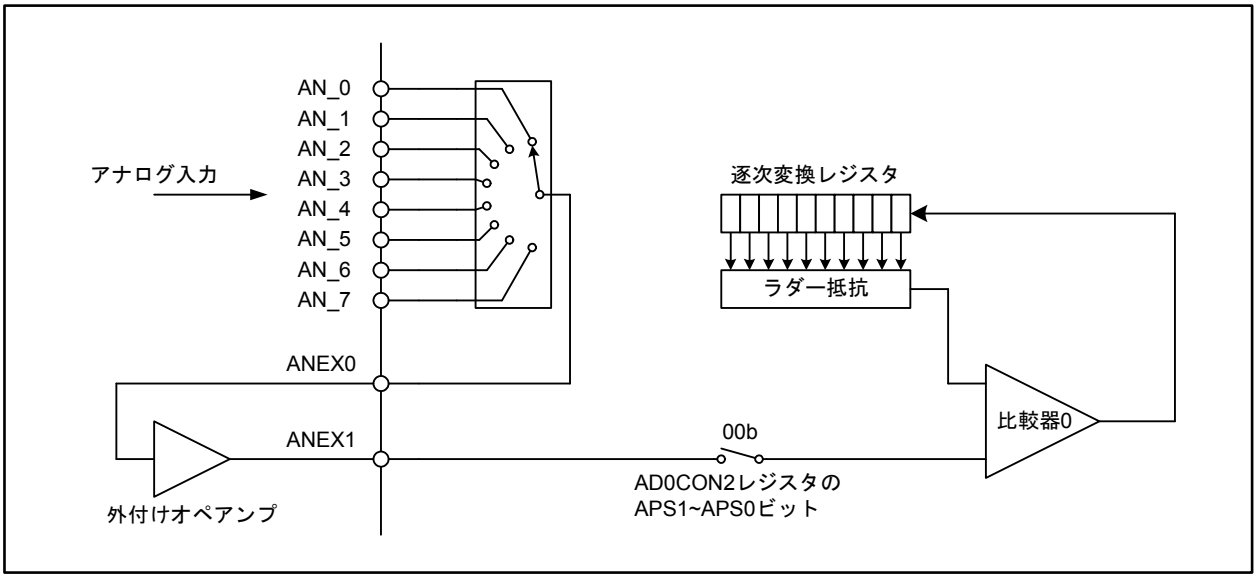


図 18.9 外部オペアンプ接続モードの接続例

18.2.7 自己診断/断線検出アシスト機能

アナログ入力端子での断線を検出できます。また、この機能を用いることで自己診断が行えます。図 18.10に断線検出アシスト回路のブロック図を示します。

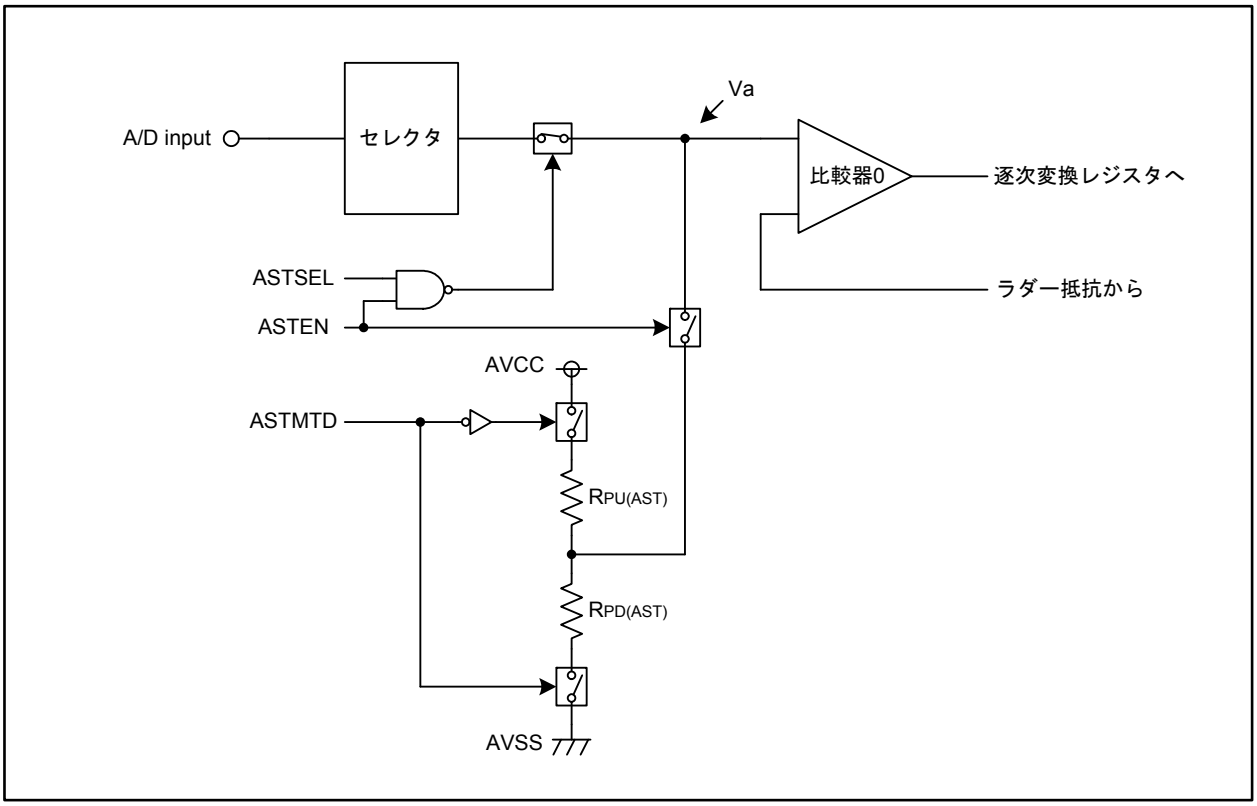


図 18.10 断線検出アシスト回路ブロック図

断線検出機能は、AD0CON5レジスタのASTSELビットを“0”(断線検出アシスト)にして使用します。ASTENビットを“1”(アシスト機能有効)、ASTSELビットを“0”、ASTMTDビットを“0”(プルアップ方式)にすると、図 18.10中のVaがAVCCとA/D入力電圧の間の電圧になります。このときA/D入力信号が断線していれば、VaはAVCC付近の電圧になります。また同様に、ASTENビットを“1”、ASTSELビットを“0”、ASTMTDビットを“1”(プルダウン方式)にすると、図 18.10中のVaがAVSSとA/D入力電圧の間の電圧になります。このときA/D入力信号が断線していれば、VaはAVSS付近の電圧になります。この機能によりA/D変換結果が常に最大値付近、最小値付近であれば、A/D入力が断線していると判断できます。

自己診断機能は、AD0CON5レジスタのASTSELビットを“1”(自己診断アシスト)にして使用します。ASTENビットを“1”(アシスト機能有効)、ASTSELビットを“1”、ASTMTDビットを“0”(プルアップ方式)にすると、図 18.10中のVaがAVCC付近の電圧になります。また、ASTENビットを“1”、ASTSELビットを“1”、ASTMTDビットを“1”(プルダウン方式)にすると、図 18.10中のVaがAVSS付近の電圧となります。それぞれの状態で変換結果が最大値付近、最小値付近になるかどうかで、A/Dコンバータが正常かどうかが判断できます。

18.2.8 消費電流低減機能

A/Dコンバータを使用しないとき、AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (VREF切断)にすることで、A/Dコンバータのラダー抵抗と基準電圧入力端子(VREF)を切り離すことができます。切り離すと、VREF端子からラダー抵抗へ供給される電流が流れなくなり、消費電力が少なくなります。

A/D コンバータを使用する場合は、VCUT ビットを “1” (VREF 接続) にして 1μs 以上経過した後、AD0CON0 レジスタの ADST ビットを“1” (A/D変換開始)にしてください。ADST ビットと VCUT ビットに同時に“1”を書かないでください。

また、A/D変換中にVCUTビットを“0”にしないでください。

なお、VCUTビットはD/Aコンバータの供給電源には影響しません(図 18.11参照)。

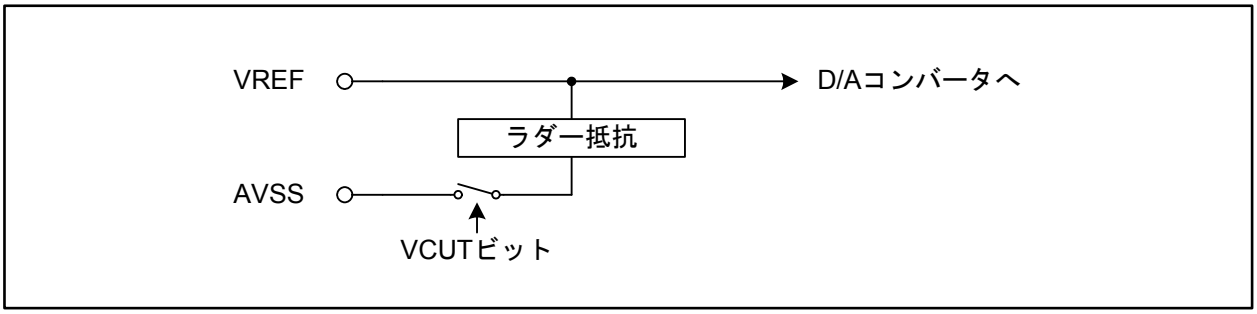


図 18.11 VCUTビットによる電源供給

18.2.9 センサの出力インピーダンス

図 18.12にアナログ入力端子と外部センサの等価回路を示します。

A/D変換を正しく行うためには、図 18.12に示す内部コンデンサCへの充電が所定の時間内に終了することが必要です。この所定の時間をサンプリング時間といい、サンプル&ホールドなしのとき2ϕADサイクル、サンプル&ホールドありのとき3ϕADサイクルです。

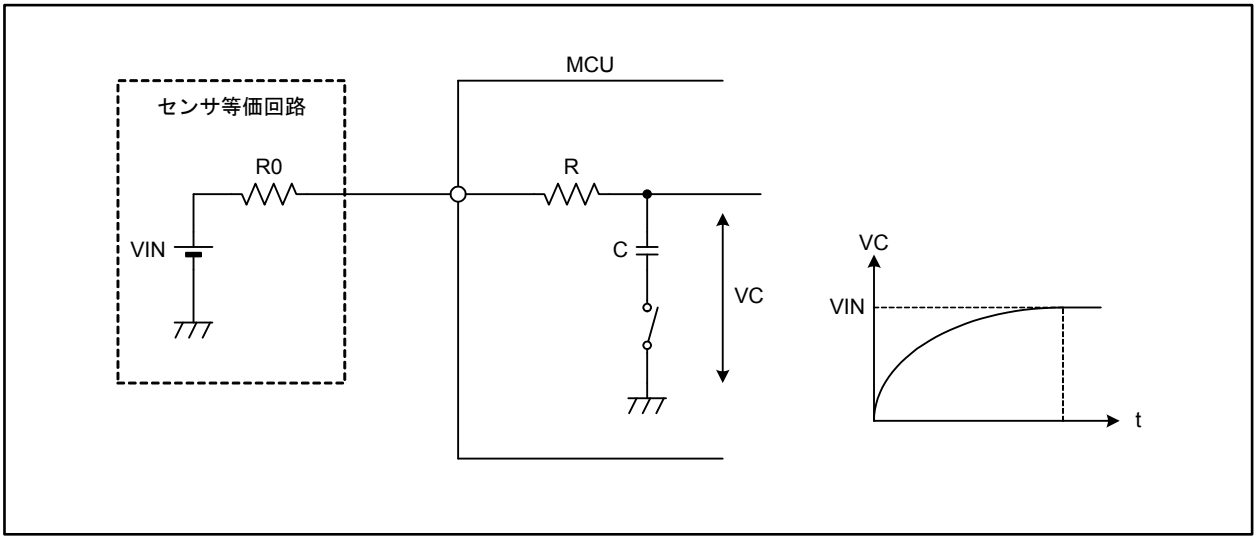


図 18.12 アナログ入力端子と外部センサの等価回路

サンプリング時間をT[s]、センサの出力インピーダンスをR0[Ω]、マイコンの内部抵抗をR[Ω]、A/Dコンバータの精度(誤差)をx[LSB]、分解能をy[階調](10ビットモード時1024、8ビットモード時256)とすると、コンデンサCの両端の電位差VCは、

$$VC = VIN\left\{1 - e^{-\frac{t}{C(R0+R)}}\right\}$$

で表され、t = Tのとき、変換誤差をx以下にするには、

$$VC = VIN - \frac{x}{y}VIN = VIN\left(1 - \frac{x}{y}\right)$$

でなければならないため、

$$e^{-\frac{T}{C(R0+R)}} = \frac{x}{y}$$

$$-\frac{T}{C(R0+R)} = \ln\frac{x}{y}$$

$$R0 = -\frac{T}{C\ln\frac{x}{y}} - R$$

と計算できます。

ϕAD=10MHz、サンプル&ホールドあり、10ビットモードのときに、誤差を0.1LSB以下にするセンサの出力インピーダンスR0は、T = 0.3μs、x = 0.1、y = 1024、R = 2.0kΩ (参考値)、C = 6.5pF (参考値)を代入して、

$$R0 = -\frac{0.3 \times 10^{-6}}{6.5 \times 10^{-12} \cdot \ln\frac{0.1}{1024}} - 2.0 \times 10^{3}$$

$$= 2998$$

と計算できます。

以上から、A/Dコンバータの精度(誤差)を0.1LSB以下にするためには、センサの出力インピーダンスR0が約3kΩ以下でないといけないことがわかります。

なお、実際の誤差は、上記の0.1LSBに絶対精度が加わった値になります。

18.3 A/Dコンバータ使用上の注意

18.3.1 基板設計上の注意点

- ノイズによる誤動作やラッチアップの防止、または変換誤差の低減のため、AVCC端子、VREF端子、アナログ入力端子(AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7)とAVSS端子の間にそれぞれコンデンサを挿入してください。図18.13に端子の処理例を示します。

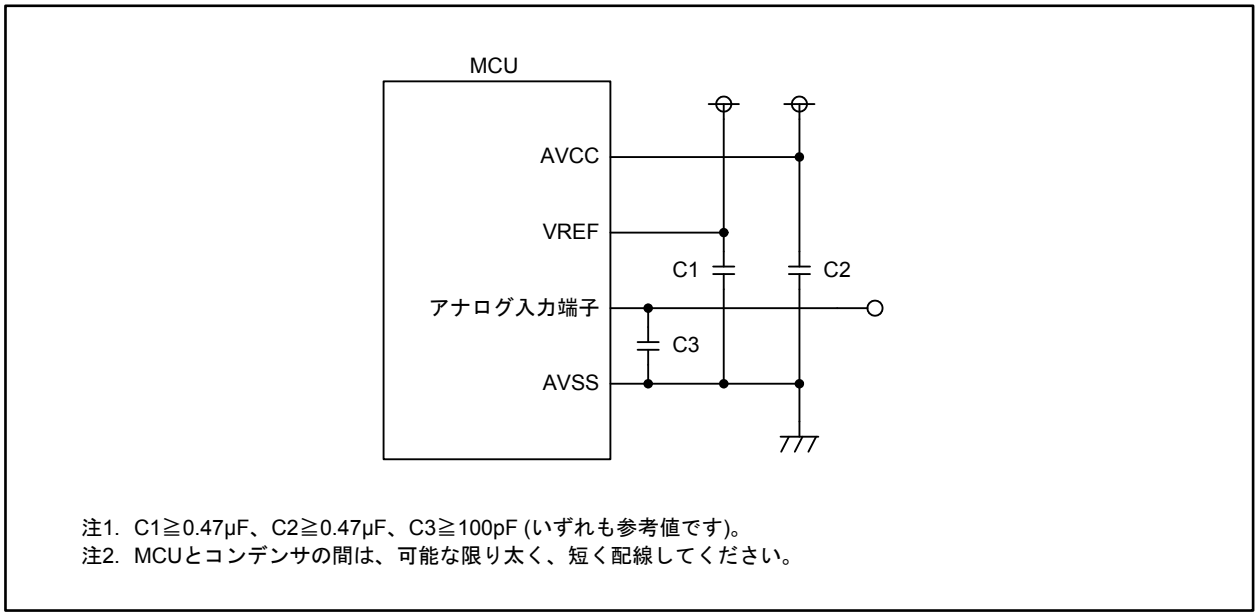


図 18.13 A/D関連端子の処理例

- キー入力割り込みを使用する場合、AN_4~AN_7は4本ともアナログ入力端子として使用しないでください(A/D入力電圧がVIL以下になると、キー入力割り込み要求が発生します)。

- AVCC=VREF=VCCの場合、AN_0~AN_7、AN0_0~AN0_7、AN2_0~AN2_7、ANEX0、ANEX1のA/D入力電圧はVCC以下にしてください。

18.3.2 プログラム作成上の注意点

- AD0CON0レジスタ(ADSTビットを除く)、AD0CON1レジスタ、AD0CON2レジスタ、AD0CON3レジスタ、AD0CON4レジスタ、AD0CON5レジスタは、A/D変換停止時(トリガ発生前)に書いてください。

- AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (VREF未接続)から“1” (VREF接続)にしたときは、1μs以上経過した後にA/D変換を開始させてください。A/D変換を行わないときは、消費電流を低減させるためにVCUTビットを“1”から“0”にしてください。

- アナログ入力端子として使用する端子に対応するポート方向ビットは“0” (入力)にしてください。また、対応するポートの機能選択レジスタのASELビットを“1” (A/D入力として使用する)にしてください。

- AD0CON0レジスタのTRGビットが“1” (外部トリガ・ハードウェアトリガ)の場合は、ADTRG端子に対応するポート方向ビット(PD9_7ビット)は“0” (入力)にしてください。

- φADは、VCC=4.2~5.5Vのとき16MHz以下に、VCC=3.0~4.2Vのとき10MHz以下にしてください。サンプル&ホールド機能なしの場合、φADの周波数は250kHz以上にしてください。サンプル&ホールド機能ありの場合、φADの周波数は1MHz以上にしてください。

- A/D動作モード(AD0CON0レジスタのMD1~MD0ビット、AD0CON1レジスタのMD2ビット)を変更した場合は、AD0CON0レジスタのCH2~CH0ビットまたは、AD0CON1レジスタのSCAN1~SCAN0ビットでアナログ入力端子を再選択してください。

- A/D変換結果がAD0iレジスタ(i=0~7)に格納される時にCPUがAD0iレジスタを読んだ場合、誤った値がAD0iレジスタに格納されることがあります。A/D変換が完了したことを確認してからAD0iレジスタを読んでください。
  単発モード、単掃引モードを使用する場合は、AD0ICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になったことを確認してから対象のAD0iレジスタを読んでください。
  繰り返しモード、繰り返し掃引モード0、繰り返し掃引モード1を使用する場合は、AD0CON3レジスタのDUSビットを“1”(DMAC利用モード有効)にすれば変換完了ごとに割り込み要求を発生させることができます。上と同様、AD0ICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になったことを確認してからAD00レジスタを読んでください。

- A/D変換中にAD0CON0レジスタのADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてA/D変換を中断した場合、A/Dコンバータの変換結果は不定となります。また、A/D変換を行っていないAD0iレジスタも不定になる場合があります。A/D変換を中断した場合は、いずれのAD0iレジスタの値も使用しないでください。

- DMAC利用モードでは、外部トリガは使用できません。また、変換結果のDMA転送を行う場合、AD00レジスタをプログラムで読まないでください。

- 単掃引モードでA/D変換中にAD0CON0レジスタのADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてA/D変換を中断した場合、掃引が終了していないにもかかわらず割り込み要求が発生することがあります。A/D変換を中断する場合は、割り込みを禁止した後、ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてください。

19. D/Aコンバータ

8ビットのR-2R抵抗ラダー方式によるD/Aコンバータです。独立した2つのD/Aコンバータがあります。

D/A変換は、対応したDAiレジスタ(i=0, 1)に値を書くと実行されます。変換結果を出力するかどうかはDACONレジスタのDAiEビットで選択してください。DAiEビットを“1”(出力許可)にするとDAi端子から変換結果が出力されます。なお、このとき対応するポートのプルアップは禁止されます。

出力されるアナログ電圧(V)は、DAiレジスタに設定した値n (nは10進数)で決まります。

$$V = \frac{VREF \times n}{256} \qquad (n = 0 \sim 255)$$

$VREF$: 基準電圧

表19.1にD/Aコンバータの仕様を、図19.1にD/Aコンバータのブロック図を、図19.2~図19.3にD/Aコンバータ関連レジスタを、図19.4にD/Aコンバータの等価回路を示します。

D/Aコンバータを使用しないときは、DAiレジスタを“00h”、DAiEビットを“0”(出力禁止)にしてください。

表19.1　D/Aコンバータの仕様

項目	仕様
変換方式	R-2R抵抗ラダー方式
分解能	8ビット
アナログ出力端子	2チャネル

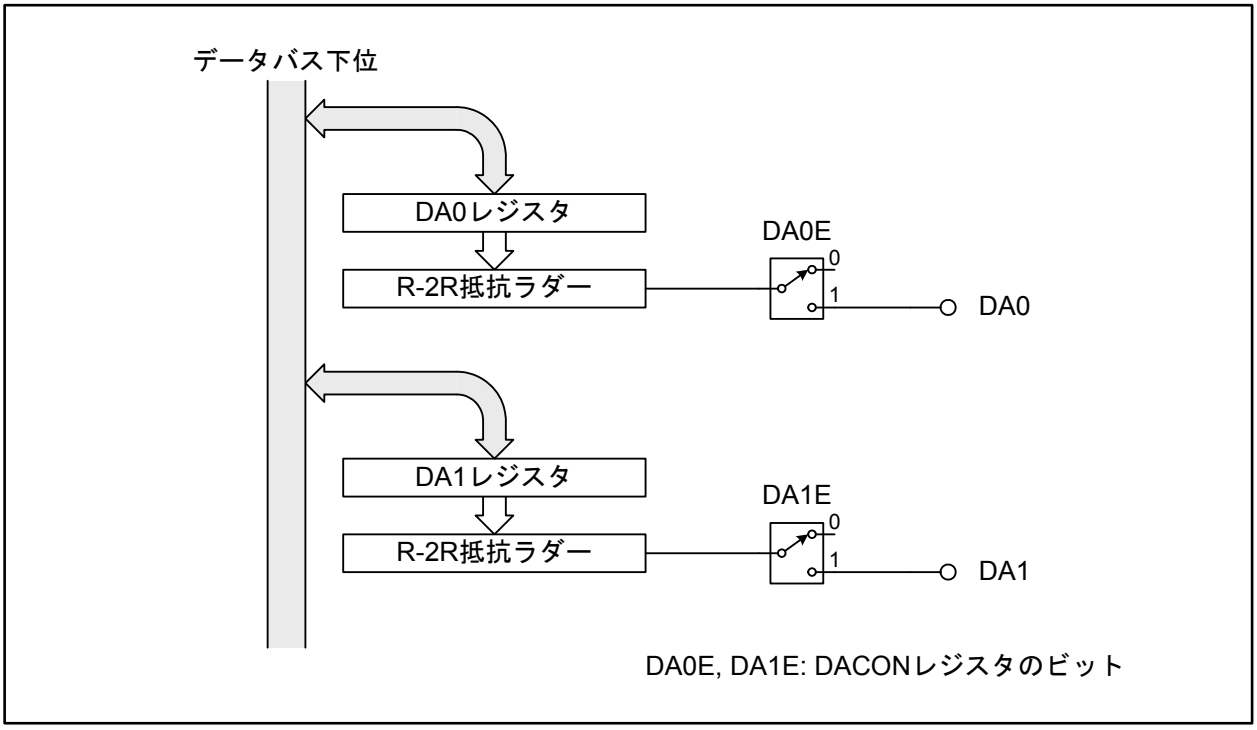
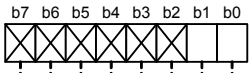


図19.1　D/Aコンバータのブロック図

D/A制御レジスタ

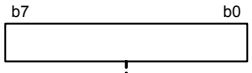


シンボル	アドレス	リセット後の値
DACON	039Ch番地	XXXX XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
DA0E	D/A0出力許可ビット	0: 出力禁止 1: 出力許可	RW
DA1E	D/A1出力許可ビット	0: 出力禁止 1: 出力許可	RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 19.2　DACON レジスタ

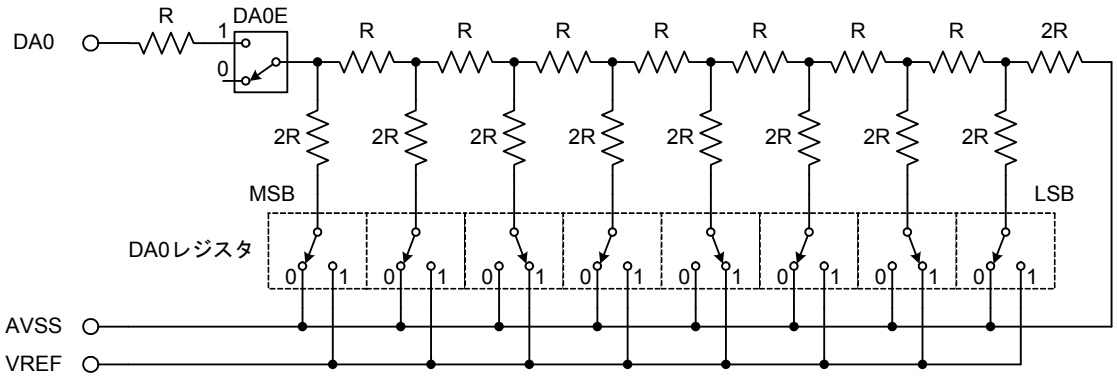
D/Aレジスタi (i=0, 1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
DA0, DA1	0398h、039Ah番地	不定

機　能	設定範囲	RW
D/A変換の出力値	00h~FFh	RW

図 19.3　DA0、DA1 レジスタ



注1. 上図はDA0レジスタの値が“2Ah”の場合です。
注2. この回路はD/A1においても同様です。
注3. D/A変換器を使用しない場合には、不要な消費電流を小さくするためにDAiEビット (i=0, 1) を“0”(出力禁止)にし、DAiレジスタを“00h”にして、R-2R抵抗ラダーに電流が流れないようにしてください。

図 19.4　D/Aコンバータの等価回路

20. CRC演算回路

CRC (Cyclic Redundancy Check)演算回路は、データブロックの誤り検出に使用します。CRCコードの生成にはCRC-CCITT ($X^{16}+X^{12}+X^{5}+1$)の生成多項式を使用します。

CRCコードは、8ビット単位の任意長データブロックに対し生成される16ビットのコードです。CRCコードは、CRCDレジスタに初期値を設定した後、1バイトのデータをCRCINレジスタに書くごとに、CRCDレジスタに設定されます。

図20.1にCRC演算回路のブロック図、図20.2~図20.3にCRCの関連レジスタを示します。また、図20.4にCRC演算例を示します。

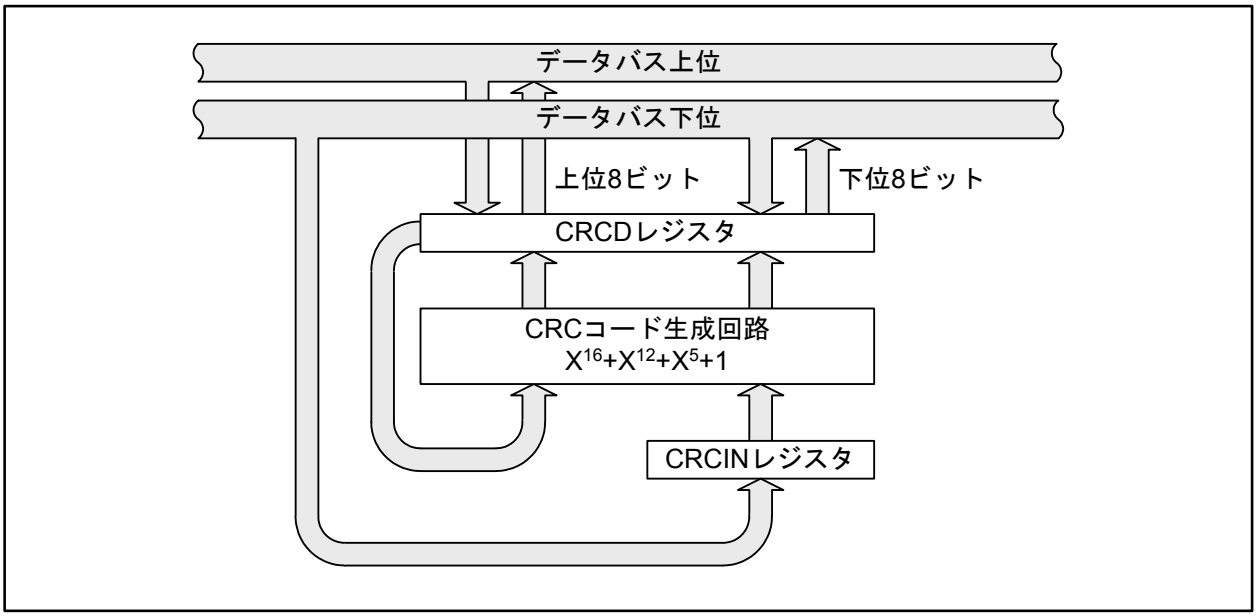
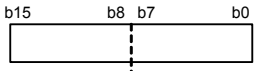


図20.1　CRC演算回路のブロック図

CRCデータレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
CRCD	037Dh-037Ch番地	不定

機　能	設定範囲	RW
CRC演算の結果が格納されています。 このレジスタにビット順を逆転した初期値を書いた後、 CRCINレジスタにデータを書くと、このレジスタからビット順を逆転したCRCコードが読めます	0000h~FFFFh	RW

図20.2　CRCDレジスタ

CRCインプットレジスタ

b7	b0	シンボル	アドレス	リセット後の値
		CRCIN	037Eh番地	不定

機　能	設定範囲	RW
データ入力。 データは、ビット順を逆転させてください	00h~FFh	RW

図 20.3　CRCIN レジスタ

“80C4h”のCRCコードを生成する場合の設定手順とCRC演算

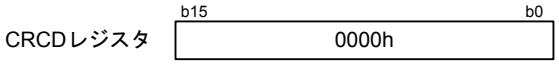
● CRC演算回路の仕様

CRCコード: CRCINレジスタに書いた値のビット順を逆転したものを被除数、生成多項式を除数とする除算の剰余
生成多項式: $X^{16}+X^{12}+X^{5}+1$ (1 0001 0000 0010 0001b)

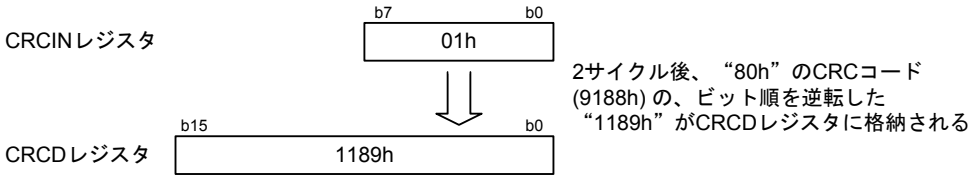
● 設定手順

(1) プログラムで“80C4h”のビット順をバイト単位で逆転させる
“80h”→“01h”、“C4h”→“23h”

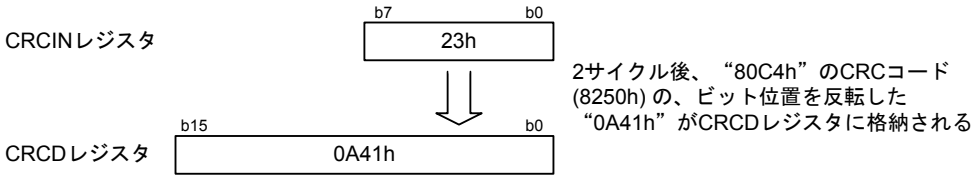
(2) CRCDレジスタに初期値:0000hを書く



(3) CRCINレジスタに80hのビット逆転値01hを書く

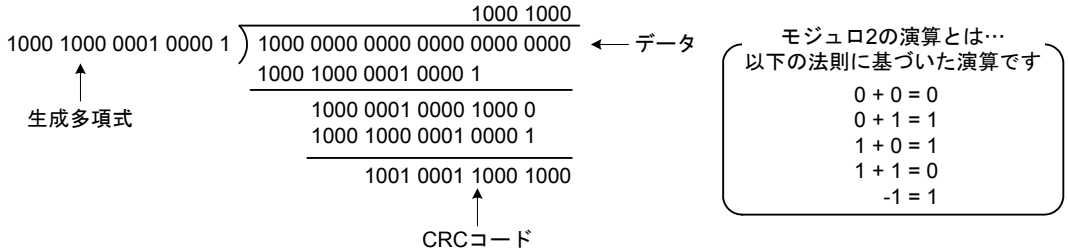


(4) CRCINレジスタにC4hのビット逆転値23hを書く



● CRC演算詳細

上記(3)の場合、“80h (1000 0000b)”を左へ16ビットシフトした“1000 0000 0000 0000 0000 0000b”と、CRCDレジスタの初期値“0000h”を左へ8ビットシフトした“0000 0000 0000 0000 0000 0000b”を加算した値のモジュロ2除算を行う。



剰余“1001 0001 1000 1000b (9188h)”のビット順を逆転した“0001 0001 1000 1001b (1189h)”がCRCDレジスタから読める。

続けて上記(4)の場合、“C4h (1100 0100b)”を左へ16ビットシフトした“1100 0100 0000 0000 0000 0000b”と、CRCDレジスタに残っている(3)の剰余を左へ8ビットシフトした“1001 0001 1000 1000 0000 0000b”を加算した値のモジュロ2除算を行う。
剰余“1000 0010 0101 0000b (8250h)”のビット順を逆転した“0000 1010 0100 0001b (0A41h)”がCRCDレジスタから読める。

図 20.4　CRC演算例

21. X-Y変換回路

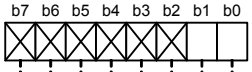
X-Y変換回路は16×16ビットのマトリクスデータを90度回転させたり、16ビットデータのビット順を逆転させることができます。

X-Y変換回路の動作はXYCレジスタにより設定します。図21.1にXYCレジスタを示します。

また、データの書き込みはXiRレジスタ(i=0~15)から、変換したデータの読み出しはYjRレジスタ(j=0~15)から行います。XiRレジスタとYjRレジスタは同一アドレスに配置されており、XiRレジスタは書き込み専用、YjRレジスタは読み出し専用です。

図21.2にXiRレジスタ、図21.3にYjRレジスタを示します。XiRレジスタとYjRレジスタは偶数番地から16ビット単位でアクセスしてください。8ビット単位でアクセスした時の動作は不定となります。

X-Y制御レジスタ

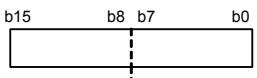


シンボル	アドレス	リセット後の値
XYC	02E0h番地	XXXX XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
XYC0	読み出しモード設定ビット	0: データ回転あり 1: データ回転なし	RW
XYC1	書き込みモード設定ビット	0: ビット逆転なし 1: ビット逆転あり	RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図21.1　XYCレジスタ

Xiレジスタ (i=0~15)(注1)



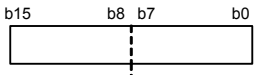
シンボル	アドレス	リセット後の値
X0R~X2R	02C1h-02C0h、02C3h-02C2h、02C5h-02C4h番地	不定
X3R~X5R	02C7h-02C6h、02C9h-02C8h、02CBh-02CAh番地	不定
X6R~X8R	02CDh-02CCh、02CFh-02CEh、02D1h-02D0h番地	不定
X9R~X11R	02D3h-02D2h、02D5h-02D4h、02D7h-02D6h番地	不定
X12R~X14R	02D9h-02D8h、02DBh-02DAh、02DDh-02DCh番地	不定
X15R	02DFh-02DEh番地	不定

機　能	設定範囲	RW
X-Y変換回路の入力値	0000h~FFFFh	WO

注1. 書き込みは16ビット単位で行ってください。

図21.2　X0R~X15Rレジスタ

Yjレジスタ (j=0~15)(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
Y0R~Y2R	02C1h-02C0h、02C3h-02C2h、02C5h-02C4h番地	不定
Y3R~Y5R	02C7h-02C6h、02C9h-02C8h、02CBh-02CAh番地	不定
Y6R~Y8R	02CDh-02CCh、02CFh-02CEh、02D1h-02D0h番地	不定
Y9R~Y11R	02D3h-02D2h、02D5h-02D4h、02D7h-02D6h番地	不定
Y12R~Y14R	02D9h-02D8h、02DBh-02DAh、02DDh-02DCh番地	不定
Y15R	02DFh-02DEh番地	不定

機　能	RW
X-Y変換回路の変換結果	RO

注1. 読み出しは16ビット単位で行ってください。

図 21.3　Y0R~Y15R レジスタ

21.1　読み出し時のデータ変換

YjR レジスタの読み出し方法は、XYC レジスタのXYC0ビットで選択できます。

XYC0ビットが“0” (データ回転あり) でYjR レジスタを読むと、X0R~X15R レジスタのビットjを同時に読めます。

例えば、Y0R レジスタを読むと、ビット0でX0R レジスタのビット0、ビット1でX1R レジスタのビット0、•••、ビット14でX14R レジスタのビット0、ビット15でX15R レジスタのビット0が読めます。同様にY15R レジスタを読むと、ビット0でX0R レジスタのビット15、ビット1でX1R レジスタのビット15、•••、ビット14でX14R レジスタのビット15、ビット15でX15R レジスタのビット15が読めます。

図 21.4にXYC0ビットが“0”の場合の変換テーブルを、図 21.5にX-Y変換例を示します。

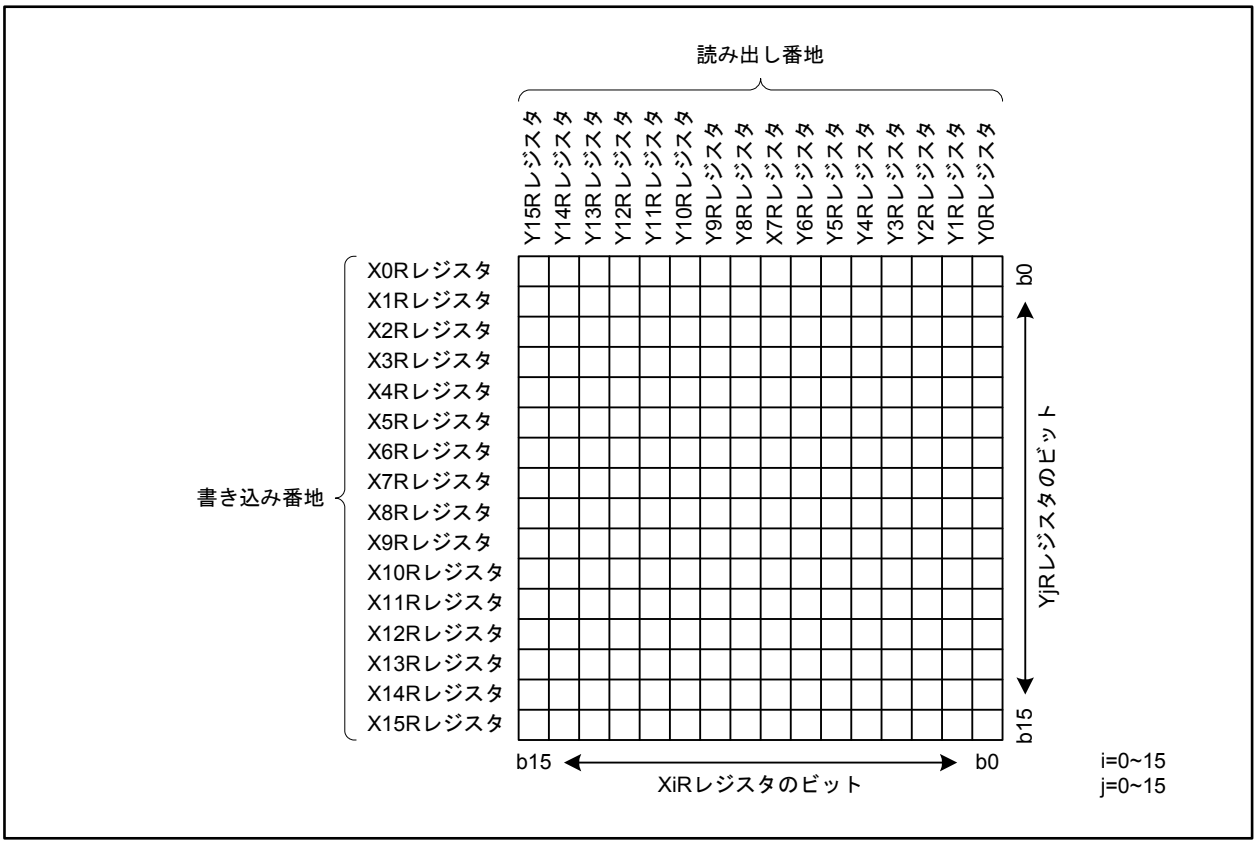


図 21.4　XYC0ビットが“0”の場合の変換テーブル図

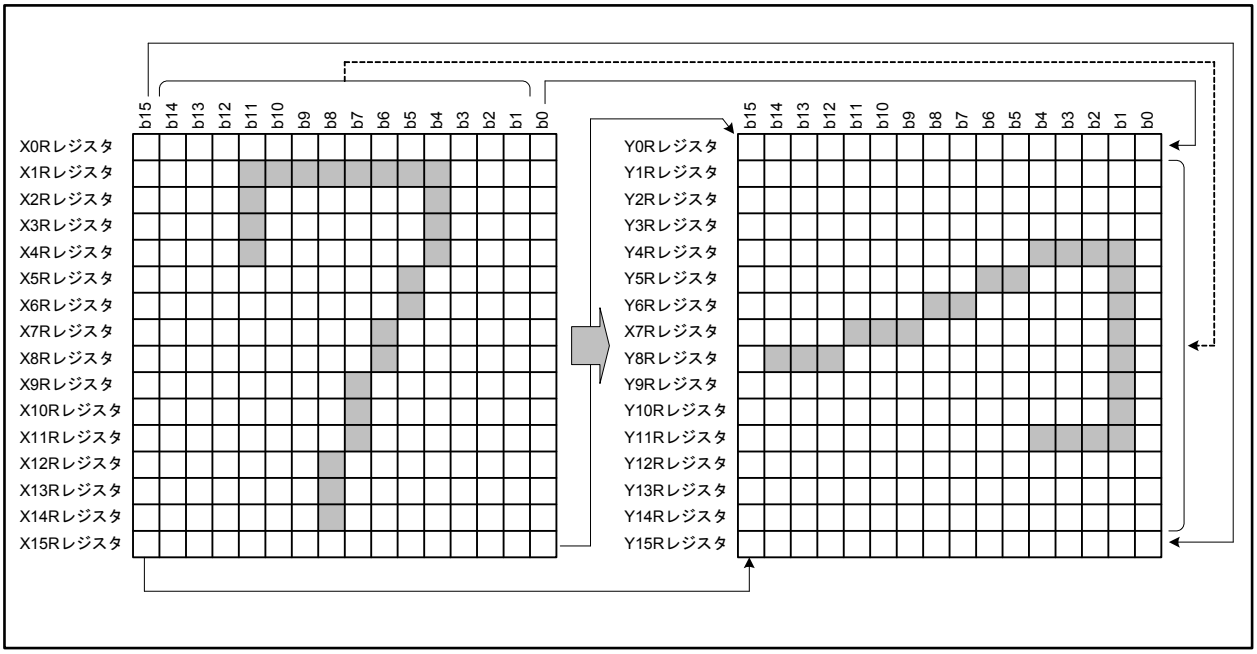


図 21.5　X-Y変換例

XYCレジスタのXYC0ビットを“1”(データ回転なし)にしてYjRレジスタを読むと、XiRレジスタに書かれた値がそのまま読めます。図21.6にXYC0ビットが“1”の場合の変換テーブルを示します。

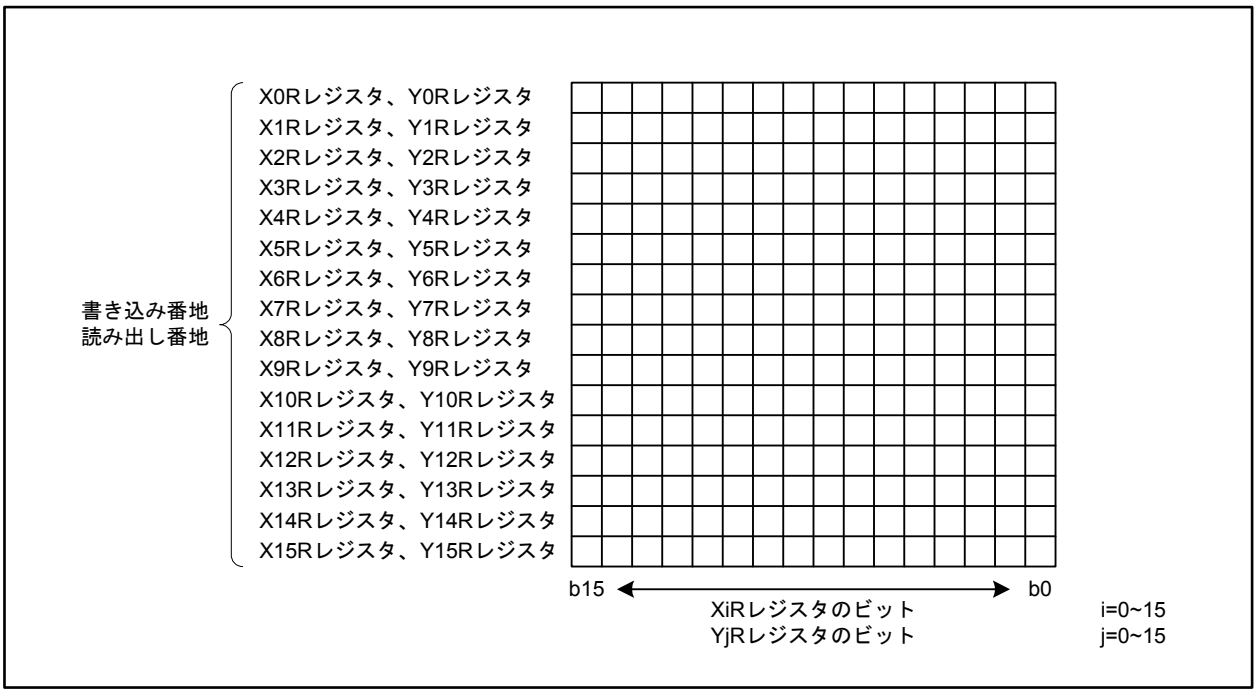


図21.6　XYC0ビットが“1”の場合の変換テーブル

21.2　書き込み時のデータ変換

XiRレジスタに書く値のビット配置は、XYCレジスタのXYC1ビットで選択できます。

XYC1ビットを“0”(ビット逆転なし)にしてXiRレジスタに書くと、ビット順はそのまま書かれます。

XYC1ビットを“1”(ビット逆転あり)にしてXiRレジスタに書くと、ビット順を逆転して書きます。図21.7にXYC1ビットが“1”の場合の変換を示します。

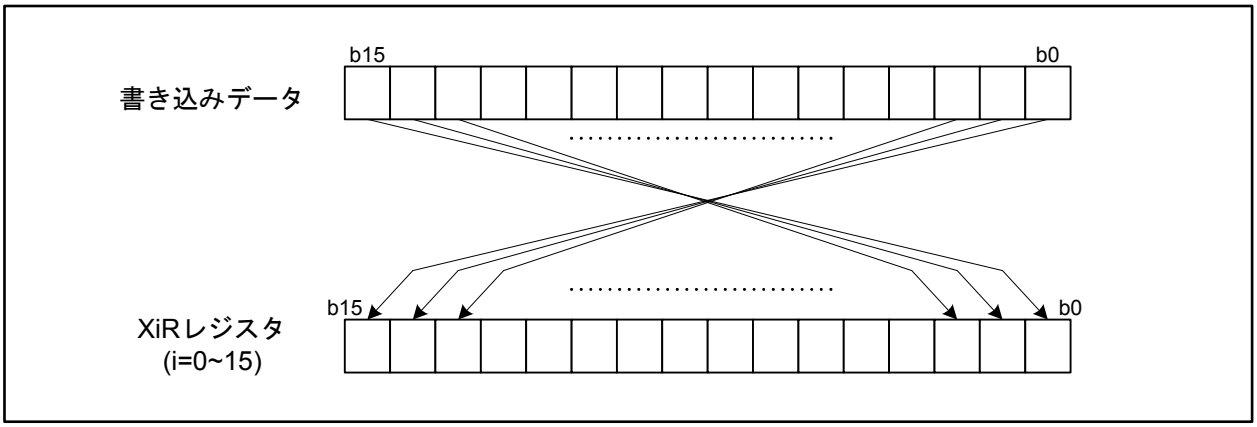


図21.7　XYC1ビットが“1”の場合の変換

22. インテリジェントI/O

インテリジェントI/Oは、時間計測、波形生成を実現できる高機能入出力ポートです。

インテリジェントI/Oは2つのグループがあり、各グループは、フリーラン動作を行う16ビットベースタイマを1本、時間計測または波形生成用16ビットレジスタを8本備えています。

表22.1にインテリジェントI/Oの機能とチャネルを示します。

表22.1　インテリジェントI/Oの機能とチャネル

機能		グループ0	グループ1
時間計測(注1)	デジタルフィルタ	8チャネル	8チャネル
	トリガ入力プリスケーラ	2チャネル	2チャネル
	トリガ入力ゲート	2チャネル	2チャネル
	デジタルデバウンス	1チャネル	1チャネル
波形生成(注1)	単相波形出力モード	8チャネル	8チャネル
	反転波形出力モード	8チャネル	8チャネル
	SR波形出力モード	8チャネル	8チャネル
	位相シフト波形出力モード	8チャネル	8チャネル

注1.　時間計測機能と波形生成機能は端子を共有しています。

時間計測機能と波形生成機能は、チャネルごとに機能を選択できます。

図22.1、図22.2にインテリジェントI/Oのブロック図を示します。

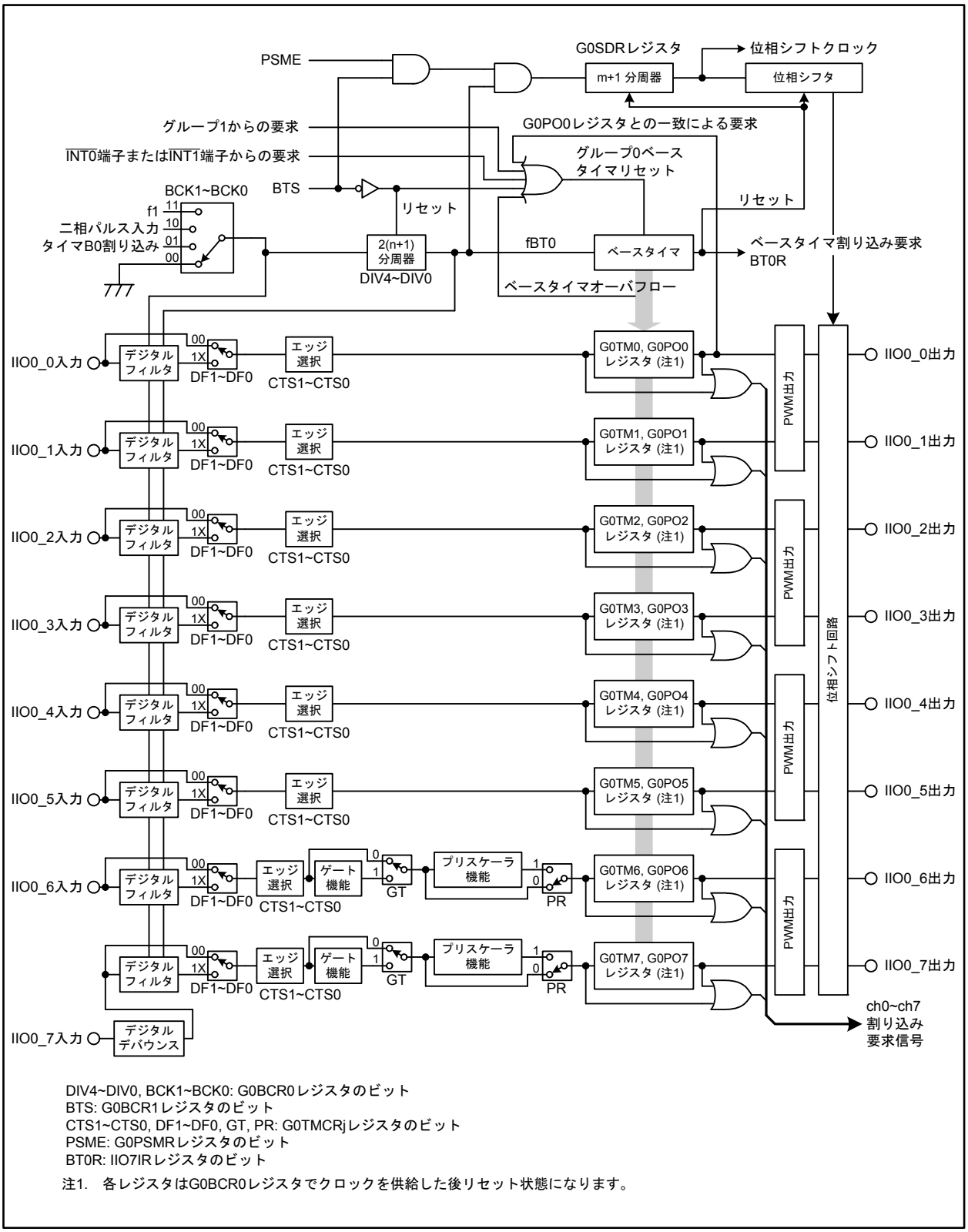


図 22.1 インテリジェントI/Oグループ0ブロック図(j=0~7)

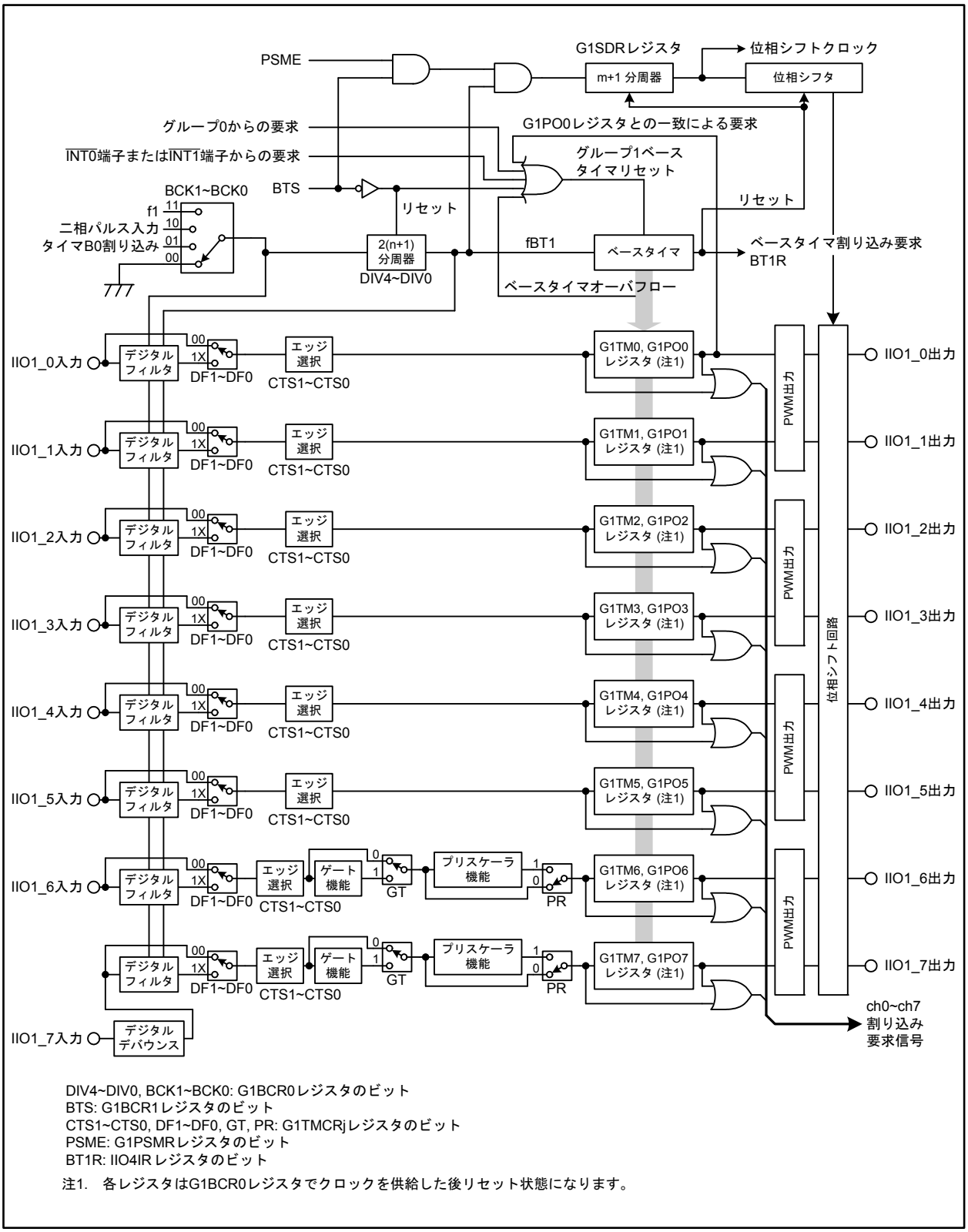
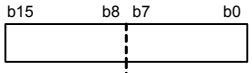


図 22.2 インテリジェントI/Oグループ1ブロック図(j=0~7)

図 22.3~図 22.14にインテリジェントI/Oのベースタイマ、時間計測機能、波形生成機能関連レジスタを示します。

グループi ベースタイマレジスタ (i=0, 1) (注1)



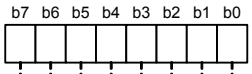
シンボル	アドレス	リセット後の値
G0BT, G1BT	01A1h-01A0h、0121h-0120h番地	不定

機　能	設定範囲	RW
・ベースタイマ動作中 読むと、ベースタイマ値が読める。書くと、書いた直後に書いた値からカウントする。ベースタイマをリセットすると“0000h”になる ・ベースタイマリセット中 “0000h”になるが、読んだ値は不定。値は書けない (注2)	0000h~FFFFh	RW

注1. GiBTレジスタには、fBTiの半周期遅れてベースタイマの値が反映されます。
注2. ベースタイマは、GiBCR0レジスタのBCK1~BCK0ビットが“00b”(カウントソースクロック停止) のとき停止、それ以外は動作します。ただし、GiBCR1レジスタのBTSビットを“0”(ベースタイマリセット) にすることにより、“0000h”のままカウントしない状態にすることができます。BTSビットを“1”(ベースタイマカウント開始) にすると、この状態が解除され、カウントを開始します。

図 22.3　G0BT、G1BT レジスタ

グループi ベースタイマ制御レジスタ0 (i=0, 1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
G0BCR0, G1BCR0	01A2h、0122h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BCK0	カウントソース選択ビット (注1)	b1 b2 0 0 : クロック停止 0 1 : タイマB0割り込み (注2) 1 0 : 二相パルス入力 (注3) 1 1 : f1	RW
BCK1			RW
DIV0	カウントソース分周比選択ビット	設定値をn (n=0~31) とすると、カウントソースを 2(n+1) 分周する。ただし、n=31 のときは分周なし b6 b5 b4 b3 b2 0 0 0 0 0 : 2分周 (n=0) 0 0 0 0 1 : 4分周 (n=1) 0 0 0 1 0 : 6分周 (n=2) : 1 1 1 1 0 : 62分周 (n=30) 1 1 1 1 1 : 分周なし (n=31) (注2)	RW
DIV1			RW
DIV2			RW
DIV3			RW
DIV4			RW
IT	ベースタイマ割り込み要因選択ビット	0: ビット15またはビット9のオーバフロー 1: ビット14のオーバフロー	RW

注1. インテリジェントI/Oの各レジスタは、本レジスタでカウントソースを選択してクロックを供給した後に初期化されます。この初期化動作ために、一旦カウントソースにf1を選択してください。
注2. BCK1~BCK0ビットに“01b”を選択したときは、DIV4~DIV0ビットに“11111b”を設定しないでください。
注3. GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“10b”(二相パルス信号処理モード) の場合のみ使用できます。
他のモードではBCK1~BCK0ビットを“10b”にしないでください。

図 22.4　G0BCR0、G1BCR0 レジスタ

グループi ベースタイマ制御レジスタ1 (i=0, 1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0				0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0BCR1, G1BCR1	01A3h、0123h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RST0	ベースタイマリセット要因選択ビット0	0: この要因ではベースタイマをリセットしない 1: 他グループのベースタイマのベースタイマリセットに同期してベースタイマをリセットする (注1)	RW
RST1	ベースタイマリセット要因選択ビット1	0: この要因ではベースタイマをリセットしない 1: GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットする (注2)	RW
RST2	ベースタイマリセット要因選択ビット2	0: この要因ではベースタイマをリセットしない 1: $\overline{\text{INT0}}$/$\overline{\text{INT1}}$端子への“L”入力でベースタイマをリセットする (注3)	RW
— (b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
BTS	ベースタイマスタートビット	0: ベースタイマリセット 1: ベースタイマカウント開始	RW
UD0	アップ、ダウン制御ビット	b6 b5 0 0 : アップカウントモード 0 1 : アップダウンカウントモード 1 0 : 二相パルス信号処理モード(注4) 1 1 : 設定しないでください	RW
UD1			RW
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. グループ0の場合グループ1ベースタイマ、グループ1の場合グループ0ベースタイマのベースタイマリセットに同期してベースタイマをリセットします。

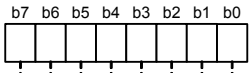
注2. ベースタイマとGiPO0レジスタの値が一致すると、fBTiの2クロックサイクル後にベースタイマをリセットします。RST1ビットが“1”の場合、波形生成機能に使用するGiPOjレジスタ (j=1~7) の値は、GiPO0レジスタより小さな値にしてください。

注3. IFS2レジスタでUDiZ信号用に選択した外部割り込み入力端子に“L”を入力すると、ベースタイマをリセットします。

注4. 二相パルス信号処理モードでは、RST1ビットが“1”でもGiPO0レジスタとベースタイマが一致した2サイクル後がダウンカウントの場合、ベースタイマはリセットされません。

図 22.5　G0BCR1、G1BCR1 レジスタ

グループi 時間計測制御レジスタj (i=0, 1、j=0~7)



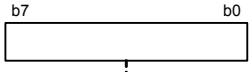
シンボル	アドレス	リセット後の値
G0TMCR0~G0TMCR3	0198h、0199h、019Ah、019Bh番地	0000 0000b
G0TMCR4~G0TMCR7	019Ch、019Dh、019Eh、019Fh番地	0000 0000b
G1TMCR0~G1TMCR3	0118h、0119h、011Ah、011Bh番地	0000 0000b
G1TMCR4~G1TMCR7	011Ch、011Dh、011Eh、011Fh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CTS0	時間計測トリガ選択ビット	b1 b0 0 0 : 時間計測しない 0 1 : 立ち上がりエッジ 1 0 : 立ち下がりエッジ 1 1 : 両エッジ	RW
CTS1			RW
DF0	デジタルフィルタ機能選択ビット	b3 b2 0 0 : デジタルフィルタなし 0 1 : 設定しないでください 1 0 : fBTi 1 1 : f1	RW
DF1			RW
GT	ゲート機能選択ビット (注1)	0: ゲート機能を使用しない 1: ゲート機能を使用する	RW
GOC	ゲート機能解除選択ビット (注1、2)	0: ゲート機能解除選択しない 1: ベースタイマとGiPOkレジスタ (k=j-2) の一致により、ゲートを解除する	RW
GSC	ゲート機能解除ビット (注1、2)	このビットに“1”を書くと、ゲートが解除される	RW
PR	プリスケーラ機能選択ビット (注1)	0: 使用しない 1: 使用する	RW

注1. これらの機能は、GiTMCR6レジスタとGiTMCR7レジスタにあります。
GiTMCR0~GiTMCR5レジスタのビット4~7は、すべて“0”にしてください。
注2. これらのビットは、GTビットが“1”のときのみ有効です。

図 22.6　G0TMCR0~G0TMCR7、G1TMCR0~G1TMCR7 レジスタ

グループi 時間計測プリスケーラレジスタj (i=0, 1、j=6, 7)



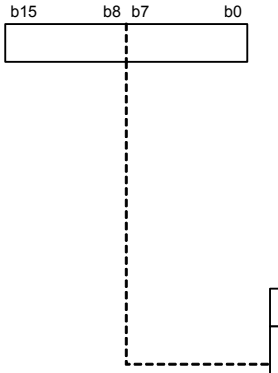
シンボル	アドレス	リセット後の値
G0TPR6, G0TPR7	01A4h、01A5h番地	00h
G1TPR6, G1TPR7	0124h、0125h番地	00h

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、トリガ入力をn+1カウントするごとに時間計測を行う (注1)	00h~FFh	RW

注1. GiTMCRjレジスタのPRビットを“0”(プリスケーラ機能を使用しない) から“1”(プリスケーラ機能を使用する) にした後の最初のプリスケーラ周期は、n+1 にならず n になることがあります。それ以降の周期では、n+1 になります。

図 22.7　G0TPR6、G0TPR7、G1TPR6、G1TPR7 レジスタ

グループi 時間計測レジスタj (i=0, 1、j=0~7)

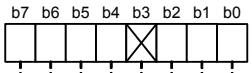


シンボル	アドレス	リセット後の値
G0TM0, G0TM1	0181h-0180h、0183h-0182h番地	不定
G0TM2, G0TM3	0185h-0184h、0187h-0186h番地	不定
G0TM4, G0TM5	0189h-0188h、018Bh-018Ah番地	不定
G0TM6, G0TM7	018Dh-018Ch、018Fh-018Eh番地	不定
G1TM0, G1TM1	0101h-0100h、0103h-0102h番地	不定
G1TM2, G1TM3	0105h-0104h、0107h-0106h番地	不定
G1TM4, G1TM5	0109h-0108h、010Bh-010Ah番地	不定
G1TM6, G1TM7	010Dh-010Ch、010Fh-010Eh番地	不定

機　能	設定範囲	RW
時間計測タイミングごとにベースタイマ値が格納される	—	RO

図 22.8　G0TM0~G0TM7、G1TM0~G1TM7 レジスタ

グループi 波形生成制御レジスタj (i=0, 1、j=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
G0POCR0	0190h番地	0000 X000b
G0POCR1~G0POCR3	0191h、0192h、0193h番地	0X00 X000b
G0POCR4~G0POCR7	0194h、0195h、0196h、0197h番地	0X00 X000b
G1POCR0	0110h番地	0000 X000b
G1POCR1~G1POCR3	0111h、0112h、0113h番地	0X00 X000b
G1POCR4~G1POCR7	0114h、0115h、0116h、0117h番地	0X00 X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MOD0	動作モード選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : 単相波形出力モード 0 0 1 : SR波形出力モード (注1) 0 1 0 : 反転波形出力モード 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
MOD1			RW
MOD2			RW
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
IVL	出力初期値選択ビット (注2)	0: 初期値として“L”を出力 1: 初期値として“H”を出力	RW
RLD	GiPOjレジスタ値リロードタイミング選択ビット	0: 書き込み時にリロード 1: ベースタイマリセット時にリロード	RW
BTRE	ベースタイマリセット許可ビット (注3)	0: ベースタイマのビット15のオーバフローでベースタイマをリセットする 1: ベースタイマのビット9のオーバフローでベースタイマをリセットする (注4)	RW
INV	反転出力機能選択ビット (注5)	0: 出力を反転しない 1: 出力を反転する	RW

注1. この設定は偶数チャネルのみ有効です。SR波形出力モードが選択された場合、対応する奇数チャネル (偶数チャネルの次のチャネル) に書いた値に意味は持ちません。波形は偶数チャネルより出力されます。奇数チャネルからは出力されません。
注2. GiFSレジスタのFSCjビットが“0”(波形生成機能を選択) で、GiFEレジスタのIFEjビットが“1”(チャネルjの機能を許可) のとき、IVLビットに値を書くと設定した値が出力されます。
注3. GiPOCR0レジスタのみにあります。GiPOCR1~GiPOCR7レジスタのビット6は“0”にしてください。
注4. BTREビットを“1”にする場合、GiBCR0レジスタのBCK1~BCK0ビットを“01b”(タイマB0割り込み) または“11b”(f1)、GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットを“00b”(アップカウントモード) にしてください。
注5. 反転出力機能は、波形生成回路の最終段にあります。このため、INVビットを“1”(出力を反転する) にした場合、IVLビットを“0”(初期値として“L”を出力) にすると“H”を、IVLビットを“1”(初期値として“H”を出力) にすると“L”を出力します。

図 22.9　G0POCR0~G0POCR7、G1POCR0~G1POCR7 レジスタ

グループi 波形生成レジスタj (i=0, 1、j=0~7)

b15　b8　b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0PO0~G0PO2	0181h-0180h、0183h-0182h、0185h-0184h番地	不定
G0PO3~G0PO5	0187h-0186h、0189h-0188h、018Bh-018Ah番地	不定
G0PO6, G0PO7	018Dh-018Ch、018Fh-018Eh番地	不定
G1PO0~G1PO2	0101h-0100h、0103h-0102h、0105h-0104h番地	不定
G1PO3~G1PO5	0107h-0106h、0109h-0108h、010Bh-010Ah番地	不定
G1PO6, G1PO7	010Dh-010Ch、010Fh-010Eh番地	不定

機　能	設定範囲	RW
・GiPOCRjレジスタのRLDビットが“0”のとき 書いた直後に値がGiPOjレジスタにリロードされ出力波形に反映される ・GiPOCRjレジスタのRLDビットが“1”のとき ベースタイマリセット時に値がリロードされる。 このとき書いてからリロードされるまでの間にこのレジスタを読むと、書いた値が読める	0000h~FFFFh	RW

図 22.10　G0PO0~G0PO7、G1PO0~G1PO7 レジスタ

グループi 位相シフト波形出力モードクロック分周比設定レジスタ (i=0, 1) (注1)

b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0SDR, G1SDR	0200h、0202h番地	00h

機　能	設定範囲	RW
設定値を m とすると、ベースタイマカウントソース (fBTi) を m+1 分周する	01h~FFh	RW

注1. このレジスタはベースタイマリセット中に書き換えてください。

図 22.11　G0SDR、G1SDR レジスタ

グループi 位相シフト波形出力モード制御レジスタ (i=0, 1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0	0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0PSCR, G1PSCR	0201h、0203h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSME	位相シフト波形出力モード許可ビット (注1)	0: 位相シフト波形出力モード無効 1: 位相シフト波形出力モード有効 (注2)	RW
PSS0	位相シフト波形出力チャネル選択ビット	b2 b1 0 0 : IIOi_0~IIOi_4を使用 0 1 : IIOi_0~IIOi_5を使用 1 0 : IIOi_0~IIOi_6を使用 1 1 : IIOi_0~IIOi_7を使用	RW
PSS1			
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このビットを“1”にする場合は、PSS1~PSS0ビットで使用するチャネルを選択してください。
また、使用するチャネルの動作モードを単相波形出力モード (GiPOCRjレジスタのMOD2~MOD0ビットを“000b”) にしてください。

注2. 位相シフト波形出力モードでは、このビットを“1”にした後、ベースタイマのカウントを開始してください。

図 22.12 G0PSCR、G1PSCR レジスタ

グループi 機能選択レジスタ (i=0, 1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0FS, G1FS	01A7h、0127h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
FSC0	チャネル0時間計測、波形生成機能選択ビット	0: 波形生成機能を選択 1: 時間計測機能を選択	RW
FSC1	チャネル1時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC2	チャネル2時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC3	チャネル3時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC4	チャネル4時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC5	チャネル5時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC6	チャネル6時間計測、波形生成機能選択ビット		RW
FSC7	チャネル7時間計測、波形生成機能選択ビット		RW

図 22.13 G0FS、G1FS レジスタ

グループi 機能許可レジスタ (i=0, 1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
G0FE, G1FE	01A6h、0126h番地	0000 0000b

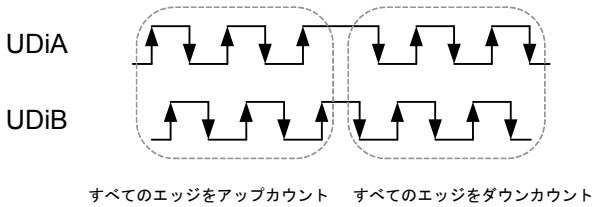
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFE0	チャネル0機能許可ビット	0: チャネルjの機能を停止 1: チャネルjの機能を動作 (j=0~7)	RW
IFE1	チャネル1機能許可ビット		RW
IFE2	チャネル2機能許可ビット		RW
IFE3	チャネル3機能許可ビット		RW
IFE4	チャネル4機能許可ビット		RW
IFE5	チャネル5機能許可ビット		RW
IFE6	チャネル6機能許可ビット		RW
IFE7	チャネル7機能許可ビット		RW

図 22.14　G0FE、G1FE レジスタ

22.1　ベースタイマ

内部で生成されたカウントソースをフリーランカウントします。表 22.2 にベースタイマの仕様を、図 22.3~図 22.14 にベースタイマ関連レジスタを、図 22.15 にベースタイマのブロック図を、図 22.16 にベースタイマアップカウントモードの動作例を、図 22.17 にベースタイマアップダウンカウントモードの動作例を、図 22.18 に二相パルス信号処理モードの動作例を示します。

表 22.2　ベースタイマの仕様 (i=0, 1)

項目	仕様
カウントソース(fBTi)	f1の2(n+1)分周、二相パルス入力の2(n+1)分周 n: GiBCR0レジスタのDIV4~DIV0ビットで設定。n=0~31。ただしn=31の場合、分周しない タイマB0割り込みの2(m+1)分周 m: GiBCR0レジスタのDIV4~DIV0ビットで設定。m=0~30
カウント動作	•アップカウント •アップダウンカウント •二相パルス処理
カウント開始条件	GiBCR1レジスタのBTSビットを“1”(ベースタイマカウント開始)にする
カウント停止条件	GiBCR1レジスタのBTSビットを“0”(ベースタイマリセット)にする
ベースタイマリセット条件	•ベースタイマとGiPO0レジスタの値が一致 •外部割り込み端子($\overline{INT0}$または$\overline{INT1}$)に“L”を入力 グループ0: IFS2レジスタのIFS23~IFS22ビットで選択 グループ1: IFS2レジスタのIFS27~IFS26ビットで選択 •ベースタイマビット15のオーバフロー、ベースタイマビット9のオーバフロー時
ベースタイマリセット時の値	“0000h”
割り込み要求	ベースタイマのビット9または、ビット14、ビット15のオーバフロー時に、割り込み要求レジスタのBTiRビットが“1”(割り込み要求あり)になる(図10.13参照)
ベースタイマの読み出し	•ベースタイマ動作中にGiBTレジスタを読むとベースタイマ値が読める •ベースタイマのリセット中にGiBTレジスタを読むと不定値になる
ベースタイマへの書き込み	ベースタイマ動作中に値を書いた場合、書いた直後に書いた値からカウントされる。ベースタイマのリセット中は書けない
選択機能	•アップダウンカウントモード BTSビットを“1”にするとベースタイマはカウントを開始し、“FFFFh”になるとダウンカウントする。また、GiBCR1レジスタのRST1ビットが“1”(GiPO0レジスタとの一致でベースタイマをリセットする)の場合、GiPO0レジスタと一致した2カウント後にダウンカウントする。次に“0000h”になると再びアップカウントする(図 22.17参照) •二相パルス処理モード UDiA、UDiBからの二相パルスをカウントする(図 22.18参照) 

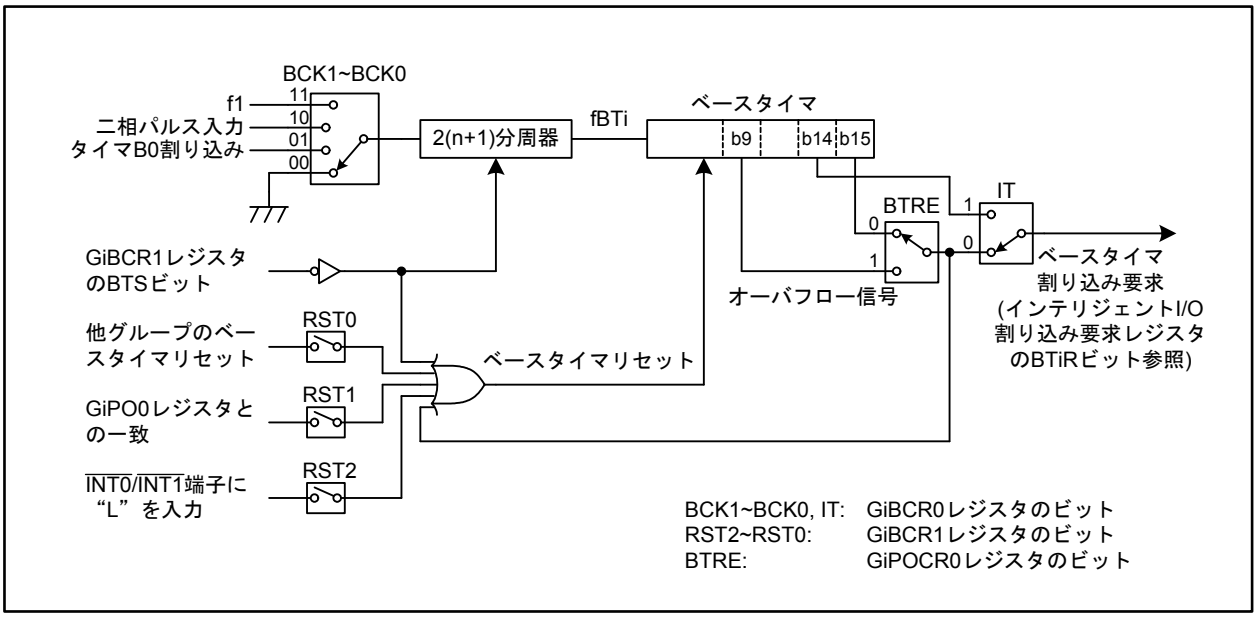


図 22.15 ベースタイマのブロック図(i=0, 1)

表 22.3 ベースタイマ関連レジスタの設定(時間計測機能、波形生成機能、通信機能共通)(i=0, 1)

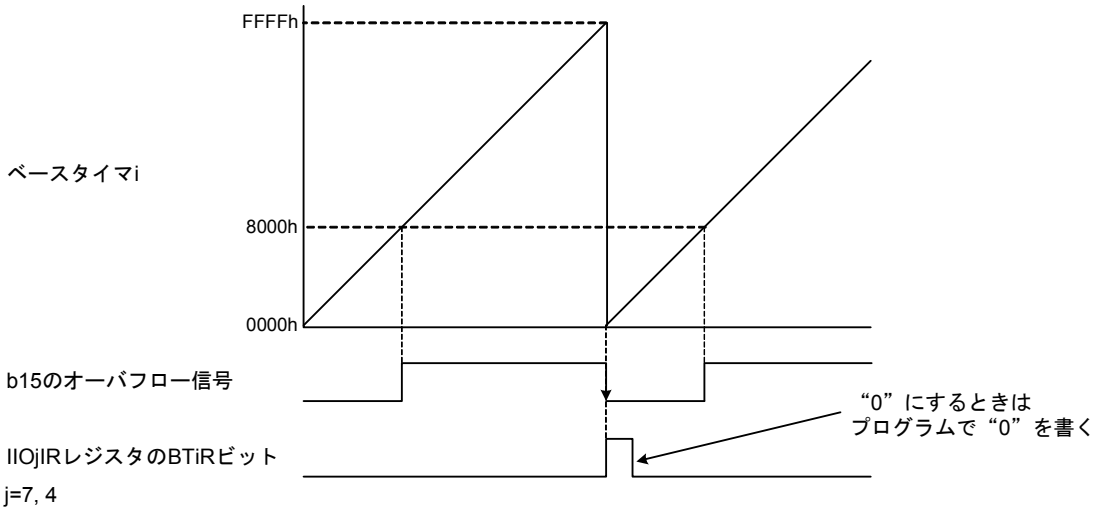
レジスタ	ビット	機能
GiBCR0	BCK1~BCK0	カウントソース選択
	DIV4~DIV0	カウントソース分周比選択
	IT	ベースタイマ割り込み選択
GiBCR1	RST2~RST0	ベースタイマリセットタイミング選択
	BTS	ベースタイマを別々で開始する場合使用
	UD1~UD0	カウント方法選択
GiPOCR0	BTRE	ベースタイマリセット要因選択
GiBT	—	ベースタイマの値を読む、または書く

RST1ビットが“1”(ベースタイマとGiPO0の一致でベースタイマをリセット)の場合以下のレジスタの設定が必要です。

GiPOCR0	MOD2~MOD0	“000b”(単相波形出力モード)にしてください
GiPO0	—	リセット周期を設定してください
GiFS	FSC0	“0”(波形生成機能)にしてください
GiFE	IFE0	“1”(チャネル0の機能を動作)にしてください

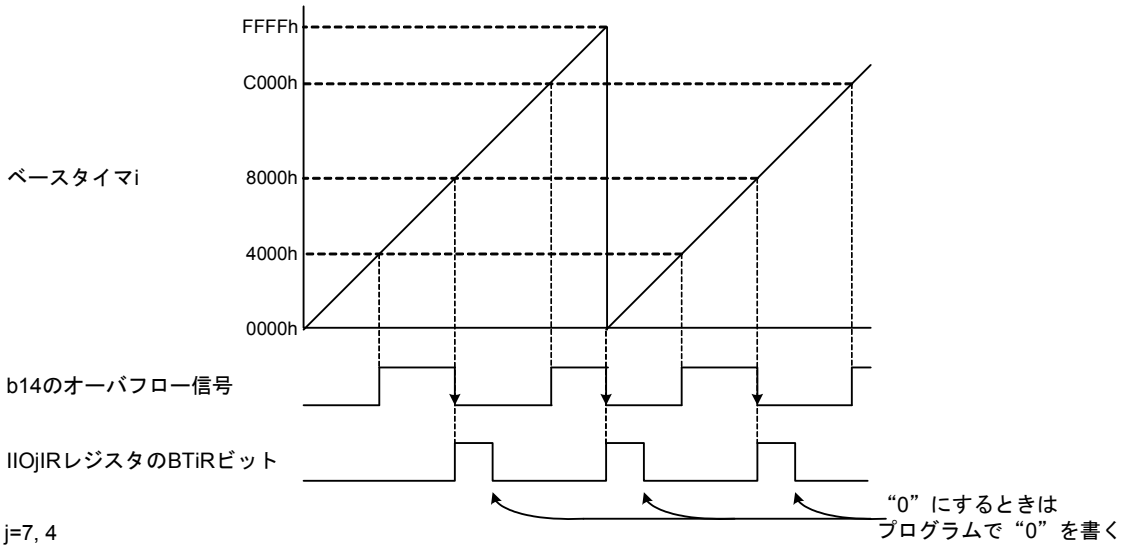
グループによって、ビット構成、機能が違います。

(1) GiBCR0レジスタのITビットが“0”(ビット15のオーバフローでベースタイマ割り込み) の場合



この図は以下の条件の場合です。
・GiBCR1レジスタのRST1ビットが“0”(GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットしない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

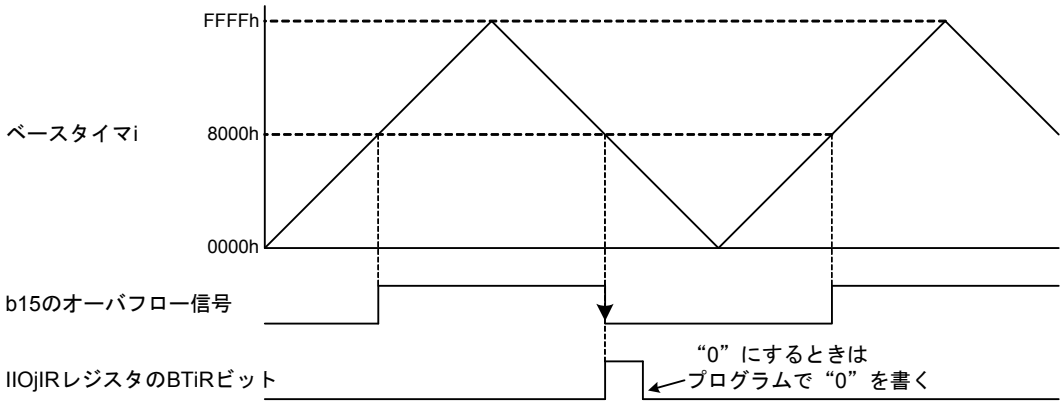
(2) GiBCR0レジスタのITビットが“1”(ビット14のオーバフローでベースタイマ割り込み) の場合



この図は以下の条件の場合です。
・GiBCR1レジスタのRST1ビットが“0”(GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットしない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

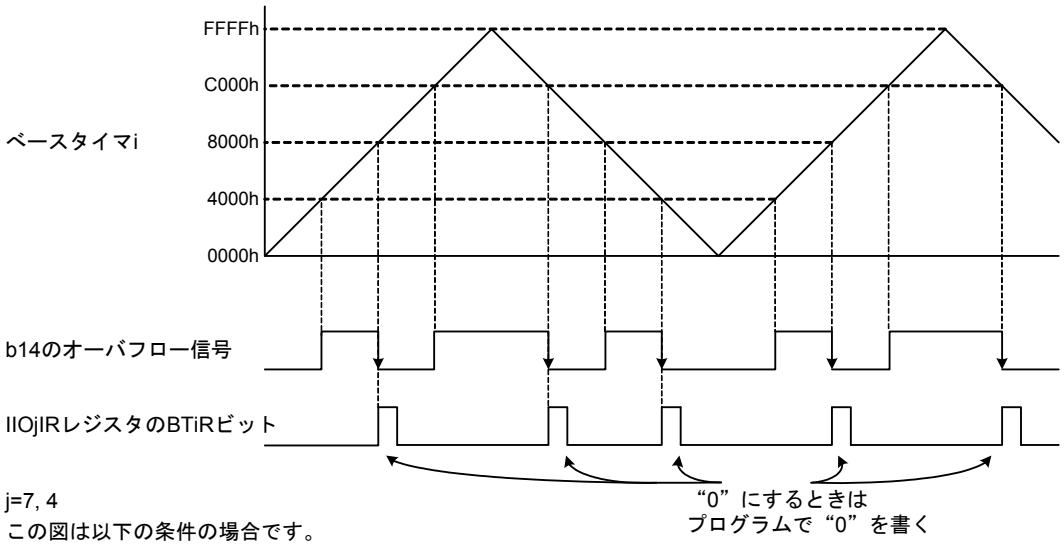
図 22.16 ベースタイマのアップモードの動作例(i=0, 1)

(1) GiBCR0レジスタのITビットが“0”(ビット15のオーバフローでベースタイマ割り込み) の場合



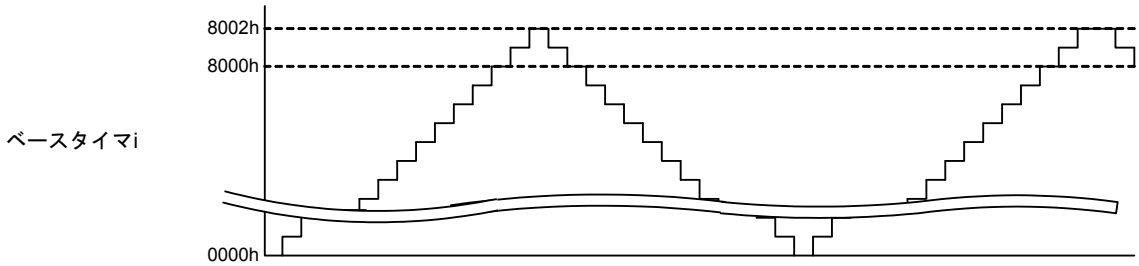
j=7, 4
この図は以下の条件の場合です。
・GiBCR1レジスタのRST1ビットが“0”(GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットしない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“01b”(アップダウンカウントモード)

(2) GiBCR0レジスタのITビットが“1”(ビット14のオーバフローでベースタイマ割り込み) の場合



j=7, 4
この図は以下の条件の場合です。
・GiBCR1レジスタのRST1ビットが“0”(GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットしない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“01b”(アップダウンカウントモード)

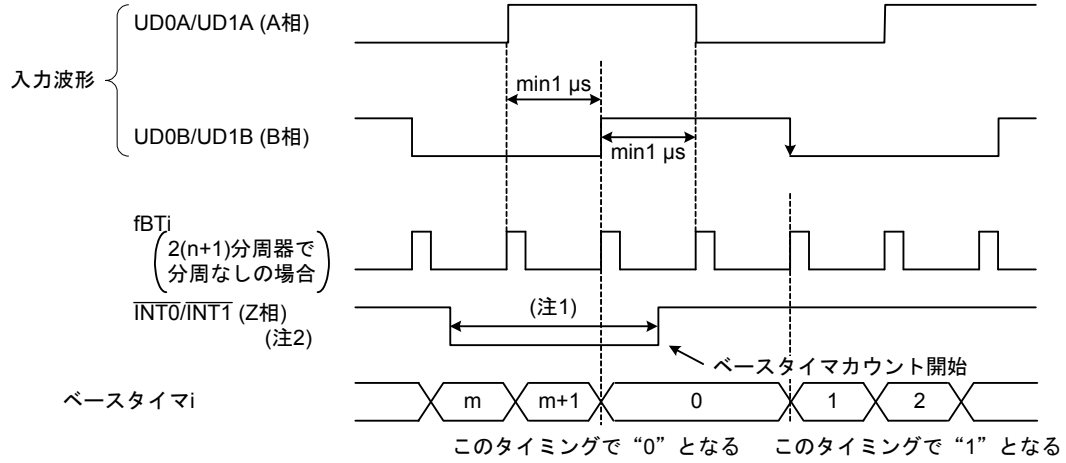
(3) GiBCR1レジスタのRSTビットが“1”(GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットする) 場合



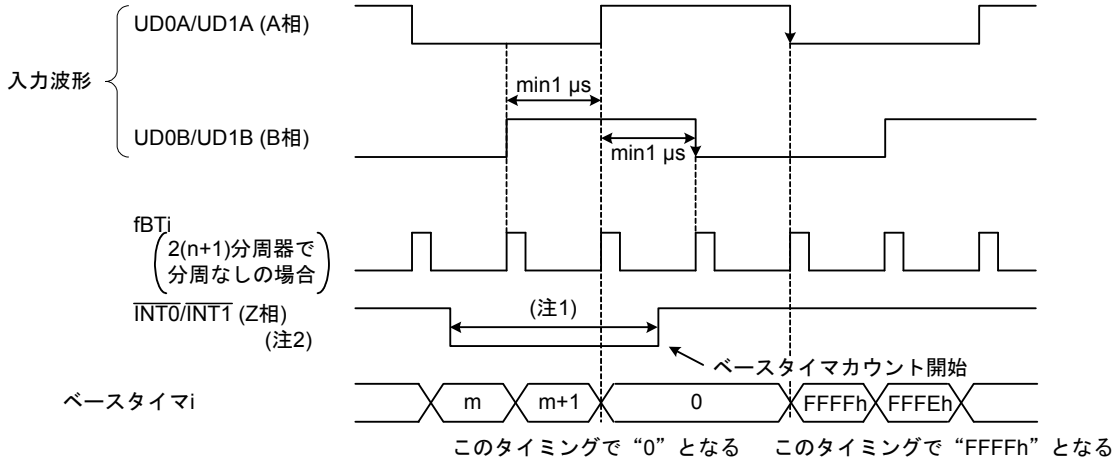
この図は以下の条件の場合です。
・GiPO0レジスタ値“8000h”
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“01b”(アップダウンカウントモード)

図 22.17 ベースタイマのアップダウンモードの動作例(i=0, 1)

(1)アップカウント中にベースタイマをリセットした場合



(2)ダウンカウント中にベースタイマをリセットした場合



注1. fBTiの1.5サイクル以上の幅が必要です。
注2. 二相パルス信号処理モードを使用する場合、GiBCR1レジスタのRST2ビットを“1”にしてください。

図 22.18 ベースタイマの二相パルス信号処理モードの動作例 (i=0, 1)

22.2 時間計測機能

外部トリガが入力されるごとにベースタイマの値をGiTMjレジスタ(i=0, 1、j=0~7)に格納します。表22.4に時間計測機能の仕様を、表22.5に時間計測機能関連レジスタの設定を示します。図22.19、図22.20に時間計測機能の動作例を、図22.21にプリスケーラ機能、ゲート機能使用時の動作例を示します。

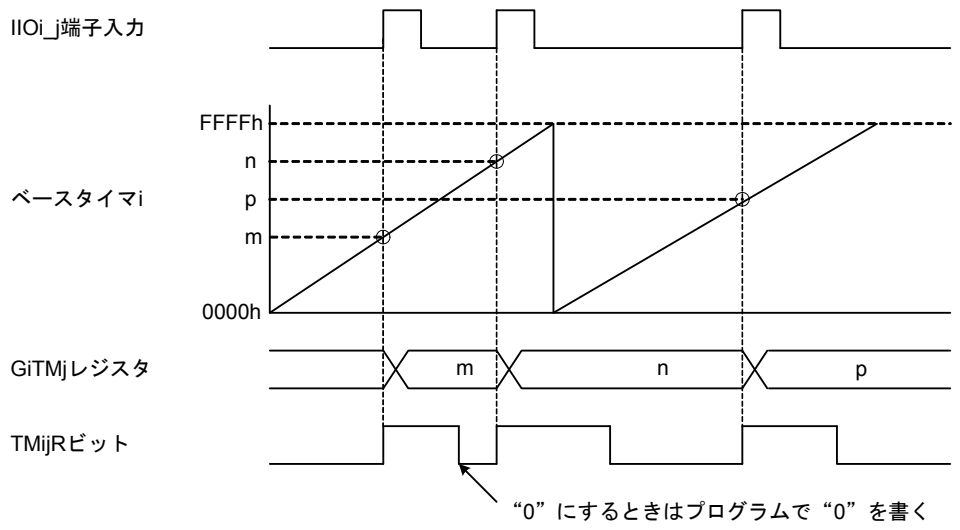
表22.4 時間計測機能の仕様(i=0, 1、j=0~7)

項目	仕様
計測チャネル	グループ0: チャネル0~7 グループ1: チャネル0~7
トリガ入力極性選択	IIOi_j端子の立ち上がりエッジ、立ち下がりエッジ、または両エッジ
計測開始条件	GiFSレジスタのFSCjビットが“1”(時間計測機能を選択)の状態で、GiFEレジスタのIFEjビットを“1”(チャネルjの機能を動作)にする
計測停止条件	IFEjビットを“0”(チャネルjの機能を停止)にする
時間計測タイミング	• プリスケーラ機能なし: トリガ入力ごと • プリスケーラ機能あり(チャネル6、7): GiTPRkレジスタ(k=6, 7)値+1回目のトリガ入力ごと
割り込み要求	時間計測タイミングに、割り込み要求レジスタのTMijRビットが“1”(割り込み要求あり)になる(図10.13参照)
IIOi_j端子(入力)	トリガ入力
選択機能	• デジタルフィルタ機能 トリガ入力レベルをf1またはfBTiごとに判定し、3回一致したパルス成分を通過させる • プリスケーラ機能(チャネル6、7) トリガ入力をカウントし、(GiTPRkレジスタ値+1)回目のトリガ入力ごとに時間計測を実行 • ゲート機能(チャネル6、7) 最初のトリガ入力による時間計測以降、トリガ入力の受け付けを禁止する。GiTMCRkレジスタのGOCビットが“1”(GiPOpレジスタ(p=4, 5、k=6のときp=4、k=7のときp=5)の一致によりゲートを解除)の状態で、ベースタイマとGiPOpレジスタの値が一致、またはGiTMCRkレジスタのGSCビットを“1”にすると、再度トリガ入力の受け付けを許可

表22.5 時間計測機能関連レジスタの設定(i=0, 1、j=0~7、k=6, 7)

レジスタ	ビット	機能
GiTMCRj	CTS1~CTS0	時間計測トリガ選択
	DF1~DF0	デジタルフィルタ機能選択
	GT, GOC, GSC	ゲート機能選択
	PR	プリスケーラ機能選択
GiTPRk	—	プリスケーラ値設定
GiFS	FSCj	“1”(時間計測機能)にしてください
GiFE	IFEj	“1”(チャネルjの機能を動作)にしてください

グループ、チャネルによって、ビット構成、機能が違います。
ベースタイマ関連レジスタを設定後に、時間計測機能関連レジスタを設定してください。



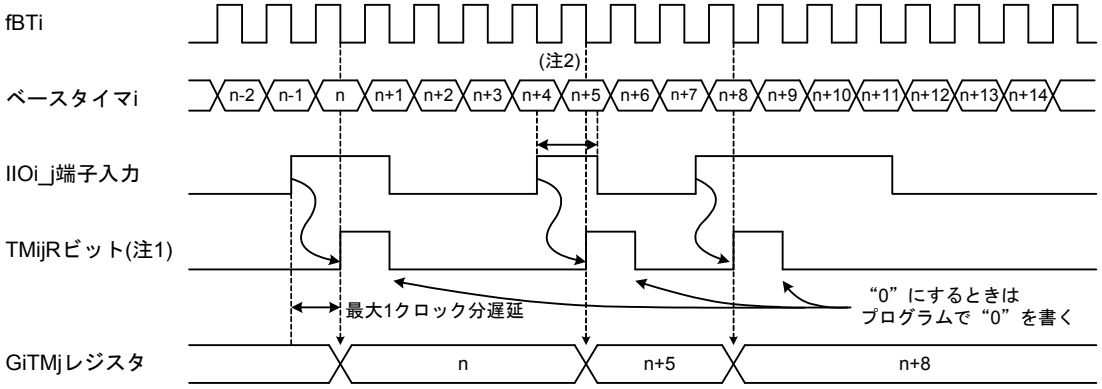
TMijRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

この図は以下の条件の場合です。
・GiTMCRjレジスタのCTS1~CTS0ビットが“01b”(時間計測トリガは立ち上がりエッジ)、PRビットが“0”(プリスケーラ機能を使用しない)、GTビットが“0”(ゲート機能を使用しない)
・GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”(ベースタイマをリセットしない)、UD1~UD0ビットが“00b” (アップカウントモード)

ベースタイマとGiPO0レジスタが一致するとき、ベースタイマを“0000h”にする場合 (RST2~RST0ビットが“010b”の場合) は、ベースタイマは「GiPO0レジスタ設定値+2」までカウントした後“0000h”になります。

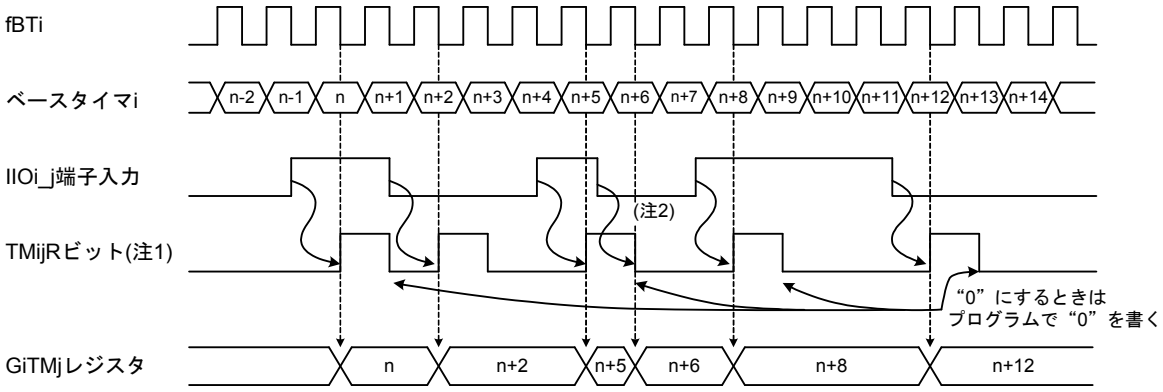
図 22.19 時間計測機能の動作例(1) (i=0, 1、j=0~7)

(1) 時間測定トリガに立ち上がりエッジを選択した場合
(GiTMCRjレジスタのCTS1~CTS0ビットが“01b”)



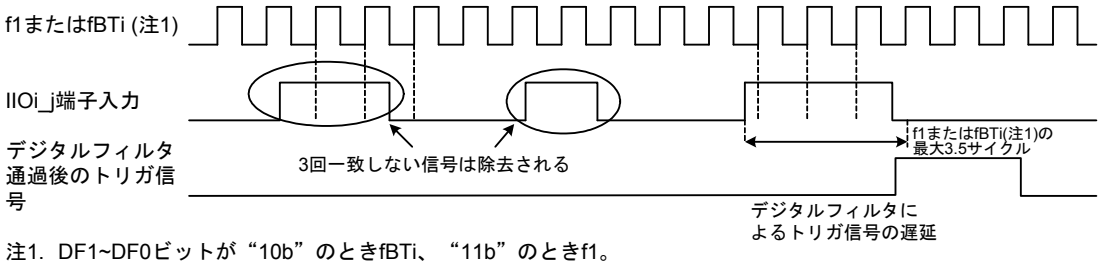
注1. IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット。
注2. IIOi_j端子への入力パルスは、fBTiの1.5サイクル以上の幅が必要です。

(2) 時間計測トリガに両エッジを選択した場合 (CTS1~CTS0ビットが“11b”)



注1. IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット。
注2. TMijRビットが“1”のときにトリガ信号を受信した場合、割り込みは発生しません。
ただし、GiTMjレジスタの値は変化します。

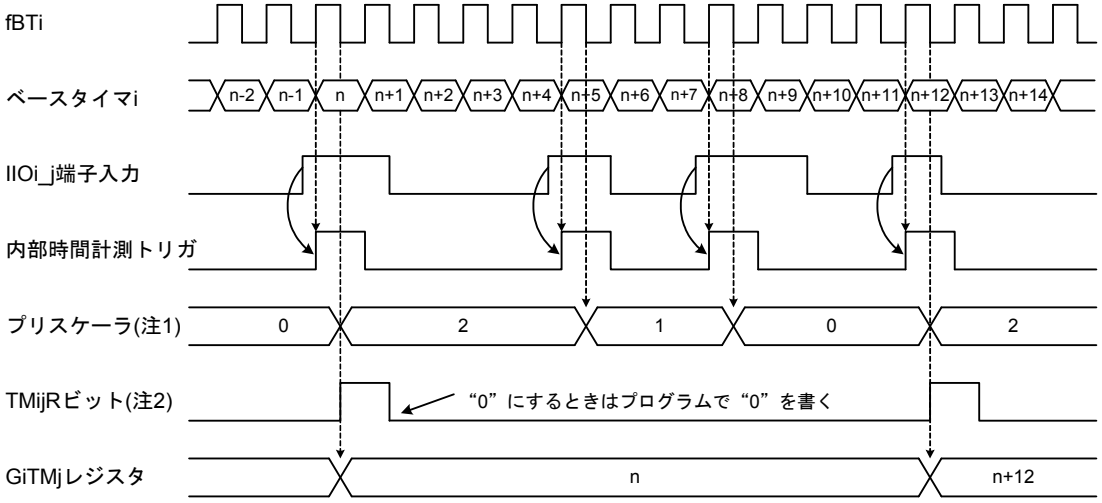
(3) デジタルフィルタを使用した場合のトリガ信号
(GiTMCRjレジスタのDF1~DF0ビットが“10b”または“11b”)



注1. DF1~DF0ビットが“10b”のときfBTi、“11b”のときf1。

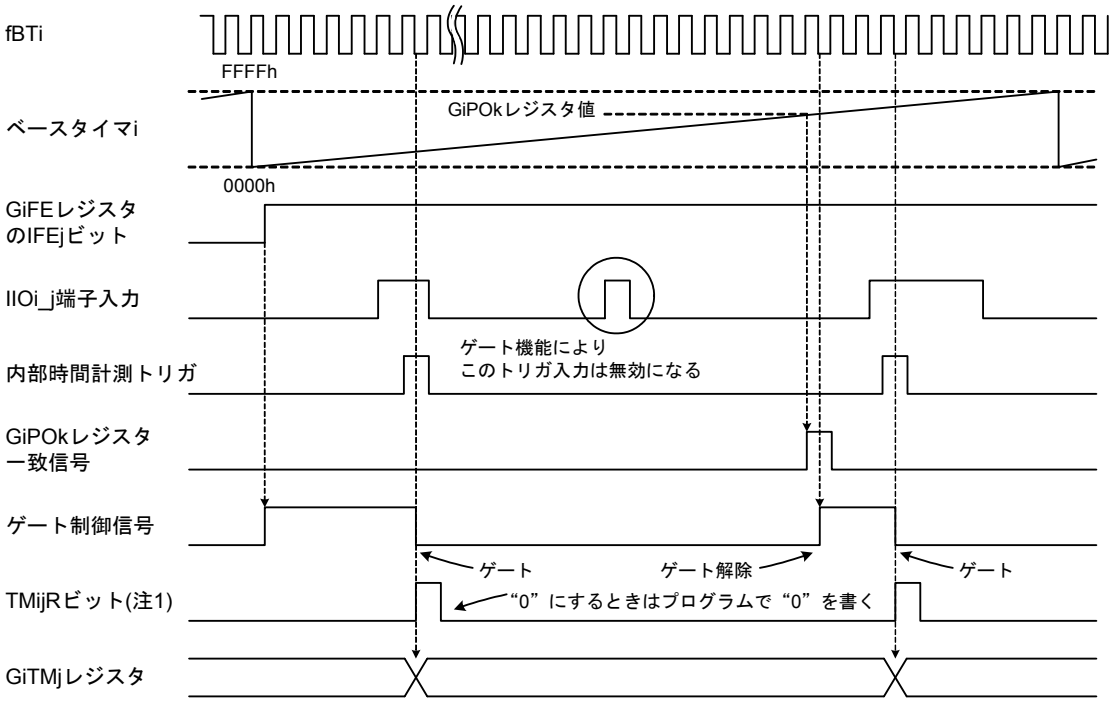
図 22.20 時間計測機能の動作例(2) (i=0, 1、j=0~7)

(1) プリスケーラ機能を使用した場合
(GiTPRjレジスタが“02h”、GiTMCRjレジスタのPRビットが“1”)



注1. GiTMCRjレジスタのPRビットを“1”(プリスケーラ機能を使用する)にした後の2回目以降のプリスケーラ周期のものです。
注2. IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット。

(2) ゲート機能を使用した場合
(GiPOkレジスタの一致によりゲート機能解除、GiTMCRjレジスタのGTビットが“1”、GOCビットが“1”)



k=4, 5
注1. IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット。

図 22.21 プリスケーラ機能、ゲート機能使用時の動作例 (i=0, 1、j=6, 7)

22.3 波形生成機能

ベースタイマとGiPOjレジスタ(i=0, 1、j=0~7)の値の一致により、波形生成を行います。

波形生成機能には、以下の4つのモードがあります。

- 単相波形出力モード
- 反転波形出力モード
- セット-リセット波形出力(SR波形出力)モード
- 位相シフト波形出力モード

表22.6に波形生成機能関連レジスタの設定を示します。

表 22.6 波形生成機能関連レジスタの設定 (i=0, 1、j=0~7)

レジスタ	ビット	機能
GiPOCRj	MOD2~MOD0	波形出力モードを選択
	IVL	出力初期値選択
	RLD	GiPOjレジスタ値リロードタイミング選択
	INV	出力反転選択
GiPOj	—	出力波形のレベルを反転させるタイミングを設定
GiFS	FSCj	“0” (波形生成機能)にしてください
GiFE	IFEj	“1” (チャネルjの機能を動作)にしてください

グループ、チャネルによって、ビット構成、機能が違います。
ベースタイマ関連レジスタを設定した後に、波形生成機能関連レジスタを設定してください。

22.3.1 単相波形出力モード

ベースタイマとGiPOjレジスタ(i=0, 1、j=0~7)の値が一致するとIIOi_j端子の出力レベルは“H”になり、ベースタイマが“0000h”になると“L”になります。GiPOCRjレジスタのIVLビットを“1”(初期値として“H”を出力)にすると、波形出力開始時の出力レベルは“H”になります。INVビットを“1”(出力を反転する)にすると、出力波形のレベルを反転して出力します。詳細は、図22.22を参照してください。

表22.7に単相波形出力モードの仕様を示します。

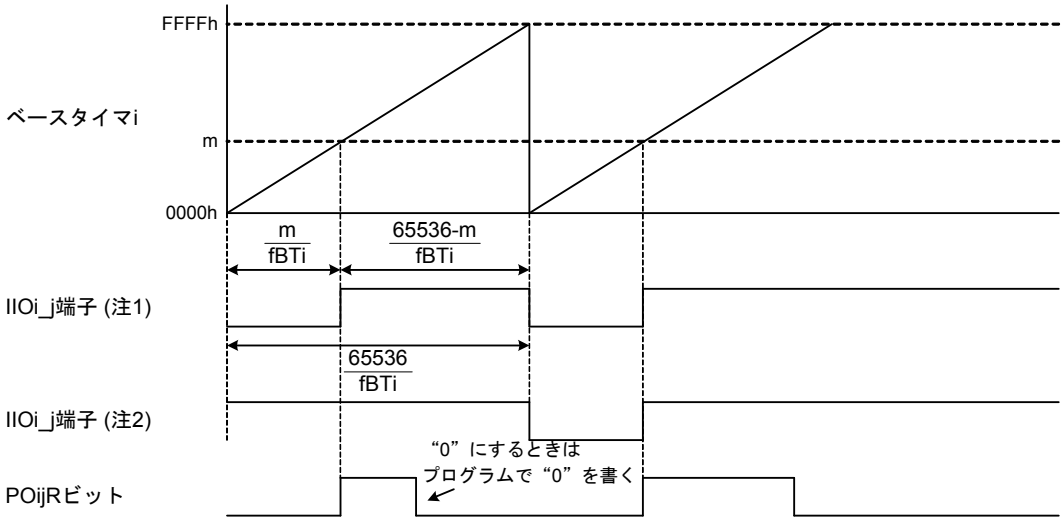
表22.7　単相波形出力モードの仕様(i=0, 1)

項目	仕様
出力波形(注1)	• フリーラン動作(GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)の場合 周期: $\frac{65536}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$ “H”幅: $\frac{65536-m}{fBTi}$ m : GiPOjレジスタ(j=0~7)の設定値 0000h~FFFFh • ベースタイマとGiPO0レジスタが一致するとき、ベースタイマを“0000h”にする(GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“010b”)場合 周期: $\frac{n+2}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$ “H”幅: $\frac{n+2-m}{fBTi}$ m : GiPOjレジスタ(j=1~7)の設定値 0000h~FFFFh n : GiPO0レジスタの設定値 0001h~FFFDh $m \geqq n+2$の場合、出力レベルは“L”固定
波形出力開始条件(注2)	GiFEレジスタのIFEjビット(j=0~7)を“1”(チャネルjの機能を動作)にする
波形出力停止条件	IFEjビットを“0”(チャネルjの機能を停止)にする
割り込み要求	ベースタイマ値とGiPOjレジスタの値が一致したときに、インテリジェントI/O割り込み要求レジスタのPOijRビットが“1”(割り込み要求あり)になる(図10.13参照)
IIOi_j端子(出力)	パルス出力
選択機能	• 初期値設定機能 波形出力開始時の出力レベルを設定 • 反転出力機能 出力波形のレベルを反転して、IIOi_j端子から出力

注1.　GiPOCRjレジスタのINVビットが“1”(出力を反転する)の場合、“L”幅と“H”幅は逆になります。

注2.　時間計測機能と波形生成機能が共用されているチャネルを使用する場合、GiFSレジスタのFSCjビットを“0”(波形生成機能を選択)にしてください。

(1)フリーラン動作の場合 (GiBCRレジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)

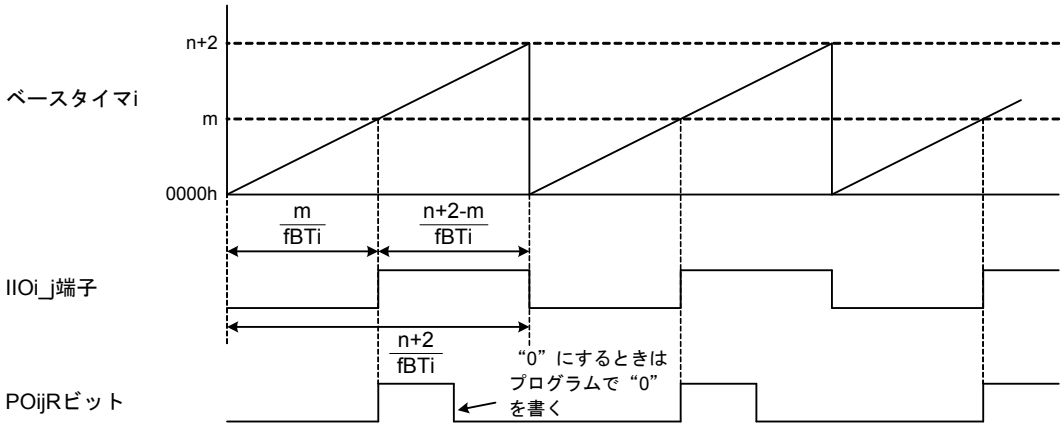


j=0~7
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
POijRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

注1. GiPOCRjレジスタのINVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)のときの波形です。
注2. INVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“1”(初期値として“H”を出力) のときの波形です。

この図は以下の条件の場合です。
・ GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

(2)ベースタイマとGiPO0レジスタが一致する時、ベースタイマをリセットする場合
(RST2~RST0ビットが“010b”)



j=1~7
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
n: GiPO0レジスタ値 (0001h~FFFDh)
POijRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

この図は以下の条件の場合です。
・GiPOCRjレジスタのIVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)、INVビットが“0”(出力を反転しない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)
・m < n + 2

図 22.22 単相波形出力モードの動作例 (i=0, 1)

22.3.2 反転波形出力モード

ベースタイマとGiPOjレジスタ(i=0, 1、j=0~7)の値が一致するごとにIIOi_j端子の出力レベルを反転します。

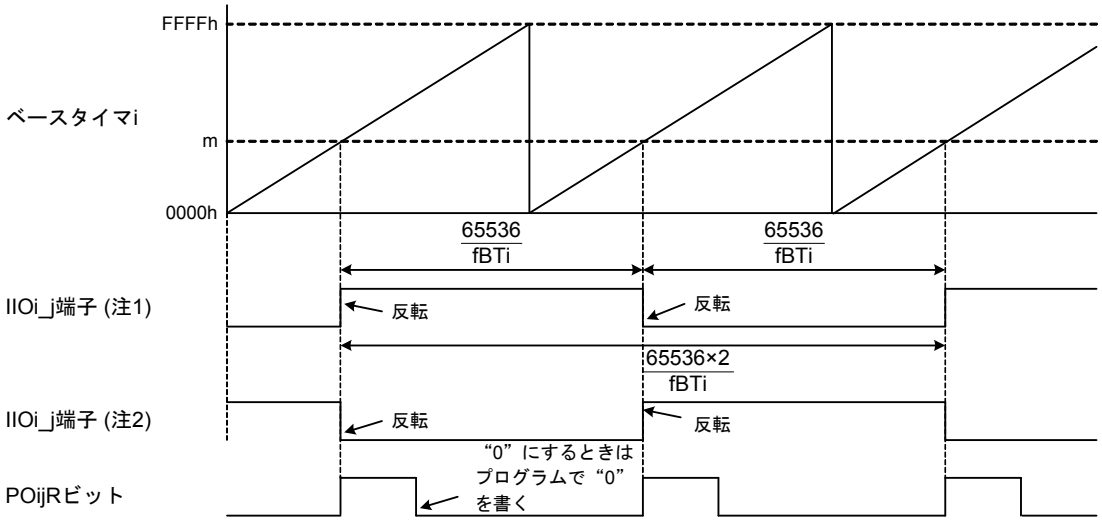
表22.8に反転波形出力モードの仕様を、図22.23に反転波形出力モードの動作例を示します。

表22.8 反転波形出力モードの仕様(i=0, 1)

項目	仕様
出力波形	• フリーラン動作(GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)の場合 周期: $\frac{65536 \times 2}{fBTi}$ “H”幅、“L”幅: $\frac{65536}{fBTi}$ GiPOjレジスタ(j=0~7)の設定値(0000h~FFFFh) • ベースタイマとGiPO0レジスタが一致した時ベースタイマを“0000h”にする(RST2~RST0ビットが“010b”)場合 周期: $\frac{2(n+2)}{fBTi}$ “H”幅、“L”幅: $\frac{n+2}{fBTi}$ n : GiPO0レジスタの設定値(0001h~FFFDh) GiPOjレジスタ(j=1~7)の設定値(0000h~FFFFh) GiPOjレジスタ値≧n + 2の場合、出力レベルは反転しません
波形出力開始条件(注1)	GiFEレジスタのIFEjビット(j=0~7)を“1”(チャネルjの機能を動作)にする
波形出力停止条件	GiFEレジスタのIFEjビットを“0”(チャネルjの機能を停止)にする
割り込み要求	ベースタイマとGiPOjレジスタの値が一致したとき、インテリジェントI/O割り込み要求レジスタのPOijRビットが“1”(割り込み要求あり)になる(図10.13参照)
IIOi_j端子(出力)	パルス出力
選択機能	• 初期値設定機能 波形出力開始時の出力レベルを設定 • 反転出力機能 出力波形のレベルを反転して、IIOi_j端子から出力

注1. 時間計測機能と波形生成機能が共用されているチャネルを使用する場合、GiFSレジスタのFSCjビットを“0”(波形生成機能を選択)にしてください。

(1)フリーラン動作の場合 (GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)

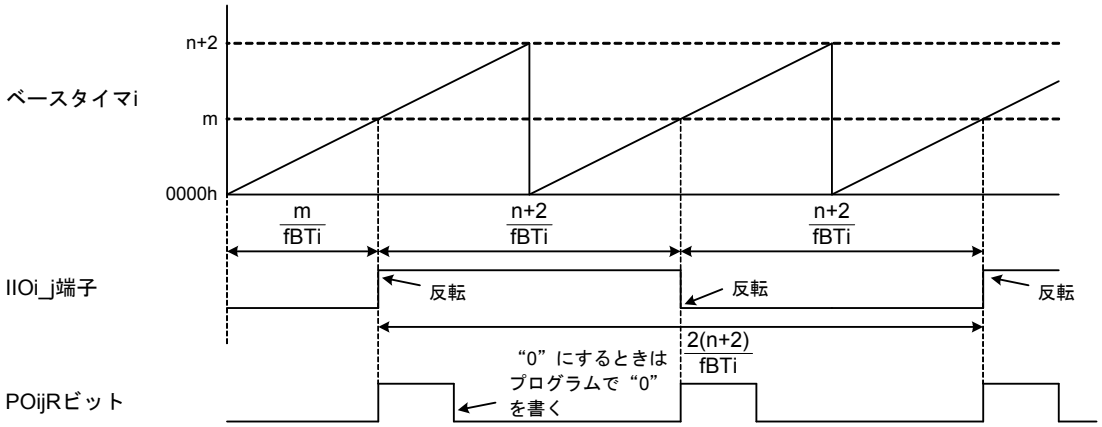


j=0~7
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
POijRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

注1. GiPOCRjレジスタのINVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)のときの波形です。
注2. INVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“1”(初期値として“H”を出力) のときの波形です。

この図は以下の条件の場合です。
・ GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

(2)ベースタイマとGiPO0レジスタが一致する時、ベースタイマをリセットする場合
(RST2~RST0ビットが“010b”)



j=1~7
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
n: GiPO0レジスタ値 (0001h~FFFDh)
POijRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

この図は以下の条件の場合です。
・GiPOCRjレジスタのIVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)、INVビットが“0”(出力を反転しない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)
・m < n + 2

図 22.23 反転波形出力モード時の動作例 (i=0, 1)

22.3.3 セット-リセット波形出力(SR波形出力)モード

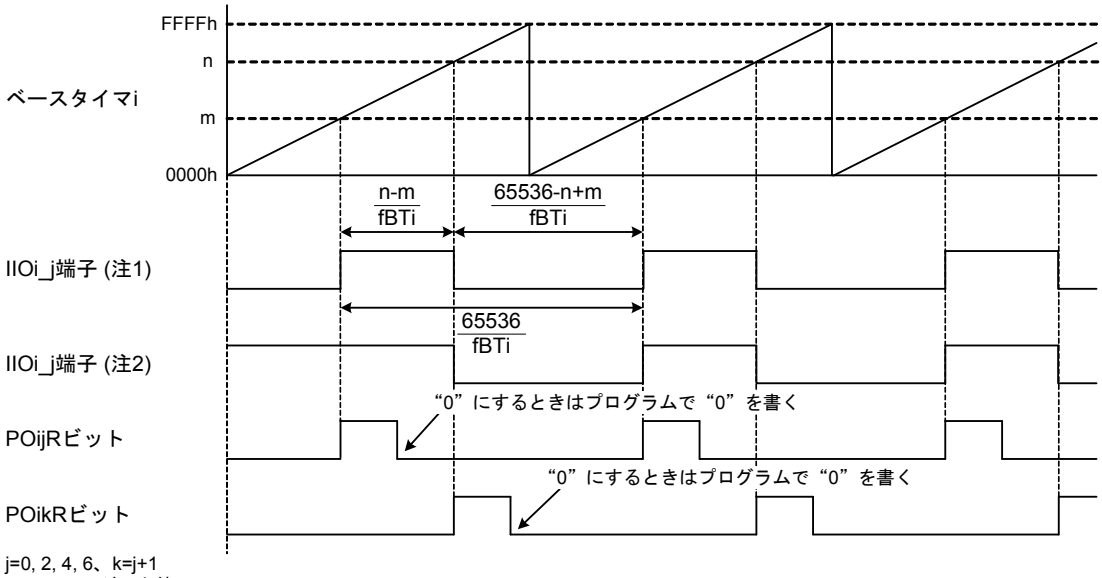
ベースタイマとGiPOjレジスタ(i=0, 1、j=0, 2, 4, 6)の値が一致するとIIOi_j端子の出力レベルは“H”になり、ベースタイマとGiPOkレジスタ(k=j+1)の値が一致するか、ベースタイマが“0000h”になると“L”になります。GiPOCRjレジスタ(j=0~7)のIVLビットを“1”(初期値として“H”を出力)にすると、波形出力開始時の出力レベルは“H”になります。INVビットを“1”(出力を反転する)にすると、出力波形のレベルを反転して出力します。詳細は、図22.24を参照してください。表22.9にSR波形出力モードの仕様を示します。

表 22.9　SR波形出力モードの仕様 (i=0, 1)

項目	仕様
出力波形(注1)	• フリーラン動作(GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)の場合 (1) $m < n$の場合 “H”幅: $\frac{n-m}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$(注2) + $\frac{65536-n}{fBTi}$(注3) (2) $m \geqq n$の場合 “H”幅: $\frac{65536-m}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$ m : GiPOjレジスタ(j=0, 2, 4, 6)の設定値 n : GiPOkレジスタ(k=j+1)の設定値 m、nの値は0000h~FFFFh • ベースタイマとGiPO0レジスタが一致したとき、ベースタイマを“0000h”にする(RST2~RST0ビットが“010b”)場合(注4) (1) $m < n < p + 2$の場合 “H”幅: $\frac{n+m}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$(注2) + $\frac{p+2-n}{fBTi}$(注3) (2) $m < p + 2 \leqq$ nの場合 “H”幅: $\frac{p+2-m}{fBTi}$ “L”幅: $\frac{m}{fBTi}$ (3) $m \geqq p + 2$の場合、出力レベルは“L”固定 p : GiPO0のレジスタ設定値 m : GiPOjレジスタ(j=2, 4, 6)の設定値 n : GiPOkレジスタ(k=j+1)の設定値 pの値は0001h~FFFDh　　m、nの値は0000h~FFFFh
波形出力開始条件(注5)	GiFEレジスタのIFEqビット(q=0~7)を“1”(チャネルqの機能を動作)にする
波形出力停止条件	GiFEレジスタのIFEqビットを“0”(チャネルqの機能を停止)にする
割り込み要求	ベースタイマ値とGiPOjレジスタ値が一致したとき、インテリジェントI/O割り込み要求レジスタのPOijRビットが“1”になり、ベースタイマ値とGiPOkレジスタ値の値が一致したとき、POikRビットが“1”(割り込み要求あり)になる(図 10.13参照)
IIOi_j端子(出力)	パルス出力
選択機能	• 初期値設定機能 波形出力開始時の出力レベルを設定 • 反転出力機能 出力波形のレベルを反転して、IIOi_j端子から出力

注1.　GiPOCRjレジスタのINVビットが“1”(出力を反転する)の場合、“L”幅と“H”幅は逆になります。
注2.　ベースタイマをリセットしてから出力レベルが“H”になるまでの期間
注3.　出力レベルが“L”になってから、ベースタイマをリセットするまでの期間
注4.　GiPO0レジスタとベースタイマの一致でベースタイマをリセットする場合、チャネル0、1のSR波形生成機能は使用できません。
注5.　時間計測機能と波形生成機能が共用されているチャネルを使用する場合、GiFSレジスタのFSCjビットを“0”(波形生成機能を選択)にしてください。

(1)フリーラン動作の場合 (GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”)

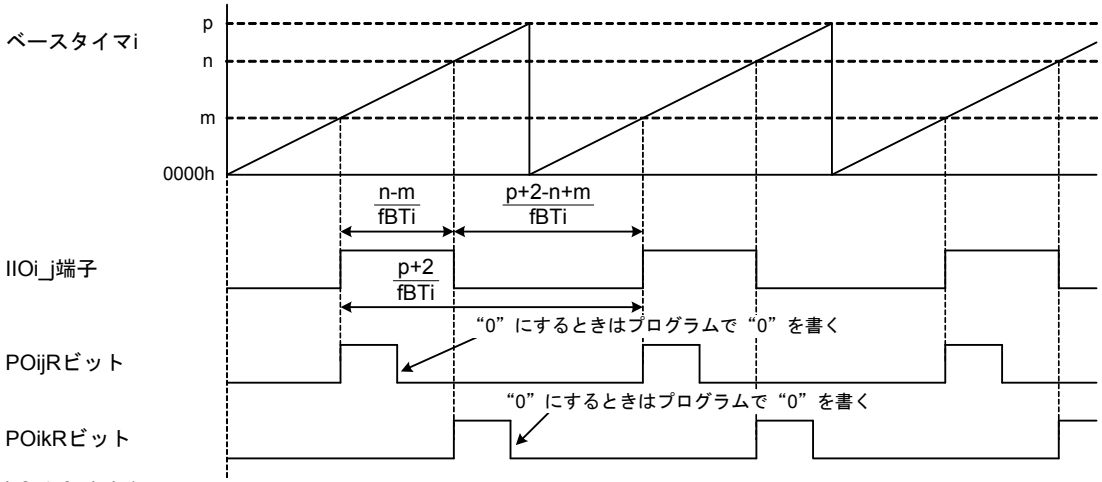


j=0, 2, 4, 6、k=j+1
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
n: GiPOkレジスタ値 (0000h~FFFFh)
POijRビット、POikRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

注1. GiPOCRjレジスタのINVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“0”(初期値として“L”を出力) のときの波形です。
注2. INVビットが“0”(出力を反転しない)、IVLビットが“1”(初期値として“H”を出力) のときの波形です。

この図は以下の条件の場合です。
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)
・m < n

(2)ベースタイマとGiPO0レジスタが一致する時、ベースタイマをリセットする場合
(RST2~RST0ビットが“010b”)



j=2, 4, 6、k=j+1
m: GiPOjレジスタ値 (0000h~FFFFh)
n: GiPOkレジスタ値 (0000h~FFFFh)
p: GiPO0レジスタ値 (0001h~FFFDh)
POijRビット、POikRビット: IIO0IR~IIO11IRレジスタのビット

この図は以下の条件の場合です。
・GiPOCRkレジスタのIVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)、INVビットが“0”(出力を反転しない)
・GiBCR1レジスタのUD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)
・m < n < p + 2

図 22.24 SR波形出力モードの動作例 (i=0, 1)

22.3.4 位相シフト波形出力モード

PWMの出力をチャネルごとに位相シフトさせて出力するモードです。スイッチングノイズの低減、瞬間消費電流の低減に効果があります。

GiPOCRjレジスタ(i=0, 1、j=0~7)のMOD2~MOD0ビットを“000b”(単相波形出力モード)、IVLビットを“0”(初期値として“L”を出力)、BTREビットを“1”(ベースタイマのビット9のオーバフローでベースタイマをリセットする)、INVビットを“1”(出力を反転する)に、GiBCR0レジスタのITビットを“0”(ビット15またはビット9のオーバフローで割り込み)に設定して使用します。

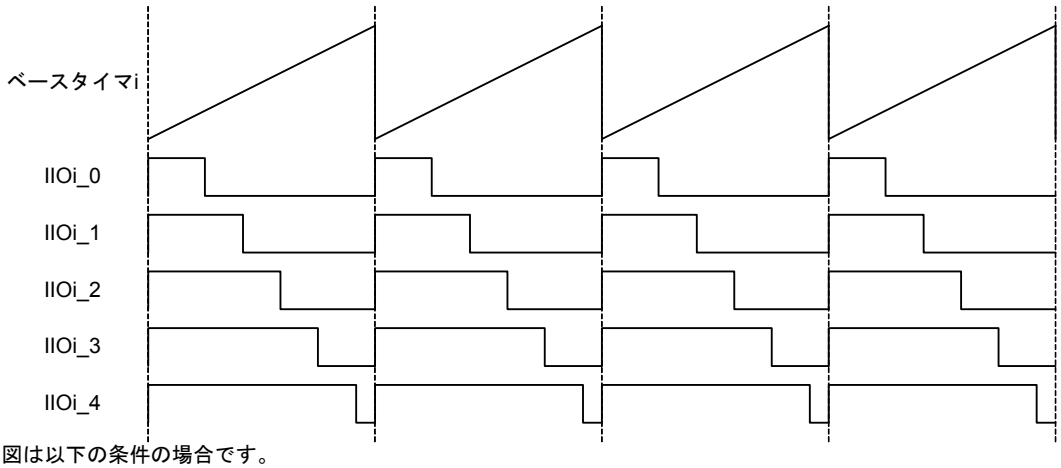
このとき位相シフト波形出力モードが無効の場合、ベースタイマとGiPOjレジスタの値が一致するとIIOi_j端子の出力レベルが“L”になり、ベースタイマが“0000h”になると“H”になります(図22.25の(1)参照)。

位相シフト波形出力モードが有効の場合、IIOi_j端子の出力レベルが“H”になるタイミングを位相シフタによって制御します。位相シフタに入力される位相シフトクロックは、ベースタイマのカウントソースfBTiをm+1分周器で分周したクロックになります。位相シフトクロックが入力されるごとにIIOi_0端子から順に出力レベルが“H”になって行きます(図22.25の(2)参照)。m+1分周器のリロードと位相シフタのリセットは、ベースタイマオーバフロー割り込み信号BTiRによって行われます。

位相シフト波形出力モードにおける特殊な場合の出力波形例を図22.26に示します。また、全チャネルを位相シフト波形出力モードに設定し、位相シフトクロックを最低速にした場合には、チャネル7用の位相シフトクロックが生成されないため、IIOi_7からは常に“L”が出力されます。

位相シフト波形出力モードでは、常時“L”出力はできませんので、出力機能選択レジスタで当該端子をポートに切り替えて代用ください。

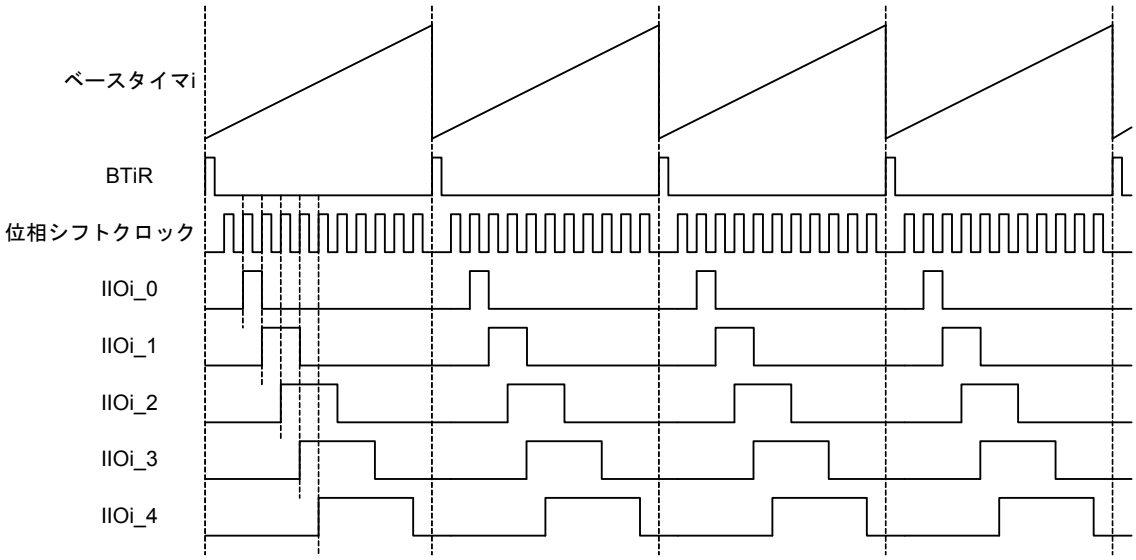
(1) 位相シフト波形出力モード無効のときの出力波形



この図は以下の条件の場合です。

- GiPSCRレジスタのPSMEビットが“0”(位相シフト波形出力モード無効)
- GiPOCRjレジスタ (j=0~4) のMOD2~MOD0ビットが“000b”(単相波形出力モード)、IVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)、INVビットが“1”(出力を反転する)
- GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”(ベースタイマをリセットしない)、UD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

(2) 位相シフト波形出力モード有効のときの出力波形

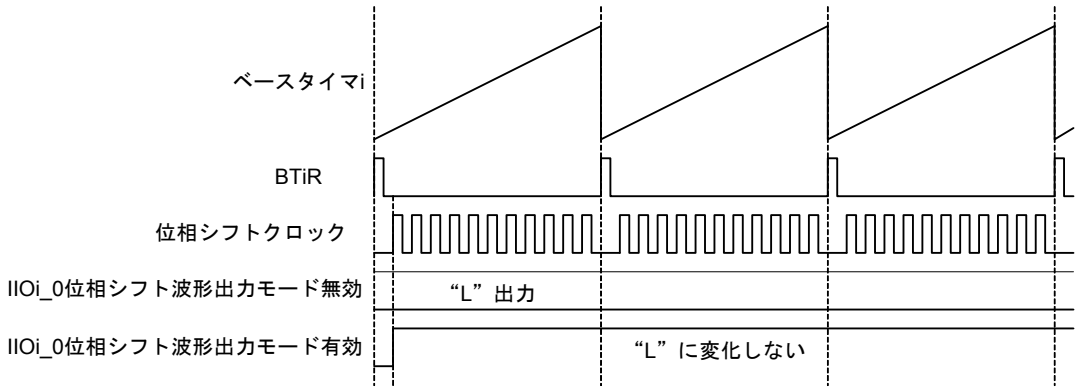


この図は以下の条件の場合です。

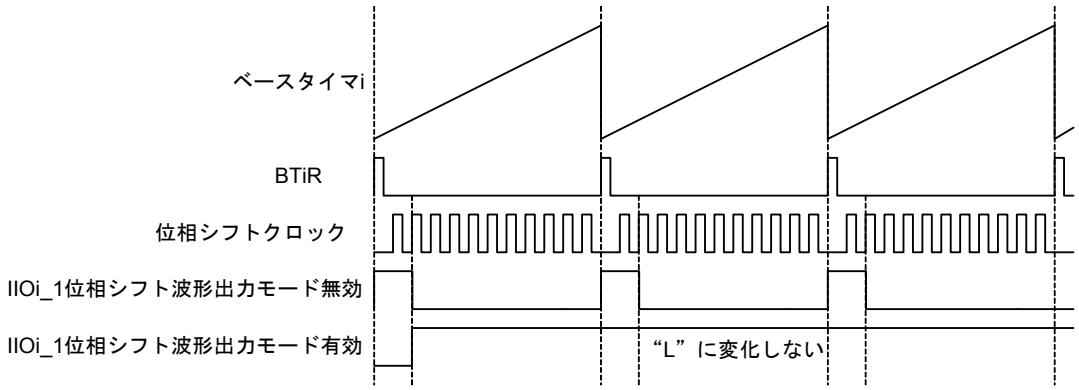
- GiPSCRレジスタのPSMEビットが“1”(位相シフト波形出力モード有効)、PSS1~PSS0ビットが“00b”(IIOi_0~IIOi_4を使用)
- GiPOCRjレジスタ (j=0~4) のMOD2~MOD0ビットが“000b”(単相波形出力モード)、IVLビットが“0”(初期値として“L”を出力)、BTREビットが“1”(ベースタイマのビット9のオーバフローでベースタイマをリセットする)、INVビットが“1”(出力を反転する)
- GiBCR0レジスタのITビットが“0”(ビット15またはビット9のオーバフローで割り込み)
- GiBCR1レジスタのRST2~RST0ビットが“000b”(ベースタイマをリセットしない)、UD1~UD0ビットが“00b”(アップカウントモード)

図 22.25 位相シフト波形出力モードの動作例(1) (i=0, 1)

(1) GiPOjレジスタに0000hを設定したのときの出力波形



(2) 位相シフトクロックが入力されると同時に、ベースタイマとGiPOjレジスタの値が一致したときの出力波形



(3) 位相シフトクロックが入力される前に、ベースタイマとGiPOjレジスタの値が一致したときの出力波形

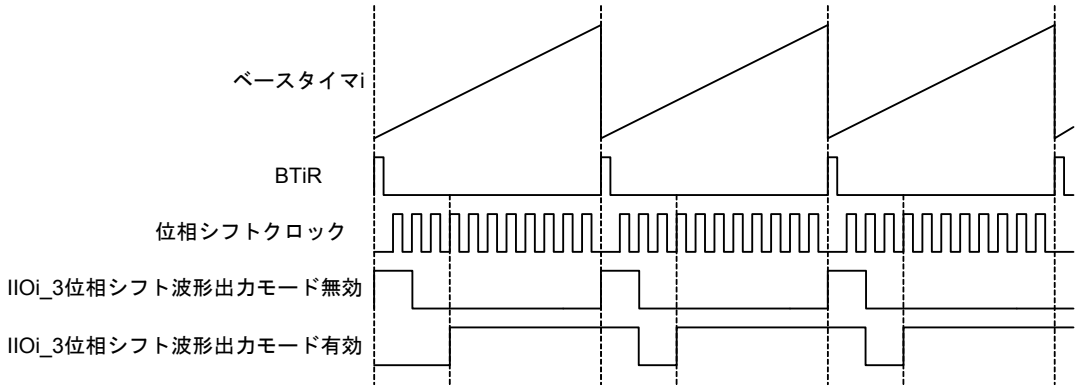


図 22.26 位相シフト波形出力モードの動作例(2) (i=0, 1、j=0~7)

22.3.5 デジタルデバウンス回路

IIO0_7端子、IIO1_7端子からの入力は、ノイズ除去に有効なデジタルデバウンス機能を持ちます。デジタルデバウンス機能は、信号の立ち上がりエッジまたは立ち下がりエッジが入力された後、プログラムで設定したフィルタ幅より長くレベルが保持された時点で、信号レベルが確定されます。

なお、IIO0_7入力信号、IIO1_7入力信号と機能を共有している他の信号には影響を与えません。

図 22.27にIC07DDR、IC17DDRレジスタを示します。

IIOi_7デジタルデバウンスレジスタ (i=0, 1)

b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
IC07DDR	0210h番地	FFh
IC17DDR	0211h番地	FFh

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとする場合 ・n=00~FEh:　f8/(n+1) より大きなパルス幅の信号のみ IIOi_7 に入力される ・n=FFh:　デジタルデバウンスフィルタは禁止	00h~FFh	RW

図 22.27 IC07DDR、IC17DDRレジスタ

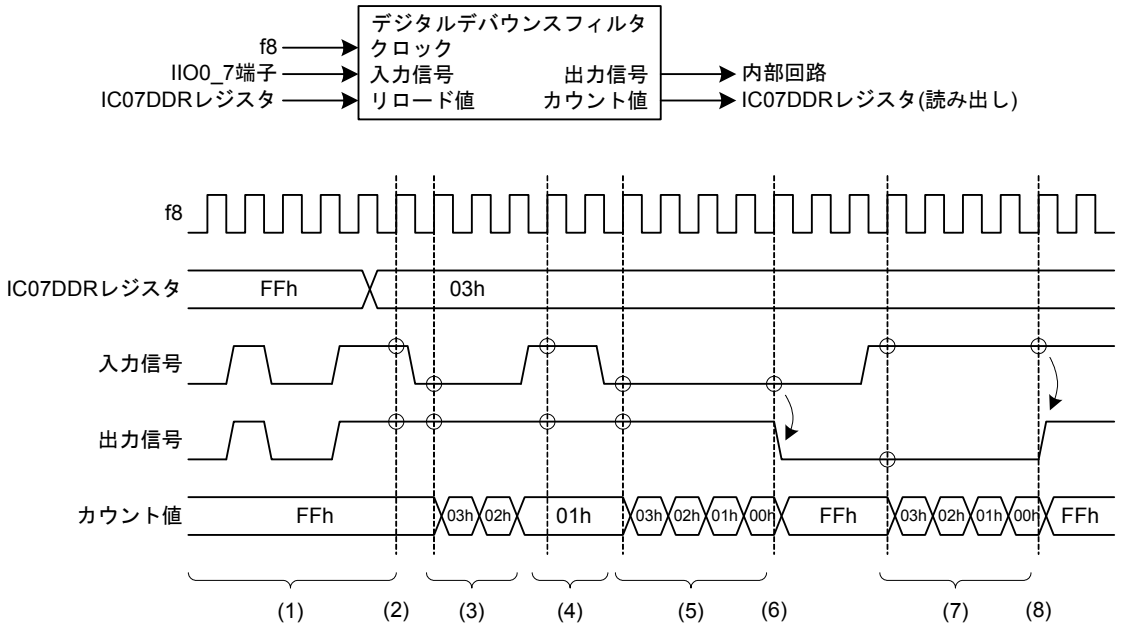
IIOi_7(i=0, 1)デジタルデバウンス回路内のカウンタは、f8をカウントソースとするダウンカウンタです。IIOi_7端子のレベルが変化するごとに、ICi7DDRレジスタに設定した値がカウンタにリロードされ、カウントが再開されます。ICi7DDRレジスタを読むと、カウント中の値が読み出せます。

カウンタの値が“00h”になった次のf8の立ち上がりに同期して、IIOi_7端子への入力信号がデジタルデバウンス回路から出力されます。

デジタルデバウンス機能を使用する場合、ICi7DDRレジスタに設定可能な値は“00h”~“FEh”です。“FFh”を設定するとデジタルデバウンスフィルタなしとなり、入力信号がそのまま内部に伝達されます。

図 22.28にデジタルデバウンスフィルタの動作例を示します。

IIO0_7信号のデジタルデバウンス機能、IC07DDR=03hのときの例



(1) リセット後は IC07DDR=FFh ですから、フィルタは無効です。入力信号がそのまま出力されます。
(2) IC07DDRレジスタに“03h”を設定した後、入力と出力のレベルが同じ場合はカウンタは停止しています。
(3) 入出力信号のレベルの不一致を検出すると、カウンタはIC07DDRレジスタの設定値をリロードし、カウントを開始します。
(4) カウント中に入出力のレベルが一致すると、カウンタは停止します。入力信号の“L”パルス幅が短い時は、カウンタが“00h”にならないため出力は変化しません。
(5) 再び入出力信号のレベルの不一致を検出すると、カウンタはIC07DDRレジスタの設定値をリロードし、カウントを開始します。
(6) カウンタが“00h”になった次のf8の立ち上がりに同期して、入力信号のレベル“L”が伝搬され出力信号が“L”になります。カウンタは停止します。
(7) 再び入出力信号のレベルの不一致を検出すると、カウンタはIC07DDRレジスタの設定値をリロードし、カウントを開始します。
(8) カウンタが“00h”になった次のf8の立ち上がりに同期して、入力信号のレベル“H”が伝搬され出力信号が“H”になります。カウンタは停止します。

なお、IC07DDRレジスタに“FFh”を設定すると、f1が1.5~2.5サイクル入った後にカウンタの値が“FFh”になり、カウントが停止します。また、同じタイミングでフィルタが無効になり、入力信号がそのまま出力されます。

図 22.28 デジタルデバウンスフィルタの動作例

23. シリアルバスインタフェース

シリアルバスインタフェースは1チャネル(SBI0)あります。
SBI0は、それぞれ専用の送受信クロック発生用分周回路を持ち、独立して動作します。
SBI0には、以下のモードがあります。

- クロック同期式シリアル通信モード
- 4線式シリアルバスモード

これらのモードはSS0MR2レジスタのSSUMSビットで選択することができます。
モードの選択によって一部レジスタのビットの機能、名称、シンボルが変化します。

23.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード

クロック同期式シリアル通信モードと4線式シリアルバスモードは、SS0MR2レジスタのSSUMSビットで切り替えて使用します。

表23.1、図23.1にクロック同期式シリアル通信モードの仕様とブロック図を、表23.2、図23.2に4線式シリアルバスモードの仕様とブロック図を示します。

図23.3~図23.11に関連するレジスタを示します。

表23.1 クロック同期式シリアル通信モードの仕様

項目	仕様
データフォーマット	キャラクタ長:　8ビット固定
マスタ/スレーブデバイス	選択可能
入出力端子	SSCK0(入出力):　クロック入出力端子 SSI0(入力):　データ入力端子 SSO0(出力):　データ出力端子
送受信クロック	•SS0CRHレジスタのMSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作): 外部クロック(SSCK0端子から入力) •SS0CRHレジスタのMSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作): 内部クロック(SSCK0端子から出力) $\frac{f_{(BCLK)}}{n}$　$f_{(BCLK)}$:周辺バスクロック周波数 n:4, 8, 16, 32, 64, 128, 256から選択
送信開始条件	•SS0ERレジスタのTEビットが“1”(送信許可) •SS0SRレジスタのTDREビットが“0”(未送信データあり) •SS0SRレジスタのORERビットが“0”(オーバランエラーなし) •SS0CRHレジスタのMSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作)の場合、SSCK0端子からクロック入力
受信開始条件	•SS0ERレジスタのREビットが“1”(受信許可) •SS0SRレジスタのORERビットが“0”(オーバランエラーなし) •SS0CRHレジスタのMSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作)の場合、SS0RDRレジスタをリード、SS0CRHレジスタのMSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作)の場合、SSCK0端子からクロック入力
エラー検出	•オーバランエラー SS0SRレジスタのRDRFビットが“1”(受信データあり)の状態で、次のシリアルデータ受信を完了すると発生
割り込み要求	4種類(送信完了、送信データレジスタエンプティ、受信データレジスタフル、オーバランエラー)(注1)
その他選択項目	•ビットオーダ選択 LSBファーストまたはMSBファーストを選択できます •SSCK0クロック極性選択 クロック停止時にSSCK0端子のレベルを“L”にするか“H”にするかを選択できます •SSCK0クロック位相選択 データを変化させるエッジおよびデータを取り込むエッジを選択できます

注1. 割り込みベクタテーブルは1チャネルにつき1つです。

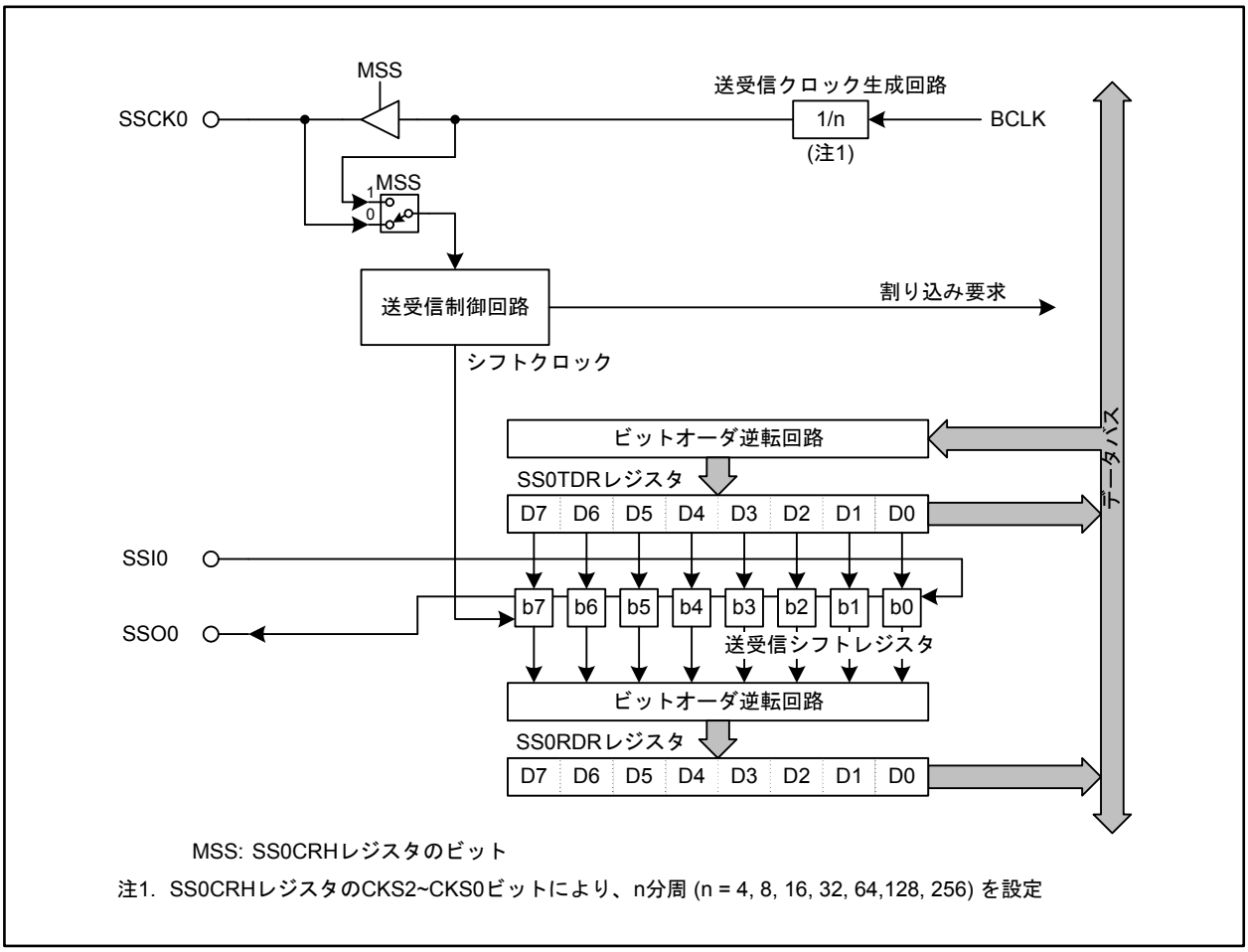


図 23.1　クロック同期式シリアル通信モードのブロック図

表 23.2　4線式シリアルバスモードの仕様

項目	仕様
データフォーマット	キャラクタ長:　8~16ビット可変
マスタ/スレーブデバイス	選択可能
入出力端子	SSCK0 (入出力):　クロック入出力端子 SSI0 (入出力):　データ入出力端子 SSO0 (入出力):　データ入出力端子 $\overline{\text{SCS0}}$ (入出力):　チップセレクト入出力端子
送受信クロック	• SS0CRHレジスタのMSSビットが“0” (スレーブデバイスとして動作): 外部クロック(SSCK0端子から入力) • SS0CRHレジスタのMSSビットが“1” (マスタデバイスとして動作): 内部クロック(SSCK0端子から出力) $\frac{f_{(BCLK)}}{n}$　$f_{(BCLK)}$: 周辺バスクロック周波数 n: 4, 8, 16, 32, 64, 128, 256から選択
送信開始条件	• SS0ERレジスタのTEビットが“1” (送信許可) • SS0SRレジスタのTDREビットが“0” (未送信データあり) • SS0SRレジスタのORERビットが“0” (オーバランエラーなし) • SS0CRHレジスタのMSSビットが“0” (スレーブデバイスとして動作)の場合、$\overline{\text{SCS0}}$端子が“L”でSSCK0端子からクロック入力
受信開始条件	• SS0ERレジスタのREビットが“1” (受信許可) • SS0SRレジスタのORERビットが“0” (オーバランエラーなし) • SS0CRHレジスタのMSSビットが“1” (マスタデバイスとして動作)の場合、SS0ERレジスタのTEビットが“0” (送信禁止)の状態でSS0RDRレジスタをリード、SS0CRHレジスタのMSSビットが“0” (スレーブデバイスとして動作)の場合、SSCK0端子からクロック入力
エラー検出	• オーバランエラー SS0SRレジスタのRDRFビットが“1” (受信データあり)の状態で、次のシリアルデータ受信を完了すると発生 • コンフリクトエラー 　• SS0CRHレジスタのMSSビットが“1” (マスタデバイスとして動作)の状態でシリアル通信を開始しようとしたとき、$\overline{\text{SCS0}}$端子が“L”であると発生 　• SS0CRHレジスタのMSSビットが“0” (スレーブデバイスとして動作)のとき、転送途中に$\overline{\text{SCS0}}$端子入力が“L”から“H”に変化すると発生
割り込み要求	5種類(送信完了、送信データレジスタエンプティ、受信データレジスタフル、オーバランエラー、コンフリクトエラー)(注1)
その他選択項目	• ビットオーダ選択 LSBファーストまたはMSBファーストを選択できます • SSCK0クロック極性選択 クロック停止時にSSCK0端子のレベルを“L”にするか“H”にするかを選択できます • SSCK0クロック位相選択 データを変化させるエッジおよびデータを取り込むエッジを選択できます

注1.　割り込みベクタテーブルは1チャネルにつき1つです。

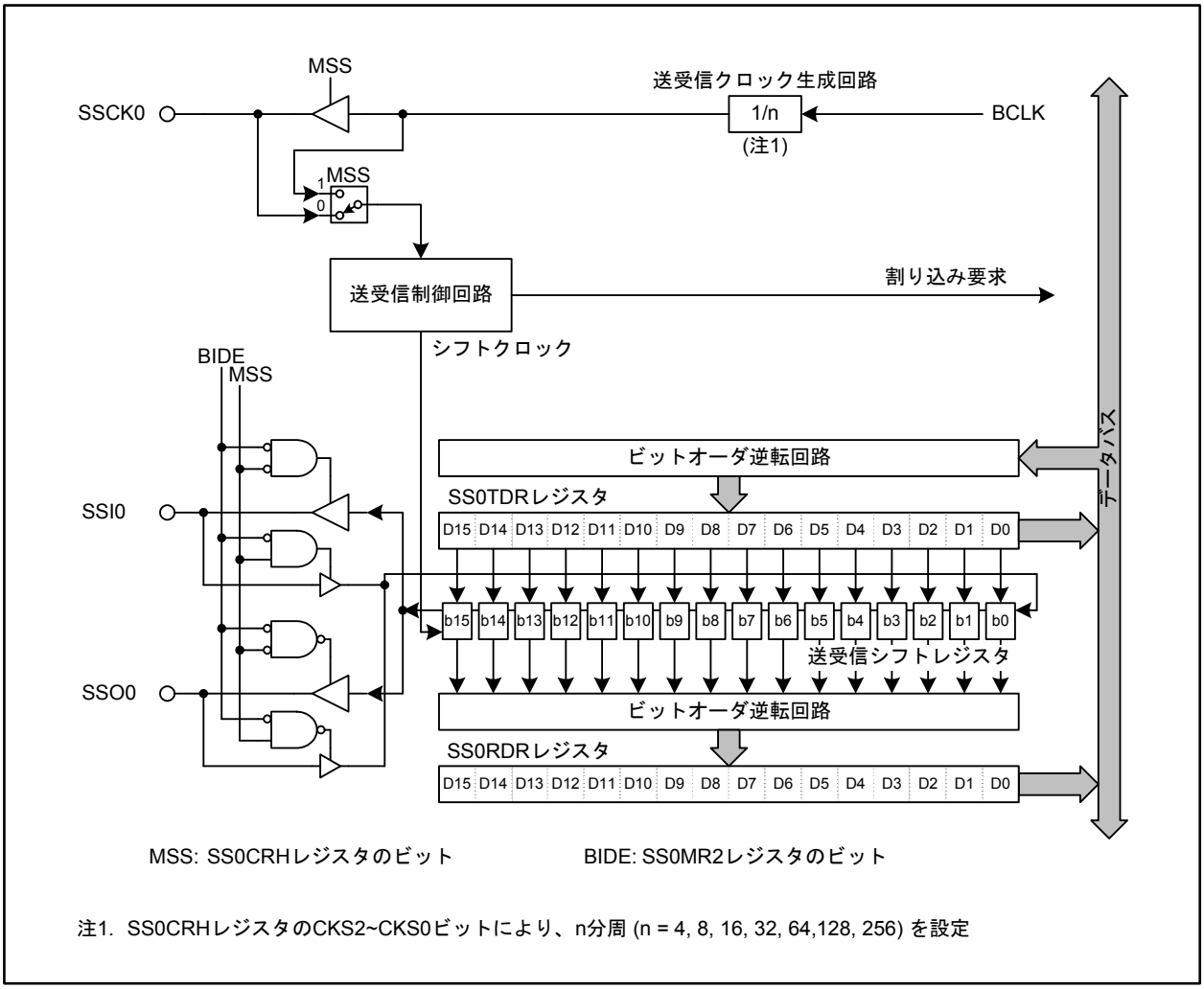
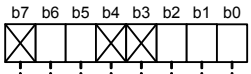


図 23.2　4線式シリアルバスモードのブロック図

SS0 制御レジスタH



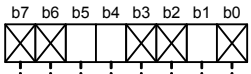
シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0CRH	044F08h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CKS0	送受信クロックレート選択ビット (注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : f(BCLK) / 256 0 0 1 : f(BCLK) / 128 0 1 0 : f(BCLK) / 64 0 1 1 : f(BCLK) / 32 1 0 0 : f(BCLK) / 16 1 0 1 : f(BCLK) / 8 1 1 0 : f(BCLK) / 4 1 1 1 : 設定しないでください	RW
CKS1			RW
CKS2			RW
— (b4-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
MSS	マスタ/スレーブデバイス選択ビット (注2、3)	0: スレーブデバイスとして動作 1: マスタデバイスとして動作	RW
RSSTP	受信動作終了ビット (注4)	0: 現在のフレームを受信後、続けて次のフレームを受信 (受信クロック出力) 1: 現在のフレームを受信後、受信動作を終了 (受信クロック停止)	RW
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. MSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作) のとき、ここで設定されたクロックが使用されます。
注2. このビットが“1”のとき、SSCK0端子から送受信クロックを出力することができます。
注3. SS0SRレジスタのCEビットが“1”(コンフリクトエラー発生) になると、このビットは“0”になります。
注4. MSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作)のとき、RSSTPビットは無効です。

図 23.3　SS0CRH レジスタ

SS0 制御レジスタL



シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0CRL	044F09h番地	0111 1101b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“1”		—
SRES	クロック同期型シリアルインタフェース制御回路リセットビット	“1”を書くと、送受信制御回路および送受信シフトレジスタが初期化されます。 内部レジスタ (注1) の値は保持されます	RW
— (b3-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“1”		—
SOLP	SOLライトプロテクトビット　(注2)	0: SOLビットのプロテクト解除 (SOLビットに書いた値が出力端子に反映される) 1: 出力端子のレベルは変化しない 読んだ場合、その値は“1”	RW
SOL	シリアルデータ出力値設定ビット	読んだ場合 0: 出力端子が“L” 1: 出力端子が“H” 書いた場合　(注2、3) 0: 出力端子を“L”にする 1: 出力端子を“H”にする	RW
— (b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“1”		—
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. SS0CRH、SS0CRL、SS0MR (4線式シリアルバスモード時はBC3~BC0ビットを除く)、SS0ER、SS0SR、SS0MR2、SS0TDR、SS0RDRの各レジスタ。
注2. 送信前または送信後にSOLビットに書くと、シリアルデータ出力端子のレベルを変更できます。SOLビットに書くときは、MOV命令を使用してSOLPビットに“0”、SOLビットに“0”または“1”を同時に書いてください。
注3. データ送信中はSOLビットに書かないでください。

図 23.4　SS0CRL レジスタ

SS0 モードレジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
			1	X			

シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0MR	044F0Ah番地	0001 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BC0	ビットカウンタ	送受信中の残ビット数 b2 b1 b0 0 0 0 : 残り8ビット 0 0 1 : 残り1ビット 0 1 0 : 残り2ビット 0 1 1 : 残り3ビット 1 0 0 : 残り4ビット 1 0 1 : 残り5ビット 1 1 0 : 残り6ビット 1 1 1 : 残り7ビット	RO
BC1			RO
BC2			RO
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b4)	予約ビット	“1”にしてください	RW
CPHS	SSCK0クロック位相 選択ビット　(注1)	0: 奇数エッジでデータ変化、 偶数エッジでデータ取り込み 1: 偶数エッジでデータ変化、 奇数エッジでデータ取り込み	RW
CPOS	SSCK0クロック極性 選択ビット	0: クロック停止時“H” 1: クロック停止時“L”	RW
MLS	MSBファースト / LSBファースト選択ビット	0: MSBファーストで送受信 1: LSBファーストで送受信	RW

注1. クロック同期式シリアル通信モードでは“0”にしてください。

図 23.5　SS0MR レジスタ (クロック同期式シリアル通信モードの場合)

SS0 モードレジスタ

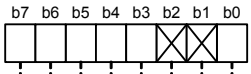
b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0MR	044F0Ah番地	0001 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BC0	キャラクタ長設定ビット / ビットカウンタ	書いた場合、キャラクタ長の設定 読んだ場合、送受信中の残ビット数 b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : 16ビット長 / 残り16ビット 0 0 0 1 : 設定禁止 / 残り1ビット 0 0 1 0 : 設定禁止 / 残り2ビット 0 0 1 1 : 設定禁止 / 残り3ビット 0 1 0 0 : 設定禁止 / 残り4ビット 0 1 0 1 : 設定禁止 / 残り5ビット 0 1 1 0 : 設定禁止 / 残り6ビット 0 1 1 1 : 設定禁止 / 残り7ビット 1 0 0 0 : 8ビット長 / 残り8ビット 1 0 0 1 : 9ビット長 / 残り9ビット 1 0 1 0 : 10ビット長 / 残り10ビット 1 0 1 1 : 11ビット長 / 残り11ビット 1 1 0 0 : 12ビット長 / 残り12ビット 1 1 0 1 : 13ビット長 / 残り13ビット 1 1 1 0 : 14ビット長 / 残り14ビット 1 1 1 1 : 15ビット長 / 残り15ビット	RW
BC1			RW
BC2			RW
BC3			RW
BCWP	BCライトプロテクトビット	BC3~BC0ビットを書き換えるとき、同時に“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“1”	RW
CPHS	SSCK0クロック位相選択ビット	0: 奇数エッジでデータ変化、偶数エッジでデータ取り込み 1: 偶数エッジでデータ変化、奇数エッジでデータ取り込み	RW
CPOS	SSCK0クロック極性選択ビット	0: クロック停止時“H” 1: クロック停止時“L”	RW
MLS	MSBファースト / LSBファースト選択ビット	0: MSBファーストで送受信 1: LSBファーストで送受信	RW

図 23.6　SS0MR レジスタ (4 線式シリアルバスモードの場合)

SS0 許可レジスタ

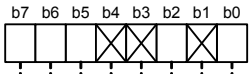


シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0ER	044F0Bh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CEIE	コンフリクトエラー割り込み許可ビット	0: コンフリクトエラー割り込み禁止 1: コンフリクトエラー割り込み許可	RW
— (b2-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
RE	受信許可ビット	0: 受信禁止 1: 受信許可	RW
TE	送信許可ビット	0: 送信禁止 1: 送信許可	RW
RIE	受信割り込み許可ビット	0: 受信データレジスタフル/オーバランエラー割り込み禁止 1: 受信データレジスタフル/オーバランエラー割り込み許可	RW
TEIE	送信完了割り込み許可ビット	0: 送信完了割り込み禁止 1: 送信完了割り込み許可	RW
TIE	送信割り込み許可ビット	0: 送信データレジスタエンプティ割り込み禁止 1: 送信データレジスタエンプティ割り込み許可	RW

図 23.7　SS0ER レジスタ

SS0 ステータスレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0SR	044F0Ch番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CE	コンフリクトエラーフラグ (注1)	0: コンフリクトエラーなし 1: コンフリクトエラー発生 (注2)	RW
— (b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
ORER	オーバランエラーフラグ (注1)	0: オーバランエラーなし 1: オーバランエラー発生 (注3)	RW
— (b4-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
RDRF	受信データレジスタフルフラグ (注1、4)	0: 受信データなし (SS0RDRレジスタにデータなし) 1: 受信データあり (SS0RDRレジスタにデータあり)	RW
TEND	送信完了フラグ (注1、5)	0: 送信継続 1: 送信完了	RW
TDRE	送信データレジスタエンプティフラグ (注1、6)	0: SS0TDRレジスタにデータあり 1: SS0TDRレジスタにデータなし	RW

注1. “1”を書いても状態は変化しません。フラグを“0”にするには、一旦レジスタを読んだ後、該当するビットに“0”を、その他のビットに“1”を書いてください。

注2. このビットは以下のとき“1”になります。
- SS0MR2レジスタのSSUMSビットが“1”(4線式シリアルバスモード)、SS0CRHレジスタのMSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作) の場合に、$\overline{\text{SCS0}}$端子入力が“L”のとき。
- SSUMSビットが“1”(4線式シリアルバスモード)、MSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作) の場合に、フレームの送受信中に$\overline{\text{SCS0}}$端子入力が“L”から“H”に変化したとき。

注3. 受信時にオーバランエラーが発生し、異常終了したことを示します。RDRFビットが“1”(SS0RDRレジスタにデータあり)の状態で、次のシリアルデータ受信を完了したとき、このビットが“1”になります。このビットが“1”(オーバランエラー発生) の状態では、以後の受信はできません。またMSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作) の場合は、送信もできません。

注4. このビットは、SS0RDRレジスタからデータを読み出すと“0”になります。

注5. このビットは、現在送信中のデータの最終ビット送信中、SS0TDRレジスタに次の送信待ちデータがないとき“1”になります。SS0TDRレジスタにデータを書くと“0”になります。

注6. このビットは、SS0ERレジスタのTEビットを“0”(送信禁止) から“1”(送信許可) にすると“1”になります。また、SS0TDRレジスタから送受信シフトレジスタにデータが転送されたときにも“1”になります。SS0TDRレジスタにデータを書くと“0”になります。

図 23.8　SS0SR レジスタ

SS0 モードレジスタ2

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0MR2	044F0Dh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SSUMS	モード選択ビット	0: クロック同期式シリアル通信モード 1: 4線式シリアルバスモード	RW
CSOS	$\overline{\text{SCS0}}$端子オープンドレイン出力選択ビット	0: プッシュプル出力 1: Nチャネルオープンドレイン出力	RW
SOOS	シリアルデータオープンドレイン出力選択ビット	0: プッシュプル出力 1: Nチャネルオープンドレイン出力	RW
SCKOS	SSCK0端子オープンドレイン出力選択ビット	0: プッシュプル出力 1: Nチャネルオープンドレイン出力	RW
CSS0	$\overline{\text{SCS0}}$端子機能選択ビット (注1、2、3)	b5 b4 0 0 : チップセレクトを使用しない 0 1 : $\overline{\text{SCS0}}$入力端子として機能 1 0 : $\overline{\text{SCS0}}$出力端子として機能 1 1 : $\overline{\text{SCS0}}$入出力端子として機能 (注4)	RW
CSS1			RW
SCKS	SSCK0端子機能選択ビット (注2)	0: 送受信クロックを入出力しない 1: 送受信クロック入出力端子として機能	RW
BIDE	双方向モード許可ビット (注5)	0: 標準モード (データ入力、出力が別端子) 1: 双方向モード (データ入出力を1端子で共用)	RW

注1. SSUMSビットが“0”(クロック同期式シリアル通信モード) の場合、CSS1~CSS0ビットの設定値にかかわらず、$\overline{\text{SCS0}}$機能は使用されません。
注2. 各端子の機能は、ポート方向レジスタ、出力機能選択レジスタの設定が優先されます。使用する機能に合わせて、ポート方向レジスタ、出力機能選択レジスタを設定してください。
注3. CSS1~CSS0ビットを“11b”にする場合、一旦“10b”に設定した後、同じ端子に割り当てられたポートから“1”が読めるようになってから“11b”に設定してください。
注4. 送受信中は$\overline{\text{SCS0}}$出力端子、それ以外は$\overline{\text{SCS0}}$入力端子として機能します。
注5. SSUMSビットが“0”(クロック同期式シリアル通信モード) の場合、BIDEビットの設定値にかかわらず、標準モードになります。

図 23.9　SS0MR2 レジスタ

SS0 送信データレジスタ

b15　　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0TDR	044F0Fh-044F0Eh番地	FFFFh

機　能	RW
送信データを格納します。 データはLSB詰めで書いてください。 キャラクタ長が9ビット以上の場合は16ビット単位で書いてください。 送受信シフトレジスタの空きが検出されると、このレジスタの送信データが送受信シフトレジスタへ転送されて、送信が開始されます。 送受信シフトレジスタからデータを送信中に、このレジスタに次の送信データを書いておくと、連続して送信できます。 SS0MR2レジスタのSSUMSビットが“1”(4線式シリアルバスモード) の場合、SS0MRレジスタのMLSビットが“1”(LSBファーストで送受信) のときにこのレジスタを読むと、書いた値とはMSBとLSBが逆転したデータが読めます	RW

図 23.10　SS0TDR レジスタ

SS0 受信データレジスタ

b15　　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
SS0RDR	044F07h-044F06h番地	FFFFh

機　能	RW
受信データが格納されます(注1) 。 キャラクタ長が9ビット以上の場合は16ビット単位で読んでください。 送受信シフトレジスタが1フレームのデータを受信すると、SS0RDRレジスタへ受信データが転送されて、受信動作が完了します。このとき、次の受信が可能になります。 このように送受信シフトレジスタとSS0RDRレジスタはダブルバッファ構成になっているため、連続受信を行うことができます。 キャラクタ長を超えるビットは不定になります	RO

注1. SS0SRレジスタのORERビットが“1”(オーバランエラー発生) になったとき、SS0RDRレジスタはオーバランエラー発生前の受信データを保持します。オーバランエラー発生時の受信データは、破棄されます。

図 23.11　SS0RDR レジスタ

23.1.1 送受信クロック

クロック同期式シリアル通信モードまたは4線式シリアルバスモードを使用する場合は、SS0MR2レジスタのSCKSビットを“1”にし、SSCK0端子を送受信クロック端子として設定してください。

(1) マスタデバイスとして使用する場合

SS0CRHレジスタのMSSビットが“1”(マスタデバイスとして動作)の場合、SS0CRHレジスタのCKS2~CKS0ビットで、7種類の内部クロック f(BCLK)/n (n = 4, 8, 16, 32, 64, 128, 256)から送受信クロックを選択します。

また、出力機能選択レジスタで対応する端子の機能をSSCK0出力に設定し、ポート方向レジスタで対応する端子の方向を出力に設定します。

このとき、SSCK0端子はクロック出力端子になり、送受信を開始すると選択された送受信クロックがSSCK0端子から出力されます。

(2) スレーブデバイスとして使用する場合

SS0CRHレジスタのMSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作)の場合、外部クロックが選択されます。

このとき、ポート方向レジスタで対応する端子の方向を入力に設定すると、SSCK0端子はクロック入力端子になります。

23.1.1.1　送受信クロックの極性、位相

SS0MR2レジスタのSSUMSビット、SS0MRレジスタのCPHSビット、CPOSビットの組み合わせで、送受信クロックの極性と、送受信データに対する位相が変わります。図23.12に送受信クロックの極性とデータに対する位相の関係を示します。

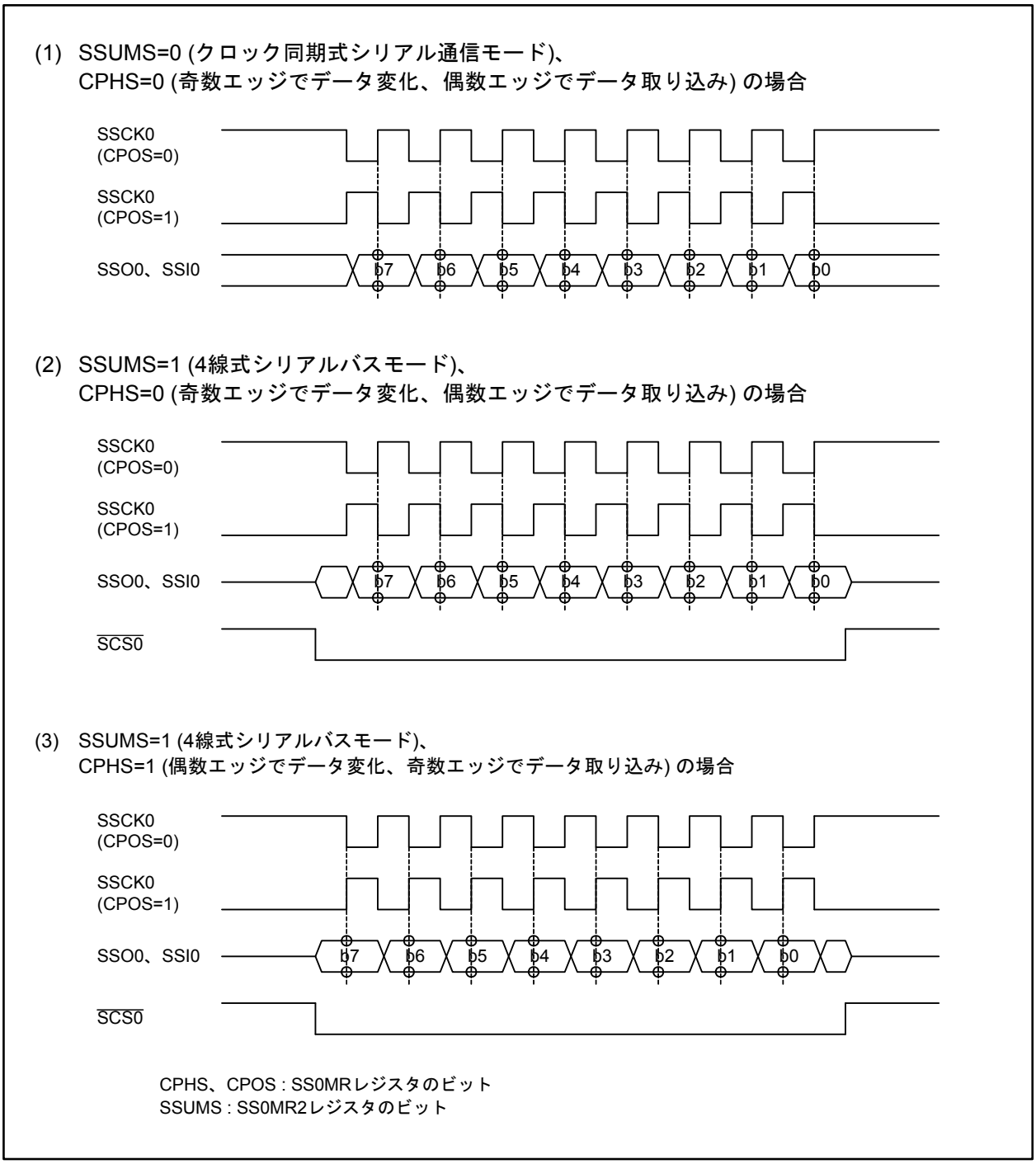


図 23.12　送受信クロックの極性とデータに対する位相の関係

23.1.2 送受信シフトレジスタ

送受信シフトレジスタは、シリアルデータを送受信するためのシフトレジスタです。送受信シフトレジスタに転送されたデータはMSB側からシフトアウトされ、受信データはLSB側からシフトインされます。

図 23.13に送受信シフトレジスタの動作を示します。

23.1.2.1 ビットオーダ

SS0MRレジスタのMLSビットの設定により、MSBファーストで送受信するかLSBファーストで送受信するかを選択できます。MLSビットが“1”のときは、LSBから始まり最後にMSBの順で送信され、受信時は最初のビットをLSBとして扱います。MLSビットが“0”のときは、MSBから始まり最後にLSBの順で送信され、受信時は最初のビットをMSBとして扱います。

(1) 送信時の動作

MLSビットが“0” (MSBファーストで送受信)の場合、SS0TDRレジスタには書いた値がそのまま反映されます。

MLSビットが“1” (LSBファーストで送受信)の場合、SS0TDRレジスタには、書いた値のビット順が逆転されて反映されます。このため、SS0TDRレジスタを読むと、書いた値とはビット順が逆転された値が読めます。

いずれの場合も送信データは送受信シフトレジスタにそのまま転送されます。

(2) 受信時の動作

MLSビットが“0” (MSBファーストで送受信)の場合、受信されたデータは送受信シフトレジスタからSS0RDRレジスタにそのまま転送されます。

MLSビットが“1” (LSBファーストで送受信)の場合、受信されたデータは送受信シフトレジスタからSS0RDRレジスタにビット順が逆転されて転送されます。

23.1.2.2 可変長データの送受信

送受信キャラクタ長が16ビットに満たない場合、送受信シフトレジスタのシフトイン/シフトアウト位置をずらすことで、ビットの位置を調整します。

この機能により送信データ、受信データともLSB詰めで扱うことができます。

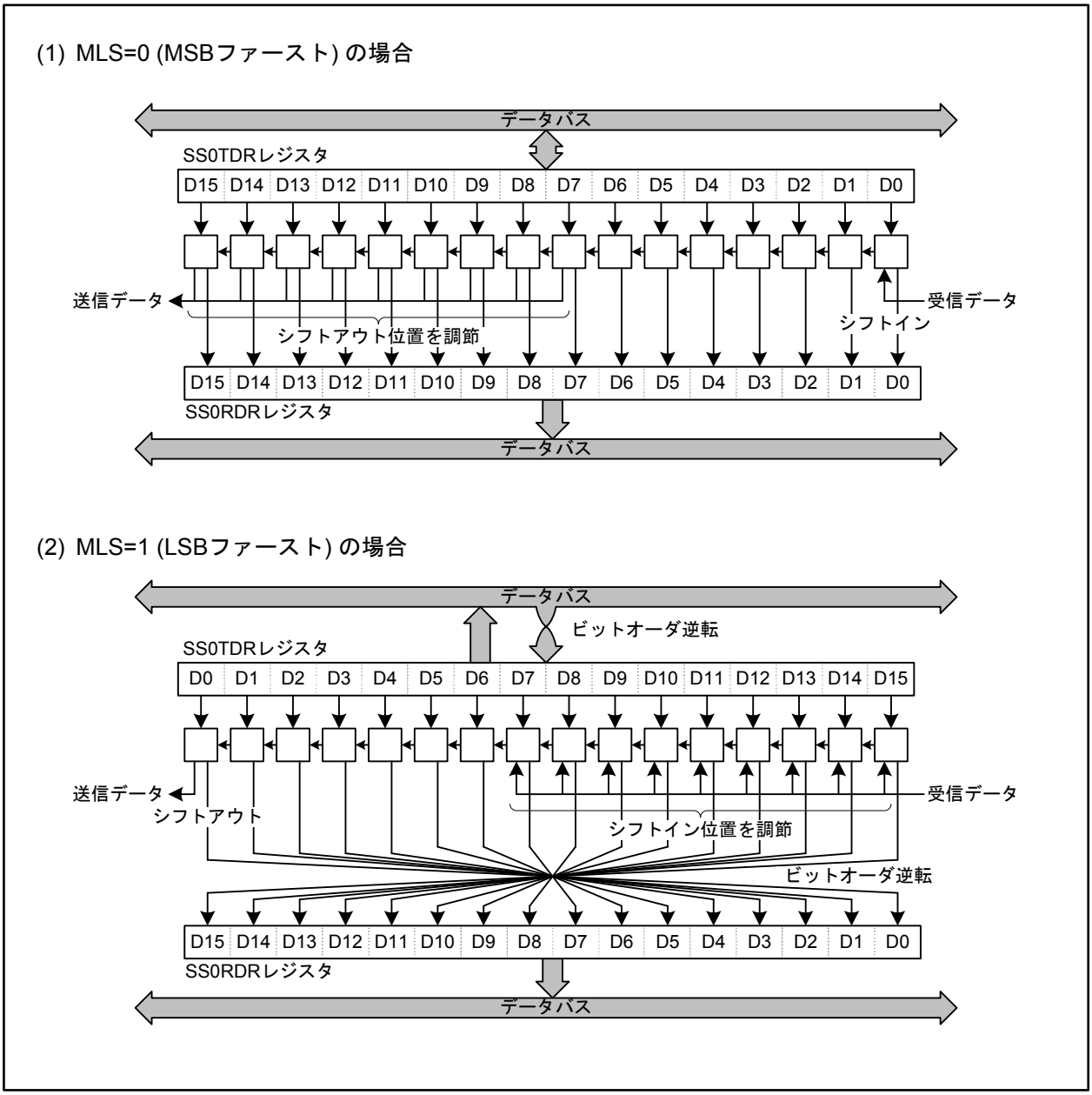


図 23.13 送受信シフトレジスタの動作

23.1.3 データ入出力端子とSS0シフトレジスタの関係

SS0CRHレジスタのMSSビット、SS0MR2レジスタのSSUMSビット及びBIDEビットの組み合わせにより、データ入出力端子と送受信シフトレジスタの接続関係が変わります。図23.14にデータ入出力端子と送受信シフトレジスタの接続関係を示します。

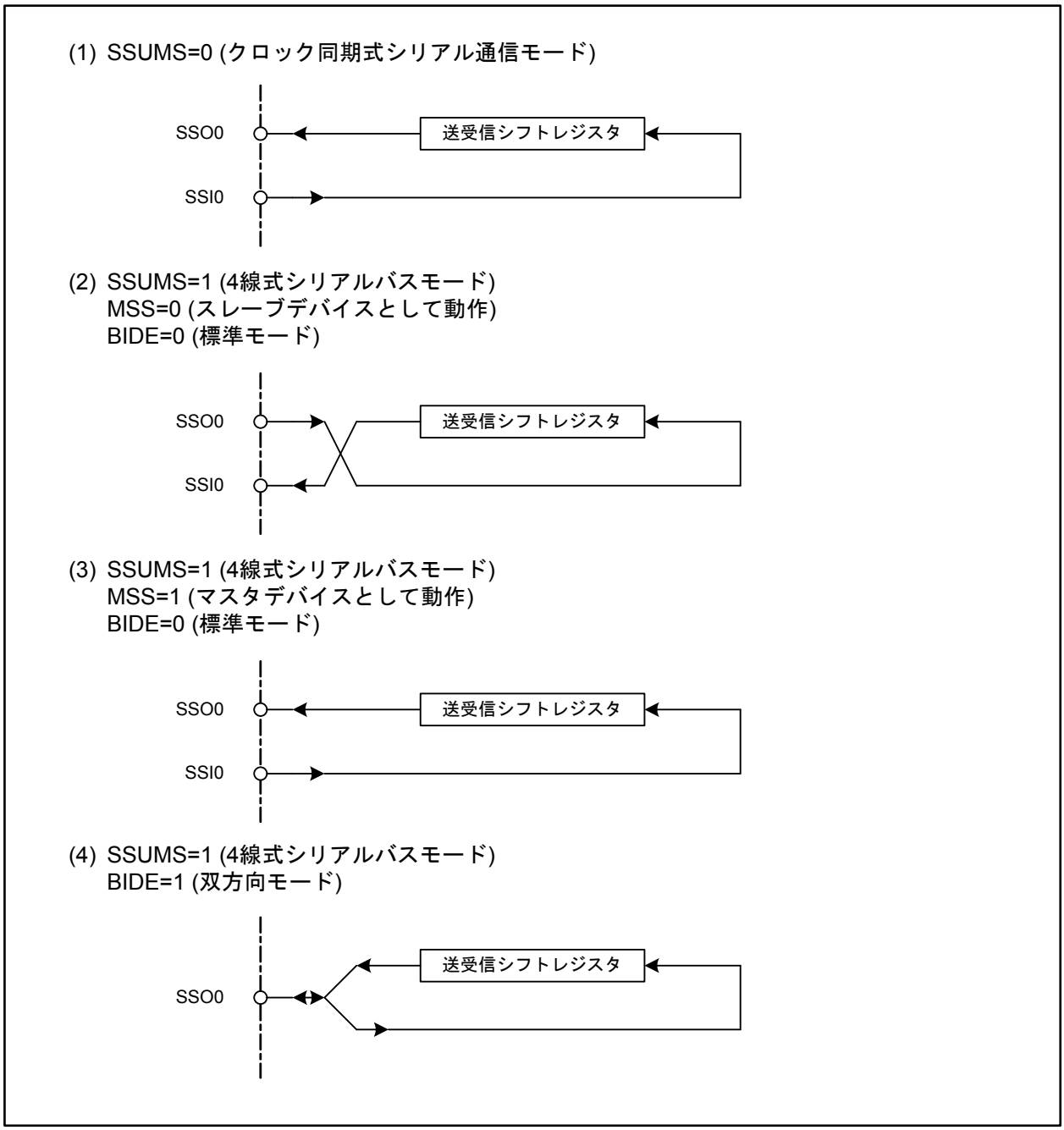


図23.14 データ入出力端子と送受信シフトレジスタの接続関係

23.1.4 割り込み要求

クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモードの割り込み要求には、送信データレジスタエンプティ、送信完了、受信データレジスタフル、オーバランエラー、コンフリクトエラーの5つの割り込み要求があります。これらの割り込み要求は、まとめて1つの割り込みベクタテーブルに割り付けられているため、割り込み処理ルーチンの中でフラグによる要因の判別が必要です。表 23.3 に割り込み要求と発生条件の一覧を示します。

表 23.3　クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモードの割り込み要求

割り込み要求		発生条件
送信データレジスタエンプティ	TXI	TIE=1 かつ TDRE=1
送信完了	TEI	TEIE=1 かつ TEND=1
受信データレジスタフル	RXI	RIE=1 かつ RDRF=1
オーバランエラー	OEI	RIE=1 かつ ORER=1
コンフリクトエラー	CEI	CEIE=1 かつ CE=1

CEIE、RIE、TEIE、TIE: SS0ER レジスタのビット
CE、ORER、RDRF、TEND、TDRE: SS0SR レジスタのビット

表 23.3 の発生条件が満たされたとき、シリアルバスインタフェース割り込み要求が発生します。割り込み処理ルーチン内で、それぞれの割り込み要因を“0”にしてください。

ただし、TDRE ビット(送信データレジスタエンプティ)および TEND ビット(送信完了)は、SS0TDR レジスタに次の送信データを書くことで自動的に“0”になります。また、RDRF ビット(受信データレジスタフル)は SS0RDR レジスタを読むことで自動的に“0”になります。

なお、TDRE ビットは、SS0TDR レジスタに送信データを書いたとき“0” (SS0TDR レジスタにデータあり) になりますが、送信中でない場合はすぐに送受信シフトレジスタにデータが転送されて“1” (SS0TDR レジスタにデータなし)に戻ります。このとき TDRE ビットに“0”を書くと、余分に1フレーム送信する場合があります。

23.1.5　各通信モードと端子機能

クロック同期式シリアル通信モードまたは4線式シリアルバスモードでは、SS0CRHレジスタのMSSビットと、SS0ERレジスタのRE、TEビットの設定により、入出力端子の機能が変わります。SSCK0端子は、マスタデバイスでは出力、スレーブデバイスでは入力になります。SSI0端子、SSO0端子、SSCK0の入出力方向に合わせて、ポート方向レジスタ、ポート機能選択レジスタの設定も必要です。表23.4に通信モードと入出力端子の関係を示します。

表23.4　通信モードと入出力端子の関係

通信モード	ビットの設定					端子の状態		
	SSUMS	BIDE	MSS	TE	RE	SSI0	SSO0	SSCK0
クロック同期式シリアル通信モード	0	無効	0 (スレーブ)	0	1	データ入力	(注1)	クロック入力
				1	0	(注1)	データ出力	
					1	データ入力	データ出力	
			1 (マスタ)	0	1	データ入力	(注1)	クロック出力
				1	0	(注1)	データ出力	
					1	データ入力	データ出力	
4線式シリアルバスモード(標準モード)	1	0	0 (スレーブ)	0	1	(注1)	データ入力	クロック入力
				1	0	データ出力	(注1)	
					1	データ出力	データ入力	
			1 (マスタ)	0	1	データ入力	(注1)	クロック出力
				1	0	(注1)	データ出力	
					1	データ入力	データ出力	
4線式シリアルバスモード(双方向モード)(注2)	1	1	0 (スレーブ)	0	1	(注1)	データ入力	クロック入力
				1	0	(注1)	データ出力	
			1 (マスタ)	0	1	(注1)	データ入力	クロック出力
				1	0	(注1)	データ出力	

注1.　プログラマブル入出力ポートとして使用できます。
注2.　4線式シリアルバスモード(双方向)時は、TEビットとREビットを同時に“1”にしないでください。

SSUMS、BIDE: SS0MR2レジスタのビット
MSS: SS0CRHレジスタのビット
TE、RE: SS0ERレジスタのビット

23.1.6 クロック同期式シリアル通信モード

23.1.6.1 クロック同期式シリアル通信モードの初期化

図 23.15 にクロック同期式シリアル通信モードの初期化手順を示します。データの送信 / 受信前に、SS0ER レジスタの TE ビットを“0” (送信禁止)、RE ビットを“0” (受信禁止)にして初期化してください。

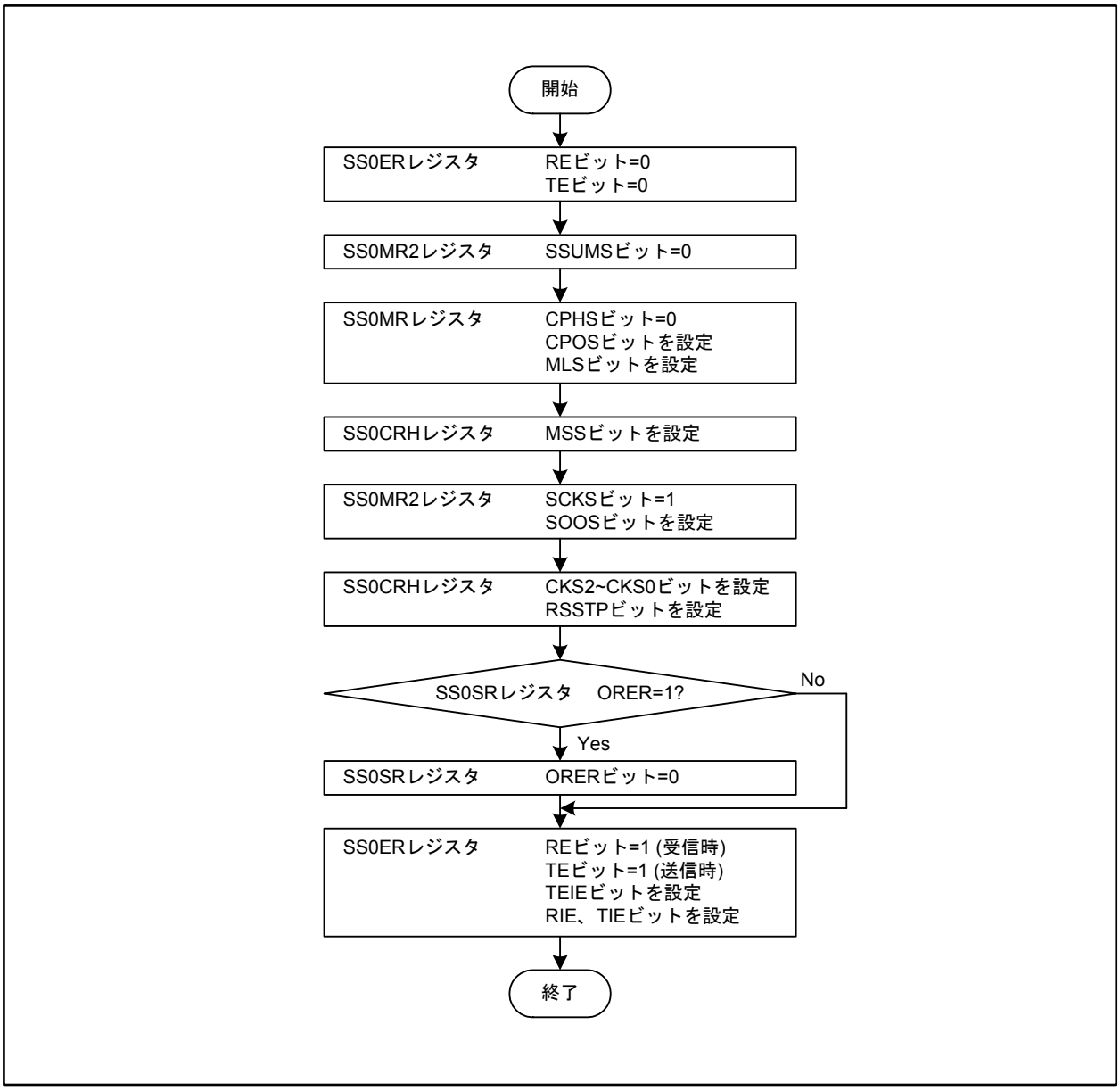


図 23.15 クロック同期式シリアル通信モードの初期化手順

通信モードや、通信データフォーマットなどを変更する場合には、TE ビット、RE ビットを両方とも“0”にしてから変更してください。

なお、RE ビットを“0”にしても、RDRF、ORER の各フラグ、および SS0RDR レジスタの内容は保持されます。

23.1.6.2　データ送信

図 23.16にクロック同期式シリアル通信モードにおけるデータ送信時の動作例を示します。データ送信時は以下のように動作します。

マスタデバイスに設定した場合は、内部で生成したクロックを送受信クロックとして使用し、SSCK0端子から出力します。スレーブデバイスに設定した場合は、SSCK0端子から入力されたクロックを送受信クロックとして使用します。いずれの場合も送信データは送受信クロックに同期して出力されます。

SS0ERレジスタのTEビットを“1”(送信許可)にした後、SS0TDRレジスタに送信データを書くと、自動的にSS0SRレジスタのTDREビットが“0”(SS0TDRレジスタにデータあり)になり、SS0TDRレジスタから送受信シフトレジスタにデータが転送されます。その後、TDREビットが“1”(SS0TDRレジスタにデータなし)になり、送信を開始します。このとき、SS0ERレジスタのTIEビットが“1”(送信データレジスタエンプティ割り込み許可)の場合、送信データエンプティ(TXI)割り込み要求を発生します。

TDREビットが“0”の場合、1フレームの送信が終わると、SS0TDRレジスタから送受信シフトレジスタにデータが転送され、次フレームの送信を開始します。TDREビットが“1”の場合、8ビット目が送出されると、SS0SRレジスタのTENDビットが“1”(送信完了)になります。このときSS0ERレジスタのTEIEビットが“1”(送信完了割り込み許可)の場合、送信完了(TEI)割り込み要求を発生します。

送信完了後、SSCK0端子はSS0MRレジスタのCPOSビットで設定したレベルに固定されます。

なお、SS0SRレジスタのORERビットが“1”(オーバランエラー発生)の状態では、送信できません。送信の前には、ORERビットが“0”であることを確認してください。

図 23.17に、クロック同期式シリアル通信モードにおけるデータ送信手順の例を示します。

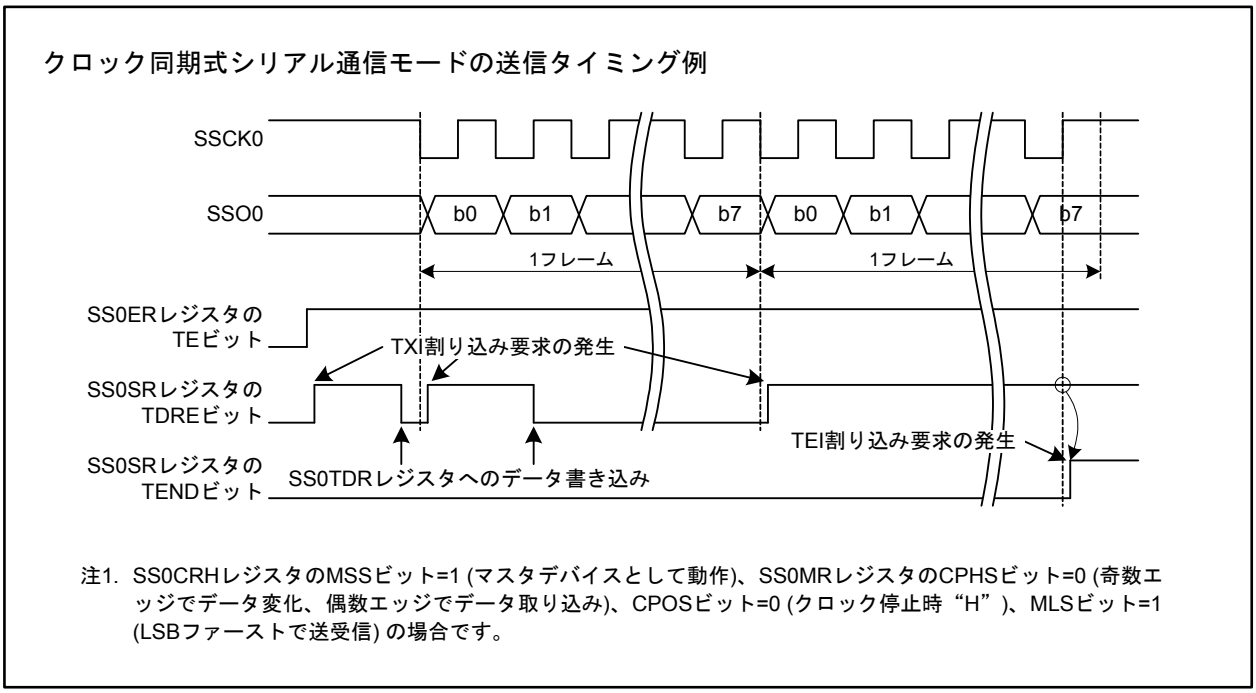


図 23.16　データ送信時の動作例(クロック同期式シリアル通信モード)

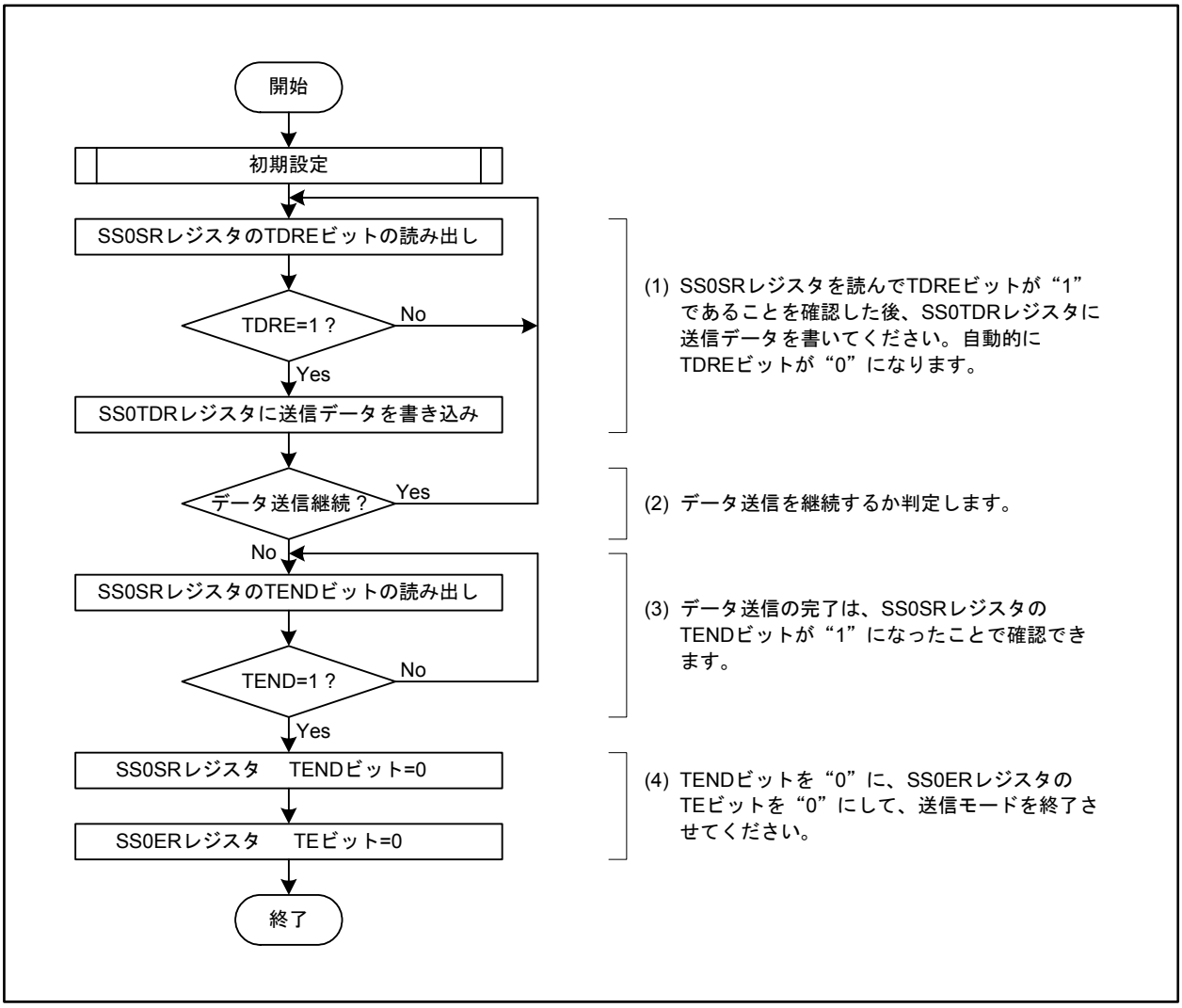


図 23.17 データ送信手順の例(クロック同期式シリアル通信モード)

23.1.6.3　データ受信

図 23.18にクロック同期式シリアル通信モードにおけるデータ受信時の動作例を示します。データ受信時は以下のように動作します。

マスタデバイスに設定した場合は、内部で生成したクロックを送受信クロックとして使用し、SSCK0端子から出力します。スレーブデバイスに設定した場合は、SSCK0端子から入力されたクロックを送受信クロックとして使用します。いずれの場合も受信データは送受信クロックに同期して取り込まれます。

マスタデバイスに設定した場合は、最初にSS0RDRレジスタをダミーリードすることで受信クロックが出力され、受信を開始します。

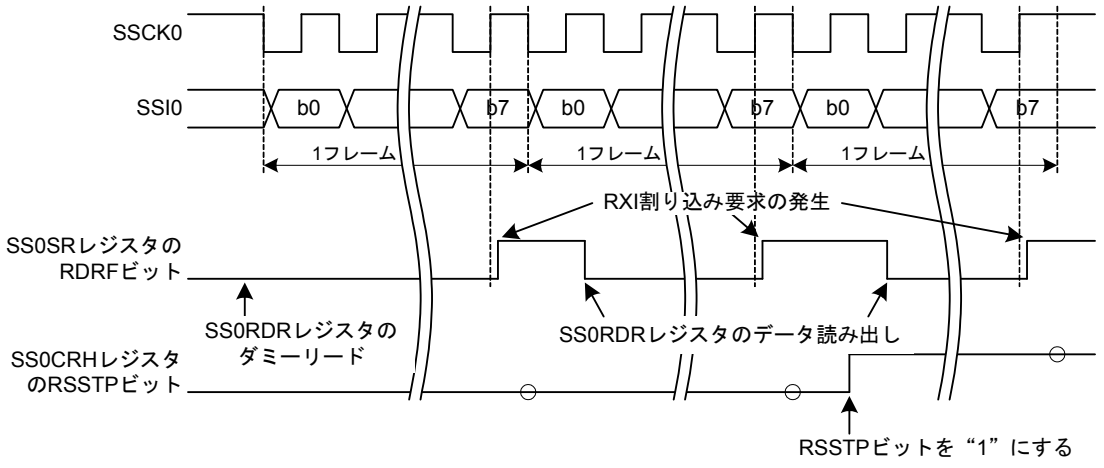
データを8ビット受信すると、SS0SRレジスタのRDRFビットが“1” (SS0RDRレジスタにデータあり)になり、SS0RDRレジスタに受信データが格納されます。このとき、SS0ERレジスタのRIEビットが“1” (受信データレジスタフル/オーバランエラー割り込み許可)の場合、受信データレジスタフル(RXI)割り込み要求を発生します。SS0RDRレジスタを読むと、自動的にRDRFビットは“0” (SS0RDRレジスタにデータなし)になります。

マスタデバイスに設定した場合に受信を終了するには、最終フレームの1つ前のデータをSS0RDRレジスタから読み出す前に、SS0CRHレジスタのRSSTPビットを“1” (現在のフレーム受信後、受信動作を終了)にしてください。この操作により、最終フレームの受信が完了した後、送受信クロックを停止します。その後、SS0ERレジスタのREビットを“0” (受信禁止)に、RSSTPビットを“0” (現在のフレーム受信後、続けて次のフレームを受信)にし、最終フレームのデータを読んでください。REビットが“1” (受信許可)の状態でSS0RDRレジスタを読むと、再度受信クロックが出力されます。

RDRFビットが“1”の時に8ビット目を受信すると、SS0SRレジスタのORERビットが“1” (オーバランエラー発生)になり、受信動作を停止します。なお、ORERビットが“1”の状態では受信動作は行えませんので、受信動作を再開する前にORERビットが“0”であることを確認してください。

図 23.19に、クロック同期式シリアル通信モードにおけるマスタデバイス時のデータ受信手順の例を示します。

クロック同期式シリアル通信モードの受信タイミング例



注1. SS0CRHレジスタのMSSビット=1 (マスタデバイスとして動作)、SS0MRレジスタのCPHSビット=0 (奇数エッジでデータ変化、偶数エッジでデータ取り込み)、CPOSビット=0 (クロック停止時“H”)、MLSビット=1 (LSBファーストで送受信) の場合です。

図 23.18　データ受信時の動作例(クロック同期式シリアル通信モード)

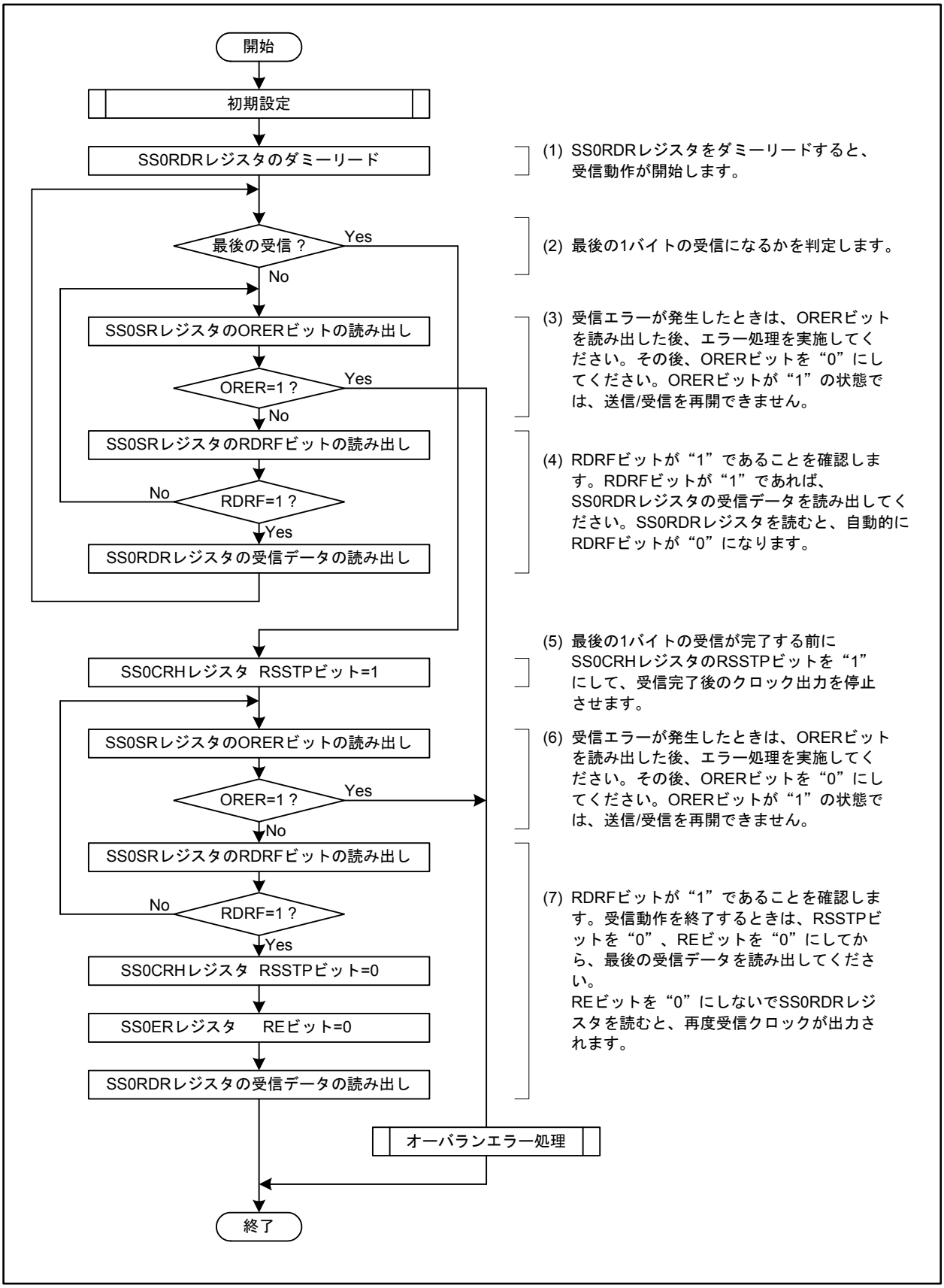


図 23.19　データ受信手順の例(MSS=1)(クロック同期式シリアル通信モード)

23.1.6.4　データ送受信

データ送受信は前述のデータ送信とデータ受信の複合的な動作になります。

送受信は、SS0TDR レジスタにデータを書くことで開始され、TDRE ビットが“1” (SS0TDR レジスタにデータなし)の状態で8ビット目が送出されると終了します。また、ORER ビットが“1” (オーバランエラー発生)になった場合は、エラーとして送受信動作が停止します。

なお、送信モード(TE=1、RE=0)あるいは受信モード(TE=0、RE=1)から、送受信モード(TE=1、RE=1)に切り替える場合は、一度TE ビットとRE ビットの両方を“0”にしてください。その後、TEND ビットが“0” (送信継続)、RDRF ビットが“0” (SS0RDR レジスタにデータなし)、ORER ビットが“0” (オーバランエラーなし)であることを確認した後、TE ビットとRE ビットを同時に“1”にしてください。

図 23.20に、クロック同期式シリアル通信モードにおけるデータ送受信手順の例を示します。

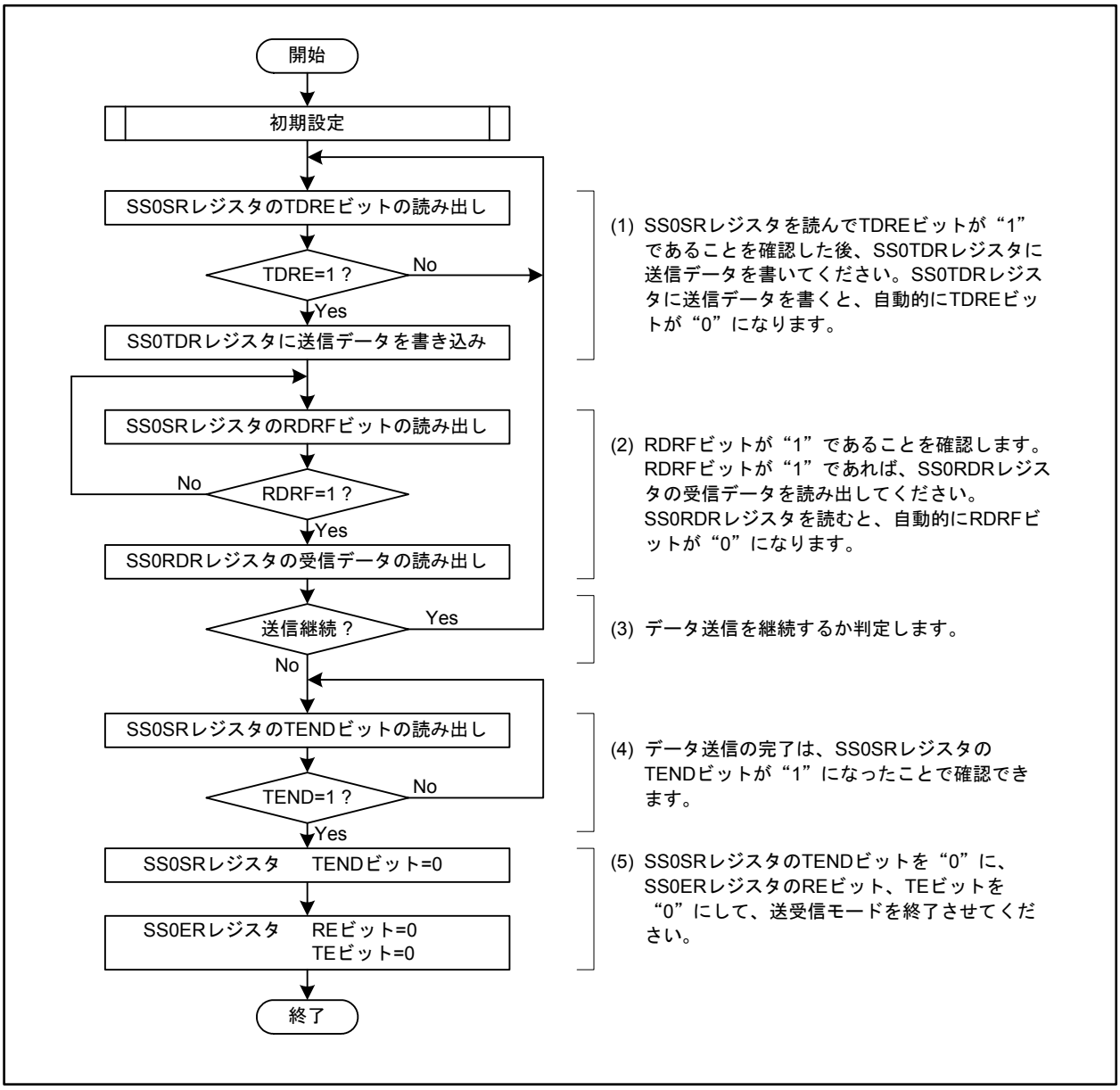


図 23.20　データ送受信手順の例(クロック同期式シリアル通信モード)

23.1.7　4線式シリアルバスモード

4線式シリアルバスモードは、クロックライン、データ入力ライン、データ出力ライン、チップセレクトラインの4本の信号線からなるバスを使用してシリアル通信を行うモードです。このモードにはデータ入力ラインとデータ出力ラインを1端子で行う双方向モードも含みます。

データ入力ラインとデータ出力ラインは、SS0CRHレジスタのMSSビットおよびSS0MR2レジスタのBIDEビットの設定により、SSI0端子、SSO0端子のいずれが使用されるかが変化します。詳細は「23.1.3 データ入出力端子とSS0シフトレジスタの関係」を参照してください。また、このモードではクロックの極性とデータに対するクロックの位相を、それぞれSS0MRレジスタのCPOSビットとCPHSビットにより設定できます。詳細は「23.1.1.1 送受信クロックの極性、位相」を参照してください。

チップセレクトラインは、マスタデバイスの場合は出力端子、スレーブデバイスの場合は入力端子として機能します。マスタデバイスの場合はSS0MR2レジスタのCSS1~CSS0ビットを“10b”にして$\overline{\text{SCS0}}$端子を出力端子として自動で制御するか、あるいは汎用ポートをチップセレクト端子として使用することができます。スレーブデバイスの場合はSS0MR2レジスタのCSS1~CSS0ビットを“01b”にして$\overline{\text{SCS0}}$端子を入力端子として使用します。

4線式シリアルバスモードでは、標準的にSS0MRレジスタのMLSビットを“0”にして、MSBファーストで通信を行います。

23.1.7.1　4線式シリアルバスモードの初期化

図23.21に4線式シリアルバスモードの初期化手順を示します。データの送信/受信前に、SS0ERレジスタのTEビットを“0”(送信禁止)、REビットを“0”(受信禁止)にして回路を初期化してください。

動作モードの変更、通信フォーマットの変更などの場合には、TEビットとREビットの両方を“0”にしてから変更してください。

なお、REビットを“0”にしても、RDRF、ORERの各フラグ、およびSS0RDRレジスタの内容は保持されます。

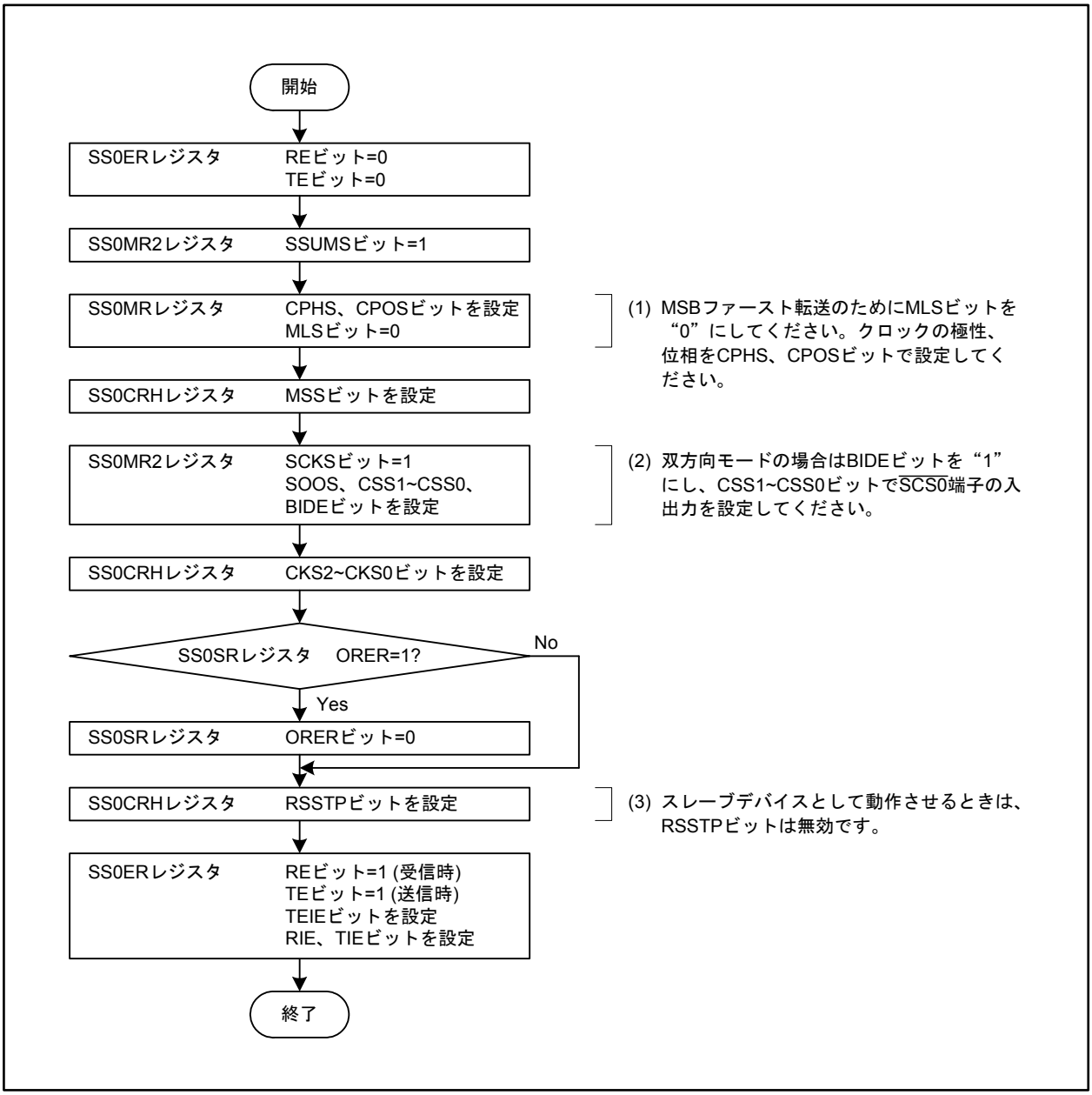


図 23.21　4線式シリアルバスモードの初期化手順

23.1.7.2 データ送信

図 23.22に4線式シリアルバスモードにおけるデータ送信時の動作例を示します。データ送信時は以下のように動作します。

マスタデバイスに設定した場合は、内部で生成したクロックを送受信クロックとして使用し、SSCK0端子から出力します。スレーブデバイスに設定した場合は、$\overline{\text{SCS0}}$端子に“L”が入力されているときにSSCK0端子から入力されたクロックを送受信クロックとして使用します。いずれの場合も送信データは送受信クロックに同期して出力されます。

SS0ERレジスタのTEビットを“1”(送信許可)にした後、SS0TDRレジスタに送信データを書くと、自動的にSS0SRレジスタのTDREビットが“0”(SS0TDRレジスタにデータあり)になり、SS0TDRレジスタから送受信シフトレジスタにデータが転送されます。その後、TDREビットが“1”(SS0TDRレジスタにデータなし)になり、送信を開始します。このとき、SS0ERレジスタのTIEビットが“1”(送信データレジスタエンプティ割り込み許可)の場合、送信データレジスタエンプティ(TXI)割り込み要求を発生します。

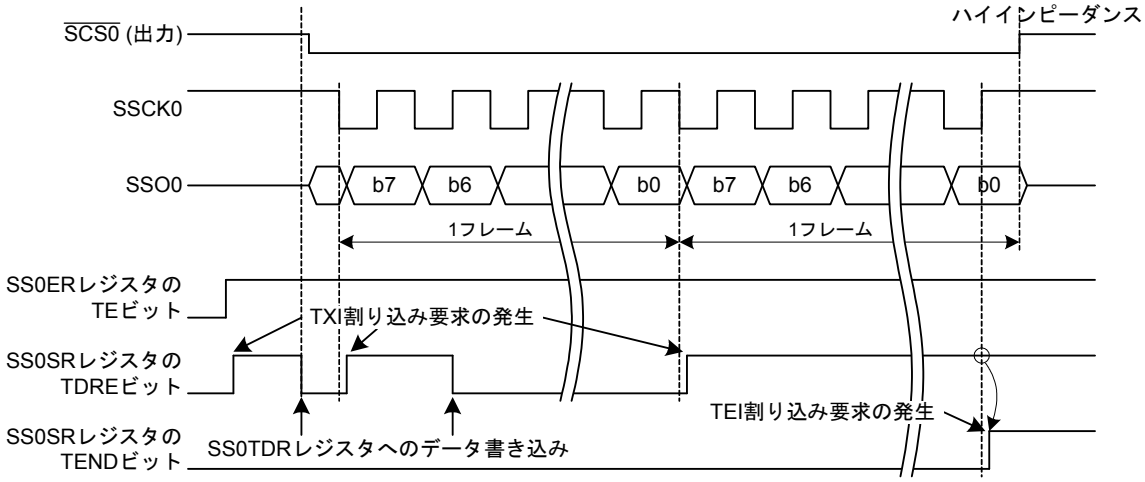
TDREビットが“0”の場合、1フレームの送信が終わると、SS0TDRレジスタから送受信シフトレジスタにデータが転送され、次フレームの送信を開始します。TDREビットが“1”の場合、最終ビットが送出されると、SS0SRレジスタのTENDビットが“1”(送信完了)になります。このときSS0ERレジスタのTEIEビットが“1”(送信完了割り込み要求許可)の場合、送信完了(TEI)割り込み要求を発生します。送信完了後、SSCK0端子は“H”に、$\overline{\text{SCS0}}$端子は“H”になります。$\overline{\text{SCS0}}$端子を“L”にしたまま連続的に送信する場合は、最終ビットが送出される前に次の送信データをSS0TDRレジスタに書いてください。

なお、SS0SRレジスタのORERビットが“1”(オーバランエラー発生)の状態では、送信できません。送信の前には、ORERビットが“0”であることを確認してください。

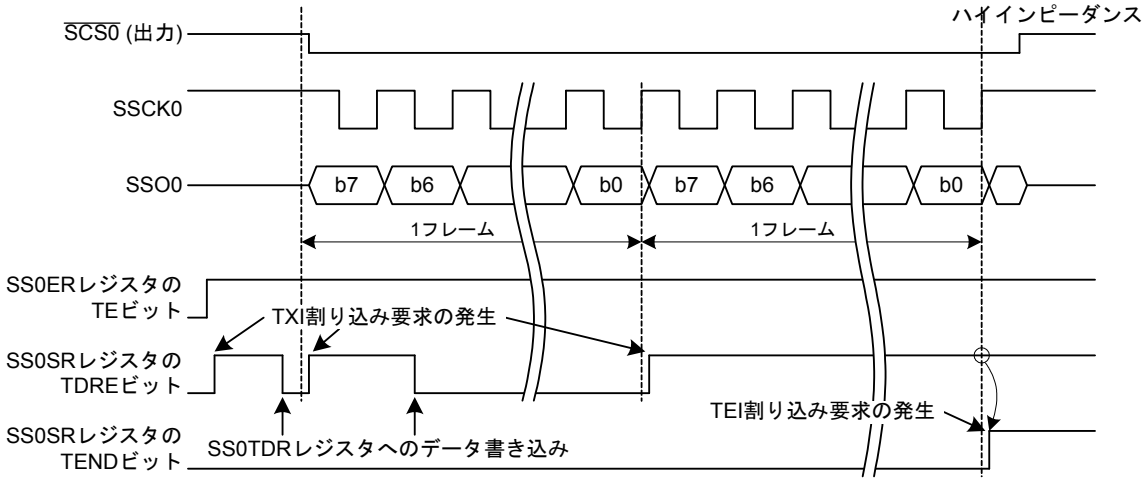
クロック同期式シリアル通信モードとの違いは、$\overline{\text{SCS0}}$端子を使用するかどうかです。4線式シリアルバスモードでは、マスタデバイスに設定している場合に$\overline{\text{SCS0}}$端子が“H”を出力しているときは、SSO0端子がハイインピーダンスとなり、スレーブデバイスに設定している場合に$\overline{\text{SCS0}}$端子から“H”が入力されていると、SSI0端子がハイインピーダンスになります。

データ送信手順については図 23.17を参照してください。

(1) CPHS=0 (奇数エッジでデータ変化、偶数エッジでデータ取り込み) の場合



(2) CPHS=1 (偶数エッジでデータ変化、奇数エッジでデータ取り込み) の場合



CPOS: SS0MRレジスタのビット

注1. SS0CRHレジスタのMSSビット=1 (マスタデバイスとして動作)、SS0MRレジスタのCPOSビット=0 (クロック停止時“H”)、MLSビット=0 (MSBファーストで送受信)、BC3~BC0ビット=1000b (8ビット長)、SS0MR2レジスタのCSOSビット=1 ($\overline{\text{SCS0}}$端子はNチャネルオープンドレイン出力) の場合です。

図 23.22 データ送信時の動作例(4線式シリアルバスモード)

23.1.7.3 データ受信

図 23.23に4線式シリアルバスモードにおけるデータ受信時の動作例を示します。データ受信時は以下のように動作します。

マスタデバイスに設定した場合は、内部で生成したクロックを送受信クロックとして使用し、SSCK0端子から出力します。スレーブデバイスに設定した場合は、$\overline{\text{SCS0}}$端子が“L”のときにSSCK0端子から入力されたクロックを送受信クロックとして使用します。いずれの場合も受信データは送受信クロックに同期して取り込まれます。

マスタデバイスに設定した場合は、SS0ER レジスタの TE ビットを“0”にし、送信モードを終了させた後、SS0RDR レジスタをダミーリードすることで受信クロックが出力され、受信を開始します。

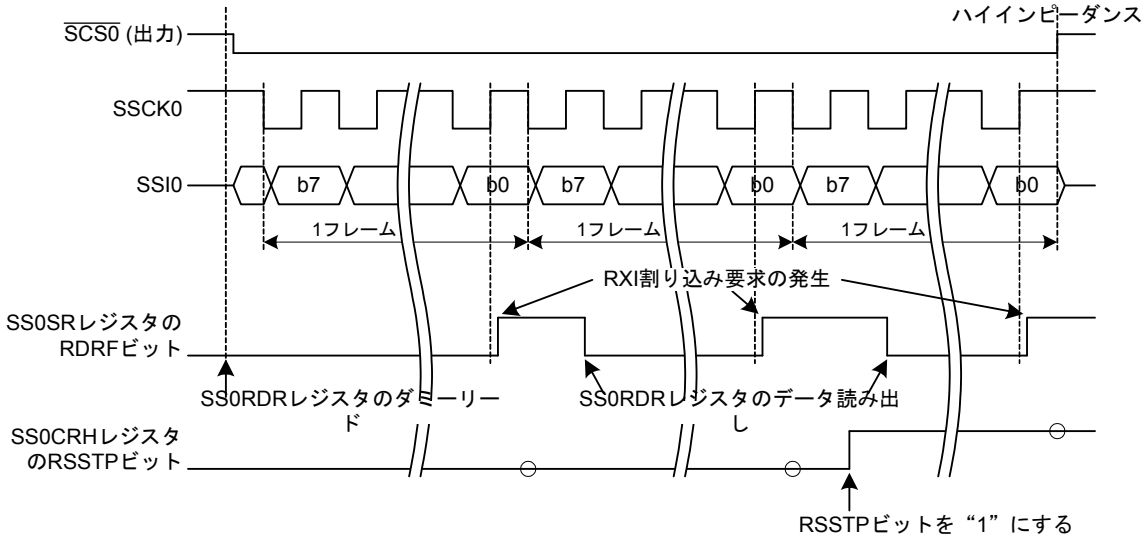
設定したビット数のデータを受信すると、SS0SR レジスタのRDRF ビットが“1” (SS0RDR レジスタにデータあり)になり、SS0RDR レジスタに受信データが格納されます。このとき、SS0ER レジスタのRIE ビットが“1” (受信データレジスタフル/オーバランエラー割り込み許可)の場合、受信データレジスタフル(RXI)割り込み要求を発生します。SS0RDRレジスタを読むと、自動的にRDRFビットは“0” (SS0RDR レジスタにデータなし)になります。

マスタデバイスに設定した場合に受信を終了するには、最終フレームの1つ前のデータをSS0RDR レジスタから読み出す前に、SS0CRH レジスタの RSSTP ビットを“1” (現在のフレーム受信後、受信動作を終了)にしてください。この操作により、最終フレームの受信が完了した後、送受信クロックを停止します。その後、SS0ER レジスタのRE ビットを“0” (受信禁止)に、RSSTP ビットを“0” (現在のフレーム受信後、続けて次のフレームを受信) にし、最終フレームのデータを読んでください。RE ビットが“1” (受信許可)の状態でSS0RDR レジスタを読むと、再度受信クロックが出力されます。

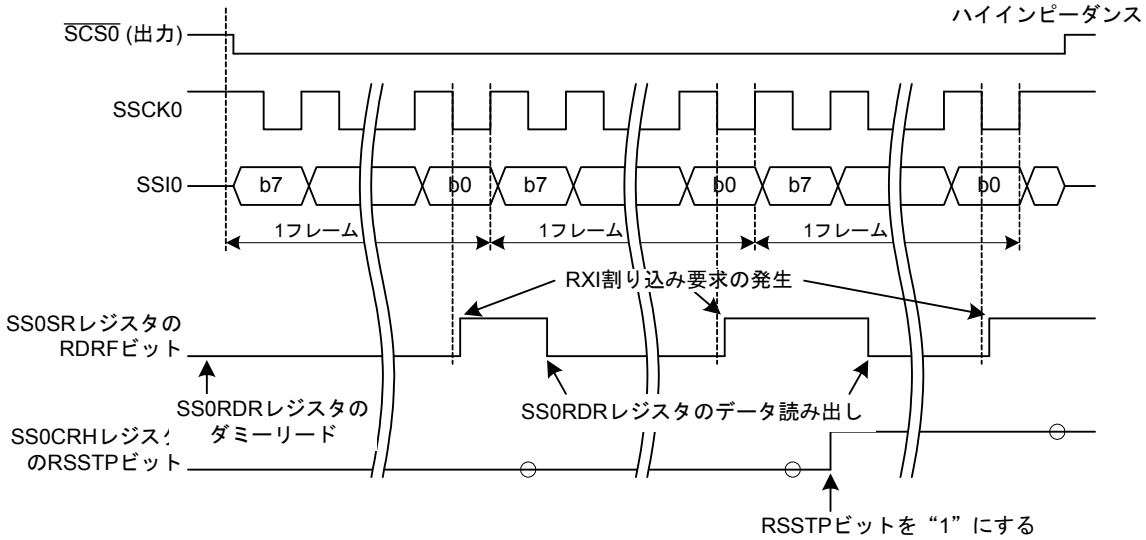
RDRF ビットが“1”の時に最終ビットを受信すると、SS0SR レジスタのORER ビットが“1” (オーバランエラー発生) になり、受信動作を停止します。なお、ORER ビットが “1” の状態では受信動作は行えませんので、受信動作を再開する前にORER ビットが“0”であることを確認してください。

データ受信手順については図 23.19 を参照してください。

(1) CPHS=0 (奇数エッジでデータ変化、偶数エッジでデータ取り込み) の場合



(2) CPHS=1 (偶数エッジでデータ変化、奇数エッジでデータ取り込み) の場合



CPOS: SS0MRレジスタのビット

注1. SS0CRHレジスタのMSSビット=1 (マスタデバイスとして動作)、SS0MRレジスタのCPOSビット=0 (クロック停止時“H”)、MLSビット=0 (MSBファーストで送受信)、BC3~BC0ビット=1000b (8ビット長)、SS0MR2レジスタのCSOSビット=1 ($\overline{\text{SCS0}}$端子はNチャネルオープンドレイン出力) の場合です。

図 23.23 データ受信時の動作例(4線式シリアルバスモード)

23.1.7.4 $\overline{\text{SCS0}}$端子制御とアービトレーション

4線式シリアルバスモードでは、CSS1~CSS0ビットを“10b”($\overline{\text{SCS0}}$出力端子として機能)、SS0CRHレジスタのMSSビットを“1”(マスタデバイスとして動作)にした場合、シリアル送信を開始する前に$\overline{\text{SCS0}}$端子の状態を見てバスのアービトレーションを行います。送信前に同期化した内部$\overline{\text{SCS0}}$信号が“L”になったことを検出すると、SS0SRレジスタのCEビットが“1”(コンフリクトエラー発生)になり、自動的にMSSビットが“0”(スレーブデバイスとして動作)になります。

図23.24にバスのアービトレーションタイミングを示します。

なお、CEビットが“1”の状態では、以後の送信動作ができません。送信を開始する前に、CEビットを“0”(コンフリクトエラーなし)にしてください。CEビットを“0”にするには、CEビットが“1”であることを確認した後“0”を書いてください。

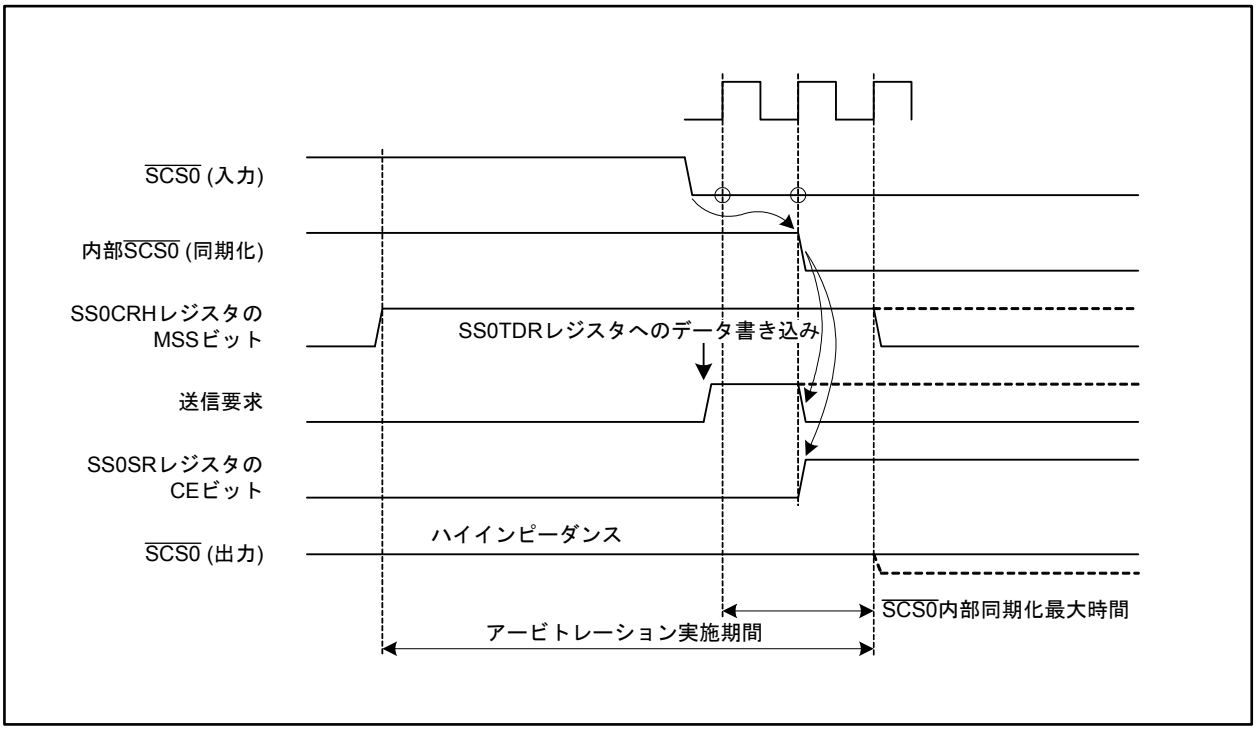


図23.24 アービトレーションタイミング

23.2 シリアルバスインタフェース使用上の注意

23.2.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード使用上の注意

23.2.1.1 クロック同期式シリアル通信モード、4線式シリアルバスモード関連レジスタのアクセス

クロック同期式シリアル通信モード、4線式シリアルバスモード関連レジスタ(44F06h番地~44F0Fh番地)の同一レジスタに対して、書いてから「3命令以上経過してから」読んでください。

• 3命令以上待たせる例

```
MOV.B   #00h, 44F0Bh   ; SS0ERレジスタを“00h”にする
NOP
NOP
NOP
MOV.B   44F0Bh, R0L
```

24. LINモジュール

LINモジュールはLINプロトコルのリビジョン1.3、2.0、2.1に対応したハードウェアLIN通信コントローラで、フレーム通信とエラー判定を自動で行います。1つのモジュールには2チャネルのマスタコントローラが内蔵されています。

表24.1にLINモジュールの仕様、図24.1にLINモジュールブロック図を示します。

表24.1　LINモジュールの仕様

項目	仕様
プロトコル	LIN 1.3、LIN 2.0、LIN 2.1
チャネル数	2チャネル(LINマスタ)
フレーム構成可変	•送信ブレーク幅: 13~28 Tbit •送信ブレークデリミタ幅: 1~4 Tbit •インタバイトスペース(ヘッダ): 0~7 Tbit (SyncフィールドとIDフィールド間のスペース)(注1) •レスポンススペース: 0~7 Tbit (注1) •インタバイトスペース: 0~3 Tbit (レスポンス領域内のデータバイト間のスペース)
チェックサム	クラシックまたはエンハンス選択可能 (チャネルごと、フレームごとに変更可能)
レスポンスフィールドデータバイト数	0~8バイト可変
フレーム送信方法	•ヘッダとレスポンスを1つの送信開始要求により送信するモード •ヘッダとレスポンスを別々の送信開始要求により送信するモード(フレームセパレートモード)
ウェイクアップ送受信	LINウェイクアップモードで使用可能 •ウェイクアップ送信機能(1~16 Tbit) •ウェイクアップ受信 　•入力信号“L”幅カウント機能(0.5~15.5 Tbit) 　•入力信号“L”検出機能
ステータス	•フレーム/ウェイクアップ送信完了 •フレーム/ウェイクアップ受信完了 •データ1受信完了 •入力信号“L”検出 •エラー検出 •動作モード
エラーステータス	•ビットエラー •チェックサムエラー •フレームタイムアウトエラー •フィジカルバスエラー •フレーミングエラー •オーバランエラー (チェックサムエラー以外は検出許可/禁止を選択可能)
ボーレート選択	ボーレートジェネレータでLIN仕様のボーレートを生成可能(各チャネルで個別に選択可能)

注1.　同一レジスタで設定するため、インタバイトスペース(ヘッダ)=レスポンススペースとなります。

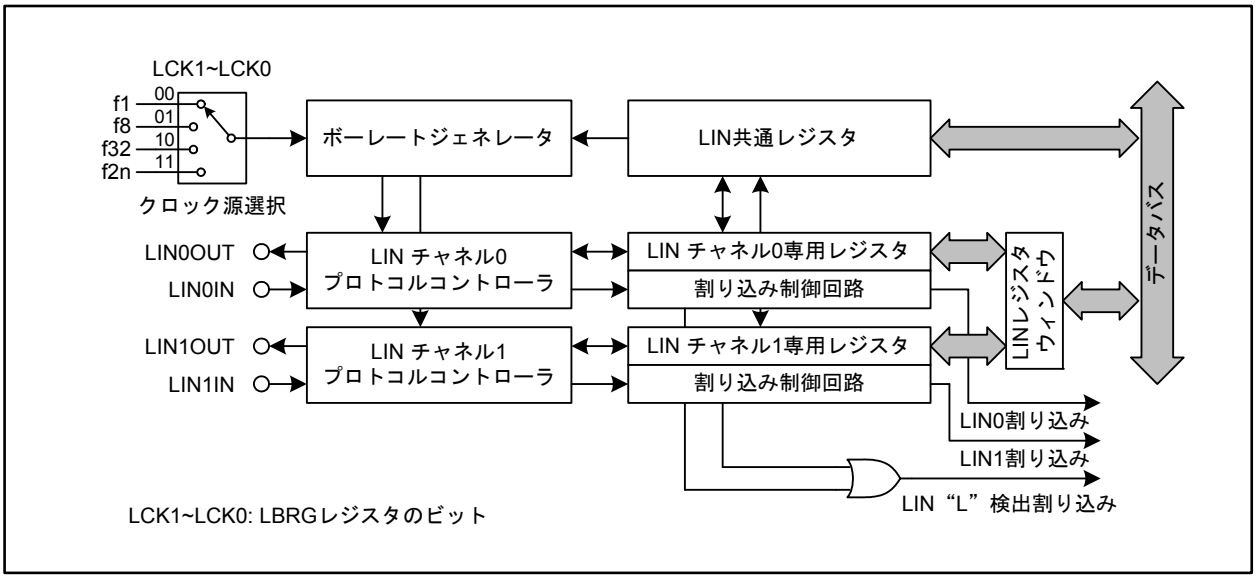


図 24.1 LINモジュールブロック図

- LINjOUT、LINjIN (j=0, 1): LINの入出力端子です。
- ボーレートジェネレータ: LINの通信クロックを生成します。
- LIN共通レジスタ: LINモジュール共通のレジスタです。
- LINチャネルj専用レジスタ: チャネルごとのレジスタです。LCWレジスタによりウィンドウを切り替えて使用します。
- 割り込み制御回路: LINモジュールによって生成される割り込み要求を制御します。LINj割り込みとLIN“L”検出割り込みがあります。

24.1 LINモジュール関連レジスタ

LINモジュールには、モジュール共通のレジスタとチャネルごとの専用レジスタがあります。

チャネル専用レジスタは、最大4チャネル分(チャネル0~チャネル3)のレジスタバンクがあり、ウィンドウに表示するチャネルを切り替えて使用します。1つのモジュール内のチャネル数は、搭載されるLINのチャネル数によって変わります。

24.1.1 共通レジスタ

- **LINチャネルウィンドウ選択/入力信号"L"検出ステータスレジスタ(LCWレジスタ)**
  チャネル専用レジスタのウィンドウ切り替えと、各チャネルの入力信号"L"検出ステータスのモニタを行うレジスタです。
- **LINボーレートジェネレータ制御レジスタ(LBRGレジスタ)**
  ボーレートジェネレータのカウントソースとfLnのクロックソースを選択します(「24.4 ボーレートジェネレータ」参照)。
- **LINボーレートプリスケーラk(LBRPkレジスタ)(k=0, 1)**
  LBRGレジスタで選択したカウントソースから、送受信クロックを生成するためのプリスケーラの分周値を設定します。

24.1.2 チャネル専用レジスタ

チャネル専用レジスタの切り替えは、LCWレジスタのCWS1~CWS0ビットで行います。これらのビットで選択されたチャネルのレジスタが、下記レジスタにより操作できます。

- **LINモードレジスタ0(LMD0レジスタ)**
  モード選択、割り込み許可など、LINモジュールの初期設定を行います。
- **LINモードレジスタ1(LMD1レジスタ)**
  システムクロックの設定やエラー検出許可など、LINモジュールの初期設定を行います。
- **LINウェイクアップ設定レジスタ(LWUPレジスタ)**
  ウェイクアップ送受信の"L"幅を設定します。
- **LINブレークフィールド設定レジスタ(LBRKレジスタ)**
  ブレークフィールドの送信ブレーク幅、送信ブレークデリミタ幅を設定します。
- **LINスペース設定レジスタ(LSPCレジスタ)**
  各送信スペース幅を設定します。
- **LINレスポンスフィールド設定レジスタ(LRFCレジスタ)**
  通信データバイト数、送受信方向、およびチェックサム方式を設定します。
- **LIN IDバッファレジスタ(LIDBレジスタ)**
  送信ID、IDパリティを設定します。
- **LIN状態制御レジスタ(LSCレジスタ)**
  LINモジュールの動作モードを切り替えます。
- **LIN送信制御レジスタ(LTCレジスタ)**
  フレーム/ウェイクアップ送信開始、レスポンスフィールド送信開始を設定します。
- **LINステータスレジスタ(LSTレジスタ)**
  フレーム/ウェイクアップ送信完了、フレーム/ウェイクアップ受信完了、データ1受信完了、入力信号"L"検出、エラー検出、動作モードを確認できます。
- **LINエラーステータスレジスタ(LESTレジスタ)**
  エラー(ビット、チェックサム、フィジカルバス、フレームタイムアウト、フレーミング、オーバラン)ステータスを確認できます。
- **LINデータnバッファレジスタ(n=1~8)(LDBnレジスタ)**
  送受信兼用データバッファです。送信データの設定、受信データの読み出しを行います。

24.1.3 レジスタウィンドウとチャネル切り替え

LINモジュールのチャネル専用レジスタはCPUのメモリマップ上に直接マッピングされていないため、レジスタウィンドウを通してアクセスします。レジスタウィンドウは44E04h~44E17h番地にマッピングされています。

LCWレジスタのCWS1~CWS0ビットに値を設定すると、対応するチャネルの専用レジスタが一括してレジスタウィンドウにマッピングされます。

図24.2にレジスタウィンドウの概念図を示します。

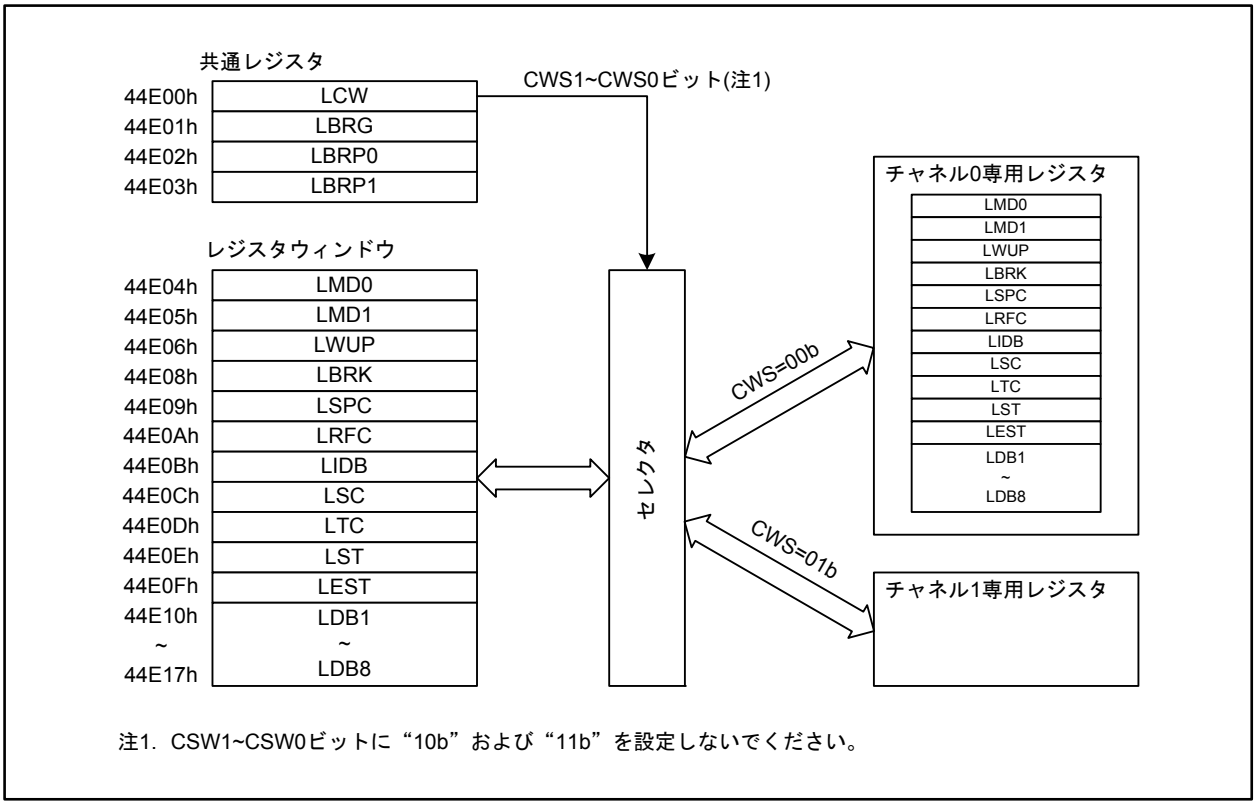


図24.2 レジスタウィンドウ

図 24.3~図 24.18にLINモジュール関連レジスタを示します。

LINチャネルウィンドウ選択 / 入力信号“L”検出ステータスレジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0			X	X		

シンボル	アドレス	リセット後の値
LCW	44E00h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CWS0	チャネルウィンドウ選択ビット	b1 b0 0 0 : チャネル0のレジスタを選択 0 1 : チャネル1のレジスタを選択 1 0 : 設定しないでください 1 1 : 設定しないでください	RW
CWS1			RW
— (b3-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
L0LD	チャネル0入力信号“L”検出割り込みステータスフラグ (注1)	読んだ場合、チャネル0のLSTレジスタのLDビットの値が読めます	RO
L1LD	チャネル1入力信号“L”検出割り込みステータスフラグ (注1)	読んだ場合、チャネル1のLSTレジスタのLDビットの値が読めます	RO
— (b7-b6)	予約ビット	“0”にしてください	RO

注1. これらのビットのうち1つでも“1”になっている場合、新たな入力信号“L”検出割り込みは発生しません。

図 24.3　LCW レジスタ

LINボーレートジェネレータ制御レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X	X		X	X		

シンボル	アドレス	リセット後の値
LBRG	44E01h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
LCK0	BRGカウントソース選択ビット	b1 b0 0 0 : f1 0 1 : f8 1 0 : f32 1 1 : f2n	RW
LCK1			RW
— (b3-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
FLNS	fLnクロックソース選択ビット	0: BRP0出力をそのまま使用 1: BRP0出力の2分周を使用	RW
— (b7-b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタは、すべてのチャネルがLINリセットモードのときに設定してください。

図 24.4　LBRG レジスタ

LINボーレートプリスケーラ0 (注1)

b7	b0	シンボル	アドレス	リセット後の値
		LBRP0	44E02h番地	00h

機　能	設定範囲	RW
設定値をnとすると、周辺機能クロックをn+1分周する　(注2)	00h~FFh	RW

注1. このレジスタは、すべてのチャネルがLINリセットモードのときに設定してください。
注2. 00hを設定した場合、ボーレートプリスケーラ0からクロックは出力されません。

図 24.5　LBRP0 レジスタ

LINボーレートプリスケーラ1 (注1)

b7	b0	シンボル	アドレス	リセット後の値
		LBRP1	44E03h番地	00h

機　能	設定範囲	RW
設定値をmとすると、周辺機能クロックをm+1分周する (注2)	00h~FFh	RW

注1. このレジスタは、すべてのチャネルがLINリセットモードのときに設定してください。
注2. 00hを設定した場合、ボーレートプリスケーラ1からクロックは出力されません。

図 24.6　LBRP1 レジスタ

LINモードレジスタ0

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
					X		0

シンボル	アドレス	リセット後の値
LMD0	44E04h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
LMD	LINモード選択ビット (注1)	0: LINマスタモード 1: 設定しないでください	RW
BTD	ビットタイム分周比設定ビット (注1)	0: 1 Tbit = 8 fLINで生成 (注2) 1: 1 Tbit = 16 fLINで生成	RW
— (b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
FSM	フレームセパレートモード選択ビット (注1、3)	0: フレームセパレートモードではない 1: フレームセパレートモード	RW
FTCIE	フレーム/ウェイクアップ送信完了割り込み許可ビット (注1)	0: フレーム/ウェイクアップ送信完了割り込み禁止 1: フレーム/ウェイクアップ送信完了割り込み許可	RW
FRCIE	フレーム/ウェイクアップ受信完了割り込み許可ビット (注1)	0: フレーム/ウェイクアップ受信完了割り込み禁止 1: フレーム/ウェイクアップ受信完了割り込み許可	RW
LDE	入力信号“L”検出許可ビット	0: 入力信号“L”検出禁止 1: 入力信号“L”検出許可 (注4)	RW
ERRIE	エラー検出割り込み許可ビット (注1)	0: エラー検出割り込み禁止 1: エラー検出割り込み許可	RW

注1. これらのビットは、対応するチャネルがLINリセットモードのときに設定してください。
注2. fLINはLINモジュールシステムクロックです。
注3. このビットの設定値は、対応するチャネルのLRFCレジスタのRFTビットが“1”(送信) のときに有効です。
注4. このビットが“1”のときに入力信号の立ち下がりエッジを検出した場合、または入力信号が“L”のときにこのビットを“1”にした場合、LSTレジスタのLDビットが“1”になり、割り込み要求が発生します。

図 24.7　LMD0 レジスタ

LINモードレジスタ1

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
LMD1	44E05h番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CKS0	LINモジュールシステムクロック選択ビット　(注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : fLnを選択 0 0 1 : fLn2を選択 0 1 0 : fLn8を選択 0 1 1 : fLmを選択 1 0 0 : fLm2を選択 1 0 1 : fLm8を選択 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
CKS1			RW
CKS2			RW
BERE	ビットエラー検出許可ビット　(注2)	0: ビットエラーを検出しない 1: ビットエラー検出許可	RW
PBERE	フィジカルバスエラー検出許可ビット　(注2)	0: フィジカルバスエラーを検出しない 1: フィジカルバスエラー検出許可	RW
FTERE	フレームタイムアウトエラー検出許可ビット　(注2)	0: フレームタイムアウトエラーを検出しない 1: フレームタイムアウトエラー検出許可	RW
FERE	フレーミングエラー検出許可ビット　(注2)	0: フレーミングエラーを検出しない 1: フレーミングエラー検出許可	RW
OERE	オーバランエラー検出許可ビット　(注2)	0: オーバランエラーを検出しない 1: オーバランエラー検出許可	RW

注1. これらのビットは、対応するチャネルがLINリセットモードのときに設定してください。
注2. これらのビットは、対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止) のときに設定してください。

図 24.8　LMD1 レジスタ

LINウェイクアップ設定レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

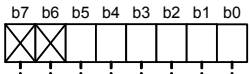
シンボル	アドレス	リセット後の値
LWUP	44E06h番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
WURL0	ウェイクアップ受信“L”幅設定ビット (注2)	b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : 0.5 Tbit 0 0 0 1 : 1.5 Tbit 0 0 1 0 : 2.5 Tbit 0 0 1 1 : 3.5 Tbit :　: 1 1 0 0 : 12.5 Tbit 1 1 0 1 : 13.5 Tbit 1 1 1 0 : 14.5 Tbit 1 1 1 1 : 15.5 Tbit	RW
WURL1			RW
WURL2			RW
WURL3			RW
WUTL0	ウェイクアップ送信“L”幅設定ビット	b7 b6 b5 b4 0 0 0 0 : 1 Tbit 0 0 0 1 : 2 Tbit 0 0 1 0 : 3 Tbit 0 0 1 1 : 4 Tbit :　: 1 1 0 0 : 13 Tbit 1 1 0 1 : 14 Tbit 1 1 1 0 : 15 Tbit 1 1 1 1 : 16 Tbit	RW
WUTL1			RW
WUTL2			RW
WUTL3			RW

注1. このレジスタは、対応するチャネルがLINリセットモードまたはLIN動作モードのときに設定してください。
注2. ここで設定した幅以上の“L”パルスをウェイクアップ信号と認識します。

図 24.9　LWUP レジスタ

LINブレークフィールド設定レジスタ (注1)



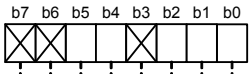
シンボル	アドレス	リセット後の値
LBRK	44E08h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BLT0	送信ブレーク（“L”）幅設定ビット	b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : 13 Tbit 0 0 0 1 : 14 Tbit 0 0 1 0 : 15 Tbit 0 0 1 1 : 16 Tbit :　　: 1 1 0 0 : 25 Tbit 1 1 0 1 : 26 Tbit 1 1 1 0 : 27 Tbit 1 1 1 1 : 28 Tbit	RW
BLT1			RW
BLT2			RW
BLT3			RW
BDT0	送信ブレークデリミタ（“H”）幅設定ビット	b5 b4 0 0 : 1 Tbit 0 1 : 2 Tbit 1 0 : 3 Tbit 1 1 : 4 Tbit	RW
BDT1			RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタは、対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)のときに設定してください。

図 24.10 LBRKレジスタ

LINスペース設定レジスタ (注1)



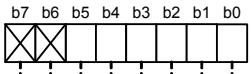
シンボル	アドレス	リセット後の値
LSPC	44E09h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IBSH0	インタバイトスペース(ヘッダ)/レスポンススペース設定ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : 0 Tbit 0 0 1 : 1 Tbit 0 1 0 : 2 Tbit 0 1 1 : 3 Tbit 1 0 0 : 4 Tbit 1 0 1 : 5 Tbit 1 1 0 : 6 Tbit 1 1 1 : 7 Tbit	RW
IBSH1			RW
IBSH2			RW
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
IBS0	インタバイトスペース設定ビット	b5 b4 0 0 : 0 Tbit 0 1 : 1 Tbit 1 0 : 2 Tbit 1 1 : 3 Tbit	RW
IBS1			RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタは、対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)のときに設定してください。

図 24.11 LSPC レジスタ

LINレスポンスフィールド設定レジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
LRFC	44E0Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RFDL0	レスポンスフィールドデータ長設定ビット	b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : 0バイト + チェックサム 0 0 0 1 : 1バイト + チェックサム 0 0 1 0 : 2バイト + チェックサム 0 0 1 1 : 3バイト + チェックサム 0 1 0 0 : 4バイト + チェックサム 0 1 0 1 : 5バイト + チェックサム 0 1 1 0 : 6バイト + チェックサム 0 1 1 1 : 7バイト + チェックサム 1 0 0 0 : 8バイト + チェックサム 上記以外 : 設定しないでください	RW
RFDL1			RW
RFDL2			RW
RFDL3			RW
RFT	レスポンスフィールド送受信方向設定ビット	0: 受信 (データバッファ読み出し専用) 1: 送信 (データバッファ書き込み専用)	RW
CSM	チェックサム方式選択ビット	0: クラシック 1: エンハンス	RW
— (b7-b6)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. このレジスタは、対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)のときに設定してください。

図 24.12 LRFC レジスタ

LIN IDバッファレジスタ (注1)

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
LIDB	44E0Bh番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
ID0	ID設定ビット	IDフィールドで送信する6ビットのID値を設定	RW
ID1			RW
ID2			RW
ID3			RW
ID4			RW
ID5			RW
IDP0	パリティ0設定ビット	IDフィールドで送信するパリティビット (P0) を設定	RW
IDP1	パリティ1設定ビット	IDフィールドで送信するパリティビット (P1) を設定	RW

注1. このレジスタは、対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)のときに設定してください。

図 24.13 LIDB レジスタ

LIN状態制御レジスタ

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

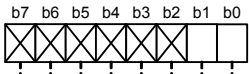
シンボル	アドレス	リセット後の値
LSC	44E0Ch番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
OM0	動作モード選択ビット (注1)	b1 b0 0 0 : LINリセットモード 0 1 : LINウェイクアップモード 1 0 : LINリセットモード 1 1 : LIN動作モード	RW
OM1			RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は“0”		—

注1. LSTレジスタのOMM1~OMM0ビットの値を読み出すと、対応するチャネルの状態が確認できます。

図 24.14 LSC レジスタ

LIN送信制御レジスタ



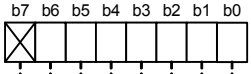
シンボル	アドレス	リセット後の値
LTC	44E0Dh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
FTS	フレーム/ウェイクアップ送信開始ビット　(注1、2)	0: フレーム/ウェイクアップ送信停止 1: フレーム/ウェイクアップ送信開始	RW
RTS	レスポンス送信開始ビット (注1、2、3)	0: レスポンス送信停止 1: レスポンス送信開始	RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. これらのビットは、“1”のみ書けます。送信が完了すると自動的に“0”になります。
注2. これらのビットは、LINリセットモード、LINウェイクアップモード遷移時に“0”になります。
注3. このビットは、対応するチャネルのLMD0レジスタのFSMビットが“1”(フレームセパレートモード) で、FTSビットが“1”(フレーム/ウェイクアップ送信開始) のときに設定してください。

図 24.15 LTC レジスタ

LINステータスレジスタ



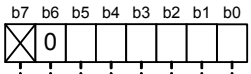
シンボル	アドレス	リセット後の値
LST	44E0Eh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
FTC	フレーム/ウェイクアップ送信完了フラグ　(注1)	0: 送信未完了 1: フレームまたはウェイクアップ送信完了　(注2)	RW
FRC	フレーム/ウェイクアップ受信完了フラグ　(注1)	0: 受信未完了 1: フレームまたはウェイクアップ受信完了	RW
LD	入力信号“L”検出割り込みステータスフラグ　(注1)	0: 割り込み要求なし 1: 割り込み要求あり　(注3)	RW
ERR	エラー検出フラグ	0: エラー未検出 1: エラー検出	RO
OMM0	動作モードモニタフラグ	b5 b4 0 0 : LINリセットモード (動作停止) 0 1 : LINリセットモード (動作停止) 1 0 : LINウェイクアップモード 1 1 : LIN動作モード	RO
OMM1			RO
D1RC	データ1受信完了フラグ　(注1)	0: 受信未完了 1: データ1受信完了	RW
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. これらのビットは自動的には“0”になりません。プログラムで“0”にしてください。なお、“1”を書いた場合は、書く前の値を保持します。
注2. フレームセパレートモードでのヘッダ送信完了時には、“1”になりません。
注3. このビットが“1”の場合、他チャネルのLDビットが“1”になっても、あるいは新たに自チャネルでLDビットが“1”になる条件が整ったとしても、新たな割り込み要求は発生しません。

図 24.16 LST レジスタ

LINエラーステータスレジスタ



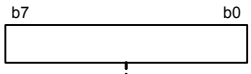
シンボル	アドレス	リセット後の値
LEST	44E0Fh番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BER	ビットエラーフラグ　(注1)	0: ビットエラー未検出 1: ビットエラー検出	RW
PBER	フィジカルバスエラーフラグ　(注1)	0: フィジカルバスエラー未検出 1: フィジカルバスエラー検出	RW
CSER	チェックサムエラーフラグ　(注1)	0: チェックサムエラー未検出 1: チェックサムエラー検出	RW
FTER	フレームタイムアウトエラーフラグ　(注1)	0: フレームタイムアウトエラー未検出 1: フレームタイムアウトエラー検出	RW
FER	フレーミングエラーフラグ　(注1)	0: フレーミングエラー未検出 1: フレーミングエラー検出	RW
OER	オーバランエラーフラグ　(注1)	0: オーバランエラー未検出 1: オーバランエラー検出	RW
— (b6)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. これらのビットは自動的には“0”になりません。プログラムで“0”にしてください。なお、“1”を書いた場合は、書く前の値を保持します。

図 24.17 LEST レジスタ

LINデータn バッファレジスタ (n=1~8)(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
LDB1, LDB2	44E10h、44E11h番地	00h
LDB3, LDB4	44E12h、44E13h番地	00h
LDB5, LDB6	44E14h、44E15h番地	00h
LDB7, LDB8	44E16h、44E17h番地	00h

機　能	設定範囲	RW
送信データを設定、または受信データを読み出します	00h~FFh	RW

注1. このレジスタは、以下の状態で設定してください。
- 対応するチャネルのLRFCレジスタのRFTビットが“1”(送信)
- 対応するチャネルのLMD0レジスタのFSMビットが“0”(フレームセパレートモードではない)
- 対応するチャネルのLTCレジスタのFTSビットが“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)

または
- 対応するチャネルのLRFCレジスタのRFTビットが“1”(送信)
- 対応するチャネルのLMD0レジスタのFSMビットが“1”(フレームセパレートモード)
- 対応するチャネルのLTCレジスタのRTSビットが“0”(レスポンス送信停止)

図 24.18 LDB1~LDB8 レジスタ

24.2 動作モード

LINモジュールには、以下の3つの動作モードがあります。

- LINリセットモード
- LIN動作モード
- LINウェイクアップモード

各動作モードへの移行は、チャネルごとに独立して制御します。なお、すべてのチャネルをLINリセットモードにすると、LINモジュールへのクロック供給が停止されるため、消費電力を低減することができます。

図24.19に動作モード間の遷移図、表24.2に各動作モードで可能な動作を示します。

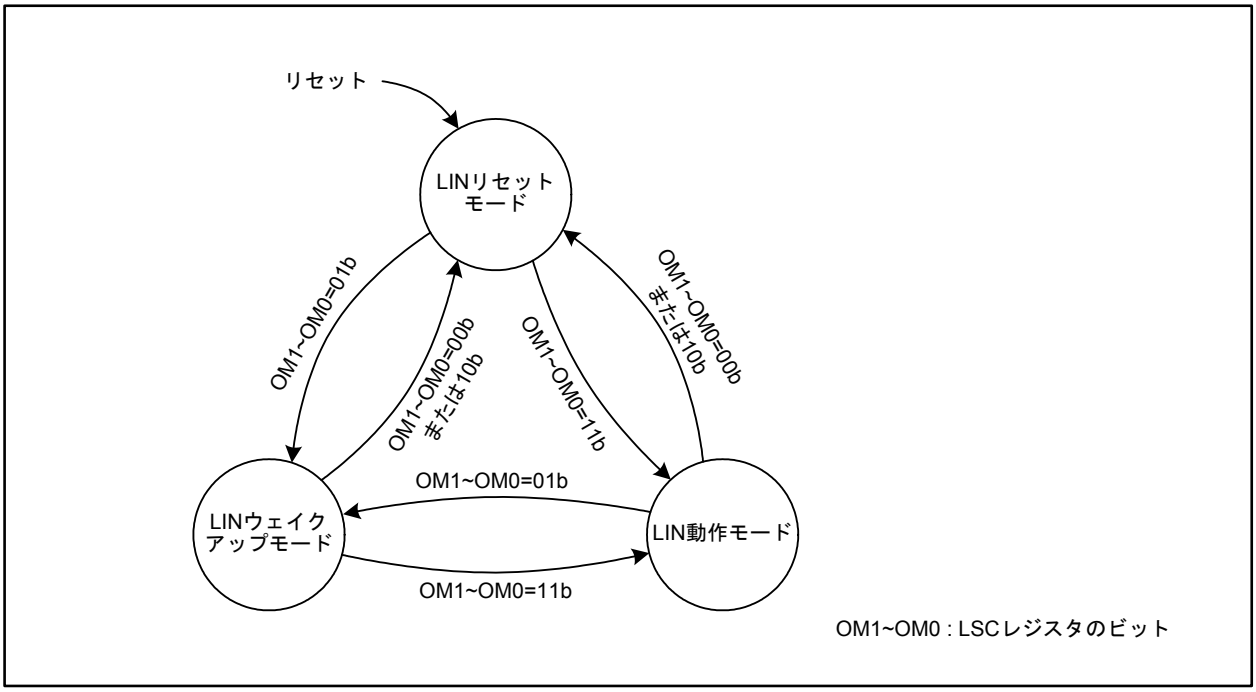


図 24.19 動作モード遷移図

表 24.2 各動作モードで可能な動作

LINリセットモード	LIN動作モード	LINウェイクアップモード
入力信号“L”検出	ヘッダ送信 レスポンス送信 レスポンス受信 エラー検出 入力信号“L”検出	ウェイクアップ送信 ウェイクアップ受信 エラー検出 入力信号“L”検出

LSTレジスタのOMM1~OMM0ビットを読み出すことで、各モードへ移行したことを確認できます。OM1~OM0ビットとOMM1~OMM0ビットでは、各動作モードのビット配置が異なることに注意してください。

24.2.1 LINリセットモード

LSCレジスタのOM1~OM0ビットを“00b”または“10b”にすると、該当するLIN通信チャネルはLINリセットモードに移行し、LSTレジスタのOMM1~OMM0ビットが“00b”または“01b”になります。このモードのとき、該当するLIN通信チャネルの機能はすべて停止しており、LINモジュールへのクロック供給(fLIN)も停止しています。

24.2.2 LIN動作モード

LSCレジスタのOM1~OM0ビットを“11b”にすると、該当するLIN通信チャネルはLIN動作モードになり、LSTレジスタのOMM1~OMM0ビットが“11b”になります。

24.2.3 LINウェイクアップモード

LSCレジスタのOM1~OM0ビットを“01b”にすると、該当するLIN通信チャネルはLINウェイクアップモードになり、LSTレジスタのOMM1~OMM0ビットが“10b”になります。

24.3 動作概要

24.3.1 ヘッダ送信

図 24.20にLINモジュールのヘッダ送信時の動作、表 24.3にヘッダ送信時の処理を示します。

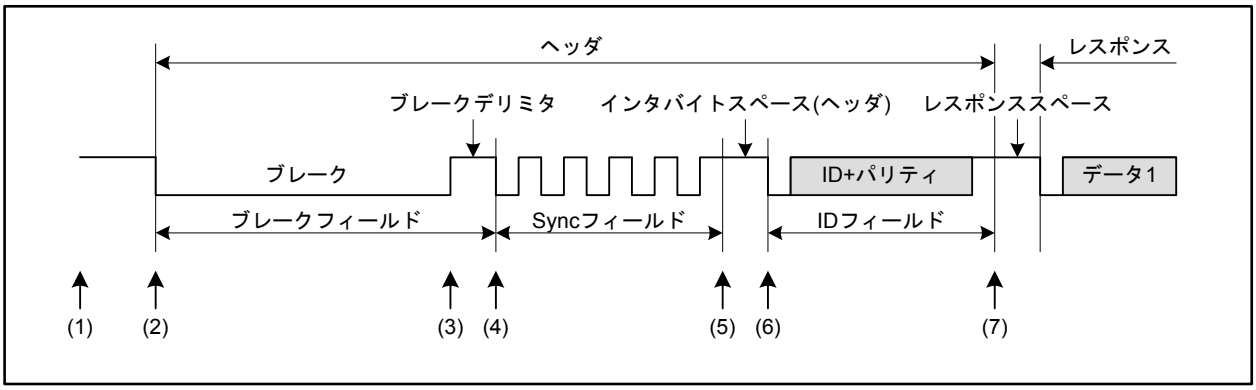


図 24.20 ヘッダ送信時の動作

表 24.3 ヘッダ送信時の処理

	ソフトウェア処理	LINモジュール処理
(1)	•ボーレートを設定 •LMD0レジスタのFTCIEビットを“1”(フレーム/ウェイクアップ送信完了割り込み許可)、FRCIEビットを“1”(フレーム/ウェイクアップ受信完了割り込み許可)、ERRIEビットを“1”(エラー検出割り込み許可)に設定 •LIN通信チャネルの動作モードを変更 •LBRKレジスタのBLT3~BLT0ビットでブレーク幅(13~28 Tbit)、BDT1~BDT0ビットでブレークデリミタ幅(1~4 Tbit)を設定 •LSPCレジスタのIBSH2~IBSH0ビットでインタバイトスペース(ヘッダ)/レスポンススペース幅(0~7 Tbit)、IBS1~IBS0ビットでインタバイトスペース幅(0~3 Tbit)を設定 •LIDBレジスタにIDとそのパリティ値を設定 •LRFCレジスタのRFDL3~RFDL0ビットでデータ長、RFTビットでレスポンスの送受信方向、CSMビットでチェックサム方式を設定 •送信データを設定	ソフトウェアによるフレーム/ウェイクアップ送信開始待ち(アイドル)
(2)	•LTCレジスタのFTSビットを“1”(フレーム/ウェイクアップ送信開始)にする	ブレーク送信
(3)	割り込み要求発生待ち	ブレークデリミタ送信
(4)		Syncフィールド(55h)送信
(5)		インタバイトスペース(ヘッダ)送信
(6)		IDフィールド送信
(7)		レスポンススペース送信

24.3.2　レスポンス送信

図 24.21にLINモジュールのレスポンス送信時の動作、表 24.4にレスポンス送信時の処理を示します。

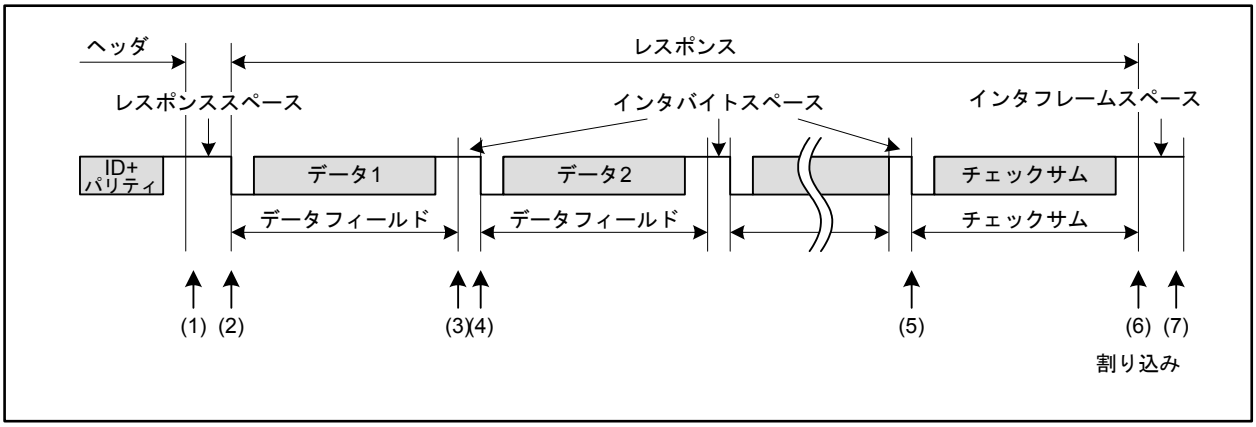


図 24.21　レスポンス送信時の動作

表 24.4　レスポンス送信時の処理

	ソフトウェア処理	LINモジュール処理
(1)	(フレームセパレートモード時) LTCレジスタのRTSビットを“1”(レスポンス送信開始)にする (フレームセパレートモードでないとき) 割り込み要求発生待ち	(フレームセパレートモード時) レスポンス送信開始待ちの間、レスポンススペース送信 (フレームセパレートモードでないとき) レスポンススペース送信完了なら(2)へ
(2)	割り込み要求発生待ち	データ1送信
(3)		インタバイトスペース送信
(4)		データ2送信 インタバイトスペース送信 データ3送信 インタバイトスペース送信 (LRFCレジスタのRFDL3~RFDL0ビットで指定したデータ長分繰り返す。エラー発生時は(6)へ) : :
(5)		チェックサム送信
(6)		•フレーム/ウェイクアップ送信完了フラグ設定、またはエラーフラグ設定 •LTCレジスタのFTSビットを“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)、RTSビットを“0”(レスポンス送信停止)にする
(7)	通信後の処理 LSTレジスタのチェック、フラグのクリア	アイドル

24.3.3　レスポンス受信

図 24.22にLINモジュールのレスポンス受信時の動作、表 24.5にレスポンス受信時の処理を示します。

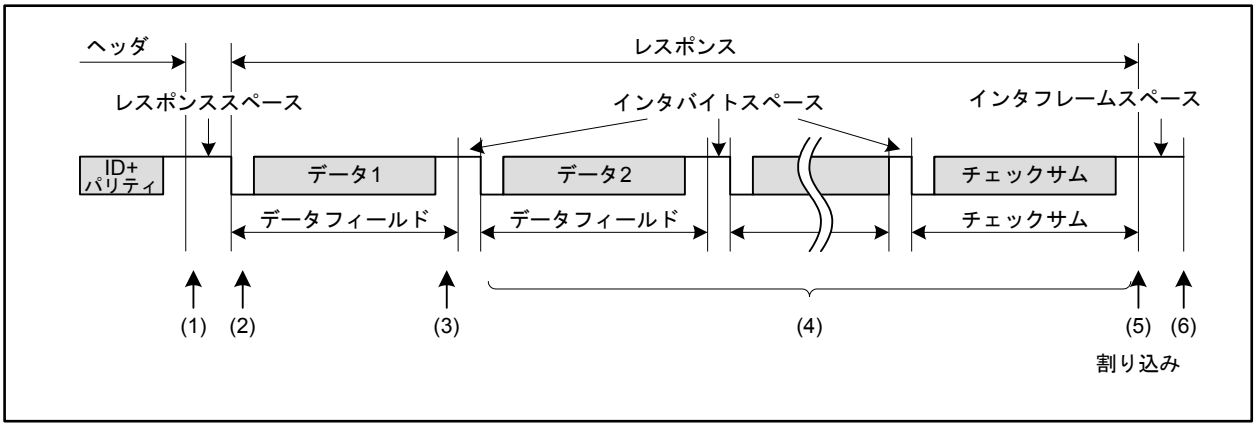


図 24.22　レスポンス受信時の動作

表 24.5　レスポンス受信時の処理

	ソフトウェア処理	LINモジュール処理
(1)	割り込み要求発生待ち(処理はなし)	スタートビット検出待ち
(2)	割り込み要求発生待ち	スタートビット検出によりデータ1受信
(3)		•データ1受信完了フラグ設定
(4)		スタートビット検出によりデータ2受信 スタートビット検出によりデータ3受信 (LRFCレジスタのRFDL3~RFDL0ビットで指定したデータ長分繰り返す。エラー発生時は受信を中断して(5)へ。ただしその場合は、(5)のチェックサム判定は実施しません) : : スタートビット検出によりチェックサム受信
(5)		•チェックサム判定 •フレーム/ウェイクアップ受信完了フラグ設定、またはエラーフラグ設定 •LTCレジスタのFTSビットを“0”(フレーム/ウェイクアップ送信停止)にする
(6)	通信後の処理 受信データの読み出し LSTレジスタのチェック、フラグのクリア	アイドル

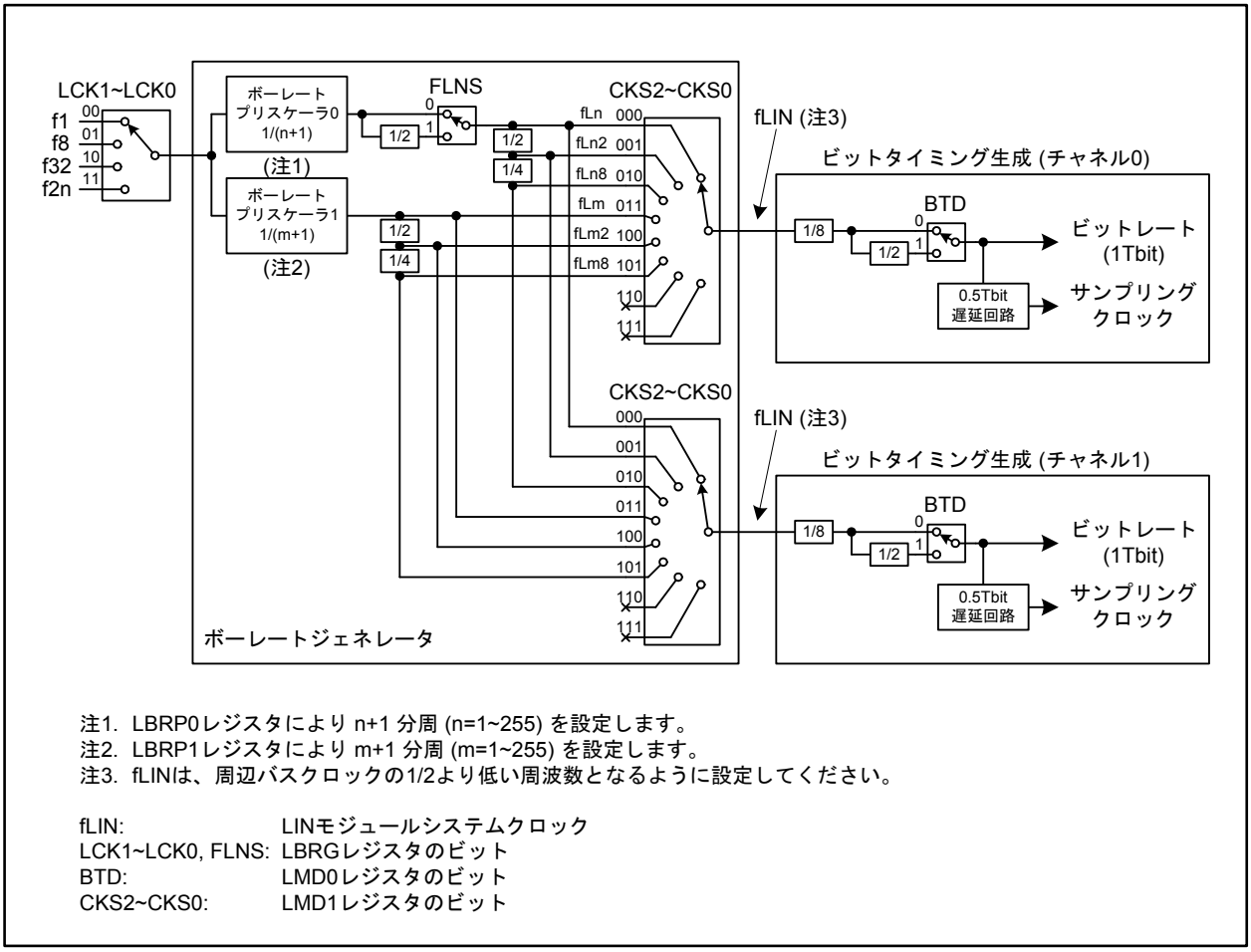
24.4 ボーレートジェネレータ

周辺機能クロックをボーレートジェネレータで分周したクロックがLINモジュールシステムクロック(fLIN)となり、これを8分周または16分周したクロックがビットレートになります。このビットレートの逆数をビットタイム(Tbit)といいます。

LMD0レジスタのBTDビットが“0” (1 Tbit = 8 fLINで生成)の場合、fLnが153600Hz (=19200×8)となるようにLBRP0 レジスタとLBRG レジスタのFLNS ビットを設定すれば、fLn=19200×8[Hz]、fLn2=9600×8[Hz]、fLn8=2400×8[Hz]となり、ビットタイミング生成部でさらに8分周するため、19200bps、9600bps、2400bpsが生成できます。また、10417bpsはLBRP1レジスタによって生成します(fLm~fLm8)。

LMD0レジスタのBTDビットが“1” (1 Tbit = 16 fLINで生成)の場合は、fLnが307200Hz (=19200×16)となるように設定します。

図24.23にボーレート生成ブロック図を示します。



注1. LBRP0レジスタにより n+1 分周 (n=1~255) を設定します。
注2. LBRP1レジスタにより m+1 分周 (m=1~255) を設定します。
注3. fLINは、周辺バスクロックの1/2より低い周波数となるように設定してください。

fLIN: LINモジュールシステムクロック
LCK1~LCK0, FLNS: LBRGレジスタのビット
BTD: LMD0レジスタのビット
CKS2~CKS0: LMD1レジスタのビット

図24.23 ボーレート生成ブロック図

表 24.6、表 24.7に周辺機能クロック周波数ごとのボーレート(19200、9600、2400、10417bps)生成例とその誤差を示します。

表 24.6 ボーレート生成例(19200bps、9600bps、2400bps)

周辺機能クロック	n+1分周	BRP0出力	ビットタイム	fLn選択 (19200bps)	fLn2選択 (9600bps)	fLn8選択 (2400bps)	誤差
32MHz	104	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
30MHz	98	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19132.65bps	9566.33bps	2391.58bps	-0.35%
24MHz	78	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
20MHz	65	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
16MHz	52	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
12MHz	39	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
10MHz	65	分周なし(注1)	8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
8MHz	26	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
4MHz	13	分周なし/2分周	16 fLIN / 8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%
2MHz	13	分周なし(注1)	8 fLIN	19230.77bps	9615.38bps	2403.85bps	+0.16%

注1. 2分周の場合、誤差がLINプロトコルの規格(±0.5%)を満たしません。

表 24.7 ボーレート生成例(10417bps)

周辺機能クロック	m+1分周	ビットタイム	fLIN選択	ボーレート (10417)	誤差
32MHz	48 / 96	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
30MHz	45 / 90	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
24MHz	36 / 72	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
20MHz	30 / 60	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
16MHz	24 / 48	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
12MHz	18 / 36	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
10MHz	15 / 30	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
8MHz	12 / 24	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
4MHz	6 / 12	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%
2MHz	3 / 6	8 fLIN / 16 fLIN	fLm8 / fLm2	10416.67bps	-0.003%

24.5 データ送信/受信

24.5.1 データ送信

データ送信は、1 Tbitに1ビットずつ行われます。

送信したデータは、LINトランシーバを経由して受信データ入力端子に戻ってきます。この受信データと送信したデータの比較がビットごとに行われ、結果はLESTレジスタのBERビットに格納されます(24.10 エラーステータス参照)。受信データを比較するタイミングは、LMD0レジスタのBTDビットが“0” (1 Tbit = 8 fLINで生成)の場合は5クロック目、BTDビットが“1” (1 Tbit = 16 fLINで生成)の場合は13クロック目になります。

図 24.24にデータ送信タイミングを示します。

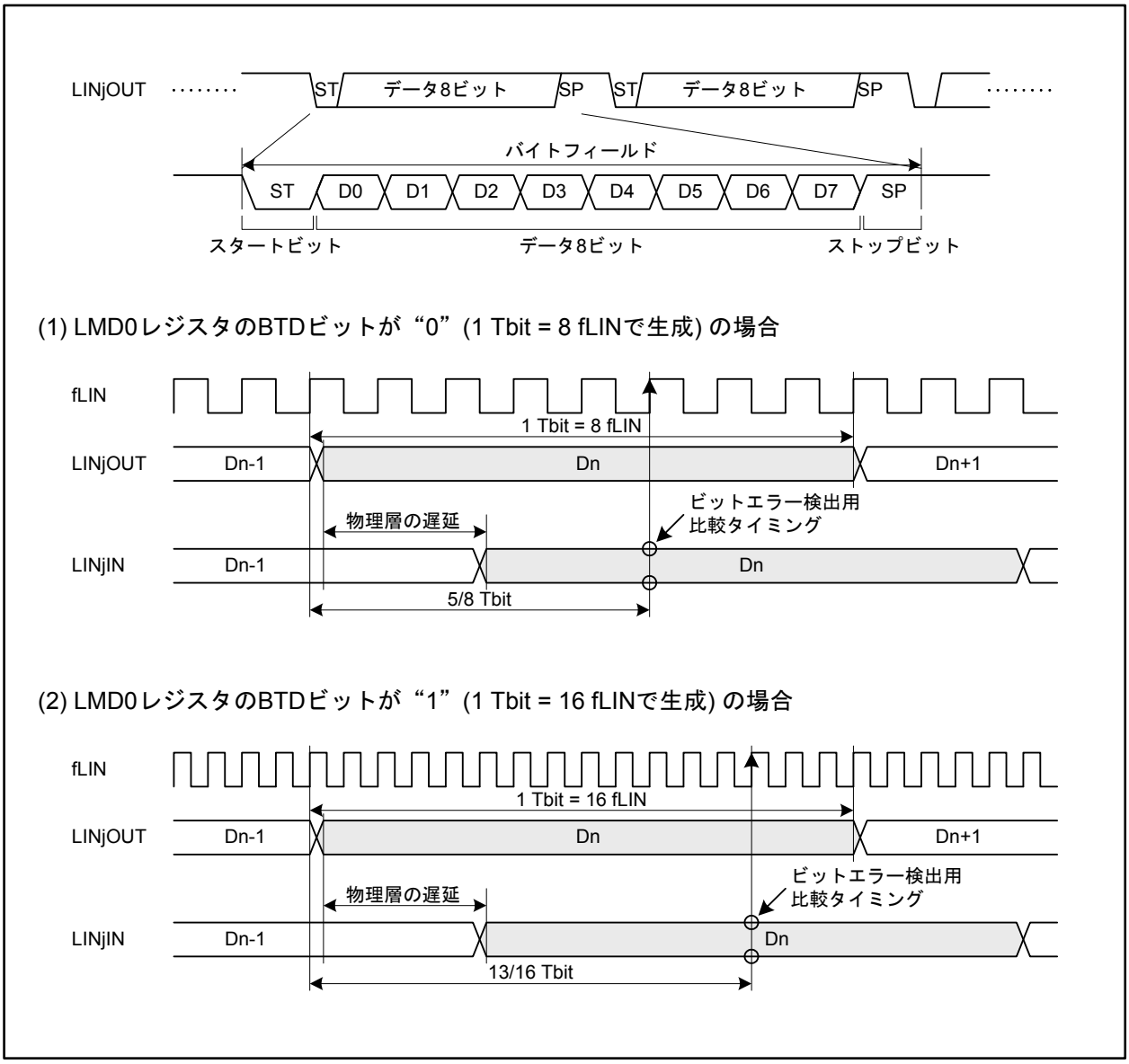


図 24.24 データ送信タイミング(j=0, 1)

24.5.2 データ受信

データ受信は、LINjIN端子(j=0, 1)からの入力をfLINに同期させた同期化LINjIN (内部信号)を使用して行います。

この同期化LINjIN信号のスタートビットの立ち下がりエッジでバイトフィールドの同期を合わせます。立ち下がりエッジ検出後、0.5 Tbit後に再度サンプリングを行い同期化LINjIN信号が“L”であった場合にスタートビットと認識します。リセット解除後からLINjIN信号がずっと“L”の場合や、再サンプリング時に“H”を検出した場合はスタートビットとは認識しません。

スタートビット検出後は、1 Tbitごとにビットのサンプリングを行います。

図24.25にデータ受信タイミングを示します。

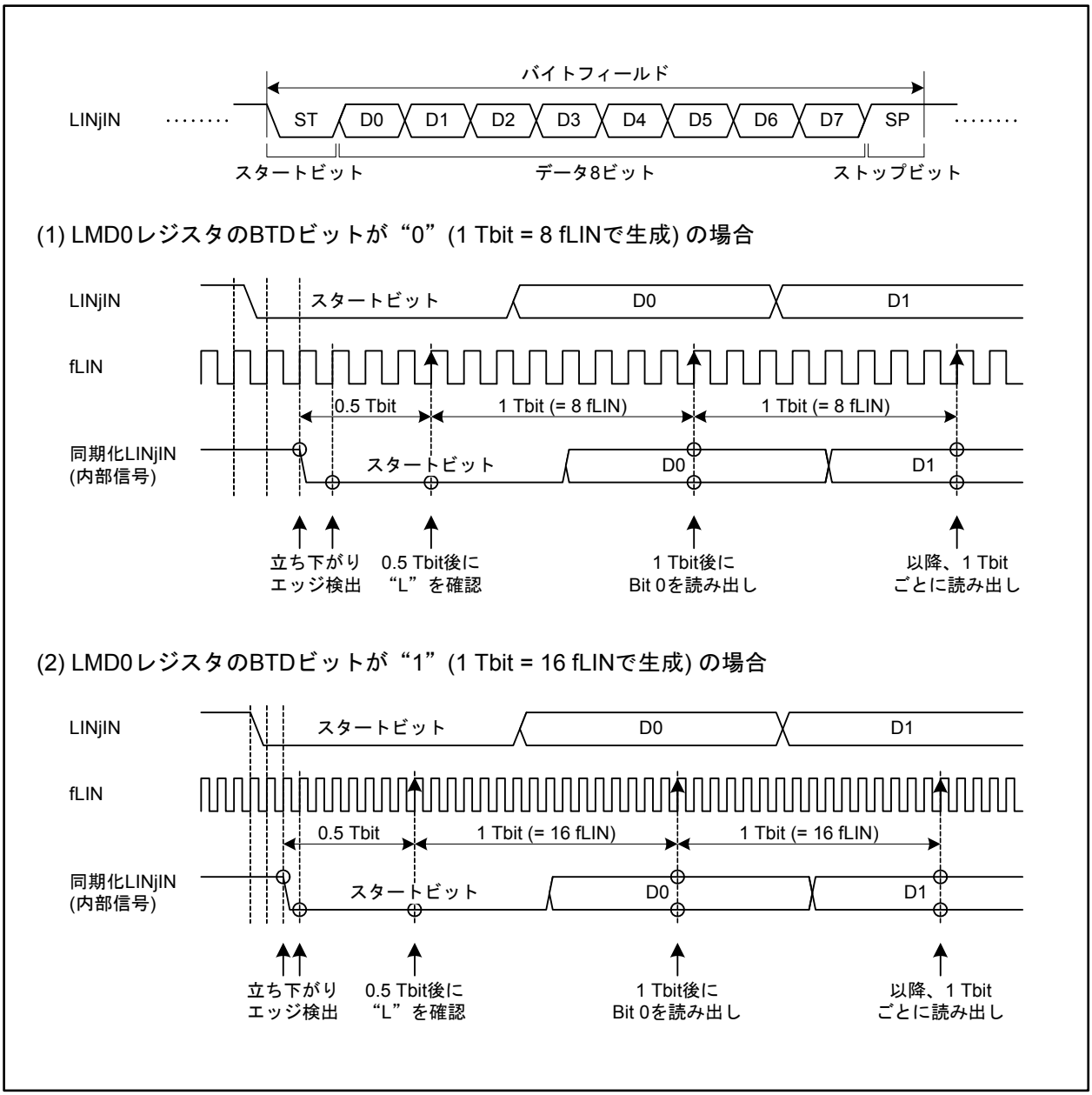


図24.25 データ受信タイミング(j=0, 1)

24.6 送信/受信データのバッファ処理

LINモジュールの連続データ送受信時のバッファ処理について説明します。

24.6.1 LINフレームの送信

8バイト送信の場合、各チャネルのLDB1~LDB8レジスタに格納されている内容が、順番にLINフレームのデータ1~8領域に送信されます。4バイト送信の場合は、LDB1~LDB4レジスタに格納されている内容がLINフレームのデータ1~4領域に送信され、LDB5~LDB8レジスタの内容は送信されません。

図24.26にLIN送信処理とバッファを示します。

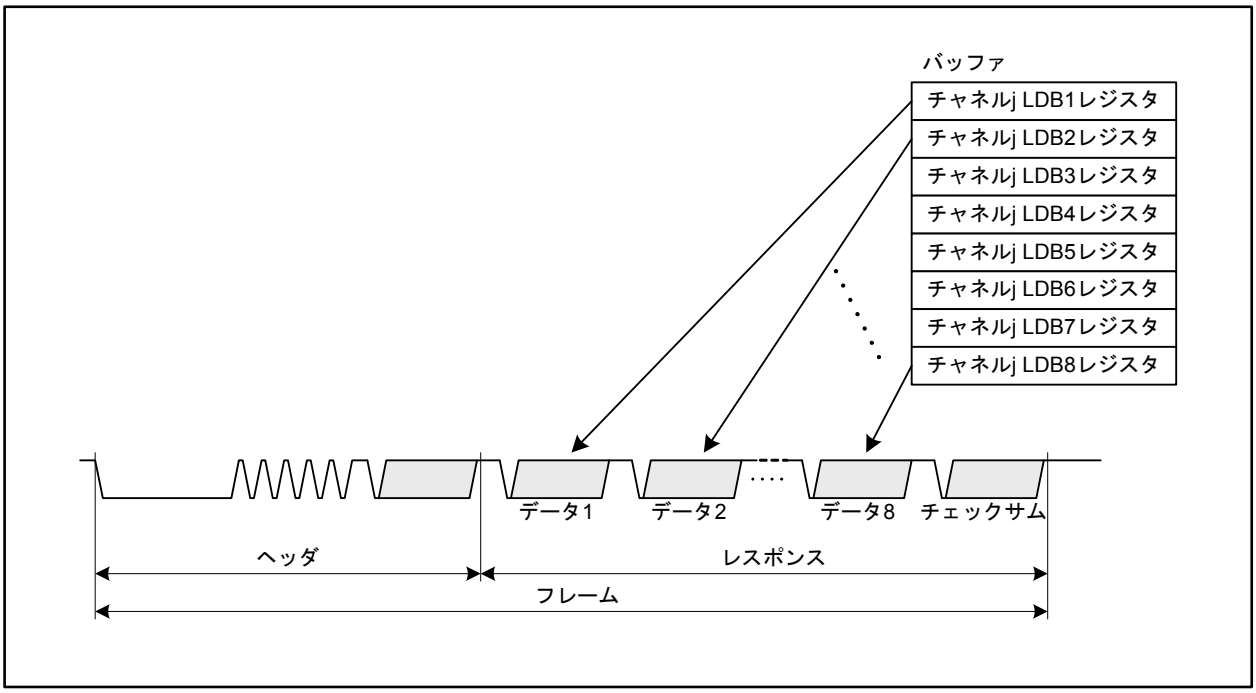


図 24.26 LIN送信処理とバッファ (j=0, 1)

24.6.2 LINフレームの受信

8バイト受信の場合、LINフレームのデータ1~8領域の内容が、ストップビットを受信するごとにそれぞれ各チャネルのLDB1~LDB8レジスタに格納されます。4バイト受信の場合は、LINフレームのデータ1~4領域の内容が、それぞれLDB1~LDB4レジスタに格納され、LDB5~LDB8レジスタには何も格納されません。

図24.27にLIN受信処理とバッファを示します。

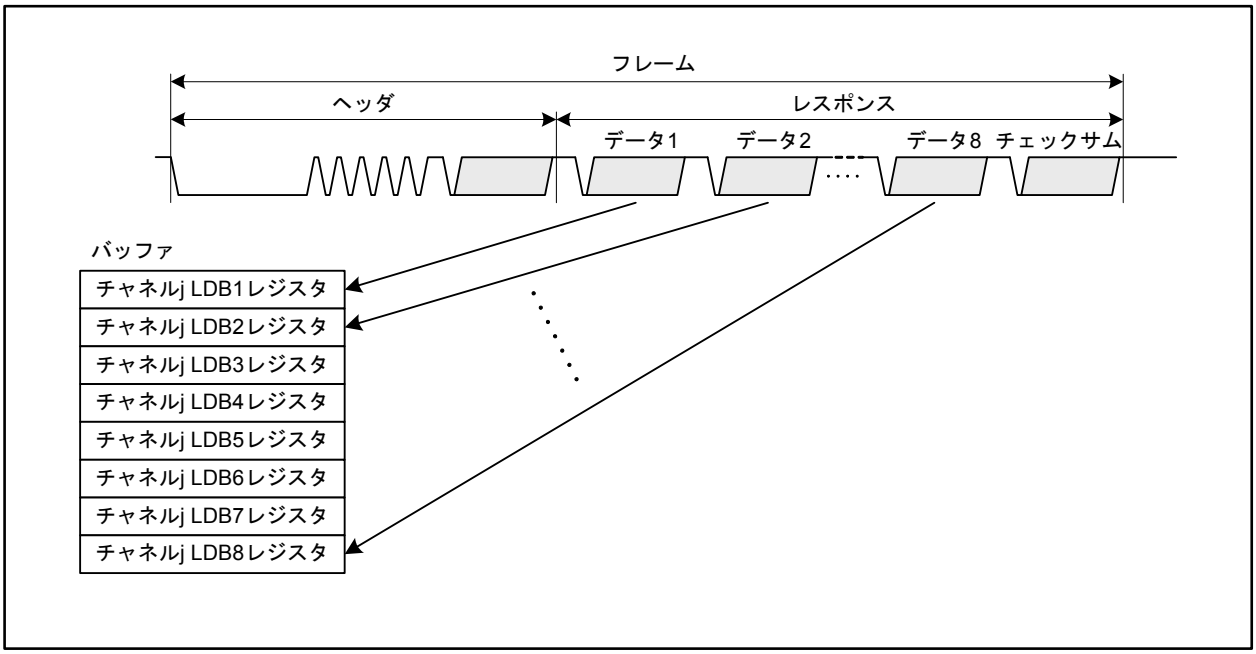


図24.27 LIN受信処理とバッファ (j=0, 1)

24.7 ウェイクアップ送信/受信

ウェイクアップの送受信はLINウェイクアップモードで使用できます。

24.7.1 ウェイクアップ送信

24.7.1.1 ウェイクアップ送信動作

LINウェイクアップモード時、LTCレジスタのFTSビットを“1”(フレーム/ウェイクアップ送信開始)にすると、対応するチャネルの出力端子からウェイクアップ信号が出力されます。ウェイクアップ信号の“L”幅はLWUPレジスタのWUTL3~WUTL0ビットで設定します。

ビットエラーなくウェイクアップの“L”が出力された場合、LSTレジスタのFTCビットが“1”(フレームまたはウェイクアップ送信完了)になり、LMD0レジスタのFTCIEビットが“1”(フレーム/ウェイクアップ送信完了割り込み許可)のとき割り込み要求が発生します。

ビットエラーを検出した場合は、ウェイクアップ送信を中断しLESTレジスタのBERビットを“1”(ビットエラー検出)にします。

図24.28にウェイクアップ送信タイミングを示します。

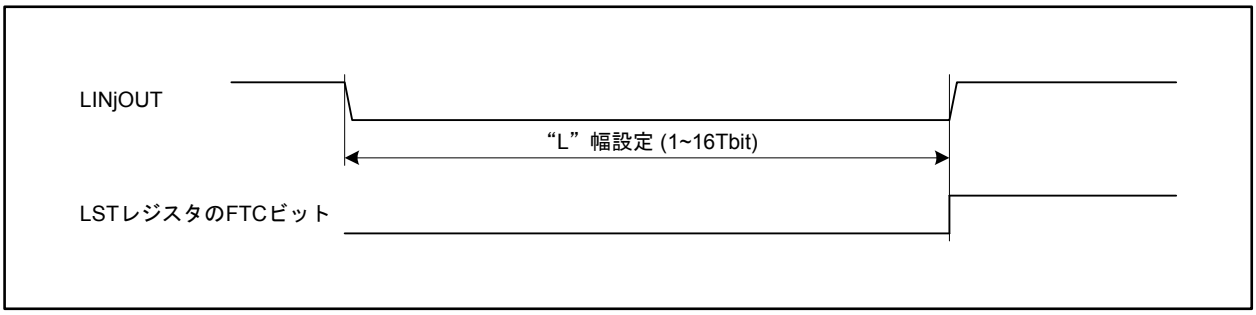


図 24.28 ウェイクアップ送信タイミング(j=0, 1)

24.7.1.2 ウェイクアップ衝突

マスタノードとスレーブノードが同時にウェイクアップ信号を送信した場合、LINバス上で衝突が発生しますが、LINモジュールでは、ウェイクアップ信号の衝突は検知しません。

また、LINバスの“L”固着をウェイクアップ信号と認識しないために、ウェイクアップ信号送信後は一度レセシブ(“H”)を検知しなければ、入力信号“L”幅カウント機能は動作しません。

24.7.2 ウェイクアップ受信

24.7.2.1 ウェイクアップ受信動作

ウェイクアップを検出するには、入力信号“L”幅カウント機能または、入力信号“L”検出機能を使用します。入力信号“L”幅カウント機能はLINウェイクアップモードで、入力信号“L”検出機能はすべての動作モードで使用できます。

入力信号“L”幅カウント機能は、データ受信と同じサンプリングポイントでLINjIN端子(j=0, 1)への入力信号が“L”になっている期間をカウントする機能です。カウント値がLWUPレジスタのWURL3~WURL0ビットで設定した値に達するとLSTレジスタのFRCビットが“1”(フレームまたはウェイクアップ受信完了)になり、LMD0レジスタのFRCIEビットが“1”(フレーム/ウェイクアップ受信完了割り込み許可)の場合、割り込み要求が発生します。

入力信号“L”検出機能は、LINjIN端子への入力信号の立ち下がりエッジを非同期で検出する機能です。LMD0レジスタのLDEビットが“1”(入力信号“L”検出許可)の場合、入力信号の立ち下がりエッジを検出すると、LSTレジスタのLDビットが“1”(入力信号“L”検出)になり、割り込み要求が発生します。

図24.29にウェイクアップ検出の例を示します。

ビットレートが19200bps (1 Tbit = 52 µs)、WURL3~WURL0ビットの設定が“0011b” (3.5 Tbit)の場合、52 µs × 3.5 = 182 µsよりも長い“L”パルスをウェイクアップ信号として認識します。

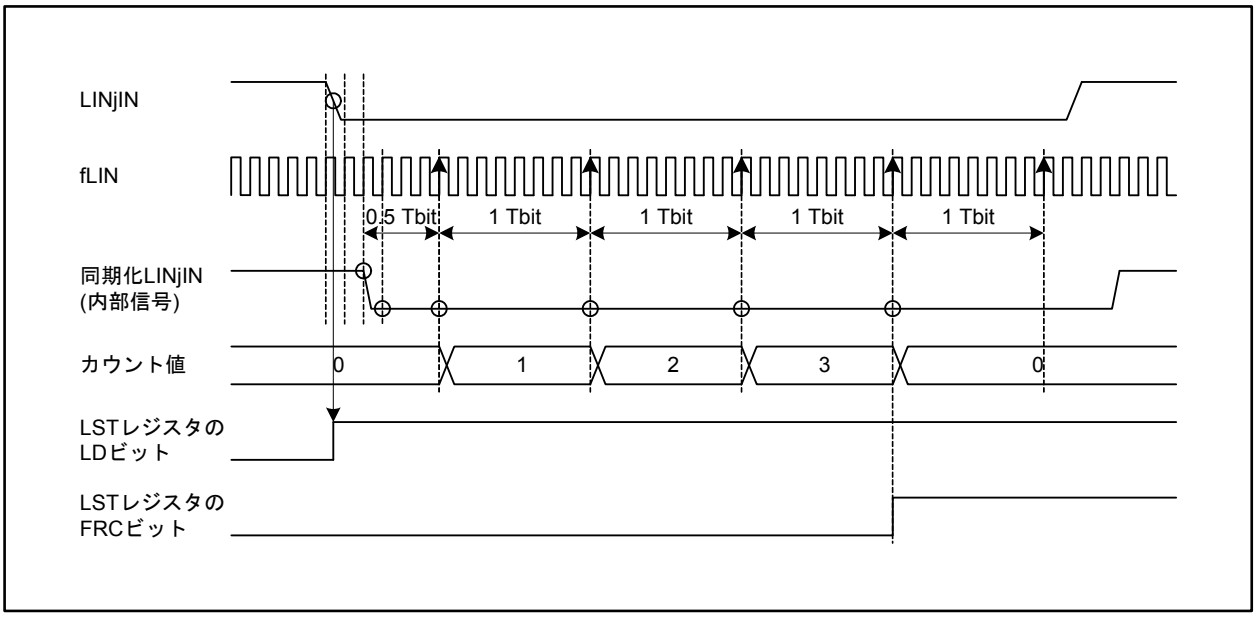


図 24.29 ウェイクアップ検出例(j=0, 1)

入力信号“L”幅カウント機能は、ウェイクアップ送信中は動作しません(入力信号“L”検出機能はウェイクアップ送信中も動作します)。ウェイクアップ受信カウント中にLTCレジスタのFTSビットを“1”(フレーム/ウェイクアップ送信開始)に設定した場合、受信処理を中断してウェイクアップ送信を行います。

24.8 入力信号“L”検出機能を用いた低消費電力モード制御

入力信号“L”検出機能をウェイトモードやストップモードからの復帰用割り込みとして使用することができます。

図 24.30にウェイトモードへ移行する前の設定例を示します。ウェイトモード、ストップモードへの移行についての詳細は「7.7.2 ウェイトモード」、「7.7.3 ストップモード」を参照してください。

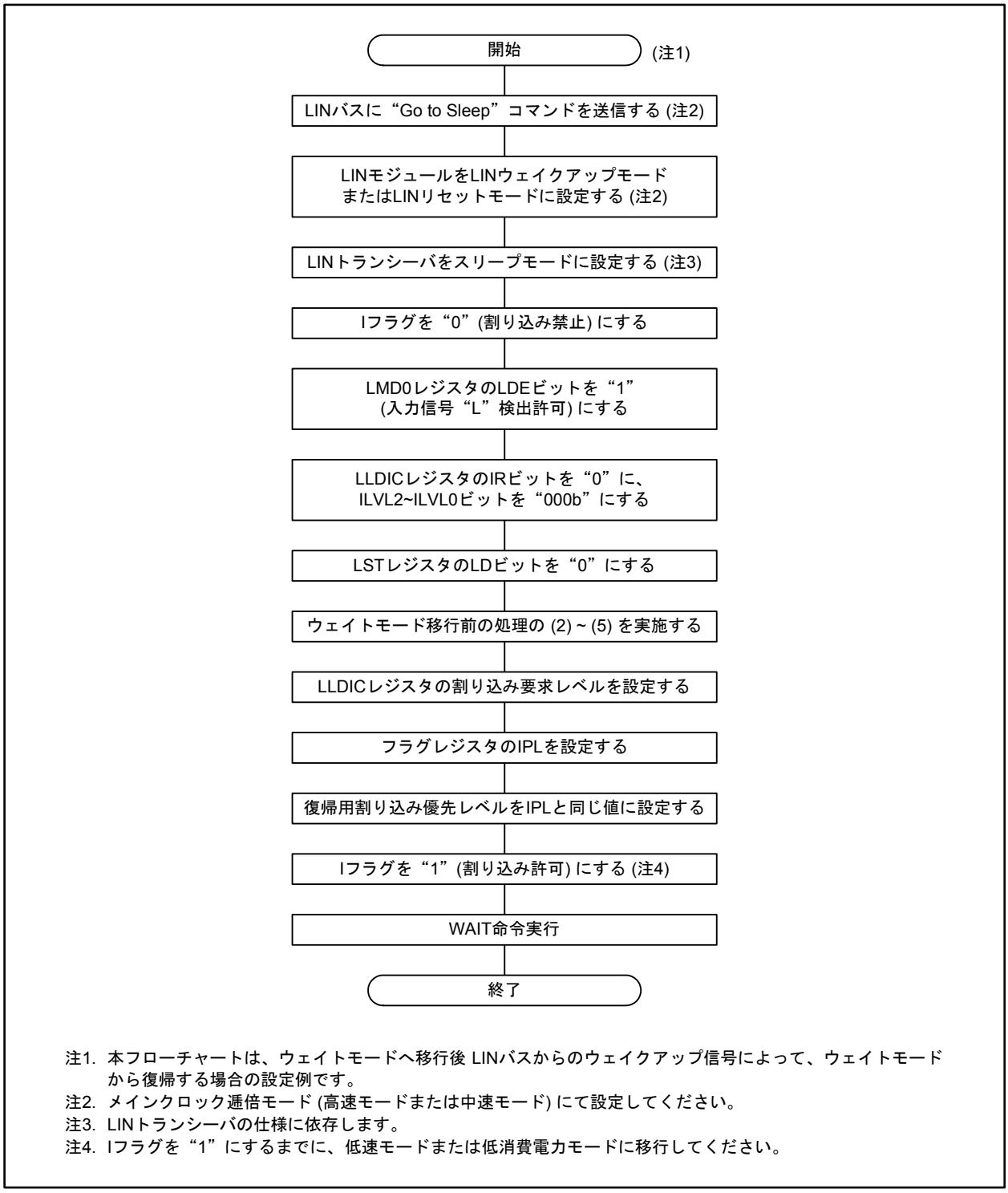


図 24.30 ウェイトモードへ移行する前の設定例

24.9 ステータス

LINモジュールは6種類のステータスを検出します。これらの検出状態はLSTレジスタの各ビットで確認できます。

フレーム/ウェイクアップ送信完了、フレーム/ウェイクアップ受信完了、入力信号“L”検出、エラー検出の4つのステータスは割り込み要求を発生することができます。

表24.8にステータスの種類を示します。

表24.8 ステータスの種類(j=0, 1)

ステータス	ステータス検出条件	ステータスを検出できる動作モード	LSTレジスタの対応ビット
フレーム/ウェイクアップ送信完了	LRFCレジスタのRFTビットが“1”(送信)のとき、レスポンスフレームの送信が正常に完了した	LIN動作モード	FTC
	ウェイクアップ信号の送信が正常に完了した	LINウェイクアップモード	
フレーム/ウェイクアップ受信完了	LRFCレジスタのRFTビットが“0”(受信)のとき、レスポンスフレームの受信が正常に完了した	LIN動作モード	FRC
	入力信号の“L”幅がLWUPレジスタのWURL3～WURL0ビットの設定値に達した	LINウェイクアップモード	
入力信号“L”検出	LMD0レジスタのLDEビットが“1”(入力信号“L”検出許可)のとき、LINjIN端子からの入力信号の立ち下がりエッジを検出した、またはLINjIN端子が“L”のときにLDEビットを“1”にした	すべてのモード	LD
エラー検出	LESTレジスタのビット0～ビット5のいずれかが“1”(エラー検出)になった	LIN動作モード LINウェイクアップモード	ERR
動作モード	LSCレジスタのOM1~OM0ビットを設定後、実際にLINモジュールが設定した動作モードになった	すべてのモード	OMM1~OMM0
データ1受信完了	LRFCレジスタのRFTビットが“0”(受信)のとき、レスポンスフレームの最初の1バイトの受信が完了した(注1)	LIN動作モード	D1RC

注1. LRFCレジスタのRFDL3~RFDL0ビットが“0000b”(0バイト+チェックサム)のときは検出されません。

24.10 エラーステータス

24.10.1 エラーステータスの種類

LINモジュールは6種類のエラーステータスを検出します。これらのエラーの状態はLESTレジスタの各ビットで確認できます。

表24.9にエラーステータスの種類を示します。

表24.9 エラーステータスの種類

ステータス	エラー検出条件	エラーを検出できる動作モード	通信処理	検出許可/禁止選択	LESTレジスタの対応ビット
ビットエラー	送信したデータと、受信端子でモニタしているLINバス上のデータが一致しなかった	LIN動作モード LINウェイクアップモード	中断(注1)	可能	BER
フィジカルバスエラー	ブレークフィールド送信直前にLINバスがすでに“L”であった、またはLINバスの“H”固着を検出した	LIN動作モード LINウェイクアップモード	中断	可能	PBER
チェックサムエラー	レスポンスフレーム受信処理において、チェックサム判定の結果がエラーになった	LIN動作モード	—	不可能	CSER
フレームタイムアウトエラー	フレームの送受信がある一定の時間内に終了しなかった(注2)	LIN動作モード	中断	可能	FTER
フレーミングエラー	レスポンスフレーム受信処理において、各データバイトのストップビットが“L”であった	LIN動作モード	中断	可能	FER
オーバランエラー	レスポンスフレーム受信処理において、LSTレジスタのFRCビットが“1”(フレーム/ウェイクアップ受信完了)のとき、次のレスポンスフレームの最初のデータバイトを受信した	LIN動作モード	中断	可能	OER

注1. ビットエラーを検出した場合は、ストップビット送信後に中断します。インタバイトスペースなどの非データ領域でビットエラーを検出したときは、その領域の直後に送信を中断します。ウェイクアップ送信中にビットエラーを検出したときは、エラーになったビットを送信した直後にウェイクアップ送信を中断します。

注2. タイムアウト時間は、レスポンスフィールドデータ長(LRFCレジスタのRFDL3~RFDL0ビット)に依存し、下記の式により計算できます。

$$\text{タイムアウト時間} = 50 + (\text{データバイト数} + 1) \times 14 \quad [\text{Tbit}]$$

上記タイムアウト時間は、LIN Specification Package Revision 1.3のT_{FRAME_MAX} ({(10 × データバイト数 + 44) + 1} × 1.4)を超える時間となります。

24.10.2 LINエラー検出の対象時間領域

図 24.31にエラーを検出するためにLINモジュールが監視する時間領域を示します。

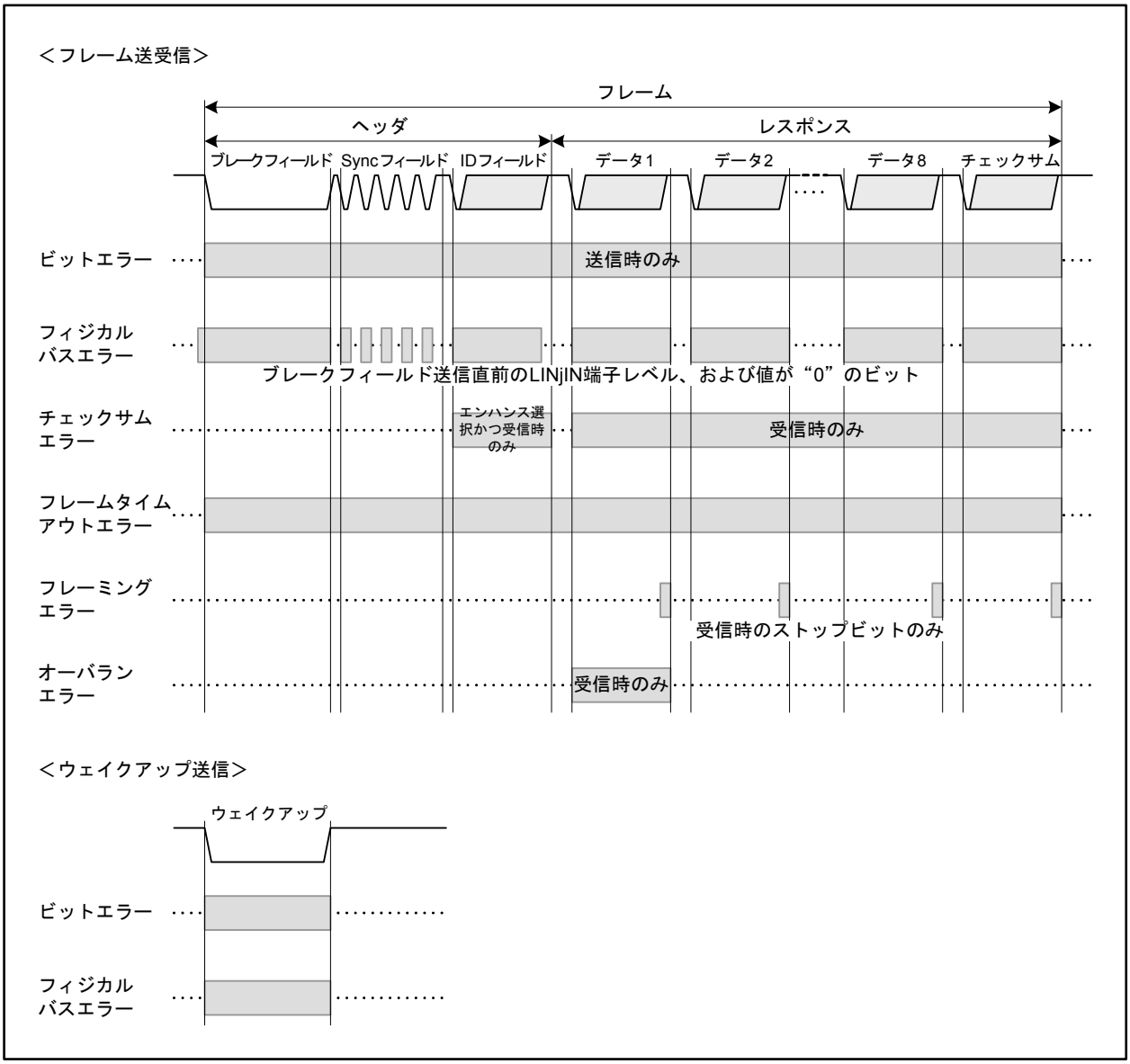


図 24.31 LINエラー検出の対象時間領域(j=0, 1)

24.11 割り込み

LINモジュールが生成する割り込み要求には、LINj割り込み(j=0, 1)とLIN“L”検出割り込みがあります。割り込み要因には、チャネルごとにフレーム/ウェイクアップ送信完了、フレーム/ウェイクアップ受信完了、エラー検出、入力信号“L”検出の4つあります。

フレーム/ウェイクアップ送信完了、フレーム/ウェイクアップ受信完了、エラー検出の3つのステータスによる割り込み要求は、チャネルごとに論理和をとって1つの割り込み要求「LINj割り込み」にまとめられます。入力信号“L”検出ステータスによる割り込み要求は、全チャネルの論理和をとってLIN“L”検出割り込み要求となります。

それぞれの割り込み要求は、LMD0レジスタの対応するビットが“1”(割り込み許可)のときに、LSTレジスタの対応するフラグが“1”になると出力されます。なお、複数の要因の論理和をとっているため、いずれかの要因が“1”であると他の要因による新たな割り込み要求は発生しません。

図24.32にLINj割り込みブロック図、図24.33にLIN“L”検出割り込みブロック図を示します。

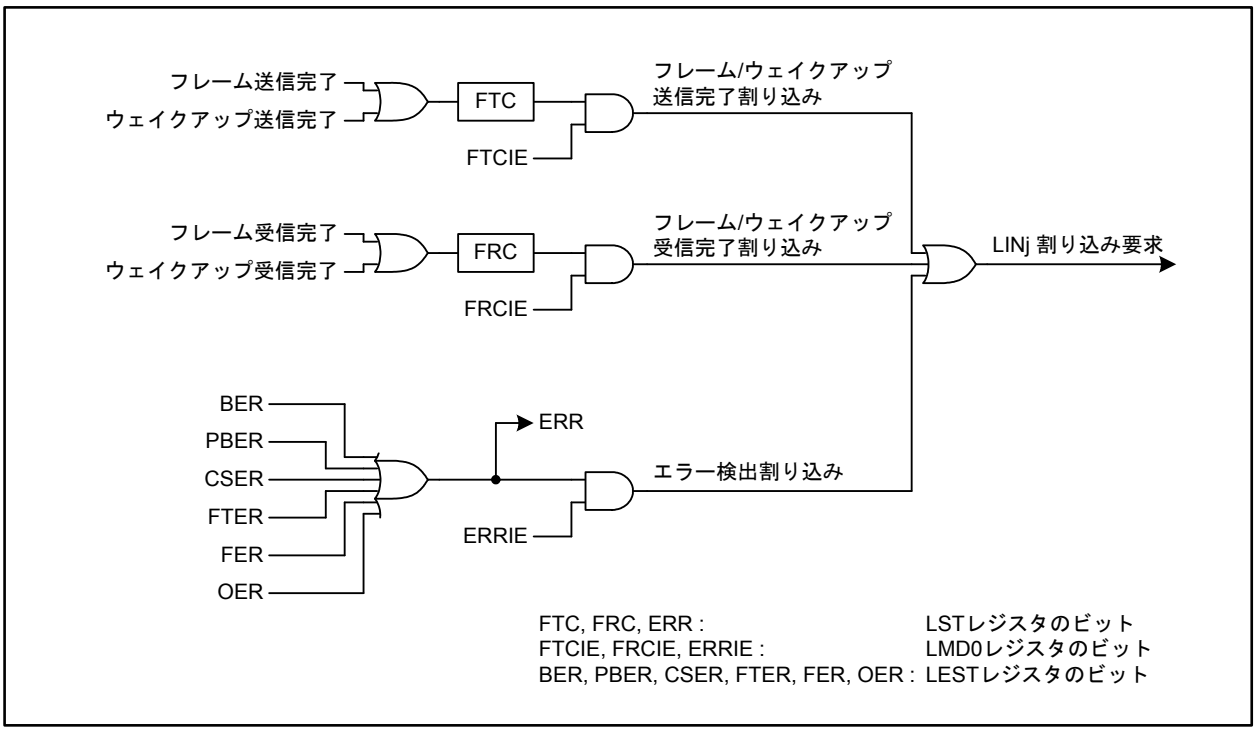


図 24.32 LINj割り込みブロック図(j=0, 1)

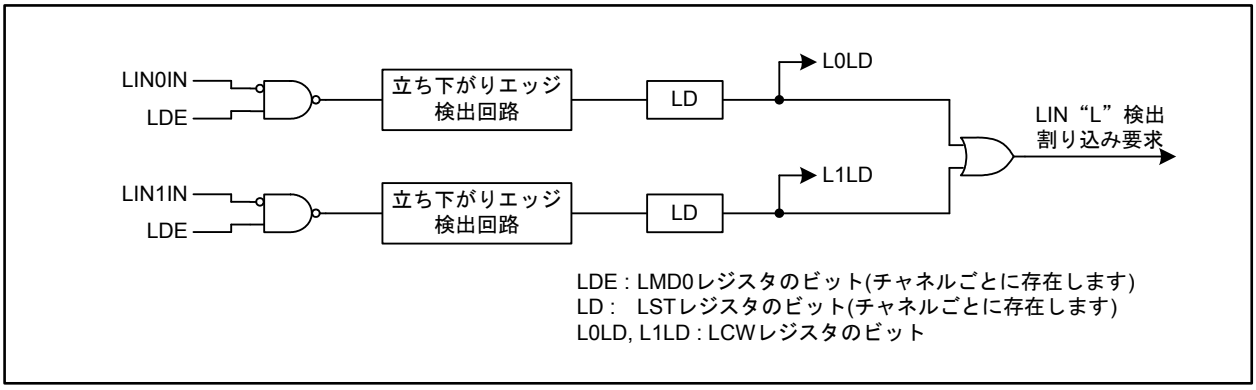


図 24.33 LIN“L”検出割り込みブロック図

25. CANモジュール

ISO11898-1仕様に準拠したCAN (Controller Area Network)モジュールを1チャネル(CAN0)内蔵しています。CANモジュールは標準(11ビット) IDentifier (以下、IDと略す)と拡張(29ビット) IDの両フォーマットのメッセージを送受信できます。

表 25.1、表 25.2にCANモジュールの仕様、図 25.1にCANモジュールブロック図を示します。
なお、CANバストランシーバは外付けしてください。

表 25.1　CANモジュールの仕様(1)

項目	仕様
プロトコル	ISO11898-1仕様準拠
ビットレート	最大1Mbps
メッセージボックス	32メールボックス 2種類のメールボックスモードを選択可能 • 通常メールボックスモード 　32個のメールボックスをすべて送信または受信用に設定可能 • FIFOメールボックスモード 　24個のメールボックスを送信または受信用に設定可能 　残りのメールボックスを送信用に4段、受信用に4段のFIFOに設定可能
受信	• データフレームとリモートフレームを受信可能 • 受信するIDフォーマット(標準IDのみ、拡張IDのみ、標準IDと拡張IDの両方)を選択可能 • ワンショット受信機能を選択可能 • オーバライトモード(メッセージ上書き)またはオーバランモード(メッセージ破棄)を選択可能 • 受信完了割り込みの許可/禁止をメールボックスごとに設定可能
アクセプタンスフィルタ	8つのアクセプタンスマスク(メールボックス4個ごとに個別のマスク) メールボックスごとにマスクの有効/無効を設定可能
送信	• データフレームとリモートフレームを送信可能 • 送信するIDフォーマット(標準IDのみ、拡張IDのみ、標準IDと拡張IDの両方)を選択可能 • ワンショット送信機能を選択可能 • ID優先送信モードまたはメールボックス番号優先送信モードを選択可能 • 送信要求をアボート可能(フラグでアボート完了を確認可能) • 送信完了割り込みの許可/禁止をメールボックスごとに設定可能
バスオフ復帰モード遷移	バスオフ状態からの復帰モード遷移を選択可能 • ISO11898-1仕様準拠 • バスオフ開始でCAN Haltモードへ自動遷移 • バスオフ終了でCAN Haltモードへ自動遷移 • プログラムによるCAN Haltモードへの遷移 • プログラムによるエラーアクティブ状態への遷移

表 25.2　CANモジュールの仕様(2)

項目	仕様
エラー状態の監視	•CANバスエラー(スタッフエラー、フォームエラー、ACKエラー、CRCエラー、ビットエラー、ACKデリミタエラー)を監視可能 •エラー状態の遷移を検出可能(エラーワーニング、エラーパッシブ、バスオフ開始、バスオフ復帰) •エラーカウンタを読み出し可能
タイムスタンプ機能	16ビットカウンタによるタイムスタンプ機能 基準クロックは、1、2、4、8ビットタイムから選択可能
割り込み要因	6種類 •受信完了 •送信完了 •受信FIFO •送信FIFO •エラー •ウェイクアップ
CANスリープモード	CANクロックを停止することで消費電流を低減可能
ソフトウェアサポートユニット	3つのソフトウェアサポートユニット •アクセプタンスフィルタサポート •メールボックス検索サポート(受信メールボックス検索、送信メールボックス検索、メッセージロスト検索) •チャネル検索サポート
CANクロックソース	周辺バスクロックかメインクロックを選択可能
テストモード	ユーザ評価用に3つのテストモードを用意 •リッスンオンリモード •セルフテストモード0(外部ループバック) •セルフテストモード1(内部ループバック)

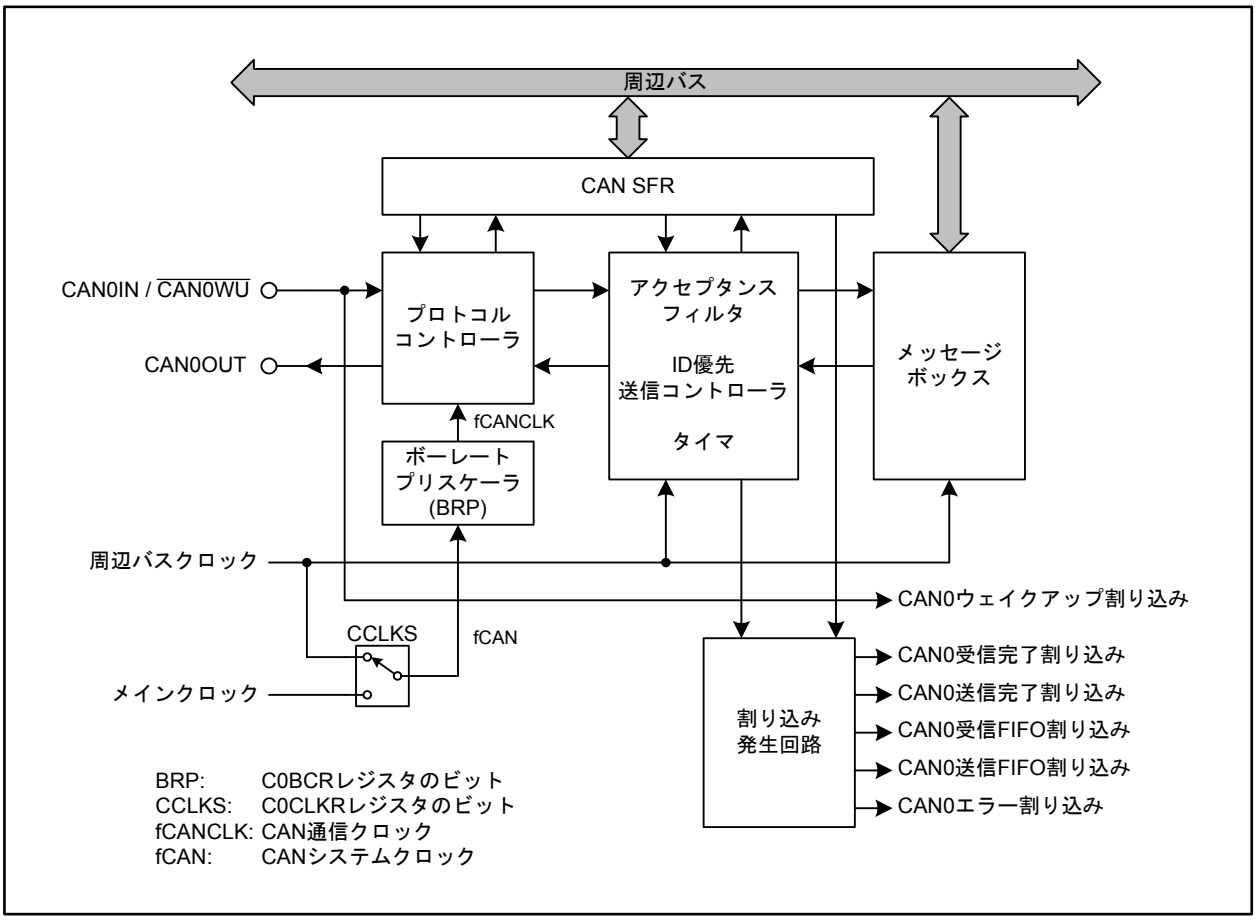


図 25.1 CANモジュールブロック図

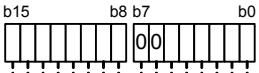
- CAN0IN/CAN0OUT: CANの入出力端子です。
- プロトコルコントローラ: バスアービトレーションや送受信時のビットタイミング、スタッフ処理、エラー処理などのCANプロトコル処理を行います。
- メッセージボックス: 送信または受信メールボックスとして使用可能な32個のメールボックスで構成されています。各メールボックスには固有のID、データ長コード、8バイトのデータフィールドおよびタイムスタンプがあります。
- アクセプタンスフィルタ: 受信メッセージのフィルタ処理を行います。このフィルタ処理には、C0MKR0~C0MKR7レジスタを使用します。
- タイマ: タイムスタンプ機能に使用します。メールボックスにメッセージを格納するときのタイマ値がタイムスタンプ値として書き込まれます。
- ウェイクアップ: CANバス上にメッセージが検出されると、CAN0ウェイクアップ割り込み要求を発生します。
- 割り込み発生回路: 以下の5種類の割り込み要求を発生させることができます。
  - CAN0受信完了割り込み
  - CAN0送信完了割り込み
  - CAN0受信FIFO割り込み
  - CAN0送信FIFO割り込み
  - CAN0エラー割り込み
- CAN SFR: CAN関連のレジスタです。詳細は、「25.1 CAN SFR」を参照してください。

25.1 CAN SFR

図 25.2~図 25.11、図 25.13、図 25.14、図 25.16~図 25.20、図 25.22、図 25.24~図 25.30にCAN関連レジスタを示します。

25.1.1 CAN0制御レジスタ (C0CTLRレジスタ)

CAN0制御レジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0CTLR	47F41h-47F40h番地	0000 0000 0000 0101b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CANM	CAN動作モード選択ビット (注1)	b1 b0 0 0 : CANオペレーションモード 0 1 : CANリセットモード 1 0 : CAN Haltモード 1 1 : 設定しないでください	RW
SLPM	CANスリープモードビット (注1、2)	0: CANスリープモードではない 1: CANスリープモード	RW
BOM	バスオフ復帰モード選択ビット (注3)	b4 b3 0 0 : ノーマルモード (ISO11898-1仕様準拠) 0 1 : バスオフ開始で自動的にCAN Haltモードへ遷移 1 0 : バスオフ終了で自動的にCAN Haltモードへ遷移 1 1 : プログラムによる要求でCAN Halt モードへ遷移 (バスオフ復帰期間中)	RW
RBOC	バスオフ強制復帰ビット (注4)	0: 何もしない 1: バスオフからの強制復帰 (注5)	RW
— (b7-b6)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MBM	CANメールボックスモード選択ビット (注3)	0: 通常メールボックスモード 1: FIFOメールボックスモード	RW
IDFM	IDフォーマットモード選択ビット (注3)	b10b9 0 0 : 標準IDモード 0 1 : 拡張IDモード 1 0 : ミックスIDモード 1 1 : 設定しないでください	RW
MLM	メッセージロストモード選択ビット (注3)	0: オーバライトモード 1: オーバランモード	RW
TPM	送信優先順位モード選択ビット (注3)	0: ID優先送信モード 1: メールボックス番号優先送信モード	RW
TSRC	タイムスタンプカウンタリセットビット (注6)	0: リセットしない 1: リセットする (注5)	RW
TSPS	タイムスタンププリスケーラ選択ビット (注3)	b15b14 0 0 : 1ビットタイムごと 0 1 : 2ビットタイムごと 1 0 : 4ビットタイムごと 1 1 : 8ビットタイムごと	RW

注1. CANM、SLPMビットを変更した場合は、C0STRレジスタでモードが切り替わることを確認してください。
　　モードが切り替わるまで、CANM、SLPMビットは変更しないでください。
注2. SLPMビットは、CANリセットモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。
　　SLPMビットを書き換える場合は、本ビットのみ“0”または“1”にしてください。
注3. BOM、MBM、IDFM、MLM、TPM、TSPSビットは、CANリセットモード時に変更してください。
注4. RBOCビットはバスオフ状態時に“1”にしてください。
注5. “1”にした後自動的に“0”に戻ります。読んだ場合“0”が読めます。
注6. TSRCビットはCANオペレーションモード時に“1”にしてください。

図 25.2　C0CTLRレジスタ

25.1.1.1 CANMビット

CANモジュールのモード(CANオペレーションモード、CANリセットモード、CAN Haltモード)を選択するビットです。詳細は、「25.2 動作モード」を参照してください。

CANスリープモードはSLPMビットで設定します。

“11b”には設定しないでください。

BOMビットの設定によってCAN Haltモードへ遷移した場合は、CANMビットは自動的に“10b”になります。

25.1.1.2 SLPMビット

“1” にすると、CANスリープモードになります。

“0” にすると、CANスリープモードは解除されます。

詳細は、「25.2 動作モード」を参照してください。

25.1.1.3 BOMビット

CANモジュールのバスオフ復帰モードの選択に使用します。

“00b”の場合、バスオフからの復帰はISO11898-1仕様に準拠します。すなわち、CANモジュールは、11の連続するレセシブビットを128回検出後、再びCAN通信(エラーアクティブ状態)に入ります。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求が発生します。

“01b ” の場合、CANモジュールがバスオフ状態に達すると、C0CTLRレジスタのCANMビットが“10b” (CAN Haltモード)になってから、CAN Haltモードへ遷移します。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求は発生せず、C0TECR、C0RECRレジスタは“00h”になります。

“10b”の場合、CANモジュールがバスオフ状態に達するとCANMビットが“10b”になり、バスオフ状態から復帰した(11の連続するレセシブビットを128回検出)後に、CAN Haltモードに遷移します。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求が発生し、C0TECR、C0RECRレジスタが“00h”になります。

“11b” の場合、CANモジュールがまだバスオフ状態のときにCANMビットを“10b” にすると、CAN Haltモードになります。バスオフからの復帰時にバスオフ復帰割り込み要求は発生せず、C0TECR、C0RECRレジスタは“00h”になります。しかし、CANMビットを“10b”にする前に、11の連続するレセシブビットを128回検出して、バスオフから復帰した場合は、バスオフ復帰割り込み要求が発生します。

CANモジュールがCAN Haltモードに遷移するのと同時(BOMビットが“01b”のとき:バスオフ開始、またはBOMビットが“10b”のとき:バスオフ終了)に、CPUがCANリセットモードへの遷移を要求した場合は、CPUの要求が優先されます。

25.1.1.4 RBOCビット

バスオフ状態時“1” (バスオフからの強制復帰)にすると、バスオフ状態から強制的に復帰します。このビットは自動的に“0”になります。エラー状態は、バスオフ状態からエラーアクティブ状態へと変化します。

“1”にすると、C0RECR、C0TECRレジスタが“00h”になり、C0STRレジスタのBOSTビットは“0” (CANモジュールはバスオフ状態ではない)になります。他のレジスタは変化しません。バスオフからの復帰によるバスオフ復帰割り込み要求は発生しません。

BOMビットが“00b” (ノーマルモード)のときにのみ使用してください。

25.1.1.5 MBMビット

“0”(通常メールボックスモード)の場合、メールボックス[0]~[31]は送信または受信メールボックスに設定されます。

“1”(FIFOメールボックスモード)の場合、メールボックス[0]~[23]は送信または受信メールボックスに設定され、メールボックス[24]~[27]は送信FIFOに、メールボックス[28]~[31]は受信FIFOに設定されます。

送信データはメールボックス[24]に書き込み(メールボックス[24]は送信FIFOのウィンドウメールボックスです)、受信データはメールボックス[28]から読み出します(メールボックス[28]は受信FIFOのウィンドウメールボックスです)。

表25.3にメールボックスの設定を示します。

表25.3 メールボックスの設定

メールボックス	MBM=0 (通常メールボックスモード)	MBM=1(注1) (FIFOメールボックスモード)
メールボックス[0]~[23]	通常メールボックス	通常メールボックス
メールボックス[24]~[27]		送信FIFO
メールボックス[28]~[31]		受信FIFO

注1. MBMビットが“1”のときは、以下の点に注意してください。

- 送信FIFOはC0TFCRレジスタで制御します
  メールボックス[24]~[27]のC0MCTLjレジスタ(j=0~31)は無効です
  C0MCTL24~C0MCTL27レジスタは使用できません
- 受信FIFOはC0RFCRレジスタで制御します
  メールボックス[28]~[31]のC0MCTLjレジスタは無効です
  C0MCTL28~C0MCTL31レジスタは使用できません
- FIFO割り込みについてはC0MIERレジスタを参照してください
- C0MKIVLRレジスタのメールボックス[24]~[31]に対応するビットは無効です。これらのビットには“0”を設定してください
- 送信/受信FIFOはデータフレーム/リモートフレームのいずれにも使用可能です

25.1.1.6 IDFMビット

IDフォーマットを指定します。

“00b”の場合、すべてのメールボックス(FIFOメールボックスを含む)は、標準IDのみに対応します。

“01b”の場合、すべてのメールボックス(FIFOメールボックスを含む)は、拡張IDのみに対応します。

“10b”の場合、すべてのメールボックス(FIFOメールボックスを含む)は、標準IDと拡張IDの両方に対応します。標準IDと拡張IDの選択は、通常メールボックスモードの場合、対応するメールボックスのIDEビットで指定します。FIFOメールボックスモードの場合、メールボックス[0]~[23]は対応するメールボックスのIDEビット、受信FIFOはC0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのIDEビット、送信FIFOはメールボックス[24]のIDEビットで指定します。

“11b”は、設定しないでください。

25.1.1.7 MLMビット

未読メールボックスに新しいメッセージを取り込む場合の動作を指定します。オーバライトモードまたはオーバランモードを選択できます。すべてのメールボックス(受信FIFOを含む)は、オーバライトモードかオーバランモードのどちらかになります。

“0”の場合、すべてのメールボックスはオーバライトモードになり、メールボックスの古いメッセージに新しいメッセージが上書きされます。

“1”の場合、すべてのメールボックスはオーバランモードになり、新しいメッセージは破棄されます。

25.1.1.8 TPMビット

メッセージを送信する場合の優先順のモードを指定します。ID優先モードまたはメールボックス番号優先モードを選択できます。

すべてのメールボックスは、ID優先送信またはメールボックス番号優先送信のどちらかになります。

“0”の場合、ID優先送信モードとなり送信優先順位はCANバス アービトレーションルール(ISO11898-1仕様)に準拠します。ID優先送信モードは、通常メールボックスモードのときメールボックス [0]~[31] 、FIFO メールボックスモードのときメールボックス [0]~[23] と送信 FIFO の送信に設定されたメールボックスのIDを比較します。2つ以上のメールボックスのIDが同じ場合、小さい番号のメールボックスが優先されます。

次に送信FIFOから送信される予定のメッセージのみが、送信アービトレーションの対象となります。送信FIFOのメッセージを送信中の場合、送信FIFO内の次の待機メッセージが送信アービトレーションの対象となります。

“1” の場合、メールボックス番号優先送信モードとなり送信に設定された一番小さい番号のメールボックスが優先されます。FIFOメールボックスモードでは、送信FIFOは通常メールボックス(メールボックス [0]~[23])よりも優先順位が低くなります。

25.1.1.9 TSRCビット

タイムスタンプカウンタをリセットするために使用します。

“1”にするとC0TSRレジスタが“0000h”になります。このビットは自動的に“0”になります。

25.1.1.10 TSPSビット

タイムスタンプ用のプリスケーラを選択します。

タイムスタンプの基準クロックは、1、2、4、または8ビットタイムのいずれかを選択できます。

25.1.2　CAN0クロック選択レジスタ (C0CLKR レジスタ)

CAN0クロック選択レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	X	X	0	0	X	0	

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0CLKR	47F47h番地	000X 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
CCLKS	CANクロックソース選択ビット (注1)	0: 周辺バスクロック 1: メインクロック (注2)	RW
— (b1)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b4)	予約ビット	“0”にしてください。 読んだ場合、その値は不定	RW
— (b6-b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. CCLKSビットは、CANリセットモード時に変更してください。
注2. CCLKSビットを“1”にする場合、周辺バスクロックの周波数はメインクロックの周波数以上にしてください。

図 25.3　C0CLKR レジスタ

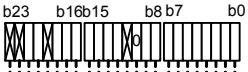
25.1.2.1　CCLKS ビット

“0”の場合、CANクロックソース(fCAN)にPLL周波数シンセサイザにより生成された周辺バスクロックが使用されます。

“1”の場合、CAN クロックソース (fCAN) に PLL 周波数シンセサイザを使用せず、外部の XIN 端子から入力されたメインクロックが使用されます。

25.1.3 CAN0ビットコンフィグレーションレジスタ (C0BCR レジスタ)

CAN0ビットコンフィグレーションレジスタ (注1、2)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0BCR	47F46h-47F44h番地	00 0000h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BRP	プリスケーラ分周比 設定ビット (10ビット)	設定値を P (0~1023) とすると、ボーレートプリスケーラは fCAN を P+1で 分周します	RW
— (b10)	予約ビット	“0” にしてください	RW
— (b11)	何も配置されていない。書く場合、“0” を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
TSEG1	タイムセグメント1 制御ビット	b15b14b13b12 0 0 0 0 : 0 0 0 1 : 0 0 1 0 : } 設定しないでください 0 0 1 1 : 4Tq 0 1 0 0 : 5Tq 0 1 0 1 : 6Tq 0 1 1 0 : 7Tq 0 1 1 1 : 8Tq 1 0 0 0 : 9Tq 1 0 0 1 : 10Tq 1 0 1 0 : 11Tq 1 0 1 1 : 12Tq 1 1 0 0 : 13Tq 1 1 0 1 : 14Tq 1 1 1 0 : 15Tq 1 1 1 1 : 16Tq	RW
TSEG2	タイムセグメント2 制御ビット	b18b17b16 0 0 0 : 設定しないでください 0 0 1 : 2Tq 0 1 0 : 3Tq 0 1 1 : 4Tq 1 0 0 : 5Tq 1 0 1 : 6Tq 1 1 0 : 7Tq 1 1 1 : 8Tq	RW
— (b19)	何も配置されていない。書く場合、“0” を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
SJW	再同期ジャンプ幅 制御ビット	b21b20 0 0 : 1Tq 0 1 : 2Tq 1 0 : 3Tq 1 1 : 4Tq	RW
— (b23-b22)	何も配置されていない。書く場合、“0” を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. C0BCRレジスタは、CANリセットモードからCAN Haltモード、もしくはCANリセットモードからCANオペレーションモードへ遷移する前に設定してください。一度設定するとCANリセットモード、もしくはCAN Haltモードで変更できます。
注2. C0BCRレジスタは24ビットです。32ビットでアクセスする場合は、C0CLKRレジスタを書き換えないように注意してください。

図 25.4　C0BCR レジスタ

ビットタイミングの設定については、「25.3 CAN通信速度の設定」を参照してください。

25.1.3.1 BRPビット

CAN通信クロック(fCANCLK)の周波数設定に使用します。
fCANCLKの周期が1 Time Quantum (Tq)となります。

25.1.3.2 TSEG1ビット

プロパゲーションタイムセグメント(PROP_SEG)とフェーズバッファセグメント1 (PHASE_SEG1)の合計長をTq値で指定します。
4~16Tqの値が設定可能です。

25.1.3.3 TSEG2ビット

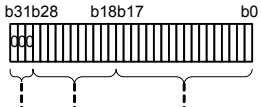
フェーズバッファセグメント2 (PHASE_SEG2)の長さをTq値で指定します。
2~8Tqの値が設定可能です。
TSEG1ビットより小さな値を設定してください。

25.1.3.4 SJWビット

再同期ジャンプ幅(Resynchronization Jump Width)をTq値で指定します。
1~4Tqの値が設定可能です。
TSEG2ビット以下の値を設定してください。

25.1.4　CAN0マスクレジスタk (C0MKRkレジスタ) (k=0~7)

CAN0マスクレジスタk (k=0~7) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MKR0, C0MKR1	47E03h-47E00h、47E07h-47E04h番地	不定
C0MKR2, C0MKR3	47E0Bh-47E08h、47E0Fh-47E0Ch番地	不定
C0MKR4, C0MKR5	47E13h-47E10h、47E17h-47E14h番地	不定
C0MKR6, C0MKR7	47E1Bh-47E18h、47E1Fh-47E1Ch番地	不定

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
EID	拡張IDビット	0: 対応するEIDビットは比較されない 1: 対応するEIDビットは比較される	RW
SID	標準IDビット	0: 対応するSIDビットは比較されない 1: 対応するSIDビットは比較される	RW
— (b31-b29)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. C0MKR0~C0MKR7レジスタは、CANリセットモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

図 25.5　C0MKR0~C0MKR7 レジスタ

FIFOメールボックスモードでのマスク機能については、「25.5 アクセプタンスフィルタ処理とマスク機能」を参照してください。

25.1.4.1　EIDビット

CAN拡張IDビットに対応するフィルタマスクビットです。拡張IDのメッセージを受信する場合に使用します。

“0”の場合、対応するEIDビットは、受信したIDとメールボックスのIDを比較しません。

“1”の場合、対応するEIDビットは、受信したIDとメールボックスのIDを比較します。

25.1.4.2　SIDビット

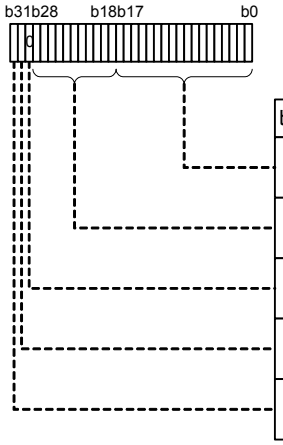
CAN標準IDビットに対応するフィルタマスクビットです。標準IDと拡張IDのメッセージを受信する場合の両方で使用します。

“0”の場合、対応するSIDビットは、受信したIDとメールボックスのIDを比較しません。

“1”の場合、対応するSIDビットは、受信したIDとメールボックスのIDを比較します。

25.1.5　CAN0 FIFO受信ID比較レジスタn (C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタ) (n=0, 1)

CAN0 FIFO受信ID比較レジスタn (n=0, 1) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0FIDCR0	47E23h-47E20h番地	不定
C0FIDCR1	47E27h-47E24h番地	不定

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
EID	拡張IDビット	0: 対応するEIDビットは“0” 1: 対応するEIDビットは“1”	RW
SID	標準IDビット	0: 対応するSIDビットは“0” 1: 対応するSIDビットは“1”	RW
— (b29)	予約ビット	“0”にしてください	RW
RTR	リモートフレーム要求ビット	0: データフレーム 1: リモートフレーム	RW
IDE	ID拡張ビット　(注2)	0: 標準ID 1: 拡張ID	RW

注1. C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタは、CANリセットモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。
注2. IDEビットは、C0CTLRレジスタのIDFMビットが“10b”(ミックスIDモード) のとき有効です。IDFMビットが“00b”(標準IDモード) または“01b”(拡張IDモード) のときは、“0”を書いてください。

図 25.6　C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタ

C0CTLRレジスタのMBMビットが“1”　(FIFOメールボックスモード) のとき有効です。C0MB28~C0MB31レジスタのEID、SID、RTR、IDEビットは無効です。

使用方法については、「25.5 アクセプタンスフィルタ処理とマスク機能」を参照してください。

25.1.5.1　EIDビット

データフレームとリモートフレームの拡張IDを設定します。拡張IDのメッセージを受信する場合に使用します。

25.1.5.2　SIDビット

データフレームとリモートフレームの標準IDを設定します。標準IDと拡張IDのメッセージを受信する場合の両方で使用します。

25.1.5.3 RTRビット

データフレームまたはリモートフレームの指定されたフレームフォーマットを設定します。
以下の動作を指定します。

- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタの両方のRTRビットが“0”の場合、データフレームのみ受信できます
- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタの両方のRTRビットが“1”の場合、リモートフレームのみ受信できます
- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのRTRビットが“0”と“1”のそれぞれ異なる設定の場合、データフレームとリモートフレームの両方を受信できます

25.1.5.4 IDEビット

標準IDまたは拡張IDのIDフォーマットを設定します。
C0CTLRレジスタのIDFMビットが“10b”(ミックスIDモード)のとき有効です。
IDFMビットが“10b”のとき、以下の動作を指定します。

- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタの両方のIDEビットが“0”の場合、標準IDフレームのみ受信できます
- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタの両方のIDEビットが“1”の場合、拡張IDフレームのみ受信できます
- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのIDEビットが“0”と“1”のそれぞれ異なる設定の場合、標準IDと拡張IDのフレームの両方を受信できます

25.1.6　CAN0マスク無効レジスタ(C0MKIVLRレジスタ)

CAN0マスク無効レジスタ(注1)

通常メールボックスモード

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MKIVLR	47E2Bh-47E28h番地	不定

b31　b0

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b31-b0)	マスク無効ビット	0: マスク有効 1: マスク無効	RW

FIFOメールボックスモード

b31　b24b23　b0

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b23-b0)	マスク無効ビット	0: マスク有効 1: マスク無効	RW
— (b31-b24)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. C0MKIVLRレジスタは、CANリセットモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

図 25.7　C0MKIVLRレジスタ

各ビットは、同じ番号のメールボックスに対応します。“1”の場合、ビット番号に対応するメールボックスのアクセプタンスマスクは無効となります。この場合、メールボックスは受信メッセージのIDとC0MBjレジスタ(j=0~31)のSID、EIDビットが一致する場合にのみ受信します。

25.1.7 CAN0メールボックス(C0MBjレジスタ) (j=0~31)

表25.4にCAN0メールボックスのメモリ配置、表25.5にCANデータフレームの構成を示します。
CAN0メールボックスのリセット後の値は不定です。

表25.4 CAN0メールボックスのメモリ配置

アドレス	メッセージ内容
CAN0	メモリ配置
47C00h+j×16+0	EID7~EID0
47C00h+j×16+1	EID15~EID8
47C00h+j×16+2	SID5~SID0、EID17、EID16
47C00h+j×16+3	IDE、RTR、SID10~SID6
47C00h+j×16+4	—
47C00h+j×16+5	データ長コード(DLC)
47C00h+j×16+6	データバイト0
47C00h+j×16+7 : : : 47C00h+j×16+13	データバイト1 : : : データバイト7
47C00h+j×16+14	タイムスタンプ下位バイト
47C00h+j×16+15	タイムスタンプ上位バイト

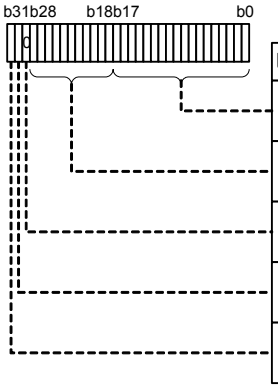
j: メールボックス番号(j=0~31)

表25.5 CANデータフレームの構成

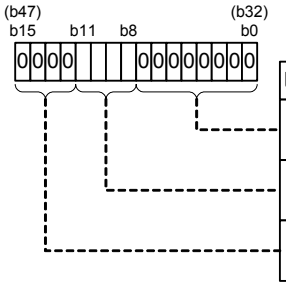
SID10~ SID6	SID5~ SID0	EID17~ EID16	EID15~ EID8	EID7~ EID0	DLC3~ DLC0	DATA0	DATA1	・・・・	DATA7

CAN0メールボックスレジスタj (j=0~31) (注1)

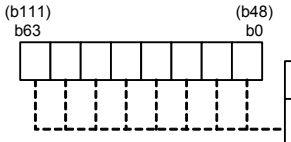
シンボル	アドレス(注2)	リセット後の値
C0MB0~C0MB31	47C00h~47DFFh番地	不定



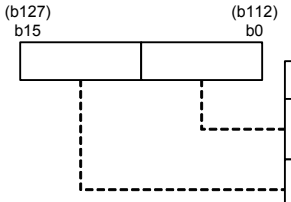
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
EID	拡張ID　(注3)	0: 対応するEIDビットは“0” 1: 対応するEIDビットは“1”	RW
SID	標準ID	0: 対応するSIDビットは“0” 1: 対応するSIDビットは“1”	RW
— (b29)	予約ビット	“0”にしてください	RW
RTR	リモートフレーム要求ビット	0: データフレーム 1: リモートフレーム	RW
IDE	ID拡張ビット　(注4)	0: 標準ID 1: 拡張ID	RW



ビットシンボル	ビット名	設定範囲	RW
— (b7-b0)	予約ビット	“0”にしてください	RW
DLC	データ長コード　(注5)	0h~Fh	RW
— (b15-b12)	予約ビット	“0”にしてください	RW



シンボル	名　称	設定範囲	RW
DATA0~ DATA7	データバイト0~7 (注5、6)	00h~FFh	RW



シンボル	名　称	設定範囲	RW
TSL	タイムスタンプ下位バイト	00h~FFh	RW
TSH	タイムスタンプ上位バイト	00h~FFh	RW

注1. C0MBjレジスタは、関連するC0MCTLjレジスタが“00h”でかつアボート処理中でないときに変更してください。
注2. 詳細なアドレスについては、前ページの「メールボックスのメモリ配置」の表を参照してください。
注3. メールボックスが標準IDのメッセージを受信した場合、メールボックスのEIDビットは不定になります。
注4. IDEビットは、C0CTLRレジスタのIDFMビットが“10b”(ミックスIDモード) のとき有効です。IDFMビットが“00b”(標準IDモード) または“01b”(拡張IDモード) のときは、“0”を書いてください。
注5. メールボックスが8バイトよりも少ないnバイトのメッセージを受信すると、メールボックスのDATAn~DATA7の値は不定になります。
注6. メールボックスがリモートフレームを受信した場合、メールボックスのDATA0~DATA7は以前の値が保持されます。

図 25.8　C0MBj レジスタ

各メールボックスの内容は、新しいメッセージを受信しない限り、以前の値を保持します。

25.1.7.1 EIDビット

データフレームとリモートフレームの拡張IDを設定します。拡張IDのメッセージを送受信する場合に使用します。

25.1.7.2 SIDビット

データフレームとリモートフレームの標準IDを設定します。標準IDと拡張IDのメッセージを送受信する場合の両方で使用します。

25.1.7.3 RTRビット

データフレームまたはリモートフレームのフレームフォーマットを設定します。以下の動作を指定します。

- 受信メールボックスは、RTRビットで選択したフレームフォーマットのみ受信する
- 送信メールボックスは、RTRビットで選択したフレームフォーマットで送信を行う
- 受信FIFOメールボックスは、C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのRTRビットで選択したデータフレーム、リモートフレーム、または両方のフレームを受信する
- 送信FIFOメールボックスは、関連する送信メッセージのRTRビットで選択したデータフレームまたはリモートフレームを送信する

25.1.7.4 IDEビット

標準IDまたは拡張IDのIDフォーマットを設定します。
C0CTLRレジスタのIDFMビットが“10b”(ミックスIDモード)のとき有効です。
IDFMビットが“10b”のとき、IDEビットは以下の動作を指定します。

- 受信メールボックスは、IDEビットで選択したIDフォーマットのみ受信する
- 送信メールボックスは、IDEビットで選択したIDフォーマットで送信を行う
- 受信FIFOメールボックスは、C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのIDEビットで選択した標準ID、拡張ID、または両方のIDメッセージを受信する
- 送信FIFOメールボックスは、関連する送信メッセージのIDEビットで選択した標準IDまたは拡張IDのメッセージを送信する

25.1.7.5 DLC (Data Length Code)

データフレームで送信するデータのバイト数を設定します。リモートフレームを使用してデータを要求する場合、要求するデータのバイト数を設定します。

データフレームを受信した場合、受信したデータのバイト数が格納されます。リモートフレームを受信した場合、要求されたデータのバイト数が格納されます。

表 25.6にDLCと対応するデータ長を示します。

表 25.6 DLCと対応するデータ長

DLC [3]	DLC [2]	DLC [1]	DLC [0]	データ長
0	0	0	0	0バイト
0	0	0	1	1バイト
0	0	1	0	2バイト
0	0	1	1	3バイト
0	1	0	0	4バイト
0	1	0	1	5バイト
0	1	1	0	6バイト
0	1	1	1	7バイト
1	X	X	X	8バイト

X: 任意の値

25.1.7.6 DATA0~DATA7

送信または受信したCANメッセージデータを格納します。DATA0から、送信または受信されます。CANバス上のビットオーダは、MSBファーストでビット7から送信または受信されます。

25.1.7.7 TSL, TSH

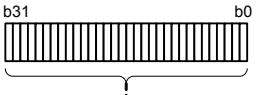
受信メッセージがメールボックスに取り込まれたときのタイムスタンプカウンタ値を格納します。

25.1.8　CAN0メールボックス割り込み許可レジスタ(C0MIERレジスタ)

CAN0メールボックス割り込み許可レジスタ(注1、2)

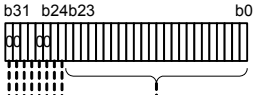
シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MIER	47E2Fh-47E2Ch番地	不定

通常メールボックスモード



ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b31-b0)	割り込み許可ビット	0: 割り込み禁止 1: 割り込み許可	RW

FIFOメールボックスモード



ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b23-b0)	割り込み許可ビット	0: 割り込み禁止 1: 割り込み許可	RW
— (b24)	送信FIFO割り込み許可ビット	0: 割り込み禁止 1: 割り込み許可	RW
— (b25)	送信FIFO割り込み発生タイミング制御ビット	送信FIFO割り込み要求は、 0: 毎回の送信完了後発生 1: 送信完了によって送信FIFOが空になったとき発生	RW
— (b27-b26)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b28)	受信FIFO割り込み許可ビット	0: 割り込み禁止 1: 割り込み許可	RW
— (b29)	受信FIFO割り込み発生タイミング制御ビット	受信FIFO割り込み要求は 0: 毎回の受信完了後発生 1: 受信完了によって受信FIFOがバッファワーニングになったとき発生 (注3)	RW
— (b31-b30)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. C0MIERレジスタは、関連するC0MCTLjレジスタ (j=0~31) が“00h”で、対応するメールボックスが送受信アボートの処理をしていないときにのみ変更してください。
注2. 関連するFIFOのC0MIERレジスタのビットは、FIFOメールボックスモードの場合、C0TFCRレジスタのTFEビットが“0”でTFESTビットが“1”、C0RFCRレジスタのRFEビットが“0”でRFESTビットが“1”のときにのみ変更してください。
注3. 受信FIFOがフルからバッファワーニングとなった場合、割り込み要求は発生しません。

図 25.9　C0MIERレジスタ

メールボックスは個別に割り込み許可を設定できます。

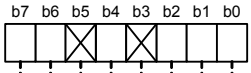
通常メールボックスモード(ビット0~31)とFIFOメールボックスモード(ビット0~23)では、それぞれのビットは同じ番号のメールボックスに対応します。これらのビットは、対応するメールボックスの送信完了/受信完了割り込みを許可/禁止します。

FIFOメールボックスモードのビット24、25、28、29は送信/受信FIFO割り込みの許可/禁止と割り込み要求が発生するタイミングを指定します。

バッファワーニングとは、受信FIFOに3つ目のメッセージが格納された状態です。

25.1.9 CAN0メッセージ制御レジスタj (C0MCTLjレジスタ) (j=0~31)

CAN0メッセージ制御レジスタj (j=0~31) (注1、2)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MCTL0~C0MCTL31	47F20h~47F3Fh番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TRMREQビットが“0”、RECREQビットが“1”の場合			
NEWDATA	受信完了フラグ　(注3、4)	0: データが受信されていない、またはNEWDATAビットに“0”を書いた場合 1: 新しいメッセージをメールボックスに格納中、または格納された	RW
INVALDATA	受信中ステータスフラグ	0: メッセージは有効 1: メッセージ更新中	RO
MSGLOST	メッセージロストフラグ (注3、4)	0: メッセージはオーバライトまたはオーバランされていない 1: メッセージはオーバライトまたはオーバランされた	RW
TRMREQビットが“1”、RECREQビットが“0”の場合			
SENTDATA	送信完了フラグ　(注3、4)	0: 送信が終了していない (ペンディングの場合) 1: 送信完了 (成功)	RW
TRMACTIVE	送信中ステータスフラグ	0: 送信待機中、または送信要求なし 1: 送信要求の取り込みから、送信完了、エラー発生またはアービトレーションロスト発生まで	RO
TRMABT	送信アボート完了フラグ (注3、4)	0: 送信が開始された、または送信アボートが送信完了により失敗、または送信アボートが要求されていない 1: 送信アボート完了	RW
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は“0”		—
ONESHOT	ワンショット許可ビット (注5)	0: ワンショット受信、およびワンショット送信禁止 1: ワンショット受信またはワンショット送信許可	RW
— (b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は“0”		—
RECREQ	受信メールボックス設定ビット　(注4、6、7)	0: 受信メールボックスに設定しない 1: 受信メールボックスに設定する	RW
TRMREQ	送信メールボックス設定ビット　(注4、6)	0: 送信メールボックスに設定しない 1: 送信メールボックスに設定する	RW

注1. C0MCTLjレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。
注2. FIFOメールボックスモードでは、C0MCTL24~C0MCTL31レジスタは使用しないでください。
注3. “0”のみ書けます (“1”を書いても変化しません)。
注4. NEWDATA、SENTDATA、MSGLOST、TRMABT、RECREQ、およびTRMREQビットにプログラムで“0”を書く場合は、MOV命令を使用し、“0”にしたいビットを“0”、そうでないビットを“1”にしてください。
注5. ワンショット受信モードに移行するときは、RECREQビットを“1”にするのと同時に、ONESHOTビットに“1”を書いてください。ワンショット受信モードを解除するときは、RECREQビットに“0”を書いた後、“0”になったことを確認してからONESHOTビットに“0”を書いてください。
ワンショット送信モードに移行するときは、TRMREQビットを“1”にするのと同時に、ONESHOTビットに“1”を書いてください。ワンショット送信モードを解除するときは、メッセージが送信されたか中止された後にONESHOTビットに“0”を書いてください。
注6. RECREQビットとTRMREQビットの両方を“1”にしないでください。
注7. RECREQビットを“0”にするときには、NEWDATA、MSGLOSTビットとRECREQビットは同時に“0”にしてください。

図 25.10 C0MCTLjレジスタ

25.1.9.1 NEWDATAビット

メールボックスに新しいメッセージを格納中または格納が完了したときに、“1”になります。“1”になるタイミングは、INVALDATAビットと同時です。

プログラムで“0”を書くと“0”になります。

関連するINVALDATAビットが“1”の間は、NEWDATAビットはプログラムで“0”を書いても“0”になりません。

25.1.9.2 SENTDATAビット

対応するメールボックスからのデータ送信が完了すると“1”になります。

プログラムで“0”を書くと“0”になります。

“0” にする場合は、TRMREQ ビットを “0” にしてから SENTDATA ビットを “0” にしてください。SENTDATAビットとTRMREQビットは同時に“0”になりません。

メールボックスから新しいメッセージを送信するには、SENTDATAビットを“0”にしてください。

25.1.9.3 INVALDATAビット

メッセージの受信完了後、受信したメッセージをメールボックスに更新中に“1”になります。

メッセージの格納完了時点で“0”になります。INVALDATAビットが“1”の間にメールボックスを読んだ場合、データは不定値になります。

25.1.9.4 TRMACTIVEビット

CANモジュールから対応するメールボックスのメッセージ送信を開始すると“1”になります。

CANモジュールがCANバスアービトレーションに負けるか、CANバスエラーが起こるか、あるいはデータ送信が完了すると、“0”になります。

25.1.9.5 MSGLOSTビット

NEWDATAビットが“1”の間、メールボックスが新しい受信メッセージによってメッセージが上書きされたり破棄された場合、“1”になります。EOFの6番目のビットの終わりで“1”になります。

プログラムで“0”を書くと“0”になります。

オーバライトモードとオーバランモードの両方において、EOF の 6 番目のビットに続く fCAN (CAN システムクロック) の 5 サイクルの間は、MSGLOST ビットはプログラムで“0”を書いても“0”になりません。

25.1.9.6 TRMABTビット

以下の場合、“1”になります。

- 送信アボート要求に続いて、送信を開始する前に送信アボートが完了する
- 送信アボート要求に続いて、CANモジュールがCANバスアービトレーション負けまたはCANバスエラーを検出した場合
- ワンショット送信モード(RECREQビットが“0”、TRMREQビットが“1” 、ONESHOTビットが“1”)で、CANモジュールがCANバスアービトレーション負けまたはCANバスエラーを検出した場合

データ送信が完了すると“1”にはなりません。データ送信が完了した場合はSENTDATAビットが“1”になります。

プログラムで“0”を書くと“0”になります。

25.1.9.7 ONESHOTビット

ONESHOTビットは受信モードと送信モードの2つの使い方があります。

(1) ワンショット受信モード

受信モード(RECREQビットが“1”、TRMREQビットが“0”)のときONESHOTビットを“1”にすると、メールボックスはメッセージを1回のみ受信します(メッセージの受信が1回完了した後は、受信メールボックスとして動作しません)。NEWDATAおよびINVALDATAビットの動作は、通常の受信モードと同じです。このモードでは、MSGLOSTビットは“1”にはなりません。

ONESHOTビットを“0”にする場合、RECREQビットへ“0”を書いた後、RECREQビットが“0”になったことを確認してから行ってください。

(2) ワンショット送信モード

送信モード(RECREQビットが“0”、TRMREQビットが“1”)のときONESHOTビットを“1”にすると、CANモジュールはメッセージを1回のみ送信します(CANバスエラーまたはCANバスアービトレーション負けの場合でも、メッセージの再送信を行いません)。送信が完了すると、SENTDATAビットが“1”になります。CANバスエラーまたはCANバスアービトレーション負けによって送信が完了できなかったときは、TRMABTビットが“1”になります。

ONESHOTビットを“0”にする場合、SENTDATAビットが“1”、またはTRMABTビットが“1”になってから行ってください。

25.1.9.8 RECREQビット

表25.11に示す受信モードを選択します。

“1”にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの受信に設定されます。

“0”にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの受信に設定されません。

以下の期間は、ハードウェアプロテクトがかかり、プログラムで“0”を書いても“0”になりません。

ハードウェアプロテクトの開始

- アクセプタンスフィルタ処理の開始(CRCフィールドの始まり)

ハードウェアプロテクトの解除

- メッセージの受信に指定されたメールボックスは、受信メッセージがメールボックスに格納された後、またはCANバスエラーが発生した後(すなわち、ハードウェアプロテクトの最大期間はCRCフィールドの始まりからEOFの7番目のビットの終わりまで)
- その他のメールボックスは、アクセプタンスフィルタ処理後
- 受信するメールボックスがない場合は、アクセプタンスフィルタ処理後

RECREQビットを“1”にする場合は、TRMREQビットを“1”にしないでください。

メールボックスの設定を送信から受信に変更する場合は、受信に変更する前に、まず送信をアボートし、そしてSENTDATAビットとTRMABTビットを“0”にしてください。

25.1.9.9 TRMREQビット

表25.11に示す送信モードを選択します。

“1”にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの送信に設定されます。

“0”にすると、対応するメールボックスはデータフレームまたはリモートフレームの送信に設定されません。

送信要求をキャンセルするために、TRMREQビットを“1”から“0”に変更すると、TRMABTビットまたはSENTDATAビットが“1”になります。

TRMREQビットを“1”にする場合は、RECREQビットを“1”にしないでください。

メールボックスの設定を受信から送信に変更する場合は、送信に変更する前に、まず受信をアボートし、そしてNEWDATAビットとMSGLOSTビットを“0”にしてください。

25.1.10 CAN0受信FIFO制御レジスタ(C0RFCRレジスタ)

CAN0受信FIFO制御レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0RFCR	47F48h番地	1000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RFE	受信FIFO許可ビット (注2)	0: 受信FIFO禁止 1: 受信FIFO許可	RW
RFUST	受信FIFO未読メッセージ数ステータスフラグ	b3 b2 b1 0 0 0 : 未読メッセージなし 0 0 1 : 未読メッセージ1件あり 0 1 0 : 未読メッセージ2件あり 0 1 1 : 未読メッセージ3件あり 1 0 0 : 未読メッセージ4件あり 1 0 1 : 1 1 0 : } 予約 1 1 1 :	RO
RFMLF	受信FIFOメッセージロストフラグ (注3)	0: 受信FIFOメッセージロスト未発生 1: 受信FIFOメッセージロスト発生	RW
RFFST	受信FIFOフルステータスフラグ	0: 受信FIFOはフルではない 1: 受信FIFOはフル (未読メッセージ4件)	RO
RFWST	受信FIFOバッファワーニングステータスフラグ	0: 受信FIFOはバッファワーニングではない 1: 受信FIFOはバッファワーニング (未読メッセージ3件)	RO
RFEST	受信FIFO空ステータスフラグ	0: 受信FIFOに未読メッセージあり 1: 受信FIFOに未読メッセージなし	RO

注1. C0RFCRレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。
注2. RFEビットを“0”にするときは、RFMLFビットも同時に“0”にしてください。
注3. “0”のみ書けます(“1”を書いても変化しません)。

図 25.11 C0RFCRレジスタ

25.1.10.1 RFEビット

“1” にすると、受信FIFOが受信許可になります。
“0” にすると、受信 FIFOは受信禁止になり、空(RFESTビットが“1”)になります。
通常メールボックスモード(C0CTLRレジスタのMBMビットが“0”)では、“1”にしないでください。
以下の期間は、ハードウェアプロテクトがかかり、プログラムで“0”を書いても“0”になりません。
ハードウェアプロテクトの開始
- アクセプタンスフィルタ処理の開始(CRCフィールドの始まり)

ハードウェアプロテクトの解除
- メッセージの受信に受信FIFOが指定された場合は、受信メッセージが受信FIFOに格納された後、またはCANバスエラーが発生した後(すなわち、ハードウェアプロテクトの最大期間はCRCフィールドの始まりからEOFの7番目のビットの終わりまで)
- メッセージの受信に受信FIFOが指定されない場合は、アクセプタンスフィルタ処理後

25.1.10.2 RFUSTビット

受信 FIFO内の未読メッセージの数を示します。
RFEビットを“0”にすると、“000b”に初期化されます。

25.1.10.3 RFMLFビット

受信FIFOがフルのときに新しいメッセージを受信すると、“1” (受信FIFOメッセージロスト発生)になります。“1”になるタイミングは、EOFの6番目のビットの終わりです。
プログラムで“0”を書くと“0”になります。
オーバランモードとオーバライトモードのどちらも、受信FIFOがフルでメッセージの受信が決定している場合、ハードウェアプロテクトによりEOFの6番目のビットに続くfCAN (CANシステムクロック)の5サイクルの間は、プログラムで“0” (受信FIFOメッセージロスト未発生)になりません。

25.1.10.4 RFFSTビット

受信 FIFO内の未読メッセージが4件になると、“1” (受信FIFOはフル)になります。受信FIFO内の未読メッセージが4件未満になると、“0” (受信FIFOはフルではない)になります。RFEビットを“0”にすると、“0”になります。

25.1.10.5 RFWSTビット

受信 FIFO内の未読メッセージが3件になると、“1” (受信FIFOはバッファワーニング)になります。受信FIFO内の未読メッセージが3件未満もしくは4件になると“0” (受信FIFOはバッファワーニングではない)になります。RFEビットを“0”にすると、“0”になります。

25.1.10.6 RFESTビット

受信 FIFO内の未読メッセージがなくなると、“1” (受信FIFOに未読メッセージなし)になります。RFEビットを“0”にすると、“1”になります。受信FIFO内の未読メッセージが1件以上になると、“0” (受信FIFOに未読メッセージあり)になります。

図 25.12に受信FIFOメールボックスの動作を示します。

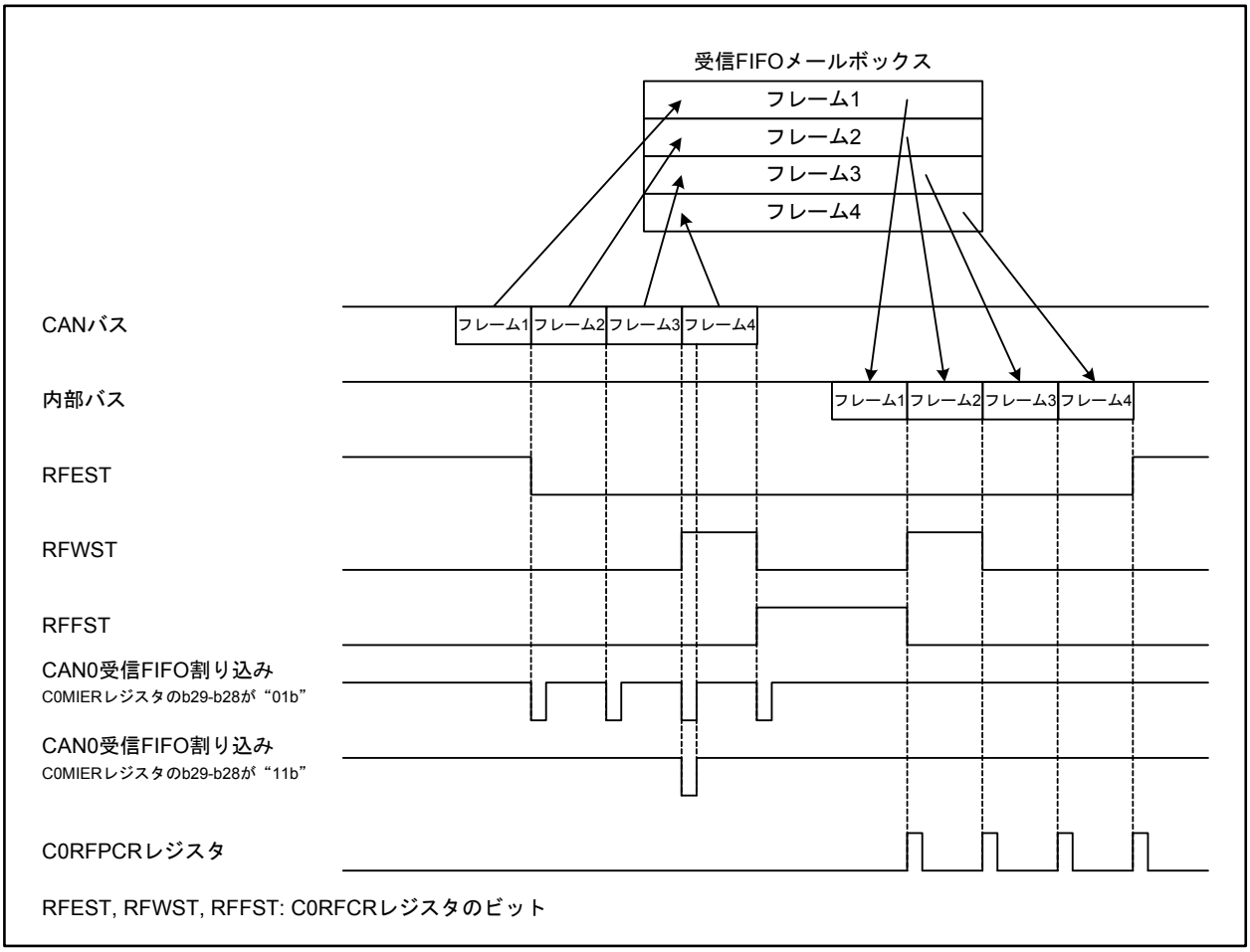


図 25.12 受信FIFOメールボックスの動作(C0MIERレジスタのb29-b28が“01b”または“11b”)

25.1.11　CAN0受信FIFOポインタ制御レジスタ(C0RFPCRレジスタ)

CAN0受信FIFOポインタ制御レジスタ

b7	b0	シンボル	アドレス	リセット後の値
		C0RFPCR	47F49h番地	不定

機　能	設定値	RW
FFhを書き込むと、受信FIFOのCPU側ポインタが移動	FFh	WO

図 25.13　C0RFPCRレジスタ

受信FIFOにメッセージが存在するとき、受信FIFOのCPU側ポインタを次のメールボックスに移動させるためには、プログラムで“FFh”を書いてください。

C0RFCRレジスタのRFEビットが“0”(受信FIFO禁止)のときは、書かないでください。

受信オーバライトモードでRFFSTビットが“1”(受信FIFOはフル)のときに新しいメッセージが受信されると、CAN側ポインタとCPU側ポインタの両方が移動します。この状態で、RFMLFビットが“1”のとき、プログラムでC0RFPCRレジスタに書き込んでもCPU側ポインタは移動しません。

25.1.12 CAN0送信FIFO制御レジスタ(C0TFCRレジスタ)

CAN0送信FIFO制御レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
		0	X				

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0TFCR	47F4Ah番地	1000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TFE	送信FIFO許可ビット	0: 送信FIFO禁止 1: 送信FIFO許可	RW
TFUST	送信FIFO未送信メッセージ数ステータスビット	b3 b2 b1 0 0 0 : 未送信メッセージなし 0 0 1 : 未送信メッセージ1件 0 1 0 : 未送信メッセージ2件 0 1 1 : 未送信メッセージ3件 1 0 0 : 未送信メッセージ4件 1 0 1 : 1 1 0 : } 予約 1 1 1 :	RO
— (b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—
— (b5)	予約ビット	書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定	RO
TFFST	送信FIFOフルステータスビット	0: 送信FIFOはフルではない 1: 送信FIFOはフル (未送信4件)	RO
TFEST	送信FIFO空ステータスビット	0: 送信FIFOに未送信メッセージあり 1: 送信FIFOに未送信メッセージなし	RO

注1. C0TFCRレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

図 25.14 C0TFCRレジスタ

25.1.12.1 TFEビット

“1”にすると、送信FIFOが送信許可になります。

“0”にすると、送信FIFOは空(TFESTビットが“1”)になり、以下のように送信FIFOからの未送信メッセージが失われます。

- 送信FIFOからの次の送信予定がなく、また送信中でもないとき、空になります
- 送信FIFOからの次の送信予定があるかまたはすでに送信中の場合、送信完了、CANバスエラー、アービトレーション負け、またはCAN Haltモードへの遷移に続いて空になります

再度“1”にする前に、TFESTビットが“1”になっているか確認してください。

“1”にした後、送信データをC0MB24レジスタに書いてください。

通常メールボックスモード(C0CTLRレジスタのMBMビットが“0”)では、“1”にしないでください。

25.1.12.2 TFUSTビット

送信FIFO内の未送信メッセージの数を示します。

TFEビットを“0”にした後、送信アボートが完了、または送信が完了すると、“000b”になります。

25.1.12.3 TFFSTビット

送信FIFO内の未送信メッセージが4件になると、“1”(送信FIFOはフル)になります。送信FIFO内の未送信メッセージが4件未満になると、“0”(送信FIFOはフルではない)になります。送信FIFOの送信アボートが完了すると、“0”になります。

25.1.12.4 TFESTビット

送信FIFO内の未送信メッセージがなくなると、“1”(送信FIFOにメッセージなし)になります。送信FIFOの送信アボートが完了すると、“1”になります。

送信FIFO内の未送信メッセージが1件以上になると、“0”(送信FIFOにメッセージあり)になります。

図25.15に送信FIFOメールボックスの動作を示します。

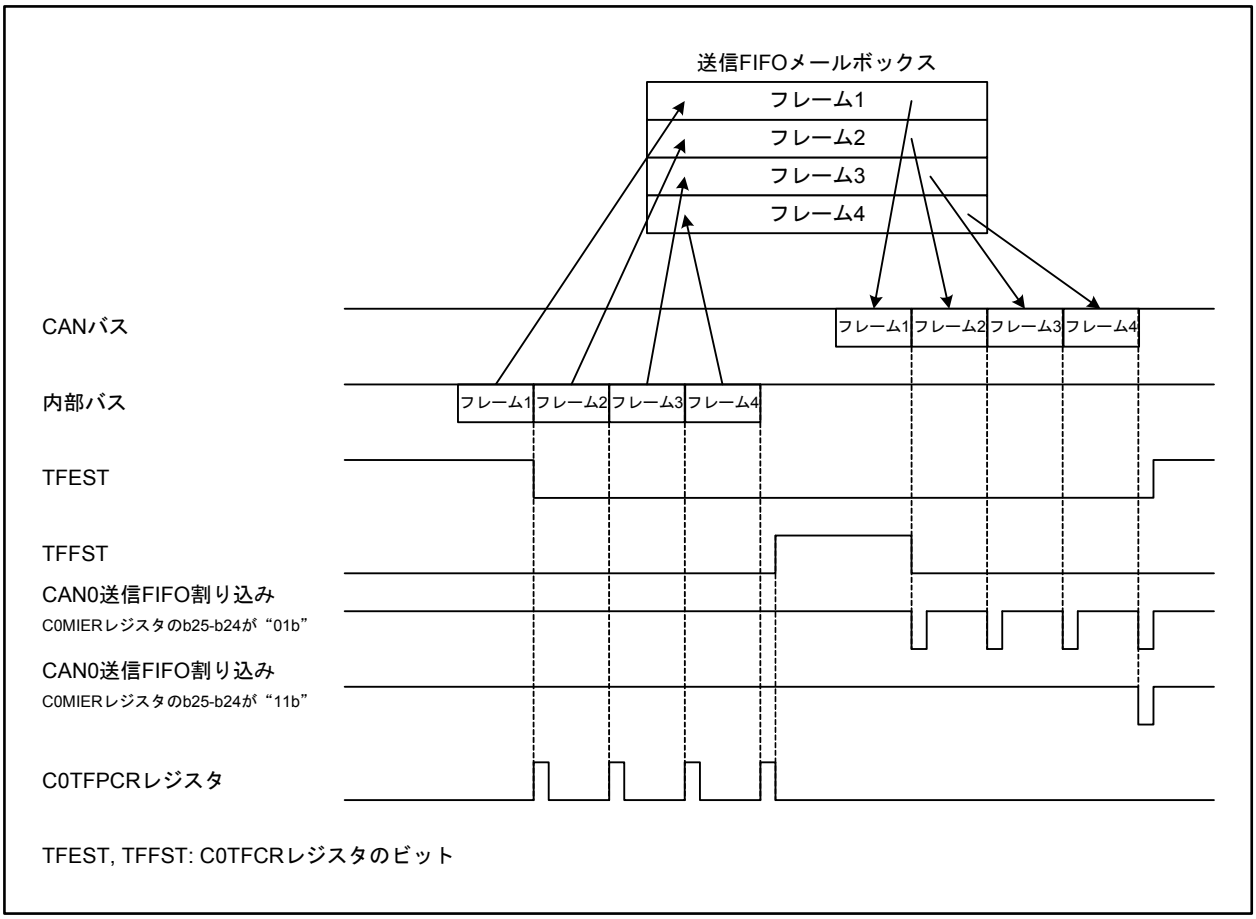


図25.15 送信FIFOメールボックスの動作(C0MIERレジスタのb25-b24が“01b”または“11b”)

25.1.13 CAN0送信FIFOポインタ制御レジスタ(C0TFPCRレジスタ)

CAN0送信FIFOポインタ制御レジスタ

b7	b0	シンボル	アドレス	リセット後の値
		C0TFPCR	47F4Bh番地	不定

機　能	設定値	RW
FFhを書き込むと、送信FIFOのCPU側ポインタが移動	FFh	WO

図 25.16 C0TFPCRレジスタ

送信FIFOがフルでないとき、送信FIFOのCPU側ポインタを次のメールボックスに移動させるためには、プログラムで“FFh”を書いてください。

C0TFCRレジスタのTFEビットが“0”(送信FIFO禁止)のときは、書かないでください。

25.1.14 CAN0ステータスレジスタ (C0STRレジスタ)

CAN0ステータスレジスタ

b15 b8 b7 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0STR	47F43h-47F42h番地	0000 0000 0000 0101b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RSTST	CANリセットステータスフラグ	0: CANリセットモードではない 1: CANリセットモード	RO
HLTST	CAN Haltステータスフラグ	0: CAN Haltモードではない 1: CAN Haltモード	RO
SLPST	CANスリープステータスフラグ	0: CANスリープモードではない 1: CANスリープモード	RO
EPST	エラーパッシブステータスフラグ	0: エラーパッシブ状態ではない 1: エラーパッシブ状態	RO
BOST	バスオフステータスフラグ	0: バスオフ状態ではない 1: バスオフ状態	RO
TRMST	送信ステータスフラグ (transmitter)	0: バスアイドルまたは受信中 1: 送信中またはバスオフ状態	RO
RECST	受信ステータスフラグ (receiver)	0: バスアイドルまたは送信中 1: 受信中	RO
— (b7)	何も配置されていない。 読んだ場合、その値は“0”		—
NDST	NEWDATAステータスフラグ	0: NEWDATAビットが“1”のメールボックスなし 1: NEWDATAビットが“1”のメールボックスあり	RO
SDST	SENTDATAステータスフラグ	0: SENTDATAビットが“1”のメールボックスなし 1: SENTDATAビットが“1”のメールボックスあり	RO
RFST	受信FIFOステータスフラグ	0: 受信FIFOにメッセージなし(空) 1: 受信FIFOにメッセージあり	RO
TFST	送信FIFOステータスフラグ	0: 送信FIFOはフル 1: 送信FIFOはフルではない	RO
NMLST	通常メールボックスメッセージロストステータスフラグ	0: MSGLOSTビットが“1”のメールボックスなし 1: MSGLOSTビットが“1”のメールボックスあり	RO
FMLST	FIFOメールボックスメッセージロストステータスフラグ	0: RFMLFビットが“0” 1: RFMLFビットが“1”	RO
TABST	送信アボートステータスフラグ	0: TRMABTビットが“1”のメールボックスなし 1: TRMABTビットが“1”のメールボックスあり	RO
EST	エラーステータスフラグ	0: エラーなし 1: エラー発生	RO

図 25.17 C0STRレジスタ

25.1.14.1 RSTSTビット

CANリセットモードになると、“1”になります。
CANリセットモード以外になると、“0”になります。
CANリセットモードからCANスリープモードに遷移しても、“1”のままです。

25.1.14.2 HLTSTビット

CAN Haltモードになると、“1”になります。
CAN Haltモード以外になると、“0”になります。
CAN HaltモードからCANスリープモードに遷移しても、“1”のままです。

25.1.14.3 SLPSTビット

CANスリープモードになると、“1”になります。
CANスリープモード以外になると、“0”になります。

25.1.14.4 EPSTビット

C0TECRまたはC0RECRレジスタの値が127を超えて、CANモジュールがエラーパッシブ状態(128≦TEC＜256または128≦REC＜256)になると、“1”になります。エラーパッシブ状態以外になると、“0”になります。

TECは送信エラーカウンタ(C0TECRレジスタ)、RECは受信エラーカウンタ(C0RECRレジスタ)の値です。

25.1.14.5 BOSTビット

C0TECRレジスタの値が255を超えて、CANモジュールがバスオフ状態(TEC≧256)になると、“1”になります。バスオフ状態以外になると、“0” になります。

25.1.14.6 TRMSTビット

CANモジュールが送信ノードかバスオフ状態になると、“1”になります。受信ノードかバスアイドル状態になると、“0”になります。

25.1.14.7 RECSTビット

CAN モジュールが受信ノードになると、“1” になります。送信ノードかバスアイドル状態になると、“0”になります。

25.1.14.8 NDSTビット

C0MCTLjレジスタ(j=0~31)のNEWDATAビットが1つでも“1”になると、C0MIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

NEWDATAビットがすべて“0”になると、“0”になります。

25.1.14.9 SDSTビット

C0MCTLjレジスタ(j=0~31)のSENTDATAビットが1つでも“1”になると、C0MIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

SENTDATAビットがすべて“0”になると、“0”になります。

25.1.14.10 RFSTビット

受信FIFOにメッセージが存在すると、“1”になります。

受信FIFOが空になると、“0”になります。

通常メールボックスモードになると、“0”になります。

25.1.14.11 TFSTビット

送信FIFOがフルでなくなると、“1”になります。

送信FIFOがフルになると、“0”になります。

通常メールボックスモードになると、“0”になります。

25.1.14.12 NMLSTビット

C0MCTLjレジスタのMSGLOSTビットが1つでも“1”になると、C0MIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

MSGLOSTビットがすべて“0”になると、“0”になります。

25.1.14.13 FMLSTビット

C0RFCRレジスタのRFMLFビットが“1”になると、C0MIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

RFMLFビットが“0”になると、“0”になります。

25.1.14.14 TABSTビット

C0MCTLjレジスタのTRMABTビットが1つでも“1”になると、C0MIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

TRMABTビットがすべて“0”になると、“0”になります。

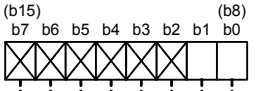
25.1.14.15 ESTビット

C0EIFRレジスタで1つでもエラーが検出されると、C0EIERレジスタの値とは無関係に“1”になります。

C0EIFRレジスタで1つもエラーが検出されないと、“0”になります。

25.1.15 CAN0メールボックスサーチモードレジスタ(C0MSMRレジスタ)

CAN0メールボックスサーチモードレジスタ(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MSMR	47F53h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MBSM	メールボックス検索モード選択ビット	b1 b0 0 0 : 受信メールボックス検索モード 0 1 : 送信メールボックス検索モード 1 0 : メッセージロスト検索モード 1 1 : チャネル検索モード	RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は“0”		—

注1. C0MSMRレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

図 25.18 C0MSMRレジスタ

25.1.15.1 MBSMビット

メールボックス検索機能のための検索モードを選択します。

“00b”の場合、受信メールボックス検索モードになります。このモードで検索対象となるビットは、C0MCTLjレジスタ(j=0~31)の通常メールボックスでのNEWDATAビットとC0RFCRレジスタのRFESTビットです。

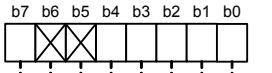
“01b”の場合、送信メールボックス検索モードになります。このモードで検索対象となるビットは、C0MCTLjレジスタのSENTDATAビットです。

“10b”の場合、メッセージロスト検索モードになります。このモードで検索対象となるビットは、C0MCTLjレジスタの通常メールボックスでのMSGLOSTビットとC0RFCRレジスタのRFMLFビットです。

“11b”の場合、チャネル検索モードになります。このモードで検索対象となるレジスタはC0CSSRレジスタです。「25.1.17 CAN0チャネルサーチサポートレジスタ(C0CSSRレジスタ)」を参照してください。

25.1.16 CAN0メールボックスサーチステータスレジスタ (C0MSSRレジスタ)

CAN0メールボックスサーチステータスレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0MSSR	47F52h番地	1000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
MBNST	検索結果メールボックス番号ステータスビット	各検索モードの検索結果を出力 出力番号: 0~31	RO
— (b6-b5)	何も配置されていない。読んだ場合、その値は“0”		—
SEST	検索結果ステータスビット	0: 検索結果あり 1: 検索結果なし	RO

図 25.19 C0MSSRレジスタ

25.1.16.1 MBNSTビット

C0MSMRレジスタの各モードで検索された、最小のメールボックス番号が出力されます。

受信メールボックス検索モード、送信メールボックス検索モード、およびメッセージロスト検索モードにより、出力される検索結果であるメールボックスの値は、以下の場合に更新されます。

- 出力されたメールボックスのNEWDATA、SENTDATA、またはMSGLOSTビットが“0”になる
- より優先順位の高いメールボックスのNEWDATA、SENTDATA、またはMSGLOSTビットが“1”になる

受信メールボックス検索モードおよびメッセージロスト検索モードのとき、受信FIFOにメッセージが存在し、すべての通常メールボックス(メールボックス[0]~[23])に未読の受信メッセージもロストメッセージもない場合、受信FIFO(メールボックス[28])が出力されます。

送信メールボックス検索モードのとき、送信FIFO(メールボックス[24])は出力されません。

表25.7にFIFOメールボックスモードでのMBNSTビットの動作を示します。

表25.7 FIFOメールボックスモードでのMBNSTビットの動作

MBSMビット	メールボックス[24] (送信FIFO)	メールボックス[28] (受信FIFO)
00b	メールボックス[24]は出力されない	通常メールボックスの、どのNEWDATAビットも“1”にならず、また受信FIFOにメッセージが存在する場合は、メールボックス[28]が出力される
01b		メールボックス[28]は出力されない
10b		通常メールボックスの、どのMSGLOSTビットも“1”にならず、受信FIFO内のRFMLFビットが“1”になると、メールボックス[28]が出力される
11b		メールボックス[28]は出力されない

チャネル検索モードでは、チャネル番号が出力されます。C0MSSRレジスタがプログラムで読み出された後に、次のターゲットチャネル番号が出力されます。

25.1.16.2 SESTビット

すべてのメールボックスの検索で該当するメールボックスがない場合、“1”(検索結果なし)になります。

例えば、送信メールボックス検索モードで、SENTDATAビットが“1”のメールボックスが1つもない場合“1”になり、1つでもある場合“0”になります。

SESTビットが“1”の場合、MBNSTビットの値は不定です。

25.1.17 CAN0チャネルサーチサポートレジスタ (C0CSSRレジスタ)

CAN0チャネルサーチサポートレジスタ(注1、2)

b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0CSSR	47F51h番地	不定

機　能	設定値	RW
チャネル検索の値が入力された場合、チャネル番号をC0MSSRレジスタに出力	チャネル値	RW

注1. C0CSSRレジスタは、C0MSMRレジスタのMBSMビットが“11b”(チャネル検索モード)のときのみ変更してください。
注2. C0CSSRレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

図 25.20 C0CSSRレジスタ

“1”が設定されたC0CSSRレジスタのビットは、8 to 3プライオリティエンコーダ(LSB側が優先)によってエンコードされ、C0MSSRレジスタのMBNSTビットに出力されます。

C0MSSRレジスタは、読むたびに値が更新されます。

図25.21にC0CSSR、C0MSSRレジスタの書き込みと読み出しを示します。

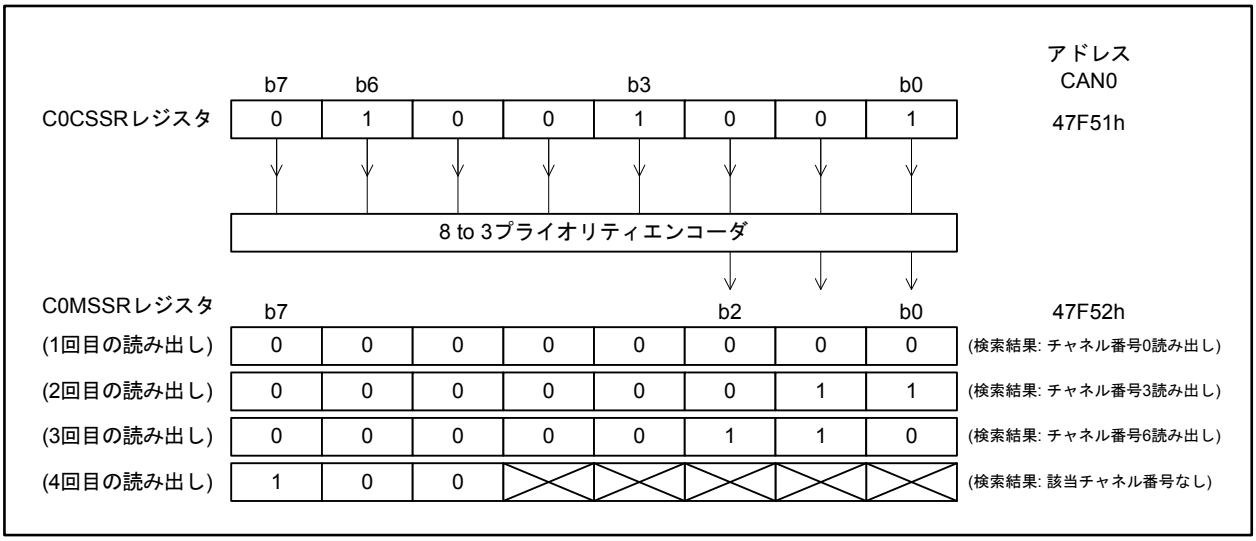
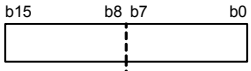


図 25.21 C0CSSR、C0MSSRレジスタの書き込みと読み出し

C0CSSRレジスタの値もC0MSSRレジスタを読み出す度に更新されます。読んだ場合、8 to 3プライオリティエンコーダ変換前の値が読めます。

25.1.18 CAN0アクセプタンスフィルタサポートレジスタ(C0AFSRレジスタ)

CAN0アクセプタンスフィルタサポートレジスタ(注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
C0AFSR	47F57h-47F56h番地	不定

機　能	設定値	RW
受信メッセージの標準IDを書いた後に、データテーブル検索用に変換された値を読み出せます	標準ID/変換値	RW

注1. C0AFSRレジスタは、CANオペレーションモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。

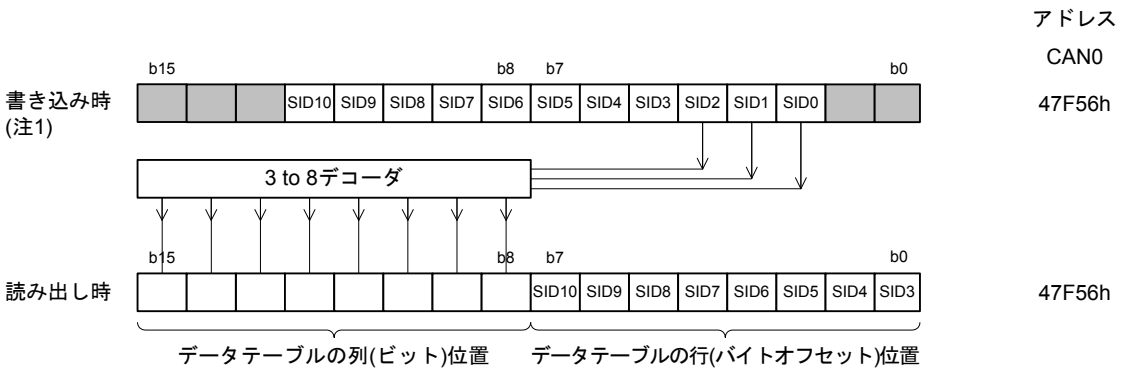
図 25.22 C0AFSRレジスタ

アクセプタンスフィルタサポートユニット(ASU)は、あらかじめユーザにより作成された全標準IDが有効か無効かを1ビット単位で設定したデータテーブル(8ビット×256)の検索に使用できます。受信した標準IDが格納されたC0MBjレジスタ(j=0~31)のSIDビットを含む16ビット単位のデータをC0AFSRレジスタへ書くと、デコードされたデータテーブル検索用の行(バイトオフセット)位置と列(ビット)位置が読み出せます。ASUは、標準(11ビット)IDのみに使用できます。

ASUは、以下の場合に有効です。

- 受信するIDがアクセプタンスフィルタでマスクできない場合
  例)受信するID: 078h、087h、111h
- 受信するIDが多すぎて、ソフトウェアによるフィルタリングの処理時間を減少させたい場合

図25.23にC0AFSRレジスタの書き込み、読み出しを示します。



注1. C0MBjレジスタのSIDビットを含む16ビット単位のデータと同じ値を書き込みます。

図 25.23 C0AFSRレジスタの書き込み、読み出し、j=0~31

25.1.19 CAN0エラー割り込み許可レジスタ(C0EIERレジスタ)

CAN0エラー割り込み許可レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0EIER	47F4Ch番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BEIE	バスエラー割り込み許可ビット	0: バスエラー割り込み禁止 1: バスエラー割り込み許可	RW
EWIE	エラーワーニング割り込み許可ビット	0: エラーワーニング割り込み禁止 1: エラーワーニング割り込み許可	RW
EPIE	エラーパッシブ割り込み許可ビット	0: エラーパッシブ割り込み禁止 1: エラーパッシブ割り込み許可	RW
BOEIE	バスオフ開始割り込み許可ビット	0: バスオフ開始割り込み禁止 1: バスオフ開始割り込み許可	RW
BORIE	バスオフ復帰割り込み許可ビット	0: バスオフ復帰割り込み禁止 1: バスオフ復帰割り込み許可	RW
ORIE	受信オーバラン割り込み許可ビット	0: 受信オーバラン割り込み禁止 1: 受信オーバラン割り込み許可	RW
OLIE	オーバロードフレーム送信割り込み許可ビット	0: オーバロードフレーム送信割り込み禁止 1: オーバロードフレーム送信割り込み許可	RW
BLIE	バスロック割り込み許可ビット	0: バスロック割り込み禁止 1: バスロック割り込み許可	RW

注1. C0EIERレジスタは、CANリセットモード時に変更してください。

図 25.24 C0EIERレジスタ

C0EIERレジスタは、C0EIFRレジスタのエラー割り込み要因に対して個別にエラー割り込みの許可/禁止を設定できます。

25.1.19.1 BEIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのBEIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、BEIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.2 EWIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのEWIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、EWIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.3 EPIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのEPIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、EPIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.4 BOEIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのBOEIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、BOEIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.5 BORIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのBORIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、BORIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.6 ORIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのORIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、ORIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.7 OLIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのOLIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、OLIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.19.8 BLIEビット

“0”にすると、C0EIFRレジスタのBLIFビットが“1”になっても、エラー割り込み要求は発生しません。
“1”にすると、BLIFビットが“1”になった場合、エラー割り込み要求が発生します。

25.1.20 CAN0エラー割り込み要因判定レジスタ (C0EIFRレジスタ)

CAN0エラー割り込み要因判定レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0EIFR	47F4Dh番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BEIF	バスエラー検出フラグ	0: バスエラー未検出 1: バスエラー検出	RW
EWIF	エラーワーニング検出フラグ	0: エラーワーニング未検出 1: エラーワーニング検出	RW
EPIF	エラーパッシブ検出フラグ	0: エラーパッシブ未検出 1: エラーパッシブ検出	RW
BOEIF	バスオフ開始検出フラグ	0: バスオフ開始未検出 1: バスオフ開始検出	RW
BORIF	バスオフ復帰検出フラグ	0: バスオフ復帰未検出 1: バスオフ復帰検出	RW
ORIF	受信オーバラン検出フラグ	0: 受信オーバラン未検出 1: 受信オーバラン検出	RW
OLIF	オーバロードフレーム送信検出フラグ	0: オーバロードフレーム送信未検出 1: オーバロードフレーム送信検出	RW
BLIF	バスロック検出フラグ	0: バスロック未検出 1: バスロック検出	RW

注1. 各ビットにプログラムで“0”を書く場合は、MOV命令を使用し、“0”にしたいビットを“0”、そうでないビットを“1”にしてください。“1”を書いてもこれらのビットの値は変化しません。

図 25.25 C0EIFRレジスタ

C0EIFRレジスタは、各ビットに対応する現象が発生すると、C0EIERレジスタの設定にかかわらず対応するビットが“1”になります。

各ビットを“0”にする場合は、プログラムで“0”を書いてください。“1”になるタイミングとプログラムで“0”にするタイミングが同時の場合、そのビットは“1”になります。

25.1.20.1 BEIFビット

バスエラーが検出されると、“1”になります。

25.1.20.2 EWIFビット

REC (受信エラーカウンタ) またはTEC (送信エラーカウンタ) の値が95を超えると、“1”になります。

REC または TEC が最初に95を超えたときのみ“1”になります。したがって、REC または TEC が95を超えたままで、プログラムで“0”を書いた場合、一度REC と TECが95以下になり、再びREC または TEC が95を超えるまでは“1”にはなりません。

25.1.20.3 EPIFビット

CANエラーステートがエラーパッシブ状態(RECまたはTECの値が127を超える)になると、“1”になります。

RECまたはTECが最初に127を超えたときのみ“1”になります。したがって、RECまたはTECが127を超えたままで、プログラムで“0”を書いた場合、一度RECとTECが127以下になり、再びRECまたはTECが127を超えるまでは“1”にはなりません。

25.1.20.4 BOEIFビット

CANエラーステートがバスオフ状態(TECの値が255を超える)になると、“1”になります。

C0CTLRレジスタのBOMビットが“01b”(バスオフ開始で自動的にCAN Haltモードへ遷移)で、CANモジュールがバスオフ状態になった場合も、“1”になります。

25.1.20.5 BORIFビット

CANモジュールが以下の条件でバスオフ状態から通常復帰(11の連続するレセシブビットを128回検出)をした場合、“1”になります。

(1) C0CTLRレジスタのBOMビットが“00b”のとき
(2) BOMビットが“10b”のとき
(3) BOMビットが“11b” のとき

なお、CANモジュールが以下の条件でバスオフ状態から復帰した場合、“1”になりません。

(1) C0CTLRレジスタのCANMビットを“01b”(CANリセットモード)にしたとき
(2) C0CTLRレジスタのRBOCビットを“1”(バスオフからの強制復帰)にしたとき
(3) BOMビットが“01b”のとき
(4) BOMビットが“11b”で、通常復帰をする前に、CANMビットを“10b”(CAN Haltモード)にしたとき

表25.8にBOMビットの設定値によるBOEIF、BORIFビットの動作を示します。

表25.8 BOMビットの設定値によるBOEIF、BORIFビットの動作

BOMビット	BOEIFビット	BORIFビット
00b	バスオフ状態への遷移時“1”になる	バスオフ状態からの復帰時“1”になる
01b		“1”にはならない
10b		バスオフ状態からの復帰時“1”になる
11b		CANMビットが“10b”(CAN Haltモード)になる前に、バスオフ状態から通常復帰をした場合“1”になる

25.1.20.6 ORIFビット

受信オーバランが発生すると、“1”になります。

オーバライトモードでは“1”になりません。オーバライトモードの場合、オーバライト条件が発生すると、受信完了割り込み要求が発生し、“1”にはなりません。

通常メールボックスモードの場合、オーバランモードで、メールボックス[0]~[31]のいずれかでオーバランが発生すると、“1”になります。

FIFOメールボックスモードの場合、オーバランモードで、メールボックス[0]~[23]のいずれかまたは受信FIFOでオーバランが発生すると、“1”になります。

25.1.20.7 OLIFビット

CANモジュールが受信または送信を行う場合にオーバロードフレームの送信条件が検出されると、“1”になります。

25.1.20.8 BLIFビット

CANモジュールがCANオペレーションモードの間、CANバス上に32の連続するドミナントビットを検出すると、“1”になります。

“1”になった後、以下のどちらかで再検出します。

- このビットを“1”から“0”にした後、レセシブビットを検出
- このビットを“1”から“0”にした後、CANリセットモードもしくはCAN Haltモードに遷移し、再度CANオペレーションモードに遷移

25.1.21 CAN0受信エラーカウントレジスタ(C0RECRレジスタ)

CAN0受信エラーカウントレジスタ

b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0RECR	47F4Eh番地	00h

機　能	カウンタ値	RW
受信エラーカウント機能 受信中のCANモジュールのエラー状態によってカウンタ値を増減させます	00h~FFh (注1)	RO

注1. バスオフ状態時の値は不定になります。

図 25.26 C0RECRレジスタ

C0RECRレジスタは、受信エラーカウンタの値を示します。
受信エラーカウンタの増減条件については、CAN仕様(ISO11898-1)を参照してください。

25.1.22 CAN0送信エラーカウントレジスタ (C0TECR レジスタ)

CAN0送信エラーカウントレジスタ

b7	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0TECR	47F4Fh番地	00h

機　能	カウンタ値	RW
送信エラーカウント機能 送信中のCANモジュールのエラー状態によってカウンタ値を増減させます	00h~FFh (注1)	RO

注1. バスオフ状態時の値は不定になります。

図 25.27 C0TECR レジスタ

C0TECR レジスタは、送信エラーカウンタの値を示します。
送信エラーカウンタの増減条件については、CAN仕様(ISO11898-1)を参照してください。

25.1.23 CAN0エラーコード格納レジスタ (C0ECSRレジスタ)

CAN0エラーコード格納レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0ECSR	47F50h番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
SEF	スタッフエラーフラグ (注1、2)	0: スタッフエラー未検出 1: スタッフエラー検出	RW
FEF	フォームエラーフラグ (注1、2)	0: フォームエラー未検出 1: フォームエラー検出	RW
AEF	ACKエラーフラグ (注1、2)	0: ACKエラー未検出 1: ACKエラー検出	RW
CEF	CRCエラーフラグ (注1、2)	0: CRCエラー未検出 1: CRCエラー検出	RW
BE1F	ビットエラー (レセシブ) フラグ (注1、2)	0: ビットエラー未検出 1: ビットエラー (レセシブ) 検出	RW
BE0F	ビットエラー (ドミナント) フラグ (注1、2)	0: ビットエラー未検出 1: ビットエラー (ドミナント) 検出	RW
ADEF	ACKデリミタエラーフラグ (注1、2)	0: ACKデリミタエラー未検出 1: ACKデリミタエラー検出	RW
EDPM	エラー表示モード選択ビット (注3)	0: 最初に検出されたエラーコードを出力 (注4) 1: 蓄積したエラーコードを出力	RW

注1. “1”を書いてもこれらのビットの値は変化しません。
注2. SEF、FEF、AEF、CEF、BE1F、BE0F、およびADEFビットにプログラムで“0”を書く場合は、MOV命令を使用し、“0”にしたいビットを“0”、そうでないビットを“1”にしてください。
注3. EDPMビットは、CANリセットモードまたはCAN Haltモード時に変更してください。
注4. 同時に2つ以上のエラーが検出された場合は、該当するすべてのビットが“1”になります。

図 25.28 C0ECSRレジスタ

C0ECSRレジスタは、CANバス上のエラーの発生をモニタリングする場合に使用できます。
各エラーの発生条件を確認するには、CAN仕様(ISO11898-1)を参照してください。
EDPMビット以外の各ビットを“0”にする場合は、プログラムで“0”を書いてください。各ビットが“1”になるタイミングとプログラムで“0”を書くタイミングが同じ場合、そのビットは“1”になります。

25.1.23.1 SEFビット

スタッフエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.2 FEFビット

フォームエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.3 AEFビット

ACKエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.4 CEFビット

CRCエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.5 BE1Fビット

レセシブビットエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.6 BE0Fビット

ドミナントビットエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.7 ADEFビット

送信中のACKデリミタでフォームエラーを検出すると“1”になります。

25.1.23.8 EDPMビット

C0ECSRレジスタの出力モードを選択します。
“0”にすると、C0ECSRレジスタは最初のエラーコードを出力します。
“1”にすると、C0ECSRレジスタは蓄積したエラーコードを出力します。

25.1.24 CAN0タイムスタンプレジスタ(C0TSRレジスタ)

CAN0タイムスタンプレジスタ(注1)

b15　b8 b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0TSR	47F55h-47F54h番地	0000h

機　能	カウンタ値	RW
タイムスタンプ機能のためのフリーランカウンタ値	0000h~FFFFh	RO

注1. 読み出しは16ビット単位で実行してください。

図 25.29 C0TSRレジスタ

C0TSRレジスタを読むと、その時点のタイムスタンプカウンタ(16ビットフリーランカウンタ)の値が読み出せます。

タイムスタンプカウンタの基準クロックの値は1ビットタイムを逓倍したもので、 C0CTLRレジスタのTSPSビットで設定します。

タイムスタンプカウンタは、CANスリープモードおよびCAN Haltモードで停止し、CANリセットモードで初期化されます。

受信メッセージが受信メールボックスに格納されるときのタイムスタンプカウンタの値がC0MBjレジスタ(j=0~31)のTSL、TSHへ格納されます。

25.1.25 CAN0テスト制御レジスタ (C0TCRレジスタ)

CAN0テスト制御レジスタ(注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0	0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
C0TCR	47F58h番地	00h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
TSTE	CANテストモード許可ビット	0: CANテストモード禁止 1: CANテストモード許可	RW
TSTM	CANテストモード選択ビット	b2 b1 0 0 : CANテストモードでない 0 1 : リッスンオンリモード 1 0 : セルフテストモード0 (外部ループバック) 1 1 : セルフテストモード1 (内部ループバック)	RW
— (b7-b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. C0TCRレジスタは、CAN Haltモード時に変更してください。

図 25.30 C0TCRレジスタ

25.1.25.1 TSTEビット

“0”にすると、CANテストモードは禁止になります。
“1”にすると、CANテストモードは許可になります。

25.1.25.2 TSTMビット

CANテストモードを選択するビットです。
各CANテストモードの詳細を、以下に説明します。

25.1.25.3 リッスンオンリモード

CAN仕様(ISO11898-1)では、オプションのバスモニタモードが推奨されています。リッスンオンリモードでは、有効なデータフレームと有効なリモートフレームとを受信できます。CANバス上にはレセシブビットのみが送信され、ACKビット、オーバロードフラグ、アクティブエラーフラグは送信されません。

リッスンオンリモードは、ボーレート検出に使用できます。

リッスンオンリモードでは、どのメールボックスからも送信要求をしないでください。

図25.31にリッスンオンリモード選択時の接続を示します。

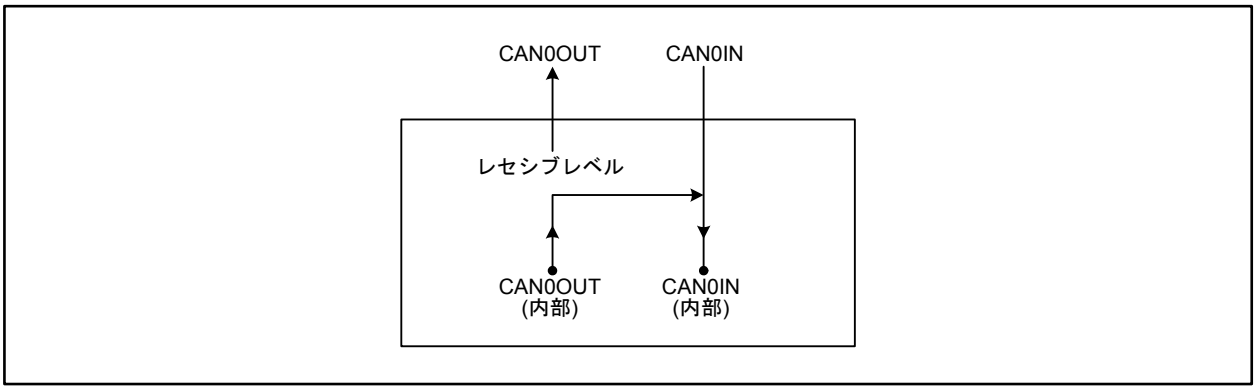


図25.31 リッスンオンリモード選択時の接続

25.1.25.4 セルフテストモード0(外部ループバック)

セルフテストモード0はCANトランシーバテスト用です。

セルフテストモード0では、送信したメッセージをCANトランシーバ経由で受信したメッセージとして取り扱い、送信したメッセージを受信メールボックスに格納します。外部から独立して行う機能のため、ACKビットを生成します。

CAN0OUT/CAN0IN端子はCANトランシーバに接続してください。

図25.32にセルフテストモード0選択時の接続を示します。

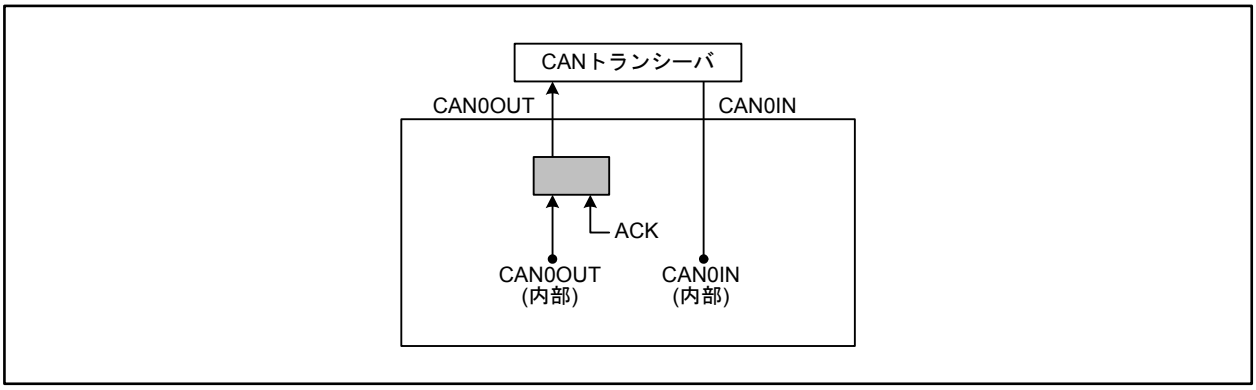


図25.32 セルフテストモード0選択時の接続

25.1.25.5 セルフテストモード1 (内部ループバック)

セルフテストモード1は、セルフテスト機能用です。

セルフテストモード1では、送信したメッセージを受信したメッセージとして取り扱い、送信したメッセージを受信メールボックスに格納します。外部から独立して行う機能のため、ACKビットを生成します。

セルフテストモード1では内部CAN0OUT端子から内部CAN0IN端子への内部フィードバックを行います。外部CAN0IN端子の入力の値は、無視されます。外部CAN0OUT端子はレセシブビットのみ出力します。CAN0OUT/CAN0IN端子はCANバスや他のどの外部デバイスにも接続する必要がありません。

図25.33にセルフテストモード1選択時の接続を示します。

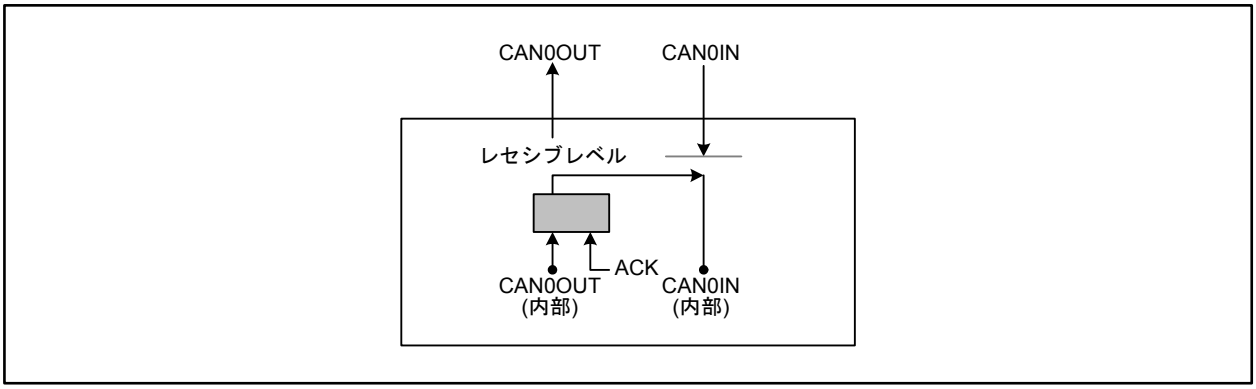


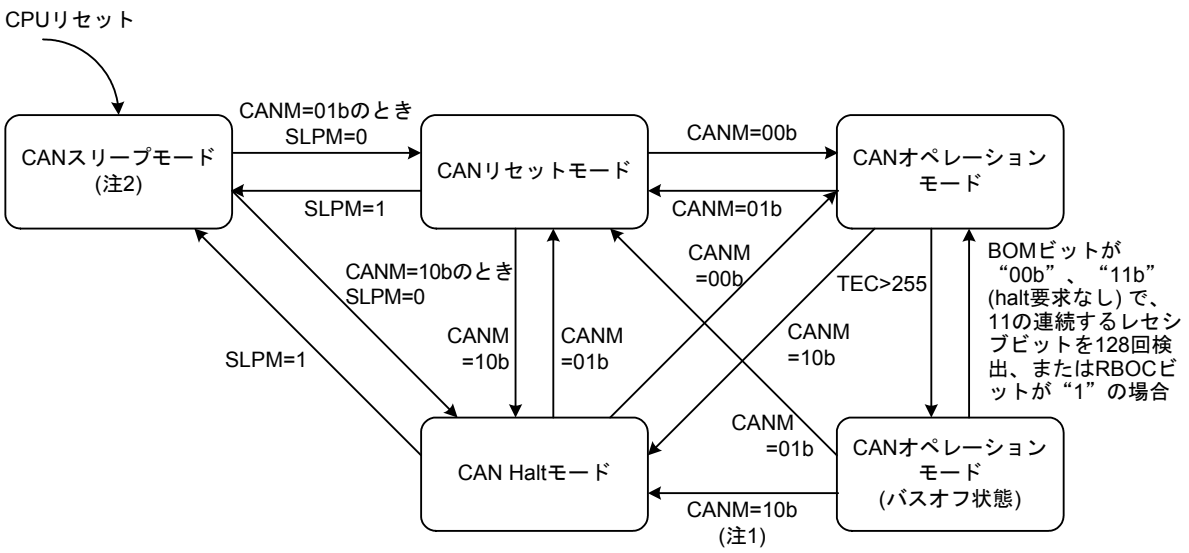
図 25.33 セルフテストモード1選択時の接続

25.2 動作モード

CANモジュールには、以下の4つの動作モードがあります。

- CANリセットモード
- CAN Haltモード
- CANオペレーションモード
- CANスリープモード

図 25.34にCAN動作モード間の遷移を示します。



CANM, SLPM, BOM, RBOC: C0CTLRレジスタのビット

注1. バスオフ状態からCAN Haltモードへの遷移タイミングは、BOMビットの設定に依存します。
BOMビットが“01b”のとき、状態遷移のタイミングはバスオフ状態への遷移直後になります。
BOMビットが“10b”のとき、状態遷移のタイミングはバスオフ状態終了時になります。
BOMビットが“11b”のとき、状態遷移のタイミングはCANMビットが“10b”(CAN Haltモード) の設定時になります。

注2. CANスリープモードを設定/解除する場合は、SLPMビットを変更してください。

図 25.34 CAN動作モード間の遷移

25.2.1 CANリセットモード

CANリセットモードは、CAN通信の設定を行うモードです。

C0CTLRレジスタのCANMビットを“01b”にすると、CANリセットモードになります。そのとき、C0STRレジスタのRSTSTビットが“1”になります。RSTSTビットが“1”になるまで、CANMビットを変更しないでください。

CANリセットモードから他のモードへ遷移する前に、C0BCRレジスタを設定してください。

以下のレジスタは、CANリセットモードに遷移した後、それぞれのリセット後の値に初期化され、CANリセットモード中は初期値を保持します。

- C0MCTLjレジスタ (j=0~31)
- C0STRレジスタ (SLPSTビットとTFSTビットを除く)
- C0EIFRレジスタ
- C0RECRレジスタ
- C0TECRレジスタ
- C0TSRレジスタ
- C0MSSRレジスタ
- C0MSMRレジスタ
- C0RFCRレジスタ
- C0TFCRレジスタ
- C0TCRレジスタ
- C0ECSRレジスタ (EDPMビットを除く)

以下のレジスタは、CANリセットモードに遷移した後も、以前の値を保持します。

- C0CLKRレジスタ
- C0CTLRレジスタ
- C0STRレジスタ (SLPSTビットとTFSTビット)
- C0MIERレジスタ
- C0EIERレジスタ
- C0BCRレジスタ
- C0CSSRレジスタ
- C0ECSRレジスタ (EDPMビットのみ)
- C0MBj レジスタ
- C0MKR0~C0MKR7レジスタ
- C0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタ
- C0MKIVLRレジスタ
- C0AFSRレジスタ
- C0RFPCRレジスタ
- C0TFPCRレジスタ

25.2.2 CAN Halt モード

CAN Halt モードは、メールボックスの設定とテストモードの設定を行うモードです。

C0CTLR レジスタのCANM ビットを“10b”にすると、CAN Haltモードになります。そのとき、C0STR レジスタのHLTST ビットが“1”になります。HLTST ビットが“1”になるまで、CANM ビットを変更しないでください。

送信または受信時の状態遷移の条件は、「表 25.9 CAN リセットモードと CAN Halt モードでの動作」を参照してください。

CAN Haltモードへの遷移では、C0STR レジスタのRSTST ビット、HLTST ビットおよびSLPST ビット以外のビットと他のすべてのレジスタは変化しません。

CAN Halt モードでは、C0CLKR レジスタ、C0CTLR レジスタ (CANM ビットと SLPM ビットを除く) およびC0EIER レジスタは変更しないでください。CANテストモードで、自動ボーレート検出として使用するためにリッスンオンリモードを選択している場合のみ、CAN HaltモードでC0BCR レジスタを変更できます。

表 25.9 CAN リセットモードと CAN Haltモードでの動作

モード	受信	送信	バスオフ
CAN リセットモード	メッセージ受信の終了を待たずにCAN リセットモードに遷移	メッセージ送信の終了を待ってCAN リセットモードに遷移 (注1、4)	バスオフ復帰の終了を待たずにCAN リセットモードに遷移
CAN Halt モード	メッセージ受信の終了を待ってCAN Haltモードに遷移 (注2、3)	メッセージ送信の終了を待ってCAN Haltモードに遷移 (注1、4)	【BOM ビットが“00b”の場合】 バスオフ復帰後のみ、プログラムのHalt要求を受け付ける 【BOM ビットが“01b”の場合】 バスオフ復帰の終了を待たずに自動的にCAN Haltモードに遷移 (プログラムのHalt要求とは無関係に) 【BOM ビットが“10b”の場合】 バスオフ復帰の終了を待って自動的にCAN Haltモードに遷移 (プログラムのHalt要求とは無関係に) 【BOM ビットが“11b”の場合】 バスオフ中にプログラムによるHalt要求があると、CAN Haltモードに遷移 (バスオフ復帰の終了を待たずに)

BOM ビット : C0CTLR レジスタのビット

注1. いくつかのメッセージ送信が要求されている場合、最初のメッセージ送信が完了した後にモードを遷移します。サスペンドトランスミッション中に CAN リセットモードが要求されている状態では、バスアイドルになったとき、次の送信が終了したとき、またはCANモジュールが受信になったときに、モードを遷移します。

注2. CANバスがドミナントレベルでロックされた場合、C0EIFR レジスタのBLIF ビットをモニタすると、プログラムはバスロック状態を検出できます。

注3. CAN Haltモードが要求された後、受信中にCANバスエラーが発生すると、CAN Haltモードに遷移します。

注4. CAN リセットモードまたはCAN Haltモードが要求された後、送信中にCANバスエラーまたはCANアービトレーションロストが発生すると、要求されたCAN モードに遷移します。

25.2.3 CANスリープモード

CANスリープモードは、CANモジュールへのクロック供給を停止することによって、消費電流を低減するためのモードです。MCUのリセット後は、CANスリープモードから動作を開始します。

C0CTLRレジスタのSLPMビットを“1”にすると、CANスリープモードになります。そのとき、C0STRレジスタのSLPSTビットが“1”になります。SLPSTビットが“1”になるまで、SLPMビットの値を変更しないでください。CANスリープモードへの遷移時は、他のレジスタは変化しません。

SLPMビットは、CANリセットモードとCAN Haltモードで変更してください。SLPMビットを除く他のレジスタは、CANスリープモード中は変更しないでください。読み出し動作は許可されます。

SLPMビットを“0”にすると、CANスリープモードから解除されます。CANスリープモードからの復帰時、他のレジスタは変化しません。

25.2.4 CANオペレーション モード(バスオフ状態以外)

CANオペレーションモードは、CAN通信をするモードです。

C0CTLRレジスタのCANMビットを“00b”にすると、CANオペレーションモードになります。そのとき、C0STRレジスタのRSTSTビットとHLTSTビットが“0”になります。RSTSTビットとHLTSTビットが“0”になるまで、CANMビットの値を変更しないでください。

CANオペレーションモードに遷移した後、11の連続するレセシブビットを検出すると、CANモジュールは以下の状態になります。

- CANモジュールは、通信が可能なネットワーク上でのアクティブノードとなり、CANメッセージの送受信が可能になる
- 受信エラーカウンタおよび送信エラーカウンタなど、CANバスのエラー監視処理が行われる

CANバスの状態によって、CANオペレーションモード中に、以下の3つのいずれかのサブモードになっています。

- アイドルモード: 送受信を行っていない状態です
- 受信モード: 他のノードが送信したCANメッセージを受信しています
- 送信モード: CANメッセージを送信しています。セルフテストモード0 (C0TCRレジスタのTSTMビットが“10b”)またはセルフテストモード1 (TSTMビットが“11b”)が選択されている場合、同時に自ノードが送信したメッセージを受信します

図25.35にCANオペレーションモードのサブモードを示します。

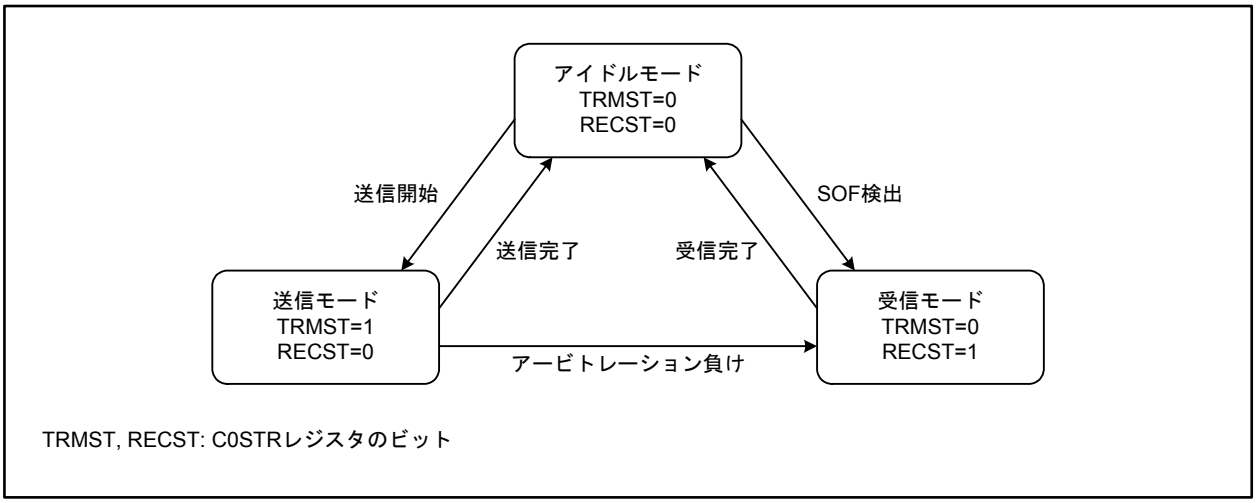


図 25.35 CANオペレーションモードのサブモード

25.2.5 CANオペレーションモード(バスオフ状態)

CAN仕様の送信、受信エラーカウンタの増減ルールに従って、バスオフ状態に遷移します。

バスオフ状態から復帰するには以下の場合があります。なお、バスオフ状態のとき、C0STR、C0EIFR、C0RECR、C0TECRおよびC0TSRレジスタを除く関連レジスタの値は変化しません。

(1) C0CTLRレジスタのBOMビットが“00b”の場合(ノーマルモード)

バスオフ状態からの復帰完了後、エラーアクティブ状態に遷移し、CAN通信ができるようになります。このとき、C0EIFRレジスタのBORIFビットが“1”(バスオフ復帰検出)になります。

(2) C0CTLR レジスタのRBOCビットを“1”にしたとき(バスオフからの強制復帰)

バスオフ状態になり、RBOCビットが“1”になると、エラーアクティブ状態に遷移し、11の連続するレセシブビットを検出した後、再びCAN通信ができるようになります。このとき、BORIFビットは“1”になりません。

(3) BOMビットが“01b”の場合(バスオフ開始で自動的にCAN Haltモードへ遷移)

バスオフ状態に達するとCAN Haltモードになります。このとき、BORIF ビットは“1”になりません。

(4) BOMビットが“10b”の場合(バスオフ終了で自動的にCAN Haltモードへ遷移)

バスオフからの復帰が完了するとCAN Haltモードになります。このとき、BORIF ビットは“1”になります。

(5) BOMビットが“11b”の場合(プログラムによりCAN Haltモードへ遷移)にバスオフ状態でC0CTLRレジスタのCANMビットを“10b”にしたとき(CAN Haltモード)

バスオフ状態時にCANMビットが“10b” (CAN Haltモード)に設定されると、CAN Haltモードになります。このとき、BORIF ビットは“1”になりません。

バスオフ中にCANMビットが“10b”に設定されないときは、(1)と同じ動作になります。

25.3 CAN通信速度の設定

CAN通信速度の設定について、以下に説明します。

25.3.1 CANクロックの設定

本グループでは、CANクロック選択回路があります。
CANクロックは、C0CLKRレジスタのCCLKSビットとC0BCRレジスタのBRPビットで設定できます。
図 25.36にCANクロック発生回路ブロック図を示します。

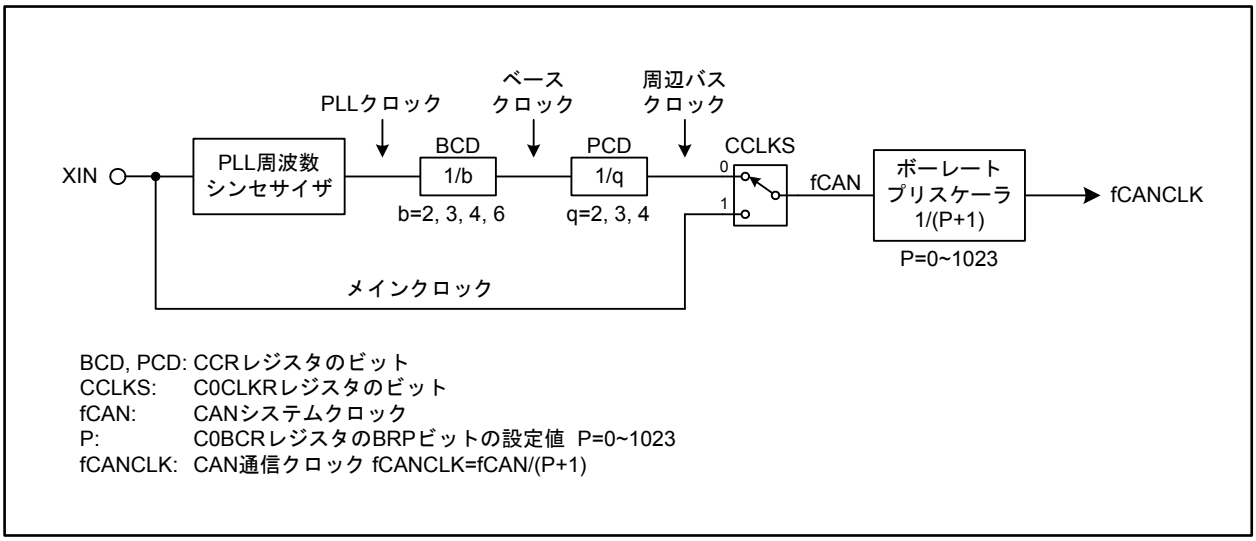


図 25.36 CANクロック発生回路ブロック図

25.3.2 ビットタイミングの設定

ビットタイムは、送信または受信するメッセージの1ビットの時間であり、以下の3つのセグメントで構成されます。
図 25.37にビットタイミング図を示します。

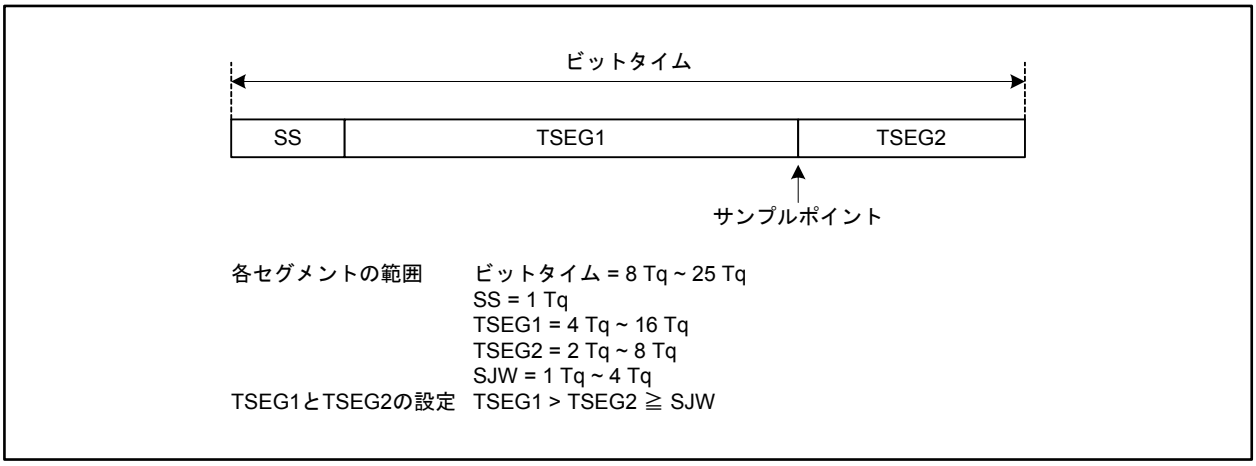


図 25.37 ビットタイミング図

25.3.3 ビットレート

ビットレートは、fCAN (CANクロック)、ボーレートプリスケーラ分周値、および1ビットタイムのTqの数に依存します。

$$\text{ビットレート[bps]} = \frac{fCAN}{\text{ボーレートプリスケーラ分周値(注1)} \times \text{1ビットタイムのTqの数}} = \frac{fCANCLK}{\text{1ビットタイムのTq数}}$$

注1. ボーレートプリスケーラ分周値=P + 1 (P=0~1023)
P: C0BCRレジスタのBRPビットの設定値

表25.10にビットレートの例を示します。

表 25.10 ビットレートの例

fCAN	32 MHz		24 MHz		20 MHz		16 MHz		8 MHz	
ビットレート	Tq数	P+1	Tq数	P+1	Tq数	P+1	Tq数	P+1	Tq数	P+1
1 Mbps	8Tq	4	8Tq	3	10Tq	2	8Tq	2	8Tq	1
	16Tq	2			20Tq	1	16Tq	1		
500 kbps	8Tq	8	8Tq	6	10Tq	4	8Tq	4	8Tq	2
	16Tq	4	16Tq	3	20Tq	2	16Tq	2	16Tq	1
250 kbps	8Tq	16	8Tq	12	10Tq	8	8Tq	8	8Tq	4
	16Tq	8	16Tq	6	20Tq	4	16Tq	4	16Tq	2
83.3 kbps	8Tq	48	8Tq	36	8Tq	30	8Tq	24	8Tq	12
	16Tq	24	16Tq	18	10Tq	24	16Tq	12	16Tq	6
					16Tq	15				
					20Tq	12				
33.3 kbps	8Tq	120	8Tq	90	8Tq	75	8Tq	60	8Tq	30
	10Tq	96	10Tq	72	10Tq	60	10Tq	48	10Tq	24
	16Tq	60	16Tq	45	20Tq	30	16Tq	30	16Tq	15
	20Tq	48	20Tq	36			20Tq	24	20Tq	12

25.4 メールボックスとマスクレジスタの構成

同じ構成の32個のメールボックスがあります。
図 25.38にC0MBjレジスタ(j=0~31)の構成を示します。

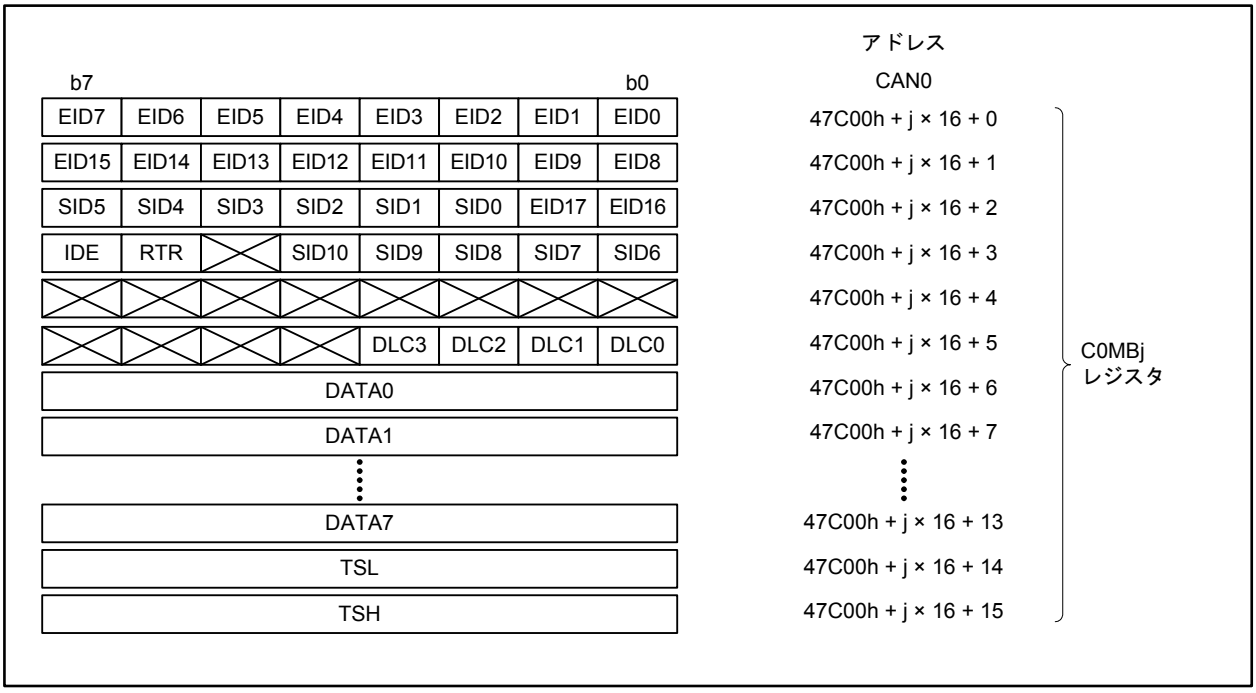


図 25.38 C0MBjレジスタの構成(j=0~31)

同じ構成の8個のマスクレジスタがあります。
図 25.39にC0MKRkレジスタ(k=0~7)の構成を示します。

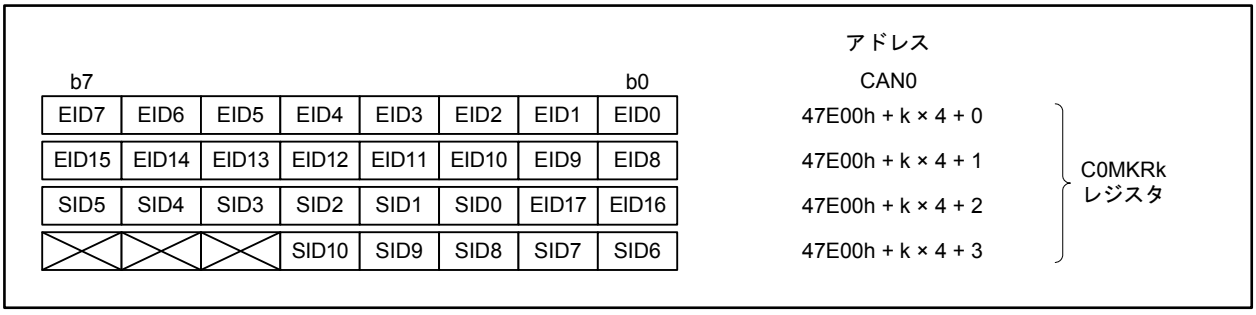


図 25.39 C0MKRkレジスタの構成(k=0~7)

同じ構成の2個のFIFO受信ID比較レジスタがあります。
図 25.40にC0FIDCRnレジスタ(n=0, 1)の構成を示します。

b7							b0	アドレス CAN0	
EID7	EID6	EID5	EID4	EID3	EID2	EID1	EID0	47E20h+n×4+0	C0FIDCRn レジスタ
EID15	EID14	EID13	EID12	EID11	EID10	EID9	EID8	47E20h+n×4+1	
SID5	SID4	SID3	SID2	SID1	SID0	EID17	EID16	47E20h+n×4+2	
IDE	RTR		SID10	SID9	SID8	SID7	SID6	47E20h+n×4+3	

図 25.40　C0FIDCRnレジスタの構成(n=0, 1)

25.5 アクセプタンスフィルタ処理とマスク機能

アクセプタンスフィルタは、メールボックスに対して一定範囲の複数IDのメッセージ受信を許可します。

C0MKR0~C0MKR7レジスタは標準IDと29ビットの拡張IDのマスクができます。

- C0MKR0レジスタは、メールボックス[0]~[3]に対応
- C0MKR1レジスタは、メールボックス[4]~[7]に対応
- C0MKR2レジスタは、メールボックス[8]~[11]に対応
- C0MKR3レジスタは、メールボックス[12]~[15]に対応
- C0MKR4レジスタは、メールボックス[16]~[19]に対応
- C0MKR5レジスタは、メールボックス[20]~[23]に対応
- C0MKR6レジスタは、通常メールボックスモードの場合はメールボックス [24]~[27]、FIFOメールボックスモードの場合は受信FIFOメールボックス[28]~[31]に対応
- C0MKR7レジスタは、通常メールボックスモードの場合はメールボックス [28]~[31]、FIFOメールボックスモードの場合は受信FIFOメールボックス[28]~[31]に対応

C0MKIVLRレジスタは、各メールボックスに対して個別にアクセプタンスフィルタ処理を禁止します。

C0MBjレジスタ(j=0~31)のIDEビット は、C0CTLRレジスタのIDFMビットが“10b”(ミックスIDモード)のとき、有効です。

C0MBjレジスタのRTRビットはデータフレームまたはリモートフレームを選択します。

FIFOメールボックスモードでは、通常メールボックス(メールボックス[0]~[23])は、C0MKR0~C0MKR5レジスタの中から対応する1つを使用してアクセプタンスフィルタ処理を行いますが、受信FIFOメールボックス(メールボックス[28]~[31])は、C0MKR6、C0MKR7レジスタの2つを使用してアクセプタンスフィルタ処理を行います。

また、受信FIFOはC0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタの2つを使用して、IDの比較を行います。受信FIFOのC0MB28~C0MB31レジスタのEID、SID、RTR、IDEビットは無効になります。それぞれ2つの論理和の結果でアクセプタンスフィルタ処理を行うので、受信FIFOでは2つの範囲のIDを受信することができます。

C0MKIVLRレジスタは、受信FIFOに対しては無効です。

標準IDと拡張IDの両方がそれぞれC0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのIDEビットに設定された場合、両方のIDフォーマットが受信されます。

データフレームと リモートフレームの両方がそれぞれC0FIDCR0、C0FIDCR1レジスタのRTRビットに設定された場合、データフレームと リモートフレームの両方が受信されます。

2つの範囲のIDの組み合わせを必要としない場合は、FIFO IDとマスクレジスタの両方に同じマスク値と同じIDを設定してください。

図25.41にマスクレジスタとメールボックスの対応、図25.42にアクセプタンスフィルタ処理を示します。

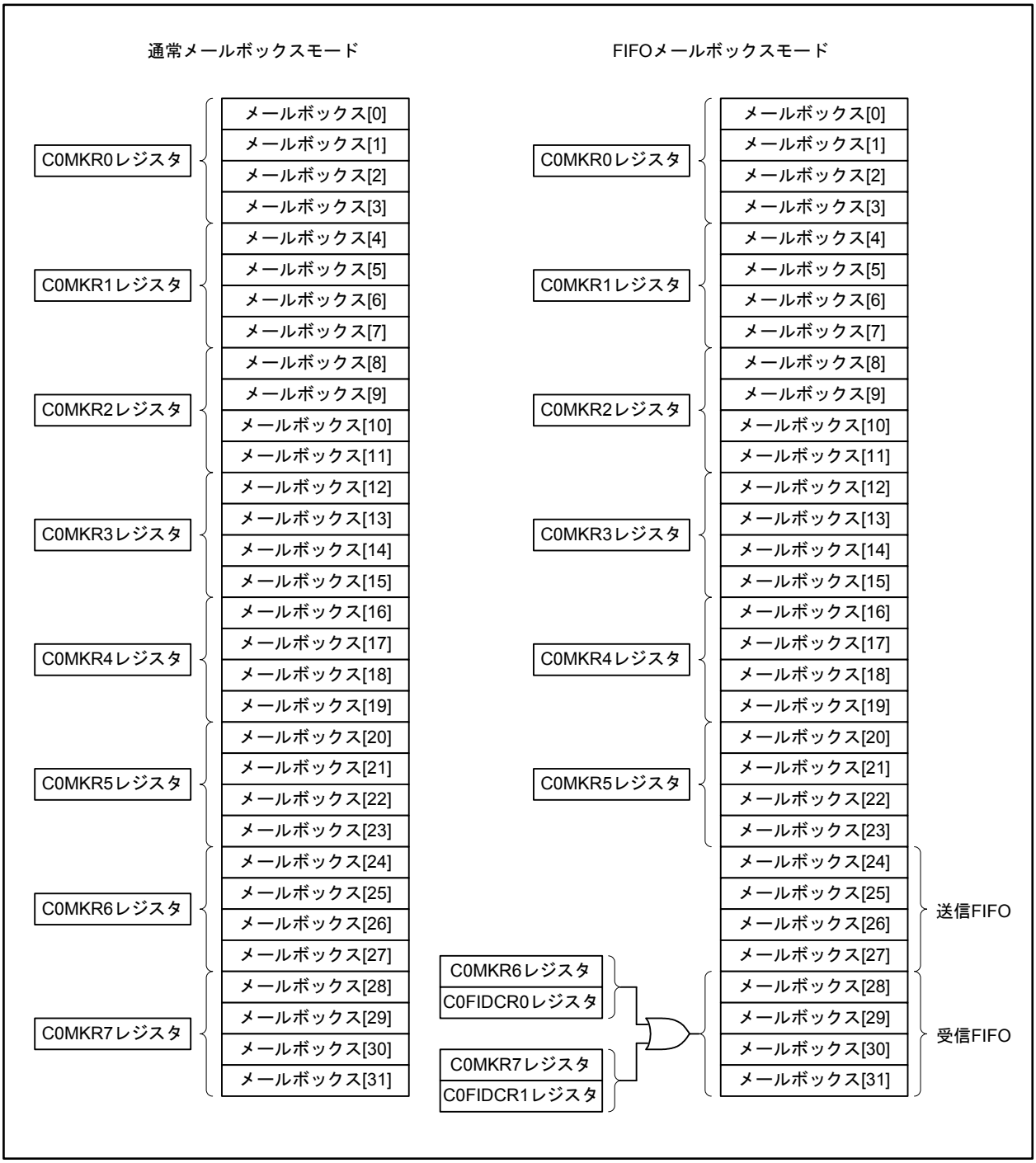


図 25.41　マスクレジスタとメールボックスの対応

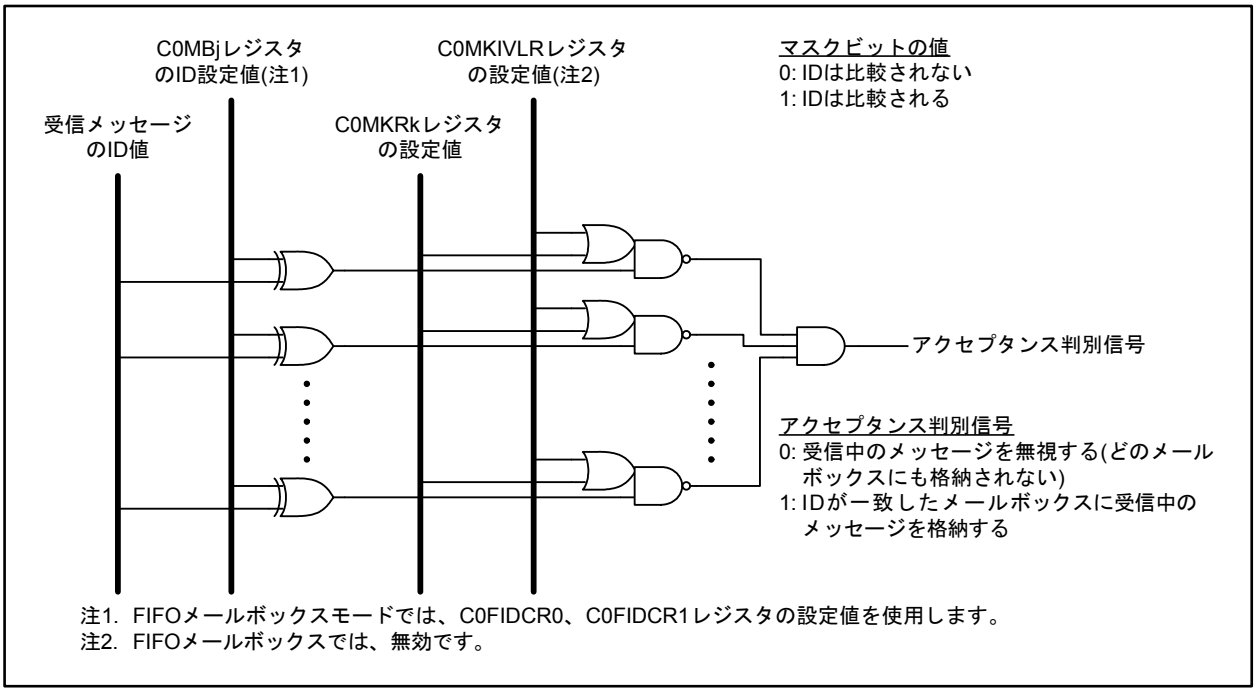


図 25.42 アクセプタンスフィルタ処理(j=0~31、k=0~7)

25.6 受信、送信

表 25.11にCAN通信モードの設定方法を示します。

表 25.11 CAN受信モードとCAN送信モードの設定方法

TRMREQ	RECREQ	ONESHOT	メールボックスの通信モード
0	0	0	メールボックス使用不可、または送信アボート中
0	0	1	ワンショットモードでプログラムされたメールボックスからの送信か受信がアボートされた場合のみ、設定可能
0	1	0	データフレームまたはリモートフレームの受信メールボックスとして設定
0	1	1	データフレームまたはリモートフレームのワンショット受信メールボックスとして設定
1	0	0	データフレームまたはリモートフレームの送信メールボックスとして設定
1	0	1	データフレームまたはリモートフレームのワンショット送信メールボックスとして設定
1	1	0	設定しないでください
1	1	1	設定しないでください

TRMREQ、RECREQ、ONESHOT: C0MCTLj レジスタのビット (j=0~31)

メールボックスを受信メールボックスまたはワンショット受信メールボックスとして設定するときは、以下の点に注意してください。

(1) メールボックスを受信メールボックスまたはワンショット受信メールボックスとして設定する前に、C0MCTLj レジスタ (j=0~31) を“00h”にしてください。

(2) 受信メッセージは、受信のモード設定とアクセプタンスフィルタ処理の結果に従って、条件に一致した最初のメールボックスに格納されます。受信されたメッセージを格納するメールボックスは、メールボックスの番号の小さいほうが優先順位がより高くなります。

(3) CANオペレーションモードで、受信メッセージに設定したメールボックスのID/マスクセットに一致するメッセージを送信した場合、CAN モジュールは送信データを受信しません。しかしセルフテストモードでは、CAN モジュールは送信データを受信します。この場合、CAN モジュールはACKを返します。

メールボックスを送信メールボックスまたはワンショット送信メールボックスとして設定するときは、以下の点に注意してください。

(1) メールボックスを送信メールボックスまたはワンショット送信メールボックスとして設定する前に、C0MCTLj レジスタを“00h”にして、さらに、アボート処理中でないことを確認してください。

25.6.1 受信

図 25.43にデータフレーム受信時の動作例(オーバライトモードの場合)を示します。

この例は、C0MCTL0 レジスタの受信条件に一致する 2 つの連続した CAN メッセージを受信する際、最初のメッセージを上書きする場合の動作です。

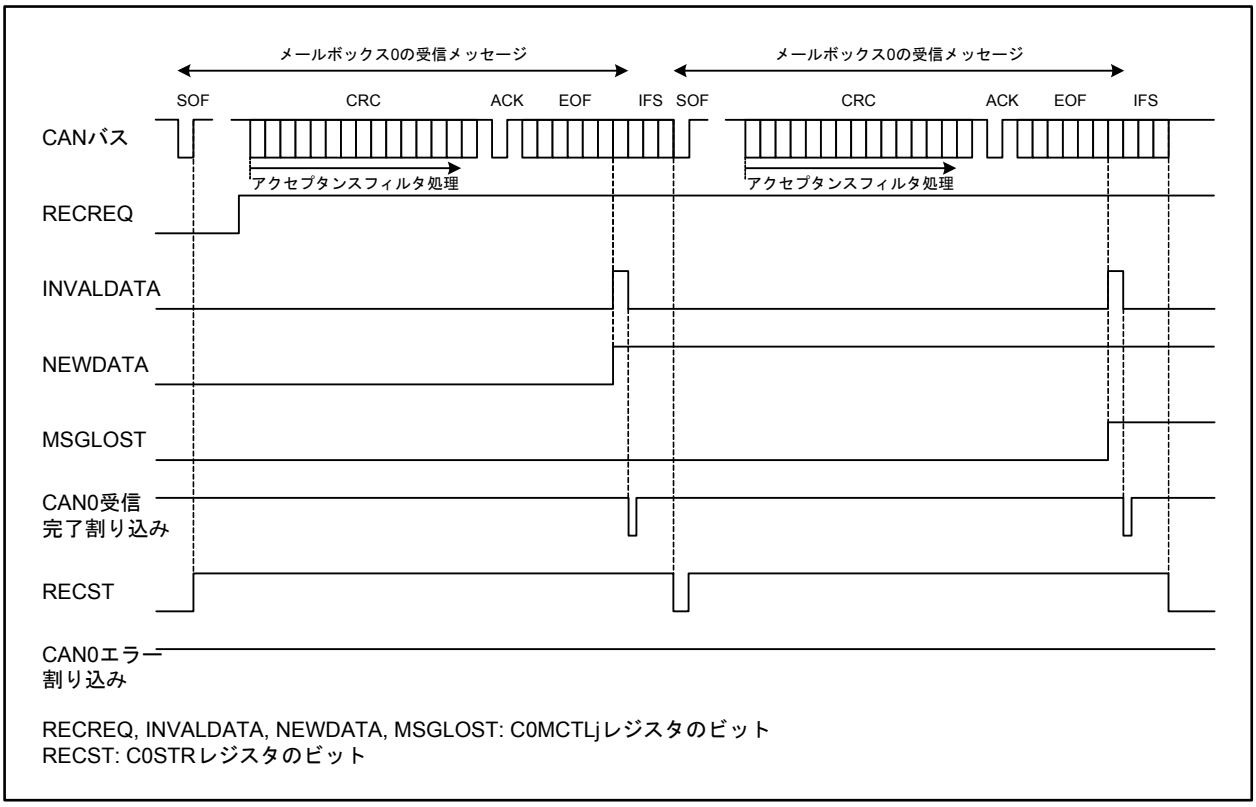


図 25.43 データフレーム受信時の動作例(オーバライトモードの場合) (j=0~31)

(1) CAN バス上で SOF を検知すると、CAN モジュールに送信を開始するメッセージがない場合、C0STR レジスタのRECST ビットが“1” (受信中)になります。

(2) 受信メールボックスを選択するために、CRC フィールドの最初からアクセプタンスフィルタ処理が開始されます。

(3) メッセージの受信を完了すると、受信メールボックスのC0MCTLj レジスタ(j=0~31)のNEWDATA ビットが“1” (新しいメッセージを更新中、またはメールボックスに格納された)になります。同時にC0MCTLj レジスタのINVALDATA ビットが“1” (メッセージを更新中)になり、そのメールボックスにメッセージ全体が転送された後、INVALDATA ビットは“0” (メッセージは有効)に戻ります。

(4) 受信メールボックスの C0MIER レジスタの割り込み許可ビットが “1” (割り込み許可) の場合、CAN0 受信完了割り込み要求が発生します。INVALDATA ビットが “0” になると、この割り込み(CAN0受信完了割り込み)が発生します。

(5) メールボックスからメッセージを読み出した後、NEWDATA ビットをプログラムで“0”にする必要があります。

(6) オーバライトモードでは、NEWDATA ビットがまだ“1”に設定されているメールボックスに次の CAN メッセージの受信が完了すると、C0MCTLj レジスタのMSGLOST ビットが“1” (メッセージはオーバライトされた)になります。新しく受信したメッセージはメールボックスに転送されます。CAN0受信完了割り込み要求は、(4)と同様に発生します。

図 25.44にデータフレーム受信時の動作例(オーバランモードの場合)を示します。

この例は、C0MCTL0 レジスタの受信条件に一致する2つの連続したCANメッセージを受信する際、2つ目のメッセージを破棄する場合の動作です。

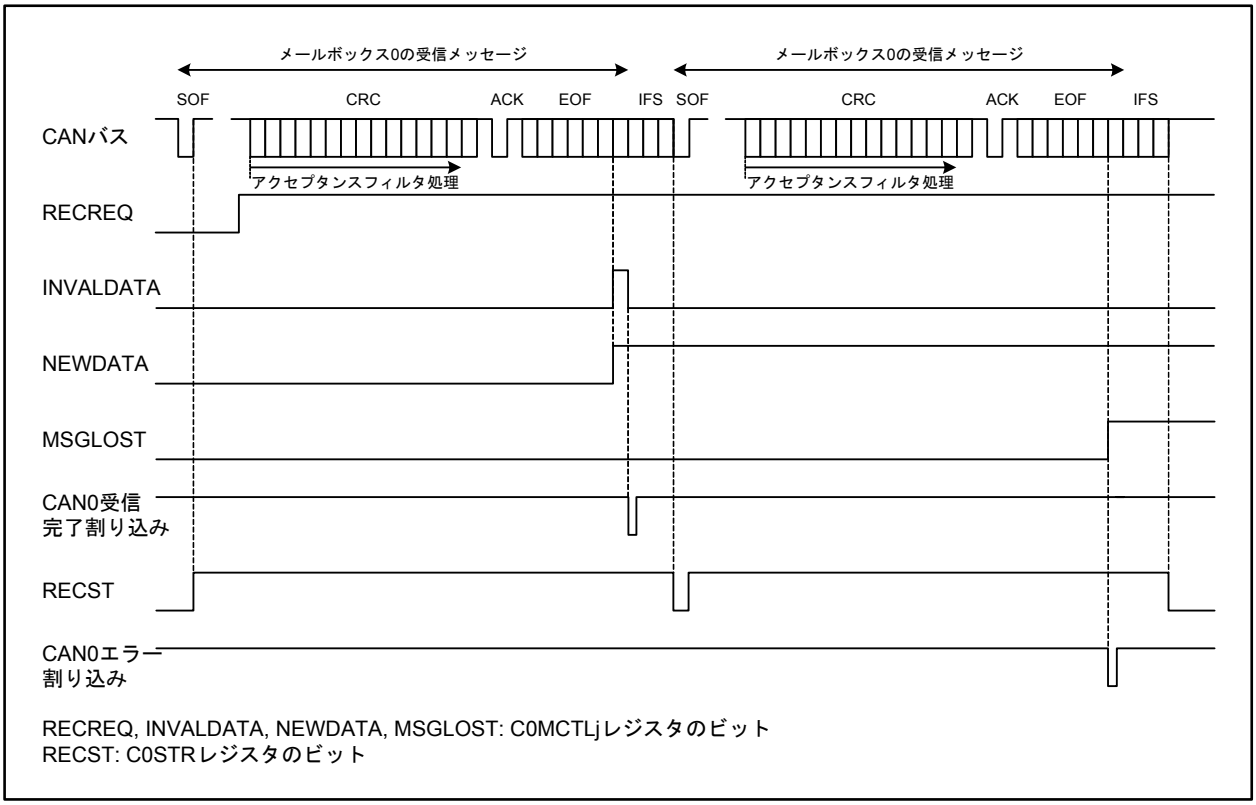


図 25.44 データフレーム受信時の動作例(オーバランモードの場合) (j=0~31)

(1)~(5)はオーバライトモードと同じです。

(6) オーバランモードでは、NEWDATAビットが“0”に設定される前に、次のCANメッセージの受信が完了すると、C0MCTLj レジスタ(j=0~31)のMSGLOSTビットが“1”(メッセージはオーバランされた)になります。新しく受信したメッセージは破棄され、C0EIER レジスタの対応する割り込み許可ビットが“1”(割り込み許可)の場合、CAN0エラー割り込み要求が発生します。

25.6.2 送信

図 25.45にデータフレーム送信時の動作例を示します。
この例は、C0MCTL0、C0MCTL1レジスタへ設定したメッセージを送信する場合の動作です。

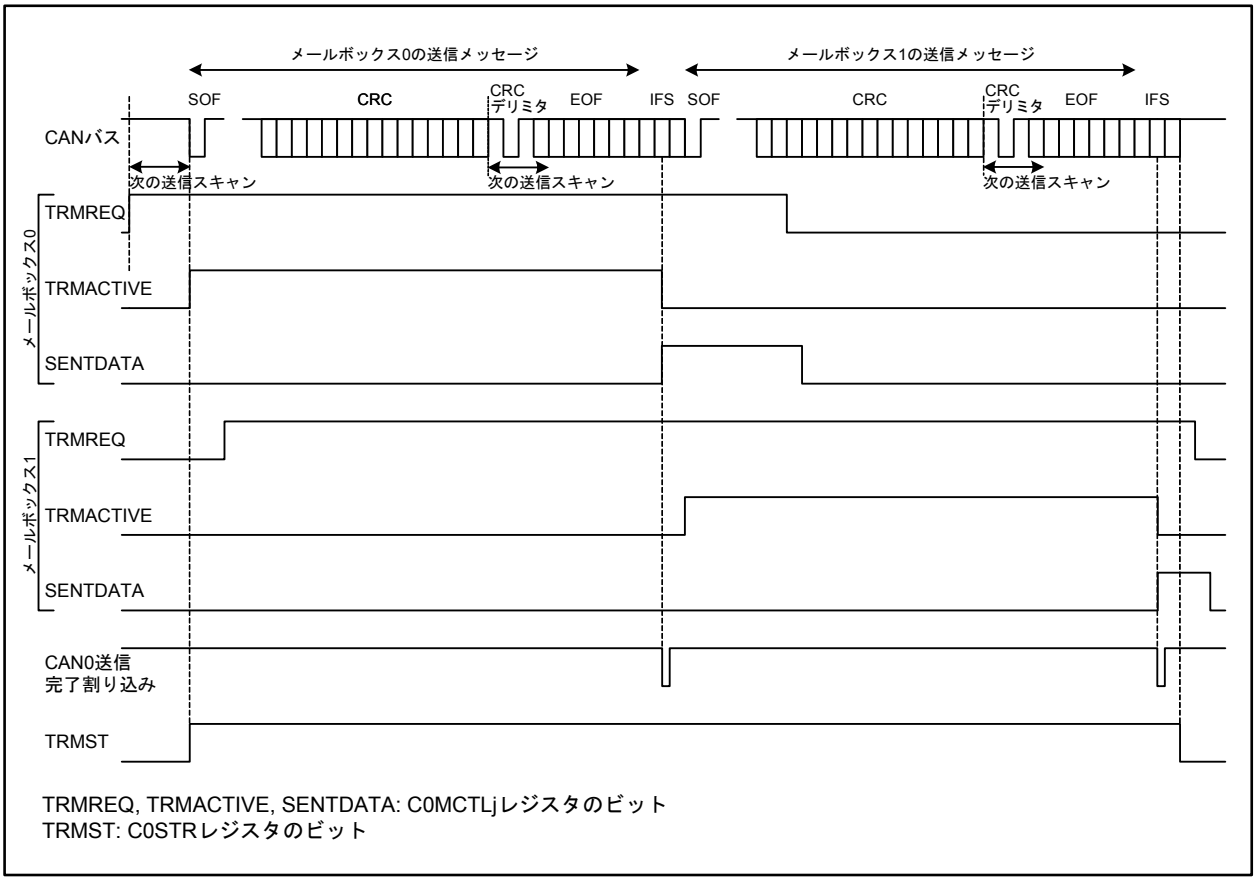


図 25.45 データフレーム送信時の動作例(j=0~31)

(1) バスアイドル状態で、C0MCTLjレジスタ(j=0~31)のTRMREQビットを“1”(送信メールボックス)にすると、最も優先順位の高い送信メールボックスを決定するために、メールボックススキャン処理が開始されます。送信メールボックスが決定すると、C0MCTLjレジスタのTRMACTIVEビットが“1”(送信要求の取り込みから、送信完了、エラー発生またはアービトレーションロスト発生まで)、C0STRレジスタのTRMSTビットが“1”(送信中)になり、CANモジュールは送信を開始します(注1)。
(2) 他のTRMREQビットが設定されている場合は、CRCデリミタから次の送信のための送信スキャン処理を開始します。
(3) アービトレーション負けが発生せずに送信が完了すると、C0MCTLjレジスタのSENTDATAビットが“1”(送信完了)に、TRMACTIVEビットが“0”(送信待機中、または送信要求なし)になります。そして、C0MIERレジスタの割り込み許可ビットが“1”(割り込み許可)の場合は、CAN0送信完了割り込み要求が発生します。
(4) 同一のメールボックスから次の送信を要求する場合は、SENTDATAビットとTRMREQビットを“0”にして、SENTDATAビットとTRMREQビットが“0”になるのを確認した後、TRMREQビットを“1”にしてください。

注1. CANモジュールが送信を開始した後でアービトレーション負けをした場合、TRMACTIVEビットは“0”になります。CRCデリミタの始めから最も優先順位の高い送信メールボックスを検索するために、再び送信スキャン処理が行われます。送信中またはアービトレーション負けに続いてエラーが発生すると、エラーデリミタの始めから、最も優先順位の高い送信のメールボックスを検索するために、再び送信スキャン処理が行われます。

25.7 CAN割り込み

CANモジュールには、以下のCAN割り込みがあります。

- CAN0ウェイクアップ割り込み
- CAN0受信完了割り込み
- CAN0送信完了割り込み
- CAN0受信FIFO割り込み
- CAN0送信FIFO割り込み
- CAN0エラー割り込み

CAN0エラー割り込みには、8つの要因があります。これらの要因は、C0EIFRレジスタをチェックすることで確認できます。

- バスエラー
- エラーワーニング
- エラーパッシブ
- バスオフ開始
- バスオフ復帰
- 受信オーバラン
- オーバロードフレーム送信
- バスロック

26. 入出力端子

本マイコンの各端子は、プログラマブル入出力ポートまたは内部周辺機能の入出力として機能します。これらの機能は、機能選択レジスタで切り替えて使用することができます。

また、端子4本ごとにプルアップ抵抗の有無を選択できます。プルアップ抵抗は、端子が出力になっている場合には、レジスタの設定内容にかかわらず切り離されます。

図 26.1に代表的な入出力端子のブロック図を示します。

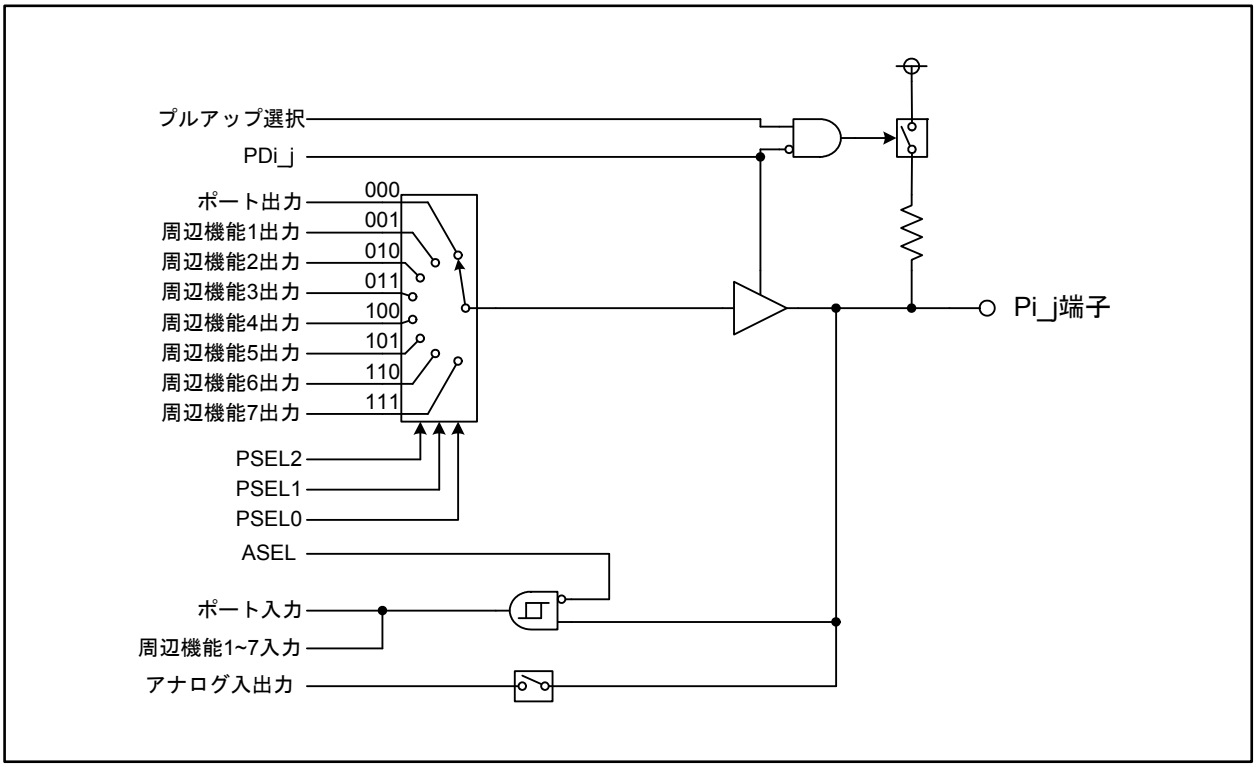


図 26.1　入出力端子ブロック図(代表例) (i=0~10、j=0~7)

入出力端子には、端子の入出力方向を決定する方向レジスタと、端子の機能を決定する出力機能選択レジスタ、プルアップ抵抗を制御するプルアップ制御レジスタがあります。出力機能選択レジスタには、プログラマブル入出力ポートと周辺機能出力(アナログ出力を除く)のいずれを使用するかを選択するためのビットPSEL2~PSEL0と、アナログ入出力時に発生する中間電位によって入力バッファの消費電流が増大するのを防ぐためのビットASELがあります。

アナログ入出力端子として使用する場合は、PDi_jに“0”(入力)を設定し、PSEL2~PSEL0に“000b”を、ASELビットに“1”を設定してください。

ポートP8_5は$\overline{\text{NMI}}$と端子を共用する入力専用端子となっており、機能選択レジスタ、方向レジスタのビット5ともにありません。また、ポートP9_1も入力専用端子となっており、機能選択レジスタ、方向レジスタのビット1はともに予約領域になっています。

また、ポートP9はPRCRレジスタのPRC2ビットにより、ポートP3、ポートP7、ポートP8はPRCR3レジスタのPRC30ビットにより、意図しない書き込みから保護されています(「9. プロテクト」参照)。

26.1　ポートPi方向レジスタ(PDiレジスタ、i=0~10)

端子の入出力方向を選択するためのレジスタです。このレジスタの各ビットは、各端子と一対一に対応しています。

図26.2にPDiレジスタを示します。

なお、P8_5に対応する方向レジスタのビットはありません。またP9_1に対応する方向レジスタのビットは予約ビットとなっております。

また、PD9レジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットにより、PD3、PD7、PD8レジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットにより、意図しない書き込みから保護されています(「9. プロテクト」参照)。

ポートPi 方向レジスタ (i=0~10)

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PD0, PD1, PD2	03C2h、03C3h、03C6h番地	0000 0000b
PD3 (注1)	03C7h番地	0000 0000b
PD4, PD5, PD6	03CAh、03CBh、03CEh番地	0000 0000b
PD7 (注1)	03CFh番地	0000 0000b
PD8 (注1、2)	03D2h番地	00X0 0000b
PD9 (注2、3、4)	03D3h番地	0000 0X0Xb
PD10	03D6h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PDi_0	ポートPi_0方向ビット(注2)	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_1	ポートPi_1方向ビット(注3)	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_2	ポートPi_2方向ビット(注2)	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_3	ポートPi_3方向ビット	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_4	ポートPi_4方向ビット	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_5	ポートPi_5方向ビット(注2)	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_6	ポートPi_6方向ビット	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW
PDi_7	ポートPi_7方向ビット	0: 入力 (入力ポートとして機能) 1: 出力 (出力ポートとして機能)	RW

注1. PD3、PD7、PD8レジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. PD8レジスタのPD8_5ビット、PD9レジスタのPD9_0、PD9_2ビットには何も配置されていません。書く場合、“0”を書いてください。読んだ場合、その値は不定です。
注3. PD9レジスタのPD9_1ビットは予約ビットです。書く場合、“0”を書いてください。
注4. PD9レジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットを“1”(書き込み許可) にした次の命令で書いてください。
また、PRC2ビットを“1”にする命令とPD9レジスタを書き換える命令の間に割り込みやDMA転送が入らないようにしてください。

図 26.2　PD0~PD10 レジスタ

26.2 出力機能選択レジスタ

プログラマブル入出力ポートと周辺機能出力が端子を共用している場合、その端子の出力機能を決定するレジスタです。入力に関しては、このレジスタの設定にかかわらず、接続されたすべての周辺機能に入力されます。

出力機能選択レジスタには、プログラマブル入出力ポートと周辺機能出力(アナログ出力を除く)のいずれを使用するかを選択するためのビットPSEL2~PSEL0と、アナログ入出力時に発生する中間電位による消費電流増大を防ぐためのビットASELがあります。

表26.1にPSEL2~PSEL0の値と周辺機能の相関を、図26.3~図26.13に機能選択レジスタを示します。

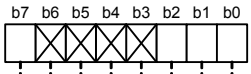
なお、ポートP8_5、P9_1は入力専用端子ですので、出力機能選択レジスタはありません。

また、P3_iS、P7_iS、P8_iSレジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットにより、またP9_iSレジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットにより、意図しない書き込みから保護されています(「9. プロテクト」参照)。

表26.1 周辺機能の割り当て

PSEL2~PSEL0	周辺機能
001b	タイマ
010b	三相モータ制御機能、シリアルバスインタフェース0
011b	UART
100b	UART特殊機能
101b	インテリジェントI/Oグループ0、CANチャネル0 、LIN
110b	インテリジェントI/Oグループ1
111b	

ポートP0_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P0_0S~P0_2S	400A0h、400A2h、400A4h番地	0XXX X000b
P0_3S~P0_5S	400A6h、400A8h、400AAh番地	0XXX X000b
P0_6S, P0_7S	400ACh、400AEh番地	0XXX X000b

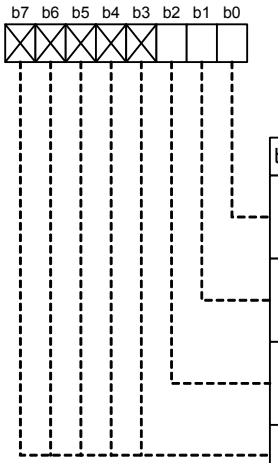
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP0_i 出力機能選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P0_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b6-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
ASEL	ポートP0_i アナログ機能選択ビット	0: AN0_i 以外に使用する 1: AN0_i として使用する	RW

図 26.3　P0_0S~P0_7S レジスタ

ポートP0_i (i=0~7)はA/Dコンバータ入力AN0_iと端子を共用しています。

プログラマブル入出力ポートとして使用する場合、P0_iS レジスタには“00h”を設定してください。A/Dコンバータ入力として使用する場合は、P0_iS レジスタに“80h”を設定し、PD0_iを“0”(ポートP0_iを入力)に設定してください。

ポートP1_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P1_0S~P1_2S	400A1h、400A3h、400A5h番地	XXXX X000b
P1_3S~P1_5S	400A7h、400A9h、400ABh番地	XXXX X000b
P1_6S, P1_7S	400ADh、400AFh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP1_i 出力機能選択ビット (注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P1_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : SBI0出力 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : IIO0_i 出力 1 1 0 : IIO1_i 出力 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P1_0	P1_0	— (注2)	SSO0出力	— (注2)	— (注2)	IIO0_0出力	IIO1_0出力	— (注2)
P1_1	P1_1	— (注2)	SSCK0出力	— (注2)	— (注2)	IIO0_1出力	IIO1_1出力	— (注2)
P1_2	P1_2	— (注2)	SSI0出力	— (注2)	— (注2)	IIO0_2出力	IIO1_2出力	— (注2)
P1_3	P1_3	— (注2)	$\overline{\text{SCS0}}$出力	— (注2)	— (注2)	IIO0_3出力	IIO1_3出力	— (注2)
P1_4	P1_4	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_4出力	IIO1_4出力	— (注2)
P1_5	P1_5	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_5出力	IIO1_5出力	— (注2)
P1_6	P1_6	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_6出力	IIO1_6出力	— (注2)
P1_7	P1_7	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_7出力	IIO1_7出力	— (注2)

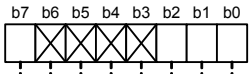
注2. 設定しないでください。

図 26.4　P1_0S~P1_7S レジスタ

ポート P1_i (i=0~7) はシリアルバスインタフェース (SBI0)、インテリジェント I/O グループ 0、1 (IIO0, IIO1)、外部割り込み入力と端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD1_iを“1” (ポートP1_iを出力)に設定し、図 26.4にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD1_iを“0” (ポートP1_iを入力)に設定してください。

ポートP2_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P2_0S~P2_2S	400B0h、400B2h、400B4h番地	0XXX X000b
P2_3S~P2_5S	400B6h、400B8h、400BAh番地	0XXX X000b
P2_6S, P2_7S	400BCh、400BEh番地	0XXX X000b

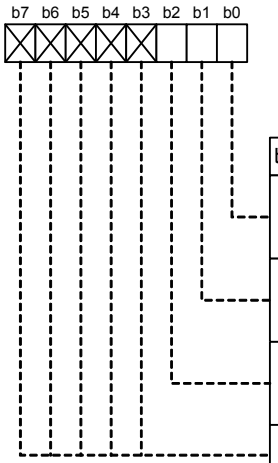
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP2_i 出力機能選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P2_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b6-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
ASEL	ポートP2_i アナログ機能選択ビット	0: AN2_i 以外に使用する 1: AN2_i として使用する	RW

図 26.5　P2_0S~P2_7S レジスタ

ポートP2_i (i=0~7)はA/Dコンバータ入力AN2_iと端子を共用しています。

プログラマブル入出力ポートとして使用する場合、P2_iS レジスタには“00h”を設定してください。A/Dコンバータ入力として使用する場合は、P2_iS レジスタに“80h”を設定し、PD2_iを“0”(ポートP2_iを入力)に設定してください。

ポートP3_i 機能選択レジスタ (i=0~7) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P3_0S~P3_2S	400B1h、400B3h、400B5h番地	XXXX X000b
P3_3S~P3_5S	400B7h、400B9h、400BBh番地	XXXX X000b
P3_6S, P3_7S	400BDh、400BFh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP3_i 出力機能選択ビット (注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P3_i 0 0 1 : タイマ出力 0 1 0 : 三相出力 0 1 1 : UART4出力 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : LIN0、LIN1出力 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. これらのレジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットを“1” (書き込み許可) にした後で書き換えてください。

注2. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P3_0	P3_0	TA0OUT出力	— (注3)	— (注3)	— (注3)	LIN0OUT	— (注3)	— (注3)
P3_1	P3_1	TA3OUT出力	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P3_2	P3_2	TA1OUT出力	V	— (注3)	— (注3)	LIN1OUT	— (注3)	— (注3)
P3_3	P3_3	— (注3)	$\overline{V}$	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P3_4	P3_4	TA2OUT出力	W	CLK4出力	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P3_5	P3_5	— (注3)	$\overline{W}$	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P3_6	P3_6	TA4OUT出力	U	TXD4	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P3_7	P3_7	— (注3)	$\overline{U}$	$\overline{RTS4}$	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)

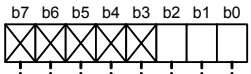
注3. 設定しないでください。

図 26.6　P3_0S~P3_7S レジスタ

ポート P3_i (i=0~7) はタイマ出力、三相モータ制御出力、シリアルインタフェース (UART4)、LIN モジュールと端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD3_iを“1” (ポートP3_iを出力)に設定し、図 26.6にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD3_iを“0” (ポートP3_iを入力)に設定してください。

ポートP4_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P4_0S~P4_2S	400C0h、400C2h、400C4h番地	XXXX X000b
P4_3S~P4_5S	400C6h、400C8h、400CAh番地	XXXX X000b
P4_6S, P4_7S	400CCh、400CEh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP4_i 出力機能選択ビット (注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P4_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : UART3出力 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : LIN0、LIN1出力 1 1 0 : IIO1_i 出力 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P4_0	P4_0	— (注2)	— (注2)	$\overline{\text{RTS3}}$	— (注2)	— (注2)	IIO1_0出力	— (注2)
P4_1	P4_1	— (注2)	— (注2)	CLK3出力	— (注2)	— (注2)	IIO1_1出力	— (注2)
P4_2	P4_2	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO1_2出力	— (注2)
P4_3	P4_3	— (注2)	— (注2)	TXD3	— (注2)	— (注2)	IIO1_3出力	— (注2)
P4_4	P4_4	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	LIN0OUT	IIO1_4出力	— (注2)
P4_5	P4_5	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO1_5出力	— (注2)
P4_6	P4_6	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	LIN1OUT	IIO1_6出力	— (注2)
P4_7	P4_7	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO1_7出力	— (注2)

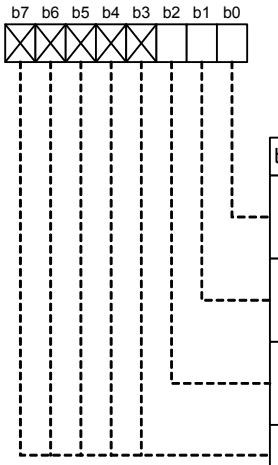
注2. 設定しないでください。

図 26.7　P4_0S~P4_7S レジスタ

ポートP4_i (i=0~7)はシリアルインタフェース(UART3)、LINモジュール、インテリジェントI/Oグループ1 (IIO1)と端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD4_iを“1”(ポートP4_iを出力)に設定し、図 26.7にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD4_iを“0”(ポートP4_iを入力)に設定してください。

ポートP5_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P5_0S~P5_2S	400C1h、400C3h、400C5h番地	XXXX X000b
P5_3S~P5_5S	400C7h、400C9h、400CBh番地	XXXX X000b
P5_6S, P5_7S	400CDh、400CFh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP5_i 出力機能選択ビット (注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P5_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : IIO0_i 出力 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P5_0	P5_0	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_0出力	— (注2)	— (注2)
P5_1	P5_1	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_1出力	— (注2)	— (注2)
P5_2	P5_2	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_2出力	— (注2)	— (注2)
P5_3	P5_3	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_3出力	— (注2)	— (注2)
P5_4	P5_4	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_4出力	— (注2)	— (注2)
P5_5	P5_5	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_5出力	— (注2)	— (注2)
P5_6	P5_6	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_6出力	— (注2)	— (注2)
P5_7	P5_7	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)	IIO0_7出力	— (注2)	— (注2)

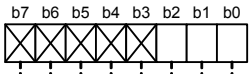
注2. 設定しないでください。

図 26.8　P5_0S~P5_7S レジスタ

ポートP5_i (i=0~7)はインテリジェントI/Oグループ0 (IIO0)と端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD5_iを“1” (ポートP5_iを出力)に設定し、図 26.8にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD5_iを“0” (ポートP5_iを入力)に設定してください。

ポートP6_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P6_0S~P6_2S	400D0h、400D2h、400D4h番地	XXXX X000b
P6_3S~P6_5S	400D6h、400D8h、400DAh番地	XXXX X000b
P6_6S, P6_7S	400DCh、400DEh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP6_i 出力機能選択ビット (注1)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P6_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : SBI0出力 0 1 1 : UART0、UART1出力 1 0 0 : UART0特殊機能、UART1特殊機能出力 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P6_0	P6_0	— (注2)	$\overline{\text{SCS0}}$出力	$\overline{\text{RTS0}}$	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_1	P6_1	— (注2)	SSCK0出力	CLK0出力	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_2	P6_2	— (注2)	SSI0出力	SCL0出力	STXD0	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_3	P6_3	— (注2)	SSO0出力	TXD0 SDA0出力	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_4	P6_4	— (注2)	— (注2)	$\overline{\text{RTS1}}$	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_5	P6_5	— (注2)	— (注2)	CLK1出力	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_6	P6_6	— (注2)	— (注2)	SCL1出力	STXD1	— (注2)	— (注2)	— (注2)
P6_7	P6_7	— (注2)	— (注2)	TXD1 SDA1出力	— (注2)	— (注2)	— (注2)	— (注2)

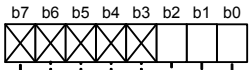
注2. 設定しないでください。

図 26.9　P6_0S~P6_7S レジスタ

ポートP6_i (i=0~7)はシリアルバスインタフェース(SBI0)、シリアルインタフェース(UART0, UART1)と端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD6_iを“1”(ポートP6_iを出力)に設定し、図 26.9にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD6_iを“0”(ポートP6_iを入力)に設定してください。

ポートP7_i 機能選択レジスタ(i=0~7) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P7_0S~P7_2S	400D1h、400D3h、400D5h番地	XXXX X000b
P7_3S~P7_5S	400D7h、400D9h、400DBh番地	XXXX X000b
P7_6S, P7_7S	400DDh、400DFh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP7_i 出力機能選択ビット (注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P7_i 0 0 1 : タイマ出力 0 1 0 : 三相出力 0 1 1 : UART2、UART3出力 1 0 0 : UART2特殊機能出力 1 0 1 : LIN0、CAN0出力 1 1 0 : IIO1出力 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. これらのレジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットを“1” (書き込み許可) にした後で書き換えてください。

注2. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P7_0	P7_0	TA0OUT出力	— (注3)	TXD2 SDA2出力	— (注3)	— (注3)	IIO1_6出力	— (注3)
P7_1	P7_1	— (注3)	— (注3)	SCL2出力	STXD2	— (注3)	IIO1_7出力	— (注3)
P7_2	P7_2	TA1OUT出力	V	CLK2出力	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P7_3	P7_3	— (注3)	$\overline{V}$	$\overline{RTS2}$	— (注3)	— (注3)	IIO1_0出力	— (注3)
P7_4	P7_4	TA2OUT出力	W	— (注3)	— (注3)	LIN0OUT	IIO1_1出力	— (注3)
P7_5	P7_5	— (注3)	$\overline{W}$	— (注3)	— (注3)	— (注3)	IIO1_2出力	— (注3)
P7_6	P7_6	TA3OUT出力	— (注3)	TXD3	— (注3)	CAN0OUT	IIO1_3出力	— (注3)
P7_7	P7_7	— (注3)	— (注3)	CLK3出力	— (注3)	— (注3)	IIO1_4出力	— (注3)

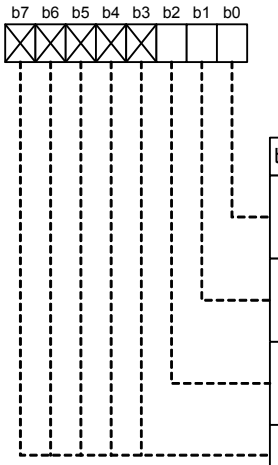
注3. 設定しないでください。

図 26.10 P7_0S~P7_7S レジスタ

ポート P7_i (i=0~7) はタイマ、三相モータ制御、シリアルインタフェース (UART2, UART3)、インテリジェントI/Oグループ1 (IIO1)、LINモジュール、CANモジュールと端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD7_iを“1” (ポートP7_iを出力) に設定し、図 26.10にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD7_iを“0” (ポートP7_iを入力)に設定してください。

ポートP8_i 機能選択レジスタ (i=0~4, 6, 7) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P8_0S~P8_2S	400E0h、400E2h、400E4h番地	XXXX X000b
P8_3S, P8_4S	400E6h、400E8h番地	XXXX X000b
P8_6S, P8_7S	400ECh、400EEh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP8_i 出力機能選択ビット (注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P8_i 0 0 1 : タイマ出力 0 1 0 : 三相出力 0 1 1 : UART3出力 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : LIN1、CAN0出力 1 1 0 : IIO1出力 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. これらのレジスタはPRCR3レジスタのPRC30ビットを“1” (書き込み許可) にした後で書き換えてください。

注2. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P8_0	P8_0	TA4OUT出力	U	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P8_1	P8_1	TA3OUT出力	$\overline{U}$	$\overline{RTS3}$	— (注3)	LIN1OUT	IIO1_5出力	— (注3)
P8_2	P8_2	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	CAN0OUT	— (注3)	— (注3)
P8_3	P8_3	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P8_4	P8_4	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P8_6	P8_6	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P8_7	P8_7	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)

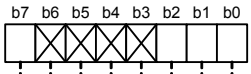
注3. 設定しないでください。

図 26.11　P8_0S~P8_4S、P8_6S、P8_7S レジスタ

ポートP8_i (i=0~4, 6, 7)はタイマ、三相モータ制御、シリアルインタフェース(UART3)、インテリジェントI/Oグループ1 (IIO1)、LINモジュール、CANモジュール、外部割り込み入力と端子を共用しています。

出力端子として使用する場合は、PD8_iを“1” (ポートP8_iを出力)に設定し、図 26.11にしたがって機能を選択してください。また、入力端子として使用する場合は、PD8_iを“0” (ポートP8_iを入力)に設定してください。

ポートP9_i 機能選択レジスタ (i=3~7) (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P9_3S~P9_6S	400E7h、400E9h、400EBh、400EDh番地	0XXX X000b
P9_7S	400EFh番地	XXXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP9_i 出力機能選択ビット (注2)	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P9_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : UART4出力 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b6-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
ASEL (i=3~6)	ポートP9_i (i=3~6) アナログ機能選択ビット	0: アナログ端子以外に使用する 1: アナログ端子として使用する	RW
— (b7) (i=7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. これらのレジスタはPRCRレジスタのPRC2ビットを“1”(書き込み許可)にした次の命令で書き換えてください。また、PRC2ビットを“1”にする命令とP9_iSレジスタを書き換える命令の間に割り込みやDMA転送が入らないようにしてください。

注2. 個々の端子については下表を参照してください。

ポート	PSEL2~PSEL0設定値							
	000b	001b	010b	011b	100b	101b	110b	111b
P9_3	P9_3	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P9_4	P9_4	— (注3)	— (注3)	$\overline{\text{RTS4}}$	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P9_5	P9_5	— (注3)	— (注3)	CLK4出力	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P9_6	P9_6	— (注3)	— (注3)	TXD4	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)
P9_7	P9_7	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)	— (注3)

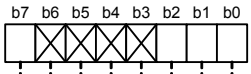
注3. 設定しないでください。

図 26.12 P9_3S~P9_7S レジスタ

ポートP9_i (i=3~7)はシリアルインタフェース(UART4)と端子を共用しています。このうち、ポートP9_i (i=3~6)は、A/Dコンバータ入出力(ANEX0, ANEX1)、D/Aコンバータ出力とも端子を共用しています。

A/Dコンバータ、D/Aコンバータ以外の出力端子として使用する場合は、PD9_iを“1”(ポートP9_iを出力)に設定し、図 26.12にしたがって機能を選択してください。また、A/Dコンバータ、D/Aコンバータ以外の入力端子として使用する場合は、PD9_iを“0”(ポートP9_iを入力)に設定してください。A/Dコンバータ、D/Aコンバータとして使用する場合は、P9_iS レジスタに“80h”を設定し、入出力方向にかかわらずPD9_iを“0”(ポートP9_iを入力)に設定してください。

ポートP10_i 機能選択レジスタ (i=0~7)



シンボル	アドレス	リセット後の値
P10_0S~P10_2S	400F0h、400F2h、400F4h番地	0XXX X000b
P10_3S~P10_5S	400F6h、400F8h、400FAh番地	0XXX X000b
P10_6S, P10_7S	400FCh、400FEh番地	0XXX X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PSEL0	ポートP10_i 出力機能選択ビット	b2 b1 b0 0 0 0 : 入出力ポート P10_i 0 0 1 : 設定しないでください 0 1 0 : 設定しないでください 0 1 1 : 設定しないでください 1 0 0 : 設定しないでください 1 0 1 : 設定しないでください 1 1 0 : 設定しないでください 1 1 1 : 設定しないでください	RW
PSEL1			RW
PSEL2			RW
— (b6-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
ASEL	ポートP10_i アナログ機能選択ビット	0: AN_i 以外に使用する 1: AN_i として使用する	RW

図 26.13 P10_0S~P10_7S レジスタ

ポートP10_i (i=0~7)はA/Dコンバータ入力AN_i、キー入力割り込みと端子を共用しています。

プログラマブル入出力ポートとして使用する場合、P10_iSレジスタには“00h”を設定してください。A/Dコンバータ以外の入力端子として使用する場合は、PD10_iを“0”(ポートP10_iを入力)に設定してください。A/Dコンバータ入力として使用する場合は、P10_iSレジスタに“80h”を設定し、PD10_iを“0”(ポートP10_iを入力)に設定してください。

26.3 入力機能選択レジスタ

周辺機能の入力が複数の端子に配置されている場合、どの端子の入力を周辺機能に接続するかを決定するレジスタです。

図 26.14~図 26.18に入力機能選択レジスタを示します。

入力機能選択レジスタ0

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
IFS0	40098h番地	X0X0 X000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFS00	タイマA入力端子切り替えビット (注1)	タイマA入力を b1 b0 0 0 : ポートP3に割り当てる 0 1 : ポートP7、P8に割り当てる 1 0 : ポートP7、P8に割り当てる 1 1 : 設定しないでください	RW
IFS01			RW
IFS02	UART3入力端子切り替えビット (注2)	UART3入力を 0: ポートP4に割り当てる 1: ポートP7、P8に割り当てる	RW
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
IFS04	UART4入力端子切り替えビット (注3)	UART4入力を 0: ポートP9に割り当てる 1: ポートP3に割り当てる	RW
— (b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
IFS06	タイマB入力端子切り替えビット (注4)	タイマB入力を 0: ポートP6、P9に割り当てる 1: ポートP1、P3、P7、P9に割り当てる	RW
— (b7)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. タイマAの端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS01	IFS00	TA0OUT入力	TA1OUT入力	TA1IN	TA2OUT入力	TA2IN	TA3OUT入力	TA4OUT入力	TA4IN
0	0	P3_0	P3_2	P3_3	P3_4	P3_5	P3_1	P3_6	P3_7
0	1	P7_0	P7_2	P7_3	P7_4	P7_5	P7_6	P8_0	P8_1
1	0	P7_0	P7_2	P7_3	P7_4	P7_5	P8_1	P8_0	—

注2. UART3の端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS02	CLK3入力	RXD3	$\overline{\text{CTS3}}$
0	P4_1	P4_2	P4_0
1	P7_7	P8_0	P8_1

注3. UART4の端子ごとの設定は下表を参照してください。

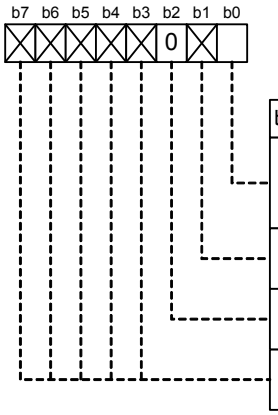
IFS04	CLK4入力	RXD4	$\overline{\text{CTS4}}$
0	P9_5	P9_7	P9_4
1	P3_4	P3_5	P3_7

注4. タイマBの端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS06	TB0IN	TB1IN	TB2IN	TB3IN	TB4IN	TB5IN
0	P6_0	P6_1	P6_2	P9_3	P9_4	P6_3
1	P1_4	P3_7	P9_7	P9_3	P9_4	P7_1

図 26.14 IFS0レジスタ

入力機能選択レジスタ1



シンボル	アドレス	リセット後の値
IFS1	40099h番地	XXXX X0X0b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFS10	CAN0入力端子切り替えビット	CAN0IN、$\overline{\text{CAN0WU}}$入力を 0: ポートP7_7に割り当てる 1: ポートP8_3に割り当てる	RW
— (b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7-b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 26.15 IFS1レジスタ

入力機能選択レジスタ2

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
IFS2	4009Ah番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFS20	インテリジェントI/Oグループ0入力端子切り替えビット　(注1)	IIO0入力を b1 b0 0 0 : 設定しないでください 0 1 : ポートP1に割り当てる 1 0 : ポートP5に割り当てる 1 1 : 設定しないでください	RW
IFS21			RW
IFS22	インテリジェントI/Oグループ0二相パルス入力端子切り替えビット　(注2)	グループ0二相パルス入力を b3 b2 0 0 : ポートP8と$\overline{INT1}$に割り当てる 0 1 : ポートP7と$\overline{INT0}$に割り当てる 1 0 : ポートP3と$\overline{INT1}$に割り当てる 1 1 : ポートP3と$\overline{INT0}$に割り当てる	RW
IFS23			RW
IFS24	インテリジェントI/Oグループ1入力端子切り替えビット　(注3)	IIO1入力を b5 b4 0 0 : ポートP7、P8に割り当てる 0 1 : 設定しないでください 1 0 : ポートP1に割り当てる 1 1 : ポートP4に割り当てる	RW
IFS25			RW
IFS26	インテリジェントI/Oグループ1二相パルス入力端子切り替えビット　(注4)	グループ1二相パルス入力を b7 b6 0 0 : ポートP8と$\overline{INT1}$に割り当てる 0 1 : ポートP7と$\overline{INT0}$に割り当てる 1 0 : ポートP3と$\overline{INT1}$に割り当てる 1 1 : ポートP3と$\overline{INT0}$に割り当てる	RW
IFS27			RW

注1. インテリジェントI/Oグループ0の端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS21	IFS20	IIO0_0入力	IIO0_1入力	IIO0_2入力	IIO0_3入力	IIO0_4入力	IIO0_5入力	IIO0_6入力	IIO0_7入力
0	1	P1_0	P1_1	P1_2	P1_3	P1_4	P1_5	P1_6	P1_7
1	0	P5_0	P5_1	P5_2	P5_3	P5_4	P5_5	P5_6	P5_7

注2. インテリジェントI/Oグループ0二相パルス入力の端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS23	IFS22	UD0A	UD0B	UD0Z
0	0	P8_0	P8_1	P8_3 ($\overline{INT1}$)
0	1	P7_6	P7_7	P8_2 ($\overline{INT0}$)
1	0	P3_0	P3_1	P8_3 ($\overline{INT1}$)
1	1	P3_0	P3_1	P8_2 ($\overline{INT0}$)

注3. インテリジェントI/Oグループ1の端子ごとの設定は下表を参照してください。

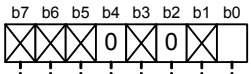
IFS25	IFS24	IIO1_0入力	IIO1_1入力	IIO1_2入力	IIO1_3入力	IIO1_4入力	IIO1_5入力	IIO1_6入力	IIO1_7入力
0	0	P7_3	P7_4	P7_5	P7_6	P7_7	P8_1	P7_0	P7_1
1	0	P1_0	P1_1	P1_2	P1_3	P1_4	P1_5	P1_6	P1_7
1	1	P4_0	P4_1	P4_2	P4_3	P4_4	P4_5	P4_6	P4_7

注4. インテリジェントI/Oグループ1二相パルス入力の端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS27	IFS26	UD1A	UD1B	UD1Z
0	0	P8_0	P8_1	P8_3 ($\overline{INT1}$)
0	1	P7_6	P7_7	P8_2 ($\overline{INT0}$)
1	0	P3_0	P3_1	P8_3 ($\overline{INT1}$)
1	1	P3_0	P3_1	P8_2 ($\overline{INT0}$)

図 26.16 IFS2レジスタ

入力機能選択レジスタ5



シンボル	アドレス	リセット後の値
IFS5	4009Dh番地	XXX0 X0X0b

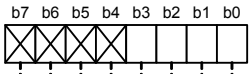
ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFS50	SBI0入力端子切り替えビット (注1)	SBI0入力を 0: ポートP1に割り当てる 1: ポートP6に割り当てる	RW
— (b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b3)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—
— (b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b7-b5)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. SBI0の端子ごとの設定は下表を参照してください。

IFS50	SSO0入力	SSI0入力
0	P1_0	P1_2
1	P6_3	P6_2

図 26.17 IFS5 レジスタ

入力機能選択レジスタ6



シンボル	アドレス	リセット後の値
IFS6	4009Eh番地	XXXX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
IFS60	LIN0入力端子切り替えビット	LIN0IN入力を b1 b0 0 0 : ポートP3_1に割り当てる 0 1 : ポートP4_5に割り当てる 1 0 : ポートP7_5に割り当てる 1 1 : 設定しないでください	RW
IFS61			RW
IFS62	LIN1入力端子切り替えビット	LIN1IN入力を b3 b2 0 0 : ポートP3_3に割り当てる 0 1 : ポートP4_7に割り当てる 1 0 : ポートP8_0に割り当てる 1 1 : 設定しないでください	RW
IFS63			RW
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 26.18 IFS6 レジスタ

26.4 プルアップ制御レジスタ0~3 (PUR0~PUR3レジスタ)

図26.19~図26.22にPUR0~PUR3レジスタを示します。

PUR0~PUR3レジスタによって、4端子ごとにプルアップするかしないかを設定できます。これらのレジスタのビットを“1”(プルアップする)、方向レジスタを“0”(入力モード)に設定したポートはプルアップされます。

プルアップ制御レジスタ0

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PUR0	03F0h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PU00	P0_0~P0_3プルアップ制御ビット	対応するポートのプルアップの設定を行う 0: プルアップしない 1: プルアップする	RW
PU01	P0_4~P0_7プルアップ制御ビット		RW
PU02	P1_0~P1_3プルアップ制御ビット		RW
PU03	P1_4~P1_7プルアップ制御ビット		RW
PU04	P2_0~P2_3プルアップ制御ビット		RW
PU05	P2_4~P2_7プルアップ制御ビット		RW
PU06	P3_0~P3_3プルアップ制御ビット		RW
PU07	P3_4~P3_7プルアップ制御ビット		RW

図26.19 PUR0レジスタ

プルアップ制御レジスタ1

b7 b6 b5 b4 b3 b2 b1 b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PUR1	03F1h番地	XXXX 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PU10	P4_0~P4_3プルアップ制御ビット	対応するポートのプルアップの設定を行う 0: プルアップしない 1: プルアップする	RW
PU11	P4_4~P4_7プルアップ制御ビット		RW
PU12	P5_0~P5_3プルアップ制御ビット		RW
PU13	P5_4~P5_7プルアップ制御ビット		RW
— (b7-b4)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図26.20 PUR1レジスタ

プルアップ制御レジスタ2

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
PUR2	03F2h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PU20	P6_0~P6_3プルアップ制御ビット	対応するポートのプルアップの設定を行う 0: プルアップしない 1: プルアップする	RW
PU21	P6_4~P6_7プルアップ制御ビット		RW
PU22	P7_0~P7_3プルアップ制御ビット		RW
PU23	P7_4~P7_7プルアップ制御ビット		RW
PU24	P8_0~P8_3プルアップ制御ビット		RW
PU25	P8_4~P8_7プルアップ制御ビット (注1)		RW
PU26	P9_1、P9_3プルアップ制御ビット		RW
PU27	P9_4~P9_7プルアップ制御ビット		RW

注1. P8_5にはプルアップ抵抗は内蔵していません。

図 26.21 PUR2レジスタ

プルアップ制御レジスタ3

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X	X	X	X	X		

シンボル	アドレス	リセット後の値
PUR3	03F3h番地	XXXX XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PU30	P10_0~P10_3プルアップ制御ビット	対応するポートのプルアップの設定を行う 0: プルアップしない 1: プルアップする	RW
PU31	P10_4~P10_7プルアップ制御ビット		RW
— (b7-b2)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

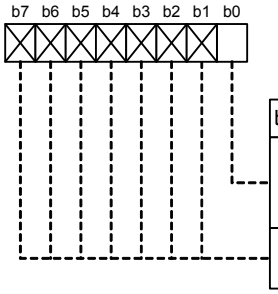
図 26.22 PUR3レジスタ

26.5 ポート制御レジスタ (PCR レジスタ)

図 26.23 にPCR レジスタを示します。

ポートP1 の出力形式をプッシュプル出力とするか擬似Nチャネルオープンドレイン出力とするかを選択するレジスタです。PCR0 ビットを“1”にした場合、出力バッファのPチャネルトランジスタを常時OFF にします。ただし、寄生ダイオードは残ったままになりますので、ポートP1 は完全なオープンドレインにはならず、入力電圧の絶対最大定格は“-0.3V ~ VCC+0.3V”となります(図 26.24 参照)。

ポート制御レジスタ



シンボル PCR　　アドレス 03FFh番地　　リセット後の値 XXXX XXX0b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PCR0	ポートP1出力形式制御ビット	0: プッシュプル出力 1: 擬似Nチャネルオープンドレイン出力 (注1)	RW
— (b7-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. 本機能は、CMOS出力バッファのPチャネルトランジスタを常時オフするものであり、ポートP1を完全にオープンドレインにする機能ではありません。したがって、入力電圧の絶対最大定格は“-0.3V ~ VCC+0.3V”となります。

図 26.23 PCR レジスタ

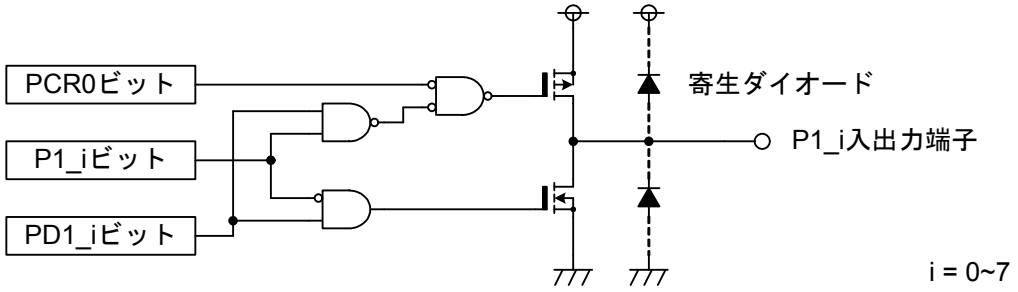


図 26.24 ポートP1出力バッファの構成

26.6 未使用端子の処理

ボード上で使用しない端子の処理例を表 26.2、図 26.26に示します。

表 26.2　シングルチップモード時の未使用端子の処理例(注1)

端子名	処理内容
ポートP0~P10 (P8_5、P9_1は除く)(注2)	入力に設定し、端子ごとに抵抗(注3)を介してVSSに接続(プルダウン)するか、または出力に設定し、端子を開放
P9_1	抵抗(注3)を介してVSSに接続(プルダウン)
XOUT (注4)	開放
$\overline{\text{NMI}}$ (P8_5)	抵抗(注3)を介してVCCに接続(プルアップ)
AVCC	VCCに接続
AVSS、VREF	VSSに接続
NSD	1k~4.7kΩの抵抗を介して、VCCに接続(プルアップ)

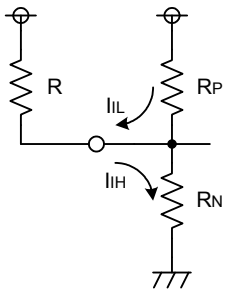
注1.　未使用端子は、マイクロコンピュータの端子からできるだけ短い配線 (2cm 以内) で処理してください。

注2.　出力に設定し開放する場合、リセット解除からポートを出力にするまでの間、ポートは入力になっています。そのため、ポートが入力になっている間、端子の電圧レベルが不定となり、電源電流が増加する場合があります。また、ノイズやノイズによって引き起こされる暴走などにより方向レジスタの内容が変化する場合を考慮し、ソフトウェアで定期的に方向レジスタの内容を再設定することでプログラムの信頼性が高くなります。

注3.　抵抗値はシステムにあわせて最適な値を選択してください。推奨値は10k~100kΩです。

注4.　XIN端子に外部クロックを入力しているとき。

プルアップ/プルダウン抵抗の考え方



左に入力端子の等価回路を示します。
入力電流 I_{IL}、I_{IH} から等価入力抵抗 R_P、R_N を計算します。
(例) VCC = 5.0V、$I_{IH} = I_{IL}$ = 5μA とすると

$$R_P = R_N = \frac{5.0}{5 \times 10^{-6}} = 1M\Omega$$

“H”と認識される電圧 V_{IH} は 0.7VCC 以上なので、
$R \,//\, R_P : R_N = 0.3 : 0.7$
を満たす R が V_{IH} = 0.7VCC となる抵抗値です。
この式を計算すると、

$$R = \frac{3R_PR_N}{7R_P - 3R_N}$$

となり、プルアップ抵抗 R の最大値が求まります。
(例) VCC = 5.0V、$I_{IH} = I_{IL}$ = 5μA とすると

$$R = \frac{3 \times 10^6 \times 10^6}{7 \times 10^6 - 3 \times 10^6} = 750000$$

から 750kΩ と計算できます。
ここで計算した抵抗値にマージンを考慮して、実際の抵抗値を決定します。

図 26.25　プルアップ/プルダウン抵抗の考え方

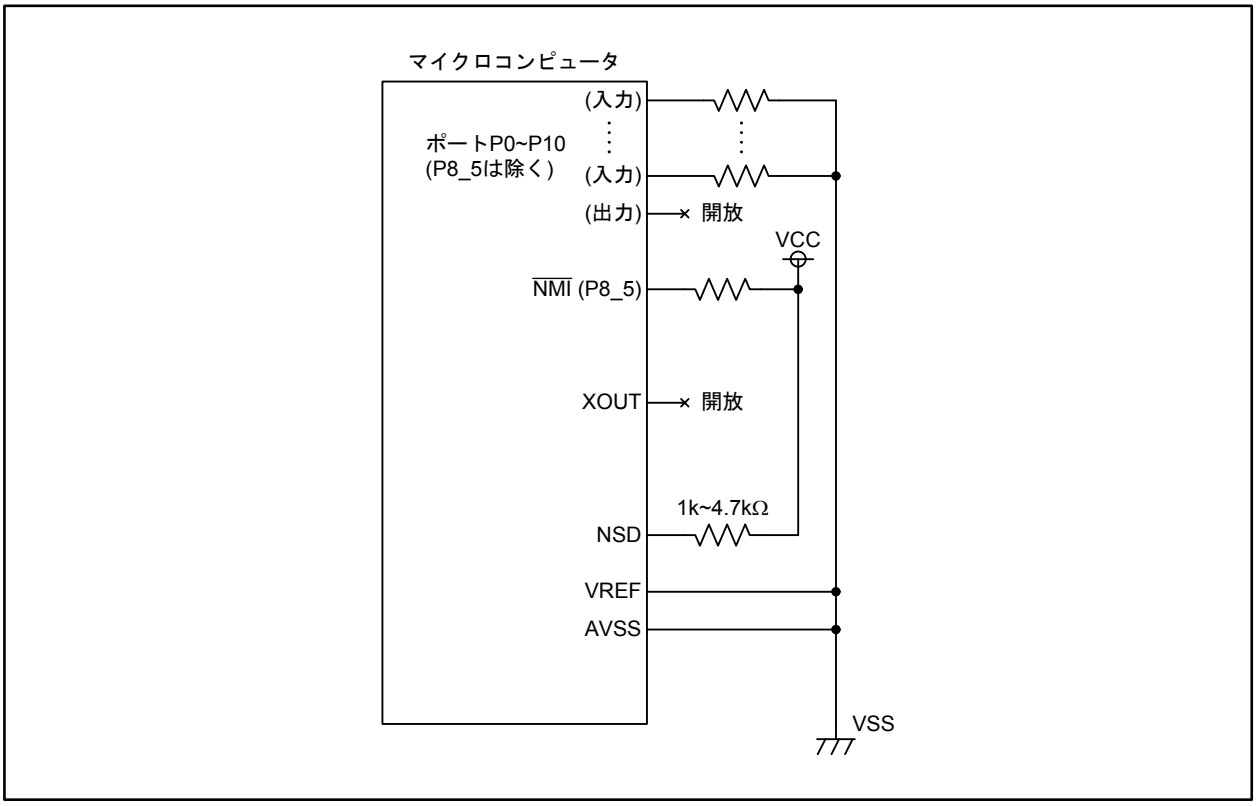


図 26.26 未使用端子の処理例

27. フラッシュメモリ

27.1 概要

フラッシュメモリは、CPU書き換えモード、標準シリアル入出力モード、パラレル入出力モードの3つの書き換えモードで書き換えることができます。

表27.1にフラッシュメモリの仕様を、表27.2に各書き換えモードの概要を示します。

表27.1 フラッシュメモリの仕様

項目	仕様
フラッシュメモリ書き換えモード	CPU書き換えモード、標準シリアル入出力モード、パラレル入出力モード
ブロック分割	図27.1を参照してください
プログラム単位	8バイト単位
イレーズ単位	ブロック単位
プログラム、イレーズ制御方式	ソフトウェアコマンドによる制御
プロテクトの種類	ロックビットプロテクト、ROMコードプロテクト、IDコードプロテクト
ソフトウェアコマンド数	9

表27.2 フラッシュメモリ書き換えモードの概要

書き換えモード	CPU書き換えモード	標準シリアル入出力モード	パラレル入出力モード
概要	CPUがソフトウェアコマンドを実行することによりフラッシュメモリを書き換える EW0モード: 内蔵フラッシュメモリ以外の領域上のプログラムから書き換え可能 EW1モード: 書き換え対象のブロック以外の領域上のプログラムから書き換え可能	専用シリアルライタを使用してフラッシュメモリを書き換える 標準シリアル入出力モード1: クロック同期型シリアルインタフェースを使用 標準シリアル入出力モード2: クロック非同期型シリアルインタフェースを使用	専用パラレルライタを使用してフラッシュメモリを書き換える
CPU動作モード	シングルチップモード	標準シリアル入出力モード	パラレル入出力モード
ROMライタ	—	シリアルライタ	パラレルライタ
オンボード書き換え	可能	可能	不可能

図 27.1に内蔵フラッシュメモリのブロック図を示します。

内蔵フラッシュメモリにはユーザプログラムを格納するためのブロック 0~5 (プログラム領域) と、ユーザプログラムが動作した結果得られたデータを格納するためのブロック A、B (データ領域/データフラッシュ)があります。

それぞれのブロックは独立しており、ロックビットを設定することでブロックごとに書き換えや消去を禁止できます。

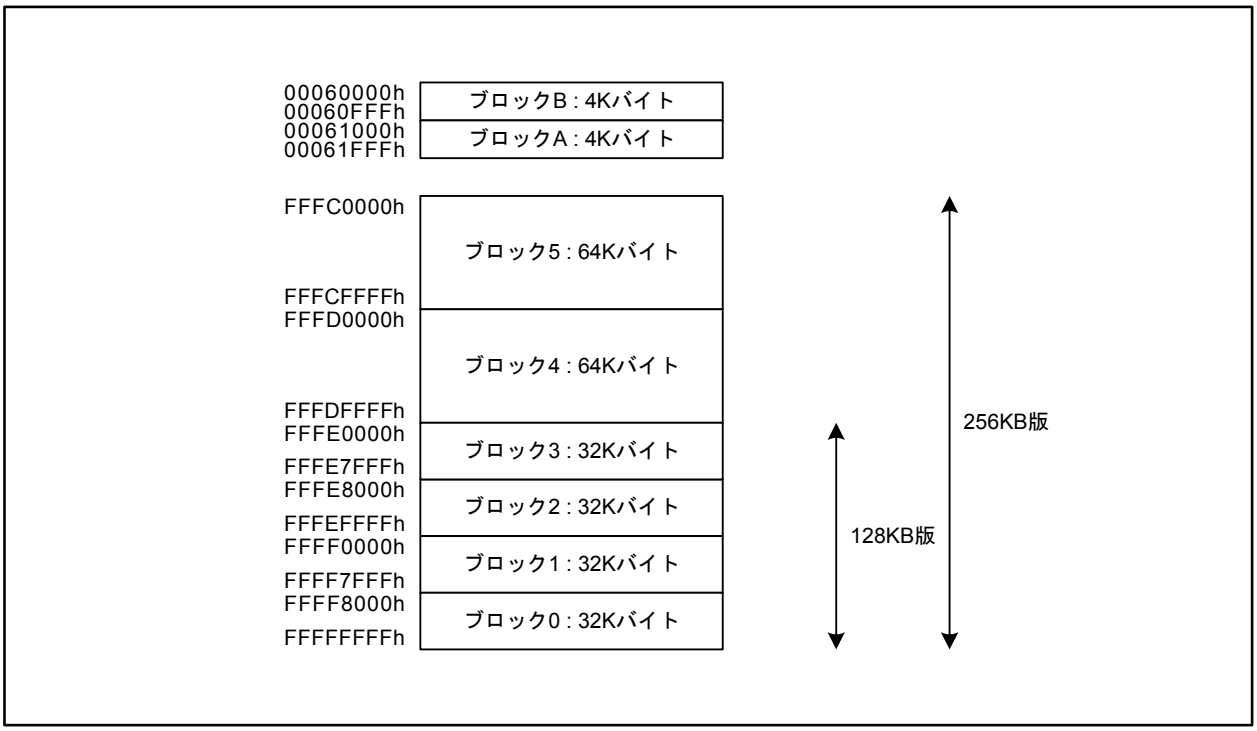


図 27.1　内蔵フラッシュメモリのブロック図

27.2 フラッシュメモリプロテクト

プロテクトの種類には、プログラムの暴走などによる意図しない書き込みや消去から保護するものと、第三者によるフラッシュメモリの読み出し、書き込みから保護するものの2種類があります。前者はロックビットによって実現され、後者はプロテクトビットによるものと、IDコードによるものとがあります。

それぞれの特長を表27.3に示します。

表27.3 プロテクトの種類と特長

プロテクト	ロックビットプロテクト	ROMコードプロテクト	IDコードプロテクト
保護対象	消去、書き込み	読み出し、書き込み	読み出し、消去、書き込み
対象とする書き換えモード	CPU書き換えモード 標準シリアル入出力モード パラレル入出力モード	パラレル入出力モード	標準シリアル入出力モード
保護範囲	ブロックごと	フラッシュメモリ全領域	フラッシュメモリ全領域
プロテクト方法	ロックビット書き換え	いずれかのブロックのプロテクトビット書き換え	IDコードが設定されたプログラムの書き込み
解除方法	FMRレジスタのLBDビットを“1”(ロックビット無効)にする 恒久的には上記操作の後、該当ブロックを消去する	プロテクトビットがセットされたブロックすべてを消去する	シリアルライタから正しいIDコードを入力する

27.2.1 ロックビットプロテクト

すべての書き換えモードに対して有効なプロテクトです。ロックビットプロテクトが有効な場合、ロックビットが“0”(ロック)のブロックに対して書き換え、消去はできません。

ロックビットを“0”にするには、ソフトウェアコマンドのロックビットプログラムコマンドを発行してください。また、FMR1レジスタのLBDビットを“1”(ロックビット無効)にすると、ロックビットプロテクトが無効になり、全ブロックの書き換え、消去ができるようになります。ロックビットを“0”(ロック)にしたブロックを消去すると、そのブロックのロックビットも消去されて“1”(非ロック)になります。

27.2.2 ROMコードプロテクト

パラレル入出力モードに対して有効なプロテクトです。ROMコードプロテクトが有効な場合、パラレルライタでは、いずれの領域の内容も読み書きできません。ROMコードプロテクトを解除するには、プロテクトビットを“0”(プロテクト)にしたすべてのブロックを消去してください。

フラッシュメモリの各ブロックには、プロテクトビットが2ビットずつあります。表27.4にソフトウェアコマンドで指定するプロテクトビットのアドレスを示します。これらのプロテクトビットのうちいずれか1つでも“0”(プロテクト)にすると、全領域がプロテクトされます。

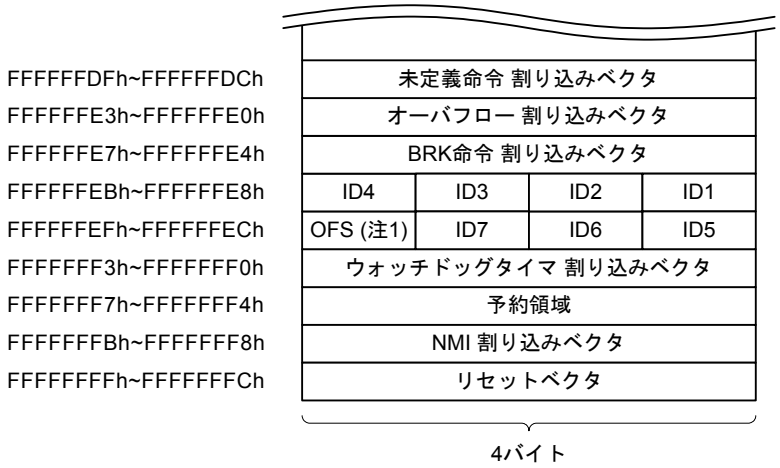
表 27.4　プロテクトビットのアドレス一覧

ブロック	プロテクトビット0	プロテクトビット1
Block B	00060100h	00060300h
Block A	00061100h	00061300h
Block 5	FFFC0100h	FFFC0300h
Block 4	FFFD0100h	FFFD0300h
Block 3	FFFE0100h	FFFE0300h
Block 2	FFFE8100h	FFFE8300h
Block 1	FFFF0100h	FFFF0300h
Block 0	FFFF8100h	FFFF8300h

27.2.3　IDコードプロテクト

標準シリアル入出力モードに対して有効なプロテクトです。シリアルライタから送られてくる7バイトのIDコードとフラッシュメモリに書かれているIDコードが一致すると、シリアルライタからのコマンドが受け付けられるようになります。ただし、リセットベクタが“FFFFFFFFh”の場合は、フラッシュメモリが消去済みであると判断し、IDコードのチェックは行いません。なお、ROMコードプロテクトが有効で、リセットベクタが“FFFFFFFFh”の場合は、消去コマンドしか受け付けません。

IDコードはシリアルライタからID1、ID2、...、ID7の順で送られてきます。IDコードは図27.2に示すとおり、ID1から順にそれぞれFFFFFFE8h番地、FFFFFFE9h番地、...、FFFFFFEEh番地に割り当てられています。これらの番地にIDコードを設定したプログラムをフラッシュメモリに書き込むことでプロテクトが有効になります。



注1. OFS領域については、ウォッチドッグタイマの章を参照してください。

図 27.2　IDコード格納番地

27.3 CPU 書き換えモード

CPU 書き換えモードは、CPU がソフトウェアコマンドを実行することによって、フラッシュメモリを書き換えるモードです。CPU書き換えモードでは、CPUバスから直接フラッシュメモリをアクセスせず、フラッシュメモリ書き換え専用のバスを経由してフラッシュメモリにアクセスします(図 27.3参照)。

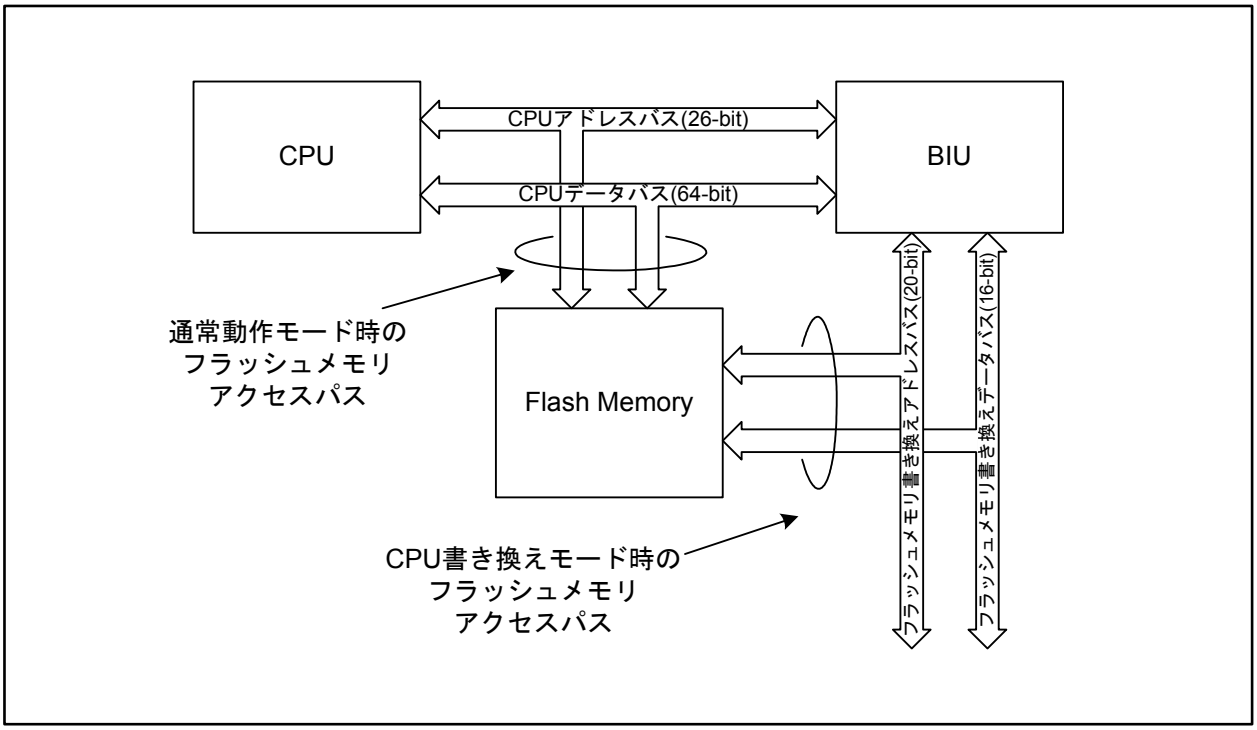


図 27.3 CPU書き換えモード時のフラッシュメモリアクセスパス

フラッシュメモリ書き換えのためのバス設定は、FEBC レジスタで行います。FEBC レジスタは、「27.3.1 フラッシュメモリ書き換えバスタイミング設定」および「29. 電気的特性」を参照して、書き換え条件を満たすように設定してください。

CPU書き換えモードには、EW0モードとEW1モードがあります。表27.5にEW0モードとEW1モードの相違点を示します。

表27.5　EW0モードとEW1モードの相違点

項目	EW0モード	EW1モード
書き換えプログラムを実行できる領域	内蔵フラッシュメモリ以外の領域	書き換え対象のブロック以外の内蔵フラッシュメモリ、内蔵RAM
ソフトウェアコマンドの制限	なし	• プログラムコマンド/ブロックイレーズコマンド 書き換えプログラムのあるブロックに対して実行禁止 • リードステータスレジスタモード移行コマンド 実行禁止 • リードロックビットステータスモード移行コマンド RAM上から実行してください • リードプロテクトビットステータスモード移行コマンド RAM上から実行してください
プログラム、イレーズ後のモード	リードステータスレジスタモード	リードアレイモード
プログラム、イレーズ中のCPUの状態	動作	ホールド(入出力ポートはコマンド発行前の状態を保持)
フラッシュメモリのステータス検知	• プログラムでFMSR0レジスタを読む • リードステータスレジスタモード移行コマンドを実行し、データを読む	• プログラムでFMSR0レジスタを読む
その他制限	なし	• ウォッチドッグタイマはカウントソース保護モードでは使えません • プログラム、イレーズ中は割り込み(NMIを除く)、DMAを禁止にしてください

FMCRレジスタのFEWビットを“1”にすると、CPU書き換えモードになります。その後、FMR0レジスタのEWMビットの設定値によってEW0モードとEW1モードを選択できます。

FMCRレジスタ、FMR0レジスタは、それぞれPRRレジスタ、FPR0レジスタにより保護されています。

図27.4~図27.11に関連するレジスタを示します。

フラッシュメモリ制御レジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	0	0	0	0	0	0	1

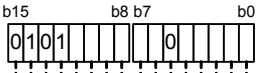
シンボル	アドレス	リセット後の値
FMCR	0006h番地	0000 0001b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	予約ビット	“1” にしてください	RW
— (b6-b1)	予約ビット	“0” にしてください	RW
FEW	CPU書き換えモード設定ビット (注2)	0: 通常動作モード 1: CPU書き換えモード	RW

注1. このレジスタはPRRレジスタの値を“AAh”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. VRCRレジスタのMRSビットが“1”(メインレギュレータ停止) のとき、E2FMレジスタのEWMビットが“1”(イレーズ/プログラム許可) のときは、このビットを“1”にしないでください。

図 27.4　FMCR レジスタ

フラッシュメモリ書き換えバス制御レジスタ (注1)



シンボル	アドレス	リセット後の値
FEBC	001Dh-001Ch番地	0000h

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
FWR0	リード信号パルス幅設定ビット	b3 b2 b1 b0 0 0 0 0 : *wr* = 1 0 0 0 1 : *wr* = 2 0 1 0 1 : *wr* = 3 0 1 1 0 : *wr* = 4 1 0 1 0 : *wr* = 5 1 0 1 1 : *wr* = 6 1 1 1 1 : *wr* = 7 上記以外 : 設定しないでください	RW
FWR1			RW
FWR2			RW
FWR3			RW
FWR4	リード信号パルス幅微調整ビット	0: 微調整しない 1: 微調整する	RW
— (b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW
MPY0	設定サイクル数逓倍ビット	b7 b6 0 0 : 設定しないでください 0 1 : 設定しないでください 1 0 : *mpy* = 3 1 1 : *mpy* = 4	RW
MPY1			RW
FSUW0	ライト前アドレスセットアップ時間設定ビット	b9 b8 0 0 : *suw* = 0 0 1 : *suw* = 1 1 0 : *suw* = 2 1 1 : *suw* = 3	RW
FSUW1			
FWW0	ライト信号パルス幅設定ビット	b11b10 0 0 : *ww* = 1 0 1 : *ww* = 2 1 0 : *ww* = 3 1 1 : *ww* = 4	RW
FWW1			
— (b12)	予約ビット	“1”にしてください	RW
— (b13)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b14)	予約ビット	“1”にしてください	RW
— (b15)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはPRRレジスタの値を“AAh”(書き込み許可)にした後で書き換えてください。

図 27.5　FEBC レジスタ

フラッシュレジスタプロテクト解除レジスタ0

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0	0	0	0	

シンボル	アドレス	リセット後の値
FPR0	40008h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
PR0	プロテクト解除ビット	FMR0、FMR1レジスタに対する書き込み許可 0: 書き込み禁止 1: 書き込み許可	RW
— (b7-b1)	予約ビット	“0”にしてください	RW

図 27.6　FPR0 レジスタ

フラッシュメモリ制御レジスタ0 (注1、2)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0		0					

シンボル	アドレス	リセット後の値
FMR0	40000h番地	0X01 XX00b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
EWM	書き換えモード選択ビット	0: EW0モード 1: EW1モード	RW
LBM	ロックビットリードモード設定ビット	0: データバス経由で読み出し　(注3) 1: LBSビットで読み出し　(注4)	RW
LBS	ロックビットステータスフラグ　(注4)	0: ロック 1: 非ロック	RO
RRDY	リードレディフラグ	0: ビジー 1: レディ	RO
FCA	最終コマンド受け付けビジーフラグ	0: 最終コマンド受け付け可 1: 最終コマンド受け付けビジー	RO
— (b5)	予約ビット	“0”にしてください	RW
— (b6)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
— (b7)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはFPR0レジスタのPR0ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. このレジスタは、ウェイトモード、ストップモードから復帰した後、リセットされます。
注3. リードロックビットステータスモードに移行した後、対象ブロック内の任意の偶数番地を読むと、読み出したデータのビット6にロックビットの状態が反映されます。
注4. リードロックビットステータスコマンドを発行すると、LBSビットにロックビットの状態が反映されます。

図 27.7　FMR0 レジスタ

フラッシュメモリ制御レジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
0	0	0	0		0		0

シンボル	アドレス	リセット後の値
FMR1	40009h番地	0000 0010b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b0)	予約ビット	“0”にしてください	RW
RR	リセット解除ビット	0: リセット 1: リセット解除	RW
— (b2)	予約ビット	“0”にしてください	RW
LBD	ロックビットプロテクト無効化ビット	0: ロックビットプロテクト有効 1: ロックビットプロテクト無効	RW
— (b7-b4)	予約ビット	“0”にしてください	RW

注1. このレジスタはFPR0レジスタのPR0ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。

図 27.8　FMR1 レジスタ

フラッシュメモリステータスレジスタ0

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
FMSR0	40001h番地	1000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b3-b0)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
WERR	プログラムエラーフラグ	0: プログラムエラーなし 1: プログラムエラー発生	RO
EERR	イレーズエラーフラグ	0: イレーズエラーなし 1: イレーズエラー発生　(注1)	RO
— (b6)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
RDY	レディフラグ	0: ビジー 1: レディ	RO

注1. イレーズエラーが発生した場合は、クリアステータスレジスタコマンド発行後再度ブロックイレーズコマンドを発行し、イレーズエラーが発生しなくなってから少なくとも3回ブロックイレーズを実施してください。

図 27.9　FMSR0 レジスタ

ブロックプロテクトビットモニタレジスタ0 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
FBPM0	4000Ah番地	X?X? ????b (注1)

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
BP0	Block0プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
BP1	Block1プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
BP2	Block2プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
BP3	Block3プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
BP4	Block4プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
— (b5)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
BP5	Block5プロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
— (b7)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO

注1. このレジスタはリセット解除後1回だけ更新されます。値はそのときのプロテクトビットの状態が反映されます。

図 27.10 FBPM0 レジスタ

ブロックプロテクトビットモニタレジスタ1 (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
FBPM1	4000Bh番地	XXX? ?XXXb (注1)

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
— (b2-b0)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
BPB	BlockBプロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
BPA	BlockAプロテクトビットモニタフラグ	0: プロテクト 1: プロテクト解除	RO
— (b7-b5)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO

注1. このレジスタはリセット解除後1回だけ更新されます。値はそのときのプロテクトビットの状態が反映されます。

図 27.11 FBPM1 レジスタ

27.3.1 フラッシュメモリ書き換えバスタイミング設定

フラッシュメモリ書き換えのためのバス設定はFEBCレジスタで行います。ここではFEBCレジスタの設定について詳細に説明します。

バスタイミングの基準となるクロックはCCRレジスタのBCD1～BCD0ビットで設定されるベースクロックです。tsu、tw、tc、thなどの時間はベースクロックのサイクル数で規定します。

フラッシュメモリのリードタイミング図を図27.12に、周辺バスクロック分周値ごとのMPY1~MPY0ビット、FWR4~FWR0ビットの設定値とリードサイクルの関係を表27.6~表27.8に、フラッシュメモリのライトタイミング図を図27.13に、周辺バスクロック分周値ごとのMPY1~MPY0ビット、FSUW1~FSUW0ビット、FWW1~FWW0ビットの設定値とライトサイクルの関係を表27.9~表27.11にそれぞれ示します。

電気的特性に示すCPU書き換えモードのタイミング条件を満たすリードサイクル、ライトサイクルのタイミングをこれらの表から選択します。

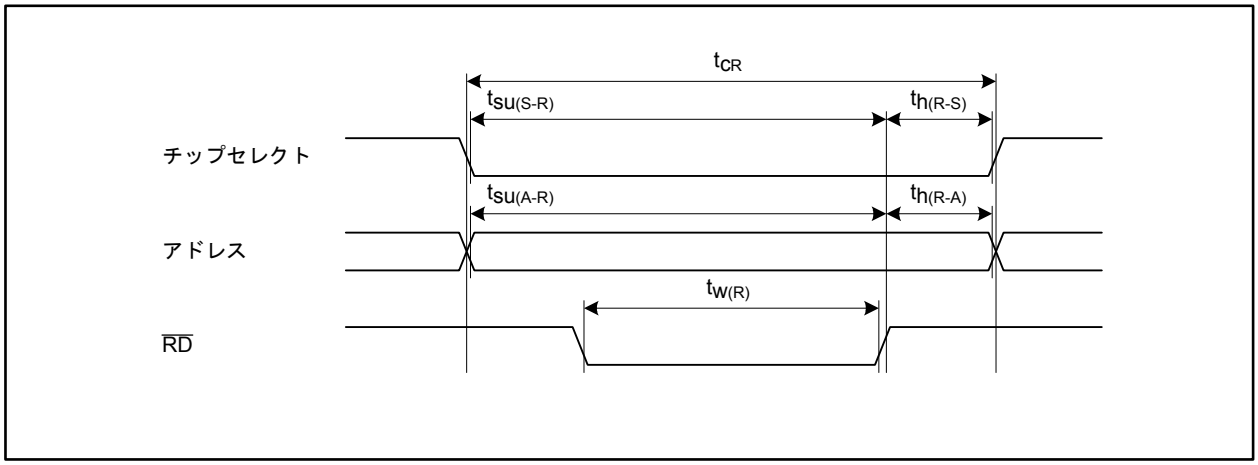


図 27.12 リードタイミング

表 27.6 周辺バスクロック2分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FWR4~FWR0ビットの設定値とリードサイクルの関係(単位:サイクル)

FWR3~FWR0ビットの設定値		FWR4ビットの設定値	MPY1~MPY0ビットの設定値							
			10b				11b			
			mpy=3				*mpy*=4			
			tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)	tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)
0000b	*wr*=1	0	4	3	4	0	6	5	6	0
		1	6	5	6	0	6	5	6	0
0001b	*wr*=2	0	8	7	8	0	10	9	10	0
		1	8	7	8	0	10	9	10	0
0101b	*wr*=3	0	10	9	10	0	14	13	14	0
		1	12	11	12	0	14	13	14	0
0110b	*wr*=4	0	14	13	14	0	18	17	18	0
		1	14	13	14	0	18	17	18	0
1010b	*wr*=5	0	16	15	16	0	22	21	22	0
		1	18	17	18	0	22	21	22	0
1011b	*wr*=6	0	20	19	20	0	26	25	26	0
		1	20	19	20	0	26	25	26	0
1111b	*wr*=7	0	22	21	22	0	30	29	30	0
		1	24	23	24	0	30	29	30	0

表 27.7　周辺バスクロック3分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FWR4~FWR0ビットの設定値とリードサイクルの関係(単位:サイクル)

FWR3~FWR0ビットの設定値		FWR4ビットの設定値	MPY1~MPY0ビットの設定値							
			10b				11b			
			mpy=3				*mpy*=4			
			tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)	tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)
0000b	*wr*=1	0	6	4.5	6	0	6	4.5	6	0
		1	6	4.5	6	0	6	4.5	6	0
0001b	*wr*=2	0	9	7.5	9	0	9	7.5	9	0
		1	9	7.5	9	0	12	10.5	12	0
0101b	*wr*=3	0	12	10.5	12	0	15	13.5	15	0
		1	12	10.5	12	0	15	13.5	15	0
0110b	*wr*=4	0	15	13.5	15	0	18	16.5	18	0
		1	15	13.5	15	0	18	16.5	18	0
1010b	*wr*=5	0	18	16.5	18	0	21	19.5	21	0
		1	18	16.5	18	0	24	22.5	24	0
1011b	*wr*=6	0	21	19.5	21	0	27	25.5	27	0
		1	21	19.5	21	0	27	25.5	27	0
1111b	*wr*=7	0	24	22.5	24	0	30	28.5	30	0
		1	24	22.5	24	0	30	28.5	30	0

表 27.8　周辺バスクロック4分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FWR4~FWR0ビットの設定値とリードサイクルの関係(単位:サイクル)

FWR3~FWR0ビットの設定値		FWR4ビットの設定値	MPY1~MPY0ビットの設定値							
			10b				11b			
			mpy=3				*mpy*=4			
			tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)	tsu(S-R), tsu(A-R)	tw(R)	tcR	th(R-S), th(R-A)
0000b	*wr*=1	0	4	2	4	0	8	6	8	0
		1	8	6	8	0	8	6	8	0
0001b	*wr*=2	0	8	6	8	0	12	10	12	0
		1	8	6	8	0	12	10	12	0
0101b	*wr*=3	0	12	10	12	0	16	14	16	0
		1	12	10	12	0	16	14	16	0
0110b	*wr*=4	0	16	14	16	0	20	18	20	0
		1	16	14	16	0	20	18	20	0
1010b	*wr*=5	0	16	14	16	0	24	22	24	0
		1	20	18	20	0	24	22	24	0
1011b	*wr*=6	0	20	18	20	0	28	26	28	0
		1	20	18	20	0	28	26	28	0
1111b	*wr*=7	0	24	22	24	0	32	30	32	0
		1	24	22	24	0	32	30	32	0

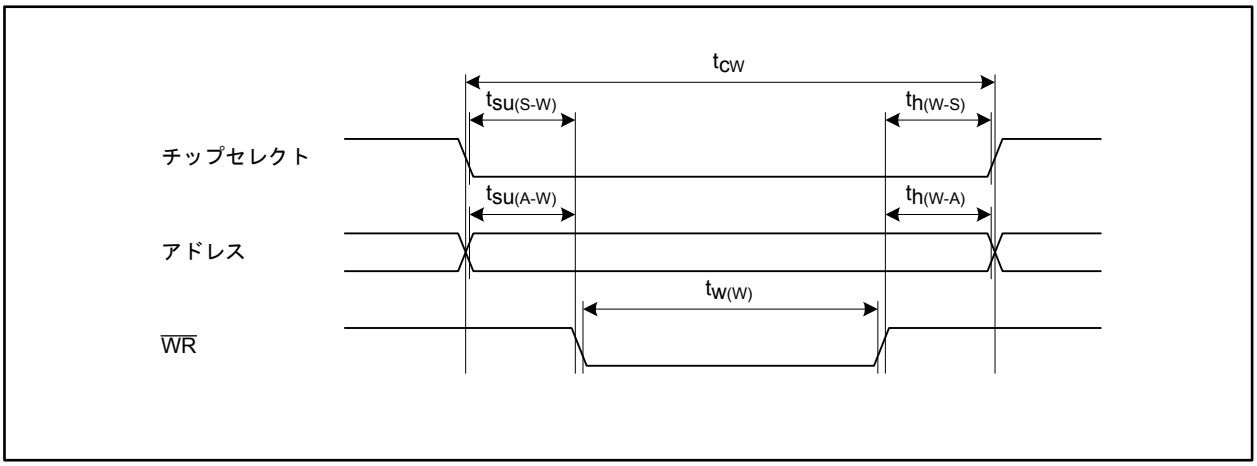


図 27.13 ライトタイミング

表 27.9 周辺バスクロック2分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FSUW1~FSUW0、FWW1~FWW0ビットの設定値とライトサイクルの関係(単位:サイクル)

FSUW1~FSUW0ビットの設定値		FWW1~FWW0ビットの設定値		MPY1~MPY0ビットの設定値							
				10b				11b			
				mpy=3				*mpy*=4			
				tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcw	th(W-S), th(W-A)	tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcw	th(W-S), th(W-A)
00b	*suw*=0	00b	*ww*=1	1	3	6	2	1	4	6	1
		01b	*ww*=2	1	6	8	1	1	8	10	1
		10b	*ww*=3	1	9	12	2	1	12	14	1
		11b	*ww*=4	1	12	14	1	1	16	18	1
01b	*suw*=1	00b	*ww*=1	4	3	8	1	5	4	10	1
		01b	*ww*=2	4	6	12	2	5	8	14	1
		10b	*ww*=3	4	9	14	1	5	12	18	1
		11b	*ww*=4	4	12	18	2	5	16	22	1
10b	*suw*=2	00b	*ww*=1	7	3	12	2	9	4	14	1
		01b	*ww*=2	7	6	14	1	9	8	18	1
		10b	*ww*=3	7	9	18	2	9	12	22	1
		11b	*ww*=4	7	12	20	1	9	16	26	1
11b	*suw*=3	00b	*ww*=1	10	3	14	1	13	4	18	1
		01b	*ww*=2	10	6	18	2	13	8	22	1
		10b	*ww*=3	10	9	20	1	13	12	26	1
		11b	*ww*=4	10	12	24	2	13	16	30	1

表 27.10 周辺バスクロック3分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FSUW1~FSUW0、FWW1~FWW0ビットの設定値とライトサイクルの関係(単位:サイクル)

FSUW1~FSUW0ビットの設定値		FWW1~FWW0ビットの設定値		MPY1~MPY0ビットの設定値							
				10b				11b			
				mpy=3				*mpy*=4			
				tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcW	th(W-S), th(W-A)	tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcW	th(W-S), th(W-A)
00b	*suw*=0	00b	*ww*=1	1	3	6	2	1	4	6	1
		01b	*ww*=2	1	6	9	2	1	8	12	3
		10b	*ww*=3	1	9	12	2	1	12	15	2
		11b	*ww*=4	1	12	15	2	1	16	18	1
01b	*suw*=1	00b	*ww*=1	4	3	9	2	6	3	12	3
		01b	*ww*=2	4	6	12	2	6	7	15	2
		10b	*ww*=3	4	9	15	2	6	11	18	1
		11b	*ww*=4	4	12	18	2	6	15	24	3
10b	*suw*=2	00b	*ww*=1	7	3	12	2	9	4	15	2
		01b	*ww*=2	7	6	15	2	9	8	18	1
		10b	*ww*=3	7	9	18	2	9	12	24	3
		11b	*ww*=4	7	12	21	2	9	16	27	2
11b	*suw*=3	00b	*ww*=1	10	3	15	2	13	4	18	1
		01b	*ww*=2	10	6	18	2	13	8	24	3
		10b	*ww*=3	10	9	21	2	13	12	27	2
		11b	*ww*=4	10	12	24	2	13	16	30	1

表 27.11 周辺バスクロック4分周時におけるMPY1~MPY0ビット、FSUW1~FSUW0、FWW1~FWW0ビットの設定値とライトサイクルの関係(単位:サイクル)

FSUW1~FSUW0ビットの設定値		FWW1~FWW0ビットの設定値		MPY1~MPY0ビットの設定値							
				10b				11b			
				mpy=3				*mpy*=4			
				tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcW	th(W-S), th(W-A)	tsu(S-W), tsu(A-W)	tw(W)	tcW	th(W-S), th(W-A)
00b	*suw*=0	00b	*ww*=1	1	3	8	4	1	4	8	3
		01b	*ww*=2	1	6	8	1	1	8	12	3
		10b	*ww*=3	1	9	12	2	1	12	16	3
		11b	*ww*=4	1	12	16	3	1	16	20	3
01b	*suw*=1	00b	*ww*=1	4	3	8	1	5	4	12	3
		01b	*ww*=2	4	6	12	2	5	8	16	3
		10b	*ww*=3	4	9	16	3	5	12	20	3
		11b	*ww*=4	4	12	20	4	5	16	24	3
10b	*suw*=2	00b	*ww*=1	8	2	12	2	9	4	16	3
		01b	*ww*=2	8	5	16	3	9	8	20	3
		10b	*ww*=3	8	8	20	4	9	12	24	3
		11b	*ww*=4	8	11	20	1	9	16	28	3
11b	*suw*=3	00b	*ww*=1	10	3	16	3	13	4	20	3
		01b	*ww*=2	10	6	20	4	13	8	24	3
		10b	*ww*=3	10	9	20	1	13	12	28	3
		11b	*ww*=4	10	12	24	2	13	16	32	3

27.3.2 ソフトウェアコマンド

CPU書き換えモードにおいて、フラッシュメモリに対してソフトウェアコマンドを発行すると、フラッシュメモリの書き換えや消去を行うことができます。

コマンドの書き込み、データの読み書きは16ビット単位で行ってください。

表27.12にソフトウェアコマンドの一覧を示します。

表27.12 ソフトウェアコマンド一覧

ソフトウェアコマンド	第一コマンド		第二コマンド	
	アドレス	データ	アドレス	データ
リードアレイモード移行	FFFFF800h	00FFh	—	—
リードステータスレジスタモード移行(注1)	FFFFF800h	0070h	—	—
クリアステータスレジスタ	FFFFF800h	0050h	—	—
プログラム(注2)	FFFFF800h	0043h	WA	WD
ブロックイレーズ	FFFFF800h	0020h	BA	00D0h
ロックビットプログラム	FFFFF800h	0077h	BA	00D0h
リードロックビットステータス	FFFFF800h	0071h	BA	00D0h
リードロックビットステータスモード移行(注3)	FFFFF800h	0071h	—	—
プロテクトビットプログラム	FFFFF800h	0067h	PBA	00D0h
リードプロテクトビットステータスモード移行(注3)	FFFFF800h	0061h	—	—

WA:　書き込みアドレス(偶数)
WD:　書き込みデータ(16ビット)
BA:　対象ブロック内の任意の偶数番地
PBA:　プロテクトビットのアドレス(表27.4参照)

注1. EW1モードでは使用できません。

注2. プログラムは64ビット(4ワード)単位で行います。第二コマンド以降第五コマンドまでが一連のコマンドです。アドレス(WA)の上位29ビットは固定、下位3ビットは、第二コマンドから順に、000b-010b-100b-110b (0h-2h-4h-6hまたは8h-Ah-Ch-Eh)となるように指定してください。

注3. RAM上のプログラムから発行してください。

27.3.3 モード遷移

CPU書き換えモードにおけるフラッシュメモリの動作モードには以下の4つがあります。

- リードアレイモード
- リードステータスレジスタモード
- リードロックビットステータスモード
- リードプロテクトビットステータスモード

これらのモードにあるときにフラッシュメモリを読み出すと、それぞれ、メモリの内容、ステータスレジスタの内容、読み出したブロックのロックビットの状態、プロテクトビットの状態が読み出せます。これらの内容をそれぞれ表 27.13~表 27.15に示します。

表 27.13 ステータスレジスタの内容

ビット	ビット シンボル	ビット名	内容	
			“0”	“1”
b15-b8	—	無効ビット	—	—
b7	SR7	シーケンサ ステータス	ビジー	レディ
b6	—	予約ビット	—	—
b5	SR5	イレーズステータス	正常終了	異常終了
b4	SR4	プログラムステータス	正常終了	異常終了
b3	—	予約ビット	—	—
b2	—	予約ビット	—	—
b1	—	予約ビット	—	—
b0	—	予約ビット	—	—

表 27.14 ロックビットステータスの内容

ビット	ビット シンボル	ビット名	内容	
			“0”	“1”
b15-b7	—	無効ビット	—	—
b6	LBS	ロックビットステータス	ロック	非ロック
b5-b0	—	無効ビット	—	—

表 27.15 プロテクトビットステータスの内容

ビット	ビット シンボル	ビット名	内容	
			“0”	“1”
b15-b7	—	無効ビット	—	—
b6	PBS	プロテクトビットステータス	プロテクト	非プロテクト
b5-b0	—	無効ビット	—	—

これらのモードからソフトウェアコマンドを発行することで、フラッシュメモリの書き込みや消去が実行できます。プログラム、イレーズが終了した後は、自動的にリードアレイモード(EW1モードの場合)またはリードステータスレジスタモード(EW0モードの場合)に戻ります。

27.3.4 コマンド発行手順

ここではソフトウェアコマンドの発行手順について説明します。
コマンドはFMSR0レジスタのRDYビットが“1”(レディ)のときに発行してください。

27.3.4.1 リードアレイモード移行コマンド

リードアレイモードに移行するコマンドです。
FFFFF800h番地に“00FFh”を書くと、フラッシュメモリはリードアレイモードになり、フラッシュメモリ内の任意の番地の内容を読み出せるようになります。
EW1モードに入るとフラッシュメモリは常にリードアレイモードになっています。

27.3.4.2 リードステータスレジスタモード移行コマンド

リードステータスレジスタモードに移行するコマンドです。
FFFFF800h番地に“0070h”を書くと、フラッシュメモリのどの番地を読んでも、ステータスレジスタの内容が読めます。
EW1モードではこのコマンドを発行しないでください。

27.3.4.3 クリアステータスレジスタコマンド

フラッシュメモリ内部のステータスレジスタをリセットするコマンドです。
FFFFF800h番地に“0050h”を書くと、ステータスレジスタのSR5、SR4ビットが“0”(正常終了)になります(表27.13参照)。その結果、FMSR0レジスタのEERR、WERRビットも“0”になります。

27.3.4.4 プログラムコマンド

4ワード(8バイト)単位でフラッシュメモリにデータを書くコマンドです。

FFFFF800h番地に“0043h”を書き、続けて8n+0番地~8n+6番地にデータを書くと、自動書き込み(データのプログラムとベリファイ)を開始します。最終コマンド発行前にはFMR0レジスタのFCAビットが“0”になることを確認してください。

自動書き込みの終了はFMSR0レジスタのRDYビットで確認できます。RDYビットは、自動書き込み中は“0”(ビジー)、終了後は“1”(レディ)になります。

自動書き込みの結果はFMSR0レジスタのWERRビットで確認できます(「27.3.5 ステータスチェック」参照)。

なお、すでにプログラムされた番地に追加書き込みをしないでください。

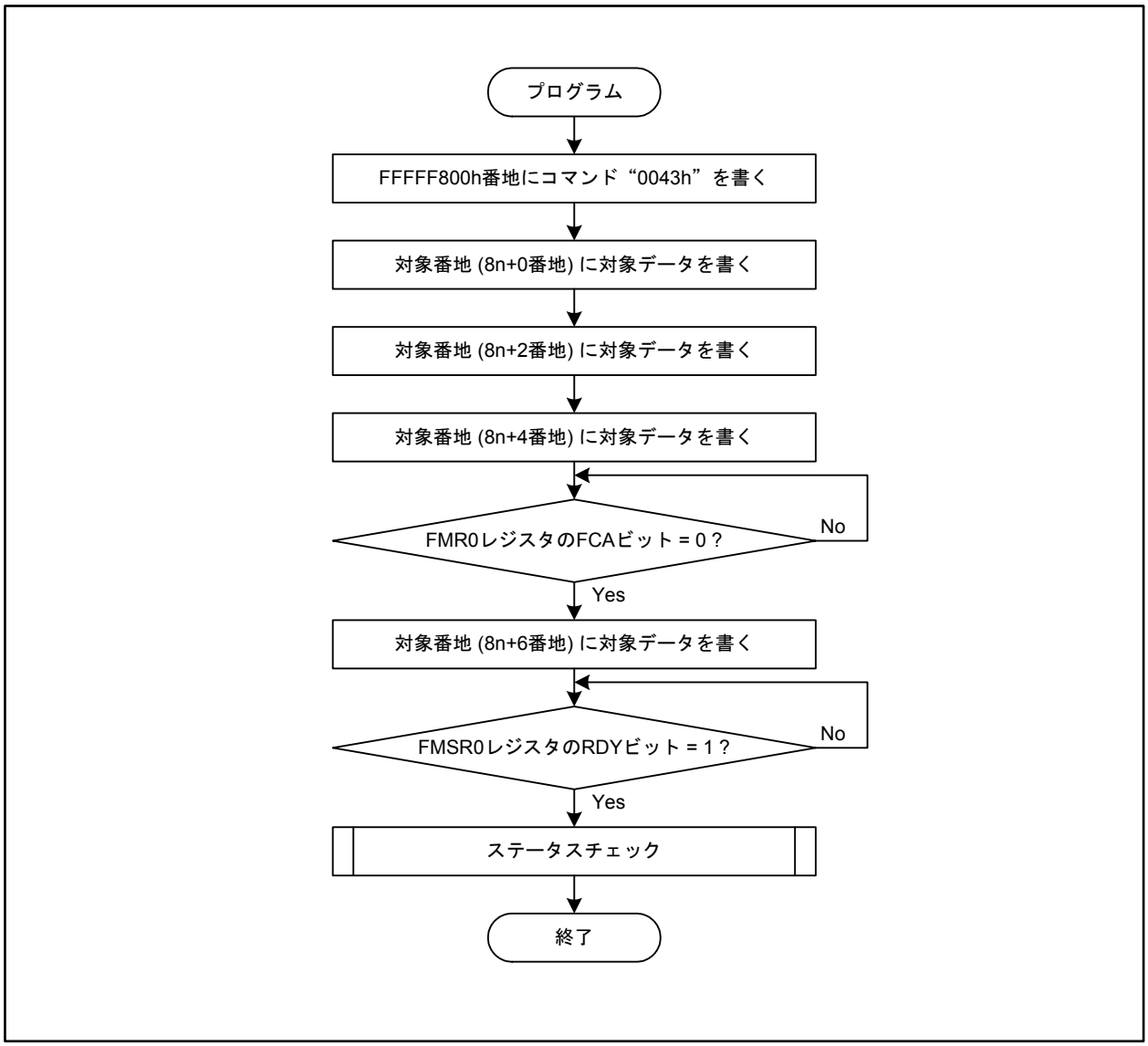


図 27.14 プログラムコマンド発行のフローチャート

27.3.4.5 ブロックイレーズコマンド

フラッシュメモリの指定したブロックを消去するコマンドです。

FFFFF800h番地に“0020h”を書き、FMR0レジスタのFCAビットが“0”になることを確認した後、対象とするブロックの任意の偶数番地に“00D0h”を書くと、指定されたブロックの自動消去(イレーズとベリファイ)を開始します。

自動消去の終了はFMSR0レジスタのRDYビットで確認できます。RDYビットは、自動消去中は“0”(ビジー)、終了後は“1”(レディ)になります。

自動消去の結果はFMSR0レジスタのEERRビットで確認できます(「27.3.5 ステータスチェック」参照)。

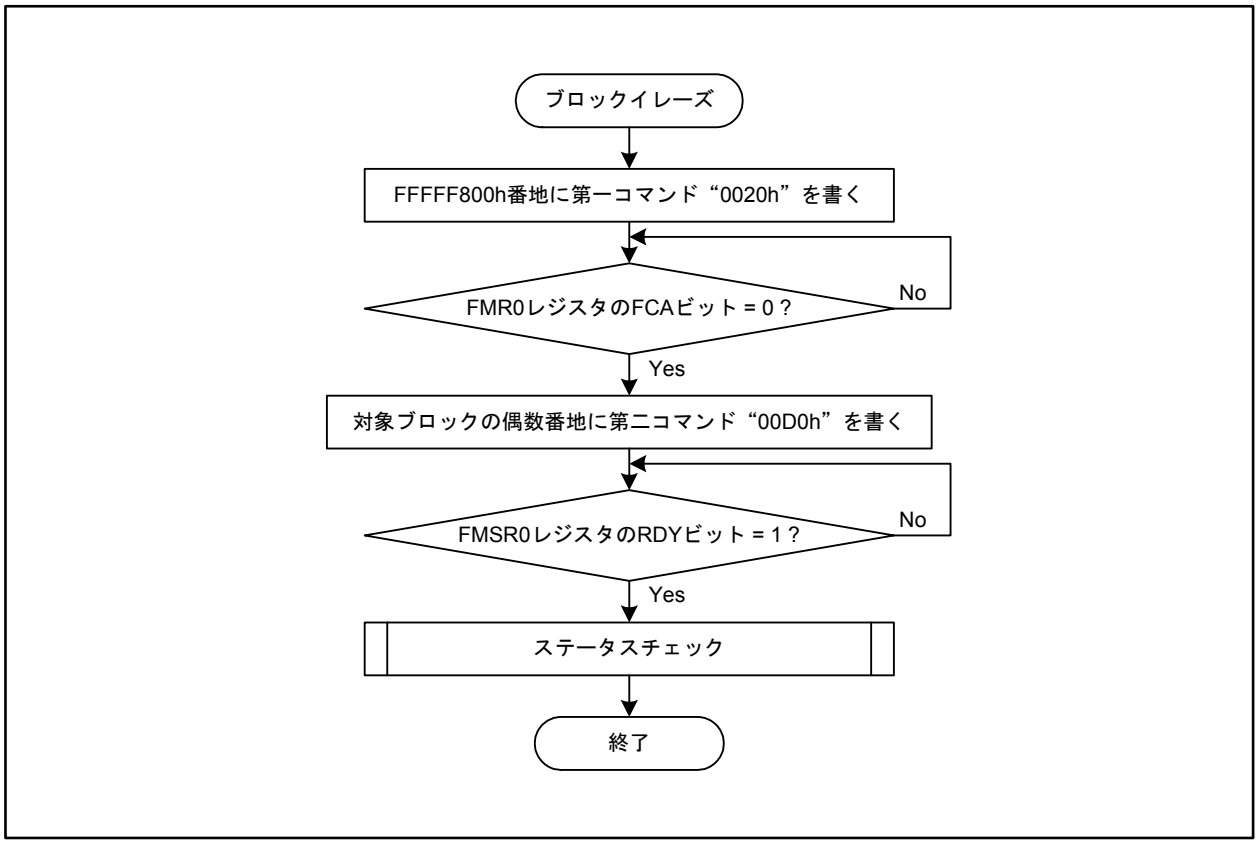


図 27.15 ブロックイレーズコマンド発行のフローチャート

27.3.4.6 ロックビットプログラムコマンド

フラッシュメモリの指定したブロックをロックするコマンドです。

FFFFF800h番地に“0077h”を書き、FMR0レジスタのFCAビットが“0”になることを確認した後、対象とするブロックの任意の偶数番地に“00D0h”を書くと、指定されたブロックのロックビットに“0”(ロック)が書かれます。

ロックビットプログラムの終了はFMSR0レジスタのRDYビットで確認できます。RDYビットは、ロックビットプログラム中は“0”(ビジー)、終了後は“1”(レディ)になります。

ロックビットの状態はFMR0レジスタのLBMビットが“1”(LBSビット経由で読み出し)の場合、リードロックビットステータスコマンドで確認できます(「27.3.4.7 リードロックビットステータスコマンド」参照)。LBMビットが“0”(データバス経由で読み出し)の場合は、リードロックビットステータスモードに移行してください(「27.3.4.8 リードロックビットステータスモード移行コマンド」参照)。

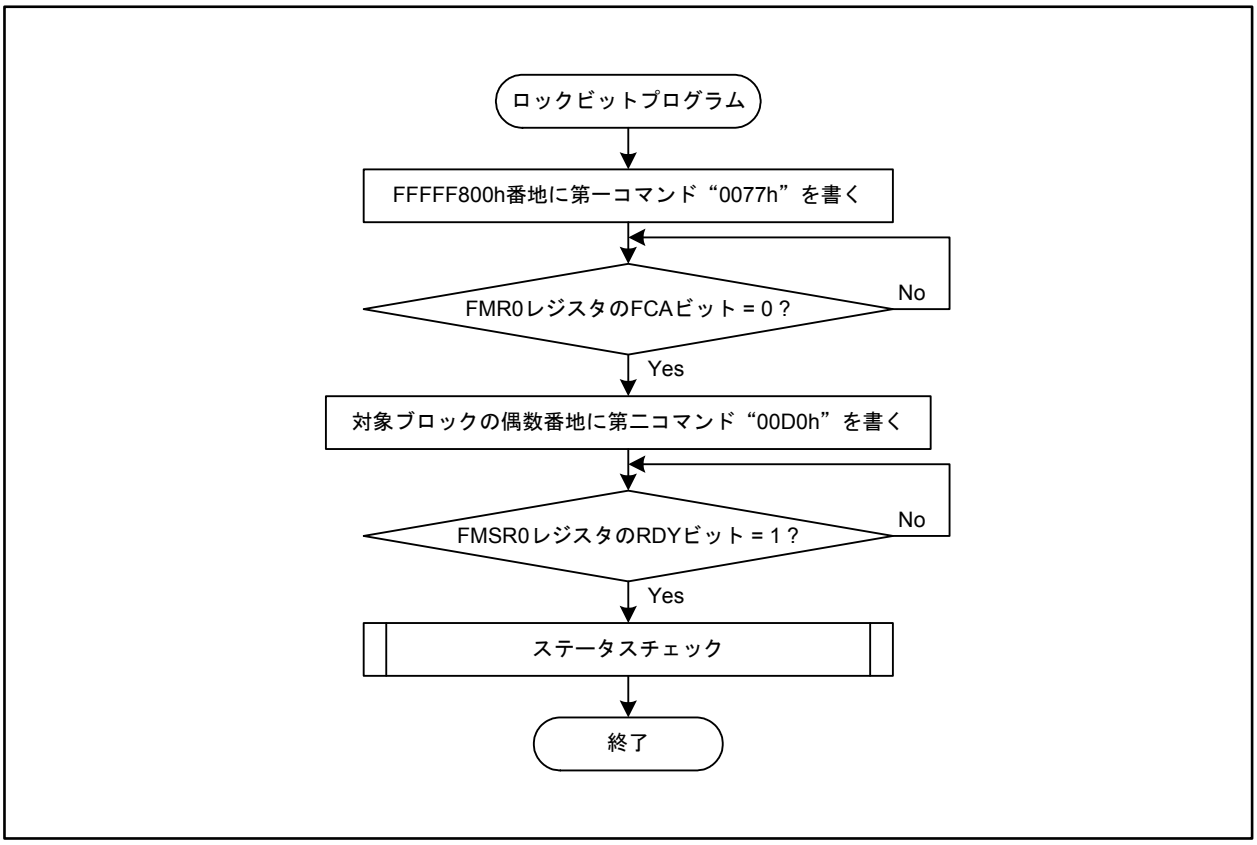


図 27.16 ロックビットプログラムコマンド発行のフローチャート

27.3.4.7　リードロックビットステータスコマンド

フラッシュメモリの指定したブロックのロック状態を確認するコマンドです。FMR0レジスタのLBMビットが“1” (LBSビット経由で読み出し)の場合に使用できます。

FFFFF800h番地に“0071h”を書き、FMR0レジスタのFCAビットが“0”になることを確認した後、対象とするブロックの任意の偶数番地に“00D0h”を書くと、指定されたブロックのロックビットの状態がFMR0レジスタのLBSビットに反映されます。

FMSR0レジスタのRDYビットが“1” (レディ)になってからLBSビットを読んでください。

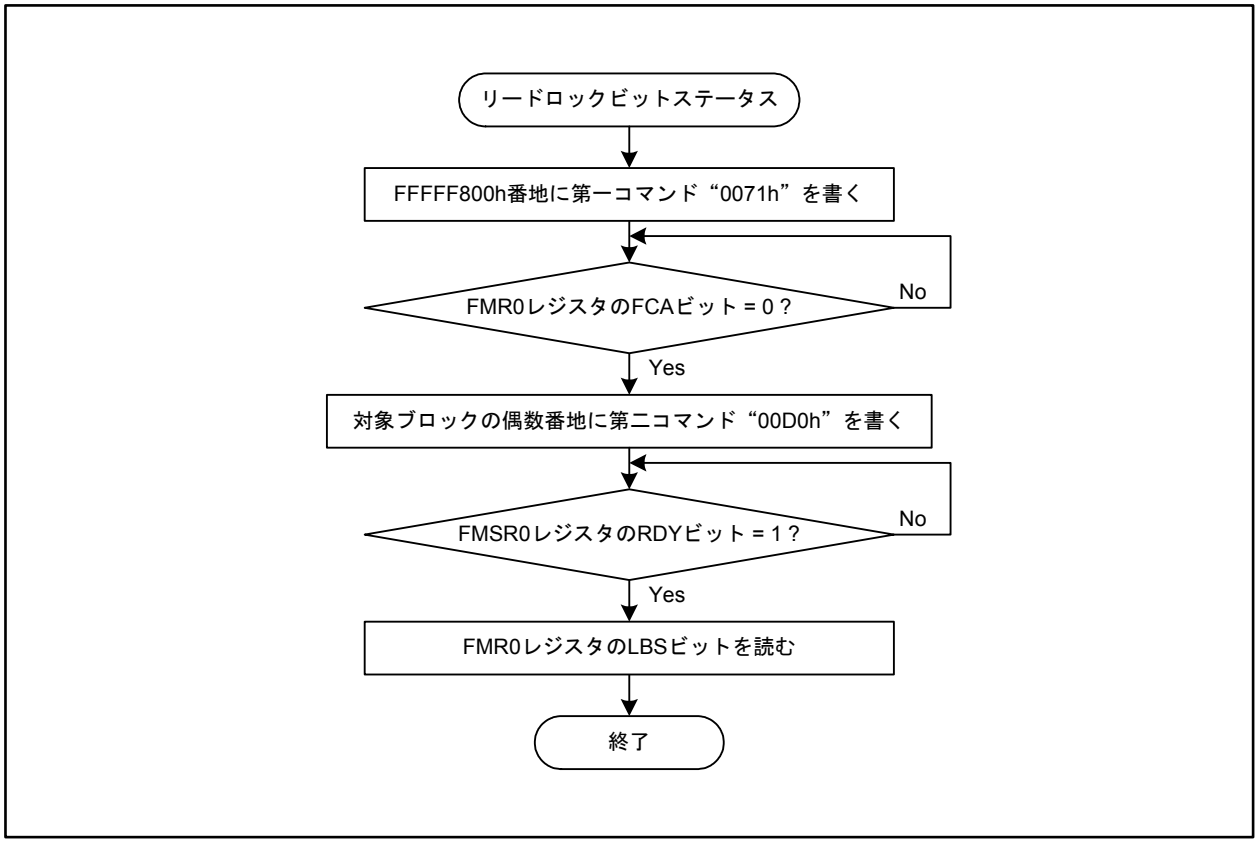


図 27.17　リードロックビットステータスコマンド発行のフローチャート

27.3.4.8　リードロックビットステータスモード移行コマンド

リードロックビットステータスモードに移行するコマンドです。FMR0レジスタのLBMビットが“0” (データバス経由で読み出し)の場合に使用できます。

FFFFF800h番地に“0071h”を書くと、フラッシュメモリのどの番地を読んでも、読んだブロックのロックビットステータス(表27.14参照)が読めます。

このコマンドを発行するプログラムはRAM上で実行してください。

27.3.4.9 プロテクトビットプログラムコマンド

フラッシュメモリの指定したブロックをプロテクトするコマンドです。いずれかのブロックのプロテクトビットを“0”にすると、ROMコードプロテクトが有効になります。

FFFFF800h番地に“0067h”を書き、FMR0レジスタのFCAビットが“0”になることを確認した後、対象とするブロックのプロテクトビット(表27.4参照)に対して“00D0h”を書くと、指定されたブロックのプロテクトビットに“0”(プロテクト)が書かれます。

プロテクトビットプログラムの終了はFMSR0レジスタのRDYビットで確認できます。RDYビットは、プロテクトビットプログラム中は“0”(ビジー)、終了後は“1”(レディ)になります。

プロテクトビットの状態は、リードプロテクトビットステータスモードに移行して(「27.3.4.10 リードプロテクトビットステータスモード移行コマンド」参照)、フラッシュメモリを読み出すことで確認できます。

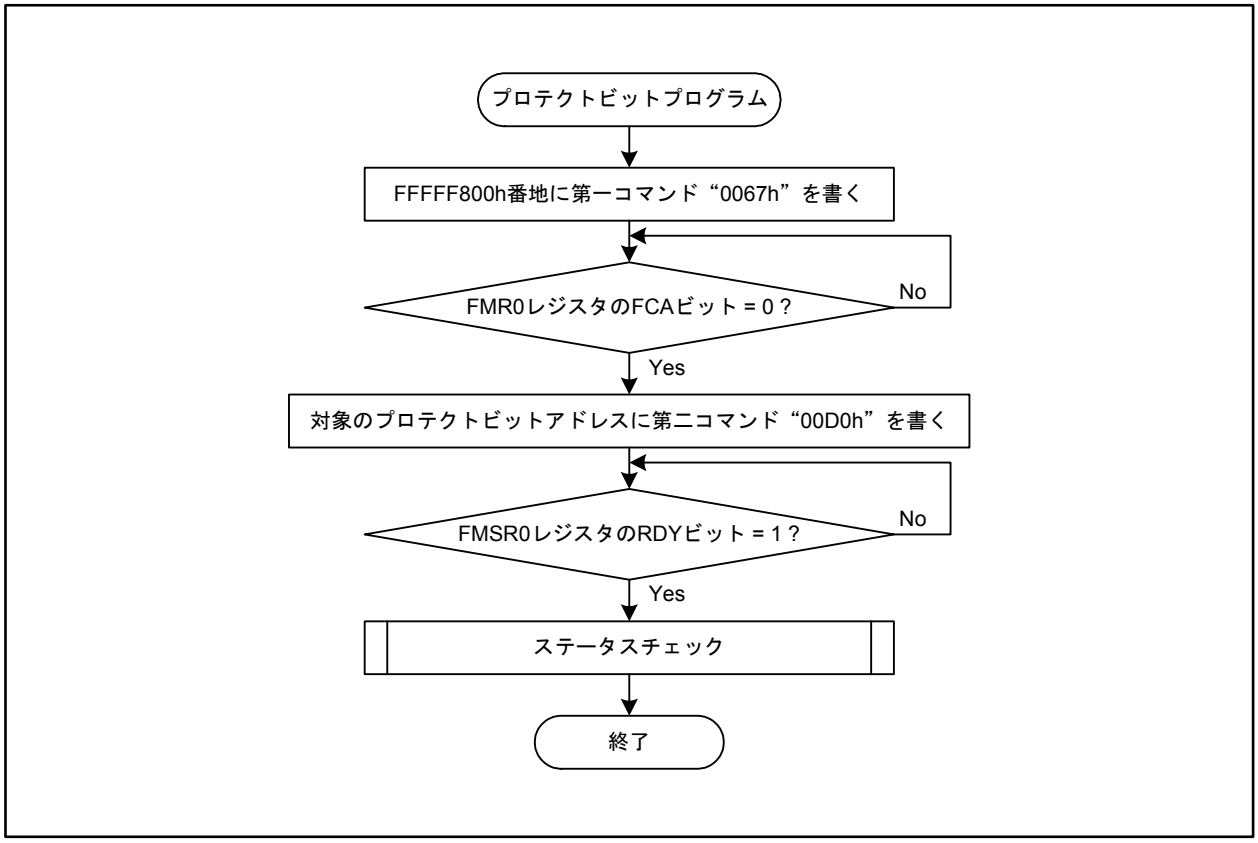


図 27.18 プロテクトビットプログラムコマンド発行のフローチャート

27.3.4.10 リードプロテクトビットステータスモード移行コマンド

リードプロテクトビットステータスモードに移行するコマンドです。

FFFFF800h番地に“0061h”を書くと、フラッシュメモリのどの番地を読んでも、読んだブロックのプロテクトビットステータス(表27.15参照)が読めます。

このコマンドを発行するプログラムはRAM上で実行してください。

27.3.5 ステータスチェック

ソフトウェアコマンドが正常に実行できたかどうかは、FMSR0レジスタのEERR、WERRビット、もしくはステータスレジスタのSR5、SR4ビットを読むことで確認できます。

これらのビットの意味を表27.16に、ステータスチェックのフロー例を図27.19に示します。

表 27.16 ステータスとエラー内容

FMSR0レジスタ (ステータスレジスタ)		エラー内容	エラー発生原因
EERRビット (SR5ビット)	WERRビット (SR4ビット)		
1	1	コマンドシーケンスエラー	• 第二コマンドまであるソフトウェアコマンドの最終コマンドで“00D0h”もしくは“00FFh”(コマンドキャンセル)以外の値を書いた • アドレスを指定するコマンドで実在しないアドレスを指定した
1	0	イレーズエラー	• ロックされたブロックをイレーズしようとした • 対象のブロックが正しくイレーズできなかった
0	1	プログラムエラー	• ロックされたブロックにプログラムしようとした • データが正しくプログラムできなかった • ロックビットが正しくプログラムできなかった • プロテクトビットが正しくプログラムできなかった
0	0	正常終了	

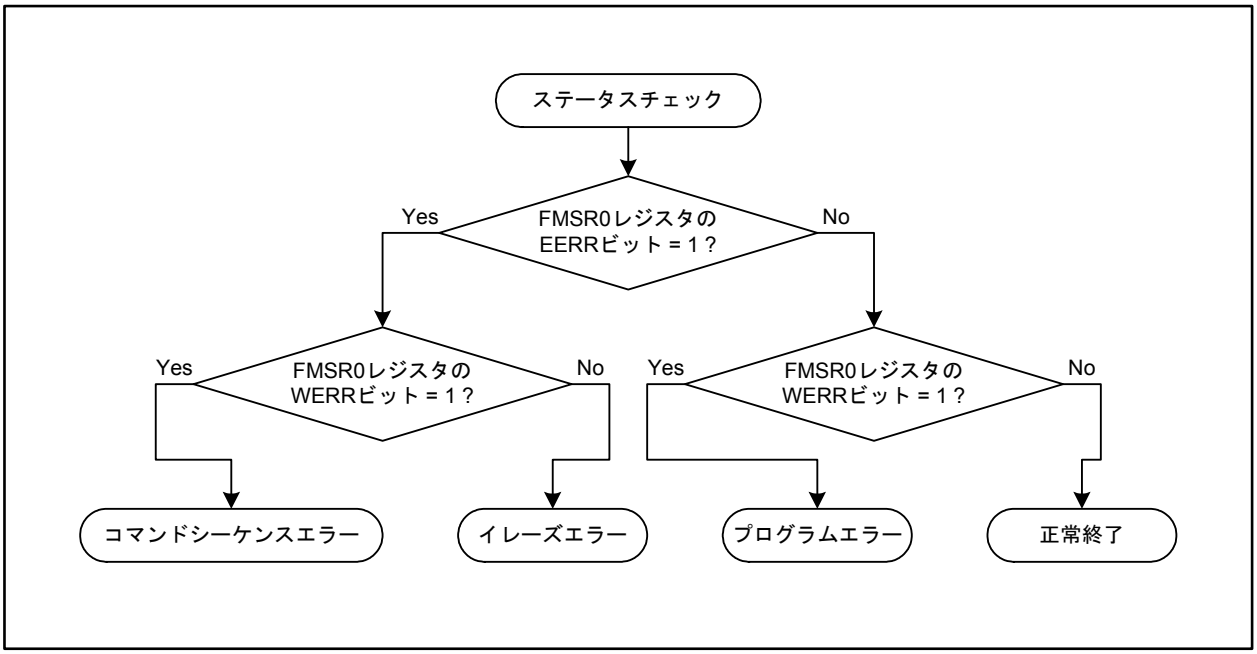


図 27.19 ステータスチェックのフローチャート

エラー発生時は、クリアステータスレジスタコマンドを発行してからエラー処理を行ってください。

プログラムが正しいにもかかわらずイレーズエラーやプログラムエラーが頻発する場合、当該ブロックは使用できなくなった可能性があります。

27.4 標準シリアル入出力モード

標準シリアル入出力モードでは、R32C/120グループに対応したシリアルライタを使用して、マイクロコンピュータを基板に実装したままフラッシュメモリの内容を書き換えることができます。

シリアルライタについては各メーカにお問い合わせください。また、シリアルライタの操作方法については、シリアルライタのマニュアルを参照してください。

標準シリアル入出力モードには、クロック同期型シリアルインタフェースを使用する標準シリアル入出力モード1と、クロック非同期型シリアルインタフェースを使用する標準シリアル入出力モード2の2種類あります。それぞれの特徴を表27.17に示します。

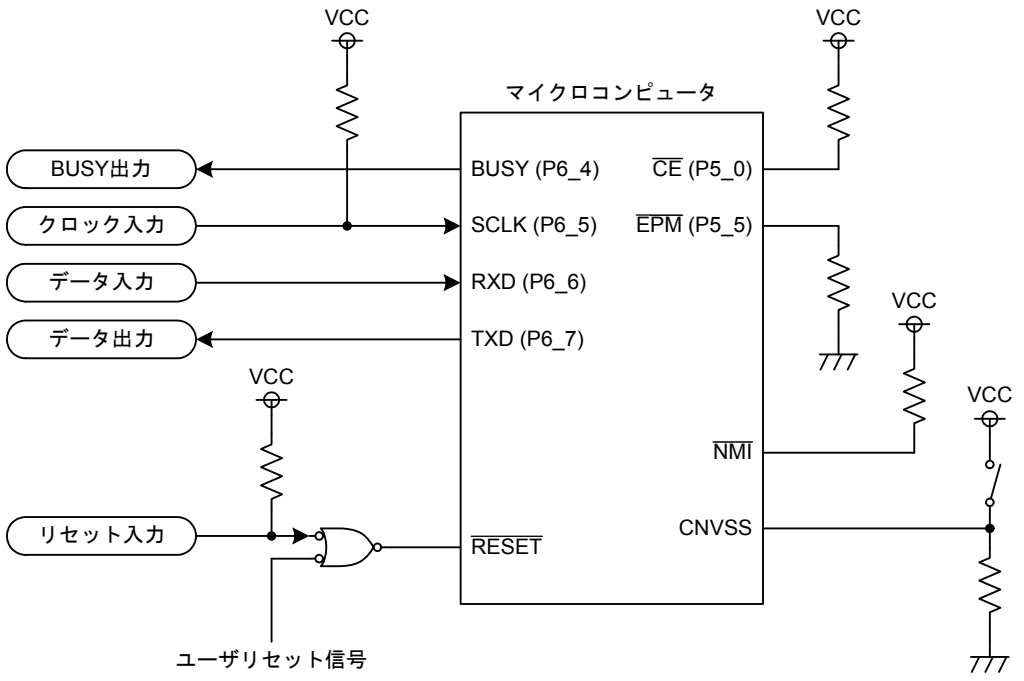
表 27.17 標準シリアル入出力モードの種類と特徴

項目		標準シリアル入出力モード1	標準シリアル入出力モード2
通信方式		クロック同期型シリアル通信	クロック非同期型シリアル通信
通信速度		高速	低速
使用シリアルインタフェース		UART1	UART1
端子の設定	CNVSS	“H”	“H”
	$\overline{\text{CE}}$ (P5_0)	“H”	“H”
	$\overline{\text{EPM}}$ (P5_5)	“L”	“L”
	SCLK (P6_5)	リセット時:“L” 通信時: 送受信クロック	リセット時:“L” 通信時: 未使用
端子の機能	BUSY (P6_4)	BUSY信号	プログラム動作チェック用モニタ
	RXD (P6_6)	シリアルデータ入力	シリアルデータ入力
	TXD (P6_7)	シリアルデータ出力	シリアルデータ出力

表27.18に標準シリアル入出力モードでの端子の機能を示します。また、図27.20に標準シリアル入出力モード1を使用する場合の端子処理例、図27.21に標準シリアル入出力モード2を使用する場合の端子処理例を示します。シリアルライタによって制御する端子が異なりますので、詳細はシリアルライタのマニュアルを参照してください。

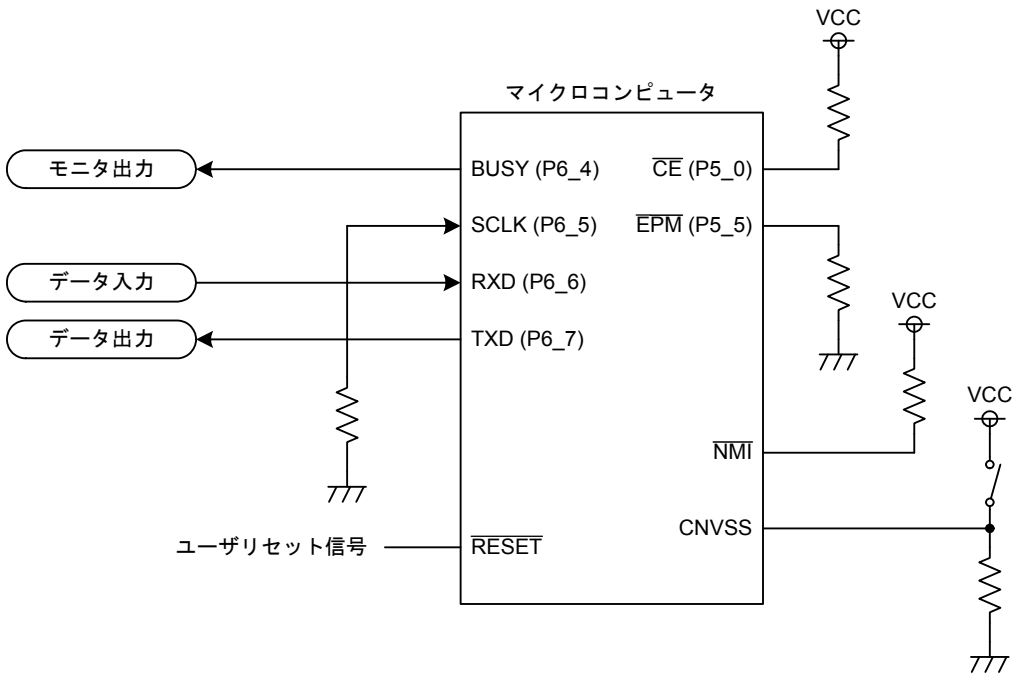
表 27.18 標準シリアル入出力モードでの端子の機能

端子名	名称	入出力	機能
VCC, VSS	電源入力	入力	VCC端子にはプログラム、イレーズの保証電圧を、VSS端子には0Vを入力してください
VDC1, VDC0	平滑コンデンサ接続端子	—	VDC1端子とVDC0端子間に内部ロジック電圧安定用の平滑コンデンサを接続してください
CNVSS	CNVSS	入力	VCCにプルアップしてください
$\overline{\text{RESET}}$	リセット入力	入力	リセット入力端子です。$\overline{\text{RESET}}$端子が“L”の間、XIN端子には20サイクル以上のクロックを入力してください
XIN	メインクロック入力	入力	XINとXOUTの間にはセラミック共振子または水晶振動子を接続してください。外部で生成したクロックを入力する場合は、XINから入力しXOUTは開放にしてください
XOUT	メインクロック出力	出力	
NSD	デバッグポート	入出力	1k~4.7kΩの抵抗で、VCCにプルアップしてください
AVCC, AVSS	アナログ電源入力	入力	AVCCはVCCに接続してください。AVSSはVSSに接続してください
VREF	基準電圧入力	入力	A/DコンバータとD/Aコンバータの基準電圧入力です
P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7	入力ポート	入力	“H”を入力、“L”を入力、または開放してください
P5_0	$\overline{\text{CE}}$入力	入力	“H”を入力してください
P5_1~P5_4	入力ポート	入力	“H”を入力、“L”を入力、または開放してください
P5_5	$\overline{\text{EPM}}$入力	入力	“L”を入力してください
P5_6, P5_7, P6_0~P6_3	入力ポート	入力	“H”を入力、“L”を入力、または開放してください
P6_4	BUSY出力	出力	標準シリアル入出力モード1: BUSY信号の出力端子です 標準シリアル入出力モード2: プログラム動作チェック用モニタ
P6_5	SCLK入力	入力	標準シリアル入出力モード1: シリアルクロックの入力端子です 標準シリアル入出力モード2: “L”を入力してください
P6_6	データ入力 RXD	入力	シリアルデータの入力端子です
P6_7	データ出力 TXD	出力	シリアルデータの出力端子です
P7_0~P7_7, P8_0~P8_4	入力ポート	入力	“H”を入力、“L”を入力、または開放してください
P8_5	$\overline{\text{NMI}}$入力	入力	VCCにプルアップしてください
P8_6, P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	入力ポート	入力	“H”を入力、“L”を入力、または開放してください



注1. シリアルライタによって制御する端子、外付け回路が異なります。詳しくはシリアルライタのマニュアルを参照してください。
注2. この例では、スイッチでCNVSS端子への入力レベルを制御することによって、シングルチップモードと標準シリアル入出力モード1を切り替えています。
注3. フラッシュメモリの書き換え中にユーザリセット信号が“L”になる可能性がある場合は、ジャンパスイッチなどを使用してユーザリセット信号とRESET端子との結線を遮断してください。

図 27.20 標準シリアル入出力モード1の端子処理例



注1. シリアルライタによって制御する端子、外付け回路が異なります。詳しくはシリアルライタのマニュアルを参照してください。
注2. この例では、スイッチでCNVSS端子への入力レベルを制御することによって、シングルチップモードと標準シリアル入出力モード2を切り替えています。
注3. フラッシュメモリの書き換え中にユーザリセット信号が“L”になる可能性がある場合は、ジャンパスイッチなどを使用してユーザリセット信号とRESET端子との結線を遮断してください。

図 27.21 標準シリアル入出力モード2の端子処理例

27.5 パラレル入出力モード

パラレル入出力モードでは、R32C/120 グループに対応したパラレルライタを使用して、フラッシュメモリの内容を書き換えることができます。

パラレルライタについては各メーカにお問い合わせください。また、パラレルライタの操作方法については、パラレルライタのマニュアルを参照してください。

27.6 フラッシュメモリ書き換えに関する注意

27.6.1 電源電圧に関する注意事項

- フラッシュメモリ書き換え中の電源電圧は、電気的特性に定める電圧の範囲で一定の電圧を供給してください。書き換え中に保証値を超える電圧変動があった場合、フラッシュメモリの保証はできません。

27.6.2 ハードウェアリセットに関する注意事項

- フラッシュメモリ書き換え中は、ハードウェアリセットを行わないでください。

27.6.3 フラッシュメモリプロテクトに関する注意点

- IDコードの格納番地に誤ったデータを書くと、標準シリアル入出力モードによるフラッシュメモリの読み書きができなくなります。

27.6.4 プログラム作成上の注意点

- 低速モード、低消費電力モードでは、FMCRレジスタのFEWビットを“1” (CPU書き換えモード)にしないでください。
- E2FMレジスタのEWMビットが“1” (E^2データフラッシュのイレーズ/プログラム許可)の場合は、FMCRレジスタのFEWビットを“1”にしないでください。
- プログラム、ブロックイレーズ、ロックビットプログラム、プロテクトビットプログラムは、NMI、ウォッチドッグタイマ割り込み、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みで中断されます。これらのソフトウェアコマンドが中断された場合、当該ブロックをイレーズした後に再度同じコマンドを実行してください。特にブロックイレーズが中断された場合、ロックビットとプロテクトビットの値は不定になりますので、ロック解除後再度ブロックイレーズを実施してください。

27.6.5 割り込み使用上の注意点

- EW0モード
  - 可変ベクタテーブルにベクタを持つ割り込みは、ベクタをRAM領域に移すことで使用できます。
  - NMI、ウォッチドッグタイマ割り込み、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みは、割り込みが発生すると自動的にリードアレイモードになりますので、フラッシュメモリの書き換え中でも使用できます。割り込み発生時はフラッシュメモリの書き換えが中断され、FMR0、FMSR0レジスタがリセットされます。割り込み処理終了後にFMR1レジスタのLBDビットを“1” (ロックビットプロテクト無効)にしてから再度書き換えプログラムを実行してください。
  - BRK命令、INTO命令、UND命令は、フラッシュメモリ上のデータを参照するため使用できません。

- EW1モード
  - プログラム/ブロックイレーズ中に、可変ベクタテーブルにベクタを持つ割り込みが受け付けられないようにしてください。
  - ウォッチドッグタイマは、カウントソース保護モードで使用しないでください。また、ウォッチドッグタイマ割り込みが発生しないようにしてください。
  - NMI、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みは、割り込みが発生すると自動的にリードアレイモードになりますので、フラッシュメモリの書き換え中でも使用できます。割り込み発生時はフラッシュメモリの書き換えが中断され、FMR0、FMSR0レジスタがリセットされます。割

り込み処理終了後にFMR0レジスタのEWMビットを“1” (EW1モード)、FMR1レジスタのLBDビットを“1” (ロックビットプロテクト無効)にしてから再度書き換えプログラムを実行してください。

27.6.6 書き換え制御プログラムの書き換えに関する注意点

- EW0モード
  - 書き換え制御プログラムが格納されているブロックを書き換えている最中に電源電圧が低下すると、書き換え制御プログラムが正常に書き換えられないため、その後のフラッシュメモリ書き換えができなくなることがあります。書き換えできなくなった場合は、シリアルライタ、パラレルライタを使用して書き換えてください。

- EW1モード
  - 書き換え制御プログラムが格納されているブロックは書き換えないでください。

27.6.7 プログラム、イレーズ回数とソフトウェアコマンド実行時間

- ソフトウェアコマンド(プログラム、ブロックイレーズ、ロックビットプログラム、プロテクトビットプログラム)の実行時間は、プログラム、イレーズ回数の増加とともに長くなります。特に、プログラム、イレーズ回数が電気的特性に定めるプログラム、イレーズ回数を超えると、ソフトウェアコマンドの実行時間は著しく長くなるため、ソフトウェアコマンドの待ち時間の設定は電気的特性に定める最大時間以上に設定してください。

27.6.8 その他の注意事項

- 電気的特性に定めるプログラム、イレーズ回数は当初の性能を保証できるプログラム、イレーズ回数の最大値です。この回数を超えると直ちにプログラム、イレーズができなくなるわけではありません。
- デバッグでプログラム、イレーズを繰り返したチップは、量産時には使用しないでください。

28. E2PROMエミュレーションデータフラッシュ

28.1 概要

E2PROMエミュレーションデータフラッシュ (以下、E2データフラッシュ)は、シリアルE2PROMの長所を取り込んだデータフラッシュです。消去単位がデータフラッシュに比べ大幅に小さく、また CPU の動作を止めることなくイレーズ/プログラムが可能です。

表 28.1にE2データフラッシュの仕様を、図 28.1にブロック図を示します。

表 28.1　E2データフラッシュの仕様

項目	仕様	
	ECCなし時	ECCあり時
メモリサイズ	4Kバイト	2Kバイト
ブロックサイズ	32バイト	16バイト
ブロック数	128ブロック	
プログラム単位	2バイト単位	1バイト単位
イレーズ単位	ブロック単位	
プログラム、イレーズ制御方式	ソフトウェアコマンドによる制御	
ソフトウェアコマンド数	4	
エラー訂正	なし	1ビットのエラーを訂正可能

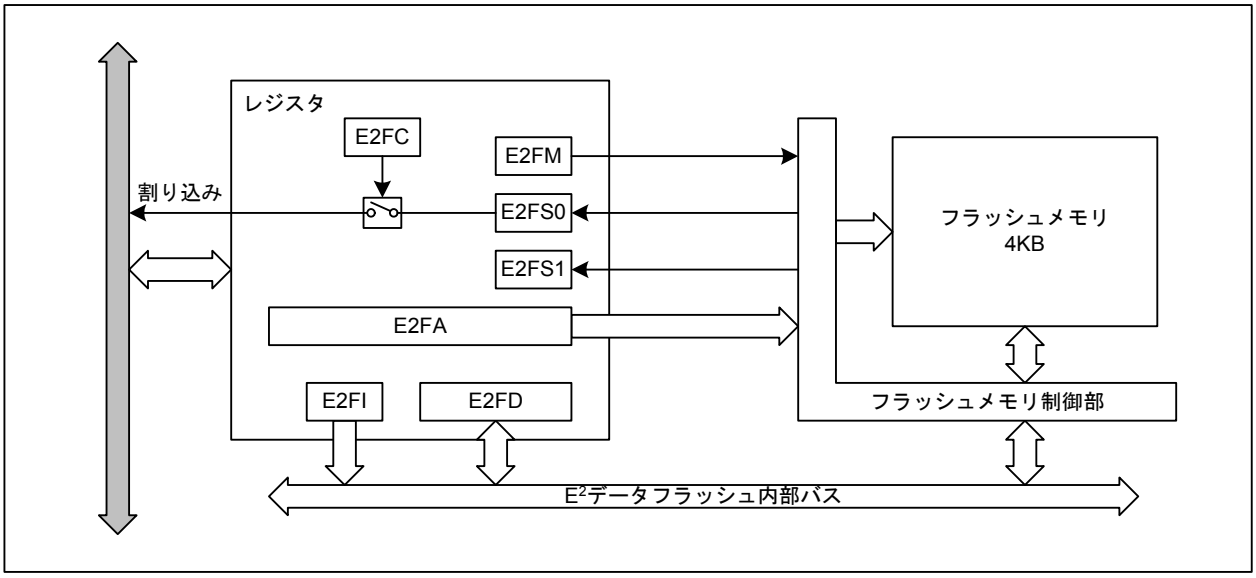


図 28.1　E2データフラッシュのブロック図

E2データフラッシュはSFR領域に配置されたE2FAレジスタ、E2FIレジスタ、E2FDレジスタを介してアクセスします。

図 28.2~図 28.5にE2データフラッシュに関連するレジスタを示します。

E2データフラッシュ モードレジスタ (注1)

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
	0	0	0	0			

シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FM	44FF0h番地	0000 0000b

ビットシンボル	ビット名	機能	RW
OM	動作モード選択ビット	0: スリープモード 1: 通常動作	RW
RST	リセットビット	0: 通常動作またはスリープ (注2) 1: リセット (注3)	RW
EWM	EWモード設定ビット (注4)	0: イレーズ/プログラム禁止 (注5) 1: イレーズ/プログラム許可	RW
— (b6-b3)	予約ビット	“0”にしてください	RW
ECC	ECC制御ビット	0: ECCなし 1: ECCあり	RW

注1. このレジスタはPRCR4レジスタのPRC41ビットを“1”(書き込み許可) にした後で書き換えてください。
注2. このビットを“1”にした後は、E2FS0レジスタのRDYビットが“1”(レディ) になってから、“0”を書いてください。
注3. このビットを“1”にすると、実行中の処理を中断して初期状態に戻ります。なお、レジスタは初期化されません。
注4. VRCRレジスタのMRSビットが“1”(メインレギュレータ停止) のとき、FMCRレジスタのFEWビットが“1”(CPU書き換えモード) のときは、このビットを“1”にしないでください。
注5. E2FIレジスタにどのような値を書いても00F3h (リードコマンド) が設定されます。

図 28.2　E2FM レジスタ

E2データフラッシュ 制御レジスタ

b7	b6	b5	b4	b3	b2	b1	b0
X	X	X	X	X	X	X	

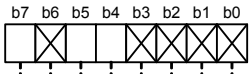
シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FC	44FF2h番地	XXXX XXX0b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
RIE	レディ割り込み許可ビット	0: 割り込み禁止 1: 割り込み許可 (注1)	RW
— (b7-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

注1. このビットが“1”のとき、E2FS0レジスタのRDYビットが“1”になると、割り込み要求が発生します。

図 28.3　E2FC レジスタ

E2データフラッシュ ステータスレジスタ0

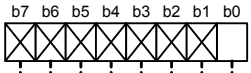


シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FS0	45001h番地	XXXX XXXXb

ビットシンボル	ビット名	機能	RW
— (b3-b0)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
WERR	プログラムエラーフラグ	0: プログラムエラーなし 1: プログラムエラー発生	RO
EERR	イレーズエラーフラグ	0: イレーズエラーなし 1: イレーズエラー発生	RO
— (b6)	予約ビット	読んだ場合、その値は不定	RO
RDY	レディフラグ	0: ビジー 1: レディ	RO

図 28.4　E2FS0 レジスタ

E2データフラッシュ ステータスレジスタ1

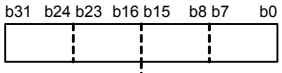


シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FS1	44FF4h番地	XXXX XXX0b

ビットシンボル	ビット名	機　能	RW
OMM	動作モードモニタフラグ	0: スリープモード 1: 動作状態	RO
— (b7-b1)	何も配置されていない。書く場合、“0”を書いてください。 読んだ場合、その値は不定		—

図 28.5　E2FS1 レジスタ

E2データフラッシュ アドレスレジスタ



シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FA	44FE3h-44FE0h番地	XXXX 0000h

機能	設定範囲	RW
アクセスするアドレスを指定します。 読んだ場合、上位16ビットは不定値が読めます	ECCなしの場合 00062000h ~ 00062FFEh ECCありの場合 00062000h ~ 000627FFh	RW

図 28.6　E2FA レジスタ

E2データフラッシュ 命令レジスタ (注1)

b15　b8 b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FI	44FE9h-44FE8h番地	XX00h

機能	設定範囲	RW
フラッシュメモリに対する命令を指定します。 読んだ場合、上位8ビットは不定値が読めます	0020h, 0040h, 0050h, 00D0h, 00F3h (注2)	RW

注1. このレジスタの読み書きは16ビット単位で行ってください。
注2. 各命令の意味は下表参照。

設定値	命令
0020h	ブロックイレーズ
0040h	プログラム
0050h	クリアステータスレジスタ
00D0h	ブロックイレーズ確認
00F3h	リード

図 28.7　E2FI レジスタ

E2データフラッシュ データレジスタ (注1)

b15　b8 b7　b0

シンボル	アドレス	リセット後の値
E2FD	44FEDh-44FECh番地	不定

機能	設定範囲	RW
リードオペレーション時、E2FAレジスタで指定した番地のデータが読めます。 プログラムオペレーション時、ここに設定した値がE2FAレジスタで指定した番地に書かれます (注2)	ECCなしの場合 0000h ~ FFFFh ECCありの場合 0000h ~ 00FFh	RW

注1. このレジスタの読み書きは16ビット単位で行ってください。
注2. プログラム時はE2FIレジスタに0040hを書いた後、このレジスタにデータを書いてください。

図 28.8　E2FD レジスタ

28.2　ブロック構成

E2データフラッシュは、ECCなしの場合32バイト×128ブロック、ECCありの場合16バイト×128ブロックのフラッシュメモリで構成されています(図28.9参照)。

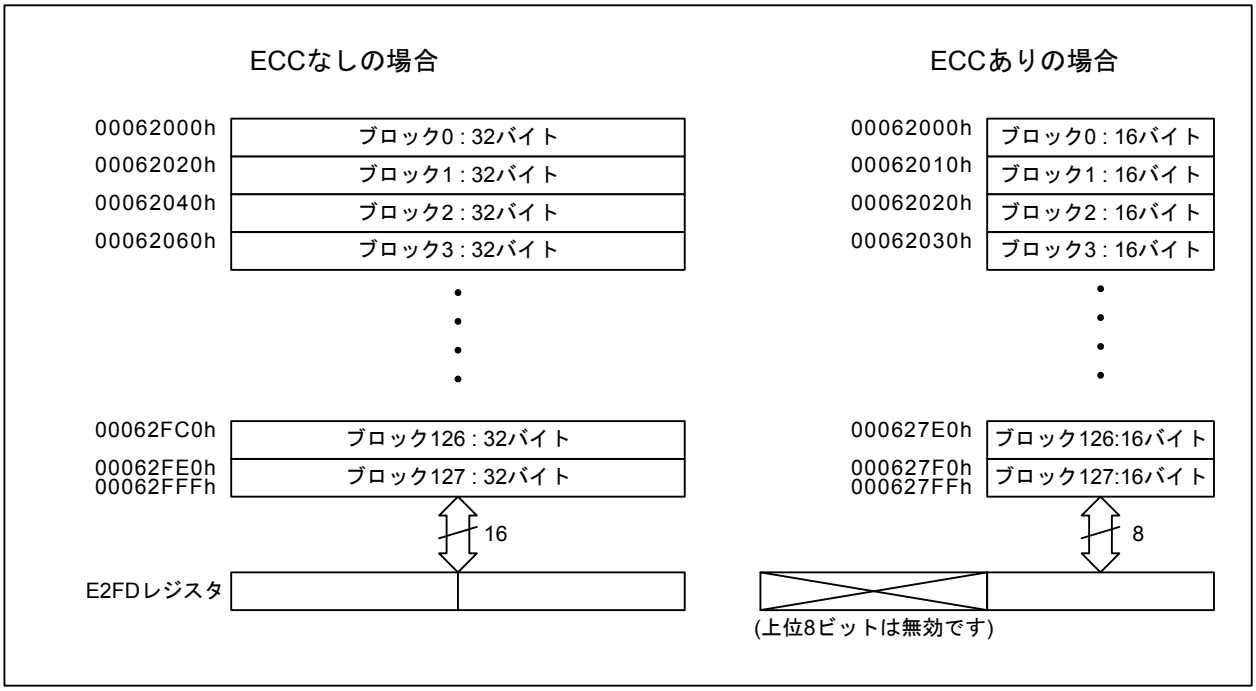


図28.9　E2データフラッシュのメモリ構成

28.3 オペレーション

図 28.10~図 28.13に、それぞれリード、プログラム、ブロックイレーズ、クリアステータスの操作手順を示します。この手順に従って操作を行ってください。

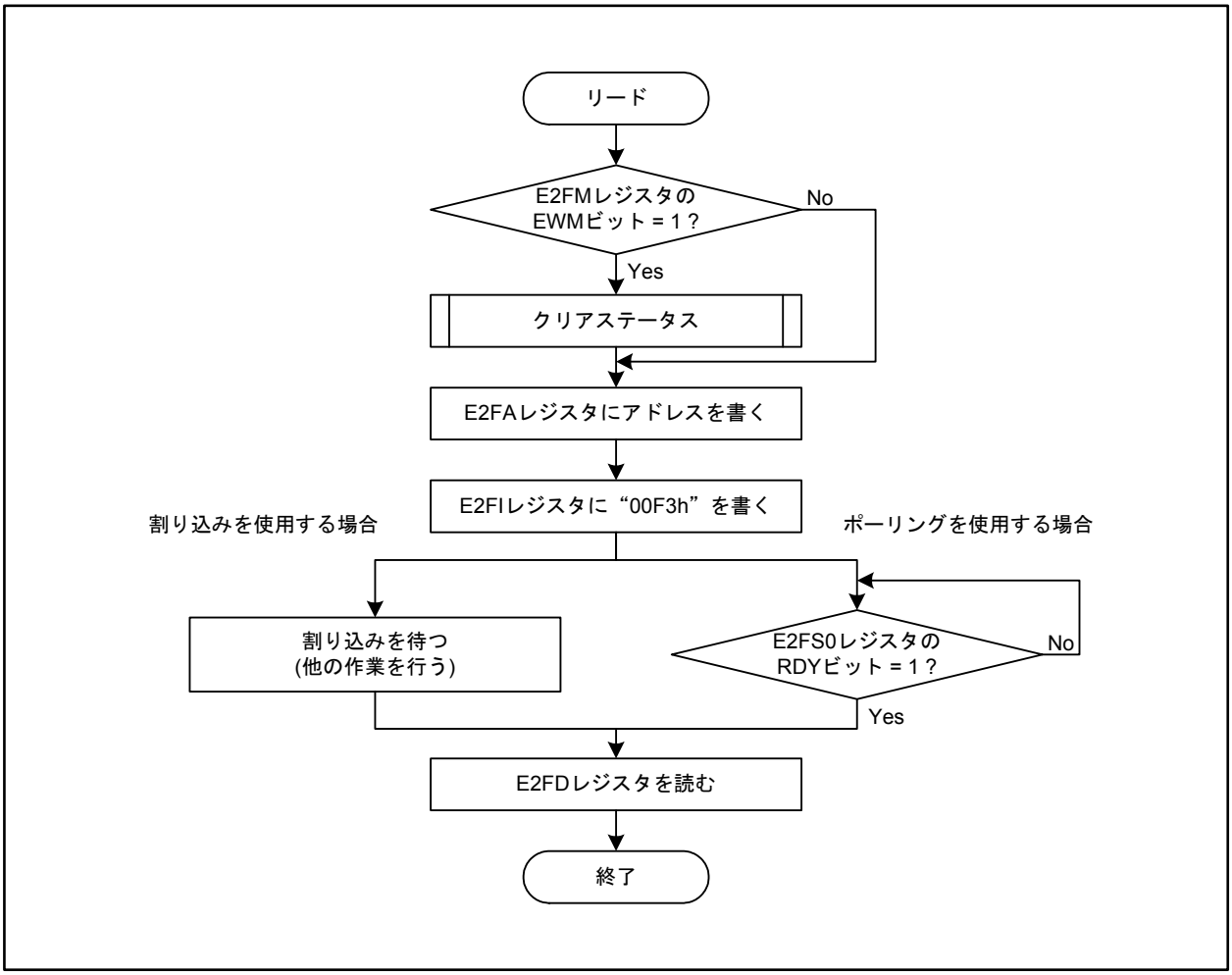


図 28.10 リードオペレーション

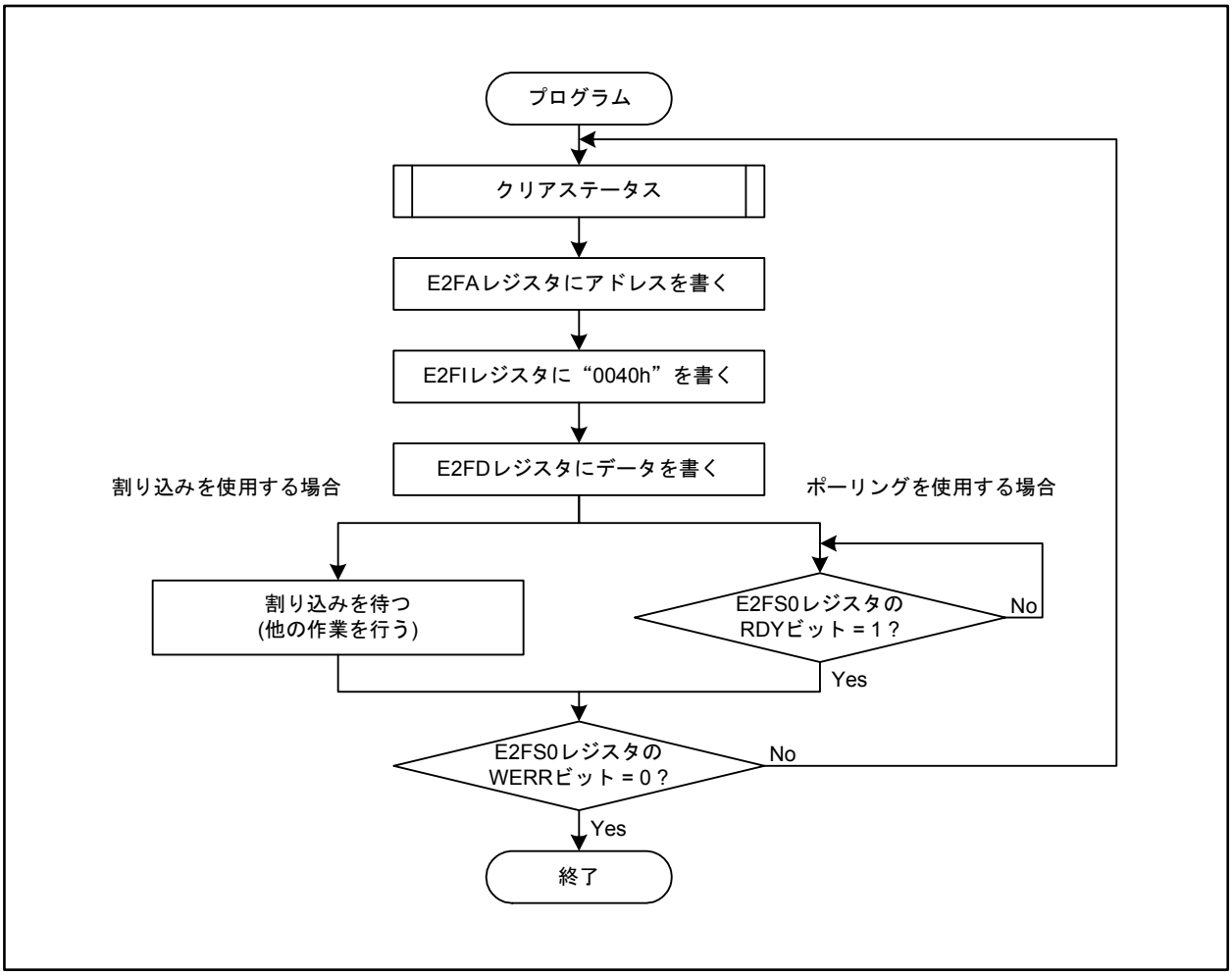


図 28.11　プログラムオペレーション

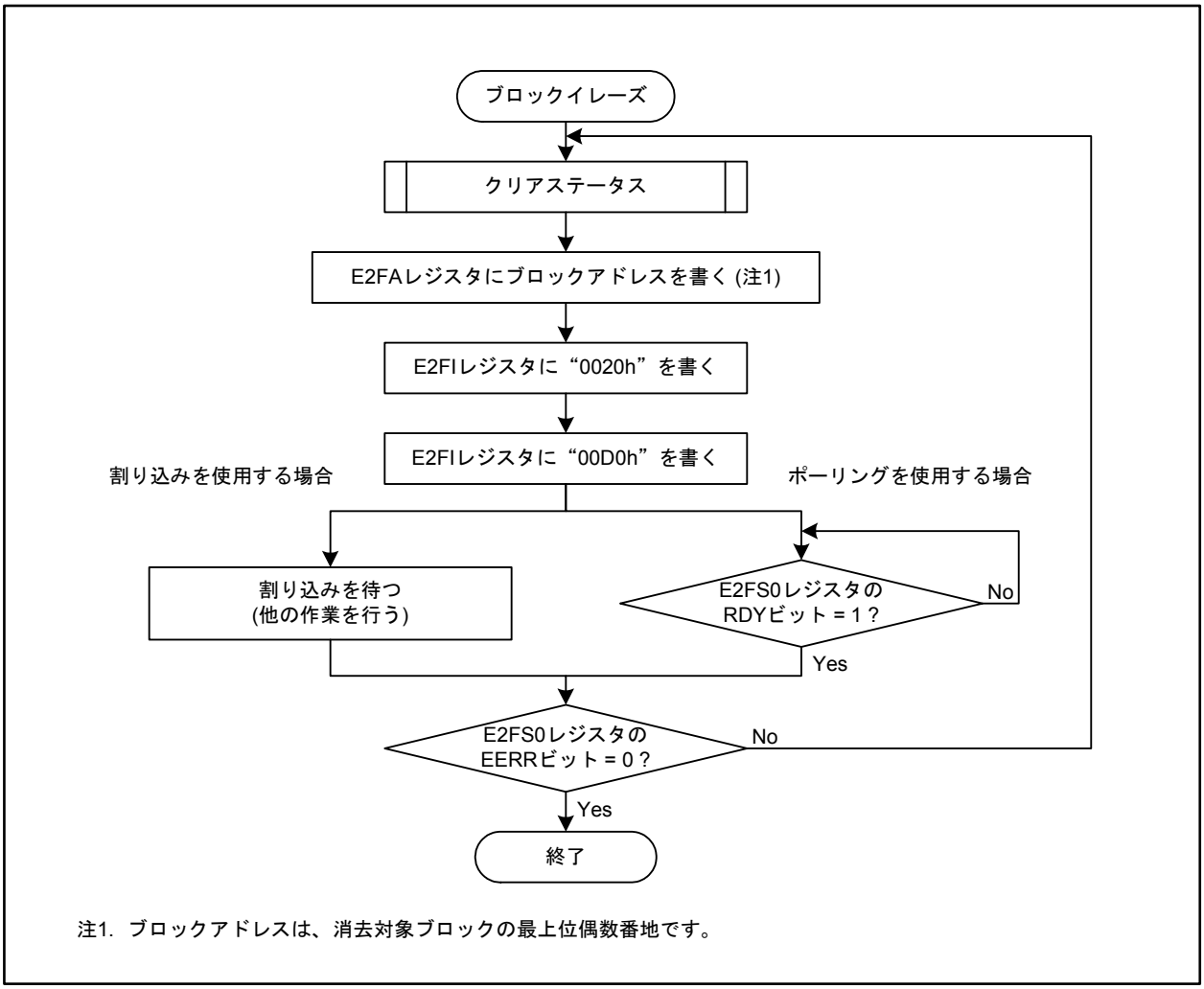


図 28.12 ブロックイレーズオペレーション

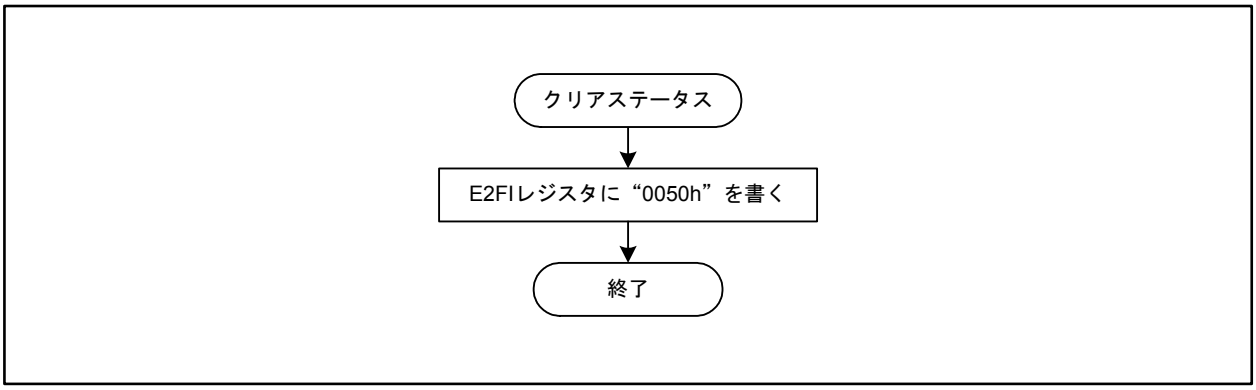


図 28.13 クリアステータスオペレーション

28.4 E2データフラッシュ書き換えに関する注意

FMCRレジスタのFEWビットが“1” (CPU書き換えモード)の場合は、E2FMレジスタのEWMビットを“1” (イレーズ/プログラム許可)にしないでください。

29. 電気的特性

表 29.1 絶対最大定格(注1)

記号	項目		条件	定格値	単位
V_{CC}	電源電圧		$V_{CC} = AV_{CC}$	-0.3 ~ 6.0	V
AV_{CC}	アナログ電源電圧		$V_{CC} = AV_{CC}$	-0.3 ~ 6.0	V
V_I	入力電圧	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD, V_{REF}, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7		-0.3 ~ V_{CC} + 0.3	V
V_O	出力電圧	XOUT, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7		-0.3 ~ V_{CC} + 0.3	V
P_d	消費電力		T_a = 25°C	500	mW
—	動作周囲温度			-40 ~ 125	°C
T_{stg}	保存温度			-65 ~ 150	°C

注1. 絶対最大定格は、瞬時たりとも超過してはならない限界値です。この値を超えて使用した場合には、デバイスの信頼性を著しく下げたり破壊することがあります。また、長期にわたって絶対最大定格の条件下に置かれた場合、デバイスの信頼性に影響することがあります。

表 29.2　推奨動作条件(1) (注1)

記号	項目		規格値			単位
			最小	標準	最大	
V_{CC}	電源電圧		3.0	5.0	5.5	V
AV_{CC}	アナログ電源電圧			V_{CC}		V
V_{REF}	基準電圧		3.0		V_{CC}	V
V_{SS}	電源電圧			0		V
AV_{SS}	アナログ電源電圧			0		V
dV_{CC}/dt	V_{CC}電源立ち上げ勾配(V_{CC} < 2.0 V)		0.05			V/ms
V_{IH}	“H”入力電圧	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD	0.8 × V_{CC}		V_{CC}	V
		P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7 (注2), P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	0.7 × V_{CC}		V_{CC}	V
V_{IL}	“L”入力電圧	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD	0		0.2 × V_{CC}	V
		P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7 (注2), P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	0		0.3 × V_{CC}	V
T_{opr}	動作周囲温度	Jバージョン	-40		85	°C
		Lバージョン	-40		105	°C
		Kバージョン	-40		125	°C

注1.　推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。

注2.　P8_7のV_{IH}、V_{IL}はP8_7をプログラマブル入力ポートとして使用する場合の規格であり、XCINとして使用する場合の規格ではありません。

表 29.3　推奨動作条件(2)(指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})(注1)

記号	項目		規格値(注2)			単位
			最小	標準	最大	
C_{VDC}	電圧レギュレータ平滑コンデンサ容量	端子間電圧1.5 V	2.4		10.0	μF

注1.　推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。

注2.　規格値はコンデンサの使用温度、両端子間の直流電圧、経年変化などのあらゆる条件を考慮した上で満たす必要があります。

表 29.4 推奨動作条件(3)(指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})(注1)

記号	項目		規格値			単位
			最小	標準	最大	
$I_{OH(peak)}$	"H"尖頭出力電流(注2)	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7			-10.0	mA
$I_{OH(avg)}$	"H"平均出力電流(注3)	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7			-5.0	mA
$I_{OL(peak)}$	"L"尖頭出力電流(注2)	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7			10.0	mA
$I_{OL(avg)}$	"L"平均出力電流(注3)	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7			5.0	mA

注1. 推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。

注2. ポートP0, P1, P2, P8_6, P8_7, P9, P10の$I_{OL(peak)}$の合計は80mA以下、ポートP3, P4, P5, P6, P7, P8_0~P8_4の$I_{OL(peak)}$の合計は80mA以下、ポートP1, P2の$I_{OH(peak)}$の合計は-40mA以下、ポートP0, P10の$I_{OH(peak)}$の合計は-40mA以下、ポートP3, P4, P5, P6の$I_{OH(peak)}$の合計は-40mA以下、ポートP7, P8, P9の$I_{OH(peak)}$の合計は-40mA以下にしてください。

注3. 平均出力電流は100msの期間内での平均値です。

表 29.5　推奨動作条件(4)(指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})(注1)

記号	項目	規格値			単位
		最小	標準	最大	
$f_{(XIN)}$	メインクロック入力発振周波数	4		8	MHz
$f_{(XRef)}$	基準クロック周波数	2		4	MHz
$f_{(PLL)}$	PLLクロック発振周波数	96		144	MHz
$f_{(Base)}$	ベースクロック周波数			64	MHz
$t_{c(Base)}$	ベースクロックサイクル時間	15.625			ns
$f_{(CPU)}$	CPU動作周波数			64	MHz
$t_{c(CPU)}$	CPUクロックサイクル時間	15.625			ns
$f_{(BCLK)}$	周辺バスクロック周波数			32	MHz
$t_{c(BCLK)}$	周辺バスクロックサイクル時間	31.25			ns
$f_{(PER)}$	周辺機能クロック源周波数			32	MHz
$f_{(XCIN)}$	サブクロック発振周波数		32.768	50	kHz

注1.　推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。

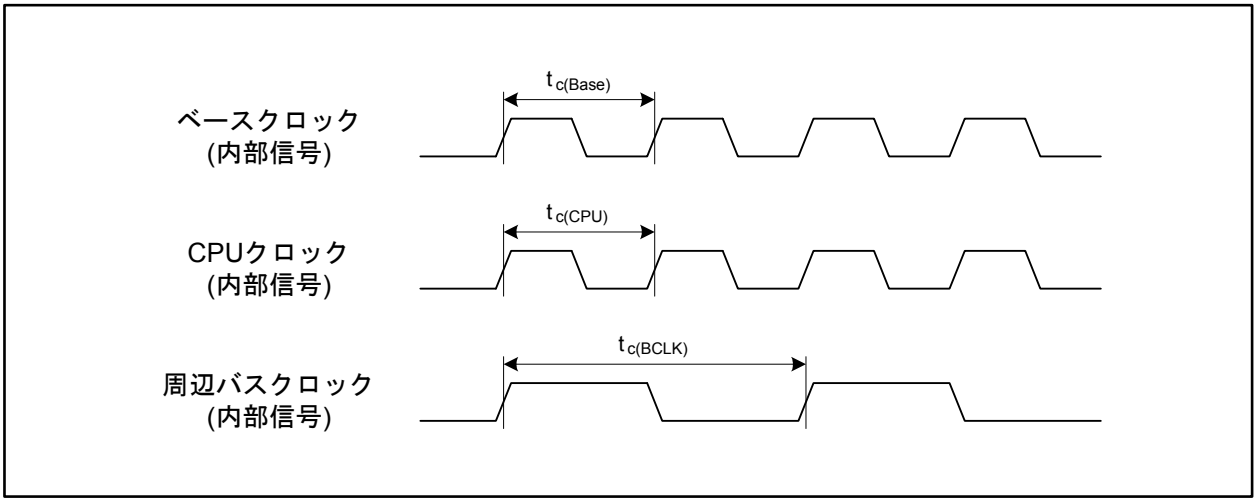


図 29.1　クロックサイクル時間

表 29.6　推奨動作条件(5)(指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})(注1、2)

記号	項目		測定条件	規格値			単位
				最小	標準	最大	
$I_{IC(H)}$	"H"入力インジェクション電流	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_5, P7_7, P8_0~P8_5, P9_3~P9_6, P10_0~P10_7	$V_I > V_{CC}$			2	mA
$I_{IC(L)}$	"L"入力インジェクション電流	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_5, P7_7, P8_0~P8_5, P9_3~P9_6, P10_0~P10_7	$V_I < V_{SS}$			-2	mA
$\Sigma\|I_{IC}\|$	総インジェクション電流					20	mA

注1.　推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。
注2.　各ポートが入力のときの規格です。

表 29.7　推奨動作条件(6)(指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})(注1)

記号	項目		規格値			単位
			最小	標準	最大	
$V_{r(VCC)}$	許容電源リップル電圧	V_{CC} = 5.0 V			0.5	Vp-p
		V_{CC} = 3.0 V			0.3	Vp-p
$dV_{r(VCC)}/dt$	電源リップル立ち上がり/立ち下がり勾配	V_{CC} = 5.0 V			±0.3	V/ms
		V_{CC} = 3.0 V			±0.3	V/ms
$f_{r(VCC)}$	許容電源リップル周波数				10	kHz

注1.　推奨動作条件は、デバイスの動作を保証する範囲であり、この範囲を超えた場合、最大定格内であっても動作は保証されません。

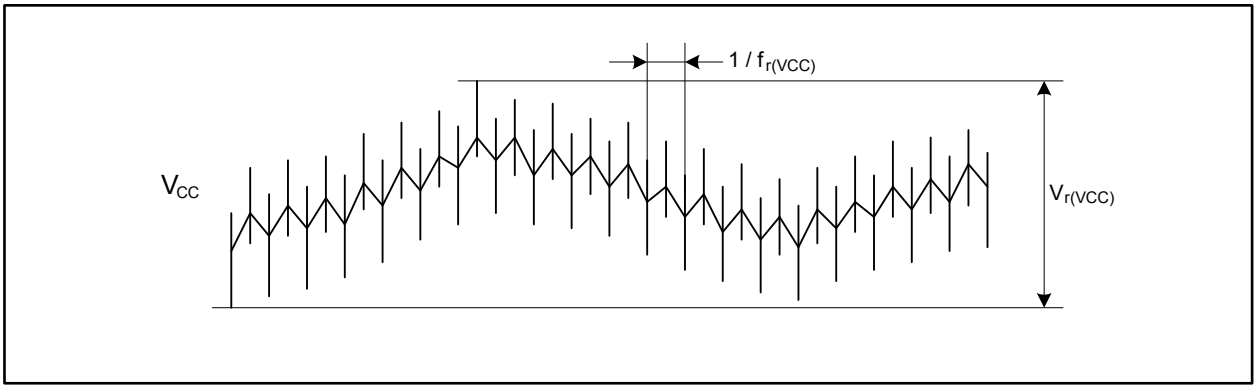


図 29.2　電源リップル波形

表 29.8　フラッシュメモリの電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目		規格値			単位
			最小	標準	最大	
—	プログラム、イレーズ回数(注1)	プログラム領域	1000			回
		データ領域	10000			回
—	4ワードプログラム時間	プログラム領域		150	900	μs
		データ領域		300	1700	μs
—	ロックビットプログラム時間	プログラム領域		70	500	μs
		データ領域		140	1000	μs
—	ブロックイレーズ時間	4Kバイトブロック		0.12	3.0	s
		32Kバイトブロック		0.17	3.0	s
		64Kバイトブロック		0.20	3.0	s
—	データ保持時間(注2)	T_a = 55°C (注3、4)	20			年

注1.　プログラム、イレーズ回数の定義
プログラム、イレーズ回数はブロックごとのイレーズ回数です。プログラム、イレーズ回数がn回の場合、ブロックごとに、それぞれn回ずつイレーズすることができます。
たとえば、4Kバイトブロックのブロック A について、それぞれ異なる番地に4ワード書き込みを512回に分けて行った後に、そのブロックをイレーズした場合も、プログラム / イレーズ回数は1回と数えます。
ただし、イレーズ1回に対して、同一番地に複数回の書き込みを行うことはできません(上書き禁止)。

注2.　規格値は、電源電圧が印加されていない時間、クロックが供給されていない時間も含みます。

注3.　T_a = 125°Cの環境下での3000時間、T_a = 85°Cの環境下での7000時間を含みます。

注4.　この条件以外でのデータ保持時間につきましては、弊社営業窓口までお問い合わせください。

表 29.9　E2データフラッシュの電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目		規格値			単位
			最小	標準	最大	
—	プログラム、イレーズ回数(注1)		100000			回
—	ワードプログラム時間			100	2000	μs
—	ブロックイレーズ時間	32バイトブロック		15	200	ms
t_{PS}	フラッシュメモリ回路安定待ち時間			35	50	μs
—	データ保持時間(注2)	T_a = 55°C (注3、4)	20			年

注1.　プログラム、イレーズ回数の定義
プログラム、イレーズ回数はブロックごとのイレーズ回数です。プログラム、イレーズ回数がn回の場合、ブロックごとに、それぞれn回ずつイレーズすることができます。
あるブロックについて、それぞれ異なる番地にワード書き込みを16回行った後に、そのブロックをイレーズした場合も、プログラム/イレーズ回数は1回と数えます。
ただし、イレーズ1回に対して、同一番地に複数回の書き込みを行うことはできません(上書き禁止)。
注2.　規格値は、電源電圧が印加されていない時間、クロックが供給されていない時間も含みます。
注3.　T_a = 125°Cの環境下での3000時間、T_a = 85°Cの環境下での7000時間を含みます。
注4.　この条件以外でのデータ保持時間につきましては、弊社営業窓口までお問い合わせください。

表 29.10　電源回路のタイミング特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
$t_{d(P-R)}$	電源投入時内部電源安定時間				2	ms

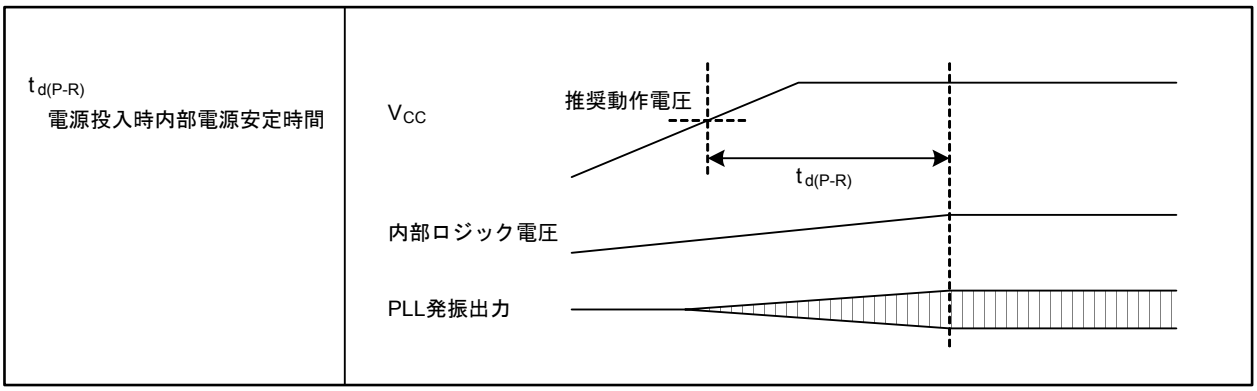


図 29.3　電源回路のタイミング

表 29.11 内部電圧レギュレータの電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
V_{VDC1}	レギュレータ出力電圧			1.5		V

表 29.12 電圧低下検出回路の電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
ΔVdet	検出電圧誤差				±0.2	V
Vdet(R)-Vdet(F)	ヒステリシス幅		0			V
—	自己消費電流	V_{CC} = 5.0 V、電圧検出回路有効		4		μA
$t_{d(E-A)}$	電圧低下検出回路動作開始時間				150	μs

表 29.13 発振回路の電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
$f_{SO(PLL)}$	PLLクロック自励発振周波数		35	50	80	MHz
$\lvert\Delta f_{LOCK}\rvert$	ロック検出周波数誤差(注1)				2	%
$\lvert\Delta f_{UNLOCK}\rvert$	アンロック検出周波数誤差(注1)		2			%
$t_{LOCK(PLL)}$	PLL発振安定時間(注2、3)	$f_{(XRef)}$ = 4MHz			1	ms
$t_{jitter(p-p)}$	PLLジッタ周期(p-p)				2.0	ns
$f_{(OCO)}$	オンチップオシレータ発振周波数		94	125	156	kHz

注1. 設定値からの周波数誤差です。
注2. メインクロックの発振が安定していることが条件となります。
注3. PLSレジスタのPLF1ビットが“1”になるまでの時間です。

表 29.14 クロック回路の電気的特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
$t_{rec(WAIT)}$	ウェイトモード→低消費電力モードリカバリ時間				225	μs
$t_{rec(STOP)}$	ストップモードリカバリ時間(注1)				225	μs

注1. メインクロックの発振安定時間は含みません。発振が安定する前にCPUは動作を開始します。

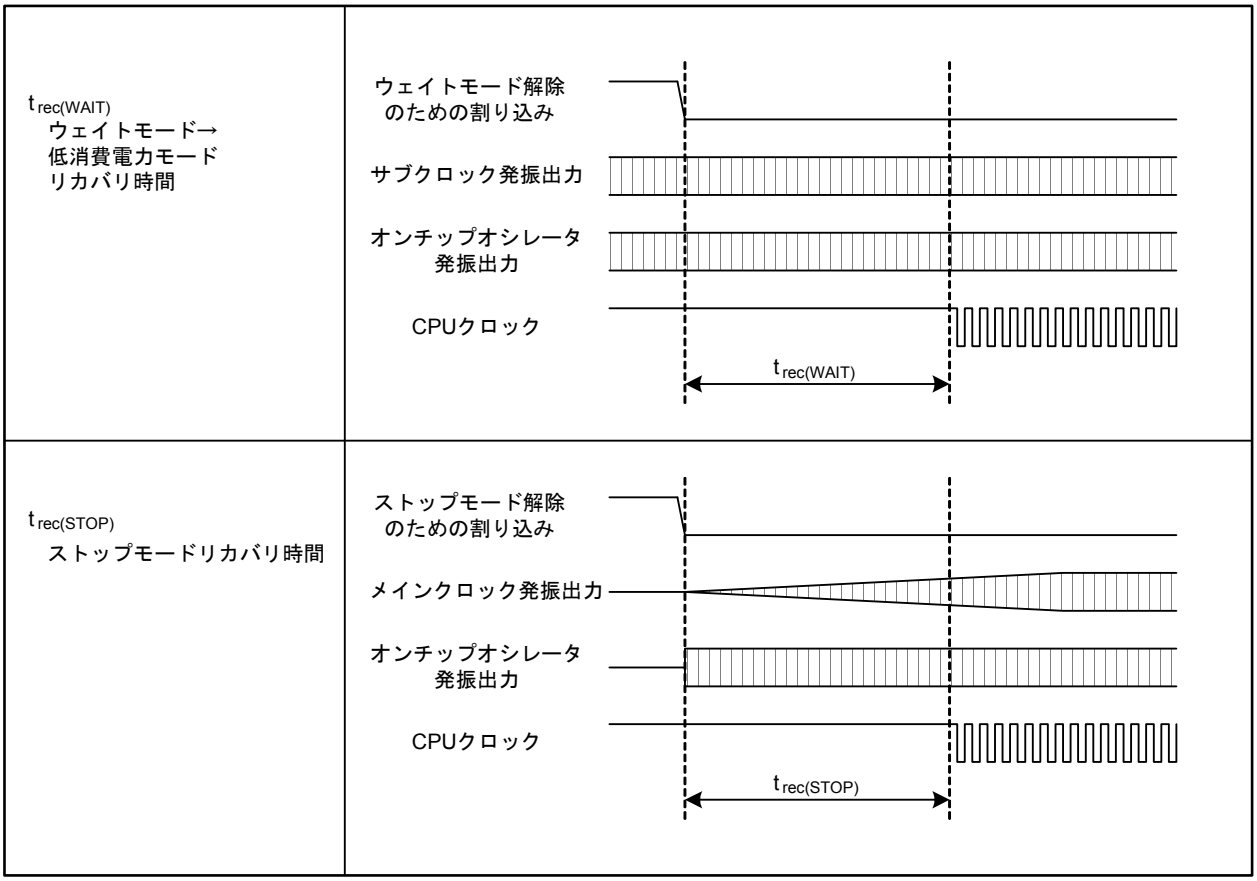


図 29.4 クロック回路のタイミング図

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.15 フラッシュメモリCPU書き換えモードタイミング

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
t_{cR}	リードサイクル時間	200		ns
$t_{su(S-R)}$	リード前チップセレクトセットアップ時間	200		ns
$t_{h(R-S)}$	リード後チップセレクトホールド時間	0		ns
$t_{su(A-R)}$	リード前アドレスセットアップ時間	200		ns
$t_{h(R-A)}$	リード後アドレスホールド時間	0		ns
$t_{w(R)}$	リードパルス幅	100		ns
t_{cW}	ライトサイクル時間	200		ns
$t_{su(S-W)}$	ライト前チップセレクトセットアップ時間	0		ns
$t_{h(W-S)}$	ライト後チップセレクトホールド時間	30		ns
$t_{su(A-W)}$	ライト前アドレスセットアップ時間	0		ns
$t_{h(W-A)}$	ライト後アドレスホールド時間	30		ns
$t_{w(W)}$	ライトパルス幅	50		ns

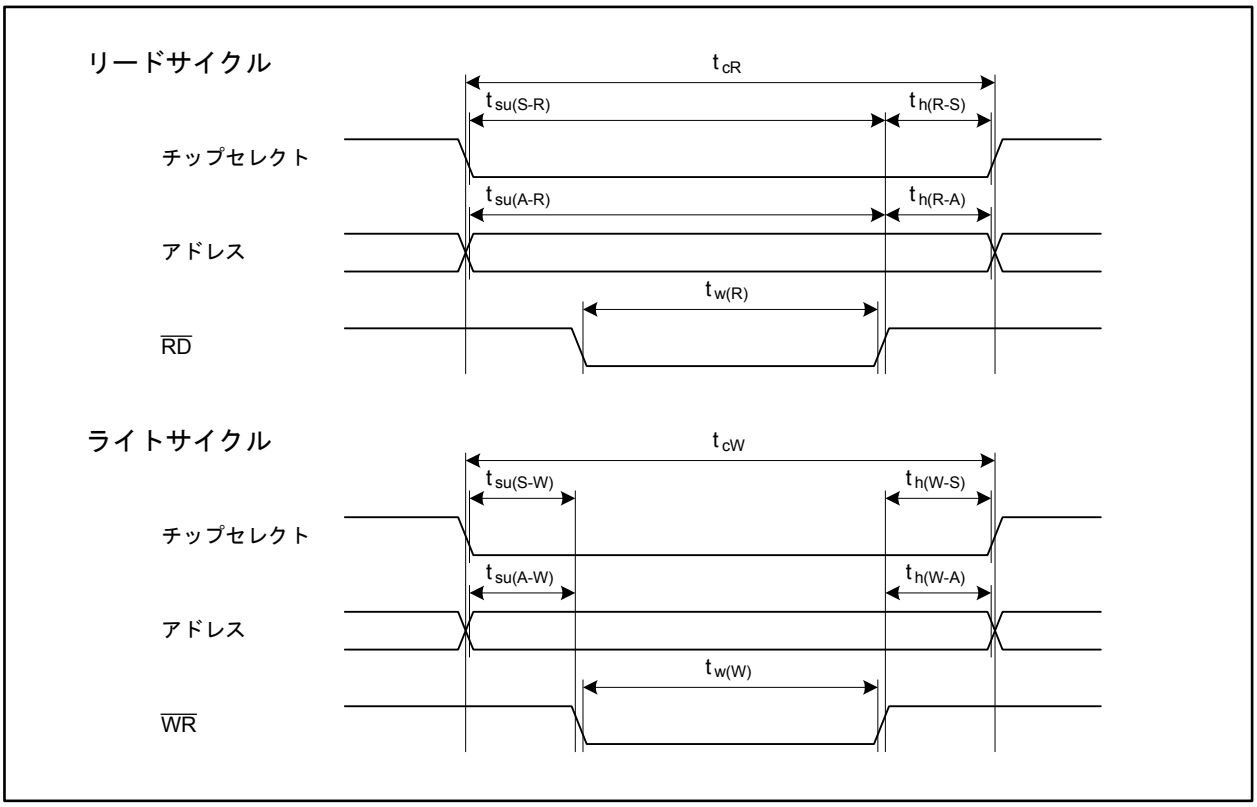


図 29.5　フラッシュメモリCPU書き換えモードタイミング

V_{CC} = 5 V

表 29.16 電気的特性(1) (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(CPU)}$ = 64 MHz)

記号	項目		測定条件	規格値			単位
				最小	標準	最大	
V_{OH}	“H”出力電圧	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OH} = -5 mA	V_{CC} - 2.0		V_{CC}	V
		P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OH} = -200 μA	V_{CC} - 0.3		V_{CC}	V
V_{OL}	“L”出力電圧	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OL} = 5 mA			2.0	V
		P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OL} = 200 μA			0.45	V

V_{CC} = 5 V

表 29.17 電気的特性(2) (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(CPU)}$ = 64 MHz)

記号	項目		測定条件	規格値			単位
				最小	標準	最大	
V_{T+}-V_{T-}	ヒステリシス	$\overline{NMI}$, $\overline{INT0}$~$\overline{INT5}$, $\overline{KI0}$~$\overline{KI3}$, TA0IN~TA4IN, TA0OUT~TA4OUT, TB0IN~TB5IN, $\overline{CTS0}$~$\overline{CTS4}$, CLK0~CLK4, RXD0~RXD4, SCL0~SCL2, SDA0~SDA2, $\overline{SS0}$~$\overline{SS2}$, SRXD0~SRXD2, $\overline{ADTRG}$, IIO0_0~IIO0_7, IIO1_0~IIO1_7, UD0A, UD0B, UD1A, UD1B, $\overline{SCS0}$, SSCK0, SSI0, SSO0, LIN0IN, LIN1IN, CAN0IN, $\overline{CAN0WU}$		0.2		1.0	V
		$\overline{RESET}$		0.2		1.8	V
I_{IH}	“H”入力電流	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 5 V			1.0	μA
I_{IL}	“L”入力電流	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 0 V			-1.0	μA
R_{PULLUP}	プルアップ抵抗	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 0 V	30	50	170	kΩ
R_{fXIN}	帰還抵抗	XIN			1.5		MΩ
R_{fXCIN}	帰還抵抗	XCIN			15		MΩ

V_{CC} = 5 V

表 29.18 電気的特性(3) (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件		規格値			単位
				最小	標準	最大	
I_{CC}	電源電流	シングルチップモードで出力端子は開放、その他の端子はV_{SS}に接続 XIN-XOUT 駆動能力: Low XCIN-XCOUT 駆動能力: Low	$f_{(CPU)}$ = 64 MHz、$f_{(BCLK)}$ = 32 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL発振、XCIN停止、OCO停止		36	60	mA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{SO(PLL)}$/24 MHz、XIN停止、PLL自励発振、XCIN停止、OCO停止		7		mA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(XIN)}$/256 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL停止、XCIN停止、OCO停止		1.2		mA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = 32.768 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN発振、OCO停止、メインレギュレータ停止		220		μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(OCO)}$/4 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN停止、OCO発振、メインレギュレータ停止		230		μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(XIN)}$/256 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL停止、XCIN停止、OCO停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		960	1600	μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = 32.768 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN発振、OCO停止、メインレギュレータ停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		8	140	μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(OCO)}$/4 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN停止、OCO発振、メインレギュレータ停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		10	150	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 25°C		5	70	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 85°C			400	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 105°C			1200	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 125°C			2000	μA

V_{CC} = 5 V

表 29.19 A/D変換特性 (指定のない場合は、V_{CC} = AV_{CC} = V_{REF} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = AV_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(BCLK)}$ = 32 MHz)

記号	項目	測定条件		規格値			単位
				最小	標準	最大	
—	分解能	V_{REF} = V_{CC}				10	Bits
—	絶対誤差	V_{REF} = V_{CC} = 5 V	AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7, ANEX0, ANEX1			±3	LSB
			外部オペアンプ接続モード			±7	LSB
INL	積分非直線性誤差	V_{REF} = V_{CC} = 5 V	AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7, ANEX0, ANEX1			±3	LSB
			外部オペアンプ接続モード			±7	LSB
DNL	微分非直線性誤差					±1	LSB
—	オフセット誤差					±3	LSB
—	ゲイン誤差					±3	LSB
R_{LADDER}	ラダー抵抗	V_{REF} = V_{CC}		4		20	kΩ
t_{CONV}	変換時間(10bit)	ϕ_{AD} = 16 MHz、サンプル&ホールドあり		2.06			μs
		ϕ_{AD} = 16 MHz、サンプル&ホールドなし		3.69			μs
t_{CONV}	変換時間(8bit)	ϕ_{AD} = 16 MHz、サンプル&ホールドあり		1.75			μs
		ϕ_{AD} = 16 MHz、サンプル&ホールドなし		3.06			μs
t_{SAMP}	サンプリング時間	ϕ_{AD} = 16 MHz		0.188			μs
V_{IA}	アナログ入力電圧			0		V_{REF}	V
ϕ_{AD}	動作クロック周波数	サンプル&ホールドなし		0.25		16	MHz
		サンプル&ホールドあり		1		16	MHz
$R_{PU(AST)}$	断線検出用プルアップ抵抗			5	10	15	kΩ
$R_{PD(AST)}$	断線検出用プルダウン抵抗			5	10	15	kΩ

V_{CC} = 5 V

表 29.20 D/A変換特性 (指定のない場合は、V_{CC} = AV_{CC} = V_{REF} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = AV_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
—	分解能				8	Bits
—	絶対精度				1.0	%
t_S	設定時間				3	μs
R_O	出力抵抗		4	10	20	kΩ
I_{VREF}	基準電源入力電流	(注1)			1.5	mA

注1. D/Aコンバータを1本利用し、使用していないD/AコンバータのDAiレジスタ (i = 0, 1)の値が“00h”の場合です。A/Dコンバータのラダー抵抗分は除きます。
AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (V_{REF}未接続)にした場合でも、I_{VREF}は流れます。

V_{CC} = 5 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.21 外部クロック入力

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(X)}$	外部クロック入力サイクル時間	125	250	ns
$t_{w(XH)}$	外部クロック入力 “H” パルス幅	50		ns
$t_{w(XL)}$	外部クロック入力 “L” パルス幅	50		ns
$t_{r(X)}$	外部クロック入力 立ち上がり時間		5	ns
$t_{f(X)}$	外部クロック入力 立ち下がり時間		5	ns
t_w / t_c	外部クロック入力デューティ	40	60	%

V_{CC} = 5 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.22 タイマA入力(イベントカウンタモードのカウント入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.23 タイマA入力(タイマモードのゲーティング入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

表 29.24 タイマA入力(ワンショットタイマモードの外部トリガ入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.25 タイマA入力(パルス幅変調モードの外部トリガ入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.26 タイマA入力(イベントカウンタモードのアップダウン入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(UP)}$	TAiOUT入力サイクル時間	2000		ns
$t_{w(UPH)}$	TAiOUT入力 “H”パルス幅	1000		ns
$t_{w(UPL)}$	TAiOUT入力 “L”パルス幅	1000		ns
$t_{su(UP-TIN)}$	TAiOUT入力セットアップ時間	400		ns
$t_{h(TIN-UP)}$	TAiOUT入力ホールド時間	400		ns

V_{CC} = 5 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.27 タイマB入力(イベントカウンタモードのカウント入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間(片エッジカウント)	200		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅(片エッジカウント)	80		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅(片エッジカウント)	80		ns
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間(両エッジカウント)	200		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅(両エッジカウント)	80		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅(両エッジカウント)	80		ns

表 29.28 タイマB入力(パルス周期測定モード)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

表 29.29 タイマB入力(パルス幅測定モード)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

V_{CC} = 5 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.30 シリアルインタフェース

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(CK)}$	CLKi入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(CKH)}$	CLKi入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(CKL)}$	CLKi入力 “L”パルス幅	80		ns
$t_{su(D-C)}$	RXDi入力セットアップ時間	80		ns
$t_{h(C-D)}$	RXDi入力ホールド時間	90		ns

表 29.31 A/Dトリガ入力

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{w(ADH)}$	$\overline{\text{ADTRG}}$入力 “H”パルス幅 ハードウェアトリガ入力 “H”パルス幅	$\frac{3}{\phi_{AD}}$		ns
$t_{w(ADL)}$	$\overline{\text{ADTRG}}$入力 “L”パルス幅 ハードウェアトリガ入力 “L”パルス幅	125		ns

表 29.32 外部割り込み$\overline{\text{INTi}}$入力

記号	項目		規格値		単位
			最小	最大	
$t_{w(INH)}$	$\overline{\text{INTi}}$入力 “H”パルス幅(注1)	エッジセンス	250		ns
		レベルセンス	$t_{c(CPU)}$ + 200		ns
$t_{w(INL)}$	$\overline{\text{INTi}}$入力 “L”パルス幅(注1)	エッジセンス	250		ns
		レベルセンス	$t_{c(CPU)}$ + 200		ns

注1. 外部割り込み入力フィルタなしの場合です。

V_{CC} = 5 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.33 シリアルバスインタフェース

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$f_{(SSCK)}$	SSCKi 周波数		4	MHz
$t_{c(SSCK)}$	SSCKi サイクル時間	250		ns
$t_{w(SSCKH)}$	SSCKi入力 “H”パルス幅	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{w(SSCKL)}$	SSCKi入力 “L”パルス幅	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{r(SSCK)}$	SSCKi入力 立ち上がり時間		1	μs
$t_{f(SSCK)}$	SSCKi入力 立ち下がり時間		1	μs
$t_{su(SCS-SSCK)}$	SCSi入力セットアップ時間	$t_{c(BCLK)}$ + 50		ns
$t_{h(SSCK-SCS)}$	SCSi入力ホールド時間	$t_{c(BCLK)}$ + 50		ns
$t_{su(SSI-SSCK)}$	SSI入力セットアップ時間	80		ns
$t_{h(SSCK-SSI)}$	SSI入力ホールド時間	10		ns
$t_{su(SSO-SSCK)}$	SSO入力セットアップ時間	80		ns
$t_{h(SSCK-SSO)}$	SSO入力ホールド時間	20		ns

V_{CC} = 5 V

スイッチング特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 4.2 ~ 5.5 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.34 シリアルインタフェース

記号	項目	測定条件	規格値		単位
			最小	最大	
$t_{d(C-Q)}$	TXDi出力遅延時間	図 29.6参照		80	ns
$t_{h(C-Q)}$	TXDi出力ホールド時間		0		ns

表 29.35 シリアルバスインタフェース

記号	項目	測定条件	規格値		単位
			最小	最大	
$t_{w(SSCKH)}$	SSCKi出力 “H”パルス幅	図 29.6参照	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{w(SSCKL)}$	SSCKi出力 “L”パルス幅		0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{r(SSCK)}$	SSCKi出力 立ち上がり時間			20	ns
$t_{f(SSCK)}$	SSCKi出力 立ち下がり時間			20	ns
$t_{d(SCS-SSCK)}$	SCSi出力-SSCKi出力遅延時間			0.5×$t_{c(SSCK)}$+20	ns
$t_{d(SSCK-SCS)}$	SSCKi出力-SCSi出力遅延時間		0.5×$t_{c(SSCK)}$-20		ns
$t_{en(SCS-SSO)}$	SSOi出力イネーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{dis(SCS-SSO)}$	SSOi出力ディセーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{en(SCS-SSI)}$	SSIi出力イネーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{dis(SCS-SSI)}$	SSIi出力ディセーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{d(SSCK-SSO)}$	SSCKi出力-SSOi出力遅延時間			30	ns
$t_{d(SSCK-SSI)}$	SSCKi出力-SSIi出力遅延時間			85	ns
$t_{rec(SCS)}$	連続送信時SCSi出力 “H”期間			0.625 × $t_{c(SSCK)}$	ns

V_{CC} = 3.3 V

表 29.36 電気的特性(1) (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(CPU)}$ = 64 MHz)

記号	項目		測定条件	規格値			単位
				最小	標準	最大	
V_{OH}	“H”出力電圧	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OH} = -1 mA	V_{CC} - 0.6		V_{CC}	V
V_{OL}	“L”出力電圧	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	I_{OL} = 1 mA			0.5	V

V_{CC} = 3.3 V

表 29.37 電気的特性(2) (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(CPU)}$ = 64 MHz)

記号	項目		測定条件	規格値			単位
				最小	標準	最大	
V_{T+}-V_{T-}	ヒステリシス	$\overline{NMI}$, $\overline{INT0}$~$\overline{INT5}$, $\overline{KI0}$~$\overline{KI3}$, TA0IN~TA4IN, TA0OUT~TA4OUT, TB0IN~TB5IN, $\overline{CTS0}$~$\overline{CTS4}$, CLK0~CLK4, RXD0~RXD4, SCL0~SCL2, SDA0~SDA2, $\overline{SS0}$~$\overline{SS2}$, SRXD0~SRXD2, $\overline{ADTRG}$, IIO0_0~IIO0_7, IIO1_0~IIO1_7, UD0A, UD0B, UD1A, UD1B, $\overline{SCS0}$, SSCK0, SSI0, SSO0, LIN0IN, LIN1IN, CAN0IN, $\overline{CAN0WU}$		0.2		1.0	V
		$\overline{RESET}$		0.2		1.8	V
I_{IH}	“H”入力電流	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 3.3 V			1.0	μA
I_{IL}	“L”入力電流	XIN, $\overline{RESET}$, CNVSS, NSD, P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 0 V			-1.0	μA
R_{PULLUP}	プルアップ抵抗	P0_0~P0_7, P1_0~P1_7, P2_0~P2_7, P3_0~P3_7, P4_0~P4_7, P5_0~P5_7, P6_0~P6_7, P7_0~P7_7, P8_0~P8_4, P8_6, P8_7, P9_1, P9_3~P9_7, P10_0~P10_7	V_I = 0 V	50	100	500	kΩ
R_{fXIN}	帰還抵抗	XIN			3		MΩ
R_{fXCIN}	帰還抵抗	XCIN			25		MΩ

V_{CC} = 3.3 V

表 29.38 電気的特性(3) (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件		規格値			単位
				最小	標準	最大	
I_{CC}	電源電流	シングルチップモードで出力端子は開放、その他の端子はV_{SS}に接続 XIN-XOUT 駆動能力: Low XCIN-XCOUT 駆動能力: Low	$f_{(CPU)}$ = 64 MHz、$f_{(BCLK)}$ = 32 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL発振、XCIN停止、OCO停止		36	60	mA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{SO(PLL)}$/24 MHz、XIN停止、PLL自励発振、XCIN停止、OCO停止		7		mA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(XIN)}$/256 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL停止、XCIN停止、OCO停止		670		μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = 32.768 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN発振、OCO停止、メインレギュレータ停止		180		μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(OCO)}$/4 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN停止、OCO発振、メインレギュレータ停止		190		μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(XIN)}$/256 MHz、$f_{(XIN)}$ = 8 MHz、PLL停止、XCIN停止、OCO停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		500	900	μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = 32.768 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN発振、OCO停止、メインレギュレータ停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		8	140	μA
			$f_{(CPU)}$ = $f_{(BCLK)}$ = $f_{(OCO)}$/4 kHz、XIN停止、PLL停止、XCIN停止、OCO発振、メインレギュレータ停止、ウェイトモード、T_a = 25°C		10	150	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 25°C		5	70	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 85°C			400	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 105°C			1200	μA
			クロック停止、メインレギュレータ停止、T_a = 125°C			2000	μA

V_{CC} = 3.3 V

表 29.39 A/D変換特性 (指定のない場合は、V_{CC} = AV_{CC} = V_{REF} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = AV_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr}、$f_{(BCLK)}$ = 32 MHz)

記号	項目	測定条件		規格値			単位
				最小	標準	最大	
—	分解能	V_{REF} = V_{CC}				10	Bits
—	絶対誤差	V_{REF} = V_{CC} = 3.3 V	AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7, ANEX0, ANEX1			±5	LSB
			外部オペアンプ接続モード			±7	LSB
INL	積分非直線性誤差	V_{REF} = V_{CC} = 3.3 V	AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7, ANEX0, ANEX1			±5	LSB
			外部オペアンプ接続モード			±7	LSB
DNL	微分非直線性誤差	V_{REF} = V_{CC} = 3.3 V				±1	LSB
—	オフセット誤差					±3	LSB
—	ゲイン誤差					±3	LSB
R_{LADDER}	ラダー抵抗	V_{REF} = V_{CC}		4		20	kΩ
t_{CONV}	変換時間(10bit)	ϕ_{AD} = 10 MHz、サンプル＆ホールドあり		3.3			μs
t_{CONV}	変換時間(8bit)	ϕ_{AD} = 10 MHz、サンプル＆ホールドあり		2.8			μs
t_{SAMP}	サンプリング時間	ϕ_{AD} = 10 MHz		0.3			μs
V_{IA}	アナログ入力電圧			0		V_{REF}	V
ϕ_{AD}	動作クロック周波数	サンプル＆ホールドなし		0.25		10	MHz
		サンプル＆ホールドあり		1		10	MHz
$R_{PU(AST)}$	断線検出用プルアップ抵抗			5	10	15	kΩ
$R_{PD(AST)}$	断線検出用プルダウン抵抗			5	10	15	kΩ

V_{CC} = 3.3 V

表 29.40 D/A変換特性 (指定のない場合は、V_{CC} = AV_{CC} = V_{REF} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = AV_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

記号	項目	測定条件	規格値			単位
			最小	標準	最大	
—	分解能				8	Bits
—	絶対精度				1.0	%
t_S	設定時間				3	μs
R_O	出力抵抗		4	10	20	kΩ
I_{VREF}	基準電源入力電流	(注1)			1.0	mA

注1. D/Aコンバータを1本利用し、使用していないD/AコンバータのDAiレジスタ (i = 0, 1)の値が“00h”の場合です。A/Dコンバータのラダー抵抗分は除きます。
AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (V_{REF}未接続)にした場合でも、I_{VREF}は流れます。

V_{CC} = 3.3 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.41 外部クロック入力

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(X)}$	外部クロック入力サイクル時間	125	250	ns
$t_{w(XH)}$	外部クロック入力 “H” パルス幅	50		ns
$t_{w(XL)}$	外部クロック入力 “L” パルス幅	50		ns
$t_{r(X)}$	外部クロック入力 立ち上がり時間		5	ns
$t_{f(X)}$	外部クロック入力 立ち下がり時間		5	ns
t_w / t_c	外部クロック入力デューティ	40	60	%

V_{CC} = 3.3 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.42 タイマA入力(イベントカウンタモードのカウント入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.43 タイマA入力(タイマモードのゲーティング入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

表 29.44 タイマA入力(ワンショットタイマモードの外部トリガ入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TA)}$	TAiIN入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.45 タイマA入力(パルス幅変調モードの外部トリガ入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{w(TAH)}$	TAiIN入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(TAL)}$	TAiIN入力 “L”パルス幅	80		ns

表 29.46 タイマA入力(イベントカウンタモードのアップダウン入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(UP)}$	TAiOUT入力サイクル時間	2000		ns
$t_{w(UPH)}$	TAiOUT入力 “H”パルス幅	1000		ns
$t_{w(UPL)}$	TAiOUT入力 “L”パルス幅	1000		ns
$t_{su(UP-TIN)}$	TAiOUT入力セットアップ時間	400		ns
$t_{h(TIN-UP)}$	TAiOUT入力ホールド時間	400		ns

V_{CC} = 3.3 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.47 タイマB入力(イベントカウンタモードのカウント入力)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間(片エッジカウント)	200		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅(片エッジカウント)	80		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅(片エッジカウント)	80		ns
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間(両エッジカウント)	200		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅(両エッジカウント)	80		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅(両エッジカウント)	80		ns

表 29.48 タイマB入力(パルス周期測定モード)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

表 29.49 タイマB入力(パルス幅測定モード)

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(TB)}$	TBiIN入力サイクル時間	400		ns
$t_{w(TBH)}$	TBiIN入力 “H”パルス幅	180		ns
$t_{w(TBL)}$	TBiIN入力 “L”パルス幅	180		ns

V_{CC} = 3.3 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.50 シリアルインタフェース

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{c(CK)}$	CLKi入力サイクル時間	200		ns
$t_{w(CKH)}$	CLKi入力 “H”パルス幅	80		ns
$t_{w(CKL)}$	CLKi入力 “L”パルス幅	80		ns
$t_{su(D-C)}$	RXDi入力セットアップ時間	80		ns
$t_{h(C-D)}$	RXDi入力ホールド時間	90		ns

表 29.51 A/Dトリガ入力

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$t_{w(ADH)}$	$\overline{\text{ADTRG}}$入力 “H”パルス幅 ハードウェアトリガ入力 “H”パルス幅	$\frac{3}{\phi_{AD}}$		ns
$t_{w(ADL)}$	$\overline{\text{ADTRG}}$入力 “L”パルス幅 ハードウェアトリガ入力 “L”パルス幅	125		ns

表 29.52 外部割り込み$\overline{\text{INTi}}$入力

記号	項目		規格値		単位
			最小	最大	
$t_{w(INH)}$	$\overline{\text{INTi}}$入力 “H”パルス幅(注1)	エッジセンス	250		ns
		レベルセンス	$t_{c(CPU)}$ + 200		ns
$t_{w(INL)}$	$\overline{\text{INTi}}$入力 “L”パルス幅(注1)	エッジセンス	250		ns
		レベルセンス	$t_{c(CPU)}$ + 200		ns

注1. 外部割り込み入力フィルタなしの場合です。

V_{CC} = 3.3 V

タイミング必要条件 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.53 シリアルバスインタフェース

記号	項目	規格値		単位
		最小	最大	
$f_{(SSCK)}$	SSCKi 周波数		4	MHz
$t_{c(SSCK)}$	SSCKi サイクル時間	250		ns
$t_{w(SSCKH)}$	SSCKi入力 “H”パルス幅	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{w(SSCKL)}$	SSCKi入力 “L”パルス幅	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{r(SSCK)}$	SSCKi入力 立ち上がり時間		1	μs
$t_{f(SSCK)}$	SSCKi入力 立ち下がり時間		1	μs
$t_{su(SCS-SSCK)}$	SCSi入力セットアップ時間	$t_{c(BCLK)}$ + 50		ns
$t_{h(SSCK-SCS)}$	SCSi入力ホールド時間	$t_{c(BCLK)}$ + 50		ns
$t_{su(SSI-SSCK)}$	SSI入力セットアップ時間	100		ns
$t_{h(SSCK-SSI)}$	SSI入力ホールド時間	10		ns
$t_{su(SSO-SSCK)}$	SSO入力セットアップ時間	100		ns
$t_{h(SSCK-SSO)}$	SSO入力ホールド時間	20		ns

V_{CC} = 3.3 V

スイッチング特性 (指定のない場合は、V_{CC} = 3.0 ~ 3.6 V、V_{SS} = 0 V、T_a = T_{opr})

表 29.54 シリアルインタフェース

記号	項目	測定条件	規格値		単位
			最小	最大	
$t_{d(C-Q)}$	TXDi出力遅延時間	図 29.6参照		80	ns
$t_{h(C-Q)}$	TXDi出力ホールド時間		0		ns

表 29.55 シリアルバスインタフェース

記号	項目	測定条件	規格値		単位
			最小	最大	
$t_{w(SSCKH)}$	SSCKi出力 “H”パルス幅	図 29.6参照	0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{w(SSCKL)}$	SSCKi出力 “L”パルス幅		0.35 × $t_{c(SSCK)}$	0.6 × $t_{c(SSCK)}$	ns
$t_{r(SSCK)}$	SSCKi出力 立ち上がり時間			35	ns
$t_{f(SSCK)}$	SSCKi出力 立ち下がり時間			35	ns
$t_{d(SCS-SSCK)}$	SCSi出力-SSCKi出力遅延時間			0.5×$t_{c(SSCK)}$+40	ns
$t_{d(SSCK-SCS)}$	SSCKi出力-SCSi出力遅延時間		0.5×$t_{c(SSCK)}$ - 40		ns
$t_{en(SCS-SSO)}$	SSOi出力イネーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{dis(SCS-SSO)}$	SSOi出力ディセーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{en(SCS-SSI)}$	SSIi出力イネーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{dis(SCS-SSI)}$	SSIi出力ディセーブル時間			1.5×$t_{c(BCLK)}$+100	ns
$t_{d(SSCK-SSO)}$	SSCKi出力-SSOi出力遅延時間			50	ns
$t_{d(SSCK-SSI)}$	SSCKi出力-SSIi出力遅延時間			120	ns
$t_{rec(SCS)}$	連続送信時SCSi出力 “H”期間			0.625×$t_{c(SSCK)}$	ns

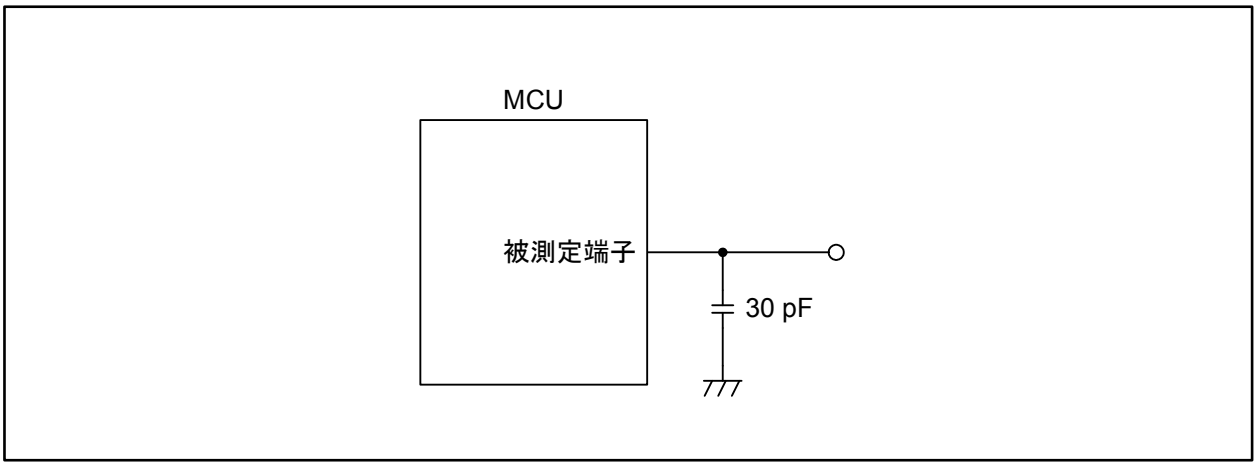


図 29.6　スイッチング特性の測定回路

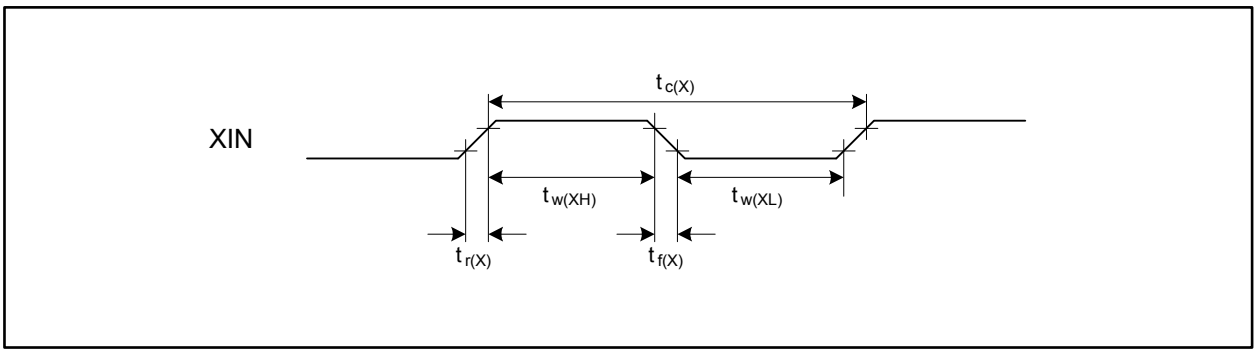


図 29.7　外部クロック入力タイミング図

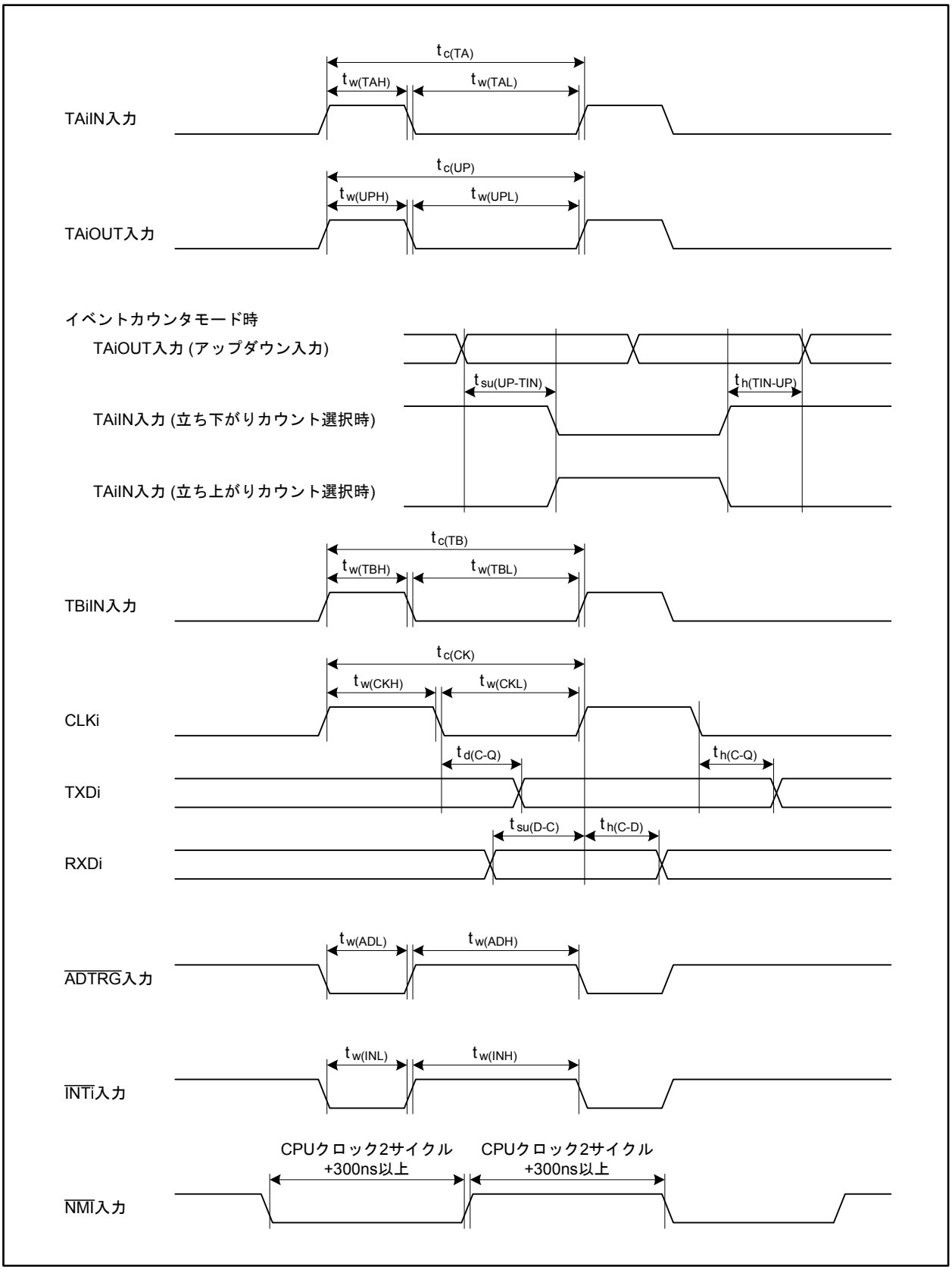


図 29.8　周辺機能タイミング図

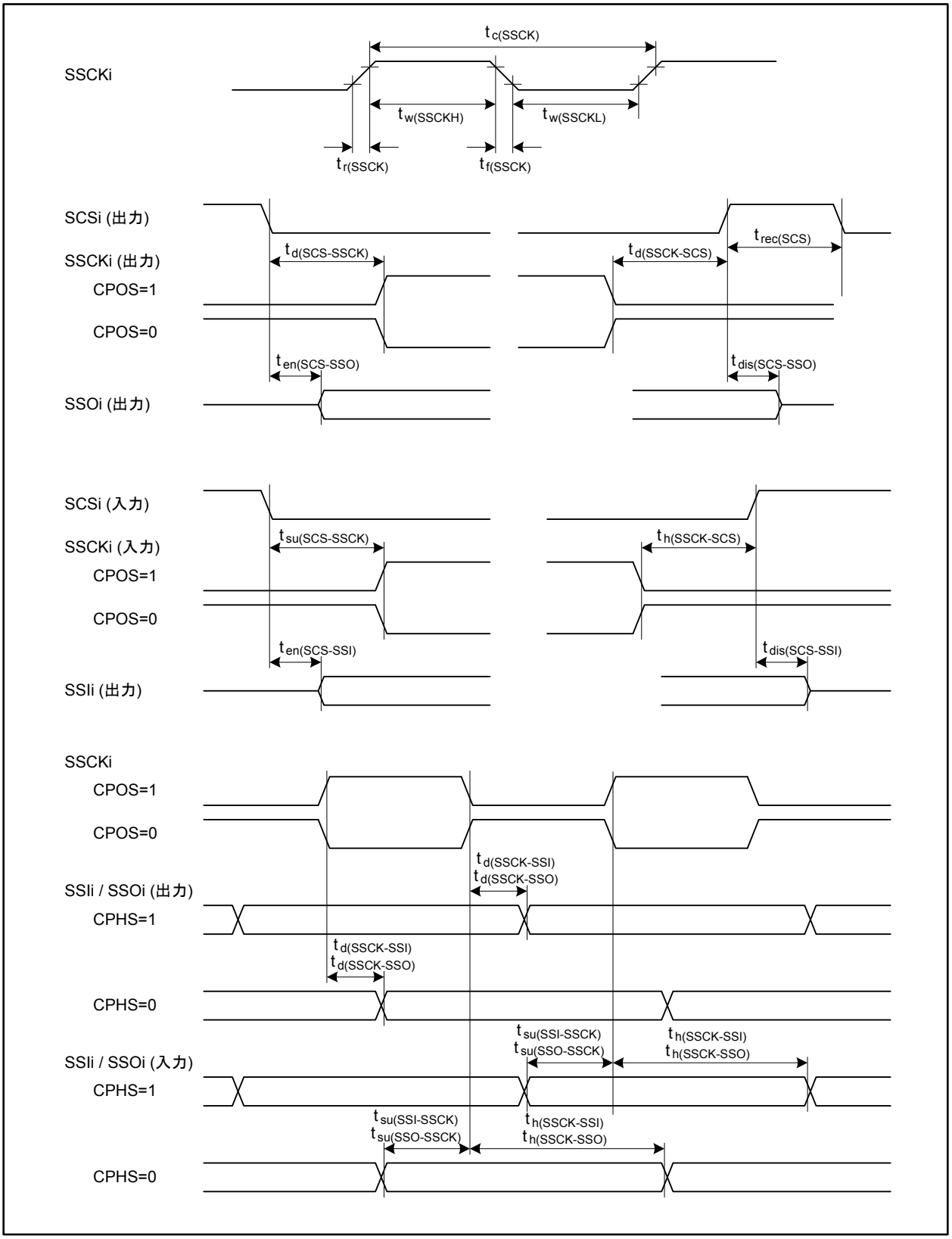


図 29.9　シリアルバスインタフェースタイミング図

30. 使用上の注意事項

30.1 基板設計に関する注意

30.1.1 電源端子

端子名が同じ電源端子には、端子間での電位差が生じないように以下に注意して基板を設計してください。

- 複数あるVSS端子はすべて同じGNDに接続し、端子間で電位差が生じないように各端子への配線はできる限り太いパターンを使用してください。
- 複数あるVCC端子はすべて同じ電源に接続し、端子間で電位差が生じないように各端子への配線はできる限り太いパターンを使用してください。

ノイズによる誤動作を防止するため、各VCC端子とVSS端子の間には周波特性の良いコンデンサを挿入してください。コンデンサは0.1μF程度の容量のものを、できる限り電源端子の近傍に配置し、最短距離かつできる限り太いパターンを使用して接続してください。

30.1.2 電源電圧

電源電圧が電気的特性に定める推奨動作電圧の範囲外になった場合のマイコンの動作は保証できません。

電源電圧が推奨動作電圧以下になる前に$\overline{\text{RESET}}$端子を“L”にしてください。

30.2 レジスタ設定時の注意

30.2.1 ライトオンリのビットを含むレジスタ

ライトオンリ(WO)のビットを含むレジスタに値を設定する場合、リードモディファイライト命令は使用できません。リードモディファイライト命令は、対象アドレスの値を読み、その値を変更して書き戻す命令です。表30.1にリードモディファイライト命令を、表30.2にライトオンリ(WO)のビットを含むレジスタを示します。前回の値を加工して次の値を決める場合は、レジスタに書く値をRAMにも書いておき、次の値はRAMの内容を変更した後、MOV命令を使用してレジスタに転送してください。

表30.1 リードモディファイライト命令

機能	ニーモニック
転送	MOV*Dir*
ビット処理	BCLR、BM*Cnd*、BNOT、BSET、BTSTC、BTSTS
シフト	ROLC、RORC、ROT、SHA、SHL
算術演算	ABS、ADC、ADCF、ADD、ADSF、DEC、DIV、DIVU、DIVX、EXTS、EXTZ、INC、MUL、MULU、NEG、SBB、SUB
10進演算	DADC、DADD、DSBB、DSUB
浮動小数点演算	ADDF、DIVF、MULF、SUBF
論理演算	AND、NOT、OR、XOR

表 30.2　ライトオンリ(WO)のビットを含むレジスター覧

モジュール	レジスタ	シンボル	番地
ウォッチドッグタイマ	ウォッチドッグタイマスタートレジスタ	WDTS	04404Eh
タイマA	タイマA0レジスタ(注1)	TA0	0347h-0346h
	タイマA1レジスタ(注1)	TA1	0349h-0348h
	タイマA2レジスタ(注1)	TA2	034Bh-034Ah
	タイマA3レジスタ(注1)	TA3	034Dh-034Ch
	タイマA4レジスタ(注1)	TA4	034Fh-034Eh
	アップダウン選択レジスタ	UDF	0344h
三相モータ制御用タイマ機能	タイマB2割り込み発生頻度設定カウンタ	ICTB2	030Dh
	タイマA1-1レジスタ	TA11	0303h-0302h
	タイマA2-1レジスタ	TA21	0305h-0304h
	タイマA4-1レジスタ	TA41	0307h-0306h
	タイマA1ミラーレジスタ	TA1M	0221h-0220h
	タイマA2ミラーレジスタ	TA2M	0225h-0224h
	タイマA4ミラーレジスタ	TA4M	0229h-0228h
	タイマA1-1ミラーレジスタ	TA11M	0223h-0222h
	タイマA2-1ミラーレジスタ	TA21M	0227h-0226h
	タイマA4-1ミラーレジスタ	TA41M	022Bh-022Ah
	短絡防止タイマ	DTT	030Ch
シリアルインタフェース	UART0転送速度レジスタ	U0BRG	0369h
	UART1転送速度レジスタ	U1BRG	02E9h
	UART2転送速度レジスタ	U2BRG	0339h
	UART3転送速度レジスタ	U3BRG	01E1h
	UART4転送速度レジスタ	U4BRG	01E9h
	UART0送信バッファレジスタ	U0TB	036Bh-036Ah
	UART1送信バッファレジスタ	U1TB	02EBh-02EAh
	UART2送信バッファレジスタ	U2TB	033Bh-033Ah
	UART3送信バッファレジスタ	U3TB	01E3h-01E2h
	UART4送信バッファレジスタ	U4TB	01EBh-01EAh
CANモジュール	CAN0受信FIFOポインタ制御レジスタ	C0RFPCR	047F49h
	CAN0送信FIFOポインタ制御レジスタ	C0TFPCR	047F4Bh

注1.　ワンショットタイマモード時とパルス幅変調モード時のみ

30.3 クロック発生回路使用上の注意

30.3.1 サブクロック

30.3.1.1 発振回路定数のマッチングの確認

サブクロック発振回路の発振回路定数のマッチングは、駆動能力Highと駆動能力Lowの両方とも確認してください。

発振回路定数のマッチングに関しては発振子メーカにお問い合わせください。

30.3.2 パワーコントロール

ベースクロック源を切り替えるとき、クロック分周比を切り替えるときは、使用するクロックの発振が安定してから切り替えてください。オンチップオシレータはCM3レジスタのCM31ビットを“1”にすると瞬時に発振を開始しますので、発振安定を待つ必要はありません。

ベースクロック源をPLLクロックから低速クロックに切り替える(CCRレジスタのBCSビットを“1”にする)場合は、MOV.L命令またはOR.L命令を使用してください。

- アセンブリ言語の場合の例

```
OR.L    #80h, 0004h
```

- C言語の場合の例

```
asm("OR.L  #80h, 0004h");
```

30.3.2.1 ストップモード

- ストップモードからリセットによって復帰する場合、メインクロックの発振が充分に安定するまで$\overline{\text{RESET}}$端子に“L”を入力してください。

30.3.2.2 消費電力を低減するためのポイント

システム設計やプログラムを作成するときに参考にしてください。

- 端子処理

  入力端子を開放のままにすると、貫通電流が流れることがあります。未使用端子は入力に設定し、端子ごとに抵抗を介してVSSに接続(プルダウン)するか、または出力に設定し、端子を開放してください。

- A/Dコンバータ

  A/D変換を行わないときはAD0CON1レジスタのVCUTビットを“0”(VREF未接続)にしてください。なお、A/D変換を行うときは、VCUTビットを“1”(VREF接続)にしてから1μs以上経過した後、A/D変換を開始させてください。

- D/Aコンバータ

  D/A変換を行わないときは、DACONレジスタのDAiEビット(i=0, 1)を“0”(出力禁止)にし、DAiレジスタを“00h”にしてください。

- 周辺機能の停止

  ウェイトモードへ移行するとき、CM0レジスタのCM02ビットで周辺機能クロック源を停止することにより、消費電力を低減させることができます。ただし、fC32は停止しません。

30.4 割り込み使用上の注意

30.4.1 ISPの設定

リセット後、ISP (割り込みスタックポインタ)は“00000000h”に初期化されています。そのため、ISPに値を設定する前に割り込みを受け付けると、暴走の要因となります。割り込みを受け付ける前に、ISPに値を設定してください。ISPには4の倍数を設定してください。4の倍数を設定したほうがメモリアクセス回数が少なくなり、割り込みシーケンスの実行速度が速くなります。

特にNMIを使用する場合は割り込みを禁止できませんので、プログラムの先頭でISPを設定した後、PM2レジスタのPM24ビットを“1” (NMI有効)にしてください。

30.4.2 NMI

- NMIは、PM2レジスタのPM24ビットを“1” (NMI有効)にした後は禁止できません。NMIを使用しない場合はPM24ビットを“0”から変更しないでください。

- PM2レジスタのPM24ビットが“1” (NMI有効)の場合、P8レジスタのP8_5ビットは、$\overline{\text{NMI}}$端子の状態を確認する用途にのみ使用できます。汎用ポートとしては使用できません。

30.4.3 外部割り込み

- $\overline{\text{INTi}}$端子(i=0~5)に入力する信号には、電気的特性で規定する信号幅が必要です。規定の最小幅を下回った場合、割り込みが受け付けられない場合があります。

- INTiICレジスタ(i=0~5)のPOLビット、LVSビット、IFSR0レジスタのIFSR0iビット(i=0~5)で$\overline{\text{INTi}}$端子の有効エッジや有効レベルを切り替えたとき、対応するIRビットが“1” (割り込み要求あり)になる場合があります。これらのビットは、INTiICレジスタのILVL2 ~ ILVL0ビットを“000b” (割り込み禁止)にしてから書き換えてください。また、書き換えた後は、対応するIRビットを“0” (割り込み要求なし)にしてからILVL2 ~ ILVL0ビットを設定してください。

30.5 DMAコントローラ使用上の注意

30.5.1 DMAC関連レジスタの設定

- DMAC関連レジスタを設定する場合、設定するチャネルのDMDiレジスタ(i=0~3)のMDi1~MDi0ビットが“00b” (DMA転送禁止)の状態で設定し、最後にMDi1~MDi0ビットを“01b” (単転送)または“11b” (リピート転送)に設定してください。DMDiレジスタのUDAi、USAi、BWi1~BWi0ビットを書き換える場合も、MDi1~MDi0ビットが“00b” (DMA転送禁止)のときに実施してください。

- DMA転送を許可した後でDMAC関連レジスタを書き換える必要が生じた場合、まずDMA転送要求が発生しないようにDMA起動要因となる周辺機能を停止し、次に書き換えたいチャネルのDMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットを“00b” (DMA転送禁止)にしてから実施してください。

- 一旦DMA転送要求が受け付けられた後は、DMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットを“00b” (DMA転送禁止)にしてもDMA転送を禁止することはできません。この場合、DMA転送が完了するまでMDi1~MDi0ビット以外のDMAC関連レジスタの設定を変更しないでください。

- DMiSL、DMiSL2レジスタを設定した後、周辺バスクロックで6クロック以上待ってから、DMDiレジスタのMDi1~MDi0ビットに“01b” (単転送)または“11b” (リピート転送)を書いてください。

30.5.2 DMAC関連レジスタの読み出し

- DMiSL、DMiSL2レジスタをそれぞれ連続して読み出す場合、以下の順で読み出してください。
  DM0SL→DM1SL→DM2SL→DM3SL
  DM0SL2→DM1SL2→DM2SL2→DM3SL2

30.6 タイマ使用上の注意

30.6.1 タイマA、タイマB共通

リセット後、タイマは停止しています。モードやカウントソース、カウンタの値を設定した後、TABSRレジスタまたはTBSRレジスタの、TAiSビット(i=0~4)またはTBjSビット(j=0~5)を“1”(カウント開始)にしてください。

以下のレジスタ、ビットは、対応するTAiSビットまたはTBjSビットが“0”(カウント停止)の状態で変更してください。

- TAiMRレジスタ、TBjMRレジスタ
- UDFレジスタ
- ONSFレジスタのTAZIEビット、TA0TGLビット、TA0TGHビット
- TRGSRレジスタ

30.6.2 タイマA

30.6.2.1 タイマモード時

- カウント中のカウンタの値は、TAiレジスタを読むことでいつでも知ることができます。ただし、TAiレジスタのリードがリロードタイミングと重なったときは“FFFFh”が読めます。また、カウント停止中にTAiレジスタに値を設定して、カウント開始前にTAiレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

30.6.2.2 イベントカウンタモード時

- カウント中のカウンタの値は、TAiレジスタを読むことでいつでも知ることができます。ただし、TAiレジスタのリードがリロードタイミングと重なった場合、アンダフロー時は“FFFFh”が、オーバフロー時は“0000h”が読めます。また、カウント停止中にTAiレジスタに値を設定して、カウント開始前にTAiレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

30.6.2.3 ワンショットタイマモード時

- カウント中にTABSRレジスタのTAiSビットを“0”(カウント停止)にすると、以下のようになります。
  - カウンタはカウントを停止し、TAiレジスタの設定値をリロードします。
  - TAiOUT端子は“L”を出力します。
  - CPUクロックの1サイクル後、TAiICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になります。

- ワンショットタイマの出力は内部で生成されたカウントソースに同期しているため、トリガにTAiIN端子への入力を選択している場合、トリガ入力からワンショットタイマの出力までに、最大でカウントソース1クロック分の遅延が生じます。

- 下記のいずれかでタイマの動作モードを設定した場合、IRビットが“1”になります。タイマAi割り込み(IRビット)を使用する場合は、下記の設定を行った後、IRビットを“0”にしてください。
  - リセット後、ワンショットタイマモードを選択したとき
  - 動作モードをタイマモードからワンショットタイマモードに変更したとき
  - 動作モードをイベントカウンタモードからワンショットタイマモードに変更したとき

- カウント中に再トリガが発生した場合は、カウンタは1回ダウンカウントした後、TAiレジスタ(i=0~4)の設定値をリロードしてカウントを続けます。カウント中に再トリガを発生させる場合は、前回のトリガの発生からタイマのカウントソース1クロック以上経過した後に発生させてください。

- カウント開始条件にTAiIN端子へのトリガ入力を選択している場合、タイマAのカウント値が“0000h”になる直前の300nsの間に再トリガを入力しないでください。ワンショットタイマがカウントを継続しないで停止する場合があります。

30.6.2.4 パルス幅変調モード時

- 下記のいずれかでタイマの動作モードを設定した場合、IRビットが“1”になります。タイマAi割り込み(IRビット)を使用する場合は、以下の設定を行った後、IRビットを“0”にしてください。
  - リセット後、PWMモードを選択したとき
  - 動作モードをタイマモードからPWMモードに変更したとき
  - 動作モードをイベントカウンタモードからPWMモードに変更したとき

- PWMパルスを出力中にTAiSビットを“0”(カウント停止)にすると以下のようになります。
  - カウンタはカウントを停止します。
  - TAiOUT端子から“H”を出力している場合は、出力レベルは“L”になり、IRビットが“1”になります。
  - TAiOUT端子から“L”を出力している場合は、出力レベルは変化せず、IRビットも変化しません。

30.6.3 タイマB

30.6.3.1 タイマモード、イベントカウンタモード時

- カウント中のカウンタの値は、TBjレジスタ(j=0~5)を読むことでいつでも知ることができます。ただし、TBjレジスタのリードがリロードタイミングと重なったときは“FFFFh”が読めます。また、カウント停止中にTBjレジスタに値を設定して、カウント開始前にTBjレジスタを読んだ場合、設定した値が読めます。

30.6.3.2 パルス周期測定/パルス幅測定モード時

- TBjMRレジスタのMR3ビットを“0”(オーバフローなし)にするには、TBjSビットが“1”(カウント開始)のとき、MR3ビットが“1”(オーバフローあり)になってからカウントソース1クロック以上経過した後に、TBjMRレジスタに書いてください。

- オーバフローだけの検出にはTBjICレジスタのIRビットを使用してください。MR3ビットは、割り込み処理ルーチンで割り込み要因を判断するときにだけ使用してください。

- カウント開始時のカウンタの値は不定です。したがって、カウント開始後最初の有効エッジが入力されるまでにカウンタがオーバフローし、タイマBj割り込み要求が発生する可能性があります。

- カウント開始後、最初の有効エッジが入力された時は、カウンタの値が不定なので不定値がリロードレジスタに転送されます。なお、このときタイマBj割り込み要求は発生しません。

- カウント開始後にTBjMRレジスタのMR1~MR0ビットを変更すると、IRビットが“1”(割り込み要求あり)になることがあります。ただし、MR1~MR0ビットに同じ値を上書きした場合は、IRビットは変化しません。

- パルス幅測定モードでは、連続してパルス幅を測定します。測定結果が“H”幅の測定結果であるか“L”幅の測定結果であるかは、プログラムで判断してください。

- パルス周期測定モードでは、カウンタのオーバフローと同時に有効エッジが入力された場合、割り込み要求が1回しか発生しないため、有効エッジが入力されたことを確認できません。カウンタがオーバフローしない範囲で使用してください。

- パルス幅測定モードでは、タイマBj割り込みの処理ルーチンでポートのレベルを読んで、カウンタがオーバフローしたか、有効エッジが入力されたかを判断してください。

30.7 三相モータ制御用タイマ機能使用上の注意

30.7.1 シャットダウン機能

- PM2レジスタのPM24ビットが“1” (NMI有効)、かつIOBCレジスタのSDEビットが“1” (シャットダウン機能有効)で、INVC0レジスタのINV02ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ機能を使用する)、かつINV03ビットが“1” (三相モータ制御用タイマ出力許可)のとき、$\overline{\text{NMI}}$端子に“L”を入力するとTA1OUT、TA2OUT、TA4OUT端子はハイインピーダンスになります。

30.7.2 レジスタ設定

- タイマB2がアンダフローする前後で、TAi1レジスタ(i=1, 2, 4)に値を設定しないでください。TAi1レジスタに値を設定する場合は、TB2レジスタの値を読んで、アンダフローまでに十分な時間があることを確認してから設定してください。TB2レジスタの読み出しと、TAi1レジスタへの書き込みの間隔があかないよう、この間に割り込み処理などが実行されないようにしてください。また、TB2レジスタを読み出した結果、アンダフローまでに十分な時間がない場合は、アンダフローするまで待った後TAi1レジスタを設定してください。

30.8 シリアルインタフェース使用上の注意

30.8.1 UiBRGレジスタ(i=0~4)の変更

- UiBRGレジスタはUiC0レジスタのCLK1~CLK0ビットを設定した後に書いてください。また、CLK1~CLK0ビットを変更した場合は、UiBRGレジスタも設定し直してください。

- UiBRGレジスタに“00h”を書いた場合、直後にカウンタが動作し“FFh”になる場合があります。この場合、設定した“00h”がリロードされるまで256クロック余分に時間がかかります。“00h”がリロードされた後は、設定どおり分周なしになります。

30.8.2 端子の出力について

UiC0レジスタ(i=0~2)のNCHビットを“1”にした場合、出力機能選択レジスタでUARTを選択する/しないに関わらず、該当するチャネルのTXDi/SDAi信号、SCLi信号が割り当てられている端子がNチャネルオープンドレイン出力になります。

UiSMR3レジスタのNODCビットを“1”にした場合、出力機能選択レジスタでUARTを選択する/しないに関わらず、該当するチャネルのCLKi信号が割り当てられている端子がNチャネルオープンドレイン出力になります。

30.8.3 クロック同期モード

30.8.3.1 外部クロック選択

- 外部クロックを選択している場合、UiC0レジスタ(i=0~4)のCKPOLビットが“0”(送受信クロックの立ち下がりに同期して送信データ出力、立ち上がりに同期して受信データ入力)のときは外部クロックが“H”の状態で、CKPOLビットが“1”(送受信クロックの立ち上がりに同期して送信データ出力、立ち下がりに同期して受信データ入力)のときは外部クロックが“L”の状態で以下の条件を満たしてください。
  - UiC1レジスタのTEビットが“1”(送信許可)
  - UiC1レジスタのREビットが“1”(受信許可)
  - UiC1レジスタのTIビットが“0”(UiTBレジスタにデータあり)
    送信のみの場合はREビットの設定は不要

30.8.3.2 受信

- クロック同期モードでは送信制御回路で送受信クロックを制御します。したがって、受信だけで使用する場合も送信のための設定をしてください。受信時TXDi端子(i=0~4)からはダミーデータが外部に出力されます。

- 連続してデータを受信した場合、UiC1レジスタのRIビットが“1”(UiRBレジスタにデータあり)のときに次の受信データの7ビット目を受信するとオーバランエラーが発生し、UiRBレジスタのOERビットが“1”(オーバランエラー発生)になります。この場合、UiRBレジスタは不定になります。オーバランエラーが発生したときはSiRICレジスタのIRビットは“1”に変化しません。

30.8.4 特殊モード1 (I2Cモード)

- スタートコンディション、ストップコンディション、リスタートコンディションを生成する場合、UiSMR4レジスタ(i=0~2)のSTSPSELビットを“0”にした後、送受信クロックの半クロック以上待ってから、各コンディション生成ビット(STAREQビット、RSTAREQビット、STPREQビット)を“0”から“1”にしてください。

30.8.5 通信異常時の対処方法

送受信中に機能選択レジスタを書き換えるなど、通信異常が発生するような操作を行わないでください。万が一通信相手がそのような操作を行った場合、あるいはノイズの影響などによりビットずれが発生した場合など通信異常が発生した場合は、以下の手順で内部回路を初期化してください。

A. クロック同期モードの場合

(1) UiC1レジスタ(i=0~4)のTEビットを“0”(送信禁止)、REビットを“0”(受信禁止)にする。
(2) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効)にする。
(3) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“001b”(クロック同期型シリアルインタフェースモード)にする。
(4) 必要に応じてUiC1レジスタのTEビットを“1”(送信許可)、REビットを“1”(受信許可)にする。

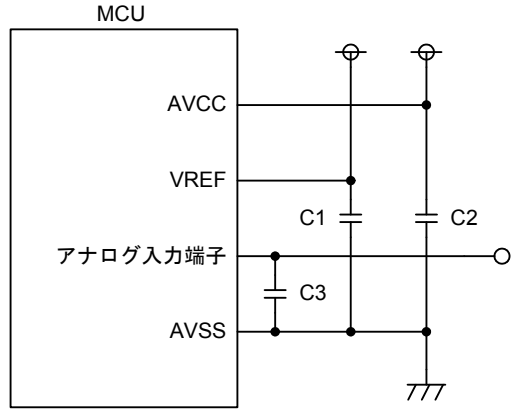
B. UARTモードの場合

(1) UiC1レジスタのTEビットを“0”(送信禁止)、REビットを“0”(受信禁止)にする。
(2) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“000b”(シリアルインタフェース無効)にする。
(3) UiMRレジスタのSMD2~SMD0ビットを“100b” (UARTモード キャラクタ長7ビット)または、“101b” (UARTモード キャラクタ長8ビット)、“110b” (UARTモード キャラクタ長9ビット)にする。
(4) 必要に応じてUiC1レジスタのTEビットを“1”(送信許可)、REビットを“1”(受信許可)にする。

30.9 A/Dコンバータ使用上の注意

30.9.1 基板設計上の注意点

- ノイズによる誤動作やラッチアップの防止、または変換誤差の低減のため、AVCC端子、VREF端子、アナログ入力端子(AN_0~AN_7, AN0_0~AN0_7, AN2_0~AN2_7)とAVSS端子の間にそれぞれコンデンサを挿入してください。図30.1に端子の処理例を示します。



注1. C1≧0.47μF、C2≧0.47μF、C3≧100pF (いずれも参考値です)。
注2. MCUとコンデンサの間は、可能な限り太く、短く配線してください。

図30.1 A/D関連端子の処理例

- キー入力割り込みを使用する場合、AN_4~AN_7は4本ともアナログ入力端子として使用しないでください(A/D入力電圧がVIL以下になると、キー入力割り込み要求が発生します)。

- AVCC=VREF=VCCの場合、AN_0~AN_7、AN0_0~AN0_7、AN2_0~AN2_7、ANEX0、ANEX1のA/D入力電圧はVCC以下にしてください。

30.9.2 プログラム作成上の注意点

- AD0CON0レジスタ(ADSTビットを除く)、AD0CON1レジスタ、AD0CON2レジスタ、AD0CON3レジスタ、AD0CON4レジスタ、AD0CON5レジスタは、A/D変換停止時(トリガ発生前)に書いてください。

- AD0CON1レジスタのVCUTビットを“0” (VREF未接続)から“1” (VREF接続)にしたときは、1μs以上経過した後にA/D変換を開始させてください。A/D変換を行わないときは、消費電流を低減させるためにVCUTビットを“1”から“0”にしてください。

- アナログ入力端子として使用する端子に対応するポート方向ビットは“0” (入力)にしてください。また、対応するポートの機能選択レジスタのASELビットを“1” (A/D入力として使用する)にしてください。

- AD0CON0レジスタのTRGビットが“1” (外部トリガ・ハードウェアトリガ)の場合は、ADTRG端子に対応するポート方向ビット(PD9_7ビット)は“0” (入力)にしてください。

- φADは、VCC=4.2~5.5Vのとき16MHz以下に、VCC=3.0~4.2Vのとき10MHz以下にしてください。サンプル&ホールド機能なしの場合、φADの周波数は250kHz以上にしてください。サンプル&ホールド機能ありの場合、φADの周波数は1MHz以上にしてください。

- A/D動作モード(AD0CON0レジスタのMD1~MD0ビット、AD0CON1レジスタのMD2ビット)を変更した場合は、AD0CON0レジスタのCH2~CH0ビットまたは、AD0CON1レジスタのSCAN1~SCAN0ビットでアナログ入力端子を再選択してください。

- A/D変換結果がAD0iレジスタ(i=0~7)に格納される時にCPUがAD0iレジスタを読んだ場合、誤った値がAD0iレジスタに格納されることがあります。A/D変換が完了したことを確認してからAD0iレジスタを読んでください。
  単発モード、単掃引モードを使用する場合は、AD0ICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になったことを確認してから対象のAD0iレジスタを読んでください。
  繰り返しモード、繰り返し掃引モード0、繰り返し掃引モード1を使用する場合は、AD0CON3レジスタのDUSビットを“1”(DMAC利用モード有効)にすれば変換完了ごとに割り込み要求を発生させることができます。上と同様、AD0ICレジスタのIRビットが“1”(割り込み要求あり)になったことを確認してからAD00レジスタを読んでください。

- A/D変換中にAD0CON0レジスタのADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてA/D変換を中断した場合、A/Dコンバータの変換結果は不定となります。また、A/D変換を行っていないAD0iレジスタも不定になる場合があります。A/D変換を中断した場合は、いずれのAD0iレジスタの値も使用しないでください。

- DMAC利用モードでは、外部トリガは使用できません。また、変換結果のDMA転送を行う場合、AD00レジスタをプログラムで読まないでください。

- 単掃引モードでA/D変換中にAD0CON0レジスタのADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてA/D変換を中断した場合、掃引が終了していないにもかかわらず割り込み要求が発生することがあります。A/D変換を中断する場合は、割り込みを禁止した後、ADSTビットを“0”(A/D変換停止)にしてください。

30.10 シリアルバスインタフェース使用上の注意

30.10.1 クロック同期式シリアル通信モードおよび4線式シリアルバスモード使用上の注意

30.10.1.1 クロック同期式シリアル通信モード、4線式シリアルバスモード関連レジスタのアクセス

クロック同期式シリアル通信モード、4線式シリアルバスモード関連レジスタ (44F06h番地~44F0Fh番地)の同一レジスタに対して、書いてから「3命令以上経過してから」読んでください。

• 3命令以上待たせる例

```
MOV.B    #00h, 44F0Bh   ; SS0ERレジスタを“00h”にする
NOP
NOP
NOP
MOV.B    44F0Bh, R0L
```

30.11 フラッシュメモリ書き換えに関する注意

30.11.1 電源電圧に関する注意事項

- フラッシュメモリ書き換え中の電源電圧は、電気的特性に定める電圧の範囲で一定の電圧を供給してください。書き換え中に保証値を超える電圧変動があった場合、フラッシュメモリの保証はできません。

30.11.2 ハードウェアリセットに関する注意事項

- フラッシュメモリ書き換え中は、ハードウェアリセットを行わないでください。

30.11.3 フラッシュメモリプロテクトに関する注意点

- IDコードの格納番地に誤ったデータを書くと、標準シリアル入出力モードによるフラッシュメモリの読み書きができなくなります。

30.11.4 プログラム作成上の注意点

- 低速モード、低消費電力モードでは、FMCRレジスタのFEWビットを“1” (CPU書き換えモード)にしないでください。
- E2FMレジスタのEWMビットが“1” (E^2データフラッシュのイレーズ/プログラム許可)の場合は、FMCRレジスタのFEWビットを“1”にしないでください。
- プログラム、ブロックイレーズ、ロックビットプログラム、プロテクトビットプログラムは、NMI、ウォッチドッグタイマ割り込み、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みで中断されます。これらのソフトウェアコマンドが中断された場合、当該ブロックをイレーズした後に再度同じコマンドを実行してください。特にブロックイレーズが中断された場合、ロックビットとプロテクトビットの値は不定になりますので、ロック解除後再度ブロックイレーズを実施してください。

30.11.5 割り込み使用上の注意点

- EW0モード
  - 可変ベクタテーブルにベクタを持つ割り込みは、ベクタをRAM領域に移すことで使用できます。
  - NMI、ウォッチドッグタイマ割り込み、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みは、割り込みが発生すると自動的にリードアレイモードになりますので、フラッシュメモリの書き換え中でも使用できます。割り込み発生時はフラッシュメモリの書き換えが中断され、FMR0、FMSR0レジスタがリセットされます。割り込み処理終了後にFMR1レジスタのLBDビットを“1” (ロックビットプロテクト無効)にしてから再度書き換えプログラムを実行してください。
  - BRK命令、INTO命令、UND命令は、フラッシュメモリ上のデータを参照するため使用できません。

- EW1モード
  - プログラム/ブロックイレーズ中に、可変ベクタテーブルにベクタを持つ割り込みが受け付けられないようにしてください。
  - ウォッチドッグタイマは、カウントソース保護モードで使用しないでください。また、ウォッチドッグタイマ割り込みが発生しないようにしてください。
  - NMI、発振停止検出割り込み、電圧低下検出割り込みは、割り込みが発生すると自動的にリードアレイモードになりますので、フラッシュメモリの書き換え中でも使用できます。割り込み発生時はフラッシュメモリの書き換えが中断され、FMR0、FMSR0レジスタがリセットされます。割

り込み処理終了後にFMR0レジスタのEWMビットを“1” (EW1モード)、FMR1レジスタのLBDビットを“1” (ロックビットプロテクト無効)にしてから再度書き換えプログラムを実行してください。

30.11.6 書き換え制御プログラムの書き換えに関する注意点

- EW0モード
  - 書き換え制御プログラムが格納されているブロックを書き換えている最中に電源電圧が低下すると、書き換え制御プログラムが正常に書き換えられないため、その後のフラッシュメモリ書き換えができなくなることがあります。書き換えできなくなった場合は、シリアルライタ、パラレルライタを使用して書き換えてください。

- EW1モード
  - 書き換え制御プログラムが格納されているブロックは書き換えないでください。

30.11.7 プログラム、イレーズ回数とソフトウェアコマンド実行時間

- ソフトウェアコマンド(プログラム、ブロックイレーズ、ロックビットプログラム、プロテクトビットプログラム)の実行時間は、プログラム、イレーズ回数の増加とともに長くなります。特に、プログラム、イレーズ回数が電気的特性に定めるプログラム、イレーズ回数を超えると、ソフトウェアコマンドの実行時間は著しく長くなるため、ソフトウェアコマンドの待ち時間の設定は電気的特性に定める最大時間以上に設定してください。

30.11.8 その他の注意事項

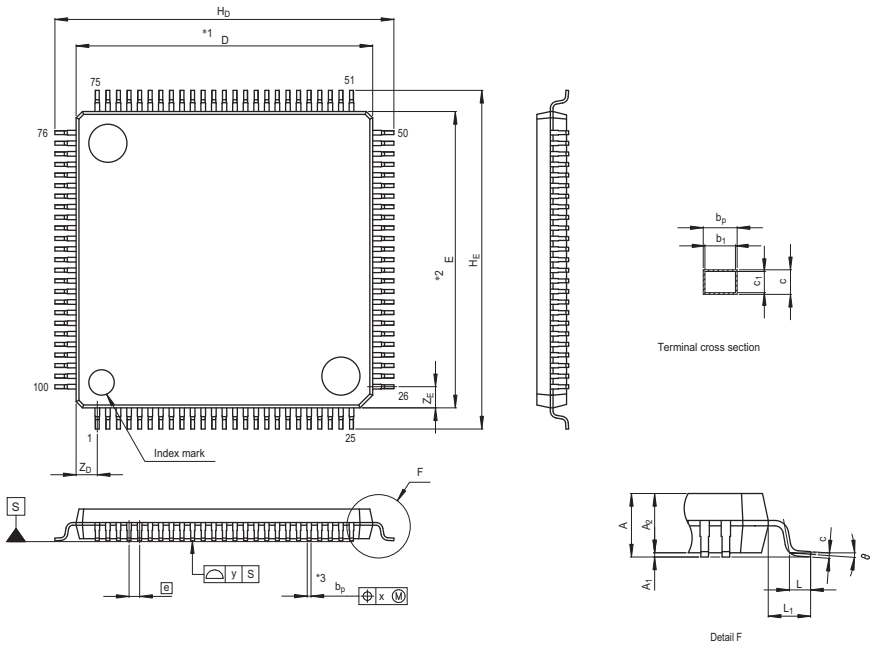
- 電気的特性に定めるプログラム、イレーズ回数は当初の性能を保証できるプログラム、イレーズ回数の最大値です。この回数を超えると直ちにプログラム、イレーズができなくなるわけではありません。
- デバッグでプログラム、イレーズを繰り返したチップは、量産時には使用しないでください。

30.12 E2データフラッシュ書き換えに関する注意

FMCRレジスタのFEWビットが“1” (CPU書き換えモード)の場合は、E2FMレジスタのEWMビットを“1” (イレーズ/プログラム許可)にしないでください。

付録1.外形寸法図

JEITA Package Code	RENESAS Code	Previous Code	MASS[Typ.]
P-LQFP100-14x14-0.50	PLQP0100KB-A	100P6Q-A / FP-100U / FP-100UV	0.6g



NOTE)
1. DIMENSIONS "*1" AND "*2" DO NOT INCLUDE MOLD FLASH.
2. DIMENSION "*3" DOES NOT INCLUDE TRIM OFFSET.

Reference Symbol	Dimension in Millimeters		
	Min	Nom	Max
D	13.9	14.0	14.1
E	13.9	14.0	14.1
A_2	—	1.4	—
H_D	15.8	16.0	16.2
H_E	15.8	16.0	16.2
A	—	—	1.7
A_1	0.05	0.1	0.15
b_p	0.15	0.20	0.25
b_1	—	0.18	—
c	0.09	0.145	0.20
c_1	—	0.125	—
θ	0°	—	8°
e	—	0.5	—
x	—	—	0.08
y	—	—	0.08
Z_D	—	1.0	—
Z_E	—	1.0	—
L	0.35	0.5	0.65
L_1	—	1.0	—

索引

数字

4線式シリアルバスモード 326, 351

A

A0 15
A1 15
A2 15
A3 15
AD00~AD07 268
AD0CON0 263
AD0CON1 264
AD0CON2 265
AD0CON3 266
AD0CON4 267
AD0CON5 267
AD0IC 117

B

BCN0IC~BCN2IC 117
BRK2命令割り込み 109
BRK命令割り込み 109
Bフラグ 16

C

C0AFSR 430
C0BCR 401
C0CLKR 400
C0CSSR 429
C0CTLR 396
C0ECSR 438
C0EIC 117
C0EIER 431
C0EIFR 433
C0FIDCR0、C0FIDCR1 404
C0FRIC 117
C0FTIC 117
C0MB0~C0MB31 408
C0MCTL0~C0MCTL31 412
C0MIER 411
C0MKIVLR 406
C0MKR0~C0MKR7 403
C0MSMR 426
C0MSSR 427
C0RECR 436
C0RFCR 416
C0RFPCR 419
C0RIC 117
C0STR 423
C0TCR 441
C0TECR 437
C0TFCR 420
C0TFPCR 422
C0TIC 117
C0TSR 440
C0WIC 117
CCR 73
CM0 74
CM1 75
CM2 75
CM3 76
CPSRF 77
CRCD 285
CRCIN 286
Cフラグ 16

D

DA0, DA1 284
DACON 284
DCR0~DCR3 ..... 18, 144
DCT0~DCT3 ..... 18, 143
DDA0~DDA3 ..... 18, 145
DDR0~DDR3 ..... 18, 145
DM0IC~DM3IC 117
DM0SL~DM3SL 139
DM0SL2~DM3SL2 140
DMAソースアドレスリロードレジスタ ... 18
DMAソースアドレスレジスタ 18
DMAターミナルカウントリロードレジスタ 18
DMAターミナルカウントレジスタ 18
DMAデスティネーションアドレスリロードレジスタ 18
DMAデスティネーションアドレスレジスタ 18
DMAモードレジスタ 18
DMD0~DMD3 ..... 18, 143
DPビット 17
DSA0~DSA3 ..... 18, 144
DSR0~DSR3 ..... 18, 144
DTT 209
DVCR 68
Dフラグ 16

E

E2FA 517
E2FC 516
E2FD 518
E2FI 518
E2FIC 117

E2FM 516
E2FS0 517
E2FS1 517

F

FB 15
FBPM0 495
FBPM1 495
FEBC 492
FLG 15
FMCR 491
FMR0 493
FMR1 494
FMSR0 494
FOフラグ 16
FPR0 493
FUフラグ 16

G

G0BCR0, G1BCR0 295
G0BCR1, G1BCR1 296
G0BT, G1BT 295
G0FE, G1FE 302
G0FS, G1FS 301
G0PO0~G0PO7 300
G0POCR0~G0POCR7 299
G0PSCR, G1PSCR 301
G0SDR, G1SDR 300
G0TM0~G0TM7 298
G0TMCR0~G0TMCR7 297
G0TPR6, G0TPR7 297
G1PO0~G1PO7 300
G1POCR0~G1POCR7 299
G1TM0~G1TM7 298
G1TMCR0~G1TMCR7 297
G1TPR6, G1TPR7 297

I

IC07DDR~IC17DDR 323
ICTB2 202
IDB0, IDB1 202
IFS0 476
IFS1 477
IFS2 478
IFS5 479
IFS6 479
IFSR0 126
IIO0IC~IIO11IC 117
IIO0IE~IIO11IE 131
IIO0IR~IIO11IR 130
INT0IC~INT5IC 118
INTB 15
INTF0 127
INTF1 127
INT命令割り込み 109
INVC0 199
INVC1 200
IOBC 201
IPL 17, 116
ISP 15
Iフラグ 16

K

KUPIC 117

L

L0IC, L1IC 117
LBRG 363
LBRK 368
LBRP0 364
LBRP1 364
LCW 363
LDB1~LDB8 373
LEST 373
LIDB 371
LLDIC 117
LMD0 365
LMD1 366
LRFC 370
LSC 371
LSPC 369
LST 372
LTC 372
LVDC 67
LWUP 367

N

NMI 110

O

OFS 136
ONSF 171
Oフラグ 16

P

P0~P10 164
P0_0S~P0_7S 465

P10_0S~P10_7S 475
P1_0S~P1_7S 466
P2_0S~P2_7S 467
P3_0S~P3_7S 468
P4_0S~P4_7S 469
P5_0S~P5_7S 470
P6_0S~P6_7S 471
P7_0S~P7_7S 472
P8_0S~P8_4S, P8_6S, P8_7S 473
P9_3S~P9_7S 474
PBC 103
PC 15
PCR 482
PC退避レジスタ 17
PD0~PD10 463
PLC0 82
PLC1 83
PLS 83
PM0 63
PM2 78
PM3 79
PRCR 104
PRCR2 105
PRCR3 105
PRCR4 106
PRR 107
PUR0 480
PUR1 480
PUR2 481
PUR3 481

R

R2R0 15
R3R1 15
R6R4 15
R7R5 15
RIPL1, RIPL2 ..... 120, 153
RND 17

S

S0RIC~S4RIC 117
S0TIC~S4TIC 117
SB 15
SP 15
SS0CRH 330
SS0CRL 331
SS0ER 334
SS0IC 117
SS0MR 332, 333
SS0MR2 336
SS0RDR 337
SS0SR 335
SS0TDR 337
SVF 17
SVP 17
Sフラグ 16

T

TA0~TA4 168
TA0IC~TA4IC 117
TA0MR~TA4MR 169, 174, 177, 180, 182
TA1, TA2, TA4 205
TA11, TA21, TA41 205
TA11M, TA21M, TA41M 206
TA1M, TA2M, TA4M 206
TA1MR, TA2MR, TA4MR 206
TABSR 169, 186, 207
TB0~TB5 185
TB0IC~TB5IC 117
TB0MR~TB5MR 185, 187, 189, 192
TB2 203
TB2MR 204
TB2SC 204
TBECKS 190
TBSR 186
TCSPR 76, 172
TRGSR 172, 207

U

U0BRG~U4BRG 224
U0C0~U2C0 218
U0C1~U2C1 220
U0MR~U2MR 216
U0RB~U2RB 225
U0SMR~U2SMR 221
U0SMR2~U2SMR2 222
U0SMR3~U2SMR3 223
U0SMR4~U2SMR4 224
U0TB~U4TB 225
U34CON 221
U3C0, U4C0 219
U3C1, U4C1 220
U3MR, U4MR 217
U3RB, U4RB 226
UDF 170
USP 15
Uフラグ 16

V

VCT 17
VRCR 65

W

WDC 134
WDK 135
WDTS 135

X

X0R~X15R 288
XYC 288

Y

Y0R~Y15R 289

Z

Zフラグ 16

あ

アドレスレジスタ 15

う

ウォッチドッグタイマ割り込み 110

お

オーバフローフラグ 16
オーバフロー割り込み 109

き

キャリーフラグ 16

く

クロック同期式シリアル通信モード 326, 345

こ

高速割り込み 110
固定小数点位置指定ビット 17

さ

サインフラグ 16

し

周辺機能割り込み 110
シリアルバスインタフェース 325
シングルステップ割り込み 110

す

スタックポインタ 15
スタックポインタ指定フラグ 16
スタティックベースレジスタ 15

せ

ゼロフラグ 16

そ

ソフトウェア割り込み 109

て

データレジスタ 15
デバッグフラグ 16
電圧低下検出回路 67
電圧低下検出割り込み 69, 110

と

特殊割り込み 110

の

ノンマスカブル割り込み 108

は

ハードウェア割り込み 110
発振停止検出割り込み 110

ふ

浮動小数点アンダフローフラグ 16
浮動小数点オーバフローフラグ 16
浮動小数点丸め演算モード 17
フラグ退避レジスタ 17
フラグレジスタ 15
フレームベースレジスタ 15
プログラムカウンタ 15
プロセッサ割り込み優先レベル 17, 116

へ

ベクタレジスタ 17

ま

マスカブル割り込み 108

み

未定義命令割り込み 109

ゆ

ユーザスタックポインタ 15

れ

レジスタバンク指定フラグ 16

わ

割り込み
　分類 108
　レジスタ退避 123
割り込み応答時間 122
割り込み許可フラグ 16
割り込みシーケンス 121
割り込みスタックポインタ 15
割り込み制御レジスタ 117
割り込みベクタテーブルベースレジスタ 15
割り込み要求レベル 118

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
0.50	2008.07.18	—	初版発行
1.10	2010.02.25	—	第二版発行
		—	•用語「スタート/ストップコンディション」を「スタートコンディション/ストップコンディション」に変更 •用語「next」以外の意味の「次」を「以下」に変更 •「ウェイトモード」と「ストップモード」を併記する場所での記載順序をこの順番に統一 •用語「可」「不可」を「可能」「できません」に変更 •用語「ハードウェアリセット後」「ソフトウェアリセット後」をそれぞれ「ハードウェアリセット実行後」「ソフトウェアリセット実行後」に修正 •用語「ハードウェアリセットする」を「ハードウェアリセットを行う」に修正
		—	「このマニュアルの使い方」 •「3. レジスタ図の表記」の図を変更
		3 4, 5	「1. 概要」 •表1.2 「IDコードチェック」を「IDコードプロテクト」に変更 •表1.3、図1.1 製品型名を変更
		16 17	「2. 中央演算処理装置(CPU)」 •2.1.8.1 「キャリ」を「キャリー」に変更 •2.1.8.11本文 「要求があった割り込みの優先レベル」を「要求があった割り込みの要求レベル」に変更
		20 28 30 35 38 39-41 43 44 60	「4. SFR」 •表4.1 CCR、FMCRレジスタのリセット後の値を2進数に変更 •表4.9 U3RB、U4RBレジスタのリセット後の値を16進数に変更 •表4.11 レジスタ、シンボルの記載方法を他のレジスタと統一 •表4.16 PDiレジスタのリセット後の値を2進数に変更 •表4.19 LVDCレジスタの「低電圧」を「電圧低下」に修正 •表4.20~表4.22 Pi_jSレジスタの名称を修正 •表4.24 DMiSLレジスタの名称を修正 •表4.25 LIN関連レジスタのリセット後の値の「X」を「0」に修正、LSC、LTCレジスタの名称を修正 •表4.41 C0CLKRレジスタのリセット後の値を変更
		64	「5. リセット」 •図5.5 リセットベクタの図一部変更
		67	「6. パワーマネージメント」 •図6.3 ビットシンボル、レジスタシンボルの誤記を修正
		—	「7. クロック発生回路」 •CM02ビット関連の「周辺機能クロック」を「周辺機能クロック源」に修正 •用語 「バスクロック」を「周辺バスクロック」に、「XINクロック」を「メインクロック」に修正 •IPL以外の「割り込み優先レベル」を「割り込み要求レベル」に変更

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		71	•7.1 本文 「図7.3~」を「図7.2~」に修正
		72	•図7.1 「ソフトウェアリセット」を削除、「電圧低下検出割り込み」を追加、「割り込み要求レベル判定出力」を「復帰用割り込み判定出力」に変更、ビットシンボル一覧を図中に記載のものだけに限定
		74	•図7.3 注3 停止しないクロックに f2n を追加
		76	•図7.7 「PLL クロック」を「周辺機能クロック源」に修正
		77	•図7.9 注3の「周辺クロック」を「周辺機能クロック源」に修正
		81	•図7.13 「SEO ビット」に「PLC1 レジスタの」を追加
		81, 82	•図7.14、図7.15 注1 説明文追加
		83	•7.1.3本文 周波数に関する文章を削除、fSO(PLL)に変更、「tOSC(PLL)」を「tLOCK(PLL)」に変更
		85	•7.2.1本文 「ウェイトモードでの発振停止検出使用禁止」を追加
		85, 86	•7.3本文、7.4本文 周波数を削除
		86	•7.4本文 周辺バスクロックの用途に「シリアルバスインタフェース」を追加 •7.5 (1)本文 f2n に条件を追加
		89-91	•図7.18~図7.20 ビットシンボルの説明を追加
		92	•7.7.1本文 文章表現を修正
		93	•7.7.2.2 「WAIT 命令実行前の処理」を「ウェイトモード移行前の処理」に変更、処理手順を変更
		94	•7.7.2.4本文 「周辺機能クロックを使用する周辺機能」の周辺機能クロックを詳細に記載
		96	•7.7.3.1 ストップモード移行前の処理の手順を変更、「ストップモード解除後」を「ストップモード復帰後」に変更
		97	•表7.7 7.7.3項から7.7.3.3項に移動
		99	•7.9 「クロック発生回路使用上の注意」新規作成
		101	•「8. バス」 •8.2本文 「32MHz」の後に補足説明を追加、「16ビット幅」を「16/32ビット幅」に修正
		102	「9. プロテクト」 •9本文 「重要なレジスタは簡単に」を「重要なレジスタが容易に」に変更 •表9.1、図9.1 レジスタの並びを章順に変更
		—	「10. 割り込み」 •ILVL2~ILVL0 ビットに対する「割り込み優先レベル」を「割り込み要求レベル」に変更
		106	•10.1 (1)、(2)の「許可(禁止)」を「許可/禁止」に変更
		108	•10.3.1本文 「7つ」を「5つ」に修正
		110-113	•表10.2~表10.5 参照先を詳細に記載
		114	•表10.6 タイトルと見出しを変更
		115, 116	•図10.3、図10.4 IR ビットのビット名を「割り込み要求ビット」から「割り込み要求フラグ」に変更
		116	•図10.4 POL ビットの機能欄の「(注3)」を「(注2)」に修正

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		117	• 10.6.2 一部本文を見直し、IRビットが消えない場合の対策を追加
		118	• 10.6.3本文 「ストップモードの解除」を「ストップモードからの復帰」に変更
		120	• 表10.7 割り込みシーケンスのサイクル数を修正
		122	• 10.8 割り込み優先順位の式の優先順位を修正
			• 10.9 「割り込み優先レベル判定」を「割り込み優先順位判定」に変更
		123	• 図10.8 「RLVL02~RLVL00」を「RIPL1レジスタのRLVL2~RLVL0」に、「RLVL12~RLVL10」を「RIPL2レジスタのRLVL2~RLVL0」に修正、「割り込み要求受け付け/CLK部へ」を「復帰用割り込み判定出力(クロック発生回路へ)」に変更
		127	• 図10.13 「i=0~11」を図タイトル部に移動
		128, 129	• 図10.14、図10.15 レジスタ名に「i」を追加。割り込み要因の「i」、「j」をそれぞれ「x」、「y」に変更
		130	• 10.14.1本文 一部補足説明を追記
			• 10.14.3本文 LVS、IFSR0iビットを追加、説明文修正
			「11. ウォッチドッグタイマ」
		—	• 用語統一「バスクロック」→「周辺バスクロック」
		131	• 11本文 文章表現を全面見直し
		132	• 図11.1 オンチップオシレータ側のプリスケーラの表記を変更、ビットシンボル一覧に不足するシンボルを追加
			• 図11.2 注1追加
		133	• 図11.3 WDK3-WDK2ビットのビット名を変更、注2追加
			• 図11.4 注2削除
		134	• 図11.5 WPSC1-WPSC0ビットのビット名を変更、RW欄を「(注1)」に変更、注3追加
			「12. DMAC」
		—	• 用語統一「転送単位」→「転送サイズ」、「転送番地方向」→「アドレッシング」、「順方向」→「インクリメント」
		136	• 表12.1 「64MB」を「64Mバイト」に表記を修正
		137	• 12本文 「DMiSLレジスタ、DMiSL2レジスタのDSEL4~DSEL0ビット」を「DMiSLレジスタのDSEL4~DSEL0ビット、DMiSL2レジスタのDSEL24~DSEL20ビット」に修正
		138	• 図12.3 注1 「DSEL4~DSEL0」を「DSEL24~DSEL20」に修正
		141	• 図12.4 USAi、UDAiビットの機能欄の表現を変更、注2後半の文を削除、注3を追加
			• 図12.5 注3を削除
		144	• 12.1本文 「DSAiレジスタ」に「(i=0~3)」を追加
		149	• 12.4.1 1つ目の注意事項に説明文を追加、2つ目、3つ目の注意事項を削除、新たに注意事項を2項目追加
			「13. DMAC II」
		—	• 構成、文章表現を全面的に見直し
			• 文字「Ⅱ」を「II」に変更

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		—	• 用語統一「転送データ」→「転送対象」、「転送単位」→「転送サイズ」、「転送方向」→「アドレッシング」、「順方向番地」→「インクリメント」、単位以外の「番地」→「アドレス」、「ダウンカウント」→「デクリメント」
			• 用語変更「チェーン転送番地」→「チェーン転送ベースアドレス」、「転送完了割り込み番地」→「転送完了割り込みベクタアドレス」、「固定番地」→「アドレス固定のメモリ」、「可変番地」→「連続するメモリ領域」
		150	• 表13.1 転送対象欄の演算転送を2行に分割、転送方式欄に説明文を追加、複数転送機能を転送方式欄に移動
		151	• 13.1 本文 「可変ベクタテーブル」を「可変ベクタ」に修正
		152	• 図13.2 体裁見直し、下部文章 「BASE+6」を「BASE+8」に修正
		154	• 図13.3 MULTビットの値に応じてレジスタ図を2つに分割、b14-b8を「何も配置されていない」から「予約ビット」に修正
		155	• 13.2本文 章末の文章を本節末に移動
		156	• 13.3.1本文 アドレスが01FFFFFFhを超えた場合の動作を追記
			• 13.3.3本文 項末の割り込み受け付けに関する一文を削除
		157	• 13.4本文 転送方式として複数転送を追加、BRSTビットの説明を削除
			• 13.4.1本文、13.4.2本文 BRSTビットの設定内容を追加
			• 13.4.2本文 割り込み受け付けに関する一文を追加
		158	• 13.5 「チェーン転送」を13.4.4項から13.5節として分割
			• 図13.4 「(1)」、「(2)」、「(3)」を「(a)」、「(b)」、「(c)」に変更、「CADR1~CADR0」を「CADR」に修正
			• 13.6 「転送完了割り込み」を13.4.5項から13.6節として分割
			• 13.6本文 「IADR1~IADR0」を「IADR」に修正、図13.5上の割り込み処理の開始タイミングの文章を本節末に移動
		159	• 13.7 記号説明の「b:」の行「転送先」を「転送元」に修正
			「14. プログラマブル入出力ポート」
		160	• 図14.1 「PSEL2~0」を「PSEL2~PSEL0」に修正
			「15. タイマ」
		163	• 図15.1 ビットシンボル一覧の「TAiGH~TAiGL」を「TAiTGH~TAiTGL」に修正
		165	• 図15.3 「TBiSビット」を「TAiS」に修正
		170	• 図15.10 「PLLクロック」を「周辺機能クロック源」に修正
		180	• 図15.16 リセット後の値を8桁に修正
		181	• 図15.17 注1 「0000」を「0000h」に修正
			• 図15.18 注3 「00」を「00h」に修正
		182	• 15.2本文 「図15.16」を「図15.19」に修正
			• 図15.19 「TBiSビット」を「TBiS」に変更、「クロック源」を「カウントソース」に修正
		183	• 図15.21 タイトルの「TM5MR」を「TB5MR」に修正、注1 一部変更
		190	• 図15.27 注1 一部変更
		192	• 15.3.1本文 制限事項の対象からTAi、TBjレジスタを削除
		194	• 15.3.3 改ページ挿入、タイマBのチャネル番号を「j」に変更

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
			「16. 三相モータ制御用タイマ機能」
		200	• 図16.5 b7-b6の機能欄に「読んだ場合、その値は不定」を追加
		202	• 図16.8 リセット後の値を「00XX 0000b」に修正
		208	• 図16.18 「TA4-1レジスタ」を「TA41レジスタ」に修正、「“H”アクティブ」「“L”アクティブ」をそれぞれ「アクティブ“H”」「アクティブ“L”」に修正、注1の「図16.1」を「ブロック図」に修正
		209	• 図16.19 「“H”アクティブ」「“L”アクティブ」をそれぞれ「アクティブ“H”」「アクティブ“L”」に修正、注1の「図16.1」を「ブロック図」に修正
			「17. シリアルインタフェース」
		213	• 図17.2 ビットシンボル一覧から「CRS」を削除
		221	• 図17.12 注2 「SSを設定する場合」を「SS機能を使用する場合」に修正、「UiCO」を「UiC0」に修正
		222	• 図17.13 注1、注4 本文加筆
		223	• 図17.15 b15-b9の機能欄「読んだ場合、その値は不定」を削除
		225	• 表17.2 送受信クロック欄「(i=0~2)」を「(i=0~4)」に修正
		227, 235	• 表17.4、表17.7 IFS02レジスタの行追加
		243, 246	• 図17.29、図17.30 「DMA要求」を「DMA転送要求」に変更
		243	• 図17.29 ビットシンボル一覧にACKD、ACKCを追加
		244	• 表17.10 UiC1レジスタのUiIRSビットの設定値を修正、UiSMR2レジスタの「SU1HIM」を「7」に修正
		245	• 表17.11 「UART送信/UART受信割り込み」を「送受信割り込み」に修正
		246	• 図17.30 「UART送信、受信割り込み」を「送受信割り込み」に修正
		248-250	• 図17.32、図17.33、図17.34 タイトルに「(i=0~2)」を追加
		254	• 図17.35 「マイクロコンピュータ」を「MCU」に変更
		257	• 17.5.2 NCHビット、NODCビットに関する注意事項を追加
			• 17.5.3.2 連続受信モードに関する注意事項を削除
			「18. A/Dコンバータ」
		259	• 表18.1 注2 電圧条件を詳細に記載
		264	• 図18.5 注5 説明文を見直し
		265	• 図18.6 注2 追加
			• 図18.7 レジスタ名の「AD0」を「A/D0」に修正、b5-b4を「RO」から「RW」に変更、b7-b6、b3の機能欄を変更、注2追加
		266	• 図18.8 ビットシンボル欄を追加、b15-b10の機能欄を変更、注1、注3、注4の説明文を見直し
		267-273	• 表18.2~表18.8 TRGビットが“1”の場合の開始条件をTRG1、TRG0ビット値ごとに記載、変換値の読み出しについての説明文を見直し
		269	• 表18.4タイトル部の「使用」を「仕様」に修正
		273	• 表18.8 機能欄3行目「場合」を「の場合」に修正
		274	• 18.2.3本文 「TRG0ビット」を「TRG1~TRG0ビット」に修正、「機能設定します」を「機能の設定を示します」に修正

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		280	• 18.3.2 5項目目 電圧条件を変更、7項目目を追加、9項目目 「変換結果をDMA転送する場合」を追加
			「22. インテリジェントI/O」
		291	• 図22.1 ビットシンボル一覧に「BT0R」を追加、「(j=0~7)」をタイトル部に移動
		292	• 図22.2 ビットシンボル一覧に「BT1R」を追加、「(j=0~7)」をタイトル部に移動
		293	• 図22.4 注2追加
		301	• 表22.2 カウントソース欄にタイマB0割り込みを追加
		302	• 表22.3 「(i=0, 1)」をタイトル部に移動
		306	• 表22.4 「(j=0~7)」をタイトル部に移動、「IIOi_j端子」を「IIOi_j端子(入力)」に変更
			• 表22.5 「(i=0, 1、j=0~7、k=6, 7)」をタイトル部に移動
		310	• 表22.6 「(i=0, 1、j=0~7)」をタイトル部に移動
		320	• 図22.26 「j=0~7」をタイトル部に追加
			「23. シリアルバスインタフェース」
		335	• 図23.10、図23.11 キャラクタ長が9~16ビットの場合の説明文を追加
		357	• 23.2.1.1 プログラム例のアドレスの誤記を修正
			「24. LINモジュール」
		—	• 各レジスタ図 何も配置されていないビットの、読み出し値とリセット後の値を“0”に修正
		372	• 図24.18 タイトル 「LDB0~LDB8」を「LDB1~LDB8」に修正
		378	• 図24.23 「fLIN0」、「fLIN1」を「fLIN」に変更、注3追加
		386	• 23.8 本文 説明文を見直し
			• 図23.30 フローチャートを全体的に見直し、図タイトルを変更
			「25. CANモジュール」
		—	• 全面改訂
			• 用語、表現を統一、不足する説明を追加
			• レジスタのアドレス表記を24ビットから20ビットに変更
		396	• 25.1.1.3本文 一部修正
		399	• 図25.3 b4の読み出し値を不定に修正
		402	• 図25.5 b31-b29を予約ビットに修正
		403	• 25.1.5 項タイトルに「n」を追加
			• 図25.6 b29を予約ビットに修正
		404	• 25.1.5.3、25.1.5.4 3項目目を追加
		405	• 図25.7 レジスタ図をモード別に分割
		407	• 図25.8 b29、b39-b32、b47-b44を予約ビットに修正
		411	• 図25.10 全面的に書き換え
		418	• 図25.13 「(注1)」削除
		419	• 図25.14 b4を「何も配置されていない」に修正
		425	• 図25.18 リセット後の値を「0000 0000b」に修正
		428	• 図25.20 注2追加、「WO」から「RW」に修正
			• 図25.21 図を詳細に記載

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		429	• 図25.22 注1修正
			• 図25.23 図を詳細に記載
		435, 436	• 図25.26、図25.27 「(8ビット)」を削除
		439	• 図25.29 機能欄の内容を見直し
		441, 442	• 25.1.25.4、25.1.25.5 「受信バッファ」を「受信メールボックス」に修正
		443	• 図25.34 注1 「送信タイミング」を「遷移タイミング」に修正
		447	• 25.2.4 「自身」を「自ノード」に変更
		450	• 25.3.3 「fCAN(…)分周値」を「fCAN(…)」に修正
		460	• 25.7 記載順序入れ替え
			「26. 入出力端子」
		—	•「PSEL2~0」を「PSEL2~PSEL0」に修正
			•「シリアルバス」を「シリアルバスインタフェース」または「SBI」に変更
		462	• 図26.2 PD9_0、PD9_2ビットを予約ビットから未配置ビットに修正
		475	• 図26.14 注1の表「TAxIN入力」を「TAxIN」に修正
		480	• 図26.21 「P7_2~P7_3」を「P7_0~P7_3」に修正
			「27. フラッシュメモリ」
		—	• 用語統一「フラッシュ」→「フラッシュメモリ」、「書き込み」/「ライト」→「プログラム」、「消去」→「イレーズ」
		484	• 表27.1 項目と仕様の一部を見直し
		485	• 27.1本文 ブロックごとの呼称を追記
		486	• 表27.3 ROMコードプロテクトの保護対象に「消去」を追加、IDコードプロテクトの解除方法から「ブロック0の消去」を削除
		487	• 27.2.3 仕様変更に伴い、記載事項を追加
		491	• 図27.5 MPY1~MPY0ビットの機能欄を変更、注2削除
		492	• 図27.7 b4をFCAビットに変更
		493	• 図27.8 「(b7-4)」を「(b7-b4)」に修正
		495-498	• 表27.6~表27.11 周辺バスクロックごとに表を分割
		500	• 27.3.3本文 一部モード名称の誤記を修正
			• 表27.14、表27.15 「(b5-0)」を「(b5-b0)」に修正
		501-506	• 27.3.4 「コマンド発行手順」新規作成
		507	• 27.3.5 「ステータスチェック」新規作成
		509	• 表27.18 電源系統の列を削除
		512	• 27.6 各項目の条件に「発振停止検出割り込み」「電圧低下検出割り込み」を追加
			• 27.6.4 注意事項1項目追加
		513	• 27.6.5 EW1モード 「FMR1レジスタのEWMビットを“1”(EW1モード)、LBDビットを“1”」を「FMR0レジスタのEWMビットを“1”(EW1モード)、FMR1レジスタのLBDビットを“1”」に修正
			「28. E²PROMエミュレーションデータフラッシュ」
		—	• 用語統一「書き込み」/「ライト」→「プログラム」、「消去」→「イレーズ」

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		516	• 図28.6 設定範囲の「00062FFFh」を「00062FFEh」に修正
		517	• 図28.7 タイトル 「F2FI」を「E2FI」に修正
		519	• 図28.10 クリアステータスの前に条件追加
		519-521	• 図28.10~図28.12 分岐部の判定を「Yes」、「No」に変更
		522	• 28.4 「E^2データフラッシュ書き換えに関する注意」新規作成
			「29. 電気的特性」
		524	• 表29.2 dVcc/dt の規格を追加
		525	• 表29.3 注2追加
		529	• 表29.8 tPSの規格を削除
		530	• 表29.10 測定条件削除
		531	• 表29.12 デフォルト電圧条件を4.2Vからに変更
			• 表29.13 fSO(PLL)の最大値を80MHzに変更、ロック検出周波数誤差、アンロック検出周波数誤差の項目を追加、PLLの「安定待ち時間」を「安定時間」に変更、併せて記号もtLOCK(PLL)に変更、測定条件追加、注1、注3追加
		532	• 表29.14、図29.4 ウェイトモード/ストップモードの順に配置替え
		535, 546	• 表29.17、表29.37 RPULLUPの対象からP8_5を削除
		537, 548	• 表29.19、表29.39 ϕADの最小値を0.125から0.25に修正
		542, 553	• 表29.31、表29.51 tw(ADH)の規格を変更
		546	• 表29.37 IIH測定条件の「VI=3V」を「VI=3.3V」に変更
		555	• 表29.54 「TXDiホールド」を「TXDi出力ホールド」に修正
		556	• 図29.6 「マイクロコンピュータ」を「MCU」に変更
			「30. 使用上の注意事項」
		559	• 30.1.2 「電源電圧」新規作成
		560, 561	• 30.2.1項新設、30.2本文を本項に移動、表の掲載順序を入れ替え
		561	• 表30.2 TAxM、TAx1Mレジスタのアドレスを修正、C0CSSRレジスタ削除
		562	• 30.3 「クロック発生回路使用上の注意」新規作成
		563	• 30.4.1本文 一部補足説明を追記
			• 30.4.3本文 LVS、IFSR0iビットを追加、説明文修正
		564	• 30.5.1 1つ目の注意事項に説明文を追加、2つ目、3つ目の注意事項を削除、新たに注意事項を2項目追加
		565	• 30.6.1本文 制限事項の対象からTAi、TBjレジスタを削除
		567	• 30.6.3 改ページ挿入、タイマBのチャネル番号を「j」に変更
		569	• 30.8.2 NCHビット、NODCビットに関する注意事項を追加
			• 30.8.3.2 連続受信モードに関する注意事項を削除
		572	• 30.9.2 5項目目 電圧条件を変更、7項目目を追加、9項目目 「変換結果をDMA転送する場合」を追加
		573	• 30.10.1.1 プログラム例のアドレスの誤記を修正
		574	• 30.11 各項目の条件に「発振停止検出割り込み」「電圧低下検出割り込み」を追加
			• 30.11.4 注意事項1項目追加

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		575	•30.11.5 EW1モード 「FMR1レジスタのEWMビットを“1”(EW1モード)、LBDビットを“1”」を「FMR0レジスタのEWMビットを“1”(EW1モード)、FMR1レジスタのLBDビットを“1”」に修正
		576	•30.12 「E2データフラッシュ書き換えに関する注意」新規作成
1.20	2011.09.09	—	第三版発行
		—	•新ルネサスフォーマットに変更
		—	•資料番号を「RJJ09B0504-0110」から「R01UH0216JJ0120」に変更
			「1. 概要」
		4	•表1.3 製品ステータスを更新
		7	•図1.3 信号名の記載順を変更
		8, 9	•表1.4、表1.5 19、27、53番ピン タイマ端子名の記載順を変更
		11	•表1.7 クロック出力の「fC」を「低速クロック」に修正
			「4. SFR」
		25, 27	•表4.6、表4.8 GiBCR0レジスタのリセット後の値を2進数に変更
		30	•表4.11 「XY制御レジスタ」を「X-Y制御レジスタ」に修正
		32	•表4.13 TABSR、ONSF、TRGSRレジスタのリセット後の値を2進数に変更
		39	•表4.20 IFS0レジスタのリセット後の値を「X0X0 X000b」に修正
		57-58	•表4.38~表4.39 「CAN0アクセプタンスマスクレジスタk」を「CAN0マスクレジスタk」に修正
		60	•表4.41 C0MSMRレジスタの初期値を「0000 0000b」に修正
			「5. リセット」
		61	•5.1 B (2) 「条件を満たすレベル」を「条件を満たす電圧」に変更
		63	•5.2、5.3 本文 一部見直し
			「7. クロック発生回路」
		71	•7.1 本文、表7.1 一部表現を見直し
		72	•図7.1 CLKOUTセレクタの「fC」を「低速クロック」に修正、PLL発振停止条件にBCSビットを追加
		73	•図7.2 注2 最後の文章を削除、注6 追記
		74	•図7.3 CM01~CM00ビットの機能欄「fC」を「低速クロック」に修正、注6 一部変更、注7 追加
		75	•図7.4 注2 一部変更、注4 追加
		76	•図7.6 注1 追記
		78	•図7.9 PM26ビット「クロックソース」を「クロック源」に変更、注3 各ビットの括弧内の記述を修正、注6 追加
		79	•図7.10 注1 追記
		83	•図7.15 SEOビット 「~モード」を「~動作」に変更
			•図7.16 注1 追加
		86	•7.2.1 本文 発振停止検出後の処置としてCM0レジスタのCM05ビットを“1”にする方法を追加
		88	•7.6 本文、表7.3 「fC」を「低速クロック」に修正
		89	•7.7 本文 見直し
		90	•7.7.1 (1)~(3)、(5) 本文 見直し

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		91 92-94 92 93, 94 96, 99 96 98 99	•7.7.1 本文 追加 •図7.18~図7.20を7.7.1項へ移動し、メインクロック停止(故障)の遷移図を追加、遷移フローと条件を一部追加 •図7.18 注4 削除 •図7.19、図7.20 注3 削除 •表7.4、表7.6 「fC」を「低速クロック」に修正 •7.7.2.4 本文 見直し •7.7.3 本文1行目 例外を追加 •7.7.3.3 本文 一部見直し
		104-107	「9. プロテクト」 •各節タイトルの書き方を変更
		125 130	「10. 割り込み」 •図10.8 RIPL2レジスタ関連部分を削除、「DMAC II」を「DMA II 転送完了」に変更 •図10.14 b0の説明文を修正、注3 内容修正
		134 136	「11. ウォッチドッグタイマ」 •図11.2 注1 追加 •図11.5 注3 追記
		166	「15. タイマ」 •図15.2 割り込み信号とオーバフロー/アンダフロー信号を分離
		200 204 205 210 212	「16. 三相モータ制御用タイマ機能」 •図16.3 INV13ビット機能欄「タイマA」を「タイマA1」に修正 •図16.8 MR3、MR2ビットの機能を修正 •図16.9 機能欄を見直し •16.3 本文 一部削除 •図16.18 (1) 1項目目を一部見直し •16.6.1 本文 TAiOUT端子がハイインピーダンスになる条件を追加 •16.6.2 本文 「オーバフロー」を「アンダフロー」に修正
		218 230 238, 239 260	「17. シリアルインタフェース」 •図17.5 注1 削除 •図17.18 「TXEPTフラグ」を「TXEPTビット」に修正、「UiRSビット」を「UiIRSビット」に修正 •図17.23、図17.24 「外部ロック」を「外部クロック」に修正 •17.5.5 「通信異常時の対処方法」項を追加
		271- 273 273 274, 275	「18. A/Dコンバータ」 •18.1.3~18.1.5 本文、表18.4~表18.6 一部表現を見直し •表18.6 見出し 「重点的に行う端子」を「重点的にA/D変換を行う端子」に変更 •表18.7、表18.8 TRG1~TRG0ビットが“10b”の場合の開始条件を記載
		285 287	「20. CRC演算回路」 •図20.1 データの流れを示す矢印を追加 •図20.4 「16(8)ビット左シフト」を「左へ16(8)ビットシフト」に変更

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
			「21. X-Y変換回路」
		288	• 図21.2 タイトル「XiRレジスタ」を「X0R~X15Rレジスタ」に変更
		289	• 図21.3 タイトル「YjRレジスタ」を「Y0R~Y15Rレジスタ」に変更
			「22. インテリジェントI/O」
		293	• 図22.1 「$\overline{\text{INT0}}$端子からの要求」を「$\overline{\text{INT0}}$端子または$\overline{\text{INT1}}$端子からの要求」に修正
		294	• 図22.2 「$\overline{\text{INT1}}$端子からの要求」を「$\overline{\text{INT0}}$端子または$\overline{\text{INT1}}$端子からの要求」に修正
		295	• 図22.3 注2 一部表現を変更
		296	• 図22.5 「$\overline{\text{INTi}}$端子への“L”入力」を「$\overline{\text{INT0}}$/$\overline{\text{INT1}}$端子への“L”入力」に修正、注3 記載内容を修正
		297	• 図22.6 注3 削除
		303	• 表22.2 ベースタイマリセット条件欄の記載内容を修正
		304	• 図22.15 「$\overline{\text{INTi}}$端子に“L”を入力」を「$\overline{\text{INT0}}$/$\overline{\text{INT1}}$端子に“L”を入力」に修正、「i=0, 1」を図タイトル部へ移動
		305, 306	• 図22.16、図22.17 「(i=0, 1)」を図タイトル部へ移動
		324	• 図22.28 (3)、(5)、(7) 「IC07DDR」を「IC07DDRレジスタ」に修正
			「23. シリアルバスインタフェース」
		329	• 図23.2 ビット一覧からMLSビットを削除
		330	• 図23.3 「b6, b5, b4」を「b2, b1, b0」に修正
		346, 348, 350	• 23.1.6.2~23.1.6.4 各本文最下行 「フローチャート例」を「手順の例」に変更
		353, 355	• 23.1.7.2、23.1.7.3 本文最下行 表現を簡略化
			「24. LINモジュール」
		363	• 図24.3 注1 追加、機能欄を見直し
		365	• 図24.7 注4 割り込み発生要因を追加し、説明文を一部削除
		372	• 図24.16 注1 説明文を見直し、注3 追加
		373	• 図24.17 注1 説明文を見直し
		376	• 表24.3 「BFTL3~BFTL0ビット」を「BLT3~BLT0ビット」に、「BFTD1~BFTD0ビット」を「BDT1~BDT0ビット」に修正
		377, 378	• 表24.4、表24.5 LINモジュール処理(4)の説明文を一部変更
		387	• 図24.30 LDEビットを“1”にする場所を変更
		388	• 表24.8 ステータス検出条件欄の表現を見直し、入力信号“L”検出の条件を追加
		389	• 表24.9 エラー検出条件欄の表現を見直し
		391	• 24.11 本文 説明文を追加
			• 図24.32 FTC、FRCビットの位置を修正、ビット名をビットシボルに変更
			• 図24.33 LDビットの位置を修正、ビット名をビットシボルに変更
			「25. CANモジュール」
		—	• 用語 「8/3エンコーダ」を「8 to 3プライオリティエンコーダ」に、「3/8デコーダ」を「3 to 8デコーダ」に変更
		392	• 25 本文 「表25.1に..」を「表25.1、表25.2に..」に修正

改訂記録	R32C/120グループ ユーザーズマニュアル ハードウェア編

Rev.	発行日	改訂内容	
		ページ	ポイント
		404	• 図25.6 注2 一部表現を変更
		408	• 図25.8 見出し「設定値」を「設定範囲」に修正、注4 一部表現を変更
		414	• 25.1.9.7 (1)、(2) 一部表現を変更
		416	• 図25.11 注2 文章を修正
		427	• 図25.19 (b6-b5) 「書く場合、“0”を書いてください。」を削除
		429	• 25.1.17 本文 「(最小ビット位置がより高い優先順位)」を「(LSB側が優先)」に変更、2段落目の冗長部を削除
		430	• 図25.23 注1の「(j=0~31)」を図タイトルへ移動
		434	• 25.1.20.5 (4) 「通常復帰が発生」を「通常復帰をする」に変更
			• 表25.8 「通常のバスオフ状態からの復帰が発生した」を「バスオフ状態から通常復帰をした」に変更
		438	• 図25.28 「(注4)」をビット名欄から機能欄へ移動、注4 本文修正
		446	• 表25.9 注1 「最初の送信完了後」を「最初のメッセージ送信が完了した後」に変更
		447	• 25.2.3 本文 「ハードウェアリセットまたはソフトウェアリセット実行後」を「リセット後」に修正
		450	• 図25.36 PCDビット部 「q=1, 2, 3, 4」を「q=2, 3, 4」に修正
		456	• 図25.42 「(j=0~31)」と「(k=0~7)」を図タイトルへ移動
		458-460	• 図25.43~図25.45 「(j=0~31)」を図タイトルへ移動
			「26. 入出力端子」
		462	• 26 本文、図26.1 プルアップ抵抗が切り離される要因からASELを除外
		463	• 図26.2 シンボルの記載方法を変更
			「27. フラッシュメモリ」
		487	• 表27.3 ROMコードプロテクトの対象から「消去」を削除、併せて解除方法も修正、IDコードプロテクトの対象に「消去」を追加
			• 27.2.2 本文 「シリアルライタを使って」を削除
		488	• 図27.2 FFFFFFEFh番地の「予約」を「OFS」に変更、注1 追加
		490	• 表27.5 「プログラム、イレーズコマンド」を「プログラムコマンド/ブロックイレーズコマンド」に、「リードステータスレジスタコマンド」を「リードステータスレジスタモード移行コマンド」に修正
		498, 498	• 図27.12、図27.13 信号線名を削除
		511, 512	• 図27.20、図27.21 注3 「フラッシュ」を「フラッシュメモリ」に修正
			「28. E^2PROMエミュレーションデータフラッシュ」
		516	• 図28.2 注3 追記、注5 後半の文章を削除
			「29. 電気的特性」
		534	• 図29.5 信号線名を削除
			「30. 使用上の注意事項」
		569	• 30.7.1 本文 TAiOUT端子がハイインピーダンスになる条件を追加
			• 30.7.2 「オーバフロー」を「アンダフロー」に修正
		571	• 30.8.5「通信異常時の対処方法」項を追加
			「付録1. 外形寸法図」
		578	• 基準面情報を追加

R32C/120グループ ユーザーズマニュアル
ハードウェア編

発行年月日　2008年7月18日　Rev.0.50
　　2011年9月9日　Rev.1.20

発行　　ルネサスエレクトロニクス株式会社
　　〒211-8668 神奈川県川崎市中原区下沼部 1753

ルネサス エレクトロニクス株式会社

■営業お問合せ窓口

http://www.renesas.com

※営業お問合せ窓口の住所・電話番号は変更になることがあります。最新情報につきましては、弊社ホームページをご覧ください。

ルネサス エレクトロニクス販売株式会社　〒100-0004　千代田区大手町2-6-2（日本ビル）　(03)5201-5307

■技術的なお問合せおよび資料のご請求は下記へどうぞ。
総合お問合せ窓口：http://japan.renesas.com/inquiry

© 2011 Renesas Electronics Corporation. All rights reserved.
Colophon 1.0

R32C/120 グループ

ルネサス エレクトロニクス株式会社

R01UH0216JJ0120
(旧番号: RJJ09B0504-0110)